IS〈インフィニット・ストラトス〉　Another IS　―もう一つのＩＳ―

Armadeus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　Ａｎｏｔｈｅｒ　ＩＳ
―もう一つのＩＳ―

【Ｎコード】
Ｎ８６５９Ｒ

【作者名】
Ａｒｍａｄｅｕｓ

【あらすじ】
女性にしか扱えないＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の操縦者を育成するためのＩＳ学園。そこに入学した『世界で唯一ＩＳを使える男』である織斑一夏。しかし、そこにもう一人の男子・須藤明弘の姿が……。これはそんなＩＳ学園で繰り広げられる物語。文才はありませんが、頑張っていきたいと思います。誤字脱字、指摘などあったらお願いします。
１１月８日　今さらですが、タイトルを『ＩＳ〈インフィニット・

ストラトス〉　神の王』から『ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　Ａｎｏｔｈｅｒ　ＩＳ　―もう一つのＩＳ―』に変更しました。

第零話　物語の始まり（前書き）

初投稿です
いろいろ至らぬ点もあると思いますが、よろしくおねがいします

第零話　物語の始まり

薄暗い部屋の中、俺はそこの中心に立っていた。
「調子はどうかな？」
「いつも通り、大丈夫です」
「こっちもデータ取り終わったから、待機状態にしていいよ～」
少し離れたところから聞こえる声に返事をしながら、俺は身にまとっていたＩＳを解除する。
ＩＳが無事に待機形態である指輪に戻ったのを確認したところでさっき話していた女性がこちらに歩いてきた。
「いや～、これで『神王』もほぼ完成と言っていいかな」
「そうですね。特に不具合も見当たりません。データの方はどうですか？」
「うん、稼働率七八パーセント。同調率も八二パーセントだから充分だね」
神王は現在待機形態の指輪として俺の右手中指にはめられている。紫色のそれは光を反射し、小さいながらも威厳に満ちた雰囲気をまとっている。
「じゃあ、あとはあの二つを完成させればＯＫだね」
「別に急がなくても大丈夫ですよ。束さんだって例のＩＳを製作してる途中なんですから」
そう言いながら向けた視線の先には二機のＩＳが自らの主を待ち続けるかのように、鎮座していた。
一つは白。全くといっていいほど他の色の無い白。何者にも染められることの無い純白の機体。
もう一つは赤。いや紅といった方が良いかもしれない。鮮やかなほど綺麗な紅で染められた機体。
「白と赤。全てのＩＳを切り裂くＩＳと全てのＩＳを超えるＩＳ。互いが互いを支えあうと同時に、互いが互いを抑止する。そんな化

け物のようなＩＳを二機作っているんですから、まずそちらの方に集中してください」

「ふっふっふ、この天才科学者束さんのことを甘く見てもらった困るなあ」

女性――篠ノ之束さんが当然といった様子でそんなことを言う。確かにこの人なら心配は無用かもしれないが。

「別に甘く見ているわけではないですが、あれらは特別なＩＳですからね。神王のことよりもまずそちらを優先してください」

「神王のデータがあるから大丈夫♪」

「あ、そうですね、神王はあれの試作機ですから」

「それはちょっと違うよ～。確かに試作機みたいな要素もあるけど、神王はそれそのもので完成品なんだよ。まさに神の王の名前に恥じない出来栄えだね」

「神の王、ですか……。武装の名前もそれが原因で？」

「そうだよ。カッコイイでしょ？」

「格好いいとかよりも恥ずかしいんですが。せめて今作ってる二つの名前だけは変えてもらえませんかね」

今の武装はまだいいとしても、あの二つだけはなんとかしてもらいたいんだが。

「ダーメ、だってカッコイイもん。……あ、そうそう。これからアキくんにはＩＳ学園に行ってもらうよ」

「……はい？」

ＩＳ学園。確かＩＳの操縦者を育成する学校、だったはず。毎度のことだがこの人は何の前触れもなく突拍子もないことを言い出すからびっくりさせられる。

「今年は箒ちゃんといっくんが入学するからね～。アキくんも一緒に通っちゃいなよ」

「は、はあ、それはいいんですが……」

「心配は要らないよ～。ちゃんと話は通してあるから」

「俺はまだ通うとは言っていないんですが。……まあ、俺も高校ぐ

らいは通わなくちゃいけないから別に構いませんけどね」
「あはは～、そう言うと思ったよ。じゃあ明日入試に行ってきてね」
「はい、わかりました……って明日ですか！？」
話が唐突過ぎる。すこしぐらい前もって教えてくれてもいいのに。
まあ、束さんはいつもこうだから今更とやかく言うつもりもないけど。
「神王の調整も終わったしちょうどいいでしょ？」
「まあ、それはそうですけど……。明日ってここからＩＳ学園まで結構時間かかりますよ」
「だから今すぐしゅっぱ～つ！　ってことになるね」
「はあ……わかりましたよ。行ってきますね」
「いってらっしゃ～い」
束さんの満面の笑顔で見送られ、俺はＩＳ学園に向けて出発した。

第一話　物語を奏でる場所で（前書き）

第一話です

第一話　物語を奏でる場所で

今日はＩＳ学園の入学式。もちろん、ＩＳ学園に通うことになった俺も例外なくこの学園にきていた。入試のときに一度来て思ったが、かなりでかいな。さすがは世界で唯一ＩＳ操縦者を育成するための学校ってところか。

「お前が須藤明宏か？」

「はい？」

ＩＳ学園の大きさにすこし圧倒されていると、突然声をかけられた。

声のしたほうを見ると黒のスーツにタイトスカートを身にまとい、すらりと伸びた長身で狼を思わせる鋭い吊り目の女性が立っていた。

「お前が須藤明宏かと聞いている」

「はい。そうですけど……」

「私はお前のクラスの担任になる織斑千冬だ。束から話は聞いている。ついて来い」

「あ、はい」

織斑千冬さんと言えば、第一世代ＩＳの元日本代表だ。しかも公式試合の戦歴は無敗。ところがある日突然、引退して姿を消す――で途中経過は分からないが、この学園の教師をしているようだ。

「織斑先生は篠ノ之博士のお知り合いなんですか？」

「ああ、あいつとは幼なじみだ。私の弟とあいつの妹もな」

「その二人とは、織斑一夏と篠ノ之箒ですか？」

「ほう。束のやつはあいつらのこともお前に教えていたのか」

「はい、とても楽しそうに話していましたよ。あなた方のことを」

「ふん、あいつらしいな」

本当にあのときの博士はとても楽しそうだった。たぶんあの人の中で一番幸せな時間だったんだろう。というか、あの人が他の人の子と話すのなんてこの三人ぐらいしかない。

「ところで、お前は専用機を持っているらしいな」
「ご存知でしたか？」
「束に聞いた。なんでもあいつが直々に開発したと言っていたが」
「仰るとおりです」
「あいつの作ったものだから、また突拍子もない機能でもついているんじゃないだろうな？」
さすがは幼なじみ。あの人のことをよくわかっている。
「いえ、俺のはそこまで大した機能はありませんよ。せいぜい第三世代あたりです」
「それならいいがな。……着いたぞ」
織斑先生に言われて立ち止まりクラスを確認してみると、一年一組。ここが俺のクラスか。
「男子は同じクラスにまとめることになったから織斑もこのクラスだ。呼んだら入って来い。いいな」
有無を言わさず教室に入っていく織斑先生。自分の弟を苗字で呼ぶということはかなり仕事熱心の人のようだ。
なにやら教室から織斑先生の自己紹介やら、大勢の女子の歓喜の悲鳴やら、誰かが何か硬いものでたたかれたような音やら、「げえっ、関羽!?」という男子の声やら、誰かが何か硬いもので叩かれたような音が聞こえてきた。一体中では何が起こっているのか気になる。
「今日からこのクラスで一年間生活していくことになるが、急遽この学園に通うことになった編入生を紹介する。須藤、入って来い」
今日が初日だから転入生なのか微妙なところだけど、まあいいか。とりあえず織斑先生の指示に従い、教室に入る。
「須藤明宏だ。ちょっとした事情でこのＩＳ学園に編入することになった。一年間よろしく頼む」
「きゃ……」
「ん？」
「キャーーー！！！」

うるさっ！？　鼓膜が破れそうだ。なんだ？　どこか変だったか？
「男子よ！　二人目の男子！」
「綺麗な髪！　綺麗な目！」
「織斑くん以外にＩＳに乗れる男子がいるなんて！」
どうやらただ単に男子が珍しいだけのようだ。一番前の真ん中に座っている織斑一夏であろう男子も目を見開いて呆然としている。
「ちょっと待て。一つ勘違いしてるようだから訂正しておく。俺が操縦できるのは俺の知り合いが作った『ＩＳのようなもの』であって、正確にはＩＳじゃない。そのあたりは誤解しないでくれ」
一応、博士の名前は伏せておいた方がいいだろう。いつかはばれるかもしれないが、あの篠ノ之束博士が製作したことがばれたらうるさそうだし。
「「「？？？」」」
案の定クラス全員がちゃんと理解できていないようだ。まあ、理解されなくても事実だからどうしようもない。
沈黙が数秒間流れたかと思うと、一気にクラスがざわめきだす。頭おかしい人だと思われてなければいいけど。
しかしそんなざわめきを織斑先生が収めると、チャイムが鳴る。タイミングいいな。
「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」
なんと言う鬼加減。ただし実力は本物なので誰も反論しない。
改めて教室を見渡すと、当たり前だが織斑以外は全員女子。副担任らしい緑髪の先生、確か入試のときの試験官だった山田真耶先生だったかな。あんまり、先生には見えないが。
クラスの生徒三十一人中二十九人が女子、先生にはあまり見えない頼りなさそうな副担任、極め付けが鬼教官のような担任。
このクラスで、俺はやっていけるんだろうか……？

第二話　視線の集まる休み時間（前書き）

第二話です

第二話　視線の集まる休み時間

「織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ。これからよろしく頼むぜ」
「これからよろしくな、一夏。俺も明宏でいいぞ」
一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わって今は休み時間。でも、この異様な雰囲気は少しきつい。参った。予想はしていたけど、かなりマズイ。
ちなみに、ＩＳ学園ではできるだけＩＳ関連教育をするために、入学式当日から普通に授業がある。学園の案内は、地図を見ろだってさ。
現在、廊下には他クラスの女子、二、三年の先輩も大勢詰め掛けている。恐らく織斑、ついでに俺を見たいが為なんだろう。
とりあえず唯一の味方である一夏と挨拶を終え、周りの雰囲気を忘れるために談話に入る。
「そういえば、明宏もＩＳ動かせるんだよな。俺以外にＩＳを動かせる男なんて知らなかったから、ビックリしたぜ」
「自己紹介の時にも言ったけど、俺が動かせるのは正確にはＩＳじゃない。俺の知り合いが作ったＩＳのような物なんだよ」
「なんだかよく分からないんだが、まあいいか」
「俺としてはお前のほうが凄いと思うぞ？　男でＩＳを動かせるだけじゃなく、あの織斑先生の弟なんだからな」
「いや……それはあんまり触れて欲しくないんだが」
「すまないな。触れないようにする」
地雷だったか？　まあ、確かに色々と気疲れしそうだな。あんなすごい人と比較されたりしたら。
そんなこともあったが、その後も面白いように会話が進む。こんなに男の友達の存在が頼もしいとは思わなかった。
「……ちょっといいか」
「え？」

突然、話しかけられて一夏が声をあげる。女子の間では『あなた話しかけなさいよ』という空気と『ちょっとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』という緊張感が満ちていたんだが、それを振り切ってきたのとでもいうのか？

「……箒？」

「……」

目の前にいたのは、髪をポニーテールにまとめた、少し不機嫌そうに見える目をした女子だった。一夏が名前を呼んでいたことからして知り合いみたいだが。もしかしたらこの女子が博士の妹、篠ノ之箒なのだろうか。

「廊下でいいか？」

教室では話しにくいことみたいだ。それなら俺はいないほうがいいよな。

「早くしろ」

「ほら行ってこいよ。俺のことは気にしなくていい」

「お、おう」

廊下に言ってしまう女子を追いかけるように一夏が教室を出て行く。

周りを少し見てみると、半分ほど一夏のほうに行ったようだが、それでもかなりの女子がいる。さて、どうしようか。

「やー、すーくん。お話しよ～」

「ん？」

この状況をどうしようか考えていたら、突然声をかけられた。振り返ってみると、明らかに袖の長すぎる制服を着たのほほんとした女子だった。なんであんなに袖長くしてるのだろうか。

そういえば、周りの雰囲気が変わったような気がする。なんか、視線のいくつかがその女子に注がれているような……。気にしないほうがいいか。

「すーくんって何だよ」

「須藤だから～、すーくん」

「そういうことか。えっと……」
名前がわからん。つか一夏以外の全員の名前知らないぞ。
「私は～、布仏本音だよ～。よろしくね～」
布仏本音か。略すとのほほんだな。雰囲気と一緒だ。まあ、初対面の女子いきなりあだ名で呼ぶのはどうかと思うので普通に苗字で呼ぶ。
「こちらこそよろしくな、布仏」
「えー、私はすーくんをあだ名で呼んでるんだから、すーくんもあだ名で呼んでよ～」
「初対面の女子をいきなりあだ名で呼ぶなんてできないからな。ある程度慣れるまで勘弁してくれ」
「む～、しょうがないな～」
なんか、この話し方とか少し博士に似てる気がするな。親しみやすい。
「早くあだ名で呼んでね～」
「ああ、善処するよ」
ほのぼのするなあ。周りの雰囲気のせいで少なからず疲労した精神が癒される気がする。
そんなことを考えていたら授業開始のチャイムが鳴る。
「あー、チャイム鳴っちゃった。またあとでね～」
「ああ、また」
袖の余って手を振って席に戻っていく布仏。周りで俺の事を見ていた女子もそれぞれの教室に戻ったり、席に戻ったりしていく。教室にいた全員が座り終えたころ、一夏とポニーテールの女子が帰ってきた。女子は早々に自分の席に座ったが、一夏はその女子を見てボーとしている。何か考え事でもしてるのだろうか？
「とっとと席に着け、織斑」
「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」
そんな一夏の頭に教室に入ってきた織斑先生の手にしていた出席簿が炸裂した。今朝廊下で聞いた音はこれか。一夏が頭を押さえて

いるのを見る限りかなり痛そうだ。俺は叩かれないようにしないとな。

そんなこともあったが、それ以外は何事もなく二時間目の授業はスタートした。

第二話　視線の集まる休み時間（後書き）

早くものほほんさんが登場しました

第三話　ＩＳ――最強の兵器という存在（前書き）

第三話です

第三話　ＩＳ――最強の兵器という存在

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。クラスメイトは皆真面目に授業に取り組んでいた。

どっかりと積まれた教科書五冊。今山田先生が教えているところは以前勉強したところだけど、一応復習を兼ねて目を通してみる。

ＩＳ――インフィニット・ストラトスは宇宙空間での活動を想定して作られたマルチ・フォームスーツ。

しかし『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、スペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、表向きは『スポーツ』として落ち着いた、所謂パワードスーツ。

ＩＳは既存の兵器を軽く凌駕する。それはＩＳの発表から一ヶ月後に起こった『ある事件』で証明され、今ではそれは当たり前のこととして扱われるほどだ。

ただ、ＩＳには致命的な欠陥がある。それは女性にしか扱えないことだ。まあ、今年は例外がいるけど。

現在は第三世代型のＩＳが各国で研究、開発されている。ヨーロッパの統合防衛計画『イグニッション・プラン』ではイギリスとドイツ、イタリアの第三世代型ＩＳから次期主力機となる機体を選定中らしい。そういえば、フランスって『イグニッション・プラン』から除名されたんだよな。フランスはこのＩＳ学園で使用されている訓練機の約半分を占めるラファール・リヴァイヴの製造元だし、量産機ＩＳのシェアが世界第三位というすごい企業があるのに、何で除名されたんだろうか。

まあ、とりあえず、ここまでがＩＳの概要だな。

「分からないところがあったら訊いてくださいね。何せ私は先生で

すから」
　山田先生はそう言っているが、皆事前学習をしているはずなので大丈夫だと思う。ただ一人心配だが。
「先生！」
「はい、織斑くん！」
　心配していたやつが手を挙げた。早速先生に質問みたいだ。流石に全部わからないことはないだろうが――
「ほとんど全部わかりません」
「え……。ぜ、全部、ですか……？」
　全部わからないことはなかったが、ほとんどわかっていなかった！
「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」
　教室が静まり返る。皆事前学習をしているはずだから、この段階でわからないやつはいない。
「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」
　教室の端で控えていた織斑先生が聞いてくる。そういえば、そんなのあったな。電話帳と同じくらいの厚さのが。一応、軽く読み流しはしたけど。
「古い電話帳と間違えて捨てました」
　その瞬間、一夏の頭が出席簿で叩かれた。すごい音が聞こえる。
「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」
　確かに電話帳並みに分厚かったが、間違えるか普通。
「あとで再発行してやるから、一週間以内に覚えろ。いいな」
「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」
「やれと言っている」
「……はい、やります」
　織斑家の力関係がよくわかるなこれは。
「ＩＳはその機動力、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ。そし

て守れ。規則とはそういうものだ」
　はい、正論です。反論できる気がしません。
「え、えっと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、がんばって？　ね？　ねっ？」
「はい。それじゃあ、また放課後よろしくお願いします」
「ほ、放課後……放課後に二人きりの教師と生徒……。あっ！　だ、ダメですよ、織斑くん。先生、強引にされると弱いんですから……それに、男の人は初めてで……」
　いきなり何を言っているんだろうか、この人は？　いくら男に免疫がないからって赤くなりすぎだろう。
「で、でも、織斑先生の弟さんだったら……」
「あー、んんっ！　山田先生、授業の続きを」
「は、はいっ！」
　一向に妄想から帰ってこない山田先生を、織斑先生の咳払いが呼び戻す。
　山田先生は慌てて教壇に戻って――こけた。
「うー、いたたた……」
　大丈夫だろうか？　この先生……。

第四話　英国代表候補生との決闘（前書き）

第四話です

第四話　英国代表候補生との決闘

「ちょっと、よろしくて？」
「へ？」
「あ？」
二時間目の休み時間、さっきと同じく周りの雰囲気から逃れるために、会話をしていた俺と一夏はいきなり声をかけられて思わず声を出した。
話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透きとおったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺たちを見ている。
わずかにロールがかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気もいかにも今の女子という感じだった。
ちなみにこのＩＳ学園の女子では多国籍の生徒を受け入れなくてはいけないという義務のせいで、外国人の女子なんて珍しくもない。むしろ、クラスの半分がかろうじて日本人というくらいだ。
「聞いてます？　お返事は？」
「あ、ああ。聞いてるけど……どういう用件だ？」
「しょうもない用件だったら、キレるぞ？」
「まあ！　なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」
……こういうタイプの女子は苦手だ。
ＩＳを使える。それが国家の戦力になる。だからＩＳ操縦者は偉い。そしてＩＳ操縦者は原則女しかいない。
だとしても、その力を振りかざすのは違うと思う。ＩＳ操縦者が偉いのなら、一夏も（一応俺も）偉いということになるんだし。
「悪いな。俺、君が誰か知らないし」
「同じく」

クラスメイトなのはわかる。何度かクラスで視界に入っていたからな。しかし、自己紹介を見ていないから誰が誰だかわからない。

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

セシリア・オルコットって名前なのか。代表候補生で入試主席ということは結構な実力のようだ。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の役目ですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。ちなみに、俺もだ。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

凄い剣幕だ。血管マークが出てきそうな勢い。

「おう。知らん」

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ。常識。テレビがないのかしら……」

テレビくらいあるに決まってんるだろう。

「で、代表候補生って？」

「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そういわれればそうだ」

「まあ、簡単に言えばお強いエリート様ってことだ」

「そう！　エリートなのですわ！」

お、復活した。俺は少し嫌味を込めて言ったんだが、気づいてないようだ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくす

るだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「俺たちはなんて幸運なんだ」

「……馬鹿にしていますの？」

お前が幸運だって言ったんじゃないか。何なんだ、一体。

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一ＩＳを操縦できると聞いてましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれでしたわね。そちらのあなたはまだ少しだけ知的そうでしたが、正確にはＩＳではない等とおかしなことを言ってるようですし、同類ですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「俺はちゃんと正しいことを言っただけだ」

「ふん。まあでも？　わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ」

おお、これが優しさというものなのか。こんなにも心から遠慮したくなるような優しさは、十五年生きてきて初めて知った。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

いや、結構です。全力でお断りします。という言葉を何とか飲み込んで――って、あれ？

「入試って、あれか？　ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

「一夏もか？　俺もだ」

「は……？」

確か相手は山田先生だった気がする。まあ、相手が突っ込んできて、そのままこけて動かなくなったのはよく覚えてるが。

しかし俺たちが言ったことは相当ショックだったのか、オルコットは目を驚きに見開いている。
「わ、わたくしだけと聞きましたが？」
「女子ではってオチじゃないのか？」
ピシッ。一夏の言葉でオルコットからいやな音が聞こえた。何か氷にヒビが走ったような。
「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」
「いや、知らないけど」
「あなた！　あなたも教官を倒したって言うの！？」
「うん、まあ。たぶん」
「たぶん！？　そちらのあなたは！？」
「一応、倒したことにはなるんじゃないか？」
「一応！？　どういう意味かしら！？」
「言葉通りの意味だ」
「えーと、落ち着けよ。な？」
「こ、これが落ち着いていられ――」
その瞬間、三時間目開始のチャイムが鳴る。俺たちにとっては福音にも聞こえる。
「っ……！　またあとで来ますわ！　逃げないことね！　よくって！？」
いやいや、よくないから。でも、そう言ったら怒るだろうし、黙っておこう。
「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」
一、二時間目とは違い、山田先生ではなく織斑先生が教壇に立つ。よほど大事なことなのか、山田先生までノートを手に持っている。
「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」
ふと、思い出したように織斑先生が言う。
「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒

会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更できないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。何か嫌な予感がしなくもないので、俺は遠慮したい。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

早速一夏の名前が上がったな。これはラッキーかもしれない。

「私もそれがいいと思いますー」

俺以外なら誰でもいい。このまま決まってしまえ。

「私は須藤君を推薦します！」

って何してくれてんだ！　俺はやらんぞ！

「私もー」

支援するな！　面倒くさいことはゴメンなんだよ！

「では候補者は織斑一夏、須藤明宏……他にいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

俺が異議申し立てをしようとしたとき、一夏が立ち上がる。そして視線の一斉射撃。『彼ならきっとなんとかしてくれる』という無責任かつ勝手な期待を込めた眼差しだ。俺が立っていたらこの視線を受けていたのが。危ない危ない。まあ、俺に視線を送ってくるやつもいるけど。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？　いないのならこの二人の内どちらかになるぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも――」

一夏が反論を続けようとしたところを、突然甲高い声が遮った。

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのは、あのオルコットだ。なんだ？

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

よし、そのまま言って……ん？

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿たちにされては困ります！　わたくしはこのような島国までＩＳ技術を修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

あれ？　俺たち、人じゃなくなってる。何故？　っていうかイギリスも島国だよな。そんな言うほど日本と差なんかないだろう。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

ますますエンジンがかかってきたオルコットは怒涛の剣幕で言葉を荒げる。代表になるのは勘弁したいが、こうまで言われると癪だ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「極東っていうけど、位置の問題だろ。位置だけで国の価値が決まるかよ、バカか」

――あ。

「なっ……！？」

つい、言ってしまった。何かこう、とどめなく湧き出る泉のように口に出してしまった。一夏も同じようでやってしまった、という雰囲気が出てる。

「あっ、あっ、あなた方ねえ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

さっきまで日本を侮辱してた人間が言える台詞じゃないだろ。

「決闘ですわ！」
「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」
「頑張れ～、一夏」
「あなたもですわ！」
なんでだよ。決闘の申し出を受けたのは一夏なんだから、一夏だけとやれよ。
「面倒くさいので遠慮させていただく」
「負けるのが怖いのかしら？」
「いや、全然怖くないな」
「あら、自分の実力をわきまえてるじゃないですか。それなら――」
「代表候補生『ごとき』に負けるつもりは無いし」
「……！」
俺の言葉でオルコットの顔が怒りに染まっていく。至極当然のことを言っただけなのに、何でそんなに怒る必要がある？
「だ、だったらわたくしと戦ってもよろしいんじゃないでしょうか？」
「まあ別に構わないけど、面倒くさいんだよな。不必要な戦いはやらなくてもいいんじゃないか？」
「不必要などではありません！　これは決闘、必要な戦いですわ！」
いや、俺にとってはすごく不必要な戦いなんだが。そう言っても絶対聞く気はないだろうしな。
「はあ……じゃあ、一夏のあとにでもやってやる。それでいいだろ？」
「ふん、いいですわ。完膚なきまでに叩き潰してやりますわ」
こいつの自信は底なしか？　なぜそこまで言えるのか、俺にはわからん。
ただ、自信は時として油断に直結する。そして戦いで油断をしたやつは大抵負ける。だからこそ、俺は自分に自信を持たないようにしている。さっきの代表候補生『ごとき』に負けるつもりは無いというのも自信ではなく、事実だ。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」
「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」
「まあ、一応ちゃんとやってやるさ」
「そう？　何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」
　俺としては実力を示したくないので、できれば一夏との戦いで満足して欲しいところなんだが。
「ハンデはどのくらいつける？」
「あら、早速お願いかしら？」
「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」
「俺もだ。代表候補生ごときと戦うのに、全力を出す必要もない」
　その瞬間、クラスからドッと爆笑が起こった。
「ふ、二人とも、それ本気で言ってるの？」
「男が女よりも強かったのって、大昔の話だよ？」
「それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」
「しかもセシリアは代表候補生だよ？　ハンデつけてもらった方がいいと思う」
　そう、今の時代腕力は何の役にも立たない。男は原則ＩＳをを動かせない。もし男女差別で戦争が起きようものなら、男陣営は三日と持たないだろうな。下手をすれば、三時間で制圧されかねない。ＩＳは過去の戦闘機・戦車・戦艦などを遥かに凌ぐ超兵器。しかも代表候補生ともなれば、そのＩＳの操縦者になるために経験を積み重ねたエリートだ。でも一つ疑問が残る。
「じゃあ、今は男より女の方が強いのか？」
「それはそうでしょ。女の方がＩＳ使えるんだし……」
　それだけ言って女子の表情が変わる。やっと根本的な勘違いにたどり着いたか。
　ＩＳを動かせるやつが強い。そしてＩＳは普通女にしか使えない。

――普通ならな。

「ＩＳが使えるやつが強いって言うんなら、一夏と大まかに言えば俺も強いってことになると思うんだが、そのあたりはどうなるんだ？」

「そ、それは……」

「それに、いくら代表候補生だからって絶対勝つとは言い切れない。それとも何か？　お前たちは一夏や俺の実力を知ってるのか？　俺たちの実力を知り、オルコットの実力と比較してみて言ってるのなら文句は言わないが、そうでないならそっちのほうが言いすぎだと思うぞ」

笑いに包まれていた教室が一気に静まり返る。笑っていた女子も口を閉じている。

「これでもまだバカにするやつ、俺たちよりも女が強いと思うやつは出てこい。――」

一息おいてから、最後の言葉を口にする。

「全員まとめて血祭りに上げてやる」

少し凄みを聞かせて締めくくる。これでもう笑ったりするやつは出ないだろう。

「……まったく。女子どもも言いすぎだが、須藤も言いすぎだ。最後の言葉は黙認しかねるぞ」

「すいません」

織斑先生に注意された。織斑先生の言っていることはもっともなのでなので、謝っておく。

「ほら一夏。お前もなんか言ってやれ」

「い、いや別に俺はいいや。それよりもハンデについてだが、無しでいいな？」

「え、ええ、そういたしましょうか」

さっきまでの激昂はどこへやら、オルコットは明らかな俺の威圧

にびびったような顔をしていた。
「まあ、一夏がハンデ欲しいっていうなら別に止めないけどな」
「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい」
「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで月曜にオルコットと織斑の勝負を、その後オルコットと須藤の試合を行う。三名はそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」
ぱんっと手を打って織斑先生が話を締める。俺としては、できれば一夏に勝ってもらって、俺との勝負は諦めて欲しいんだが、そうも行かないだろうしな。
ともあれ、結構面倒なことになりそうなのは確かだ。

第五話　自分の存在意義（前書き）

第五話です

今回はちょっと短い目です

第五話　自分の存在意義

いろいろあった三時間目も終わり、休み時間。さっきの件が原因か、周りの雰囲気が前と少し違う気がする。
「はぁ、どうするかな」
「何がだ？」
「あいつとの決闘だよ。これからどうすればいいのか、まったくわからん」
「ならなんで決闘を受けたんだよ。俺はお前のせいでとばっちりを受けたんだぞ」
「それはすまん。でも結局お前だって了承したじゃねえか」
「あんなの一応だ、一応」
一夏とさっき受けた決闘についての会話をする。まったく、面倒なことに巻き込みやがって。と文句の一つでも言ってやりたい。
「すーくん、さっきは格好よかったよ～」
そんな中、いきなり俺の背中によっかかって来たのは布仏だ。後ろからだったので顔で判断できなかったが、俺への呼び方と話し方ですぐわかった。
「おりむーも格好良かった～」
「俺の愛称はおりむーなのか？　……のほほんさん」
「決定なのだよ～」
一夏のやつ布仏の名前知らないから、あだ名で誤魔化しやがったか。まあ、苗字と名前の最初を合わせると、のほほんになるけどな。布仏も気にしてないようだし、俺ものほほんさんって呼ぶか。
「俺はただ単に事実を言っただけだぞ」
「でも～、言ってることは正しかったし～」
「まあ、勘違いをしているやつらを正すには正論しかないだろ。俺は特にすごいことはしていない」
そう、俺はただ事実を言っただけだ。特に評価されるようなこと

じゃない。そのはずなんだが、なんかのほほんさんは賞賛するのでなんだか少し気分がいい。
「それよりも一夏、とりあえず決闘までの一週間でＩＳの基礎知識だけでも頭に入れておけ。深く覚える必要はない。ある程度どういう意味なのか、ぐらい覚えておけば十分だ」
「そう言われても、今日の授業で習ったところすら意味がわからないんだが」
「じゃあ、放課後に教えてやる。山田先生は男に耐性がないようだから、頼まないほうがいいだろう」
山田先生と一夏を二人にしたら十中八九、山田先生は暴走する。そんなことになったら、一夏の勉強どころじゃない。それなら俺が教えたほうが無難だろう。
「おう、頼むぜ。のほほんさんは放課後どうするんだ？」
「私も参加したいけど～、都合があるからダメ～」
のほほんさんのこの穏やかな雰囲気があれば勉強もはかどる気はするが、都合があるなら、しょうがないか。
「なら二人だけでやるか。言っておくが、手加減はしないからな。一夏が勝ってくれれば俺が戦う必要もなくなるんだから」
「そういえば、お前なんでそんなに戦うの嫌がるんだよ？」
「そんなの、面倒くさいに決まってんじゃねえか。さっきも言ったけど、俺は不必要な戦いをやる必要なんてないだろ？」
「それって～、平和主義～？」
のほほんさんが聞き返してくる。まあ、今のだけ聞けばそう思われても不思議ではないか。
「いや、俺だって戦いが嫌いなわけじゃない。普通に戦いに心が燃えるときだってある」
「じゃあ、今回は燃えなかったのか？」
「そうだ。だって今回の勝っても得られるものがない。そんな戦いはやる気がしないし、やるだけ無駄だ」
勝ったらクラス代表になってしまう。得られるものどころか俺の

有意義な自由時間が失われてしまう。勝ったら罰ゲームみたいな感じだ。勝つ気も失せるわ。負けるのも癪だけど。

「何が自分にとって必要か、何が不必要かを判断しないと人生損するぞ」

「……それって、決闘を受けた俺に対して言ってないか？」

「お前にはもちろんだが、これはどんな人間にも言えることだ。上手く生きていくためには観察眼を養うってことは大事なことだ」

「それで～、すーくんの観察眼では、セシリアとの決闘はいらないことなの～？」

「ああ。それでも負けるつもりはないがな」

イギリス代表候補生だろうが、なんだろうが負けるわけにはいかない。やるからには勝つ。

それが全て失った俺の――存在意義だから。

第六話　初日の夜（前書き）

第六話です

第六話　初日の夜

「――で、ＩＳはシールドエネルギーが無くなると、動かなくなる。ゲームのＨＰみたいなものと考えてもらっていい。そしてＩＳには『絶対防御』という能力があり、操縦者に危険が及ぶレベルの攻撃を受けるときに発動して操縦者の命を守られるようになっている。ただ、絶対防御はシールドエネルギーを極端に消耗する。ここまではわかったか？」

「あ、ああ。なんとなく」

放課後、俺は約束どおり一夏の勉強を手伝っていた。

「じゃあ、次はＩＳの武装についてだ。ＩＳには拡張領域（バススロット）というものがあって、そこに武装を量子変換（インストール）することができる。武装には初期装備（リセット）と後付装備（イコライザ）の二種類があって拡張領域（バススロット）が空いていれば武装を量子変換（インストール）して戦闘のときに展開（オープン）と収納（クローズ）ができる。――って、一夏、大丈夫か？」

気づくと一夏は机の上にぐったりとうなだれていた。一体どうしたというのだろうか。

「ちょ、ちょっと待ってくれ……。専門用語が多すぎて理解しきれない」

「手加減はしないと言ったはずだぞ。まあ、今日はここまでにしておいてやるか」

なんとか今日のノルマは達成したので、今日のところは終わりにしておく。あまり詰め込みすぎても覚えきれなければ意味がない。

「ＩＳの辞書でもあればいいのにな……」

「そんなものはないから諦めろ。どうしてもというのなら、俺のパソコンにＩＳの専門用語のデータがあるから貸してやるか？」

「いや、いい。お前のデータは細かく書かれすぎてる気がするから」

「それは残念だ」

そんな会話をしている俺たちの周りの雰囲気は放課後とはいえま

ったく変わっていない。また女子が押しかけ、きゃいきゃいと小声で話し合っている。

昼休みも、それはもう地獄だった。俺たちが一緒に学食に移動するとゾロゾロと全員ついてくるのだ。どこの大名行列だ。

「ああ、織斑くん、須藤くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

呼ばれて顔を上げると、山田先生が書類を片手に立っていた。俺たちに何か用件があるらしいので、会話をやめて山田先生の方に向き直る。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーをそれぞれよこす山田先生。

そう、ここＩＳ学園は全寮制なのだ。理由は将来有望なＩＳ操縦者を保護するためだとか。

「俺の部屋、決まってないんじゃなかったですか？　前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」

一夏が山田先生に質問する。

「それなんですけど、そのあとに須藤君の入学が決まったこともあって、男子二人とも自宅通学はどうかということになったんです。なので一時的な処置として無理矢理組み込んだらしいです。本当は二人部屋を織斑くんと須藤くんで使ってもらうのが一番なんですけど、そうもいかなくて……。一ヶ月もすれば個室の方も用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください。あ、須藤君の部屋は寮の端にある一人部屋ですよ」

「お、ありがとうございます」

やったね。一人部屋なら他の人間を気にする必要もない完全なプライベートルームだ。

「それで、部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう返っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら――」
「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」
ああ、この声、絶対に織斑先生だな。
「ど、どうもありがとうございます……」
「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう。須藤の方には連絡がいっていただろう。まさか忘れたとは言わないな？」
「大丈夫です。荷物は送ったはずですけど」
「ああ、確かに届いていたな」
ならなんで聞いたんだろうか。
それより、織斑先生すげえ大雑把だな。確かにその通りだけど、一夏がかわいそうです。人間には日々の潤いが必要だと思うんですが。
しかし、なんで俺には連絡がいってて一夏には連絡がなかったんだろうか？　たぶん、連絡ミスかなにかだろうな？　連絡するのが面倒くさかったとかじゃないはずだ。
「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、二人は今のところ使えません」
「え、なんでですか？」
一夏、何を馬鹿なことを言っているんだ。普通によく考えろ。
「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」
「あー……」
そうだよ。ここ、お前と俺以外は女子しかいないんだよ。
「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？　だっ、ダメですよ！」
「い、いや、入りたくないです」
「入りたいとか、絶対ないです」

無意識のうちに俺も断言する。どんな目に遭うかわかったものではない。というか、普通にダメだろ。倫理的に。

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？　そ、それはそれで問題のような……」

どうしよう、この人結構人の話を聞いていないんだが。

きゃあきゃあと騒ぐ山田先生の言葉が伝言ゲームのように伝播したのか、早くも廊下では女子たちもきゃあきゃあ騒いでいた。

「織斑君も須藤君も、男にしか興味がないのかしら……？」

「それはそれで……いいわね」

「中学時代の交友関係を洗って！　すぐにね！　明後日までには裏付けとって！」

「中学時代じゃなくてもあの二人同士で……」

何の話だ、何の。お前らいい加減にしろ。特に最後の女子、何盛大な勘違いしてるんだ、キレるぞ。

「えっと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。二人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだめですよ」

校舎から寮まで五十メートルくらいしかないのに、どうやって道草をくえというんだこの人は。

「ふー……」

千冬姉と山田先生が教室から出て行くのを見送って、俺たちはため息混じりに立ち上がった。

また教室内外であれこれ騒がしい声が聞こえるが、もう今日のところは無視をして部屋に行こう。ここよりは絶対マシだ。

そして、寮に入ってから別れ際に何かあったときの連絡にと、携帯番号とメールアドレスを交換して俺と一夏それぞれの部屋に向かった。

「ふー、疲れた」

今日から俺の自室になる部屋に入って第一声がこれ。まあ、しょうがないだろ。新しい環境ってだけでも少し疲れるのに、女子の変

な注目を浴び、一夏の勉強に付き合い、挙句の果てにはオルコットとの決闘の約束までさせられたんだ。疲れないはずがない。

部屋を眺めてみると、大きなベッドが一つ。机と本棚が一つ。少し進むと洗面所やシャワールームらしき扉もある。

「そこらへんのワンルームマンションよりすごいな、ここ」

そうは言っても、長い間使われていなかったのか、部屋全体が薄っすら埃を被っている。疲れてるけど、今日はこの部屋の掃除をしないといけないな。

部屋自体は結構広いので、たくさん物が置ける。壁際には俺が前もって送っておいた荷物のダンボールが四つ。よし、ちゃんと送った数と一致する。

ダンボールの中から衝撃吸収剤に包まれたノートパソコンを出し、電源を入れる。そして何か面白いニュースがないか検索。これは俺の毎日の日課だ。

検索してみると、ＩＳ学園入学式や男で唯一ＩＳを使える一夏についてのニュースに並んで、こんなニュースが掲載されていた。

『ＩＳ学園に二人目の男子入学』

間違いなく俺のことだ。内容を見てみると、こんなことが書かれていた。

『あのＩＳ学園に今年、二人の男子が入学した。一人は以前から話題となっていた織斑一夏だが、新たにもう一人の男子が入学。ＩＳ学園からの説明によると、二人目の男子、須藤明宏はＩＳに乗れるわけではないが、ＩＳに次ぐ新型パワードスーツのデータを取るためにＩＳ学園に入学したとのこと。これからの彼の動向に注目したい』

よし、これなら大丈夫だな。学園に情報操作を頼んでおいてよかった。一応『俺はＩＳが動かせない』ことと『博士の名前を出さない』という条件を守ってくれるように頼んだが、ここまでいい作り話をでっち上げてくれるとは思わなかった。ほとんど事実だけどさ。

そんなことを考えながら、他のニュースを探していたら、ＩＳ関

連でもう一つニュースが見つかった。
「えーと……『デュノア社、またまた株価下落』か」
デュノア社はフランスのＩＳ企業なんだが、最近株価が下がる一方だ。これで何ヶ月連続だろうか？　まあ、フランスは『イグニッション・プラン』から除名されたし、デュノア社自体も第三世代型を開発できてないから、不自然ではないか。
「そう言えば、一夏は二人部屋だったっけ？」
俺と一夏以外は女子なので、女子と相部屋なんだろう。大変だろうな、女子と相部屋なんて。まあ、俺には関係ないことなんでそのことは置いておこう。
なんだか、遠くの方から一夏の叫び声らしきものが聞こえてきたけど、気にしない。気のせいだ。幻聴だ。まさか一夏が同室になった女子のあられもない姿を見てしまってその女子に殺されそうになってるなんてことはありえないだろう。そうだ、そんなのはただの幻想でしかない。だから気にしないでおこう。
それよりも俺がやるべきことは部屋の掃除と荷物の荷解きだ。
とりあえず、掃除をしてから荷解きだな。本棚が足りないけどそれは今度外出許可を貰って買いに行けばいい。じゃあ、掃除を始めるとするか。
そんなこんなで俺の初日の夜は更けていった。

第七話　二日目の朝と発覚（前書き）

第七話です

第七話　二日目の朝と発覚

「なあ……」
「……」
「なあって、いつまで怒ってるんだよ」
「……怒ってなどいない」
「顔が不機嫌そうじゃん」
「生まれつきだ」
なんだ、この二人は。
今は入学式翌日の朝八時。一年生寮の食堂。相変わらずどこを見ても、一夏以外の男子の姿は見えない。職員まで全員女性なんだから恐れ入る。
そして俺の隣にはただ一人の男の友達、一夏が座っている。そのまた隣には『一夏と同じ部屋のよしみ』とやらで、篠ノ之がいる。昨日の夜一夏にメールで名前を教えてもらったが、やっぱり篠ノ之博士の妹、篠ノ之箒だった。
俺の知っている限りでは、確か一夏が小一のときに通い始めた剣術道場の娘で、小四の終わりに篠ノ之が転校するまでの幼なじみだったはず。篠ノ之博士からそう聞いた。まあ、転校する原因となったのはその篠ノ之博士だが。
そして、その幼なじみである二人の会話は全く成立していない。この様子だけを十人が見れば、八人は赤の他人、あとの二人は少し面識がある二人という程度にしか見えないだろう。少なくとも幼なじみには見えない。
俺のメニューは和食セット。ご飯に納豆、鮭の切り身と味噌汁。ついでに浅漬け。それぞれが少しずつ。かなりうまい。
「箒、これうまいな」
「……」
また無視されてる。やっぱり幼なじみと思ってるのは一夏だけで

篠ノ之の方はただの知り合いぐらいにしか見てないんじゃないか？
　昨日は何か騒ぎがあったようだが、一夏も何も言わないし、特に関係はないだろう。まさか一夏が何かやらかしたとかはないだろう。
「ねえねえ、彼が噂の男子だって～」
「何でも千冬お姉さまの弟らしいわよ」
「えー、姉弟揃ってＩＳ操縦者かぁ。やっぱり彼も強いのかな？」
「でも、もう一人の男子の方も強そうじゃない？」
　そしてこれも昨日と変わらない。周りでは女子が一定の距離を保ちつつも『興味津々ですよ。でもがっつきませんよ』という気配の包囲網。これは何かの拷問ですか。どこまで俺たちの精神をいたぶる気ですか。
「だから箒――」
「な、名前で呼ぶなっ」
「……篠ノ之さん」
「……」
　名前で呼ぶなといっていたのに、苗字で呼ばれるとむすっとしているのはなんだ？　やっぱりお前ら幼なじみなんかじゃないだろ。
「お、織斑くん、須藤くん、隣いいかなっ？」
「ああ、別にいいけど。明宏もいいよな？」
「いいぞ。別に断る理由もないしな」
　俺たちがそう言うと朝食のトレーを持った女子のうち声をかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、後ろの二人は小さくガッツポーズをしていた。あ、後ろの二人の片方はのほほんさんだ。もうすぐＨＲだというのに、制服ではなくだぼだぼのパジャマを着ている。制服と同じく袖が余りすぎて手が出てないが、トレーはちゃんと持っている。器用だな。
「ああ～っ、私も早く声かけておけばよかった……」
「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」
「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよー」
「なんですって！？」

周囲から妙なざわめきが聞こえてくる。
そういえばそんなこともあったな。一年生が七人、二年生が十三人、三年生が十八人自己紹介に来た。どうして俺の部屋がわかったんだろうね。俺が部屋に行ったときは誰にも気づかれなかったはずだが。まあ、そのせいで部屋の掃除がなかなか進まず、ちょっと寝不足なのはおいておこう。
そんなことを考えていると、三人は事前に打ち合わせていたようでスムーズに席に着いた。六人掛けのテーブル。その窓側に俺と一夏と篠ノ之。開いている席が三つ埋まる。
「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー」
「お、男の子だねっ」
「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」
「そうなんだ。でも織斑くんに比べて、須藤くんは私達と同じくらいしかないんじゃない？」
「俺は小食だからな。逆にこれ以上食べると、腹が厳しくなる」
そう、俺は一夏たちと同じメニューだが、一夏よりもかなり少ない。一夏の半分くらいしかないが、これだけあれば一応動けるし、無駄に栄養を取る必要もない。なんでもやりすぎはいけないからな。
「ていうか、女子ってそれだけしか食べないで平気なのか？」
三人組は、それぞれトレーの上のメニューこそ違うが、飲み物一杯にパン一枚、少なめのおかずが一皿だった。
「わ、私たちは、ねえ？」
「う、うん。平気かなっ？」
「お菓子よく食べるしー」
のほほんさん、間食は太るぞ。まあ、俺もたまに食べるけど。
「……織斑、私は先に行くぞ」
「ん？　ああ。また後でな」
さっさと食事を済ませた篠ノ之は席を立って行ってしまう。一夏のこと苗字で呼んでるし、やっぱり幼なじみっていうのは何かの間

違いだろう。
「織斑くんって、篠ノ之さんと仲がいいの？」
「あ、同じ部屋だって聞いたけど……」
「ああ、まあ、幼なじみだし」
一夏は特に意識せずにいったらしいが、周囲は大いにどよめいた。
「え、それじゃあ――」
「いつまで食べている！　食事は迅速に効率よく取れ！　遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」
いつの間にか来ていた織斑先生の声がよく通る。途端に食堂にいた全員が慌てて食事に戻った。なにせこのＩＳ学園のグラウンド、一周が五キロもある。十周ってことは五十キロだな。フルマラソンよりも八キロ近く長い――って、冗談じゃない。そんなの走れるわけがない。さっさとしなければ。
ちなみに織斑先生は一年の寮長も務めているらしい。ご苦労様です。

「というわけで、ＩＳは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また生体機能も補助する役割があり、ＩＳは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸数、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ――」
「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、体の中がいじられているみたいでちょっと怖いんですけど……」
「そんなに難しく感じることはありませんよ。……人体に悪影響が出るわけではないので」
山田先生の言葉がちょっと詰まった。何か例えを上げようとしたけど、俺や一夏を見てやめたみたいだ。何を言おうとしたんだろう。
「そ、それともう一つ大事なことは、ＩＳにも意識に似たようなものがあり、お互いの対話――つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、ＩＳ側も操縦者の

特性を理解しようとします」
　要は、一緒に練習すればするほど仲がよくなるようなもんだな。より長い時間一緒にいればそれだけＩＳの方も操縦者に応えてくれる。
「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ＩＳは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」
　すかさず、女子が挙手する。
「先生―、それって彼氏彼女のような感じですかー？」
「そっ、それは、その……どうでしょう。私には経験がないのでわかりませんが……」
　経験というのは男女交際のことだろう。赤面してうつむく山田先生を尻目に、クラスの女子はきゃいきゃいと男女についての雑談をはじめている。
　なんというか、すごく『女子高』的な感じのせいでついていけない。一夏も同じようだ。
　しかし、チャイムが鳴り、そんな男を置いてけぼりにした授業も終わりとなる。
「あっ。えっと、次の時間では空中におけるＩＳ基本制動をやりますからね」
　ここＩＳ学園では実技と特別科目以外は基本担任が持つらしい。たった十五分の休み時間のためにいちいち職員室まで戻らないといけない先生たちは、お気の毒としか思えなかった。
「ねえねえ、織斑くんと須藤くんってさあ！」
「はいはーい、質問しつもーん！」
「今日のお昼ヒマ？　放課後ヒマ？」
　昨日の様子見は終わったらしく、山田先生と織斑先生が教室を出るなり女子の半数が一夏にスタートダッシュ、席に詰め掛ける。俺のほうにも残りの半数が来たけど、包囲が完成する前に脱出、そして一夏の席に到着。なんでクラスでこんなことしなくちゃいけない

だろう。
「いや、一度に聞かれても――」
一夏は一度に色々なことを聞かれて、少し慌てている。フォローしておいてやるか。
「全員、もう少し落ち着け。いろんなこと一気に聞かれても、答えられないから」
俺の言葉を聞いて納得してくれたらしく、一人一人が順番に改めて質問してきた。
趣味や特技は何か？　とか、好きな食べ物は何か？　とか、二人はどんな関係なの？　とか。っていうか最後の質問した女子、お前昨日の放課後に盛大な勘違いしてたやつだろ。いい加減にしろよ、この野郎。女だけど。
そういえば、向こうで整理券を配ってる女子がいるぞ。しかも有料。商売をするな。お前は俺たちを何だと思ってるんだ。
「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」
「え。案外だらしな――」
「休み時間は終わりだ。散れ」
一夏が質問に答えようとしたら、いつの間に背後にいた織斑先生に叩かれた。しかもこのタイミングでの叩きということは、個人情報をばらされたくないからだろう。
「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」
「へ？」
「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」
「？？？」
「せ、専用機！？　一年の、しかもこの時期に！？」
「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」
「ああ～。いいなぁ……。私も早く専用機欲しいなあ」
女子はかなり驚いているみたいだが、一夏はまったく意味がわからないようで首をかしげている。

「本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」
「な、なんとなく……」
「先生！　須藤くんのＩＳはどうするんですか？」
専用機が一夏には用意される。ということは余った俺はどうなのかという単純明快な疑問だ。
「須藤は既に専用機を持っている」
織斑先生にはそのことを篠ノ之博士が説明してるので、別に問題はない。
「え！？　須藤くんも専用機を持ってるの！？」
「はじめて聞いたよ、そんなこと！」
「まさか、日本の代表候補生！？」
「待て、俺は代表候補生ではない。それと専用機って言っても正確にはＩＳじゃない。前にも言ったけど、俺はＩＳを動かせないんだ」
なんか色々と勘違いされているようなので訂正しておく。だが、騒ぎが大きすぎるせいでほとんど聞いちゃいない。
「静まれ！　馬鹿者どもが」
織斑先生が一喝。すると騒がしかった教室がどんどん静かになっていく。さすがは織斑先生だ。
「あの、先生。前々から思っていたんですが、篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」
騒ぎも収まり、女子の一人がおずおずと織斑先生に質問する。
「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」
現在、超国家法に基づいて絶賛指名手配中の人物の個人情報をあっさりばらしていいのか？　犯罪者ではないが、ＩＳ技術のすべてを掌握している人間が行方不明というのは各国政府、機関関係者とも心中穏やかではないらしい。
「えええええーっ！　す、すごい！　このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人!?　やっぱり天才なの!?」

「篠ノ之さんも天才だったりする!?　今度ＩＳの操縦教えてよ」

授業中だというのに、篠ノ之の元にわらわらと女子が集まる。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。篠ノ之に群がっていた女子は、何が起こったのかわからないようだった。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って、篠ノ之は窓の外に顔を向けてしまう。女子は盛り上がったところに冷水を浴びせられた気分のようで、それぞれ困惑や不快を顔にして席に戻った。

篠ノ之って博士のことが嫌いなのか？　博士が原因で転校することになってしまったことを考えれば、当たり前といえば当たり前のような気がするけど。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

山田先生も篠ノ之が気になる様子だったが、そこはちゃんと教師として授業を始めた。

第八話　強い意志（前書き）

第八話です

第八話　強い意志

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」
休み時間、早速俺たちのところにやってきたオルコットは、腰に手を当ててそう言った。どうでもいいけど、お前そのポーズ好きだな。どうでもいいけど。
「まあ？　一応勝負は見えてますけど？　流石にフェアではありませんものね」
「？　なんで？」
「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……そして、現時点で専用機を持っていますの」
「へー」
「それはすごい」
「……馬鹿にしていますの？」
「いや、すげーなと思っただけだけど。どうすげーのかわからないが」
「ある程度予想できてたから、別にどうでもいいと思った」
「それを一般的に馬鹿にしていると言うでしょう！？」
両手で机を叩くな。うるさいから。
「……こほん。さっき授業でも言っていたでしょう。世界でＩＳは４６７機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」
実際は俺のも含めて４６８機――いや、俺のはＩＳじゃないから違うか。でもアレも含めると４６８になるのかな。まあ、面倒くさいことになりそうなので言わないでおこう。
「そ、そうなのか……」
「そうですわ」

「人類って今六十億越えてたのか……」
「そこは重要ではないでしょう！？」
人によってものの重要さは違うから、他人が口出すべきじゃないと思うけど、まあいいか。
「あなた！　本当に馬鹿にしていますの！？」
「いやそんなことはない」
「だったらなぜ棒読みなのかしら……？」
「なんでだろうな、箒」
いきなり他人に振るなよ。話し聞いてなかったら何も答えられないぞ。案の定話を聞いてなかった篠ノ之は、一夏の問いに答えなかった。
「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」
「妹というだけだ」
篠ノ之のすごみ。なんかの技みたいな名前だが、効き目抜群のようだ。オルコットも怯んでる。どこかのヤクザか、お前は。
「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」
ばさっと髪を手で払って綺麗に回れ右、そのまま立ち去っていった。
「箒」
「……」
「篠ノ之さん？　飯食いに行こうぜ」
さっきの一件で妙に浮いている篠ノ之をフォローするために一夏が篠ノ之を誘う。
「他に誰か一緒に行かないか？」
と、周りにも振ってみる。
「はいはいはいっ！」
「行くよー。ちょっと待ってー」
「お弁当持ってきてるけど行きます！」
お、入れ食いじゃないか。しかも今朝一緒に朝食を食べたメンバ

ーだ。もちろんのほほんさんもいる。
「……私は、いい」
「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ」
「お、おいっ。私は行かないと――う、腕を組むなっ！」
「なんだ歩きたくないのか？　おんぶしてやろうか？」
「なっ……！」
ボッと顔を赤くする篠ノ之。見ていて面白いな。
「は、離せっ！」
「学食についたらな」
「い、今離せ！　ええいっ！」
篠ノ之が一夏を投げ飛ばす。しかも、落下地点は――俺？　っておい！
俺はとっさに一夏を受け止める。本来だったら受け止められないだろうが、無意識のうちにＩＳの部分展開していたので問題なく受け止める。
うわ、危ねえ。ってかなんで俺に向かって投げたんだ？　助けもせずに傍観してたからか？
「今のって、ＩＳの部分展開よね……」
「ってことは、あれが須藤君の専用機？」
「しかもあの状況でも一瞬で……」
周りの女子がざわめき始めたが、そんなのには構わず部分展開を解除する。いつの間に癖のレベルを通り越して、条件反射のレベルでこんなことをしてしまうようになったんだ、俺は。
「さ、サンキュー、明宏」
「礼なんて要らないぞ。自分のみを守るためにやったことだからな」
そう応えてやると、一夏は篠ノ之の方を向いて、感心したように口を開いた。
「しかし箒、腕あげたなぁ」
「ふ、ふん。お前が弱くなったのではないか？　こんなもの剣術のおまけだ」

「え、えーっと～」
「私達やっぱり……」
「遠慮しておくね……」
あーあ、せっかく集まった女子が退散していった。
「箒」
「な、名前で呼ぶなと――」
「飯食いに行くぞ」
「お、おいっ。いい加減に」
「黙ってついてこい」
「む……」
一夏の強めな物言いに、篠ノ之も黙る。最初からこうすればよかったんだじゃないか？

学食到着。すげえ混んでるが、俺たちが昼食をとるくらいはできそうだ。
「箒、何でもいいよな。何でも食うよなお前」
「ひ、人を犬猫のように言うな。私にも好みがある」
「ふーん。明宏はどうする？」
「俺こそ何でもいい。ここの飯は何でもうまそうだしな」
「了解。あ、日替わり三枚買ったからこれでいいよな。鯖の塩焼き定食だってよ」
「お、いいな。鯖の塩焼き」
鯖の塩焼きか。うまそうだな。これは期待できるぞ。ここの料理は大体おいしいだろうけど。いつかはこの学食のメニュー全部制覇してみたいよな。三年間のうちに挑戦してみるか。
「話を聞いているのか、お前は！」
「聞いてねえよ。俺がさっきまでどんだけ穏和に接してやってると思ってたんだ馬鹿」
「わ、私は別に……頼んだ覚えはない！」
「俺も頼まれた覚えがねえよ。おばちゃん、日替わり三つで」

「あ、一つ量少なめでお願いします」
「あいよ」
一夏が頼んだあとに俺が付け足す。恰幅のいい学食のおばさんは笑顔で了承してくれた。いい人だな。
「いいか？　頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？　箒だからしてるんだ」
「な、なんだそれは……」
「なんだもなにもあるか。おばさんたちには世話になったし、幼なじみで同門なんだ。これくらいいいだろ」
「……」
むすっとして視線だけ天井に逃す篠ノ之。でも、その顔は少し嬉しそうに見えた。
「そ、その……ありが――」
「はい、日替わりお待ち」
「ありがとう、おばちゃん。おお、うまそうだ」
「うまそうじゃないよ、うまいんだよ」
「あれ？　俺の分は？」
学食のおばさんが出したのは鯖の塩焼き定食（並盛り）が二つだけ。俺が頼んだ定食がない。
「ああ、少なめのだね。はいよ」
「お、ありがとうございます」
「しかし、男のくせに少なめなんて変な子だねえ」
「体質なんで」
「はっはっは、そうかいそうかい」
そう言って学食のおばさんはにかっと笑った。うん、やっぱりいい人だな。
「箒、テーブルどっか空いてないか？」
「……」
「箒？」
「……向こうが空いている」

さっきよりも更に不機嫌そうに自分の分の定食を手に歩き出す。
なんで？
とりあえずテーブルについて、定食を食べ始める。やっぱりうまいな、ここの飯は。こんな体質じゃなければ特盛りでも飽きずに食べきれるだろうな。
「そういやさあ」
「……なんだ」
「どっちでもいいから、ＩＳのこと教えてくれないか？　このままじゃ来週の勝負で何もできずに負けそうだ」
「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」
篠ノ之の言うとおり、それならなんで勝負受けたんだ。まあ、俺も勝負受けたからあんまり強く言えないけど。
「それをなんとか、頼むっ」
「……」
無視しやがった。黙々とほうれん草のおひたしを食べている。無言で食べてしまうほど美味しいのか？　あ、確かにおひたしもおいしい。
「……しょうがない。明宏、たの――」
「ねえ。君達が噂のコでしょ？」
いきなり三年生から声をかけられた。赤いリボンでわかった。癖毛なのかやや外側に跳ねた髪で人なつっこそうな顔立ちをしてる。
「はあ、たぶん」
「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと？」
「はい、一夏――コイツが」
「君も、でしょ」
「一応ですけどね」
なんだ？　噂ってそんなことまで広まってるの？　一日しか経ってないのに三年生まで知れ渡っているとは。女子の情報力を甘く見すぎていたか。
「でも君、素人だよね？　ＩＳ稼働時間いくつくらい？」

「いくつって……二十分くらいだと思いますけど」
「それじゃあ無理よ。ＩＳって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？　だったら軽く三百時間はやってるわよ？」
三百時間か。結構やってんだな、あいつ。ＩＳは操縦時間に比例して強くなっていくようなものだから、三百時間もやっているとなると結構な実力なのかもな。
「でさ、私が教えてあげよっか？　ＩＳについて。そっちの彼も、専用機持ちらしいけど、教えてあげる」
お、一夏の表情がすげえ明るくなった。救いの女神を前にしたような感じ。
「はい、ぜ――」
「結構です。私が教えることになっていますので」
いきなり黙っていた篠ノ之が一夏の言葉を遮る。おい、さっきは無視してたんじゃないか。
「あなたも一年でしょ？　私の方がうまく教えられると思うなぁ」
「……私は、篠ノ之束の妹ですから」
言いたくなさそうに、それでもこれだけは譲れないという感じで篠ノ之が言う。
「篠ノ之って――ええ!?」
そりゃあ、ＩＳを作った人の妹が目の前にいれば誰でも驚くわな。
「ですので、結構です」
「そ、そう。それなら仕方ないわね……」
さすがは世界的な天才――の妹。その名前を出しただけで親切な先輩は軽く引いた感じで行ってしまった。
「なんだ？」
「なんだって……いや、教えてくれるのか？」
「そう言っている」
最初からそう言ってくれればスムーズだったのにな。しかし、さっきの授業のときは博士のことすごく毛嫌いしてるようだったのに、

なんでいきなり？　ああ、一夏と一緒にいたいからか。
「俺はともかく一夏を鍛えまくってやってくれ。一夏が勝てばそれで終わりなんだから」
「あ、じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうか」
「今日の放課後」
「ん？」
「剣道場に来い。一度、腕がなまってないか見てやる」
「……わかったよ」
腕がなまってないか、って、ＩＳの特訓じゃないの？

「どういうことだ」
「いや、どういうことって言われても……」
時間は放課後。場所は剣道場。今もまたギャラリーは満載で、一夏は篠ノ之に怒られていた。俺？　篠ノ之に審判をやらされている。
手合わせを開始して十分。一夏の一本負け。篠ノ之強いなあ。かなりの実力者だな、これは。
「どうしてここまで弱くなっている！？」
「受験勉強をしてたから、かな？」
「……中学では何部に所属していた」
「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」
なんの自慢にもならないな、それ。まず帰宅部って皆勤賞なんてあるのか？
「――なおす」
「はい？」
「鍛えなおす！　ＩＳ以前の問題だ！　これから毎日、放課後三時間、私が稽古をつけてやる！」
「え。それはちょっと長いような――ていうかＩＳのことをだな」
「だから、それ以前の問題だと言っている！」
うわあ。すげえ怒ってる。これは何を言っても聞きそうにないな。
「情けない。ＩＳを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど

……悔しくないのか、一夏！」
「そりゃ、まあ……格好悪いとは思うけど」
そこで別に、とか言ってたら締めてやるところだ。男の風上にも置けないやつは俺が処刑してやる。
「格好？　格好を気にすることができる立場か！　それとも、なんだ。やはりこうして女子に囲まれてるのが楽しいのか？」
「楽しいわけあるか！　珍獣扱いじゃねえか！　その上、女子と同室までさせられてるんだぞ！　何が悲しくてこんな――」
「わ、私と暮らすのが不服だというのかっ！」
間一髪、振り下ろされた竹刀を受け止める。まあ、最後のはともかく俺も同感だ。あの雰囲気は本当にキツい。いっそ話しかけてくれたらいくらでも対処できて楽なのに、一定の距離をとって視線を浴びさせられるから対処のしようがない。
「お、落ち着け箒。頼むから。今度なんかおごるから」
「……ふん、軟弱者め」
篠ノ之はそれだけ言うと、足早に更衣室の方へ行ってしまった。
「織斑くんてさあ」
「結構弱い？」
「ＩＳほんとに動かせるのかなー」
「……トレーニング、再開するか」
「出来る限り手伝ってやる。頑張れ」
「おう」
そう返事をした一夏の目は真っ直ぐな目をしていた。これなら、大丈夫だ。不意にそんなことを感じさせる強い意志が、こいつの目にはあった。

第九話　白の初陣（前書き）

第九話です

第九話　白の初陣

翌週、月曜。対決の日。俺と一夏、篠ノ之は決闘の時間を間近に控えて待機していた。
「――なあ、箒」
「なんだ、一夏」
「気のせいかもしれないんだが」
「そうか。気のせいだろう」
何か問題でも解決しなかったのだろうか？
「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」
「……」
「目　を　そ　ら　す　な」
「まさか、剣道ばかりやって、肝心のＩＳの特訓をしていないとか言わないよな？」
「そのまさかだ」
馬鹿か、お前たちは！
「し、仕方がないだろう。お前のＩＳもなかったのだから」
「まあ、そうだけど――じゃない！　知識とか基本的なこととか、あっただろ！」
「……」
「目　を　そ　ら　す　な　っ」
「まさか、基本的な知識とかも、何一つやっていないとか……言わないよな？」
「そのまさかだ」
……つまりこうだ。一夏はこの一週間、ほとんど何もできていない。一応入学初日の放課後は俺が教えたが、次の日からは篠ノ之に任せていたのがダメだったか。
そして一夏専用のＩＳは何かごたついていたらしく、来ていない。
そう、今もまだ来ていない。

「……」
「……」
「……」
俺と一夏と篠ノ之、沈黙。
「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」
三度も呼ばなくていいですよ。山田先生。あ、織斑先生もいる。
「来ました！　織斑君の専用ＩＳ！」
「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ。須藤も準備をしておけ」
「はい」
「はい？」
俺はちゃんと返事をしたが、一夏は状況についていけずまともな返事ができなかった。
「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」
「え？　え？　なん……」
「「早く！」」
山田先生、織斑先生、篠ノ之の声が重なった。
鈍い音がして、ピット搬入口が開く。

――そこに、『白』が、いた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白を纏ったＩＳが、その装甲を開放して操縦者を待っていた。
「これが……」
「はい！　織斑君の専用ＩＳ『白式』です！」
白式。あのＩＳがなぜ、ここにある？　白式なら博士が今調整しているはず。もしかしたら調整はもう終わっているかもしれないが、だとしても――
「まさか一夏の専用機が……」
「ん？　どうした、明――」

白式を見て、驚いている俺に一夏が声をかけようとするが、織斑先生が声をそれを遮る。
「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実践でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」
せかされて、一夏は純白のＩＳに触れる。
「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」
一夏と白式が『繋がる』。始めから一夏のためだけに作られていたかのように、繋がる。
「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」
「大丈夫、千冬姉。いける」
「そうか」
あの織斑先生が一夏のことを苗字で呼ばずに名前で呼んでいる。
それに応えるように一夏も先生のことを名前で呼んだ。
「……」
「箒」
「な、なんだ？」
「行ってくる」
「あ……ああ。勝ってこい」
最後に俺の方に顔を向けられたので、俺はたった一言だけ口にする。
「一夏、まあせいぜい頑張れよ」
「へっ、言ってくれるじゃねえか」
お互いに一言だけ交わし、一夏は前方に意識を集中させる。開いていくゲートの向こうに――『敵』がそこにいるのだから。

一夏はアリーナに飛び出していったあと、オルコットと何か話していたが、試合が始まった途端、オルコットが手にしていたレーザーライフル《スラーライトｍｋ？》の射撃が右肩に直撃する。絶対防御は発動しなかったが、右肩の装甲を吹っ飛ばされてしまった。シールドエネルギーも少し削られてしまったようだ。

その後も弾雨のように降り注ぐ攻撃に一夏のシールドエネルギーは削られ続ける。白式が反応しきれてない？　違う、あの白式に限ってそんなことあるはずがない。となると、一夏が白式の反応についていけてないのだろう。どれだけ白式が優れていようとも、それを操る一夏がついていけなければ意味がない。

一夏も何とか状況を打破するために、近接ブレードを展開する。

「なっ、一夏のやつ、なぜ近接ブレードなんかを……？」

篠ノ之が驚きの声をあげる。確かに距離がかなり離されていて相手が遠距離射撃装備を使っている、そんな状況で近接格闘装備を使うのは不利だ。距離を詰めなければ攻撃できないのに一夏はそれを展開した。

「……展開できなかったんだ」

「なに？」

「白式には、近接ブレード一本しか装備されていない。遠距離武装なんてものもない。だから、一夏はあれしか展開できなかったんだ」

「な、なんだと！？」

篠ノ之が大声を出すが、俺にはどうすることもできない。できるのは見守ることだけだ。

一夏が近接ブレードを展開したのに対抗するかのように、オルコットも背中についていた兵器を四つ起動させる。

激戦が始まった。

開始から結構な時間が経った。時計を見て確認すると二十七分を

回ったところだ。
　一夏のシールドエネルギーもほとんど残っておらず、装甲も所々破壊されている。
　対するオルコットのほうも少しはダメージを負っているが、装甲はほぼ健在。さらには自動起動兵器《ブルー・ティアーズ》――ＩＳの名前と被るからビットでいいか――が四機、オルコットの周りに浮遊している。
　このままではあと数分もしないうちに、一夏は負けるだろう。そんな俺の予想を覆すように、レーザーを打ち出してきたビットのうち一機をブレードで真っ二つにし、その後もう一機も破壊した。
「気づくのが遅いんだよ、馬鹿が」
　一夏もようやく、ビットの弱点に気づいたらしい。
　一見、多方向からのレーザー射撃ができる強力な武装だが、弱点はある。『毎回オルコットが命令を下さなければ動かない』ことと、『命令を下している間、オルコットは他の攻撃ができない』ことだ。それがわかってしまえば、ビットが動いている間はオルコットを警戒する必要はなくなり、ビットだけに集中できる。
「はぁぁ……。すごいですねえ、織斑くん」
「あの馬鹿者。浮かれているな」
「えっ？　どうしてわかるんですか？」
「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」
　そういえば、さっきから左手を開いたり閉じたりしてるな。何かと思ったら、一夏のクセだったのか。
「へぇ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいところまでわかるなんて」
「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」
「あー、照れてるんですかー？　照れてるんですねー？」
「……」
　山田先生の頭にヘッドロックが炸裂した。みしみしと嫌な音が聞

こえてくる。
「いたたたたっ！！」
「私はからかわれるのが嫌いだ」
「はっ、はいっ！　わかりました！　わかりましたから、離し――あううっ！」
「……」
ぎゃあぎゃあと騒ぐ山田先生を気にもかけず、篠ノ之はずっとモニターを見つめていた。
三機目のビットを撃墜し、四機目も回し蹴りで吹き飛ばした一夏はそのままオルコットの間合いに入る。あれなら確実に一撃入る。
しかし、一つ見落としていたことにそこで気づく。ビットが他にもある可能性を考えていなかった。
オルコットは隠し持っていた新たなビットを起動させ、一夏を迎撃する。しかも、今までのとは違う『弾道型』だった。
赤を超えて白い、その爆発と光に一夏は包まれた。
「一夏っ……！」
そんな光景を見て、篠ノ之は声をあげた。山田先生も今にも声を息を呑んでいる。
「――ふん」
緊迫した空気が流れる中、織斑先生は鼻を鳴らした。けれど、どこかその顔には安堵の色がある。
「機体に救われたな、馬鹿者め」
煙が晴れ、そこにはあの純白の機体があった。
そう、真の姿で――
さっきまでの工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な中世の鎧を感じさせるデザイン。
そして、その手に握られた武器――《雪片弐型》。
《雪片》――かつて、現役時代の織斑先生が振るっていた専用ＩＳ装備。刀に型成した形名。それが雪片。刀や剣というよりは反りのある太刀に近く、鎬にはわずかに溝があり、光が漏れ出している。

それを見るだけで、白式に何が起きたのかがすぐにわかる。一次移行――『初期化（フォーマット）』と『最適化（フィッティング）』が終わり、これでやっと白式は一夏専用になった。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

一夏の声が聞こえてくる。それを聞いて織斑先生は再度鼻を鳴らし「馬鹿者が」と呟いた。

「俺も、俺の家族を守る。千冬姉の名前を守ってみせるさ！」

「さっきから何の話を……ああ、もう、面倒ですわ！」

オルコットはそんな一夏に痺れを切らせて、ミサイルビットを二機とも飛ばす。レーザービットよりも速度は速い。しかし、それは一夏の一太刀でどちらも一刀両断され、爆ぜた。

そのままオルコットに突撃していく一夏が握っている《雪片弐型》の刀身が光を帯び、オルコットに斬りかかる。

――が、その斬激が当たる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

一夏もオルコットも、試合を観戦していたギャラリーも、俺の近くにいた山田先生も篠ノ之も、何が起きたのか理解できていなかった。

ただ一人だけ、織斑先生はやれやれ、というような顔をしている。

まあ結局の所、一夏は、負けた。

第十話　決闘の終わり（前書き）

第十話です

第十話　決闘の終わり

「「え？」」

とりあえず、一夏とオルコットが全力で「なんで？」というような顔をして固まっているところに歩み寄り、一夏に声をかける。

「おい、一夏」

「……あれ？　なんで俺、負けたんだ……？」

「さあな。あとで織斑先生か山田先生にでも聞け」

理由はわかるけど、ここで説明するのも面倒だ。どうせあとで織斑先生あたりから説明されるだろうし、俺がここで説明する必要はないだろう。

それよりも、まずオルコットの方だ。まだ呆然としているオルコットにも声をかけてみる。

「オルコット、しっかりしろ」

「……あ、失礼しましたわ」

「で、俺との勝負もするのか？」

「あ、当たり前でしょう！私が勝負を投げ出すと思って！？」

いつもの調子に戻ったか、まあこうじゃないとオルコットらしくない気もするけど。

「でも、今の状態で大丈夫か？」

「問題はございません！」

「そうは言ってもご自慢の第三世代兵器は全部ぶっ壊されてるじゃねえか」

第三世代型ＩＳの真骨頂はそれに積まれている第三世代兵器だ。それがないというのは第三世代型の性能を充分に生かしきれない。

「心配される必要はございませんわ！　《スターライトｍｋ？》だけで充分――」

「いや、それじゃあフェアじゃないからこっちも武装は一つだけに限定させてもらうとするか」

「……あら？　負けたときの言い訳かしら？」
「平等な条件で叩き潰したほうが、やりがいがあるだろ？」
こっちの余裕の態度になんとかいつもの馬鹿にしたような態度で対抗してくるが、それを逆に馬鹿にし返す。
遅れて俺たちのところにやってきたクラスメイトに一夏を預けて下がらせると、改めてオルコットの方を向く。
「さて、はじめようか」
「それなら早く、あなたの専用機とやらを出していただけませんか？　出すまで待って――」
「じゃあ、開始だ」
瞬時に俺の専用機を展開。紫色で後ろについているスラスターの他に、六つの多方向加速推進翼が周りを浮遊している機体――『神王』。
オルコットは見たことないものを見るかのように唖然としていたが、なんとかいつもの態度を取り戻す。
「では、始めましょうか。極東の雄猿さん？」
「叩きのめしてやるよ。飯マズ国の代表候補生ごときが」
互いに皮肉を言い合った直後オルコットは飛び立ち、俺に向かってレーザーライフルを発射する。
一夏のときと同じく弾雨のように降り注ぐ攻撃を、六枚の推進翼を使って多方向連続加速で切り抜ける。
もう一度、弾雨が降り注ぐが同じこと。もう一度、多方向連続加速によってかわす。
「ああもう！　なんなんですの、その機体は！？」
あまりの驚きに、冷静さをすこし失っているようだ。この瞬間にはもう俺の勝利は確定したようなものだ。冷静さを欠いた状態の相手に負けるつもりはない。
二度目の弾雨を避けて、俺も装備を一つ呼び出しする。遠距離攻撃武器の一つ、七二口径レーザーライフル《アヴァロン》。名前がすげえ恥ずかしい。

オルコットが発射したレーザーを《アヴァロン》のレーザーで相殺する。

「この……！」

もう一発同じように相殺させる。出力はどうやら互角。もしかしたら僅差で《アヴァロン》が勝っているかもしれないな。

でも、こんなことを続けていても埒が明かないので、発射形態を？に変更。そのまま、レーザーを放つ。

《アヴァロン》にはいくつかの発射形態があり、それを変更することでさまざまな形態のレーザーが撃てる。発射形態を？に変更したことによって、圧縮されたレーザーは速度が速く、威力を一点に集中させているため並みの装甲なら貫通してしまう。

「なっ！？」

圧縮されたレーザーはオルコットのレーザーを貫き、オルコットに直撃する。予想外の攻撃にオルコットも反応できなかったようだ。

さらに、もう一発撃ちこむが、さすが代表候補生というところか、ギリギリで回避される。しかし体制は崩れた。

「ま、まだまだ……」

「終わりだ」

オルコットの体制が崩れたところを一気に加速し、《アヴァロン》の発射形態を？に変更。さっきの発射形態？が収束貫通砲ならば、この発射形態？は近距離爆散砲。射程距離はかなり短いが、破壊力なら通常の約三倍だ。

「弾けろ」

それだけ言って《アヴァロン》を四連射。さっきまで一夏と戦闘をしていて少なからずシールドエネルギーを消費していたオルコットはそのまま吹き飛ばされて地面へと墜落した。

その直後、ブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者――須藤明宏』

あっけない。あまりにもあっけない幕切れだった。俺は、墜落したオルコットのところに行き、声をかける。
「おい、大丈夫か？」
「……」
沈黙。本当に大丈夫か？　まさか《アヴァロン》のダメージが生身にまで届いてしまったのだろうか？
「……なんだったんですの……？」
「俺の勝ちだ。が、しょうがないだろ。お前は一夏と戦闘した直後だったし。ほら」
手を伸ばしてオルコットを起こす。オルコットのブルー・ティアーズはエネルギー切れで待機形態になっているが、俺の神王はまだ健在なので簡単に起こせた。
「あ、ありがとうございます。それより、あなたのＩＳ、見たことない機体ですが、一体……」
「これか。こいつ……『神王』は篠ノ之束博士が製作した、俺の専用機だ」
「ああ、篠ノ之博士の……って、ええ！？　篠ノ之博士ってあの！？」
復活早いなあ。しかもやっぱりと言うべきか、かなりうるさいし。
「そう。ＩＳの開発者であり、篠ノ之の姉でもあるあの篠ノ之博士だよ」
「で、でも、篠ノ之博士って今行方不明ですよね？」
「まあ、一応そういうことにはなってるな。あ、それからこのことは他言無用で頼む」
「……わかりましたわ」
渋々ながら、一応オルコットは了承してくれた。一応この件は片付いたので、次の話に進む。
「そういえば、クラス代表って誰になるんだ？」
「試合の結果からすれば、あなたでしょうね」
そうだよな。でも、俺はクラス代表なんてやりたくないし。

「俺の代わりにオルコットがやってくれねえか？」
「あなたに負けたわたくしにクラス代表をやれと？」
「今の試合なんて、お前が万全じゃなかったからほとんど無効試合だろ。俺からの推薦ってことならクラスの皆も文句無いだろう？　ダメなら一夏でもいい」
お前は元々クラス代表になりたかったんだろ？　と付け足す俺にオルコットは少し戸惑った感じで言葉を紡いだ。
「……あなたは、強い人なのですわね」
「だから、今の試合はお前も完全な状態じゃなかったんだし――」
「いえ、実力もですが……心もです」
「なんだよ、いきなり」
「わたくしは自分の力を過信していましたわ。自分よりも強い存在がいるはずがないと、自分が負けるはずがないと、そう思っていました」
「自分に自信を持つことは悪いことじゃない。でも、自信というものは行きすぎれば油断に繋がる。そして油断は負けに直結する。ようは自信は持っても過信はするなってことだ」
「だからこそ、あなたは強いのですね」
そういうオルコットの表情はいつもの態度からは想像もできないほど柔らかいものだった。こいつからこんな表情を見られると思っていなかったので、少し驚いた。
「おい、須藤、ちょっと来い」
「あ、織斑先生」
「ついてこい。オルコットは教室に戻れ」
織斑先生はそれだけ言うと俺の返事も聞かずに歩いていってしまった。何か話があるのだろうか。まあ、白式についてのことだろうとは思うけど。
「じゃ、俺は行くぞ」
「あ、はい」
オルコットに別れを告げ、俺は織斑先生の後を追った。

「はあ、まかさ白式があんなＩＳだなんて思わなかったぜ……」
「確かに、かなり偏った機体ではあるな」
一夏と篠ノ之は試合のあと、白式について織斑先生から説明してもらった。
教えられたのは、白式の武器とその特殊能力。武器は《雪片弐型》一つだけ、その雪片の特殊能力はエネルギー系のものを無条件で切り裂き、無効化することができる――いわゆる『バリアー無効化攻撃』。それは相手のＩＳのバリアーも例外ではなく、相手に直接攻撃することができる。そのことにより『絶対防御』が発動し、相手のシールドエネルギーを大きく消費させることができる。
「特殊能力の性能だけを見ればかなり優れているが、その代わり代償が大きい。使いどころを見極めないといけないな」
その特殊能力――『零落白夜』には白式自体のシールドエネルギーを使用するため、むやみやたらに使える代物ではない。オルコットとの試合の最後にシールドエネルギーがなくなったのはこれが原因だ。
織斑先生に言わせれば欠陥機。まあ欠陥機といえど、織斑先生が現役時代に使っていた武器。しかも織斑先生が知る中では全ＩＳ中でも、トップクラスの威力を誇るらしいので、使い方がうまければ最強の武器になる。
「その……一夏、負けて悔しかったか？」
今まで黙っていた篠ノ之が問いかける。
「そりゃ、まあ、悔しいさ」
「そ、そうか。それなら、いい……」
「明日からはＩＳの訓練もちゃんといれてくれよ」
「まあ、基本的にはシールドエネルギーをいかに維持できるかが鍵になってくるな」
具体的には相手の攻撃を防御せずに回避するしかない。そうなると、やっぱり急加速、急停止とかの訓練が必要か。

「しかし、私でいいのか？　専用機持ちの須藤がいるんだし、千冬さんもいる」
「千冬姉はイヤがるだろ。明宏は？」
「別に教えるのは構わないけど、お前のは《雪片弐型》だけだから、近接格闘の訓練が重要だろ。俺はそこまで格闘が得意なわけでもないから、そこは篠ノ之に教えてもらえ。他の基本的なことは俺が教えてやるから」
　格闘戦の訓練なら俺よりも剣道をやっている篠ノ之のほうが適任だろう。剣道の技術がＩＳ戦闘に役立つかはわからないが、俺が教えるよりはたぶんマシだろう。
「それが一番かもな。でも、箒がイヤだって言うなら、格闘の訓練も明宏に――」
「い、イヤだとは言っていない！」
　さっきまで渋っていたが、結局了承した。うん、やっぱり篠ノ之が一夏に好意を寄せているのはほぼ間違いないだろう。決定的な証拠はないが、今までのことを考えるとたぶん間違いない。
　ともあれ、これで決定だな。
「じゃあ、明日の放課後から特訓だ。格闘戦は篠ノ之が、他の基本動作は俺が教えると言うことでいいな？」
「いいぜ」
「異論はない」
　二人の了承も得られたので、これで一夏の特訓についての話は一段落ついた。そんなことをしている間に寮に着いた。部屋は二人のと離れているのでここで別れることになる。
「じゃ、俺はここで。おやすみ、二人とも」
「おう」
「うむ」
　二人に別れを告げ、俺は自分の部屋へと戻っていった。

キャラ紹介　《須藤明宏》（前書き）

神王も登場したので、明宏と神王についての説明です

キャラ紹介　《須藤明宏》

須藤明宏

性別・男

髪・藍色で肩にかかるくらいの長さ

目・藍色

趣味・読書

好きなこと・ＩＳ、本、面白いこと、

嫌いなこと・面倒なこと、不必要なこと

身長は一夏と同じくらい（やや一夏のほうが高い）。体はやや細いが、身体能力は結構ある。食が細く、ＩＳ学園の学食はいつも半分ほど減らしてもらっている。

束と一緒に生活していた。一夏、箒、千冬以外で唯一束が認識できる人間。束からは『アキくん』と呼ばれる。

束との生活中は主に家事と色々なバイトをしていたので、家事は一通りでき、大概のことならある程度こなえる。

ＩＳ製作者の束のおかげでＩＳに関する知識は豊富。しかし、たまに忘れていることがある。

他人へ向けての感情（ヒロインたちから一夏への好意など）には鋭いが、自分に対しての好意などには疎い。

神王

明宏の専用機。機体カラーは紫。待機形態は指輪。

ＩＳに近いが、正確には『ＩＳではないもの』。そのため通常のＩＳ兵器との互換性は全くなく、神王専用の装備しか量子変換できない。

距離を選ばず、オールラウンドに戦うことが出来る万能型。

後方のスラスター以外にも六枚の多方向加速推進翼が取り付けられている。瞬時加速は白式よりもチャージ時間はかなり短くて済むが、瞬間的にしか加速できない。

武装の名称は束が勝手に命名したもので、明宏に言わせると、恥ずかしいから変えてほしい。

武装

デュランダル

大剣を模した神王の近接武器。対象を斬るのではなくどちらかといえば、叩き壊すような攻撃が中心。かなりの硬度を持ちレーザーにも強いため、たまに盾として使われる。

ゲイ・ボルグ

直槍の形状をした武器。近距離だけでなくエネルギーを発射できるので中距離戦にも一応使用できる、近・中距離武器。

アヴァロン

七二口径レーザーライフル。発射形態を変更することによって、さまざまな種類のレーザーを撃つことが出来る。

アトランティス

五九口径アサルトライフル。実弾を発射または連射することができる。威力はさほど高くないが、命中精度が高く装填数が多い。

イージス

実弾シールドだが、内部にエネルギーを蓄えることができるようになっており、エネルギー系のものに触れることでそのエネルギーを吸収して蓄える。ただし、強力すぎるエネルギーは吸収しきれない。

キャラ紹介　《須藤明宏》（後書き）

基本的な設定はこんな感じです

神王の追加装備は登場したときに説明します

第十一話　強くなんかない（前書き）

第十一話です

第十一話　強くなんかない

気が付くと、俺はどこかの庭園に立っていた。
思わず周りを見渡すが、どこかは特定できない。しかし、わかったことが二つある。
まず、俺は小さくなっていた。体からして五、六歳くらいか。なぜかはわからないが俺が小さくなっているのは事実だった。
そしてもう一つ。それは俺の隣と前に今の俺と同じくらいの背丈の少女がいることだった。
前に立ってる少女は金髪で豪華なドレスを着て、高貴な雰囲気を感じさせる。もう一人、隣の少女は俺と同じ藍色の目と髪、髪の長さは俺よりも長く、腰のあたりまで伸ばされている。服装はドレスの少女と違い、とても普通の服装だ。
「あなた方は強い人なのですわね」
俺の前に立っていたドレスの少女が、年相応の拙い口調でそう言って微笑む。日本語ではないが、俺にはわかった。おそらく、英語だろう。
少女が微笑むのに合わせて、金色の髪がふわりと舞う。
『あなた方』というのは俺と俺の隣の少女のことを指しているんだろう。しかし俺にはなぜそんなことを言われたのか、理解できなかった。
「あなた方はいつもおたがいに助けあい、そして支えあっていますわ。弱い方なら助けあうことも支えあうこともできません。だから、あなた方は強いのですわ」
そんな事を言われて、俺は無意識のうちに言葉を紡いでいた。
「強くなんか無い。本当に強ければ、助け合う必要も支えあう必要も無い」
「確かにそうかもしれませんが、支えあうことで強くいられることもあるのです。だからこそあなた方は強い」

「よくわかってるー。わたしたちは理解しあえる世界でさいこーのパートナー同士だもんね」
「……わたくしもあなた方のような最高のお相手をいつかは見つけたいですわね」
隣の少女が俺の方を向いて言った言葉にドレスの少女は笑顔で答える。それはこれからの出会いにとても期待を寄せているのが手に取るようにわかる。
「お嬢様、お茶の用意ができました」
ドレスの少女にいつの間にか来たメイドらしき女性が声をかけた。高貴な雰囲気といい、お嬢様と呼ばれていることといい、ドレスの少女はどこかの貴族の子供なのだろう。
「では、お茶会に行きましょうか。――さん、――さん」
ドレスの少女が俺たちの名前を呼んだ瞬間、俺の視界が少しずつ黒に染まり始めた。そしてそのまま、まるで暗い闇に引きずり込まれるように視界は黒くなり、自分の意識が意識が薄れていくのを感じた。

そしてそこで――目が覚めた。

「……なんだ……？」
時刻は午前三時。起きるのには早すぎる時間だ。現に外から物音も人の声も聞こえない。
体からは異様な量の汗が流れている。暖かくなってきたとはいえ、まだ四月だ。ここまで汗をかくはずがない。
それだけならただ悪夢を見ただけだと思えるが、悪夢を見た後特有の不快感がしない。それよりもまず、夢の内容がまったく思い出せないのが気にかかる。こんなことは今まで一度もなかった。今まではどんな夢を見たとしても少なくとも起きた直後は夢の内容を少しだけでも覚えていたのに、今回はまったく思い出せない。
それでも――夢の内容をまったく覚えていなくても、なぜか一つ

の言葉だけ頭に浮かんで離れない。

『あなた方は強い人なのですわね』

「……なんなんだよ、一体」

なんでこの言葉が頭から離れない。おそらく夢の中で聞いた言葉なのだろうが、なんで夢の内容は覚えていないのにこの言葉だけは思い出してしまうんだ。

俺は強くなんかない。俺は弱いんだ。全てを失い、ただただ生きるだけだった俺が強いはずがない。あの人に居場所と存在意義を与えてもらって、やっと人間らしく生きれるようになった俺が強いはずがないんだ。

俺は弱い。自分で自分を信じることも、許すこともできない俺は弱いんだ。

それなのに――

「なんで、俺のことを強いなんて言うんだよ……」

どこの誰が言ったのかもわからない、そのはずなのに、その言葉は俺の頭で反響し続けた。

第十二話　クラス代表決定（前書き）

第十二話です

第十二話　クラス代表決定

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね」

オルコットとの決闘の翌日。朝のＳＨＲで山田先生がクラス代表が一夏に決まったことを話していた。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

オルコットはそう言うと、早速立ち上がって腰に手を当てるポーズ。そこはどうでもいいが、何ですごく上機嫌なんだろうか。

「まあ、勝負では私が勝つのは当然のこと。しかし、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ」

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せっかく男子がいるんだから、持ち上げないと」

「ちょ、ちょっと待てよ。それならなんで明宏じゃなくて俺なんだ？　明宏はお前に勝ったじゃないか」

ここで、一夏に悲しいお知らせだ。

「俺の試合はほとんど無効試合だろ。オルコットは二連戦だったんだし」

元々俺はケンカを売られたから買ったのであって、代表になる気はまったくなかったし。一夏も同じだろうけど、そんなことはどうでもいい。

「そ、それでですわね。もしよろしければ、わたくしが一夏さんの訓練のお相手を差し上げても――」

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたか

らな」
「あら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ之さん。Ａのわたくしに何か御用かしら？」
「ら、ランクは関係ない！　頼まれたのは私だ」
篠ノ之とオルコットが何やら妙な言い争いをしている。
ちなみに今出てきたＩＳランク、俺はＡ、一夏はＢらしい。でもこれって訓練機で出した最初の格付けだから、あまり意味を持たないそうだ。俺は神王使ったけど。それよりも、あんまり騒いでるとあの人が――
「座れ、馬鹿ども」
ほら来た。元日本代表にして第一回世界大会の覇者、織斑千冬先生が。
「お前達のランクなどゴミだ。わたしからしたらどれも平等なひよっこだ」
ゴミならなんでランクなんてつけるんだろうか。謎だ。
「クラス代表は織斑一夏。依存はないな」
はーいと（一夏を除く）クラス全員が返事をした。もちろん俺も。

ＳＨＲが終わり、いつものごとく一夏との雑談が始まる。
「ちょっとよろしいでしょうか？」
始まる――はずだったのだが、オルコットに声をかけられたのでひとまずそちらに意識を向ける。
「なんだ？」
声の雰囲気も昨日までの刺々しいものではないので、こちらも普通に対応する。オルコットは少し間を置いて口を開いた。
「……先日のことについて謝罪をしたいと思いまして」
「先日のこと？」
「あれだろ、入学式の日の」
一夏に言われてやっと理解する。日本や俺たちをバカにしていたアレか。

「謝罪って言われても、俺たちも色々言ったしな」
「お互い様じゃないか？」
そう、俺たちもオルコットには色々言っているのではっきり言えば、俺たちにも非はある。しかしオルコットは納得しきれていないようだった。
「で、ですが――」
「オルコットだけが悪いわけじゃない。だからこの件についてはもう終わり。それでいいだろ？」
「……わかりましたわ」
オルコットも一夏の説得でなんとか了承させることができたので、俺がＳＨＲのときから考えていたことを口にする。
「それでさっき一夏の訓練の相手をしたいって言ってた件についてなんだが――」
「お、お相手をしてもよろしいと言う意味でしたいということではありません！」
「わかったわかった。とりあえず一夏の訓練についてなんだが、オルコットには射撃の訓練をやってもらいたい」
「え？　俺の白式は射撃武器一つもないぞ？」
「話しは最後まで聞け。オルコットは射撃に関しての専門家とも言える存在。一夏の対遠距離型ＩＳの特訓にはもってこいってわけだ」
五月頭にあるクラス対抗戦に向けて、一夏には色々なタイプの相手と特訓してもらいたい。近距離での格闘戦は篠ノ之に任せるとして遠距離からの攻撃を避ける訓練にはやはりオルコットが適任だろう。
「わたくしは構いませんが」
「確かに明宏の言うことにも一理あるかもな。よし、これから頼むぞセシリア」
「はい！」
満面の笑みで一夏の言葉に頷くオルコット。ああ、昨日の試合でオルコットも一夏に惚れたのか。敵対していた相手をたった一試合

で落とすなんて、すごいな一夏。こいつには何か才能があるんじゃないだろうか。

そういえば、初期設定の機体で代表候補生相手に善戦したんだよな。モテる才能のほかにＩＳ方面の才能まであるのか。天は二物を与えずという言葉を聞いたことがあるが、普通に二物与えてるじゃないか。あれか？　男で唯一ＩＳを操縦できる男だからか？

そんなことを考えていたら、一時間目開始のチャイムが鳴り、今日もＩＳ学園の授業が始まった。

第十二話　クラス代表決定（後書き）

ＰＶが３００００を突破しました

これも全て、皆様のおかげです

これからもよろしくお願いします

第十三話　就任パーティー（前書き）

第十三話です

第十三話　就任パーティー

四月も下旬となり、そろそろ入学一ヶ月になろうという今日も俺たちは織斑先生の授業をまじめに受けていた。
「ではこれよりＩＳの基本的な飛行訓練を実践してもらう。織斑、須藤、オルコット。試しに飛んでみろ」
「了解しました」
「はい」
織斑先生の指示を受けて、俺とオルコットは問題なくそれぞれの専用機を展開する。
そう言えば、ブルー・ティアーズのビットも全部直っているようだ。
「《ブルー・ティアーズ》はもう修復されたのか？」
「はい。本国に連絡して予備のものを送ってもらいましたの」
そんなことを話していたらまだ展開していない一夏が注意される。
「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」
せかされて一夏も白式を展開する。
ＩＳは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。オルコットはイヤーカフス。俺のは右手中指にはめている指輪。一夏は右腕のガントレット。ガントレットってアクセサリーか？　完全に防具だよな。
「よし、飛べ」
命令通りにオルコットとともに急上昇して遥か上空で停止する。
一夏も遅れながらも、なんとかついてきた。
「一夏、遅いぞ。スペック上はブルー・ティアーズより白式のほうが高いんだからしっかりしろ」
「そうは言っても、慣れないんだよな。『自分の前方に角錐を展開するイメージ』ってどんな感じだよ」
「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がわかりやすい方法を

模索する方が建設的ですわよ」
「そういわれてもなぁ」
「例えば俺の場合は、『前方にいる馬鹿に思いっきり体当たりをするイメージ』でやってるぞ」
「それはちょっと……」
「も、もう少しまともなイメージはないんですか？」
「冗談だ」
「冗談に聞こえないな」
「そうですわね。ふふっ」
あれ以来、オルコットはかなり雰囲気がやわらかくなり、普通に俺たちと話せる関係になっていた。
「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときは二人きりで――」
「いつまでそんなところにいる！　速く降りてこい！」
いきなり通信回線から篠ノ之の怒鳴り声が響いてくる。これは一夏に向けてだろう。隣で山田先生がインカムを奪われて、あたふたしているのがハイパーセンサー越しにはっきり見える。
「三人とも、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ」
「了解です。では、お先に」
それだけ言って、すぐさまオルコットは地上に向かう。完全停止も成功したようだ。
「うまいもんだなぁ」
「お前も早くあのレベルに達するように頑張れよ。じゃ、俺もお先」
一夏にそれだけ言って、地上へ急降下。そして完全停止。計測してみたら、地表から十センチと二ミリ。惜しい。
そんなことしてるうちに、一夏も急降下してくる。急降下して――
ギュンッ――――――――――ズドォォンッ！！！

墜落した。とりあえず一夏のところへ行ってみる。
「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」
「……すいません」
「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」
篠ノ之、擬音でしか表現してなかったあれは教えたとは言わないと思う。あれを理解できる人間はほとんどいないぞ。
「大丈夫ですか、一夏さん？　お怪我はなくて？」
「あ、ああ。大丈夫だけど……」
「そう。それは何よりですわ」
「……ＩＳを装備していて怪我などするわけがないだろう……」
「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがＩＳを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」
「お前が言うか。この猫かぶりめ」
「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」
この二人日に日に仲が悪くなっているのは気のせいだろうか。気のせいじゃないよな。やっぱり主な原因は一夏なんだろうな。
「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっていろ」
篠ノ之とオルコットの頭を押しのけて、織斑先生が一夏の前に立つ。
「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」
「は、はい」
「よし。でははじめろ」
一夏の右手に光が集まって収束される。そして光が収まるとそこには《雪片弐型》が握られていた。
「遅い。０．５秒で出せるようになれ」
いや、ここまで出せるようになったのでも大進歩だと思うが、織斑先生が相手なのでなにも言わない。
「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」
「了解」
オルコットは左手を真横に突き出す。一夏のときとは違い、光が爆発的に光っただけで《スターライトｍｋ？》が握られていた。
「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」
「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」
「直せ、いいな」
「――、……はい」
「よし。次は須藤の番だ」
「はい」
俺は右手を前に向けた瞬間に《アヴァロン》を展開する。さっきの織斑先生が言っていたことにならって銃口を前の向けた状態で。
「正面に展開できたことは評価するが、オルコットよりも若干展開の速度が遅い」
「精進します」
「よし。では、オルコット、近接用の武装を展開しろ」
「えっ。あ、はっ、はいっ」
《スターライトｍｋ？》を収納して、新たに近接用の武装を展開しようとしたが、なかなか出てこない。結局武器の名前を呼ぶという、初心者用の手段を用いてやっと展開できた。
「何秒かかっている。もっと早く展開するよう心がけろ。次に須藤」
「わかってます」
《アヴァロン》を収納と同時に、左手に大剣《デュランダル》を展開。オルコットのように中距離特化じゃないから、近接武装も問題なく展開できる。
「よろしい。そろそろ時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

あの穴を埋めろってことか。ご苦労なこった。
「須藤も手伝ってやれ」
そんな馬鹿な。

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表決定おめでとう！」
「おめでと～！」
今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂。一組のメンバー全員集合だ。
壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた大きな紙がかけてある。いつ作ったのだろうか。
「いやー、これでクラス対抗戦が盛り上がるねえ」
「ほんとほんと」
「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」
「ほんとほんと」
「それに須藤くんもいるし」
「ほんとほんと」
さっきから相槌を打っている女子は二組だった気がするんだが。
っていうか明らかに三十人以上いるよな、ここ。クラスの集まりでクラスの人数を超えるというのはこれ如何に。
「人気者だな、一夏」
「……本当にそう思うか？」
「ふん」
篠ノ之は鼻を鳴らしてお茶を飲む。一夏が他の女子と一緒にいるのが気に食わないらしい。
「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と篠ノ之博士が開発した専用機を持っているという須藤明宏君に特別インタビューをしに来ました～」
「……」

ちょっと待て。今この人は何て言った？

『篠ノ之博士が開発した専用機を持っている』

落ち着け、俺。まず、俺の専用機である神王は篠ノ之博士が作ったのは嘘ではない。まずここは問題ではない。いや、問題かもしれないけど。

ただ、神王を博士が作ったことを知っているのは、俺と博士を除くと、この学園の教師と国際ＩＳ機関の人間、あとはこの前教えたオルコットだけのはず。もちろん、オルコットには話さないように言ってあるし、教師にも箝口令が敷かれているはず。それなのに、この新聞部の人はなぜこのことを知っているのか。

「……今の聞いた？」

「……聞いた聞いた」

「……須藤くんの専用機をあの篠ノ之博士が作ったって」

今のを聞いてしまった女子たちが、ざわめきだす。目線でオルコットに問うが、首をブンブン振っているからオルコットではないのだろう。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

名刺を見てみる。画数の多い名前だな。書く本人は大変そうだ。だが今はそんなことに気を取られている場合じゃない。

「今の情報、どこで手に入れたのですか？」

「篠ノ之博士が開発したってこと？　企業秘密だよ」

そう言いながら、にっこりと笑う黛先輩。これ以上の詮索は無駄と判断してこの話を切り上げる。

「……なら仕方ないですね。ですが、あなたの不用意な発言で余計な混乱が起こらないよう、根回しはしてもらえますか？」

「うん、いいよ」

ずいぶんとあっさり返された。まあ、問題はクリアしたからいいか。

その後、数分かけてその場にいた全員を治めたあと、黛先輩は一

夏にマイクを向けた。
「ではではずばり織斑君！　クラス代表になった感想を、どうぞ！」
「えーと……まあ、なんていうか、がんばります」
「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。まあ適当に捏造しておくからいいとして」
よくないだろ。
「次は須藤くん！　専用機持ちで、しかもオルコットちゃんに勝ったらしいけど、クラス代表にならなかった理由は？」
「面倒くさそうなんで一夏に押し付けようと思ったからです。以上」
「おい！　お前そんな理由で辞退したのか！？」
「冗談だ」
「おお、面白いね。これこのまま書いていい？」
「一応、新聞には『一夏により多く、充実した経験を積ませ、彼の進歩を促進させたいと思ったから』とでも書いておいてください」
「わかったわ」
「おいおいおい、なに俺のこと考えて決断したように仕立てあげてんだよ。自分のことしか考えてなかったじゃねえか、本当は！」
「落ち着け、一夏」
「元凶のお前が言うな！」
俺と一夏が漫才のようなやり取りをしていると、黛先輩はオルコットの方にマイクを向けた。
「ああ、オルコットちゃんもコメントちょうだい」
「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ありませんわね」
そんなこといいながら、結構やる気満々じゃねえか。
「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと、それはつまり――」
「ああ、長そうだからいいや。適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしておこう。写真だけちょうだい」
「なっ、な、ななっ……！？」

顔を真っ赤するオルコット。面白いな、図星疲れて慌ててる姿は。
「何を馬鹿なことを」
馬鹿はお前だ、一夏。
「え、そうかなー？」
「そ、そうですわ！　何をもって馬鹿としているのかしら！？」
ほら、オルコットだってめっちゃ怒ってるし、まあ自業自得だがな。
「だ、大体あなたは――」
「はいはい、とりあえず三人で並んでね。写真撮るから」
「あ、はい」
「注目の専用機持ちだからねー。はい、握手とかしてくれるといいかもね」
「三人で握手って、どうすればいいんですか？」
「じゃあ、織斑君とオルコットちゃんが握手しているところに、須藤君が間からその上に手を重ねてくれる？」
「わかりました」
「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」
「そりゃもちろん」
「でしたら今すぐ着替えて――」
「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」
黛先輩が一夏とオルコットの手を引いて、握手させる。そして二人の間から手を重ねる。
「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」
「え？　えっと……２？」
なんで２なんだよ。どう考えたって２にはならないだろう。
「ぶー、７４．３７５でしたー」
パシャッとデジカメのシャッターが切れる。そして、
「なんで全員入ってるんだ？」
恐るべき行動力をもって、一組の全メンバーが撮影の瞬間に俺たちの周りに集結していた。篠ノ之も。

「あ、あなたたちねえっ！」
「まーまーまー」
「オルコットだけ抜け駆けはないでしょー」
「クラスの思い出になっていいじゃん」
「ねー」
まさかクラスの全員が同じ行動に入るとは思わなかった。事前に打ち合わせでもしていたのだろうか。
ともあれ、この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いた。

第十四話　中国からの転校生（前書き）

第十四話です

第十四話　中国からの転校生

「織斑くん、須藤くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」
翌朝、席につくなりクラスメイトに話しかけられた。入学当時のような雰囲気はなくなり、普通に女子と話せるようになったのは大きな前進といえるかもしれない。
「転校生？　今の時期に？」
「ＩＳ学園への転入って、国の推薦がないとダメなんじゃなかったか？」
「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」
中国の代表候補生と聞いて、俺は納得する。確かに代表候補生なら国の推薦も簡単に貰える。もしかしたら国のほうから頼んでもおかしくはない。
「中国も第三世代型ＩＳの開発してたはずだから、それのデータを取るためかもな」
「あら、私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」
俺の言葉を聞きつけて、一組のイギリス代表候補生、オルコットが話に混ざる。
「このクラスに転入してくるわけではないだろう？　騒ぐほどのことでもあるまい」
オルコットの隣にいた篠ノ之がもっともらしいことを言う。
「どんなやつなんだろうな」
「む……気になるのか？」
「ん？　ああ、少しは」
「ふん……」
一夏の言葉を聞いて篠ノ之の機嫌が悪くなった。やっぱり一夏がほかの女子のことを考えてるのが気にくわないんだろうか。
「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？　来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！　そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、実践練習でもしましょう。相手ならこのわたくしが務めさせていただきますわ」

五月頭に行われるこのクラス対抗戦、一位のクラスには優勝商品として学食デザートの半年フリーパスが配られる。女子は燃えるが、俺は学食自体で腹が限界なのでほとんど意味がない。よくあれだけの食事のあとにデザートなんて食えるよな。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「負けたら承知しないぞ」

オルコット、篠ノ之、俺と好き勝手言ってやる。

「でも、今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「――その情報、古いよ」

ん？　教室の入り口からふと声が聞こえた。誰だ？

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？　お前、鈴か？」

なんだ、また一夏の知り合いか？　篠ノ之といい、織斑先生といい、ＩＳ学園には一夏の知り合いが集まってくるのか。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「なに格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？　なんてこと言うのよ、アンタは！」

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！　一夏の言葉に聞き返した凰が痛烈な出席簿打撃をくらった。我らが担任、織斑先生登場である。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」
「ち、千冬さん……」
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すいません……」
これは１００パーセント織斑先生にビビってるな。しかも、織斑先生の実績とかだけでなく、存在自体にビビってる気がする。
「またあとで来るからね！　逃げないでよ、一夏！」
「さっさと戻れ」
「は、はいっ！」
一夏って呼び捨てだったな。幼なじみのように見えるけど、一夏の幼なじみには篠ノ之がいる。反応からすると、篠ノ之は知らないようだ。一体どういう関係なんだろうか。
まあ、なんだかんだで今日も一日ＩＳの訓練と学習が始まる。

「お前のせいだ！」
「あなたのせいですわ！」
昼休み、開口一番に篠ノ之とオルコットが一夏に文句を言っていた。
この二人、午前中だけで山田先生に注意五回、織斑先生に三回叩かれている。よっぽど今朝の女子のことが気になっているのか。
「まあ、話なら飯食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」
「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」
「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」
その後クラスメイトが数名付いてきて、俺たちは学食に移動した。
そしてそこで待ち構えていたのは噂の転入生、凰鈴音だった。ちなみにその手には、ラーメンがある。
「のびるぞ」
「わ、わかってるわよ！　大体、アンタを待ってたんでしょうが！

なんで早く来ないのよ！」
わかるわけなんだろう。そんなこと。
「それにしても久しぶりだな。ちょうど一年ぶりになるのか」
「げ、元気にしてたわよ」
「あー。ゴホンゴホン」
「ンンンッ！　一夏さん？　注文の品、出来てましてよ？」
大げさに咳き込んで篠ノ之とオルコットが一夏と凰の会話を中止させる。
「向こうの席が空いてるぞ」
「お、サンキュー。じゃ、行こうぜ」
凰も含めた俺たちは空いている席につく。
「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？　おばさん元気か？　いつ代表候補生になったんだ？」
「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってんのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」
「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」
「そうですわ！　一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」
篠ノ之とオルコットが一夏に尋ねる。俺も知りたい。
「べ、べべ、別に付き合ってるわけじゃ……」
「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」
「……」
「？　何睨んでるんだ？」
「なんでもないわよっ！」
いきなり凰が怒った。なんだ？
「幼なじみ……？」
「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだっただろ？　鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」
そういうことか。入り違いの引越しだったから、篠ノ之は面識が

ないのか。
「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？　小学校からの幼なじみで、俺の通っていた剣術道場の娘」
「ふうん、そうなんだ。初めまして。これからよろしくね」
「ああ。こちらこそ」
「それとこいつが須藤明宏。ここで唯一の男仲間だ」
「え？　ＩＳを動かせる男子って、一夏だけじゃないの？」
結構ニュースで報道されたりしてたけど、凰はまったく俺のことを知らないらしい。
「まあ、色々あってな。こいつは『自分が動かせるのは、ＩＳじゃない』って言ってるけど」
「事実だからな。まあ、よろしく頼む」
「こちらこそよろしく」
「ンンンッ！　わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」
「……誰？」
「なっ！？　わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？　まさかご存じないの？」
「うん、あたし他の国とか興味ないし」
「な、な、なっ……！？」
言葉に詰まりながらも怒りで顔を赤くしていくオルコット。ゆでだこみたいだ。言ったら怒られそうだけど。
「い、い、言っておきますけど、わたくしはあなたのような方には負けませんわ！」
「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」
「……」
「い、言ってくれますわね……」
凰の自信に満ちた言葉に、篠ノ之は無言で箸を止め、オルコットは拳を握り締めていた。
「一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」
「あ、あのさぁ。ＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？」
「そりゃ助か――」
「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」
「あなたは二組でしょう！？　敵の施しは受けませんわ」
いやいやちょっと待てよ。一夏の決定権はどこに行った。
「あたしは一夏に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」
「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしてもと頼まれているのだ」
「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて図々しいことを――」
「後からじゃないけどね。あたしのほうが付き合いは長いんだし」
「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！」
何の勝負をしてるんだこいつらは。早い遅いなんてどうでもいいかとだと思うが、女子にとっては大事なことらしいな。
「そういえば、親父さん、元気にしてるか？」
一夏が思い出したように凰に問いかける。しかし、凰は少し寂しげな表情を見せながら答えた。
「あ……。うん、元気――だと思う」
ん？　思う？　どういうことだ。
「それより、積もる話もあるでしょ？　放課後にでも――」
「あいにくだが、一夏は私とＩＳの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」
「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの」
「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」
ごくんとラーメンのスープを飲み干して、一夏の答えを待たずに凰は片付け、出て行ってしまった。ラーメンのスープを飲み干すって……想像しただけで少し胃が痛くなってきた。
「一夏、当然特訓が優先だぞ」
「一夏さん、わたくしたちの有意義な時間を使っているという事実

をお忘れなく」
　難儀だな、一夏。

「え？」
「な、なんだその顔は……おかしいか？」
「いや、その、おかしいっていうか――」
「篠ノ之さん！？　ど、どうしてここにいますの！？」
　俺と一夏、オルコットの前にいるのは篠ノ之。しかも純国産のＩＳ『打鉄』を展開している。何というか、うん、篠ノ之の侍のような雰囲気にすごく合っている。
「どうしてもなにも、一夏に頼まれたからだ」
　確かに篠ノ之に頼んでたし、俺も篠ノ之には格闘訓練の相手を頼んだ。でも、あれは篠ノ之に近接格闘のコツを教えてもらうっていう意味だったんだが、まさか訓練機を借りてくるとは。恋する女子の行動力はすさまじいということか。
「くっ……。まさかこんなにあっさりと訓練機の使用許可が下りるだなんて……」
　とても悔しそうな声を上げるオルコット。一夏と二人きりで訓練できると思っていたらしく、すごく悔しそうだ。
「では一夏、始めるとしよう。剣を抜け」
「お、おうっ」
「では――参るっ！」
　――と、そこにつんざく声。
「お待ちなさい！　一夏さんのお相手をするのはこのわたくしですわ！」
「ええい、邪魔な！　ならば斬る！」
「訓練機ごときに遅れを取るほど、優しくはなくってよ！」
　そしてそのまま二人は戦闘に入ってしまった。こうなってしまっ

たら手のつけようがない。俺と一夏は顔を見合わせ、苦笑しながら相談する。

「……どうする、一夏」

「……しょうがないからお前が教えてくれ」

「それでもいいんだけどな……」

戦闘をしている二人の方を見る。二人を無視して俺が教えたら、あの二人に何を言われるかわかったもんじゃない。だが、そんなことに気づくはずもない一夏は二人を見ながら、頭に疑問符を浮かべていた。

「一夏！」

「何を黙って見ていますの！？」

「うえっ！？　だってどっちかに味方したらお前ら怒るだろ？」

「当然だ！」

「当然ですわ！」

「……」

なら一体どうしろというのだろうか。どちらかに加勢しても怒られる。加勢せずに傍観していても怒られる。八方ふさがりとはこのことか。

結局、一夏は二人の戦闘に巻き込まれ、ボロボロになってしまった。南無。

第十五話　忘れられた約束（前書き）

第十五話です

第十五話　忘れられた約束

特訓のあと、一人で食堂までの道を歩く。いつもなら一夏と一緒に食べるが、さっきの特訓――という名の戦闘――のせいでボロボロになったから復活するのは少し時間がかかるだろう。篠ノ之は一夏と一緒に食べるだろうし、オルコットの部屋はわからない。この三人を除くとそこまで親しい相手がいないことを自覚させられてちょっと涙が出そうになる。

「はーるばるきたぜ、アゴだけ～……って、何だこの歌？」

確か篠ノ之博士がよく作業中に歌っていた歌だったはず。いつの間にか俺の頭にこびりついていたらしい。一体何の歌なのかはさっぱりわからないが。

ドンッ。

そんなバカなことを考えていたら、誰かとぶつかってしまった。寮の廊下は広いので普通に歩いていたらぶつかることはない。おそらく前を見ずに走っていたんだろう。

「すまない。――って凰か？」

ぶつかってきた相手を確認すると、今日転校してきた中国代表候補生、凰鈴音だった。片手にボストンバッグを持ち、俺の声に反応して顔を上げるとその目には涙がたまっていた。

「確か……一夏のクラスメイトの……」

「須藤明宏だ。それより、どうしたんだ？　まさか今のでどこかぶったのか？」

俺の方はそこまで衝撃はなかったが、小柄な凰からしてみれば結構痛かったのかもしれない。一夏には細いって言われるが、一応それなりの筋肉はあるし。

「そうじゃないわ。……アンタのせいじゃないから……」

そう言ってうつむく。怪我をしてなかったことはよかったが、ならなぜ凰は泣いているのか気にかかる。

今日の様子を見る限り、凰は明るく、元気で、自分に自信を持っている人間のはずだ。だが、今の彼女は弱弱しく、涙を浮かべている。絶対に何かよっぽどの原因があるはずだ。

「……まさか、一夏か？」

一瞬、凰が一夏の名前に反応する。そう言えば、凰が走ってきた方は一夏の部屋だったはず。今の反応と合わせて考えれば、原因は一夏で間違いないだろう。

「何かあったのか？」

「……アンタには関係ないでしょ」

事情を聞こうにも凰は応えてくれない。

「関係はないな。単純に興味があったから聞いただけだ。話したくないなら別に話さなくても構わない。ただ、嫌なことがあったときは誰かに話すだけで気分が軽くなることもあるそうだからな。話し相手ぐらいにはなってやれるはずだぞ」

「……そうね。ただ塞ぎこんでるだけじゃダメかも。いいわ、話してあげる」

なにやら上から目線だが、少しは元気が出てきたようだ。

「じゃあ、俺の部屋にでも行くか。あそこなら誰にも聞かれる心配はないから」

「わかった」

俺は凰とともに今さっき出てきたばかりの自室へと引き返していった。

「……なるほどな」

今しがた凰から聞いたことを要約すると、『小学校のときに交わした約束を一夏が忘れていた』ということらしい。それに怒った凰が一夏を引っ叩き、部屋を出て走っていたところで俺とぶつかった、と。

「確かにそれは一夏が悪いと思うが……なんでそれで怒ったんだ？」
今の話を聞く限り、悪いのは一夏だが、俺にはなぜ凰が怒ったのかが理解できない。
「だって、女の子との約束を覚えてないなんて信じられないでしょ！　男の風上にも置けないわ！」
そう言いながら、俺が出したお茶を飲み、俺が出した菓子を食べる凰。どうやら遠慮というものを知らないらしい。お菓子がドンドン減っていく。
「でも、約束したのって少なくとも三年以上前の話だろ？　覚えてなくても不思議じゃないんじゃないか？」
「じゃあ、アンタは女の子との約束を忘れるの？　普通覚えているもんでしょ」
「あいにく女子と約束したことなんて覚えている限りはないからな」
新たな菓子を出しながら、凰の言葉に応える。
ふと、記憶を掘り返してみる。
今から三年前……ダメだ。そんな前のことなんて『あのこと』以外は正確に思い出せない。っていうかあまり思い出したくない。
「アンタもアイツみたいに忘れているだけじゃないの？」
「……それならどれだけよかっただろうな……」
忘れている『だけ』。その言葉が心に突き刺さる。自分の弱さに憤りを感じ、それでも俺は自分の手を強く握りしめてそれに耐えながら、考えを口にする。
「俺のことはともかく、相手はあの一夏だ。普段は気が利くくせに、女子のことが絡むと途端に鈍感になるアイツのことだ。あんまり気にするな――と言いたいところだが、そうもいかないんだろ？」
約束を忘れられたぐらいで普通相手を叩くほど怒ったりはしないだろう。それなのに凰が怒ったのは約束の相手――一夏に好意を寄せているからだろう。少なくとも約束を忘れられて一夏を引っ叩くくらいには。
「俺にはあまりいい言葉を言えないが、これだけは言わせてもらう」

「何よ」
「一夏は悪いやつじゃない。約束を忘れたのだってきっと時間が経ち過ぎて記憶があいまいだっただけだ。もう少しすれば絶対思い出す。だから、あいつのこと許してやってくれないか」
「……っ」
「無論全部許してくれとは言わない。元々あいつが忘れていたのが原因だからな。でも、少しだけでも考えてやってほしい」
自分の考えを凰に告げる。俺がこんなこと言うとは思っていなかったのか、凰は驚きの表情を隠せずに少しの間呆然となった。
やがて凰は、一つため息をついて立ち上がる。
「アンタに免じて少しだけ、ホントーに少しだけアイツのこと許してあげるわ。ホントのホントーに少しだけね」
そう言うと、顔を一瞬だけ微笑みを浮かべ廊下に続く扉へ歩いていく。
「ありがとう。アンタの言う通り、少し気が軽くなったわ。それじゃ」
そのまま扉の向こうに消えていった。あの様子だと少しは機嫌も直ったのだろう。そのことに安堵しながら、部屋の片付けに移る。
ウーロン茶のペットボトル一本。菓子三袋が数十分のうちに消えてしまったが、凰の機嫌が直ったのなら安い代償だ。
あとは、一夏がどうするかだな。約束を思い出せればいいが、そう簡単にいくかどうか。
あ、そういえば今日夕食食えなかったな。しょうがないから、菓子でも食ってしのぐか。栄養が偏るから本当は好ましくないんだが。
しょうがなく夕食代わりの菓子を食いながら、ふと『約束』について考える
「……『約束』、か。俺もそんな約束をしたんだろうか……」

――翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は『クラス対抗戦日程表』。

注目の一回戦第１試合は一年一組対一年二組――一夏と凰の試合だった。

第十六話　クラス対抗戦前日（前書き）

第十六話です

第十六話　クラス対抗戦前日

五月。クラス対抗戦前日となった今日も、凰の機嫌は直っていなかった。

凰が一夏に会いにくることはなく、たまに会っても露骨に顔を背ける。あの日、少しだけは許してやると言っていたが、本当に少しだけだったらしい。

「ついに明日か」

「あとは本番で特訓の成果が発揮できるかだな」

「待ってたわよ、一夏！」

特訓が終わり、ピットの更衣室に戻ってきた一夏を待っていたのは凰だった。ちなみに篠ノ之とオルコットは反対側のピットに行っている。

「おう、鈴か」

「どうしたんだ？　いきなり」

「ちょっと一夏に用があってね。……で、一夏。反省した？」

「へ？　何が？」

反省と言えばおそらく約束を忘れていたことだろう。だが、一夏は何のことかわかっていないようだ。

「だ、か、らっ！　あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ！？」

「おう」

おい一夏。確かに俺もそうなったら放っておくかもしれないが、ここでは素直に謝っておくべきだと思う。

「何か変か？」

「変かって……ああ、もうっ！　謝りなさいよ！」

「だから、何でだよ！　約束覚えてただろうが！」
「あっきれた。まだそんな寝言いってんの！？　約束の意味が違うのよ、意味が！　どうあっても謝らないっていう訳！？」
「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」
「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが！」
言い争いが始まってしまった。二人とも大声で騒いでいるせいでかなりうるさい。隣にいる俺の身にもなってほしいだ、二人とも頭に血が上っているせいでしばらく収まりそうもない。
「ああもう、少し静まれって。バカ二人」
「「誰かバカだって！？」」
お前ら二人に決まってるだろうが。周りには誰もいないんだし。
「とりあえず落ち着け。ここで言い争ってもどっちも譲る気はないんだろ？　だったら、明日のクラス対抗戦で白黒つければいいんじゃないか？」
「いいわよ！　そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね！？」
「おう、いいぜ！　勝ったら説明してもらうからな！」
「せ、説明は、その……」
急に凰の顔が赤くなる。
「何だ？　やめるならやめてやってもいいぞ？」
「誰がやめるのよ！　あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」
「なんでだよ、バカ」
「バカとは何よバカとは！　この朴念仁！　間抜け！　アホ！　バカはアンタよ！」
「うるさい、貧乳」
――あ。やばい。何か大変なことが起きそうな予感……。
ドガァァンッ！！！
いきなりの爆発音、そして衝撃で更衣室全体がかすかに揺れた。
その発生源である凰の右腕はその指先から肩までがＩＳ装甲化して

いた。
思いっきり壁を殴ったような――それでも拳は壁にはまったく届いていない。そんな衝撃。
「い、言ったわね……。言ってはならないことを、言ったわね！」
これはまずい。本気の本気で怒っている。
「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」
「今の『は』！？　今の『も』よ！　いつだってアンタが悪いのよ！」
無茶苦茶な理屈だが、あいにく一夏に反論の余地はない。俺もこの雰囲気で口出しできるほど勇敢じゃない。
「ちょっと手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてあげる。――全力で、叩きのめしてあげる」
最後にとても鋭い視線を送ってから、凰は更衣室を出て行った。
壁を見ると、直径三十センチほどのクレーターができていた。特殊合金製の壁をへこませる威力か……恐ろしいな。
「……パワータイプだな。おそらく白式と同じ近接格闘型」
「……やばい。よりによって胸のことを言ってしまうとは……」
一夏のこの様子から考えると、凰が一番気にしている、そして真剣に怒ってしまうポイントだったんだろう。それを言ってしまうとは今のは圧倒的、絶対的に一夏が悪い。
この前凰を慰めたとき、あとは一夏しだいと思ったが、これは大変なことになってしまったな。こんなことで大丈夫なのかかなり不安になってきた。
まあ、勝敗はどうであれ、一夏が凰に謝らないといけないのは確実だった。

第十七話　クラス対抗戦と招かざるもの（前書き）

第十七話です

第十七話　クラス対抗戦と招かざるもの

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と凰。

噂の新入生同士――しかも専用機持ち同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。会場の外ではモニターで試合を観戦する生徒もいる。

俺と篠ノ之、オルコットは織斑先生、山田先生とともにピットからその試合を観戦することになった。

モニターには凰と『甲龍（シェンロン）』が映ってる。ブルー・ティアーズ同様、非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が特徴で、肩の横に浮いたスパイク・アーマー棘付き装甲が、やたら攻撃的な自己主張をしている。

「一夏は大丈夫なのだろうか……」

「どういうことですの？」

「一夏はまともにＩＳを操縦してから一ヶ月しか経っていない。それに相手は代表候補生だ。この試合、一夏は不利ではないのか」

「何を言っていますの、篠ノ之さん。一夏さんはこのわたくしと互角に戦ったのですのよ？　心配は不要でしょう」

篠ノ之とオルコットがそんなことを話している。

「そうとも言い切れない。前回の戦いはオルコットが油断していたのと、白式の一次移行（ファーストシフト）で動揺していたからあそこまでいけただけだ。凰の場合は油断なんてしないだろう」

織斑先生がそんなことを言う。あいかわらず身内にも容赦がない。言っていることは全て事実だから何も言えないが。

「では、一夏には勝ち目がないと言うのですか？」

「いや、この一ヶ月で一夏もある程度成長したし、元々あいつには才能があると俺は思っている。勝ち目がないわけではない。そうですよね、織斑先生？」

「ふん」

鼻を鳴らして誤魔化された。少しは認めてあげてもいいと思うけど。

一ヶ月前の一夏はたとえるなら『錆付いた刀』――しかも剣道という枠組みでの刀だ。だがそんな刀も篠ノ之との訓練で錆を落とし、オルコットとの訓練で『ＩＳ戦闘の刀』に鍛えられた。代表候補生とも互角にやりあえるはずだ。

「あとは機体の性能や武装、凰との相性よってどうなるかだな」

「「相性！？」」

「そこに反応するな。戦闘では自分と相手の戦闘スタイルの相性も重要って意味だ」

まったく、こいつらはこんなときまで何を考えているのだろうか。二人とも戦いについて知らない素人でもないんだからこれぐらい普通にわかると思うが。まあ、恋する女子の暴走ということにしておこう。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスが聞こえ、一夏と凰が戦闘態勢に入る。

『それでは両者、試合を開始してください』

その直後、一夏が展開した《雪片弐型》が凰の青龍刀《双天牙月》に弾かれる。一夏はそのまま三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）で凰を正面に捉えた。

その後も縦横斜めと凰の手によって自在に角度を変えながら斬り込んでくる《双天牙月》を《雪片弐型》でなんとかしのぐ。

少しずつ押されていくのを抜け出すため一夏が距離をとろうとしたとき、凰の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光った瞬間、一夏は見えない衝撃に殴り飛ばされた。

「なんだあれは……？」

俺とともにピットからリアルタイムでモニターを見ていた篠ノ之が呟く。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す――」

「オルコットのブルー・ティアーズと同じ第三世代型ＩＳ『甲竜（シェンロン）』

の武装だな」
「そうなのか？」
「ああ。しかも、砲弾だけじゃなく、砲身まで見えない。それに加えて砲身が実体じゃないから、どこにでも撃てる……」
「そんな……」
とんでもない隠し玉だな。複雑な攻撃が可能な《ブルー・ティアーズ》と違って直線的な攻撃しかできないが、見えないというのは辛い。しかも凰の技術も加わってかなりの強さを誇っている。
一夏は何度か当たりながらも、何かを狙って動く回っている。それに気づいた山田先生が呟く。
「織斑くん、何かするつもりですね……」
「瞬時加速（イグニッション・ブースト）だろう。私が教えた」
「瞬時加速（イグニッション・ブースト）？」
「一瞬でトップスピードを出し、敵に接近する奇襲攻撃だ。出し所さえ間違えなければ、あいつでも代表候補生と渡り合える」
オルコットの質問に織斑先生が答える。
「俺がオルコットとの試合のとき、オルコットの攻撃を避けたのもそれだ。俺の場合は奇襲よりも回避の技能として使っているがな」
「あれが……」
「しかし、通用するのは一回だけだ」
「そ、そうなのですか！？」
織斑先生の言葉に篠ノ之が目を問う。何も言わないが、オルコットも目を見開いている。
「それはそうだろう。一夏の瞬時加速（イグニッション・ブースト）はあくまで奇襲攻撃。奇襲というのは普通一度しか通用しない」
「成功すれば織斑にも勝機が生まれる。失敗すれば、おそらくそのまま負けるだろう」
篠ノ之とオルコットがモニターを凝視したとき、ついに一夏が瞬時加速（イグニッション・ブースト）を発動させた。一夏と凰の距離が一気に零になる。そのまま零落白夜を発動させた《雪片弐型》が凰を切り裂く。

その直前、大きな衝撃がアリーナを襲った。

第十八話　灰色の襲撃者（前書き）

第十八話です

第十八話　灰色の襲撃者

「システム破損！　何かがアリーナの遮断シールドを貫通してきたみたいです！」

山田先生の言葉を聞きながらモニターを見ると、ステージ中央からは黙々と煙が上がっている。どうやら今さっきの衝撃はその『何か』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたことによるものらしい。

アリーナの遮断シールドを何かが貫通してきた。

言葉だけだとそんな大したことではないように聞こえるが、これは結構まずい。

アリーナの遮断シールドはＩＳと同じもので出来ている。通常の兵器なら傷をつけることすらできないそれを貫通するだけの威力を持った『何か』が入ってきた。その事実は俺たちに不安を募らせるのには充分すぎるものだった。

煙がはれ、『何か』の姿がモニターにはっきり映る。そこに映っていたのは異常としか言いようのないＩＳだった。

深い灰色で手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。しかも肩と頭が一体化しているような形をしている。

何より特異なのが、その『全身装甲（フルスキン）』。その巨体も2メートルを超え、全身にスラスター、頭部にはむき出しのセンサーレンズ、腕には先ほどのビーム砲台が左右合計四つある。

「織斑くん！　凰さん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生達がＩＳで制圧に行きます」

山田先生が一夏と凰に通信を入れる。しかし、返ってきたのは先生の意に反したものだった。

『――いや、先生達が来るまで俺たちで食い止めます。いいな、鈴』

『だ、誰に言ってんのよ。そ、それより離しなさいってば！　動けないじゃない！』

『ああ、悪い』
「織斑くん!?　だ、ダメですよ！　生徒さんにもしものことがあったら――」
　山田先生の言葉をさえぎるように、通信が切られる。モニターを見ると一夏と凰が全身装甲（フルスキン）に向けて飛び出していった。
「もしもし!?　織斑くん聞いてます!?　凰さんも！　聞いてますー!?」
「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」
「お、お、織斑先生！　何をのんきなことを言ってるんですか!?」
「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」
「……あの、先生。それ塩ですけど……」
「……」
　ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、織斑先生は白い粒子を容器に戻す。
「なぜ塩があるんだ」
「さ、さあ……？　あっ！　やっぱり弟さんのことが心配なんですね!?　だからそんなミスを――」
「……」
　イヤな沈黙。山田先生は話を逸らそうと試みる。なんだか無駄な抵抗な気もするが。
「あ、あのですね――」
「山田先生、コーヒーをどうぞ」
「へ？　あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」
「どうぞ」
「い、いただきます……」
「熱いので一気に飲むといい」
　悪魔がいた。
「先生！　わたくしにＩＳ使用許可を！　すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、遮断シールドがレベル４に設定。扉がすべてロックされている」
「そ、それって――あのＩＳの仕業ですの！？」
「そのようだ。しかし、三年の精鋭がシステムクラックにを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」
淡々と述べる織斑先生。なんとかオルコットも食い下がろうとする。
「で、でしたら！　その部隊にわたくしも――」
「お前は突入隊に入れないからな」
「な、なんですって！？」
「お前のＩＳの武装は一対多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」
「そんなことはありませんわ！　このわたくしが邪魔だなどと――」
「では連携訓練はしたか？　その時のお前の役割は？　《ブルー・ティアーズ》をどういう風に使う？　味方の構成は？　敵はどのレベルを想定してある？　連続稼働時間――」
「わ、わかりました！　もう結構です！」
「ふん。わかればいい」
たたみかけるような織斑先生の言葉にさすがのオルコットも降参する。止めなければ一時間――いや、それ以上続きそうだ。
俺はそんな光景を見たあと、ピットの出入り口に向かう。
「待て、須藤。どこへ行くつもりだ？」
「一夏たちを助けに行きます」
「駄目だ。三年の精鋭がすでに動いているといっただろう。お前の出番はない」
「部隊に入れてもらわなくても構いません。俺は一人で行きますから」
それだけ言ってピットの外に出る。システムクラックを待っている暇はない。俺は俺の力で一夏たちを助けに行く。
とりあえず近くにあるアリーナに続く扉に向かう俺の後ろからピットの扉が開く音がした。振り返ると俺と正反対のほうに走ってい

く篠ノ之の姿が見える。あいつも何かするつもりだろうか？

アリーナ・ステージに続く扉に到着。ここさえ抜けられれば、すぐ一夏たちの救援に迎えるが、あけようとしても扉は微動だにしない。やはりあの黒いＩＳの仕業か。狙いはおそらく一夏と白式だろう。

灰色のＩＳ。学園のシステムをハックしたことから見ると、高度なハッキング能力を持っている。それだけならただハッキング能力に特化したＩＳだと思えるが、だとしたらアリーナの遮断シールドを貫通するほどのビーム砲台があるのは不自然な気がする。

まずＩＳなのかもあやしい。全身装甲（フルスキン）に全身スラスターと既存のＩＳの概念を無視した機体。そんなＩＳが開発されているなんて聞いたことが無い。

「とりあえず、この扉を開けないと始まらないか」

三年生がシステムクラックを実行しているらしいが、いつ成功するのかはわからない以上、自分の力だけでなんとかしなければいけない。

神王を展開。同時に《アヴァロン》を発射形態？で展開し、扉に向かって発射する。レーザーは扉に直撃し爆発起こるが、さすがはＩＳ学園と言ったところか、扉には微かに傷がついただけだった。これでは扉を破壊するのにはかなりの時間がかかるだろう。

だが、今はこんなことに時間をかけるわけにはいかない。

「上等だ。一つでダメなら二つ用意してやろうじゃないか」

焦るな。迅速に、かつ着実に。最短時間でこの扉をぶち破る方法。それには少しの時間とかなりの集中力が必要だ。

「《アトランティス》展開。これより、『アルカディア』を開始する」

第十九話　全身装甲との戦闘（前書き）

第十九話です

第十九話　全身装甲との戦闘

「くっ……！」

四度目の特攻。しかし俺の斬撃はするりとかわされてしまう。

「一夏っ、馬鹿！　ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

敵ＩＳは全身につけたスラスターの出力が尋常ではなく、鈴がどれほど注意を引いても俺の突撃には必ず反応して一瞬で回避する。

シールドエネルギー残量が６０を切っていた。零落白夜を出せるのはよくてあと一回。

敵は攻撃を受けた後、でたらめに長い腕を振り回して接近、反撃をしてくる。しかも、その高速回転状態からビーム砲撃までやるのだから手に負えない。

「ああもうっ、めんどくさいわねコイツ！」

鈴が衝撃砲を展開、砲撃を行う。――がしかし、敵の腕はその見えない衝撃をたたき落とす。これでもう七度目だ。

「くそっ、なんてやつだよ。後ろにも目があるんじゃないか？」

「ＩＳならハイパーセンサーで後ろも見えるわよ」

「それはそうだが、異常すぎるだろ」

ＩＳならやってもおかしくないが、乗ってるのは人間だ。感覚的に後ろを見るなんてことが簡単にできるとは思えない。

そんなことを考えていたら、不意にオープンチャンネルから声が聞こえてきた。

『……九〇パーセント充填完了。スラスターの出力……九五パーセントで固定。発射準備完了……』

「……鈴。今何か聞こえなかったか？」

「うん、聞こえたわ。オープンチャンネルからよね。学園の先生とも思えないし……まさか、あのＩＳが――」

鈴の言葉を遮るように、爆発音が鳴り響き、アリーナの扉の一つ

が吹き飛んだ。
　視線をそちらに向けると、煙の中から紫色のＩＳが姿を現した。
「少し時間がかかったけど、まあいいか。……一夏、助太刀に来たぞ」
「まさか……明宏！？」
　そう、そこにいたのは紫のＩＳ――神王をまとった明宏だった。

「一夏、ずいぶんと苦戦してるみたいだな」
「あ、明宏、お前どうやってここまで……？」
「見えなかったか？　アリーナの扉を吹き飛ばして来た」
　思った以上に手間取ったが、結果オーライってとこだな。
「吹き飛ばすって……アンタ、涼しい顔して無茶苦茶するわね」
「まあ、人は見かけによらないってことだな」
「で、戦況はどうなってるんだ？」
「あたしがどれだけ注意を引いても、一夏の攻撃はギリギリのところで回避されるわ。しかも、コマみたいに回って反撃してくるし、回ったままビームも出すんだからタチが悪い」
　遮断シールドを貫通するビームを撒き散らす、か。こっちを狙って撃つのならある程度回避できるが、そうなると法則性が無いから避けづらいな。
「二人のシールドエネルギーはどれくらい残ってる？」
「あたしは１５０くらいね。離れて砲撃してたから、あまりダメージも食らってないわ」
「俺は６０もない。『零落白夜』もあと一回できるかどうかってとこだ」
「わかった。じゃあ、一夏はここで待機。決定的なチャンスが来るまで攻撃はするな。凰は離れた距離から隙を見て《龍咆》で砲撃を頼む」
「おう」
「ちょっと待ってよ！　なんでアンタが仕切ってるのよ！」

俺の提案を一夏は了承してくれたが、凰は気に入らないようで反論される。
「この中でシールドエネルギーが一番残っているのは俺だ。なら俺が前衛をしたほうがいい。一夏はほとんど残ってないから待機。ある程度残っているお前は遊撃。間違ってるか？」
「ま、間違ってはいないけどさ……」
「なんだ？　中国の代表候補生は遊撃もできないのか？」
「言ったわね！？　あたしが遊撃もできないと思ってるの！？」
「じゃあ、決まりだ。頼りにしてるぞ、中国の代表候補生さん」
それだけ言って一気に全身装甲（フルスキン）に突撃する。同時に《デュランダル》を展開。相手に斬りかかるが、全身のスラスターで回避される。
「確かに早いな。でもな！」
多方向への移動なら俺も負けない。多方向加速推進翼を使った瞬時加速で全身装甲（フルスキン）を追撃。だが、今度は体を回転させその長い腕で弾く。しかもそのまま回転は速くなり――回転したまま、ビームを乱射した。そのビームのいくつかは神王の正面を捉える。
「明宏！」
一夏の叫び声が聞こえる。大丈夫だ、問題ない。
直後に俺を襲う爆熱。しかし爆熱は一気に弱くなり、数秒で消えた。
「ふう、確かに少し面倒くさい。知らなかったら、くらってたかもな」
俺が間一髪のところで左腕に展開した物理シールド《イージス》。その《イージス》でビームを吸収した。
ビームを撃ち終え、回転が止まった全身装甲（フルスキン）にそのままデュランダルで思い切り斬撃をくらわせる。直後、凰の《龍咆》による砲撃がに追い撃ちをかける。
「この《イージス》に対してはエネルギー系の攻撃は意味を成さない」
《イージス》はエネルギー系のものに触れるとそのエネルギーを

吸収、貯蓄することができる。あまりにも強すぎるものや貯蓄できない状態のときは吸収できないが、乱射のときは数は多いものの一つ一つの威力は吸収できるレベルだった。

「さてと、こっちもいかせてもらうぞ」

デュランダルによる攻撃。デュランダルはその重さゆえに細かい攻撃はできないが、重さを利用し体を回転させつつ、攻撃を繰り返す。

全身装甲（フルスキン）も負けじと長い両腕で打撃攻撃やビーム攻撃を繰り出してくるが、デュランダルとイージスで防御、推進翼による回避で切り抜ける。

そこに凰による支援砲撃も加わったため、流石にこたえたのか全身装甲（フルスキン）は全身のスラスターで離脱、距離を取った。

こちらもひとまず一夏たちと合流する。

「確かに強いな。でも何か違和感を感じる」

「違和感？　あいつは違和感の塊でしょうが」

「まあ、そうなんだがな。なにか攻撃のときの動きが変なんだよ」

オルコットとの試合のときとも、一夏との模擬戦闘のときとも何かが違う。それが何か考えていると隣にいた一夏が口を開いた。

「……なあ、二人とも。あいつの動きって何かに似てないか？」

「何かって何よ？」

「いや、なんつーか……機械じみてないか？」

「ＩＳは機械よ」

「そう言うんじゃなくてだな。えーと、あれって本当に人が乗ってるのか？」

「は？　人が乗らなきゃＩＳは動かな――」

とそこまで言って凰の言葉が止まる。

「――そういえばアレ、さっきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような……」

思い返すように凰が今までの戦闘を振り返る。その顔はいつにな

く真剣だ。
　そういえば、攻撃をしてくるタイミングや位置もほとんどワンパターンだった。一夏の考えにも頷ける。
「確かに、一夏の言う通りかもしれない。あいつの攻撃はいつも正確だった。正確すぎるほどにな。無人機ならあの全身装甲（フルスキン）も、異様な回避性能も納得がいくしな」
「でも無人機なんてありえないわよ。ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」
確かにそうだが、そう考えれば全ての違和感は解消される。
「仮に、仮にだ。無人機だったら、容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」
「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」
「次は当てる」
「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対ありえないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょうか」
　一夏に一策あると知ってか、鈴はにやりと不敵に笑った。
「一夏」
「ん？」
「どうしたらいい？」
「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」
「？　いいけど、当たらないわよ？」
「いいんだよ、当たらなくても」
「で、俺はどうすればいいんだ？」
「アイツの注意をそらしてくれ。一瞬だけでもいい」
「了解。じゃ、行ってくる」
　一夏の作戦を信じ、さっきと同じように全身装甲（フルスキン）に突撃、攻撃を開始する。
　ただし、さっきよりも攻撃に集中する。相手の攻撃も難解か当たるが構わない。俺は全力でこいつの注意を俺に向けさせる！

金属同士がぶつかる音が絶え間なく鳴り響く。相手の装甲も所々壊れかけているが、俺のシールドエネルギーも減っていく。一瞬の隙が命取りになるこの均衡、全ては一夏の作戦のためのこの均衡をなんとしても崩させない。

「一夏ぁっ！」

そんな均衡の中、真後ろからいきなりアリーナのスピーカーから大声が響く。その声は篠ノ之のものだった。

その声に意識を向けてしまった一瞬にも満たない隙をつかれ、俺は全身装甲（フルスキン）の長い腕に殴り飛ばされてしまった。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする！」

「……」

――まずいな。全身装甲（フルスキン）は今の館内放送、その発信者に興味を持ったようだった。俺からセンサーをそらし、じっと篠ノ之の方を見ている。数秒間箒を見つめた後、黒いＩＳはその長い腕を篠ノ之のほうに向ける。

全身装甲（フルスキン）の標準を逸らそうにも、距離が少し離れすぎている。おそらくギリギリで間に合わない。それなら逸らすのではなく、防ぐしかない。

急いで篠ノ之に向かって六連続瞬時加速を発動。幸い、篠ノ之の方に殴り飛ばされたおかげで早くたどり着く。

そんな俺を見た瞬間、一夏は鈴の衝撃砲、その射線上に躍り出る。

「鈴、やれ！」

「ちょっ、ちょっと馬鹿！　何してんのよ！　どきなさいよ」

「いいから撃て！」

「ああもうっ……！　どうなったって知らないわよ！」

高エネルギー反応を背中に受け、一夏は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を作動させる。

瞬時加速（イグニッション・ブースト）は後部スラスター翼からエネルギーを放出。それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。

それはつまり、外部からのエネルギーでもいいということ。そし

て、瞬時加速（イグニッション・ブースト）の速度は使用するエネルギー量に比例する。
が、一夏が突撃する瞬間、敵ＩＳはこちらに向けてビーム砲撃を発射する。遮断シールドはあるが、それをあのビームは貫通する。あんなものを生身でくらったひとたまりもない。
「《イージス》内のエネルギーを全て神王に転送！　神王、絶対防御の範囲を半径三メートルに拡大、及び最大展開！」
《イージス》のエネルギーを神王に移して空にし、ビームをできる限り吸収可能にする。同時に絶対防御の範囲を広げ、後ろにいる篠ノ之に被害が及ばないようにする。
だが、さっきの乱射の時はなんとか防げたが、一つに集中されたあのビームを防げるかどうかはわからない……！
「行け！　一夏！」
俺の声に答えるように瞬時加速（イグニッション・ブースト）と零落白夜を発動させ、一夏が全身装甲（フルスキン）に突進する。
直後、ビームが俺を襲う。ここが正念場だ！
「「――おおおっ！！」」
ビームはイージスに吸収されてもまだ消えず、消えなかったビームを更に絶対防御が発動し、俺の体を守る。しかしその絶対防御をも貫通した分が俺の体を焼く。
ビームが消え去り、痛む体に鞭を打って後ろを見ると、無傷の篠ノ之が立っていた。
「す、須藤……？」
なんとか守りきれたみたいだな。安堵しながら前に向き直ろうとするが、いきなり浮遊感が消え、俺の体は地面に向かって落ちていく。おそらく神王のシールドエネルギーが０になったんだろうな。
そんなことを考えて落ちながら、俺は確かに見た。
必殺の一撃が全身装甲（フルスキン）の右腕を切り落としているのを。
しかし、その反撃で一夏は左拳をモロに受ける。さらに全身装甲（フルスキン）

は長い腕を一夏に向け、ビームを発射しようとする。
「「一夏っ！」」
篠ノ之と凰の叫びが聞こえた。
「……狙いは？」
『完璧ですわ！』
刹那、客席から《ブルー・ティアーズ》の四機同時狙撃が敵ＩＳを打ち抜く。
全身装甲（フルスキン）は地上に落下する。シールドバリアーがない状態で《ブルー・ティアーズ》のレーザー狙撃を一斉に浴びれば、ひとたまりもない。
一夏はここまで計算してたってことか。案外策士だな……あいつ。
……あれ？　なんか意識が……朦朧と……。
意識が落ちていく中、金属同士がぶつかる音が聞こえた気がした。

第二十話　事件後、保健室にて（前書き）

第二十話です

第二十話　事件後、保健室にて

「……ん？　ここは……ああ、あの世か」
「ここは保健室だ、馬鹿者」
目が覚めると同時に呟いた疑問は近くにいた誰かによって即答された。確かにこの消毒の独特のにおいは保健室で間違いないようだ。
「あれ？　織斑先生？」
誰かというか、織斑先生が立っていた。俺は保健室のベッドに寝させられていたみたいだ。織斑先生を挟んで隣のベッドには一夏が寝かせられている。
「一夏は大丈夫なんですか？」
「はあ……。他人よりもまず自分のことを心配しろ、馬鹿者。まあ、大丈夫だ。気を失っているだけで、お前と同じようにすぐ目を覚ますだろうさ」
「そうですか……」
「お前は体の至るところに火傷。それに右半身に打撲だ。火傷はたいしたことないが、結構高いところか落ちたのだろう？　打撲――特に重症の右腕は完治するのは時間がかかる。早くても二ヶ月はかかるだろうな」
「まあ、そうでしょうね」
確かに体の所々が痛む。しかも右半身は体を動かす度に鈍い痛みがする。
「そういえば、一つ聞きたいことがあるんですが……」
「何だ？」
「あの全身装甲（フルスキン）についてです」
俺の言葉を聞いた瞬間、織斑先生の表情が少し変わる。
「……機密事項だ」
「俺は被害者ですよ？　知る権利はあると思いますが」
「駄目だ」

即答された。被害者である俺にすら説明されないということは、よほど重要な機密事項なのだろう。ある程度予想できた対応だ。

「あれは無人機。それに俺の予想だと現在存在が確認されている４６７個のコア、そのいずれも使用されていない。違いますか？」

「……なぜそう思った？」

「あれが無人機だというのは戦ったときの感触と、一夏に右腕を切り落とされながらも躊躇いもなく一夏に反撃したことで想像できました。コアの方は機密事項ということで何となく」

あんな襲撃を起こしたＩＳのことだ。どこの国のコアかわかったら普通は機密にせず、公開するだろう。相手がどんな国だろうと、ここはＩＳ学園なのだから。

だというのに、機密扱いにするのはコアに何かしらの問題があったからだろう。確信はなかったが、織斑先生の反応からすると間違っていなかったのかもしれない。

「……しょうがない。これは口外するなよ」

「了解しました」

俺の返事を聞いたあと、織斑先生は少しだけ間を置いて説明してくれた。

「結果から言うとあのＩＳは無人機――そして登録されていないコアが使用されていた。お前の想像通りだ」

「そうですか……」

世界各国に配備されている４６７個のコア。そのどれでもないコアが使用されていた。これは何か――

「――何か嫌な予感がしますね」

「お前もか……」

「織斑先生もですか？」

ああ、とため息混じりに頷く織斑先生を見てこの予感がただの予感でないと思わされる。あの織斑先生がそう言うのだ。何か起きてもおかしくはない。っていうか何か起きても普通な気がする。

「う……？」

「気が付いたか」
そんなことを考えていると、一夏も目を覚ましたみたいだ。織斑先生がシャッとカーテンを引く。
「体に致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ慣れろ」
「はぁ……」
「衝撃砲の最大出力を背中から受けたんだぞ。しかもお前、ＩＳの絶対防御をカットしたな？　よく死ななかったものだ」
織斑先生の説教を、一夏はまだぼーっとするようで、あんまり聞いてない。
「まあ、何にせよ無事でよかった。家族に死なれては目覚めが悪い」
そう告げる織斑先生の表情は、いつもよりずっと柔らかかった。
「千冬姉」
「うん？　なんだ？」
「いや、その……心配かけて、ごめん」
「心配などしていないさ。お前はそう簡単に死なない。なにせ、私の弟だからな」
変な信頼の置かれ方されてるな。まあ、この人の照れ隠しの一つなのかもしれないが。
「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。二人とも、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」
それだけ言い残すと、すたすたと保健室を出て行った。仕事に真面目な人だな。
「織斑先生ってやっぱりお前の姉さんなんだな」
「ああ、世界で最高の姉さんだよ」
「あー、ゴホンゴホン！」
織斑先生と入り違いに篠ノ之が保健室に入ってきた。
「よう箒」
「う、うむ……須藤も一緒か……」
後ろのほうは一夏に聞こえてなかったみたいだが、俺には聞こえ

た。すまなかったな。
「席外すか？」
「い、いや別にいい。お前にも言いたいことがあったからな」
「言いたいこと？」
何のことだろうか。俺は特に何もしていない気がするんだが。
「た、助けてくれたこと、感謝する。それとすまなかった」
「助けた？　ああ、あのときか」
敵のビームを俺が防いだことを言っているようだ。あんなことで感謝されるとは思わなかったな。
「まあ、別に感謝されたくてやったわけじゃないし、気にするな。怪我だってお前のせいじゃない」
「だが――」
「気にするなって。俺が勝手にやったことだ」
俺としてはあんなことで礼を言われると逆に落ち着かないので、そろそろ終わらせてほしいのだが。
「……私はお前が羨ましい」
「は？」
今篠ノ之は何て言ったんだ？　羨ましい？
「お前は強い。その強さが羨ましい」
「『強い』か。この前オルコットにも言われたが、俺は強くないんだよ。羨ましがられるような強さは持っていない」
「いや、お前は十分強い。現にセシリアに勝ったではないか」
「あれは相手が代表候補生だからこその結果だ。国家代表が相手だったら勝てる保証はない」
国家代表の実力は代表候補生の比じゃない。代表候補生に勝てるぐらいで満足しているぐらいではダメだ。
「それより一夏に用があって来たんだろ？　俺のことよりもまずそっちの話を……」
「そ、そうだったな」
そう言って篠ノ之は俺から目線をはずし、一夏のほうに体を向け

る。
「あ、あのだなっ。今日の戦いだがっ」
「ああ」
「お、お前は何を考えているんだ！」
「へっ？」
いきなり怒った。まあ、意中の相手があんなことしたら心配するし、怒るな。
「勝てたからいいようなものの……あのような事故、先生方に任せておけばいいだろう！過剰な自身は身を滅ぼすという言葉を知らんのか！？」
「あ、勝ったのか俺」
「あんなものは勝ったとは言わん！」
どっちだよ。
「もしかして、心配してくれたのか？」
「し、していない！　誰がお前の心配などするものか！」
そこは心配しろよ、幼なじみ。意識失っていたのに心配されなかったなんて一夏がかわいそう過ぎる。
「と、とにかくだ！　これで訓練のありがたみもわかっただろう。これからも続けていくぞ。いいな？」
「あー、わかったわかった」
「わかればいい。……では、私は先に部屋に戻る」
待ってあげないのかよ。
「一夏。その、だな。戦っているお前は……か、かか、かっ」
よし、そのまま言ってしまえ。
「格好良か……な、なんでもない！」
あーあ、惜しいな、もう少しだったのに。
「で、ではな！」
そう言って篠ノ之は保健室から出て行った。
「なんだったんだ？　一体？」
「まあ、気にしないほうが良いんじゃないか？　それにしても全身

打撲とは大変だな」
「そっちはどうなんだよ？」
「全身の至る所に火傷、それに右半身が打撲だってさ。火傷はたいしたこと無いけど、打撲の方は治るのに時間がかかるらしい」
「おいおい、俺よりも重症じゃないか」
「まあ、致命傷じゃないだけマシだろ。当分の間右手で飯が食えないのは辛いがな」
箸を使う日本食はできるだけ控えたほうがいいかもな。ラーメンとかの中華も却下。となると洋風のものぐらいしか食えない。和洋中のうち二つが一気に食べられなくなってしまった。スプーンで食ってもいいんだが、一応日本人として日本食を箸で食べないわけにはいかない。
「ここの学食はメニューが豊富だからパンとかだけでも色々食えるけど、日本食もたまには食いたいよなあ」
「俺は日本食をよく食ってるけど、パンも美味そうだよな」
「でも、パンって減らしてもらえないよな。食いきれるか不安なんだが」
「じゃあ、残った分は俺が食ってやるよ」
「頼むぞ」
そんな雑談――俺にとっては結構重要なことだが――を話していると、急に一夏が大きな欠伸をした。
「おう。ん……。急に眠気が……」
「なら、我慢せず寝ろ。俺も先に帰らせてもらうぞ。おやすみ、一夏」
返事がなかったので、もう眠ってしまったのだろう。起こしても悪いし、静かに退散させていただくとするか。ってか、体が痛い。寝てたときはあんまり痛まなかったけど、起きると地味に――いや結構痛い。部屋に鎮痛剤あったけか？

第二十話　事件後、保健室にて（後書き）

一応、これで原作一巻の内容は終わりました

第二十一話　わかり合えるということ（前書き）

第二十一話です

第二十一話　わかり合えるということ

「せいっ！」

剣道場に掛け声が響く。それとともに防具をつけた相手が竹刀で切りかかってくる。その太刀筋、歩法ともにかなりのレベル。そこらの一般人なら避けることはできないであろうその一太刀を俺は体をひねってかわす。

普通の剣道の型をまるで無視したその動きに、相手は一瞬動揺する。その隙を突いてひねった体を利用しての攻撃。決まったかと思ったが、ギリギリのところで相手の竹刀で防がれる。正確にはわからないが、たぶん三十分はこうして試合は続いている気がする。俺はまだ平然としているが、相手は呼吸が荒くなっているのがわかる。

一度距離をとった直後、相手の怒涛の攻撃が襲ってきた。おそらくこれ以上長引かせると体力差で負けることに気づいたゆえの特攻。

相手の連撃を避ける、防ぐ、受け流す。ここで押し切られれば俺の負け。押さえきれば俺の勝ち。俺の集中力と相手の体力。どちらが先に尽きるか。勝負の行方はそれにかかっていた。

数分後、試合は終わった。結果は俺の勝ち。だが、俺の集中力が切れる寸前に相手の体力が尽きたのが勝因だったから、勝ったという感じはあまりしない。

「ふう……」

相手が面を外す。面の下から現れたのは髪をポニーテールで結んだ凛々しい少女の顔。侍を思わせる鋭い雰囲気を持ったその少女がこちらに歩み寄ってくる。

「強いな、お前は」

「結構ギリギリだったけどな」

「お疲れ～」
ポニーテールの少女と話をしていると、いきなり長髪の少女に声をかけられる。その手にはタオルが二枚握られていた。
「凄い試合だったよ、二人とも。さすがだね」
「お前だってできるだろ」
タオルを受け取りながら長髪の少女の言葉に言い返す。少女は微笑んで、そうかもねー、と言う。
「……私は、お前たちがうらやましい」
不意にポニーテールの少女が呟いた。俺と長髪の少女はいきなりの言葉にびっくりしてしまう。
「私は姉とそこまで仲がよくない。だからお前たちの様子を見ていると、とても……うらやましく思える」
「お姉さんのこと嫌いなの？」
「嫌いではないが……あの人は私とはまったく違う人なんだ。だから、何を考えているのかわからなくて少し……怖い」
そう言う彼女の顔は少し寂しそうだった。そんな顔を見たら何か言いたくなってしまった。
「……わかることが良いことだとは限らない」
「え？」
「例えば、お互いに何でもわかり合える二人がいるとする」
そう言いながら、長髪の少女に視線を向けると、彼女は微笑んでくれた。俺が今から何を話すのか。それをわかってなお、微笑んでくれた。
「何でもわかり合える存在がいるのはとても心強い。でも、自分の醜い所も知られてしまう。そう考えると、わかり合えることが良いこととは限らないんじゃないか？」
「……」
「わかり合えなくてもいい。大事なのはわかり合えることではなくて、相手の全てを包み込んでやれることじゃないかと俺は思う」
「私たちもお互いの醜い所とか知ってるよ？　それでも一緒にいる

のは、それはお互いがその醜い所を認め合って、許し合っているからだよ」

「……そう、だな……」

俺たちの言葉を聞いて、ポニーテールの少女の顔が少し明るくなっていく。全部は無理だったが、彼女の寂しさを少しはなくしてあげれたようだ。

「……やはり、お前たちのことがうらやましい。そんな考え方ができる二人が。私にもそんな相手ができるだろうか……」

「できるよ、きっと！」

長髪の少女が元気よく断言する。それを聞いてポニーテールの少女も笑顔になった。そんな二人を横から眺め、ポニーテールの少女の元気が戻ったことに安心する。

安心しながら、目をつぶって深く息を吸う。

息を吐きながら目を開けると――そこには見慣れた天井が広がっていた。

「……またか……？」

時計の針は二時半過ぎを示している。周りも静かで、真夜中であることを確信させられる

体からは異様な量の汗。悪夢を見たとき特有の不快感のなさ。まったく思い出せない夢の内容。

一致している。半月ほど前のあの日と、全てが一致している。ただの偶然には思えない。一体なんなんだ？

そして、また頭に浮かんで離れない一つの言葉。

『私はお前たちがうらやましい』

この言葉だけは以前と違うが、やはり以前と同じく頭から離れない。夢の内容すら覚えていなくてもこの言葉だけは思い出せてしま

う。

うらやましい？　この俺が？　本当の自分が何者なのかも知らず、自分自身をも疑っている俺のことがうらやましい？

「俺は空白（からっぽ）なんだ。そんな俺がうらやましいはずがないだろう……」

そんなつぶやきは、真夜中の静けさに溶けて消えていった。

第二十二話　須藤明宏の家（前書き）

第二十二話です

原作7巻の内容も少し混ざっていますので注意してください

第二十二話　須藤明宏の家

「あー、眠い。すごく眠い。めちゃくちゃ眠い」
昨日の事件で疲れた上に怪我までしたのに、午前二時半に起きて以降まったく寝付けなかったからかなり眠い。俺の体は俺のことを衰弱死させるつもりだろうか。
幸い、昨日の事件でＩＳ学園は三日間の臨時休校。おそらくアリーナのメンテナンスや全身装甲（フルスキン）について色々やっているのだろう。まあ、そのおかげで惰眠を貪ることができるのだが、俺には行きたいところがある。
「というわけで外出許可をください」
「何が『というわけで』だ」
「というわけです」
職員室にいた織斑先生に外出許可をもらえるように頼む。近場へ出かけるときは別に外出許可をとる必要はないが、遠出の場合は必要になる。
「どこに行くつもりだ。それによって考えてやる」
「俺の家に帰ります」
「『家』か」
「はい。俺が須藤明宏である限り、あそこが俺の家です」
「……いいだろう。許可する」
何があろうとあそこが須藤明宏の家だ。そんな気持ちが通じたのか、織斑先生は外出許可を出してくれた。
「あと往復だけでも時間がかかるので外泊許可もいただけますか」
そうでなければ神王を使うことになります。
言外にそんなことを含めて織斑先生に頼む。
「しょうがない。外泊許可も出してやる」
「ありがとうございます」
織斑先生もそれに気づいたのか、ため息をついてこころよく許可

してくれた。神王を使えば、俺としても織斑先生としても面倒なことになりかねないので当たり前と言えば当たり前の対応か。
「ただし面倒ごとを起こすなよ。処理が大変だ。それと周りに気をつけろ」
――あいつの居場所がばれれば面倒なことになりかねん。
先生の鋭い視線にそんな言葉が含まれていたのは気のせいじゃないはずだ。
「大丈夫ですよ。誰が好き好んでよそ者を大事な家に連れて行かなくちゃいけないんですか」
「ならいい」
ともあれ、外出許可と外泊許可をもらえたのでとっとと出発するとしよう。

暗い室内。ただ、ディスプレイの光がそこに誰かがいることを教えてくれた。
「ただいま帰りました」
「あー、アキくんだ！　おかえり♪」
「暗い所でそんなことやったら目が悪くなりますよ」
「大丈夫大丈夫」
まったく、何で帰宅して二言目でこんなこと言わなくちゃいけないんだろう。少しは普通の生活をしてほしいのだが……束さんにそんなこと言っても意味ないか。
「おかえりなさい。明宏」
「クーか。ただいま」
声に反応して後ろを振り返ると、そこには少女が立っていた。
年は十二歳くらい。背は低く、とても華奢な体だ。腰まである流れるような銀髪を太い三つ編みにしているのが特徴だ。
「料理のほうはどうだ？　クー」

「明宏のようにうまくはできません」
「じゃあ、また教えてやるから先に行ってて準備しててくれ」
「はい」
時間は昼時。さっきここに帰ってくる前に卵とかを買ってきたのでオムライスとかがいいだろう。
クーが部屋を出て行くのを見計らったように束さんが声をかけてくる。
「こっちにはいつまでいられるの？」
「明後日には学校も再開するので今日中には出発します」
「再開って？」
「一昨日、色々あったんですよ」
――色々と、ね。
「それは大変だったね。怪我はしなかった？」
「全身の至る所に火傷、右半身に打撲。完治には二ヶ月って所ですね」
「お疲れさま。……それよりそろそろくーちゃんの方に行かなくていいの？」
「あ、そうですね」
「慕われてるねぇ。さすがはお兄さん♪」
「クーは俺のことを兄だなんて思ってないですよ。せいぜい料理の先生ぐらいにしか思ってませんって、きっと」
そう言いながら部屋を出て、クーの元に向かう。クーに料理を教えるのもだいたい一ヶ月ぶりだから、楽しみ半分不安半分だな。

「束さま。昼食ができました」
「おー、オムライスだ！　おいしいー！」
束さんはクーが目の前においた皿に乗っているオムライスを食べていく。三割近くが黒こげになっているが、束さんはうまいうまい

と言いながらものすごい勢いで食べていく。
「おいしいはずないです。こげてるのに」
「おいしいよ！　本当に」
「大丈夫だって。前よりも上手くできてるし、もっと自信持て」
以前は消し炭やゲルを作ってしまっていたので、それにくらべれば結構な進歩だ。
束さんは消し炭だろうがゲルだろうが嫌な顔一つせず食べる。気持ちがこもっているものは何でも食べられるのかもしれない。束さんのことだからどうかは知らないが。
「ありがとうございます」
クーの表情は変わらず無表情だが、声に少しだけ嬉しさが混ざっていた。普通の人にはわからないだろうけど。
「よかったな、クー。この調子で夕飯も作ろうか。冷蔵庫には何が入ってた？」
「冷蔵庫にはバターや肉、牛乳などが。それと明宏が買ってきた卵や野菜などがあります」
「よし、今日の夕飯はカレーとサラダにしよう。行くか、クー」
「はい」
「がんばれ～！」
束さんの応援に押されて、俺はクーとともに夕飯を作るために部屋をあとにした。

「では、俺はもう行きますね」
「えー、もう行っちゃうの？」
「そろそろ出ないと学校に間に合いませんから」
夕飯を三人で食べたあと、家を出る準備をして二人に挨拶をする。
カレーは野菜に火が通りきっていなかったり、野菜が黒こげになったりしたが普通おいしく食べられるものだった。サラダも野菜の大

きさがバラバラだったがおいしくいただいた。
「束さん、残ったカレーはタッパーに入れて冷蔵庫で保存しておきますので食べたいときはレンジで温めてください。残って野菜で作った野菜炒めもあるのでそれも同様に。クー、残ったチキンライスは今度オムレツを作るときに使ってくれ。あと新しいレシピもいくつか置いておくから使ってくれたら嬉しい」
「は～い！」
「わかりました」
二人から返事が聞けたので安心だ。束さんは大丈夫かわからないが、クーがいるから心配は無用だろう。
「それと束さん。これ貸してもらってもいいんですか？」
俺の手には色々な機械が詰め込まれているバッグ。束さんに渡されたものだ。
「うん、いいよ別に。っていうか貸すんじゃなくてあげるよ、それ」
「……ありがとうございます」
「元気で。明宏」
「ああ、クーも元気にな。束さんを甘やかさないように……ってそれは無理か。まあ、また今度料理教えてやるよ」
そう言って、クーの頭をなでる。銀髪の髪は相変わらずとてもなめらかだ。
「はい」
「では、いってきます」
「いってらっしゃ～い！」
「いってらっしゃい」
二人に見送られながら俺は家をあとにし、ＩＳ学園へと向かった。

第二十二話　須藤明宏の家（後書き）

原作7巻の最後に登場した束曰く『くーちゃん』を出しました

まだ束のことを信仰していることと料理が下手ということしかわかっていないのでこんな感じで書きました

簪もはやく登場させたいけど……どうしたものか

その前に会長を登場させないと順番が狂うんですけどね

第二十三話　過程の話（前書き）

第二十三話です

第二十三話　過程の話

臨時休校三日目。家からＩＳ学園に着いたときの時刻は一時過ぎ。こんなに早く着くとは思わなかったな。これだったら夜まで家でのんびりしてればよかった。

「あれ、明宏」

「一夏か。三日ぶりだな」

織斑先生に外出から戻ったことを連絡し、自室に戻るために廊下を歩いていたら一夏と出くわした。確か最後に会ったのがあの事件の日の保健室だったから、三日ぶりの再開だ。

「お前どこに行ってたんだよ。部屋に行っても留守だったし」

「ああ、ちょっと家に帰ってた。一昨日の朝に出て、ついさっきこっちに着いたんだよ」

「家に泊まってきたのか？」

「いや、離れたところだから泊まる暇なんかなかったよ」

「ふーん、そうか」

一夏と話しながら廊下を歩く。

「というか、何でお前は俺のことを探してたんだ？　部屋を訪ねてきたってことは何か用事があったんじゃないか？」

「用事ってほどのことはなかったけど、暇だったからな。お前の部屋に行ってみたってことだ」

「勉強をしろ。勉強を」

「それ、箒たちにも言われた」

「『たち』って……ああ、篠ノ之とオルコットと凰か」

「大正解」

どうやら一夏のやつは俺が家に帰っている間、女子と過ごしていたようだ。まあ、大方あいつらの方が一夏の部屋に行ったんだろうが。篠ノ之は同じ部屋だけど。

「で、その勉強はやったのか？　お前はただでさえ遅れてるんだか

ら――」
「ちゃんとやったって！　昨日でＩＳの基礎的なところはほとんど覚えたぞ」
「ならいい。もしやってなかったら殴りかかってるところだ」
「おい、それは酷いんじゃないか？」
「勉強もせずに女子と遊んでいるやつは殴られて当然だ」
「遊んでなんかねえよ。第一、遊ぶ道具もないんだぞ」
「……バカか」
一夏の鈍感さに思わず小声で悪態をついてしまう。ただ一夏には聞こえなかったようで、何か言ったか？　と問いかけてくる。まあ、何でもないと答えたが。
「じゃあ、夕飯まで勉強でもするか。俺の部屋でいいよな」
「いいぞ。俺の部屋には箒がいるし」
「なら決まりだな」
そのまま俺の自室に向かう。自室は寮の端にあるから少し遠い。まあ、一人部屋だから気に入ってるけど。
「あ、そういえば前から気になってたんだが、お前の家族ってどんな人なんだ？　お前から家族の話って聞いたことなかったけど」
一夏の何気ない一言。いや、一夏にとっては何気ない一言でも俺にとってそれは、とてつもなく重く感じられた。
「……らない」
「ん？」
「……わからないんだ。俺の家族がどんな人だったのか」
それだけ返す――いや、そう返すのだけで精一杯だった。
わかっていた。自分にそういう類の言葉が禁句なのは。わかっていたはずなのに黒い感情が湧き上がってくるのを押さえられない。
……なんて――
――なんて俺は弱いのだろうか。

「明宏？　どうかしたか？」
俺の様子が変だということに気づいたのか、一夏が心配そうに声をかけてきた。
「……すまん、何でもない」
「ならいいけど。ゴメンな、プライベートなこと訊いて。気に障ったんだろ？」
そういえば、一夏も自分の両親について何も話したことがなかった。もしかして一夏も両親と何かあったのかもしれない。
「……ちょうどいい。そろそろお前には話してもいいか」
「え？」
「教えてやるよ、俺のことを。俺が須藤明宏になった過程の話を」
「どういうことだよ？　お前が須藤明宏になった過程って……」
「話を聞けばわかるさ。ほらとっとと部屋に行くぞ」
「お、おい！　待てよ！」
一夏が慌ててついてくるのを後ろに感じながら、俺は足早に自室へと向かった。

ところ変わって俺の自室。俺は椅子に、一夏はベッドに腰掛けてお互いの方を向き合っていた。
「これから俺のことについて話す。ただ、これだけは守って欲しい。『今から話す内容は他の誰にも話さない』。これだけは守ってくれ」
「別に誰にも話すつもりはないって」
「篠ノ之たちにも言うな。一部だけでも駄目だからな。これは俺が話してもいい、信用するに値すると判断した相手だけに話すことだ。篠ノ之たちが信用に値しないというわけではないが、絶対に話すな。もし話したら……」
「……話したら？」

俺はお前とお前が話した相手を殺してしまうかもしれない。

その瞬間、一夏の表情が強張る。だが俺はそれに構わず話を進める。

「さすがに殺しはしないかもしれない。だが俺にとってこのことは、そこまでして知られたくない内容なんだ」

「……わかった。誰にも言わない」

一夏はそう言って、真剣な眼差しで頷いた。この様子なら話すことはないだろう。

「よし、なら早速話そうか」

一息ついて、俺は話し始める。

「俺は――」

第二十三話　過程の話（後書き）

次回から原作2巻の内容に入りたいと思います

1巻の内容＋αだけで二十話以上使ってしまうとは……

第二十四話　奇妙な光景（前書き）

第二十四話です

第二十四話　奇妙な光景

六月頭。日曜日。俺は午前中に中学校時代の友達と遊んで帰ってきた一夏とともに、今月行われる学年別個人トーナメントなどについて話し合っていた。

先月のクラス対抗戦は例の襲撃で中止され、そのことに関しては箝口令まで敷かれた。特に直接戦闘に関わった、俺と一夏とオルコットと凰は誓約書まで書かされるという始末。

あれがなんだったのか詳しくはわからないが、先生たちのほうで調べているはずなので特に気にすることはないだろう。

「あ、そろそろ夕食食いに行くか？」

「本当だ、もうそんな時間だったんだな」

二人して立ち上がってドアのほうに向かうと、ノックが鳴り響いた。

「一夏、いる？」

「おう」

ドアを一夏が開けると、そこにいたのは凰だった。

「い、いきなり開けないでよ！　びっくりするでしょうが」

小さな声で「須藤も一緒なんだ……」と続けたが、一夏には聞こえなかったみたいだ。というか、先月の篠ノ之のときといい、俺が一夏と一緒のときにタイミングよく来るよな。俺がいけないのだろうか。

「俺たちは今から夕飯に行くんだが、鈴はどういう用があったんだ？」

「ふふん。まさにそうじゃないかと思って誘いに来てあげたのよ」

「そりゃどうも。じゃあ食堂に行こうぜ」

「ええ」

凰が一夏と並んで歩き出す。俺はその半歩斜め後ろのところを歩く。せっかく一夏と二人で夕飯にいけるはずだったのに、俺が邪魔

をしてしまったお詫びだ。
　相変わらずラフな格好をしている女子が多くて困る。俺と一夏の共有する一番大きな悩みだ。
「お。おりむーだ。やっほー」
「ええっ!?　お、織斑くん!?」
　あ、のほほんさんだ。相変わらずだぼだぼで袖の余りすぎた服を着ている。
「私とかなりんと一緒に夕飯しようよ～」
「いいぜ。なあ、鈴も明宏もいいだろ？」
「俺は別にいいそ」
「よくないけど……いいわよ」
　本当は嫌だけど、一夏がいいって言うなら。みたいな感じだなこれは。やはり好きなやつが他の女子と一緒にいるのは嫌なのだろうか。
「ところで、そのかなりんって子はどこかに行っちゃったぞ？」
「おわー。ほんとだーいないー」
　かなりんとやらは、ラフな格好を見られて恥ずかしかったようで、廊下の先へと消えていった。恥ずかしいなら最初からラフな格好で出歩かないでほしい。俺や一夏のためにも。
「あー……待って～」
　そしてのほほんさんも走っていってしまった。うわ、すごく遅い。あれでよくこのＩＳ学園合格できたな。
「一夏さあ、何？　モテてんの？」
「はあ？　どこをどう見てそう思うんだよ。男が珍しいってだけだろ。明宏だって同じだろ」
「ふーん……。ま、いいけどね」
　そう言いながら、凰は早足で食堂を目指す。
「あ、こら。ちょっと待て。行くぞ、明宏」
「う～い」

「ねえ、聞いた？」
「聞いた聞いた！」
「え、何の話？」
「だから、あの織斑君と須藤君の話よ」
「いい話？　悪い話？」
「最上級にいい話」
「聞く！」
「まあまあ落ち着きなさい。いい？　絶対これは女子にしか教えちゃ駄目よ？　女の子だけの話なんだから。実はね、今度の学年別トーナメントで――」
相変わらず、女子で埋め尽くされる食堂は騒がしい。この年頃の女子はこんなに騒ぎたいものだろうか？
「ん？　なんだあそこのテーブル。えらい人だかりだな」
「トランプでもやってんじゃないの？　それか占いとかさ」
「占いねえ。俺はあんまりそういうの信じてないけど。……それにしても今日の盛り上がり方は異常じゃないか？」
「えええっ！？　そ、それ、マジで！？」
「マジでー」
「うそー！　きゃー、どうしよう！」
よほど面白い話でもしているのだろうか、黄色い声が津波のように押し寄せてくる。
そんなことを思いながら、三人で適当な席につき、食事を始める。
「あれ？　須藤って左利きだっけ？　前は右手で食べてたはずだけど」
ふと、ラザニアを食べていた俺に毎度毎度よくも飽きずにラーメンを食べていた凰が質問してきた。
ふと自分の手元を見てみるとラザニアをすくっているスプーンを持っているのは左手。思い返してみると、先月から凰と一緒に飯を

食うときはパンとかしか食ってなかったな。
「いや、俺は右利きだ。先月の事件で右手が使えなくなってな、あれから左手で食うようにしてるんだ」
「確か今月で完治するんだよな」
「ああ、今月までは日本食はお預けだな」
左手じゃ箸はうまく使えないから、と続ける。二ヶ月も日本食が食えないのは味気ないというか、何というか。
「ふーん、そうなんだ。大変ね」
それだけ言うと凰はラーメンのスープをごくごくと飲み始めた。レンゲも使わないというのはなんというか男らしい。女だけど。
「ごちそうさま」
そんなことを考えていたら、スープを飲み干したようだ。ちょうど俺や一夏もそれぞれの食事を食べ終える。
俺はラザニア一つだけ。二人は三品ぐらい食べているというのに、食べ終わったのがほぼ同時というのは、俺が遅いのだろうか、二人が早いのだろうか。
「お茶取ってくる。番茶でいいよね？」
「お、おう。サンキュ」
凰は一夏の返事を聞くと、すたすたとお茶を取りに行った。俺は無視なのか？　別にいいけど。
「あ――っ！　織斑君だ！」
「えっ、うそ！？　どこ！？」
「須藤くんもいる！」
「ねえねえ、あの噂ってほんと――もがっ！」
さっき騒いでいた一団の中で一夏と俺の存在に気づいた女子が雪崩れ込んでくる。ん？　噂って何だ？　聞き返したいけど、すぐに取り押さえられたし。
「噂って？」
「な、なんでもないよ！？」
それだけ言うと、即撤退。この間わずかに二秒。状況がまったく

つかめない。
「なに？　また何かやらかしたの？」
　凰が戻ってきた。その手にはお盆があり、湯飲みが三つ置いてある。俺の分も持ってきてくれたのか。さりげなく優しいな凰は。
「ああ、一夏がまた何かやらかしたようだ」
「いや、さっきの雰囲気からしてお前もだろ」
「やっぱり一夏が何かやらかしたんだ」
「何で俺だけが問題児扱いなんだよ」
「問題児じゃないつもりなの？」
「……ああ、お茶がうまい」
「逃げたわね」
「逃げたな」
「に、逃げてねえよ」
　いや、今のは確実に逃げただろ。
「まあ、どうせまたどこぞの女子を落としたんじゃないか？」
「は？　そんな酷いことするはずないだろ」
「その落とすじゃねえよ」
　どうやらこいつは落とすというのを物理的な意味で捉えたようだ。っていうか、一夏（唐変木）にこういうことを訊いた俺がバカだった。
「そういえば、弾の妹の蘭がＩＳ学園に受験するって。おばさんによろしくって頼まれた」
「……なに、あの子ＩＳ学園に入学するつもりなの？」
「そうらしいな」
「ふうん……」
　その話題になった瞬間、凰の表情が曇りだした。
「一夏、誰だそれ」
「今日俺が遊びに行った友達の妹だよ。五反田蘭っていうんだ」
「そうなのか」
　どうにも凰とその五反田蘭ってやつはそりが合わないようだ。この様子からしてそうなんだろう。それかそいつも一夏に惚れている

か。
「あんたねえ、いい加減女の子と軽々しく約束するのやめなさいよ！」
「ああ、すまん」
「謝るくらいなら約束を――」
「あ」
「あ」
「あってなによ、あって。――あ」
何だこの光景。奇妙すぎる。今日は奇妙なものをいろいろ見たな。さっきの女子の集団然り、今の光景然り。
ちなみに今のは最初が一夏、次がいつの間にかいた篠ノ之、最後が凰だ。
「……」
「よ、よお、箒」
「な、なんだ一夏か」
「……」
「……」
会話終了。何だこいつら。
「何、あんたたち何かあったわけ？」
「「いや！　別に何も！」」
まったく同じタイミングで否定するなんて、思いっきり何かありましたって言ってるようななもんだ。腹を抱えて笑いたいが、そんなことをしたら凰に怒られるのでやめる。
「なにその『明らかに何かありました』って反応。わざとやってんの？」
「そんなわけないだろ……」
篠ノ之はそのまま顔を逸らすと歩いていってしまった。
「じゃ、あたしは部屋に帰るから」
「ん？　おう。誘ってくれてありがとな」
「……たまにはアンタから誘いなさいよ。まったく……」

そうだぞ。お前からも誘ってやれ、一人で。
「うん？」
「なんでもない。じゃあね」
凰もそのまま篠ノ之と反対方向に歩き出す。俺たちもお茶を飲み終わったあと、それぞれの部屋に戻っていった。

第二十五話　突然の転校生（前書き）

第二十五話です

第二十五話　突然の転校生

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」
「え？そう？　ハヅキのってデザインだけって感じしない？」
「そのデザインがいいの！」
「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル」
「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」
月曜の朝。クラス中の女子がわいわいとＩＳスーツのことで談笑していた。
「そういえば織斑くんと須藤くんのＩＳスーツってどこのやつなの？　見たことない型だけど」
「あー。特注品だって、男のスーツがないから。えーと、元はイングリッド社のストレートアームモデルって聞いてる」
よく言えたな、一夏。これも俺が教えた成果か。まあ、一人でも頑張ってたみたいだからそれもあるのか。
「俺のは篠ノ之博士が作ったやつだから、完全オリジナル。あの人なんでもできるみたいだし」
「えー！　須藤くんのはＩＳスーツまで篠ノ之博士が作ったんだ。いいなー」
あんまり変わりないと思うけどな、俺は。
「俺としてはそこまでＩＳスーツにこだわる必要が感じられないんだが。一夏はどうだ？」
「んー、何とも言えないけど、この前セシリアが女はおしゃれの生き物ですからって言ってたし、いいんじゃないか？」
「ＩＳは兵器だぞ。それにおしゃれと言ってもほとんど同じじゃないか？　凰のピンクみたいなのなら違うだろうけど」
あれもたぶん完全オリジナルだよな。ピンクのＩＳスーツなんて凰の以外見たことないし。

「微妙に違うんだろ。性能とかも少し違うんだろうし」
「ＩＳスーツで強さは決まらないだろ。いくらいいＩＳスーツでも操縦者の実力が低ければ意味がない」
「でも、その微妙は違いが重要になるかもしれないだろ？　えっと、確か――」
「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を感知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ＩＳはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来ます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」
　一夏が一瞬言いよどんだ所で、すらすらと説明しながら入ってきたのは山田先生。いつもよりも何か頼もしく見える。
「山ちゃん詳しい！」
「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」
「山ぴー見直した！」
「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。……って、や、山ぴー？」
　入学から大体二ヶ月で山田先生には八つくらいの愛称がついていた。慕われている証拠だ。
「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」
「えー、いいじゃんいいじゃん」
「まーやんは真面目っ子だなぁ」
「ま、まーやんって……」
「あれ？　マヤマヤの方が良かった？　マヤマヤ」
「そ、それもちょっと……」
「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」
「あ、あれはやめてください！」
　珍しく語尾を強くして拒絶の意を示す。何かトラウマでもあるのだろうか？
「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりま

したか？　わかりましたね？」
　返事は来るが、言ってるだけの返事だよなこれ。今後もあだ名が増えていくだろう。そんなことを考えていると我らが担任、織斑先生が入ってきた。
「諸君、おはよう」
「お、おはようございます！」
　織斑先生が来た瞬間、ざわざわとしていた教室が一瞬で礼儀正しくなる。さすがは織斑先生。
「今日からは本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。では山田先生、ＨＲを」
「は、はいっ。ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」
「「「ええええええっ！？」」」
　いきなりの転校生紹介にクラス中がわざめく。まあ、噂大好き十代女子の情報網をかいくぐっていきなり転校生が現れたんだから驚きもするだろう。しかも二人。普通分散させるものじゃないのか？
「失礼します」
「……」
　クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきが止まる。
だって、そのうちの一人が――男子だったんだから。

第二十六話　三人目の男子（前書き）

第二十六話です

第二十六話　三人目の男子

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、デュノアはそう告げて一礼する。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああああ――――っ！」

「男子！　三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生れて良かった～～～！」

元気だね。俺のときよりも反応がかなりいい。第一印象の違いだろうか？　それとも俺たちで男子になれたのだろうか？

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

仕事でと言うよりは本当に織斑先生が鬱陶しそうにぼやく。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

もう一人の軍人をイメージさせる転校生は未だ口を開かず、織斑先生のほうに視線を向けていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

イメージさせるレベルじゃなくて、軍人そのものだよな。織斑先生のことを教官って呼んでるし。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「……」
クラスメイトたちの沈黙。しかしボーデヴィッヒは名前以外何もいわない。
「あ、あの、以上……ですか？」
「以上だ」
いたたまれない空気ってこういうことなんだな。
そんなことを考えていると、ボーデヴィッヒは一夏の前に立ち、
「！　貴様が――」

バシンッ！

「……」
「う？」
いきなり殴った。一切無駄のない平手打ちで。
「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」
「いきなり何しやがる！」
「ふん……」
一夏を無視して開いている席に座り、そのまま腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなる。
「あー……ゴホンゴホン！　ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」
ＨＲが終了。これは急いでクラスから移動しないと女子と着替えるはめになる。確か今日は第二アリーナ更衣室が空いてるはずだ。
「おい織斑、須藤。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」
あ、やっぱりそうなるよな。
「初めまして。僕は――」
「ああ、いいから。とにかく移動が必要だ。女子が着替え始めるから」

「今日は第二アリーナ更衣室が開いているはずだ。行くぞ」
説明すると同時に行動開始。一夏がデュノアの手を取るとそのまま教室を出る。
「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」
「う、うん……」
まずは階段を下って一階へ。
「これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」
「須藤明宏だ。明宏でいい」
「うん。よろしく一夏、明宏。僕のこともシャルルでいいよ」
「わかった、シャルル」
「じゃあ、いくぞ一夏、シャルル」
自己紹介しながらも速度を落とすわけにはいかない。なぜなら――
「ああっ！　転校生発見！」
「しかも織斑くんたちと一緒！」
早速来やがった。早速各学年各クラスから女子が駆け出してくる。
「くそっ、予想より人数が多い！」
「急ぐぞ！　二人とも。遅れたら千冬姉の特別カリキュラムだ！」
「それは勘弁！」
あれは四月の頭辺りにやらされたが、死ねる。あれはカリキュラムという名の拷問だ。あんなの二度とやりたくはない。
「織斑君の黒髪や須藤くんの藍色の髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」
「しかも瞳は綺麗な紫色！」
「って、何で前にも女子がいるんだよ！」
あれ？　俺たちが一番最初に出てきたはずなのに、何故だ？　回り込まれたとでもいうのか。
「ちっ、一夏。アレでいくぞ。シャルルを頼む」
「ああ。シャルルしっかりついていてくれ」
「？　う、うん」

本当はもう使いたくなかったんだよなあ、アレ。でも、そんなこと言っている余裕はない。

まず、俺が一夏の先に走り女子に突撃する。思わぬ突撃に一瞬女子が驚いたところを左へ折れて、反射的に女子の目が俺のほうに向く。

「行け！　一夏！」

そこで俺に女子の視線が集まったところを一夏たちが右側を迂回して抜ける。しまったと言わんばかりに女子がそっちに慌てて視線を向けた瞬間に俺が無理矢理駆け抜ける。こうなれば俺たちの勝ちだ。女子に足で負けるつもりはない。

「よーし、到着」

なんとか女子をまいて第二アリーナ更衣室に到着。時計を見るとほとんど時間がない。

「うわ！　時間ヤバイな！　すぐに着替えてしまおうぜ」

「おう」

時計を見ると結構ギリギリ。とにかく急いで制服を脱ぐ。

「わあっ！？」

「なんだ、シャルル。荷物でも忘れたか？　って、何で着替えないんだ？」

「忘れ物なら諦めろ。早く着替えないと、織斑先生に怒られる」

「き、着替えるよ？　でも、その、あっち向いてて……ね？」

「？？？　いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……って、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない！　別に見てないよ！」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるシャルル。なんでこいつはこんな反応するんだ？

「いいから急げ二人とも。遅刻とかシャレにならない――というかあの先生はシャレにしてくれない」

「……」

「シャルル？」

「な、何かな！？」
「うわ、着替えるの超早いな。明宏も早いけど」
「お前より何百回と多く着てるんだ。これくらい当たり前だ」
「一夏はまだ着てないの？」
「これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいんだよなぁ。引っかかって」
「ひ、引っかかって？」
「おう」
「……」
なぜかシャルルの顔が赤くなっていく。それよりも、
「そんなこと言ってないで早く着替えろ、一夏。シャルルも顔を赤くするな」
「そうだな。よっ、と。――よし、行こうぜ」
「う、うん」
着替え終わって更衣室を出る。グラウンドに向かう途中で一夏がシャルルに尋ねる。
「そのスーツ、なんか着やすそうだな。どこのやつ？」
「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」
「デュノア？　デュノアってどこかで聞いたことがあるような……」
「フランスのＩＳ企業だな。しかもフランスでも有数の大企業」
「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいＩＳ関係の企業だと思う」
「へぇ！　じゃあシャルルって社長の息子なのか。道理でなあ」
「うん？　道理でって？」
「いや、なんつうか気品っていうか、いいところの育ち！　って感じがするじゃん」
「いいところ……ね」
ふと、シャルルが視線を逸らす。何か触れられたくないところだったんだろうか。

「それより一夏の方がすごいよ。あの織斑千冬さんの弟だなんて。明宏だってあの篠ノ之博士が作った専用機を持ってるって、先生達が言ってたよ？」
「ハハハ、こやつめ！」
「へ？」
「――いや、なんでもない。まああれだ、全員地雷を踏んで一機ずつ減ったってことで」
「？　よくわからないけど……？」
自分と俺の地雷を踏まれてしまったことに気づいて、一夏が話を逸らす。
神王を篠ノ之博士が開発したことは、まだいい。むしろとても感謝している。でも、それは嫌な思い出に繋がるわけで、俺としてはあまり口にしてほしくない。
「おい、明宏？　大丈夫か？」
「あ、ああ。大丈夫だ」
とりあえず、今はそんなこと考えてる暇はない。今は早くグラウンドに着くことを考えないとな。

第二十七話　実演練習（前書き）

第二十七話です

第二十七話　実演練習

「遅い！」
第二グラウンドに無事到着――とはいかなかった。くそ、間に合わなかったか。
「とっとと列に並べ」
織斑先生に言われて俺たちは一組整列の一番端に加わる。
「ずいぶんゆっくりでしたわね。ＩＳスーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」
一夏の隣にいたオルコットが一夏に話しかける。
「道が混んでいたんだよ」
「ウソおっしゃい。いつもは間に合うくせに」
いや、本当です。女子で道が混んでいました。
「一夏さんはさぞかし女性との縁が多いようですから？　そうでないと二月続けて女性からはたかれたりしませんよね」
「なに？　アンタまたなんかやったの？」
一夏の後ろにいる鳳が話しに加わる。
「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」
「はあ！？　一夏、アンタなんでそうバカなの！？」
「――安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」
はい来ました、我らが鬼教官。地獄の幕開けだ。
蒼天の下で今日もまた出席簿アタック（一夏命名）が響くのだった。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践練習を開始する」
「はい！」
二組と合同なので人数はいつもの倍。出てくる返事も気合が入っている。
「くぅっ……。何かと言うとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」
叩かれたところが痛むのか、オルコットと凰は頭を押さえていた。
シャルルに織斑先生の恐ろしさを伝えておく。シャルルは少し戸惑いながらも了解してくれた。
「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――凰！　オルコット！」
「な、なぜわたくしまで！？」
完全なとばっちりだ。諦めろオルコット。あの人に理屈が通用しないのはお前も知っているだろ。そのくせこっちを折るときは理屈を使ってくるのがタチが悪い。メインは当然物理攻撃だが。
「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出ろ」
それでも嫌がる二人。まあ、一人はとばっちりだからしょうがないか。
「お前らすこしはやる気を出せ。――アイツにいいところを見せられるぞ？」
織斑先生が二人にそんなことを吹き込んだ瞬間、二人の目の色が変わった。
「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」
「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの！」
織斑先生の一言で二人ともやる気がでてきたみたいだ。すごいな、あの二人をたった一言でここまでするなんて。まあ、あの二人だからこそだろうけど。
「それで、相手はどちらに？　わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」
「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」
「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は――」
「あああああーっ！　ど、どいてください～っ！」
あれ？　なんかこっちに飛んできてないか？　それに今の声、山田先生だよな。って危ねえ！

ドカーン！

なんとか俺は避けたが、隣にいた一夏は謎の飛行物体の突進を受け、数メートル吹っ飛ばされた。

「ふう……白式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし一体何事――」

むにゅう。

見ると一夏が謎の飛行物体――っていうかＩＳを装備した山田先生の胸を掴んでしまっていた。

「わ、わぁ！？　す、すいません！」

一夏が慌てて山田先生から体を離すと、一秒前まで一夏の頭があった場所をレーザーが貫いた。

「ホホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

レーザーを撃ったのはオルコット。あきらかに怒ってやがるなあれは。

しかも凰まで怒っているらしく、《双天牙月》を連結させて一夏に投げる。

「うおおおっ！？」

一夏は間一髪のけぞってかわしたが、《双天牙月》はその形状からブーメランのように返ってくる。一夏は体勢が崩れて避けれない。

「はっ！」

しかしそこで一夏の命を救ったのは、驚くことに五一口径アサルトライフル《レッドバレッド》を持った山田先生だった。

倒れたままの体勢から少し上体だけをわずかに起こしただけなのにかなりの命中精度。雰囲気もまったく違い、落ち着き払っている。とても、入学試験でこけて動かなくなった人と同一人物とは思えない。

驚いたのは俺だけではなく、一夏やオルコット、凰はもちろん、他の女子まで唖然としている。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」
ぱっと雰囲気がいつもの山田先生に戻る。織斑先生の言った言葉に照れているらしく頬が赤かった。
「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさとはじめるぞ」
「え？　あの、二対一で……？」
「いや、さすがにそれは……」
「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」
負けるといわれたのが気に障ったらしく、二人は瞳に闘志をたぎらせていた。
「それと須藤！　お前もだ」
「ちょっと待ってください。何で俺も――」
「お前が一番遅く来たからだ」
「確かに一番遅かったですけど、ほとんど一夏たちと変わり――」
「やれ。いいな？」
「……もし断ったら？」
「……」
「ぜひやらせていただきます」
やります。やりますから、出席簿を手で軽く叩きながら無言で威圧しないでください。
結局やるという選択肢しかない。選択肢というのかも怪しいけど。
「明宏、右手大丈夫なのか？」
「まあ、ＩＳを展開している状態ならある程度大丈夫だ」
織斑先生もそれを知ってて指名したんだろう。知らずに指名したのなら、嫌がらせか何かだ。それかいじめ。
まあ、とりあえずやるからには勝つつもりでいくか。三人でうまく連携できれば、山田先生がいくら強かろうが勝機はあるだろう。

第二十八話　模擬戦闘（前書き）

第二十八話です

第二十八話　模擬戦闘

「では、はじめ！」
織斑先生の合図が響く。とりあえず二人と大まかな作戦を立てるとするか。
「二人ともひとまず作戦を――」
山田先生から視線を外し、二人がいるほうに向ける。しかし、そこには二人の姿は残っていなかった。
もしやと思い山田先生のほうに向き直ると、案の定二人は山田先生に突撃していた。
しかもそれぞれ好き勝手戦っているようで、連携がまるで取れてない。連携がうまくいけば近距離格闘型の甲龍と遠距離射撃型のブルー・ティアーズは結構いい組み合わせになるはずなのに。
どちらも最初から第三世代兵器を使用しているが、二人のタイミングが合わないためことごとく山田先生に避けられる。
だがそれもつかの間、山田先生は回避からいきなり射撃に移った。そのまま《レッドバレッド》の射撃がオルコットを誘導、凰とぶつかったところでグレネードを投擲。爆発が起こって、煙の中から二つの影が地面に落下した。もちろん、オルコットと凰だ。
「くっ、うう……。まさかこのわたくしが……」
「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」
「り、鈴さんこそ！　無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」
「こっちの台詞よ！　なんですぐにビット出すのよ！　しかもエネルギー切れるの早いし！」
「ぐぐぐぐっ……！」
「ぎぎぎぎっ……！」
そんな馬鹿らしい言い争いが聞こえてくる。まあどちらの意見も間違ってはいない。間違いはないが、俺からすれば協力する気がな

かったのでどちらも間違いだ。
「……俺一人かよ」
「い、行きます！」
俺が愚痴をこぼした瞬間、山田先生の弾丸が俺に襲い掛かる。俺は多方向加速推進翼を使った多方向瞬時加速でなんとか避け、《アトランティス》を展開、山田先生に向けて打ちこむ。山田先生が回避して攻撃が一瞬止んだところを一気に接近、同時に展開した大剣《デュランダル》で山田先生に攻撃しようとするが、山田先生は体勢が崩れているのにもかかわらず、正確にグレネードを投擲する。
「ちっ……」
なんとかスラスターと推進翼、全てを用いての瞬時加速で後方に回避するが、グレネードの爆発をくらってしまう。しかも、その煙の中から実弾が何発も飛んでくる。なんとか避けようとするが推進翼をすべて後方回避に回したため回避できず、モロにくらってしまう。
「強いな……」
できればさっきの一撃でほとんど決めてしまいたかったが、駄目か。《デュランダル》はその重さによる一撃必殺の攻撃が主だが、その重さのせいで扱いが難しい。全身装甲（フルスキン）との戦闘のときは相手が近距離に詰めていたからある程度どうにでもなったが、距離の離れている山田先生を相手にするには使いづらい。そのための《アトランティス》の牽制だったのだが、失敗したし。
それなら、と《デュランダル》を収納、そして直槍《ゲイ・ボルグ》を展開する。そしてそのまま煙が消えないうちにそれを迂回し突撃をしかける。
「っ……！？」
山田先生が驚きの表情を見せる。その隙に槍の先端による刺突と側面による打撃を何度かくらわせる。しかし山田先生はダメージを覚悟で無理矢理その攻撃から抜け出し、俺とは反対の方に移動する。さすがは元代表候補生。とっさに防御よりも多少の無理を押してで

も距離を取ることを選ぶとは、いい判断だ。しかし、それじゃあ――逃げ切れない。

「せい！」

「なっ……！？」

この《ゲイ・ボルグ》は近接武装であるが、レーザーを飛ばすことも出来る。それを知らなかった山田先生にレーザーが飛び、直撃する。そして体制が完全に崩れた所に追撃をかける。山田先生はすぐさま盾でガードするが、《ゲイ・ボルグ》を盾に突き立て、連続瞬時加速を使用。最後の六回目の加速で盾をはじく。

「これで――」

「させません！」

そう言った山田先生と俺の間には山田先生が出したと思われるグレネード。とどめを刺そうとしていた俺も、盾がはじかれて体勢が崩れている山田先生もその爆発をモロにくらう。そのまま俺のシールドエネルギーは０になった。俺の負けかと思ったが、俺と同時に山田先生のシールドエネルギーも０になったようだ。――引き分けか。

第二十九話　ちょっとしたトラブル（前書き）

第二十九話です

第二十九話　ちょっとしたトラブル

模擬戦闘が終わり、神王を収納して山田先生のもとに行く。
「山田先生、ありがとうございました」
「あ、はい。あ、ありがとうございましたっ」
「まったく。引き分けとはな」
「あっ、織斑先生」
気が付く織斑先生が近くまで来ていた。自分の生徒が善戦したというのに、その表情は今にも深いため息を吐きそうだ。まるで自分の予定が狂われたかのような態度だな。
「この機会に教員の実力を示すために戦わせたというのに、お前というやつは」
「俺はそのための生贄ですか」
「そうだ」
即答したよ。生徒を生贄にするとは恐ろしい教師だ。もし俺が勝っていたらどうするつもりだったのだろうか。
「まあ、あの馬鹿者共にチームワークの大切さを教えるのもあったが」
馬鹿者共というのは十中八九――いや、間違いなくオルコットと凰だな。確かにあの二人は我が強いからチームワークを学ばせる必要はあったかもしれない。
「今回ので二人もわかったんじゃないですか？」
「……そうだといいがな」
まあ、さっきの言い争いからしてわかっている可能性は低いだろうけど。織斑先生もここまでわからなかったのは想定外だったようだ。
「山田先生もご苦労だったな」
「い、いえっ、それほどのことじゃ……。それよりも須藤くん、強いですね」

「俺のは専用機ですから。山田先生のほうが訓練機であそこまで戦えるなんて凄いですよ」
「そ、そうですか？」
戦闘が終わったとたんにいつもの山田先生に戻ってしまった。さっきまでの雰囲気が微塵も感じられない。戦闘に集中していれば大丈夫なのだろうか、男。
「流石だな、明宏」
「ああ、引き分けだったけどな」
「それでも凄いほうだと思うぜ。セシリアと鈴が勝てなかった山田先生が相手で引き分けなんだから。な、シャルル？」
「うん、凄いと思うよ」
「一夏はともかく、代表候補生のシャルルがそういうならそうかもな」
「おいっ、俺はともかくってなんだよ」
「冗談だ」
一夏と冗談を交わしながら列に戻る。本当にいじりやすいやつだ。
「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意をもって接するように」
織斑先生の言葉に皆、さっきの戦闘で少し戸惑いながらも返事をする。あの山田先生があれほどの実力者だったことに皆驚いているようだ。
「専用機持ちは織斑、須藤、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。また、織斑はＩＳの経験が少ないので須藤がサポートに入れ。いいな？　では分かれろ」
俺は一夏のサポートか。一夏もこの二ヶ月である程度成長したけど、人に教えることはほとんどなかったから打倒といえば打倒だ。まあ一人で女子を相手するよりも二人でやったほうが心強い。そんなことを考えているうちに俺と一夏とシャルルのところには一気に二クラス分の女子が詰め寄ってくる。

「織斑くん、一緒に頑張ろう！」
「わかんないところ教えて～」
「須藤くん、さっきの模擬戦格好良かったよ！　グループに入れて？」
「さっきのＩＳと篠ノ之博士について教えてよ！」
「デュノア君の操縦技術を見たいなぁ」
「ね、ね、私もいいよね？　同じグループに入れて！」
何というか、予想通りの反応なんだが、いつもの二倍なので少し対応しづらい。特に一組の人間は顔見知りが多いけど、二組の人間はほとんど認識がないし。
「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！　順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百週させるからな！」
鶴の一声のごとく、わらわらと群がっていた女子たちは移動して、それぞれの専用機持ちグループは二分とかからず出来上がった。
「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」
そう言ってため息をする織斑先生にバレないように、各班の女子はぼそぼそとおしゃべりをしていた。
「……やったぁ。織斑君と同じ班っ。苗字のおかげねっ……」
「……須藤くんだぁ。さっきの格好良かったなぁ……」
「……うー、セシリアかぁ……。さっきボロ負けしてたし。はぁ……」
「……凰さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ……」
「……デュノア君！　わからないことがあったら何でも聞いてね！　ちなみに私はフリーだよ！……」
「……」
ちなみに唯一会話がないのはボーデヴィッヒの班。あそこだけ女子が可哀想なんだが俺にどうしようもない。
「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一機取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。

好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」
　山田先生がいつもよりも五倍はしっかりした声でそう告げる。
「どっちがいいと思う？　明宏」
「いや、乗るのは俺たちじゃないから、女子に聞いた方がいいんじゃないか？　まあ、打鉄でいいんじゃないか。篠ノ之もいるし」
「そうだな」
　班の女子に打鉄でいいか尋ねると、皆揃って了承してくれた。
「織斑君、ＩＳの操縦教えてっ」
「ああーん、このＩＳ重―い。私箸より重いもの持ったことなーい」
「実践訓練の基本はツーマンセルよね。じゃあ織斑君、組みましょう」
「それなら私と組もうよ、須藤くん」
「須藤くん、どうしてあそこまでうまく操縦できるの？　教えてよー」
「ねえねえ専用機ってやっぱりいい感じ？　いいなー、うらやましいなー」
　一夏が篠ノ之に声をかけようとするが、班の女子に取り囲まれる。一応班長とその補佐なので相手をしないといけないのがやっかいだった。
『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切ってあります。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』
　ＩＳのオープン・チャンネルで山田先生が連絡してくる。今のところ一夏も勉強の甲斐もあってわからないところはないようだから大丈夫か。
「よし、一夏。準備は完了だ」
「それじゃあ出席番号順にＩＳの装着と起動、そのあと歩行までやろう。一番目は――」
「はいはいはーいっ！　出席番号一番！　相川清香！　ハンドボール部！　趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

「お、おう。ていうか何で自己紹介を……」
「よろしくお願いしますっ！」
腰を折って深く礼をすると、そのまま右手を差し出してくる。握手しろとでもいうのだろうか？
「ああっ、ずるい！」
「私も！」
「第一印象から決めてました！」
他の女子も一列に並んで、同じようにお辞儀をして頭を下げたまま右手を突き出してくる。
「ちょ、ちょっと待て」
「あ、あのな？　どういう状況かわからないんだが――」
「「「お願いしますっ！」」」
ふと見るとシャルルの班も同じようななことになっていた。
「え、えっと……」
シャルルも状況が飲み込めていないという感じだった。安心しろ、俺たちもだから。
スパーン！
「「「いったああっ！っ！」」」
一列に並んでいたのでかなり叩きやすかったのだろう。修羅の登場だ。
「やる気があってなによりだ。それならば直接見てやろう。最初だ誰だ？」
「あ、いえ、その……」
「わ、私たちはデュノアくんでいいかな～……なんて」
「せ、先生のお手を煩わせるわけには……」
「なに、遠慮するな。将来有望なやつらには相応のレベルの訓練が必要だろう。……ああ、出席番号順ではじめるか」
シャルルの班の女子は鬼教官に捕まってしまったようだ。大変だな。
そんな惨状を見て織斑班女子は流れるように列を解散し、相川が

ＩＳのステータスを確認する。
そして一人目の装着、起動、歩行が問題なく進んでいく。
――が、ここで問題発生。訓練機を立ったまま装着解除をしてしまった。俺たちは専用機持ちだから忘れていたが、これでは立ったままの状態になり、装着することが出来ない。
「どうしました？」
お、ここで頼れる山田先生の登場だ。ひとまず状況を説明し、指示を待つ。
「あー、コックピットが高い位置で固定されてしまった状態ですね。それじゃあ仕方がないので織斑くんか、須藤くんが乗せてあげてください」
「……え？」
「な、なに？」
「えええ～っ、超ラッキー！」
ちなみに一夏、篠ノ之、二番目の女子――岸里の言葉。何で岸里は喜んでいるのだろうか？　――って、一夏か。
「それなら一夏がやれよ。班長だろ」
「いや、ここは明宏だろ。班長のサポートなんだから」
俺も一夏も、お互いに譲り合う――というかお互い一歩も譲らない。俺の、いや岸里のため絶対一夏にさせてやる。
「ならジャンケンで勝負だ」
「いいぜ、望むところだ」
俺と一夏は強く拳を握りしめる。この勝負、負けるわけにはいかない。
「じゃあいくぞ。……じゃーんけーん」
二人とも十分気合を入れたところで大勝負に移る。
「「ぽん！」」
俺はチョキ。一夏は――グー。
「……頭を持つのは駄目かな？」
「千冬姉に怒られるぞ」

「そうだよな」
負けたものはしょうがないので、俺は神王を展開し、岸里を抱きかかえて打鉄のコックピットへと運んでいく。
「ちゃんと捕まっていろ。落ちるぞ」
「う、うん……」
なぜか岸里の顔が赤くなっているが気にしない。きっと一夏に運んでもらいたかったのに俺になってしまったのが嫌なんだろう。だったら、さっさと終わらせてしまおう。
「じゃ、背中から入ってくれ。……よし、起動させて」
岸里が無事打鉄の起動シークエンスをはじめる。後ろで女子は「ズルイ！」とか言ってるが、気にしない。俺に運んでもらえることがいいことなはずがないし、気のせいだ。
俺は神王を解除して、一夏のほうに戻る。山田先生の姿がなくなっていたが、ボーデヴィッヒの班が遅れているらしく、そちらに行ったらしい。
「次こんなことになったら、一夏がやれよ」
「やってたまるか。おーい、しゃがんで解除してくれよ。でないとまた――」
一夏が言い終わるよりも早く、岸里はＩＳを立ったままの状態で装着解除した。
「あああっ！　な、何してるんだよ！」
「いや、まあ、他の女子の視線が強制力を持っていて……」
「さあ、一夏頑張るんだ」
「……次は俺の番か。えーと、誰？」
「私だ」
「お、おう」
ナイスなタイミングで篠ノ之だった。これは俺が先にやってよかったな。篠ノ之も一夏にやってもらったほうがいいに決まってるし。
せいぜい楽しませてやれよ、一夏。

第三十話　昼食前の談話（前書き）

第三十話です

第三十話　昼食前の談話

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納公庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

時間ギリギリとはいえ、なんとか全員が起動テストを終えた俺たち一組二組合同班は、格納庫にＩＳを戻したのだが、動力などという生やさしい物は付いていない。自分たちで運ぶしかないのだが、俺と一夏以外は女子なので結果的に俺たち二人がメインで運ぶことになった。まあ、俺も一夏も女子にやらせるというようなのはおかしいと思っているので別に構わないんだが。

ちなみにシャルルの班は「デュノア君にそんなことさせられない！」と数人の体育会系女子が運んでいた。あれ？　俺たちとの扱いがまるで違くないか？　しかも俺一応怪我人なのに。

「まあ、いいや。シャルル、着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行って着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待ってなくていいからね」

「ん？　いや、別に待ってても平気だぞ？　俺も明宏も待つのには慣れてるし」

「ああ、俺たちのことは気にしなくても――」

「い、いいからいいから！　僕が平気じゃないから！　ね？　先に教室に戻っててね？」

「お、おう。わかった」

妙な気迫に押されて、一夏がうなづく。しかしなぜシャルルはそこまで必死なのだろうか。

とりあえず本人もああ言ってるので、俺たちはさっさと更衣室に行って着替え、教室に戻っていった。

「なあ、明宏。一緒に昼飯食わないか？」
「何言ってんだよ、毎日のように一緒に食ってるじゃないか」
休み時間。あと次の授業が終われば昼食になるこの休み時間に一夏が妙なことを言い出した。
「いや、箒が今日一緒に飯食おうって誘われたからさ。屋上で食うらしいから先に言っておこうと思って」
「屋上？　だったら購買でパン買っておかないとな」
「シャルルも一緒に飯食わないか？」
「うん。よろこんで」
今日から新たに男子の駄弁りのメンバーとなったシャルルも快く承諾した。
「じゃあ、何のパンにするかな。コロッケパンはうまそうだけど腹が重くなりそうだし……。ホットドックにでもするか……それともーー」
「一夏さん。もしよろしければ今日ご一緒にお昼をいただきませんこと？」
「一夏。今日一緒にご飯食べない？」
俺が今日の昼飯について考えていたら、オルコットと凰が一夏を誘いに来た。何だ？　今日は食堂が使えない日だったか？　そんなはずはないけど、今日に誘いが集中しすぎだろう。
「おう、いいぜ。もともと誘うつもりだったし。屋上でいいか？」
一夏はごく自然に返答する。一夏のことだから、この二人も誘うと思っていたけど。一夏の返答を聞いて二人は少し嬉しそうな表情になった。
「まあ、わたくしと一緒にしたかったのですのね……」
「一夏もあたしと一緒に食べたかったんだ……」
二人とも少し顔を赤らめながらそんなことを呟いていた。実際は

篠ノ之に誘われたからついでに誘ったんだよな。ああ、現実を知ってしまったらどんな反応をするのだろうか。
「まあいいや。シャルル、あとで一緒にパン買いに行こうぜ。一夏は先に屋上行くんだろ？」
「ああ、箒にお前たちも一緒に食うこと説明しときたいし」
そう言いながら、一夏が篠ノ之の席に視線を向ける。俺もそちらに視線を向けると、そこにはすごく幸せそうな表情の篠ノ之の姿があった。
「あの調子でまったく話を聞いてくれねえんだよ」
「授業中もああだったし、昼飯のときまで放っておいたほうがいいな。それよりシャルル、どうだ？」
視線を戻しシャルルに改めて尋ねる。するとシャルルは笑顔で承諾してくれた。
「うん、ぜひそうさせてもらうよ。まだわからないことばかりだし」
「じゃあ、ついでに食堂とかの説明もしてやるよ」
「ありがとう」
話がまとまったところでちょうどチャイムが鳴る。授業開始の合図だ。これさえ終われば次は昼食。そこまで食べることが好きではないが、食べないと生きていけないし、頑張るとするか。

第三十一話　騒がしい昼休み（前書き）

第三十一話です

第三十一話　騒がしい昼休み

「……どういうことだ？」
「ん？」
昼休み、俺たちは屋上にいた。もちろん飯を食うために。
一夏に誘われてきたのだが、やっぱりこれは篠ノ之が一夏だけを誘ったんだよな。篠ノ之が悔しげに拳を握りしめている。すまないな、篠ノ之。
今ここにいるのは、俺と一夏、篠ノ之とオルコットと凰、そしてシャルルだ。
で、篠ノ之はこのときのために弁当を作ってきたようだ。もちろん一夏の分も。たぶんこれのために一夏を誘ったんだろう。
「はい一夏。あんたの分」
「コホンコホン。一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意していましたの。よろしければおひとつどうぞ」
そして凰とオルコットもタイミングがいいのか悪いのか一夏に弁当を作ってきたみたいだ。二人もこのために一夏を誘ったんだろうけど、何で三人とも今日にしたのだろうか。
凰のは酢豚。それだけ。ご飯は自分の分だけ食堂で買ってきたらしい。しかも自分の酢豚だけ温めてきたようだ。オルコットのはサンドイッチ。見た目はかなりきれいなんだが……。実はオルコット、料理がからっきしダメ。見た目はいいが味はすさまじい――らしい。
一夏がそう言ってた。
「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな？」
「当たり前だろ。男同士でそこまで遠慮することないからな。」
「男子同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこう。分からないことがあったら何でも聞いてくれ――ＩＳ以外で」

「ありがとう。二人とも優しいね」
ドキッ。
いきなり無防備な笑顔で言われたので、相手が男だと言うのに変な反応をしてしまう。一夏の方を見ると、あっちも少し顔を赤くしている。そういえば、俺って人の笑顔見ることってほとんど無かったからなぁ。今反応してしまったのも、笑顔に対する耐性が低いからかも知れん。
「お、おだてても何もでないぞ？」
「い、いや、まあ、これからルームメイトになるだろうし……ついでだよ、ついで」
「一夏さん、部屋割りがもう決まったのかしら？」
「いや、普通に考えたら俺の部屋だろ。男だし。明宏の部屋は一人部屋だしな」
「ああ、建築したときの都合で狭い部屋になったんだと。しかもなぜか開かずの間扱いで俺が来るまで誰も使ってなかったらしい」
「そっか。まあ、普通に考えてそうよね」
そんな話をしながら昼食が進む。一夏と凰が酢豚、俺とシャルルが購買のパン、オルコットも自分の分は購買で買ってきてたようで、オルコットのサンドイッチは一夏が全部食べることになるようだ。
合掌。
一夏は酢豚を完食したあと、篠ノ之から受け取った弁当を開ける。
よくそんなに食えるな。俺なら腹がパンクするぞ。
篠ノ之が作った弁当は鮭の塩焼きに鶏の唐揚げ、こんにゃくとゴボウの唐辛子炒め、ほうれん草のゴマ和えというバランスの取れた献立だった。
「これはすごいな！　ってあれ？　箒、なんでそっちに唐揚げがないんだ？」
「！　こ、これは、だな。ええと……」
なぜか視線が泳いでいる。何だ？　地雷だったか？
「……うまくできたのがそれだけなのだから仕方ないだろう……」

「え？」
　そういうことか。失敗したやつを一夏に見せたくなっかたようだ。幸い、一夏には聞こえなかったみたいだ。よかったな。
「わ、私はダイエット中なのだ！　だから、一品減らしたのだ。文句があるか？」
「文句はないが……別に太ってないだろ」
「あー、男って何でダイエット＝太っているのが構図なのかしらね」
「まったくですわ。デリカシーに欠けますわ」
　一夏の言葉に対してオルコットと凰から非難が飛ぶ。よくわからないが、ダイエットは太っているからするもんじゃないのか？
「コホン。昼食に戻ろう。いつまでも談笑していられるほど昼休みは長くない」
　ひどくまっとうなことを言う篠ノ之。
「じゃあまあ、いただきます……おお、うまい！」
　唐揚げをほおばった一夏が声をあげる。結構一夏って味にうるさいんだよな。その一夏がうまいって言うならかなりうまいんだろう。
「これって結構仕込みに時間かかってないか？　ええと、混ぜてるのはショウガと醤油と……んぐんぐ。なんだろうな。絶対食べたことのある味なんだけど」
　これは一夏のくせのようなもので、うまいものの材料などを分析し始める。これが結構な確率であたるので、俺としては見ていて面白い。
「おろしニンニクだ。それとあらかじめコショウを少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな」
「へえ！　それはいいな。今度やってみよう」
　一夏は元々一人暮らしのような生活だったので、家事はほとんどできる。料理なんて得意中の得意だ。なんでも最初はかなり下手だったが、織斑先生は文句は言っても残さず食べてくれるので、ちゃんとしたものを出したくて努力したそうだ。やっぱり優しいんだな、一夏も、織斑先生も。

俺も博士のところにいたころから家事はやってるのである程度できるが、一夏のはもう主夫といってもいい気がする。
「いやでも、本当にうまいな。箒、食べなくていいのか？」
「……失敗した分は全部自分で食べたからな……」
「ん？」
「あ、ああ、いや、大丈夫だ。まあ、その、なんだ……。おいしかったのなら、いい」
「本当にうまいから箒も食べてみろよ。ほら」
そう言って一夏は唐揚げを一口サイズに切って、端で持ち上げる。落とさないようにちゃんと左手も添えて。
「な、なに？」
「ほら。食ってみろって」
「い、いや、その、だな……」
これが特に意識してないんだよな。一夏がモテる要因はこういう無意識の行動でもあるんじゃないだろうか。
「ほら。箒、食べてみろって」
「い、いや、その……だな。ううむ……ごほんごほん」
「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつなのかな？　仲睦まじいね」
ナイス、シャルル。もう少し一夏は自分の行動の重要さをわかったほうがいいと思う。
しかしそんな貴公子の言葉で一変、虎仙人と戦女神に変貌する凰とオルコット。
「だ、誰がっ！　なんでこいつらが仲いいのよ!?」
「そっ、そうですわ！　やり直しを要求します！」
シャルルに食ってかかる二人。そんな状況であっても笑顔を絶やさないのはすごいと思う。
「それならこうしよう。みんな、一つずつおかずを交換しようよ。食べさせあいっこならいいでしょう？」
「ん？　まあ、俺はいいぞ」

「ま、まあ、一夏がいいって言うんならね。付き合ってあげてもいいけど」
「わたくしは本来ならばそのようなテーブルマナーを損ねるような行為は良しとはいたしませんが、今日は平日でここは日本、『郷に入っては郷に従え』ですわね」
素直じゃないな、二人とも。まあ、とりあえず怒りは収まったようだからいいけど。
「じゃ、早速もーらいっ！」
凰がそう言って、一夏の箸から唐揚げを奪う。
「あ、こら！」
「もぐもぐ……。う！　な、なかなかやるわね。なかなか」
「ふっ。和の伝統を重んじればこそだ」
「あー……わりい箒。今ので唐揚げ、俺が口つけたのしかなくなったわ」
「そ、そうなのか？」
「ああ。いくらなんでも男が口をつけた食べ物っていやだろ？　って、でもそうなると他出せるおかずないんだよな。唐揚げ以外は一緒だし」
「べ、別に、口がついていてもいいぞ。私は気にしない」
「うん？　そうなのか。じゃ、はいあーん」
「あ、あーん」
よくはいあーんなんて普通に言えるよな。日本人の特権か？　違うか。
「い、いいものだな……」
「だろ？　うまいよな。この唐揚げ」
「唐揚げではないが……うむ。いいものだ」
篠ノ之が顔を赤くしてうつむく。
一夏は自分がしたことについてよくわかっていないようだが、かなりすごいことやったんだよな。俺には真似できん。
「一夏！　はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

「一夏さん！　サンドイッチもどうぞ！　一つと言わずどうぞ全部！」
「「さあ！」」
「ま、待て。待ってくれ。まず酢豚はもう自分の分食べたし、サンドイッチは食べ合わせの関係で最後にいただき――」
「「……」」
「い、いただきます……」
そんな光景をみながら俺とシャルルはそれぞれのパンを食べる。
「仲いいんだね、みんな」
「仲いいって言うか、一夏が尻に敷かれてるだけだけどな」
「そうかな？　僕には仲よさそうに見えるけど」
「まあ、一夏が女子に対して優しいのは事実だな。あれだから一夏はモテるんだよ」
一夏はよく大変な目に遭っているが、半分は自分の優しさのせいなんだから仕方がないと言えば仕方がない。
「し、仕方がないので私も食べさせてやろう」
いきなり篠ノ之が赤面から回復したらしくそんなことを言い出す。
「い、いいって。大体、唐揚げ以外はおかずが同じなんだから、箸の分がなくなるだろ」
「むっ……。それはそうだが……」
「ていうか食べようぜ。食べてすぐダッシュは避けたい。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないんだからな」
あ、午後も着替えないといけないのか。面倒だな。実習で一番面倒なことの一つだ。
「ん？　一夏ってもしかして実習で毎回スーツ脱いでんの？」
「え？　脱がないとダメだろ？」
「女子は半分くらいの子が着たままよ？　だって面倒じゃん」
「ていうことは」
そう言って一夏が三人をじっと見る。
「じょ、女子の体をジロジロ見ないでよ！」

「紳士的ではないですわよ！」
「女の体を凝視するとは、不埒だぞ！」
「……」
「どうしたの、一夏？」
女子三人に散々言われ、一夏が俺たちの方を見る。
シャルルはさりげなく一夏の心配をしている。本当に良いやつだな。
「男同士っていいなと改めて思ってな」
確かに。そういえば三人になったし、もしかしたら寮の大浴場も使えるようになるかもしれない。
今は事情があって、男の俺たちは大浴場が使えない。時間をずらして使えばいいのだが、結構な数の女子から異議申し立てがあったので、結局使えないまま。たった二人のために使用時間を割り振りするのは無駄が多いということで、俺たちは寮の大浴場を一回も使ったことがない。風呂好きの一夏にはキツいんだろうな。
「まあ、確かにそうだな」
「そ、そう？　よくわからないけど、一夏がいいなら良かったよ」
照れているんだろうか、なぜかシャルルの言葉がぎこちない。それとも男に言われて引いているのだろうか。
「……男同士がいいって何よ……」
「……不健全ですわ……」
「……灯台下暗しに気づかぬ愚か者め……」
三人とも小さな声で悪態をついていたが、あの一夏に届くはずもない。
その後、俺たちは一日中女子トリオから白い目で見られた。

第三十二話　週末の予定（前書き）

第三十二話です

第三十二話　週末の予定

「じゃあ、改めてよろしくな」
「よろしく頼む」
「うん。よろしく、一夏、明宏」
夜。夕食を終えて俺たちは一夏の部屋に来ていた。当然だが、シャルルは一夏と同室になり、俺は暇つぶしも兼ねて一夏たちの部屋に遊びに来ていた。今は一夏が入れてくれた日本茶を飲んでいる。
「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」
「気に入ってもらえたようで何よりだ」
「しかし本当に一夏はお茶入れるのうまいよな」
「まあ、たまに千冬姉に出してたからな。そうだ、今度機会があったら抹茶でも飲みに行こうぜ」
「抹茶ってあの畳の上で飲むやつだよね？　特別な技法がいるって聞いたことがあるけど、二人は入れれるの？」
「抹茶は『たてる』って言うんだぜ。俺も略式のしか飲んだことないけど」
「俺も略式のだけだな」
本格的なものを飲もうとすると、いろいろな手順を踏まないといけないが、略式なら手軽に飲めるので俺は好きだ。
「今は駅前に抹茶カフェっていうのがあるんだよ。コーヒーみたいな感覚で飲めるやつな」
「ふうん。そうなんだ。じゃあ今度誘ってよ。一度飲んでみたかったんだ」
「おう。ついでに色々案内するぜ。せっかくだし今週末の日曜日にでも出かけるか。明宏も行くだろ？」
「ああ、特に予定はないしな。二人が迷惑でないのなら」
「そんな、迷惑なんかじゃないよ」
少し冗談混じりに言ったのだが、シャルルは真に受けてしまった

ようでまじめに否定する。一夏だったら軽く返してくれるのだが、シャルルにこの手の冗談は言わないほうがいいか。
「よし、じゃあ三人で行くか」
「できればまるまる一日使っていろいろな所に行ってみるのもいいな」
「本当？　嬉しいなあ。ありがとう」
柔らかな笑みを浮かべるシャルルに、男だとわかっていてもまた一瞬ドキッとしてしまう。一夏もまた顔赤くなってるし。全体的に中性的な印象が原因なのだろうか。
「じ、時間とかはどうする？　明弘の言うように一日にするか？」
「俺はいつでもいいぞ。シャルルが決めてくれ」
「僕？　僕もいつでもいいよ。でもできればいろんな所に行ってみたいな」
「じゃあ、九時にこの部屋集合でいいか？　明弘の部屋でもいいけど」
「いや、わざわざ寮の端にある俺の部屋にまで来ることないだろ。俺がこっちに来ればいいだけだし」
一夏とシャルルの二人が俺の部屋に来るよりも、俺一人がこの部屋に来た方が効率的だし。俺の部屋よりもこの部屋の方が出口に近い。それならこの部屋の方がいいだろう。
「なら九時にこの部屋集合で。シャルルも大丈夫か？」
「うん。大丈夫だよ」
「よし、これで決まりだ」
「ふふっ、楽しみだなあ」
そう言ってシャルルが微笑む。こんなに期待されていてはその期待に応えられるようにこちらも頑張らないといけないな。一夏も同じことを思ったらしく頑張ろうという雰囲気がしひしひと感じられた。
「えーと、そういえば話は変わるけど、シャワーの順番とかどうする？　その日その日で決めてもいいけど」

「あ、僕が後でいいよ。一夏が先に使って」
「う？　うーん、そう言われると逆に使いづらいというか……。シャルルも実習終わってすぐにシャワー浴びたい日だってあるだろ？」
「ううん、平気だよ。僕ってあんまり汗をかかない方だから、すぐにシャワーを浴びなくてもそんなに気にならないし」
「そっか。じゃあ、ありがたく使わせてもらう。でもあれだぞ、遠慮とかしなくてもいいからな。なにせ男同士なんだし」
「うん。ありがとう」
そしてまたにこっと笑う。傍から見て気づいたけど、シャルルはお礼の言い方が自然で、そのタイミングで笑顔を見せられるとついドキッとなるのだろう。
「もし早く使いたかったら寮の端だけど俺の部屋に来てもいいぞ。俺がいなくても勝手に入って構わない」
「わかった。ありがとう」
おっと、またあの笑顔だ。大丈夫大丈夫、俺は男にドキッとなんかしてないからな。
とにかく、シャルルという新たな仲間を向かえ、俺たちの学校生活はより安心感を増した。

第三十三話　休日の特訓（前書き）

第三十三話です

第三十三話　休日の特訓

シャルルが転校してきてから五日が経ち、今日は土曜日。ＩＳ学園は土曜日の午前は理論学習、午後は完全な自由時間だ。しかも土曜日はアリーナが全面開放なのでほとんどの生徒が実習に使う。

俺と一夏、シャルルも例外ではなく、現在一夏とシャルルが模擬戦をしている真っ最中だ。

「うおおおっ！」

一夏がシャルルに特攻をかけようとする。一夏の十八番である瞬時加速による高速の特攻だが、シャルルはそれに対して五五口径アサルトライフル《ヴェント》による威嚇射撃で難なくいなし、一夏が止まったところで距離を取りつつ射撃を的確に当てていく。

「ほら一夏。馬鹿正直な攻撃だけしないでもっとフェイントも入れろ」

「そう簡単に言うけど……なっ！」

シャルルの射撃に痺れを切らした一夏はまた特攻をかけようとするが、同じように反撃を食らう。

何度かそれが繰り返され、一夏のシールドエネルギーはあっさりと０になった。

「つ、強いな。シャルル……」

「一夏ももっと頑張れば強くなれるよ」

模擬戦を終えそれぞれのＩＳを待機形態に戻した二人がそんなことを言いながら戻ってくる。

模擬戦の結果はシャルルの圧勝。一夏はシャルルにほとんどダメージを負わせることもできなかった。まだＩＳを扱いだして二ヶ月ほどとはいえひどい結果だ。相性が悪いのもあるのかもしれないが、もう少し粘れないものか。

「一課の攻撃は単純すぎる。もう少し緩急をつけるなりフェイントをかけるなりできないのか」

「そう言われてもなあ……」
「でも二ヶ月でここまでできるならすごいと思うよ。そこまで厳しくする必要はないと思うけど」
「甘いぞシャルル。この二ヶ月間、俺や他三名がみっちり特訓したんだ。それで実力がつかなかったらおかしいだろ」
『他三名』は今も後ろで不満そうな顔をしているいつもの三人なのだが……まあ、あの三人の説明は独特すぎるため一夏には理解しづらいらしい。俺もほとんど理解できないけど。
一人は擬音での説明、一人は何となくとか感覚としか説明しない、一人は理路整然し過ぎる説明と、三者三様。あの三人はそれでいいのかも知れないが少なくとも一夏には無理だったようだ。
「まあ、手を抜かれるよりも厳しいほうがやる気も出るから大丈夫だぞ」
「一夏がそれでいいならいいけど……」
「まあ、少しは休んだほうがいいな。一夏は無駄に動きすぎだから余計に体力使っただろ。シャルルはどうだ？」
「僕はまだまだいけるよ」
「さすがだな。なら一度俺とも手合わせしてくれないか？　フランスの代表候補生の実力を自分で確かめたい」
「うん、いいよ。僕も明弘とは戦ってみたかったんだ。あの篠ノ之博士が作った神王の力を見てみたかったし」
ああ、そういえばシャルルが転校してきてからほとんど神王を使ってなかったな。まともに使ったのは山田先生との模擬戦のときだけか。シャルルと手合わせしたことはまったくなかったし。
「なら頼む。一夏はここでおとなしくしていろよ」
「おう。お前たちの勝負じっくりみせてもらうぜ」
「早速はじめようよ」
シャルルのうながされて、神王を展開する。シャルルはすでにもう専用機を展開していて、いつでも開始できそうだ。
シャルルのまとっている機体は山田先生も使っていたフランス、

デュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』。だが、通常のラファール・リヴァイヴのようなネイビーではなくオレンジで全体的にシェイプアップされている他、所々違いが見られる。おそらくカスタム機なんだろう。

「よし、いくぞ……」

「いつでもいいよ」

俺とシャルルは互いに互いを見据えあい、すぐにでも行動に移れるようにする。

さっきの戦いからしておそらく射撃タイプ。ならこちらも射撃武器で攻めるか、それとも逆に近接戦闘に持ち込むか。いや、安易に決めると予想外の事態が起きたとき対応しきれない。特に相手は代表候補生だ。油断は禁物。

とりあえずは、相手の出方を見て決めたほうがよさそうだな。

第三十四話　仏国代表候補生の実力（前書き）

第三十四話です

第三十四話　仏国代表候補生の実力

シャルルと向かい合って数秒。相手が動こうとしないことが感覚的にわかった俺はこちらからと攻撃を仕掛けることにする。

《アヴァロン》を展開してシャルルに向けて撃つ。しかしそれを読んでいたかのように避けたあと、《ヴェント》を展開して反撃してきた。

「おっと……」

反撃されることは想定内だった。ただ驚きなのはその『速さ』。通常一、二秒かかる武器の展開をほぼ一瞬。しかも俺に標準を合わせるのも同時にやった。

そのせいで俺への反撃が予想より早く、タイミングが完全に狂わされてしまった。

「次は僕の番だよ」

言うが早いかシャルルはそのまま俺への攻撃を激しくする。オルコットの攻撃が雨だとしたら、シャルルの攻撃は豪雨だ。威力はオルコットのレーザーに劣るが、何より数が多い。スラスターも推進翼も全て活用してその豪雨を避け続ける。

「さすがだね……。でも！」

どれほど避けても豪雨は途切れない。弾が切れてもシャルルは一瞬で弾の供給を終え、また撃ち続ける。

避け、展開した《イージス》で防ぎ、受け流す。そんな動作をしながらどうにかして隙を作れないか考えを巡らせる。

力で強引に突破しようとすれば、ある程度のダメージを覚悟しなければいけない。かといって技でたたみかけるにも少々体制が崩れている状態でシャルルに通じるかわからない。

ふと、弾丸の豪雨が止んだ。

「すごいね。ここまで全部当たらないとは思わなかったよ」

シャルルが少し驚きを含めた微笑で言う。しかし攻撃を止めては

いても、何かあったときはいつでも行動に移せるように意識を集中させているのがわかる。
「一夏と一緒にするなよ。何年もこいつを動かしてるんだ。これくらいはな」
「でも避けてばかりじゃ勝てないよ」
「そうだな。そろそろ攻めに転じさせてもらうとするか」
「望むところ！」
また弾丸の豪雨が再開される。先ほどよりもさらに激しい攻撃。こちらも回避の方法を変えて応戦する。
今までの小刻みな回避から一転、スケートのように旋回する。出力の高い背部のスラスターと出力の微調整が可能な多方向推進翼の二つがあるからできる芸当。できるだけ滑らかに、だんだんと速度を上げていく。
そして速度がある程度まで達した瞬間に地面を離れ、飛翔。そのまま慣性の法則に従ってシャルルへと急接近する。それと同時に《ゲイ・ボルグ》を展開。これで決着をつけてやる。
「速い……！　でも動きが直線的過ぎるよ！」
予想外の奇襲に驚きつつも、シャルルは的確に射撃を行う。俺の真正面から迫ってくる弾丸。直撃すれば一発でも大ダメージになりかねない攻撃だ。直線ではとても避けきれない。なら――直線じゃなければいい。
「なっ！？」
俺は推進翼を使って、機体の軌道を逸らした。慣性に逆らわずに斜め後ろから神王を押す推進力は、神王の速さは生かしたまま、弾丸を迂回するように回避したあと別の推進翼によって一気にシャルルへ突撃した。
しかし、シャルルはギリギリのところで物理シールドを展開し、俺の突撃を受け止める。それでも勢いは殺しきれず、俺とシャルルはともに押し出される。
なんとか身動きが取れるようになった俺が《ゲイ・ボルグ》をシ

ャルルに突きつけるのと、俺にシャルルの銃口が向けられるのは同時だった。
「……引き分け、か」
「そうみたいだね」
それだけ言って互いに武器を引き、地面へと降り立つ。
「二人ともお疲れ。さすがだな」
「あ、一夏。疲れは取れた？」
「おう！　もうばっちりだ」
一夏がそう言いながら胸を強く叩く。疲労もほとんど取れたみたいだな。
「これで俺の対リヴァイヴ戦の成績は0勝0敗2引き分けか。負けてはいないけど、すっきりしないな」
「そうは言ってもさっきのは本当にすごかったよ」
「そうだぞ。あんな回避方法、始めてみたぜ」
「ほとんど思いつきだったけどな。成功するかも運しだいだったし」
「回避しながら速度を上げていって、一定速度になったら相手に奇襲をかける。そして推進翼で軌道を曲げての特攻。――あれが思いつきの行動？　とてもそうは見えなかったけど」
「いろいろな条件が重なって初めてできるやり方だからな。初見の相手には有効だろうけど、一度見たら結構簡単に対策が取れる。実践でも使えそうもないしな」
あれは最低でも一定以上の広さで地形の起伏が少なく、障害物がないところじゃないと使いづらい。それにあそこでシャルルが防御ではなく回避を選んでいたら成功しなかっただろう。本当に運がよかったな。
「確かにそうだね。実践で使うにはもっと改善しないといけないと思うよ」
「それは時間があるときにでもやるとするさ。今はとりあえず一夏へのレクチャーをするべきだな」
「あ、そうだね。じゃあ、早速レクチャーを開始しようか」

「おう、よろしく頼む」
そんなこんなでシャルルとの模擬戦を終え、俺たちは予定通りにＩＳ戦闘についてのレクチャーを開始した。

第三十五話　射撃武器（前書き）

第３５話です

第三十五話　射撃武器

「ええとね、一夏が明宏やオルコットさん、凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」
「そ、そうなのか？　一応わかっているつもりだったんだが……」
現在、俺はシャルルと手合わせしたあと、シャルルとともにＩＳ戦闘に関するレクチャーを一夏にしていた。
「うーん、知識として知ってるだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」
「うっ……、確かに。瞬時加速も読まれてたしな……」
「俺の瞬時加速は小回りがきくけど、お前のは直線でしか使えないからな。相手の懐に入り込むためには相手の武装をよく知らないとダメだ」
「明宏の言う通り。一夏のＩＳは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握してないと対戦じゃ勝てないよ。一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」
「直線的か……うーん」
「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力とかの関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね」
「……なるほど」
一夏は俺の説明が少し難しいと言っていたが、シャルルはそれをわかりやすく説明してくれるので一夏も頭に入っているようだ。
「一夏の白式って後付武装がないんだよね？」
「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」
今まで勉強したおかげで、一夏はスラスラと答える。
「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使

っているからだよ」
「ワンオフ・アビリティーっていうと……えーと、なんだっけ？」
一夏が首をかしげる。まあ、あんまり馴染みのない単語かもしれないがな。
「言葉通り、唯一仕様の特殊才能だよ。各ＩＳが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のこと。普通は第二形態から発現するんだよ」
「それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから、それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代型ＩＳ。オルコットのビット――《ブルー・ティアーズ》や凰の《龍咆》がそうだな」
まあ、その第三世代型ＩＳはまだ研究途中で、オルコットや凰がＩＳ学園に来たのはデータ集めも兼ねてのことだろう。
「なるほど。それで、白式の唯一仕様ってやっぱり『零落白夜』なのか？」
「おそらくな。あれだけの特殊能力がワンオフ・アビリティーじゃないはずがない」
「白式は第一形態なのにアビリティーがあるっていうだけでものすごい異常事態だよ。前例がまったくないからね。しかも、その能力って織斑先生の――初代『ブリュンヒルデ』が使っていたＩＳと同じだよね？」
「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」
「ううん。姉弟だからってだけじゃ理由にならないと思う。さっきも言ったけど、ＩＳと操縦者の相性が重要だから、いくら再現しようとしても意図的にできるものじゃないんだよ」
「そっか。でも相性っていうんなら、明宏は第二形態になんでならないんだ？　明宏は何年も神王を使ってたんだろ？」
一夏の言う通り、俺は神王をかなりの時間動かしてきた。神王がある程度完成して、実稼動データとかを取るために約二年間、毎日のように動かしてきた。一日一時間動かしたとしても七〇〇時間は

軽くいってるだろう。
「おそらく精神的な相性が重要なんだ。いくら長く一緒にいても、俺と神王の精神が同調しなければダメなんだろうな。というか神王が形態移行できるのかどうかすらわからないし」
この神王、根本的にはＩＳと似たような概念で博士が製作したんだが、色々既存のＩＳと違う点もある。
まず他のＩＳの武装が神王に量子変換できない。全て、例外なく神王専用の武装しか量子変換できない。
他のＩＳとの通信は普通に行えるが、機体のデータなどが通常のＩＳと異なる部分もあるので何か不具合が起きる可能性がある――らしい。あんまり他のＩＳと関わってないからわからなかったけど。
「たぶん、そういうことだと思うよ。じゃあ、次は射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」
そう言って一夏に手渡してきたのは、さっきの模擬戦でシャルルが使っていた五五口径アサルトライフル《ヴェント》。
「え？　他のやつの装備って使えないんじゃないのか？」
「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに使ってみて」
「お、おう」
シャルルから《ヴェント》を受け取り、撃つ姿勢を作る一夏。しかし、射撃武器を使ったことがない一夏の様子はぎこちない。
「か、構えはこうでいいのか？」
「脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」
初心者の一夏をシャルルがうまく誘導する。
「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはＩＳが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出来てる？」
「さっきから探してるんだけど見当たらない」
「うーん、格闘専用の機体でも普通は入っているんだけど……」

「欠陥機らしいからな。これ」
「百パーセント格闘オンリーなんだね。じゃあ、しょうがないから目測でやるしかないね」
「初めて銃を扱うのに、大丈夫か、一夏？」
「愚痴ってもしかたないしな。じゃあ、行くぞ」
出現した射撃練習用のターゲットに狙いを定めて一夏が引き金を引く。
小さな爆発音が響いた直後、ターゲットの端に弾丸が命中する。
「うおっ！？」
「どう？」
「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』ていう感想だ」
「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も早いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。だから、軌道予測さえあっていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になる。一夏は特攻するときに集中しているけど、それでも心のどこかではブレーキがかかるんだよ」
「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」
「うん」
「格闘メインの篠ノ之はともかく、凰やオルコットと戦うと一方的な展開になることがあるのもそのせいだな」
「そういうことか。あの三人の説明はわかりづらすぎてな」
あの三人は説明が独特すぎるんだよ。
「あ、そのまま続けて。一マガジン使い切っていいよ」
「おう、サンキュ」
そのまま一夏が二発三発と次々に出現するターゲットに向けて射撃を行う。理屈はわかったみたいだから、あとはどうやって間合いをつめるかだな。
「うーん、うまく当たらねえな」
「初心者にしてはまあまあだな。ついでに俺もやってみるか」
マガジンを使い切った一夏に変わって俺がターゲットに向けて《アトランティス》を撃つ。

ランダムに出現するターゲットに一つ一つすばやく反応して、着実に命中させる。成績は――まあまあかな。
「うまいもんだなあ」
「慣れてるからな」
そんな会話を交わしていると、一夏思い出したようにシャルルに尋ねる。
「そういえば、シャルルのＩＳってリヴァイヴなんだよな？　山田先生が操縦していたのとだいぶ違うように見えるんだが本当に同じ機体なのか？」
「あ、それは俺も気になった。なんなんだあの機体」
「僕のは専用機だからかなりいじってあるよ。正式にはこの名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。基本装備をいくつか外して、その上で拡張領域を倍にしてある」
「倍！？　そりゃまたすごいな……。ちょっと分けて欲しいくらいだ」
「あはは。あげられたらいいんだけどね。そんなカスタム機だから今量子変換してある装備だけでも二十くらいあるよ」
「うーん、ちょっとした火薬倉庫みたいだな。明宏のはどれくらいだ？」
「俺のは五つだな。普通は五つくらいだからこれでも十分だと思ってたけど」
さっきの模擬戦で見せたあの高速の展開。あれならば二十という大容量の活用できるな。そういう意味では本当に『シャルルだけの専用機』というわけか。
「ねえ、ちょっとアレ……」
「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」
「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」
急にアリーナ内がざわめき始める。目線を向けると、そこには漆黒のＩＳをまとう転校生――ラウラ・ボーデヴィッヒがいた。

第三十六話　突然の闖入者（前書き）

第三十六話です

第三十六話　突然の闖入者

突然現れたボーデヴィッヒに対して俺とシャルルが警戒して臨戦態勢を取る。

こいつ、初日から一夏に平手打ちなんてしたからな。さっきまで《アトランティス》を握る手に力を込める、相手の行動を警戒する。《アヴァロン》よりも威力は低いが、弾の速度が速いので急な攻撃にも対処しやすい。シャルルも両手に弾の供給を終わらせた《ヴェント》と六一口径アサルトカノン《ガルム》を瞬時に展開する。

「おい」

ドイツの代表候補生――ボーデヴィッヒは警戒する俺やシャルルを一瞥すると一夏に鋭い視線を向けながら呼びかけた。

「……なんだよ」

ボーデヴィッヒの呼びかけに一夏が応える。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

「また今度な」

「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

言うが早いか、ボーデヴィッヒはその漆黒のＩＳを戦闘状態にシフト。左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

その瞬間、無意識のうちに体が動いた。

俺は、一夏の前に立ち、《アトランティス》で相手の弾に向けて三発連射する。大型の実弾を六九口径の実弾ごときで止めることはできないが、これで十分だ。

ボーデヴィッヒの実弾は俺の射撃で軌道をずらされ、標的となった一夏から五十センチほど離れた場所に着弾した。できるかどうか結構ギリギリだったけど、なんとかなったな。

「ちっ……。貴様、何をした？」

「何をしたも何も、ただお前の弾に俺の弾をぶつけて軌道をそらしただけだか？」
「そらしただけ……だと？」
ボーデヴィッヒが少し目を細める。しかし、そんなことはどうでもいい。
「まあ、銃弾の軌道と軌道、線と線を交叉させている状態なら難しいだろうな。軌道を交叉させるようにして、自分と相手の距離とそれぞれの銃弾の速度、それらを計算しなければいけないからな。しかし――」
そこで一呼吸置いて、《アトランティス》をボーデヴィッヒに向けて続ける。
「軌道を一直線に合わせれば、それらの条件はクリアできる」
ただし、これは結構リスクもある。もし俺の銃弾が当たらなかったら、自分があの大型の実弾をモロにくらうことになる。「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」
シャルルが両手の武器とともに鋭い視線をボーデヴィッヒに向ける。
「フランスの第二世代型ごときで私の前に立ちふさがるとはな」
「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型よりは動けるだろうからね」
お互いに相手の皮肉を言い合いながら相手の隙を探す。今にも戦いが始まりそうな雰囲気だ。
相手の技量や機体の性能は不明だが、俺とシャルルの二人でいけば互角にわたりあえるはずだ。もちろん油断をするつもりはない。俺とシャルルの息が合うかが少し心配だが。
『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』
突然アリーナにスピーカーから声が響く。騒ぎを聞きつけた担当の先生だろうな。

「……ふん。今日は引こう」
興が削がれたらしく、ボーデヴィッヒはあっさりと去っていった。
「一夏、大丈夫？」
「あ、ああ。助かったよ」
つい数秒前までボーデヴィッヒと対峙していた鋭い眼差しはもうなく、いつもの人懐っこい顔のシャルルが一夏の顔を覗き込んでいた。
「明宏もサンキューな」
「別にいいって。友達を助けるのは当然のことだろ」
「じゃあ、今日はもう上がろうか」
「おう。そうだな。あ、銃サンキュ。色々参考になった」
「それならよかった。えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」
いつもこうだ。シャルルはＩＳ実習後の着替えをとにかく俺たちと一緒にしたがらない。というか転校初日のあれ一回きりで俺も一夏も着替えをしたことがない。
「それじゃ、俺たちは先に上がらせてもらうか」
「あ、ああ。また後でなシャルル」
「あ、うん」
まあ、本人がいやなら無理にさせることは出来ないので、俺たちはシャルルにそれだけ言って、更衣室に向かう。
「ボーデヴィッヒの黒いＩＳ……ドイツの第三世代型でトライアル段階って言ってたな。確か――」
「おい明宏。まだラウラについて考えてたのかよ。別にいいって」
「いいわけないだろ。またいつ襲われるかわからないんだから」
「まあ、そうだけど、わからないものは考えたってしょうがないだろ。それより俺はお前の方が気になるんだが」
「俺？」
「さっきのラウラの攻撃をそらしたやつだよ。何なんだよ、あれ」
「ん～、俺も勝手に体が動いて、そのあとに頭で勝手に理解しちまったからわからないな」

「そうなのか？」
「ああ」
適当に名前をつけるなら『弾丸弾き』ってとこか。『弾』って言う字が二つ入ってるけど。
「しかし、体動かした後は風呂に入りたいな」
「お気楽なやつだな」
そう言いながら着替える。まあ俺も一夏の言う通り風呂入りたい。でもダメなんだろうな。
「よし、着替え終わり」
「あのー、織斑くんとデュノアくん、須藤くんはいますかー？」
「はい？　えーと織斑と須藤だけいます」
ドア越しに聞こえる山田先生の声に返事をする。何か用だろうか？
「入っても大丈夫ですかー？　まだ着替え中だったりしますー？」
「ああいえ、大丈夫ですよ。着替えは済んでます」
「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」
そう言って山田先生が入ってくる。
「デュノアくんは一緒ではないんですか？　今日は二人と実習しているって聞いていましたけど」
「あ、まだアリーナの方にいます。もうピットまで戻ってきたかもしれませんけど、どうかしました？　大事な話なら呼んできますけど」
「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、織斑くんから伝えておいてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別にすると色々と問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました」
「本当ですか！」
風呂好きの一夏にとってはとても嬉しいらしく、山田先生の手を取って言葉を続ける。
「嬉しいです。助かります。ありがとうございます。山田先生！」
「い、いえ、仕事ですから……」

「そうかもしれませんが、ありがとうございます」
俺も風呂には入りたかったので感謝だ。さすがに二ヶ月間ずっとシャワーだけだと風呂に入りたくなってくる。
「……一夏？　何してるの？」
「あ、シャルル。戻ったんだな」
「うん。二人こそまだ更衣室にいたんだ。それで、先生の手を握って何してるの？」
「あ、いや。なんでもない」
ぱっと一夏が手を離す。確かに見ようによっては変な誤解をされかねないな。
「先に戻ってって言ったよね？」
「お、おう。すまん」
「すまないな。山田先生からちょっと連絡があって」
シャルルの言葉に棘を感じるのは俺だけだろうか？　表情はいつも通りだから思い過ごしかもしれないが。なんか怒ってるように見える。
「そうなんだよ。喜べシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」
「そう」
やっぱり不機嫌そうだな。何が原因なんだ。
「ああ、そういえば織斑くんにはもう一件用事があるんです。ちょっと書いてほしい書類があるんで、職員室まで来てもらえますか？　白式の正式な登録に関する書類なので、ちょっと枚数が多いんですけど」
「わかりました。――じゃあシャルル、ちょっと長くなりそうだから今日は先にシャワーを使っててくれよ」
「うん。わかった」
「じゃあ山田先生、行きましょうか」
「なら俺も帰るとしよう。一夏、シャルル、じゃあな。山田先生、失礼します」

「……。はぁっ……」

ドアを閉め、寮の自室に自分一人だけになったところでシャルルははき出すようにため息を漏らした。

（何をイライラしてるんだか……）

さっきの更衣室での自分の態度が今になって恥ずかしい。一夏も、顔に出してはいなかったけど明宏もきっと面食らっていたに違いないと思うと、ますます落ち込みに拍車がかかる。

（……。シャワーでもして気分を変えよう）

シャルルはクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへと向かった。

第三十七話　予想外の展開（前書き）

第三十七話です

第三十七話　予想外の展開

「ドイツの第三世代型ＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲン。それに第三世代兵器のＡＩＣ（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）か……。面倒な相手だな」

一夏たちと別れたあと俺はシャワーを浴びて、あの漆黒の機体について調べていた。機体の名称や第三世代兵器についてのデータは得ることはできたが、機体のスペックについての詳細やその他の武装データはほとんど分からなかった。

コンコン。

シャヴァルツェア・レーゲンの対処法について考えていると、不意に部屋のドアがノックされた。

「誰だ？　って一夏か」

「おう。昨日ボディソープ切らしてたの忘れててさ、借りに来た」

「なんだ、その俺が持ってること前提の行動は。まあ、予備のがあるからやるよ」

「だって明宏だし。じゃあ、ありがたくもらっていくぜ」

「あ、俺も行っていいか？　風呂から上がったら一緒に飯食いに行こうぜ」

「もちろんいいぜ」

「じゃあ、ちょっと待ってろ」

とりあえず予備のボディソープを探す。といってもちゃんと整理しているから探すまでもないが。

「ほら、ボディソープだ。ちゃんと予備の買っておけよ」

「いや、明日買いに行くつもりだったんだよ。ちょうど今日で無くなると思ったんだが」

「予想が外れたと。まあ、いいや。早く行こうぜ」

「そうだな」

「じゃあ、シャルルにボディソープ届けてくる」
「早くしろよ」
一夏の言葉にそれだけ返すと一夏はシャワールームに向かう。とりあえず洗面所兼脱衣所まで持って行って、そこで声をかければいいだろうしな。
さて、シャルルがシャワーを終えるまでどうしようか。
「きゃあっ！？」
ガチャ！
シャワールームの方から女子の悲鳴のようなものと勢いよく扉を閉める音が連続で聞こえてきた。
一夏があんな声出せるはずないし、そうなるとシャルルか？　シャルルの声は俺や一夏よりも高いし、もしかしたら今のような声も出せるかもしれない。まあ、もしかしたらの話でシャルルがそんな声を出す理由なんてないだろう。
そんなことを考えていると一夏が戻ってきた。驚いたような表情だが、何かあったのだろうか？
「どうした？　なんか悲鳴が聞こえたけど」
「……シャワールームに女子がいた」
わけのわからないことを言い出した。女子がいるはずないだろう。
「は？　ここはお前とシャルルの部屋だろ？　それに今シャワーはシャルルが使ってるんじゃ――」
「「シャルル？」」
俺と一夏の声が重なる。確かにさっきの悲鳴はシャルルの声に似ているような気もするが、そんなはずは――ないとは言い切れない。
シャルルの今までの行動や言動、仕草はどこか女子に似ているように感じられた。初日の更衣室での反応といい、俺たちと一緒に着替えたがらないことといい、シャルルが女子なら全て納得がいく。
ガチャ……。
「！？」
「？」

気持ち控えめに響いた脱衣所のドアが開く音。一夏はその音にビクッと反応したが、ぎこちなくその音がしたほうを向いた。俺も同じように視線を移すと――

「あ、上がったよ……」

「お、おう」

――そこには女子いた。

第三十八話　語られる秘密（前書き）

第三十八話です

第三十八話　語られる秘密

「……」
「……」
「……」
無言。とってもいたたまれない。今まで味わったことのないほどの気まずさだ。
とりあえずこの雰囲気をお茶を飲んで紛らわせてから、本題に入る。俺がいることにシャルルは最初驚いたけど、今は落ち着いている。
「で、なんで男のフリなんかしていたんだ？」
「それは、その……実家の方からそうしろって言われて……」
「うん？　実家っていうと、デュノア社の――」
「そう。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」
「命令って……親だろう？　なんでそんな――」
「僕はね、愛人の子なんだよ」
シャルルの言葉に俺たちは言葉を失う。俺も一夏も『愛人の子』という言葉の意味がわからないほど馬鹿じゃない。
「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩＳ適応が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」
シャルルは言いたくないだろう話をそれでも健気に喋ってくれた。俺たちは、ただ黙って聞いてることしかできなかった。
「父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときはひどかったなぁ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれてたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだったが、その声は乾いていてちっとも笑ってはいない。
「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」
「え？　だってデュノア社って量産機ＩＳのシェアが世界三位だろ？」
「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。ＩＳの開発っていうのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があってやっと成り立っているところばかりだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」
『イグニッション・プラン』――今は第三次イグニッション・プランの次期主戦力機の選定中で、現在トライアルに参加しているのはイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ?型。どれもが第三世代型ＩＳだ。第二世代までしか開発できていないデュノア社はトライアルに参加すらできない。
「世界三位といえども、第二世代型では第三世代には勝てないってことか」
「明宏の言う通り。話を戻すね。それでデュノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でＩＳ開発許可も剥奪するって流れになったの」
「なんとなく話はわかったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」
「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに――」
「男子なら、一夏という日本の特異ケースに接触しやすいから。だろ？」
シャルルの言葉を遮って自分の考えを言う。シャルルはどこか苛

立ちを含んだ声で続けた。
「その通りだけど、一夏だけじゃないんだ。明弘とも接触するためでもあるんだ」
「俺も？　何でだ。公には『新型パワードスーツのデータを取るため』という名目で報道されていたはずなのに」
　確かにＩＳに似ているが、関係者以外にはＩＳとは根本的に違うものとしか知られていない。神王のデータを取ろうとは思わないだろうに。
「先月の事件を覚えてる？　あのときの神王の戦闘は大勢の人に見られているんだよ。一夏と凰さんが二人がかりでも苦戦した相手に一人で互角に戦った明弘の実力、それを見て僕の父親も明弘に接触しろ
と命令されたんだ」
「俺や一夏と一緒に特訓したのも白式と神王のデータを手に入れるためだったのか？」
「……うん。そうだよ」
　やはり、その父親はシャルルのことをＩＳ適応が高いと言う理由だけで、利用しているんだ。自分と血の繋がった娘を。しかも女子であるシャルルに男子として生きさせるなんて。
「だいたいそんなところかな。でも二人にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」
「「……」」
「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついていてゴメン」
　深々と頭を下げるシャルルを、俺が動く直前に一夏が肩を掴んで顔を上げさせた。
「いいのか、それで」
「え……？」

「それでいいのか？　いいはずないだろ。親が何だっていうんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろう、そんなものは！」
「い、一夏……？」
「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！　生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。親なんかに邪魔をされるいわれなんて無いはずだ！」
　一夏が大声で告げる。いきなりの行動にシャルルは唖然としてしまう。
「ど、どうしたの？　一夏、変だよ？」
「あ、ああ……悪い。つい熱くなってしまって」
「いいけど……本当にどうしたの？」
「俺は――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」
「あ……」
　おそらく資料か何かで知っていたであろう一夏の『両親不在』の意味を理解したらしく、シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。
「その……ゴメン」
「気にしなくていい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に親になんて今さら会いたいとも思わない。それに――」
　そう言って一夏が俺のほうに顔を向ける。たぶん俺のことを心配しているんだろう。本当にマメなやつだよ。そんな一夏に俺は首を振って応える。一夏もシャルルも自分の過去を自分で告げたのに、俺だけが逃げるわけにもいかない。
「――それより、シャルルはこれからどうするんだよ？」
「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」
「それでいいのか？」
「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」

「……だったら、ここにいろ」
「え？」
「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」
そうか、それは使える。それがあればこの状況を打破できる。
「――つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だろ？　それだけ時間があれば、なんとかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要だってないだろ」
「一夏」
「ん？　なんだ？」
「よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」
「勤勉なんだよ、俺は。それに、俺には心強い家庭教師がいるしな」
「バカな一夏に教え込むのはかなりたいへんだったぜ。まあ、教えたかいはあったか」
「誰がバカだ、誰が」
「ふふっ」
やっと笑ってくれたシャルル。その表情には屈託が無く、他のクラスメイトたちと同じ、十五歳の女子そのものだった。
「まあ、とにかく決めるのはシャルルだなんだから考えてみてくれ」
「うん。そうするよ」
シャルルはいつもと同じ明るい笑顔でそう言った。この様子ならもう心配は要らないだろう。
あとは……俺だけか。

第三十九話　信用するために（前書き）

第三十九話です

第三十九話　信用するために

覚悟を決めて口を開こうとした瞬間、いきなり部屋の扉がノックされた。

コンコン。

「「「！？」」」

「一夏さん、いらっしゃいます？　夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

いきなりのノックと呼び声に俺たちは三人して身をすくませる。

「一夏さん？　入りますわよ？」

まずい。俺がいることは別に大丈夫だが、今のシャルルの姿を見たら女子だってバレる。

「ど、どうしよう？」

「と、とりあえず隠れろ」

「隠れられる場所って、どこだよ……？」

「わ、わかったよ。とりあえず身を潜めて――」

「クローゼットだ！　クローゼットに入って――」

「だあっ！　なんでクローゼットなんだよっ！　ベッドベッド！　布団の中で大丈夫だ！」

「こういうときはクローゼットじゃないのか？」

「違えよ！　何だよそのお前の発想！？」

ガチャ。ドアが開く音が響いた。

「よ、よおセシリア！　なんだ？　どうした？」

「……何をしていますの？」

ベッドに飛び込んだシャルルに布団をかける形で乗っかっている一夏。なんだこの状況。

「い、いや、シャルルがなんだか風邪っぽいっていうから、布団をかけてやってたんだ。それだけだぞ、ははは……」

「……。日本では病人の上に覆い被さる治療法でもあるのかしら？」

ないだろ。そんな治療法。
「と、とにかく、あれだ。シャルルは具合が悪いからしばらく寝るって。夕食はいらないみたいだし、仕方ないから明宏と二人で行こうって話をしてたんだ」
「そ、そうそう」
布団の中からシャルルの声が聞こえる。もうちょっと調子が悪そうな声を出してくれよ。
「ご、ごほっごほっ」
「あ、あら、そうですの？　では、わたくしもちょうど夕食はまだですし、ご一緒しましょう。ええ、ええ、珍しい偶然もあったものです」
うわあ、なんともわざとらしい。それでもオルコットはだませたようだ。
「ごほごほっ。そ、それじゃあごゆっくり」
「俺はシャルルの看護してるから、二人で行ってこい」
そう言いながらも目線ではシャルルの分の夕食を持って来い、と一夏に伝える。一夏もどうやらそのつもりだったらしく、小さく頷いてきた。
「おう」
「デュノアさん、お大事に。さあ一夏さん、参りましょう」
そのまま一夏はオルコットに腕を取られて部屋を出て行った。あ、俺の分の夕食頼むの忘れてた。まあいいや。ひとまず危険が去ったことに安堵しつつ、俺はぽつりと呟く。
「一夏は親に捨てられた。お前は親に利用された。じゃあ、俺は……何なんだろうな」
「どうしたの？　明宏」
俺の呟きにシャルルが反応して顔をベッドから出して聞き返してくる。
「いや、なんでもない。それよりシャルル。さっきは一夏に先を越されたから黙っていたけど。俺からも言わせてくれ」

シャルルはまじめな顔でうなずく。俺はシャルルに問う。なんと言われようが、なんと思われようがかまわない。何があってもこれだけは訊いておきたい。

「お前はデュノア社のスパイとしてこのＩＳ学園に来た。そして父親の命令に従い、俺や一夏、神王、白式のデータを手に入れた。そうだな？」

「……うん。本当にごめん」

「謝る必要はないさ。俺が聞きたいのはそんなことじゃない。俺が聞きたいのは、お前がそれをどう思っていたのかということだ。お前は俺たちのデータを父親に渡すことを快く思っていたか？」

「……そんなはずない。そんなはずないじゃない……」

「我慢することはないさ。お前が本当は俺たちを売ることを快く思っていても俺は構わない。本当のことを言えばいい」

「そんなはずないって言ってるでしょ！　僕だってこんなことしたくなかった！　でも、僕には……！」

シャルルが大声で否定をする。本当に心の底から思いを吐き出した。

俺だってわかっていた。シャルルがそんなことを思っているはずがないと。それを確認するだけのことなのに、シャルルにいやな思いをさせてしまった。本当に俺は嫌なやつだな。

「今の言葉で十分だ。お前の思いはしっかりと伝わってきた。だからこそ俺は、お前の味方になろう」

「……え？」

シャルルがきょとんとした表情で俺を見る。

「お前は自分の保障を捨ててでも俺たちを売らなかった。自分のことより他人のことを思うお前だからこそ俺はお前の仲間になる。心からお前を信用する」

「……言ってることがよくわからないんだけど」

「言い方が悪いかもしれないが、お前を試させてもらった。お前の本当の思いを知りたかったんだ。お前が本当に信用できる人間なの

かを」
　心の奥底を知って初めて俺は人を本当に信用できる。俺が今まで俺として生きてきた中で学んだことだ。いや、俺が生きてきた中で学んでしまったことか。
「今の言葉を聞いてわかったよ。お前は本当に信用できる人間だ。だからこそ俺はお前の味方になる」
「……いじわる」
　シャルルがこちらを睨みながら言う。俺はそれを正面から受け止めた。
「ああ、そうだ。こうでもしないと人を信用できない愚かな人間だ。信用するためにはこんなことを平気で言う本当に愚かな人間だ」
「……偽悪者ってこういうのを言うのかな？」
「さあな。偽悪といっても今のが俺の本性かもしれないぞ？」
「もうっ、怒っちゃうよ？」
　いや、その様子からすでに怒ってるだろ。怒っちゃうというかすでに怒ってるだろ？
「まあ、落ち着けって。そんな愚かな人間から――俺からお前に教えたいことがある」
「……何かな？」
　わあ、まだ少し怒ってるよ。もう少しまともな試し方ができればよかったんだがな。
「まあ、愚かな人間の昔話と思ってくれて構わない。ただしそれは誰にも言わないと約束してくれないと教えることはできない」
「うん、約束するよ。どんなことがあっても誰にも言ったりしない」
　……即答された。一瞬の迷いもなく、さもそれが当たり前のことであるかのように。さきほどまでの怒りなど微塵も感じさせない真剣な顔で。
「……少しは迷ったりしろよ」
「だって明弘が言わないでほしいって言ってるのに、それを断る理由がないじゃない」

おいおい、そんな一夏と同じように真剣な表情で見るなよ。何で俺が自分の過去を話そうとする人間はみんなこうなんだ。……いや、こういう人間だから話そうと思ったのかもしれないな。

「よし、じゃあ教えてやる。……俺は――」

実はな、俺には両親がいないんだよ

第四十話　過去の話（前書き）

第四十話です

第四十話　過去の話

「……え？」

シャルルの顔が困惑の表情を浮かべる。まあ、以前一夏に話したときのあいつの反応からその反応は想定済みだったから俺は話を続ける。シャルルは自分の辛い過去をすべて話してくれた。だったら俺も自分の過去をすべて話すのが礼儀ってものだ。

「正確に言えば、親を覚えてない。俺は五年くらい前の夏だったか？　それより前の記憶がないんだ。気が付いたら薄暗い山に倒れてて、それからは一人で生きてきた。そして三年前に篠ノ之博士に拾われた」

「篠ノ之博士って、ＩＳを開発したあの篠ノ之博士？」

「ああ。生きる目的もなく、今にも死にそうだった俺にあの人はニコニコ笑いながらチョコをくれたんだよ。そのまま博士が住んでるところに行って、一緒に暮らし始めたってわけだ」

「そうなんだ……」

シャルルの声が沈んでいくのがわかる。さっき自分自身の過去を話したときのような哀愁はないが、その顔から寂しさが滲み出している。

「須藤明宏って名前も博士がつけてくれた名前だ」

「……本当の名前は？」

「本当の名前は覚えてない。すまないな。本当の名前がわからないからといって偽名を使っていたのは事実だ。黙っていて悪かった」

そう言ってシャルルに頭を下げる。数秒ほど経ったころシャルルが言葉を発した。

「……じゃあ」

「ん？」

シャルルは優しいから俺の境遇に同情しているんじゃないだろうか。それか、俺が偽名を使っていたことを知って、失望でもしたの

かもしれない。頭を下げてるせいで表情は見えず確認できない。俺は次に来るであろう言葉をじっと待つ。
「思い出したら教えてよ」
「……は？」
「だから、本当の名前思い出したら教えて。約束だよ」
俺の予想を大きく外れた言葉に思わず驚き、顔を上げようとする。しかしそれはシャルルの一言によって止められた。
「まだ顔を上げちゃダメ。さっきのこと、まだ怒ってるんだからね。教えてくれるって約束するなら許してあげるし、顔を上げてもいいよ」
まだ怒ってたのか、さっきのこと。ただ、そこまで本気で怒っているわけではないらしく、いたずらをする子供のように微かな笑い声を含みながらシャルルはそう告げた。それに対して俺は――
「わかった。約束しよう」
顔を上げながらシャルルにそう言った。顔を上げたいからという理由ではなく、ただ単に、シャルルに応えるために。
「うん、許してあげる」
そんなシャルルの様子を見て、ふと一夏に打ち明けたときのことを思い出す。今のシャルルはまるで――
「……まるで一夏だな、シャルル」
「一夏も同じこと言ったの？」
「ああ、あいつに話したときも同じことを言われたよ。許す代わりに本当の名前を教えろって、今のシャルルと全く同じことを」
「ふふっ、一夏も同じこと言ったんだ。なんだか面白いな」
そんな風に笑うシャルルに俺はさっきの約束を確認する。
「……よし、じゃあ改めて約束しよう。俺が本当の名前を思い出したらお前と一夏に教える。……特別にな」
「うん」
俺が苦し紛れについた照れ隠しなんてすべてお見通しなんだろう。デュノアは返事をした後、面白そうに笑っていた。

「でも、すごいね。一人で生きてきたなんて、並大抵のことじゃないよ」
「記憶を失って、自分の存在がわからなくてもなんとかして生きようと思った。せめて死ぬなら本当の自分を知ってからがよかったから……」
あのころは辛かった。嬉しさや喜びを分かち合える相手も、寂しさや悲しみを理解し合える相手もいなかったあのころは、本当に辛かった。
でも、あのころの自分がいたからこそ今の俺がいる。あのころの辛さがあったからこそ俺は成長できた。そう思いたい。
「死ぬだなんてそんなこと言わないで。僕は君に会えてよかったよ。君の存在はちゃんとわかる。一夏や他の皆もきっとそう思ってる」
「……そうだといいんだがな」
「大丈夫。皆、明宏のことをわかってくれる。だから心配しないで」
「……ありがとう」
こうして励まされたのはいつ以来だろう。こうして心から感謝の意を伝えたのはいつ以来だろう。すぐに思い出せないほど長い間励まされることも心から感謝することもなかったんだろう。
「……よし、もう大丈夫だ」
「よかった」
皆が俺をわかってくれる。シャルルの言葉を信じよう。もう大丈夫だ。俺は俺として生きていける。
「それで、明宏は昔のことをまったく覚えていないんだね？」
シャルルが俺に問いかける。それは質問というよりは確認の意味が強いのだろう。
「ああ。ただ、俺がＩＳ関係のどこかにいた可能性はある」
「え？　なんで？」
「俺が目を覚ましたとき、強く握りしめていたものがあってな。まあ、簡単に言えばＩＳのコア――今は俺の専用機『神王』のコアになっているだが」

目を覚ましたとき、俺の手に握られていたのはＩＳのコアだった。気を失ってなお、離さずに握り締めていたということはとても大事なものだったのだろう。――そして、俺の記憶の唯一の手がかりになる可能性を秘めたものだ。

「俺が以前の俺は取り戻す手がかり。その唯一の可能性であるそのコアは記憶を失った俺のお守りみたいなものだった」

「なるほどね。確かにそれならＩＳ関係のどこかにいた可能性は高いね。でもそのコアの情報を調べればどこの企業のコアかすぐに特定できるんじゃない？」

「あのときの俺はそれが何なのかすらわからなかったから、調べることも出来なかった。篠ノ之博士に拾われたあと、博士に調べてもらったけど現存する４６７機のコア、そのどれにも該当しない謎のコアだって言われた」

「現存のどのコアにも該当しない……それって篠ノ之博士以外にもコアを作れる人がいるってこと？」

今の話だけならそうなる。だが、あの人以外にＩＳのコアを作れる人間がいるということは考えられない。ＩＳのコアは、篠ノ之束博士にしか作れないはずなのだ。

「わからない。ただ普通のコアと比較すると違う点がいくつか見つかったらしい。だから本物のＩＳのコアというわけではないんだそうだ。俺は他のコアと区別するために『擬似コア』と呼んでいるが」

「違う点？」

「まず俺以外には反応を示さないそうだ。理由としてはそのコア――擬似コアには俺の細胞が組み込まれているからしい」

「明宏の細胞が？　どういうこと？」

「俺にもよくわからない。たぶん、コアを正常に作動させるために使用者の細胞を組み込む必要があったんじゃないかと思う」

「でも、明宏がそれを動かしたんだったら絶対に世界中に報道されると思うよ。その擬似コアを作った人だって世間に公表するはずだもん」

そうとおり。いくら本物ではないといってもあのＩＳのコアを作ったら普通なら世間に公表する。そうすれば一躍有名人だし、そもそも公表しないのならなぜ擬似コアを作ったのか理由が思いつかない。

「報道されなかったということは、擬似コアが完成していなかったか、それとも――」

「――世間に知られることを望まなかったか、だね」

「名誉や名声を捨ててでも擬似コアの存在を隠した理由。となると……」

戦争への使用。どこかへの強襲。ろくなことにしか思いつかない。

当然、周りの空気も重くなり、シャルルの表情も険しくなる。たぶん俺も顔をしかめているだろう。反政府組織、またはそれに準じたところに俺がいた可能性があるのだから。

「……まあ、そこは考えないことにしよう。考えるだけ無駄だ」

「……うん、そうだね」

考えてもわからないことをずっと考えても意味がない。考えるということはいいことだが、このことに関しては考えないほうがいいだろう。

「……俺のことよりもシャルルのことだ。俺のことは今すぐ何かする必要はない。焦らずにじっくり記憶を取り戻す手段を考えればいい。ただ、お前のことはそうもいかないだろう？」

シャルルの顔が沈んでいくのがわかる。それでもこの話を避けて行くことはできない。シャルルもそれをわかっている。

「シャルル、お前はどうしたい？　全て流れに任せるか、それとも流れに逆らっていくか。どっちがいい？」

「……それは……」

おそらく、自分の中で葛藤しているんだろう。逆らいたいけど、俺たちに迷惑がかかるのを恐れて答えが出せない。

「まあ、すぐに答えなんて出せないかもしれないからな。じっくり考えてくれ。俺はもう戻る」

「あ、うん」
「じゃあ、また明日。おやすみ。一夏にも伝えといてくれ」
「うん、おやすみ」
部屋のドアに手をかけながら俺は思い出したように言葉を繋ぐ。
「最後に一つ。今のお前は昔の俺のように辛い状況にいる。だけど俺が今ここにいられるのは篠ノ之博士が手を差し伸べてくれたからだ。そして今のお前にも手を差し伸べてくれる人が、一夏がいる。それならお前もこの状況を乗り越えられる。俺はそう思う」
最後に小さな声でありがとうと言って部屋をでたが、シャルルに届いたかどうかはわからない。

第四十一話　会えてよかった（前書き）

第四十一話です

第四十一話　会えてよかった

「おはよう、二人とも」
ブロンドの髪をした少女が俺たちに挨拶をする。俺は普通に、俺の隣にいた長髪の少女は元気よく挨拶を返すと、少女の隣に立っていた少女の母親が微笑みながら言う。
「ふふっ、二人とも今日も遊びに来てくれてありがとうね。この子、あなたたちと遊ぶのをいつも楽しみにしてるのよ」
「もうっ、お母さんだって二人が来てくれるのを楽しみにしてるでしょ」
「そうね、楽しみにしてるわ。だってあなたの大事なお友達でしょう？」
少女はふてくされたような表情になるが、母親はそれを難なく受け流しながら逆に少女に問いかける。
「もちろん！　二人とも大事な友達だよ」
「じゃあ、その大事なお友達と遊んでらっしゃい。そのあとに一緒にお菓子を食べましょう？」
「うん！　二人もいいよね？」
少女が俺たちに問いかける。俺も長髪の少女も断る理由がないので頷く。
「じゃあ、いってらっしゃい」
「いってきます」
母親と別れ三人になった俺たちはどうするかを話し合う。
「今日はどこに行く？　公園？　それともどこかのお店に行く？」
「わたしは公園がいいな」
「俺は店屋に行きたい」
ブロンド髪の少女の問いかけにまったく同時のタイミングで俺と長髪の少女が答える。しかしタイミングは同時なれど意見はまったく逆。

「……ははっ」
「……あははっ」
「……ふふっ」
まるで狙ったかのような出来事に、俺たちは一瞬の間のあと一斉に笑い出す。
一通り笑い、笑いが治まったあとに俺と長髪の少女は新たな意見を口にする。
「じゃあ、今日はお店を見に行こうか」
「今日は公園にでも行くか」
また同時。しかもどちらもお互いに譲り合い、相手の意見に賛成しているというまったく同じ行動。
次の瞬間俺たち三人はまた笑い出した。さっきに比べて笑いの程度も笑い続けていた時間も長かった。
数分間ほど笑い続けてやっと笑いも落ち着いてきたところでブロンド髪の少女が言う。
「本当に二人と一緒にいると楽しいね」
「わたしも楽しいわ」
「俺もだ」
少女の言葉に俺たちも賛成の意を示す。それを聞いてブロンド髪の少女は微笑みながら俺たちにこう告げた。
「君たちに会えてよかったよ。一緒にいてこんなに楽しい友達は初めてだよ」
そう言う彼女の紫色の瞳はとても澄んでいて、とても綺麗だった。
「俺もお前に会えてよかったと思っている。お互い様だ」
「わたしもー！　本当に会えてよかったよ」
「ふふっ、ありがとう」
「「こちらこそ」」
それぞれ感謝の言葉を口にしたあと、ブロンド髪の少女は数歩俺たちの前に出て言う。
「じゃあ、今日はお店と公園、どっちも半分ずつ行こうよ」

どちらの意見も切り捨てず、平等に取りまとめる。とても彼女らしい、そう思った。

「ああ」

「うん」

だからこそ、俺は、俺たちはその少女を追いかけた。そして少女に追いつく瞬間――

俺を待っていたのは暗く、静かな自室だった。

「……これで三度目、か」

時間は二時前。真夜中だ。何の物音も聞こえない。

体から吹き出る汗。悪夢を見たとき特有の不快感のなさ。思い出せない夢の内容。

やっぱりだ。全て一致する。一ヵ月半前、そして一ヶ月前の日と同じ。

『君たちに会えてよかったよ』

頭から離れない言葉。前の二回とも違う言葉だが、やはり頭に響き渡る。

会えてよかった。誰が言ったのかはわからないのに、なぜか覚えている言葉。

俺なんかに会えて何になるって言うんだ。自分の存在すらわからず、死ぬために生きてきたような空白（からっぽ）の俺だ。そんな俺に会えても何にもならないだろう。

そこで、はっと気がつく。言葉が頭から離れないことは前と同じ。ただ、前回までとは少し違う点があった。体が慣れてきたのか汗の量は少し少ない。それに夢の内容はまったく思い出せないが、言葉以外に一つだけ、本当に微かにだが思い出せることがある。

少女だ。俺と同じ色の髪と目をした少女。その存在だけは微かに

思い出せる。
今になって以前の二回の夢の中にもその少女がいたことがわかってしまった。なぜ今になってわかったのかはわからないが。
一体誰なんだ。俺と同じ色の髪と目。それでいて俺とは正反対のような性格をしている少女。
心がざわめく。何かとてつもなく重要な人間だと言うことを心が告げている。
とても近くにいた存在。本当は忘れたくないのに、思い出したいのに思い出せない。そんな存在。
思い出したい。でもなぜか体がそれを拒む。怖がる。思い出すことを恐れている。
「……ちくしょう。誰だよ、一体……」
そんな悪態に答える者は誰一人としていなかった。

第四十二話　慌ただしい朝（前書き）

第四十二話です

第四十二話　慌ただしい朝

シャルルが一夏と明宏に秘密を明かし、明宏もまたシャルルに自分の秘密を明かした翌日。授業もない休みの日の朝、一夏とシャルルの部屋にノックが響いた。

「おーい、一夏ー、シャルルー」

二人の部屋の前に立っているのは明宏。その姿はいつもの制服姿ではなく、黒のシャツに紺のジーパンというラフな格好である。

「……」

そんな明宏の呼びかけに対する応答はなく、返ってきたのは沈黙のみだった。

コンコン。

「……」

コンコンコンコン。

「……」

何度ノックをしても返ってくるのは沈黙のみ。明宏の顔にはどんどん苛立ちの表情が満ちていく。

ドンドンドンドン！

苛立ちが高まってきた明宏は、ノックを止め扉を強く叩く動作に切り替える。

当然、休日なので他の生徒たちの多くも廊下を歩いているのだが、そんなことは気にせず明宏はただ扉を強打し続ける。

「なんだよ、一体」

先ほどまで眠っていた一夏もさすがに目を覚まし、扉を開ける。その目はまだぼんやりとしており、頭も覚醒しきっていないようだ。

「なんだじゃねえよ。いつまで寝てる気だ？　もう九時だぞ」

「……九時？　もうそんな時間か？　でもなんでお前が俺の部屋に来てんだよ」

「なんでもなにも、今日は俺とお前とシャルルの三人で出かける予

定だっただろうが。忘れたわけじゃないだろうな」
「……あ」
そこまできて、やっと一夏の頭が正常に働き始め、今日の予定について思い出す。
そう、今日は明宏の言う通り三人で出かける予定だったのだ。そして、集合時間は九時。場所は一夏の部屋。
「やべえ！　忘れてた！」
「……本当に忘れてたのかよ」
そんな明宏の呟きを聞かずに一夏はすぐさま部屋の中に戻り、ベッドで眠っているシャルルを起こす。
「おい、シャルル！　起きろ！」
「……うーん。……一夏？　どうしたの？」
「どうしたのじゃない！　今日は明宏と一緒に出かける予定だっただろ」
「……あ」
先ほどの一夏と同じように言葉を漏らし、今日の予定を思い出す。
「あー！　そうだった！　急いで準備しないと！」
「シャルル、お前もか」
明宏がため息混じりに呟く。だが二人ともそんなことを気にかけている余裕はなく、せわしなく部屋を行ったり来たりしている。
普段の二人なら十分もあれば出かける用意は整うだろうが、今の二人は普段の二人ではない。慌てているゆえに無駄な動きも多く、たまに大きな物音が部屋に響く。どれくらい慌てているか一目でわかってしまうほどだった。
「……廊下で待ってるから、準備が出来たら出てこいよ」
「「わ、わかった！」」
二人の切羽詰った返事を聞いて、明宏はもう一度ため息をついて廊下へと出て行った。

「あー、すーくんだぁ。おはよ～」
部屋を出て真っ先にのほほんさんに出会った。相変わらず袖の余った制服を着ている。
「おはよう。今日は日曜なのになんで制服着てるんだ？」
「これからー、整備室に行くのでーす。だから制服なの～」
整備室。ＩＳの整備や調整、後付装備の量子変換をしたりするところだ。俺も以前数回ほど行ったことがある。
「休日に整備室に行くってことは、もしかして整備科志望？」
「今のところはね～。すーくんはお出かけー？」
「ああ。一夏、シャルルと一緒に行く予定だったんだが、あの二人寝坊してな。今は準備が出来るまで待ってるところだ」
「わー、男の子三人でお出かけ～」
実は男子二名女子一名なんだが。そんな言葉を飲み込む。シャルルが女子だってことは誰にも知られないようにしないとな。
「シャルルがまだこの辺りのこと慣れてないらしいから、俺と一夏で案内するんだよ」
「あー、そうなんだー。てっきり三人でデートかと思った～」
「デートなんかじゃねえよ。俺たちは全員男だ。変なこと言うなよ」
そう言いながらのほほんさんの頭をわしゃわしゃと少し強めになでる。のほほんさんも最初のうちは、うー、とかうなっていたが少しすればいつもののほほんとした表情に戻っていた。
「えへへー、冗談だよ～」
「冗談でもそんなこと言うな。今度言ったらもっと強くなでるぞ？」
「わーい、またなでてくれるの～？」
あれ？　罰のつもりで言ったのになぜか喜ばれた。わからん。なんであんなので喜ぶのだろうか。
「やっぱり言わなかった撫でてやる。だから二度と言うなよ？」
「あい～」
なんだかわからないが了解をもらえたのでよかった。この前、篠

ノ之たちに白い目で見られてからなんだかたまに嫌な気配がするんだよな。たぶんあの三人の愚痴か呟きを他の女子が聞いたんだろう。あの日から極少数だが、俺が一夏やシャルルと一緒にいると妙な目線を送ってくるやつが出てきた。

改めて訂正させてもらうが、俺は男が好きなわけではない。まあ、シャルルは女子だったが、俺に好かれて嬉しいはずないしな。

「じゃあ、私はもう行くね～」

「ああ、頑張れよ」

「あい～、じゃあね～」

俺に手を振ったあと、廊下を走っていくのほほんさん。いつも思ってたけど本当に走ってるのか、あれは。なんかめちゃくちゃ遅いんだが。

そんなこんなで時間をつぶしていると、ようやく一夏とシャルルが部屋から出てきた。

時計を確認すると、もう九時半をとっくに過ぎていた。

第四十三話　三人の日曜日（前書き）

第四十三話です

第四十三話　三人の日曜日

「で、どこに行く？」
ショッピングモール『レゾナンス』に着き、一夏が俺とシャルルに尋ねてくる。
「やっぱり最初は前に話した抹茶カフェでいいんじゃないか？　そのあとは適当に回っていけばいいだろうし」
「じゃあそうするか。シャルルもそれでいいか？」
「うん、いいよ」
俺の提案に一夏とシャルルも了承してくれる。これからの予定も決まったので、俺はさっきから気になっていたことを訊いてみる。
「なら決定だ。それより、気になっていたんだが、何でお前ら二人して寝坊なんかしたんだ？」
あの一夏が予定があるのに寝坊するはずがない。シャルルも同じだ。そんな二人がそろって寝坊するなんてよっぽどのことがなければありえないだろう。
「き、昨日いろいろあってな」
「う、うん」
「昨日？」
昨日って、ほとんど俺も一緒にいたが、シャルルが自分の秘密を話したこと以外にこの二人の間で何かあったか？　あったとすれば――
「まさか、俺が戻ったあとに何かあったのか？」
「「べ、別に何も！」」
「……あったんだな」
カマをかけただけだったのに、やっぱりあったのか。俺が自室に戻ったあとといえば一夏が持ってきた夕食をシャルルが食ったことぐらいだろう。
一夏は明後日のほうに視線を向けて、少し赤くなった顔を掻いて

るし、シャルルにいたっては顔を真っ赤にして俯いている。
「まあ、詳しいことは訊かないでやるよ。いいからさっさと行くぞ」
「あ、ああ」
「う、うん」
詳しいことを詮索するのは止めておこう。誰にでも知られたくない秘密ってものはある。こんな俺だからこそそれをよく知っている。

抹茶カフェで略式の抹茶をおいしくいただいたあと、俺たちはいろいろな店を回った。
服屋、本屋、雑貨屋などの主要なところから、挙句ゲームセンターまで。それはもういろいろな所を回り尽くした。
時刻はもう夕方。太陽が沈みかけているころ、俺たちは学園までの帰路をのんびりと歩いていた。
「今日はありがとう、二人とも。とても楽しかったよ」
もう何度かになるシャルルからのお礼。感謝されるのは嬉しいが、ここまで何度もお礼を言われると少し反応に困る。そこまでお礼を言われるようなことをしたつもりもないのに。
「まあ、俺たちのほうも楽しませてもらったから、お相子ってことで」
「そうだな。特にゲームセンターでは思いっきり楽しませてもらった」
「ゲームって言えば、二人ともうまかったよね」
シャルルは最初ゲームセンターにあまり馴染みがないのか少し戸惑っていたが、俺や一夏がやっている姿を見て少しずつだが慣れていった。うん、この状況適応能力はすばらしい。
「俺は中学のときから友達とよく行ってたからな。バイトで貯めたお金だからあんまり無駄遣いできなかったけど」
「俺はあんまり行ったことないな。家の家事やバイト、神王の調整

とかでほとんど時間もなかったし、金はあまり使いたくなかったし」
「二人ともバイトしてたんだ」
「いや、家計のほとんどは千冬姉がまかなってくれたんだけど、俺もアルバイトで家計を助けたかったんだよ。千冬姉だけに任せたくなくてさ。それでも家計の九割九分は千冬姉が負担してたけどな。一回食い下がってみたんだが、『その金は好きな女にプレゼントの一つでも買ってやればいいだろう』って言われた」
「へえ、そうなんだ。一夏は優しいね」
優しいのレベルじゃない。どんだけいい弟なんだ、こいつ。いや弟だけじゃないな。なんだよこの姉弟。この前の一夏が料理うまくなった理由もそうだけど、そこらへんの姉弟の比じゃない仲のよさだ。美しい家族愛の典型的な例だな。仲のよさのレベルは典型的じゃないけど。
「俺の方は逆に家計を全部まかなってたな。篠ノ之博士、よっぽどのことがない限り外に出ないし。一日の半分はバイトでつぶれてたな、たぶん」
「一日の半分って……学校は？」
シャルルが疑問を投げかけてくる。
「いや、学校には通ってなかった。そんな余裕なかったし。まあ、記憶を失くす前は知らないけど」
学校に通うほど金銭的に余裕なかったし、学校に行っている時間があればバイトに行ってた方がよかったし。
そんな風に昔のことを少し思い返していたら、二人の顔が少し沈んでいた。
「えっと……ごめんね。嫌なこと思い出させちゃって」
シャルルが気まずそうに言ってきた。なんで謝られてるんだろうか？　嫌なこと思い出させて、って――
「ん？　ああ、気にすんな。別に嫌なことじゃない。俺にとってはそこまで嫌な思い出じゃないんだ」
学校に行けなくたって、バイトして金貯めて、家計を支えられれ

ば博士への恩返しにもなるから、そこまで嫌なことじゃなかった。むしろ、博士の役に立てて嬉しかったぐらいだ。

しかし、二人は俺の過去に触れたことで俺が不快な気持ちになっていると思っているらしく、顔は沈んだままだ。こんなことではおちおち昔の話もできないので、二人に一応教えておく。

「言っとくけどな、俺が嫌なのは過去のことに触れられることじゃなくて、俺の過去や過去の出来事とかを笑われたり、馬鹿にされたりすることだ。そのあたり、ちゃんと理解してくれよな」

そう言って二人にデコピンをぶつける。最初二人は呆然としていたが、少し経つと微笑みながら了承してくれた。

「俺たちはバイトしてたけど、シャルルはどうなんだ？　代表候補生ってバイトとかする暇あるのか？」

「あ、確かに」

「えっと、代表候補生って一応国に所属している公務員に近いから、支給金があるんだ」

ほう、代表候補生には支給金が出されるのか。確かに公務員に近いだろうし、国の主要戦力になるうる人たちだから国の方もいろいろ頑張っているんだろう。

「へえ、代表候補生ってお得なんだな」

「一夏は代表候補生じゃないんだよね？」

「ああ、国際ＩＳ機関の方で審議してるらしいけど、まだ決まってないって」

「明宏の方は？」

「俺はＩＳを操縦できるわけじゃないから、無理だろ」

「あ、そっか」

そんな話をしていると、ＩＳ学園に到着した。そのまま一年生寮に入って、二人と別れ、自室に戻る。

朝はドタバタと慌ただしかったけど、いろいろな店を回れて楽しかったな。一人で行ったら絶対あそこまで楽しむことはできなかっただろうし、二人に感謝だ。

シャルルも昨日の件で余所余所しくなるかもと、少し不安だったが今日の様子からして大丈夫だろう。

そんなことを考えながら、夜は更けていった。

第四十四話　憎しみの理由（前書き）

第四十四話です

第四十四話　憎しみの理由

「……」
「……」
月曜の放課後。アリーナの更衣室へ先に行く一夏たちと一旦別れ、自室にタオルを取りに行く途中、廊下を歩いているとちょうど曲がり角のところでボーデヴィッヒと遭遇した。
ボーデヴィッヒは俺を睨みつけて動こうとしない。冷たく鋭い赤の隻眼が俺につけられる。なんだ？　どけってことか？　俺がどくべきとこなのか？
「……貴様」
「なんだ？　ドイツの代表候補生」
「一昨日のこととといい、なぜ私の邪魔をする」
「今はただ廊下で鉢合わせしただけだろ。それに不意打ちしたやつを邪魔して何が悪い」
「ふん。あれごとき避けられないのであれば、実力はしれているな」
当たり前のことのように言うボーデヴィッヒの態度。確かに軍人なら不意打ちや不測の事態にもある程度の耐性があるだろう。しかし、一夏は軍人じゃない。それどころかつい数ヶ月前までは戦いとは無関係の一般人だったんだ。こいつはそれをわかっていない。頭でわかっていても心ではわかりきれていない。
「なぜそこまでして一夏のことを敵視する？」
「私はあいつの存在を認めない。あんな男が教官の弟であるなど認めてたまるか」
「お前が認めなかろうが、一夏は織斑先生の弟だ。それは覆らない」
「貴様には関係ないことだ」
そう言いながら、俺を押しのけて歩いていこうとする。まったく、俺を押しのけるよりも俺の横を通った方がよっぽど楽だろうに。
「『第二回モンド・グロッソ』」

俺に背中を向けて歩いていたボーデヴィッヒが俺の言葉に反応する。

「それが原因だろ？」

「……貴様」

ボーデヴィッヒが振り返って俺を睨んでくる。さっきよりも鋭い眼光が俺を捉える。

「第二回モンド・グロッソの決勝戦の日。一夏が何者かに誘拐され、織斑先生は一夏を助けるために決勝戦を棄権。その後、一夏の居場所を教えてもらった借りを返すため、一年と少しの間ドイツ軍ＩＳ部隊で教官をしていた」

「……なぜそれを知っている」

「さてな。……まあ、ご苦労なことだ。第一回モンド・グロッソ優勝者である織斑先生が二連覇を成し遂げられなかった原因である一夏のことを認めたくないと」

「貴様には関係ないといっているだろう」

「ああ、関係はないさ。でもな、人の存在を否定するやつは許せないな」

理由はどうであり、人の存在を否定していいわけがない。誰にでもその人の存在理由がある。その人が存在することを望んでいる人がいる。こんな俺の存在を篠ノ之博士が、一夏が、シャルルが認めてくれた。だからこそ――

「だからこそ、一夏の存在を否定するお前の考えを否定する」

「ならどうする。ここで私と戦うか？」

「そんなことしたらお前の尊敬する教官様に鉄拳制裁をくらうからな。戦うなら今月の学年別個人トーナメント。そこで勝負と行こうじゃねえか」

「大衆の面前で負けを晒したいと言うならばいいだろう。叩き潰してくれる」

「はっ、上等だ。返り討ちにしてやる」

俺とボーデヴィッヒはお互いに言いたいことを言い合うと、正反

対の方向に向けて歩き出した。
勝負は月末。学年別個人トーナメント。代表候補生ならそう簡単に負けることはないだろうから、何か予想外の事態が起こらない限り、あいつと戦えるだろう。決勝戦で戦うなんてベタなことにはならないか。
ただ問題なのは、他の専用機持ちだ。一夏も今はまだまだだが成長の勢いはすさまじいし、オルコットや凰も油断できない。まあ今一番強敵なのはシャルルか。模擬戦も引き分けだったからな。
何はともあれ学年別個人トーナメント、楽しくなってきたじゃないか。

第四十五話　銀色の狂気（前書き）

第四十五話です

第四十五話　銀色の狂気

「待たせたな」
「おう。思ったより遅かったけどどうしたんだ？」
「ん？　何でもない。気にするな」
タオルを取って一夏、シャルルと合流。アリーナに向かっていた。
「今日使えるアリーナってどこだっけか？」
「確か今日使えるのは、ええと――」
「第三アリーナだ」
「「「わぁっ！？」」」
いきなり予想外の声が飛び込んできて俺たちは三人揃って声をあげた。
いつのまにか横に並んでいた四人目こと篠ノ之は眉をひそめる。
「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」
「お、おう。すまん」
「すまないな。気づかなかったんだ」
「ごめんなさい。いきなりのことでびっくりしちゃって」
「あ、いや、別に責めているわけではないが……ともかく、だ。第三アリーナへと向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦も出来るだろう」
「それはラッキーだな。人数が少ないなら明宏も戦えるだろ？」
「ああ、そうだな。今日は模擬戦でもやるか」
トーナメントに備えての予行練習にもちょうどいいだろう。
そんなことを考えながらアリーナに近付くにつれ、慌しい様子が伝わってくる。どうやら第三アリーナで何か起こっているようだった。
「なんだ？」
「何かあったみたいだな。様子見てみるか」
「誰かが模擬戦をしてるみたいだね。でもそれにしても様子が――」

ドゴォンッ！
突然の爆発。視線を向けると、その煙を切り裂くように影が飛び出してくる。
「鈴！　セシリア！」
二人は苦い表情のまま、爆発の中心部へと視線を向ける。そこには漆黒のＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るボーデヴィッヒの姿だった。
凰とオルコットのＩＳはかなりのダメージを受けている。ボーデヴィッヒも無傷とまではいかないが、二人に比べれば軽微なものだ。
「くらえっ！！」
凰の甲龍の両肩が開き、そこに搭載されている第三世代型空間圧作用兵器《龍咆》を最大出力で打ち出す。しかしボーデヴィッヒは避けようともしない。
「無駄だ。このシュヴァルツェア・ハーゲンの停止結界の前ではな」
《龍咆》の不可視の弾丸はいくら待っても届くことはなかった。
「くっ！　まさかこうまで相性が悪いだなんて……！」
凰の援護のため射撃を行うオルコット。同時にビ《ブルー・ティアーズ》を射出、ボーデヴィッヒに向かわせる。
「ふん……。理論値最大稼動の《ブルー・ティアーズ》ならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」
今度は左右同時、交差させた腕の先では目に見えない何かに掴まれたかのように《ブルー・ティアーズ》がその動きを停止させていた。
「動きが止まりましたわね！」
「貴様もな」
オルコットの狙撃をボーデヴィッヒは大型カノンによる砲撃で相殺させた。さらに凰を両肩に装備された刃付きのワイヤーで捕まえ、オルコットにぶつける。
「「きゃあっ！」」
ぶつかり、空中で一瞬姿勢を崩した二人へとボーデヴィッヒが突

撃をかける
　『瞬時加速』。見間違えるはずがない。一夏の十八番であり、俺の技能でもある、瞬時加速だ。
「させませんわ！」
　一瞬で間合いを詰められたオルコットが、半ば自殺行為ですらある接近戦でのミサイル攻撃を繰り出す。その爆発は凰とオルコットも巻き込み、二人は床に叩きつけられる。
「無茶するわね、アンタ……」
「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが――」
　煙が晴れ、そこに佇んでいるのはボーデヴィッヒだった。至近距離での大爆発ですら、ダメージはほとんど無かったかのように宙に浮いている。
「終わりか？　ならば――私の番だ」
　そこからはただただ一方的な暴虐だった。
「あああああっ！」
　腕に、脚に、体に、ボーデヴィッヒの拳が叩き込まれる。シールドエネルギーはあっという間に減って機体維持警告を超え、操縦者生命危険域へと到達する。これ以上は冗談でなく生命に関わる。
　しかしボーデヴィッヒは攻撃の手を止めず、大型カノンの発射準備をしながら普段と変わらない表情が確かな愉悦に口元を歪めた瞬間、俺は無意識のうちに飛び出していた。
　大型カノンが二人に当たる瞬間、俺が展開した《イージス》によってギリギリ防がれる。
「大丈夫か？　二人とも」
「あ、明宏……さん？　か、感謝……しますわ」
「あ、ありがと……」
「喋るな。……行け！　一夏！」
「おおおおおっ！」
　そして《イージス》を構えた俺の後ろから、白式をまとった一夏が《雪片弐型》を展開、『零落白夜』を発動させながら瞬時加速で

接近し、《雪片弐型》を振り下ろす。
「ふん……。直情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」
零落白夜が届く直前に、一夏の体が止まる。くそ、ＡＩＣか。
「な、なんだ!?　くそっ、体が……！」
「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・ハーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。――消えろ」
大型カノンが一夏に向けられる。
「一夏っ！　離れて！」
シャルルがアサルトライフル二丁での弾雨が降り注ぐ。
「ちっ……。雑魚が……」
一夏を拘束していた力が消え、一夏は瞬時加速で後方に退避。俺は一夏に凰とオルコットを任せ、入り違いになるように前方へ出る。そのまま《アトランティス》を展開、シャルルとともにボーデヴィッヒへと射撃を行う。
「一夏、二人は!?」
「シャルル、大丈夫だ。二人ともなんとか意識はある」
「よかった」
わずかに安堵するが、その手は一切休まることがない。
「面白い。世代差というものを見せ付けてやろう」
俺ではなく休まず射撃を続けるシャルルのほうに体をかがめて向ける。瞬時加速を行うのだろう。一夏は二人を抱えているので戦えない。シャルルだけでボーデヴィッヒの相手をするのは危険だ。
俺は急いで六連続瞬時加速を使ってシャルルの前に行こうとする。間に合うか……？
「行くぞ……」
「くっ！」
ボーデヴィッヒが飛び出そうとした瞬間、二人の間に影が割り入ってきた。
ガギンッ！
金属同士が激しくぶつかり合う音が響いて、ボーデヴィッヒは加

速を中断させられた。
「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」
「千冬姉！？」
その人物――織斑先生は普段と同じスーツ姿で、ＩＳどころかＩＳスーツすら着用していない。けれどその手に持っているのはＩＳ用近接ブレードで、１７０センチはある長大なそれをＩＳの補佐なしで軽々と扱っている。その上で今の横やりなのだから、常人離れしているとかのレベルじゃない。
「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」
「教官がそう仰るなら」
素直に頷いて、ボーデヴィッヒはＩＳの装着状態を解除する。
「織斑、デュノア、須藤もそれでいいな？」
「あ、ああ……」
「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」
「は、はい！」
「僕もそれで構いません」
「俺もです」
返事をし直す一夏にシャルルと俺が追従する。その言葉を聞いて、織斑先生は改めてアリーナ内すべての生徒に向けて言った。
「では、学年別トーナメントまでの私闘の一切を禁止する。解散！」
パンッ！　と織斑先生が強く手を叩く。それはまるで銃声のように鋭く響いた。

第四十六話　仕様変更（前書き）

第四十六話です

第四十六話　仕様変更

時間は第三アリーナの一件から一時間が経過し、俺たちは保健室にいた。ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯を巻かれた凰とオルコットが視線をあらぬ方向に向けていた。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

助けたときは素直に礼を言ってた二人だが、今は真逆のことを口にしている。まあ、こっちの方がらしいけどな。

「お前らなあ……。はぁ、でもまあ、怪我は大したことなくて安心したぜ」

「いや結構打撲ってのは結構きつい怪我だろ。お前だって先月全身に打撲したじゃないか」

「ああ、そうだった。確かにあれはきつかったな……」

一夏が少し遠い目をする。よっぽど先月の全身打撲が辛かったんだろう。

「こんなの怪我のうちに入ら――いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体が無意味――つううっ！」

「バカか、お前らは」

「バカって何よバカって！　バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

一夏が本当のこと言ったら、酷い反撃を受ける。まったく、一夏に見られたからってそこまで怒るようなことか？

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」

「お、シャルル、よくわかってるな」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。部屋に入ったときの言葉は一夏には聞こえていなかったようだが、俺はしっかり聞こえた。

凰とオルコットもしっかりと聞いていたらしく、顔を真っ赤にして怒り始める。
「ななな何を言ってるのか、全っ然わかんないわね！　ここここれだから欧州人って困るのよねえっ！」
「べべっ、別にわたくしはっ！　そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」
「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」
「ふ、ふんっ！」
「不本意ですがいただきましょうっ！」
凰とオルコットは渡された飲み物をひったるように受け取って、ペットボトルの口をあけるなりごくごくと飲み干す。
「はい。一夏と明宏も」
「お、さすがシャルル。サンキュー」
「ありがとう、シャルル」
シャルルが俺たちにも飲み物を渡してくる。そして俺たちはそれを受け取ると、それぞれ自分の財布を取り出して、代金を渡そうとする。
「別にお金なんていいよ。気にしないで」
「いや、俺たちが気にする」
「そういうことだ。……おっと」
財布から小銭を取り出すが、掴み損なって落としてしまう。しかもそのまま転がってベッドの下に。
「ん？　どうした？」
「小銭をベッドの下に落とした」
シャルルにお金を渡したあと一夏が聞いてくる。俺はそれに答えながらしゃがんで、ベッドの下を見る。あ、結構奥の方に転がってしまったようだ。ベッドの下に潜らないと取れそうもないな。
ドドドドドドッ……！
「な、なんだ？　何の音だ？」
一夏が呟いた瞬間、保健室のドアが吹き飛ぶ。ベッドの下にいる

から実際には見てないけど、ドアが異様な音を立てて開いたあとに何か重いものが床に落ちた音が聞こえた。たぶん、吹き飛ばされたドアだ。

「織斑君！」

「須藤君！」

「デュノア君！」

保健室にいきなり女子が入ってくる。っていうか雪崩れ込んでくる。足音の数からして相当な数だろう。

「あれ？　須藤君がいない！」

「部屋にいるかもしれないわ！　探しましょう！」

そんな声のあと、数人が部屋を出て行く音がする。それでもかなりの人数が残っているが。俺のこと探してるのか。出て行かないほうがいい気がするな。

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「「これ！」」」

状況が飲み込めない一夏たちに、女子生徒一同が何かを見せているようだ。

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「ああ、そこまでいいから！　とにかくっ！」

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

どうやら学年別トーナメントの仕様変更があったようだ。しかし、これはまずい。シャルルは実は女子なのだから、いつどこで正体がばれるとも限らない

「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

一夏がそう宣言し、それを聞いた女子が一瞬沈黙する。
「まあ、そういうことなら……」
「他の女子と組まれるよりはいいし……」
「男同士っていうのも絵になるしね……ごほんごほん」
女子達も驚いていたが、すぐに納得して様子で保健室を去っていった。というか最後の女子、何言ってんだ。
「よくやったな、一夏」
「まあ、当然だろ」
モゾモゾとベッドから這い出ながら言った俺の言葉に、一夏が当然だといった感じに返してくる。
「お前はどうするんだ？」
「……あ」
すっかり忘れてた。やばいな、どうしようか。
「まあ、いいや。締め切りまで逃げれば、抽選になるし」
「出来る限りサポートしてやるぜ」
「サンキュ」
「あ、あの、一夏――」
「一夏っ！」
「一夏さんっ！」
俺と話していた一夏にシャルルが声をかけようとして、それを上回る勢いで凰とオルコットがベッドから飛び出してきた。
「あ、あたしと組みなさいよ！　幼なじみでしょうが！」
「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」
ケガ人は安静にしてろ、傷に響いても知らんぞ。
しかも、幼なじみだったら篠ノ之もいるし、クラスメイトだったらシャルルでもいいじゃないか。
「ダメですよ」
いきなり登場した山田先生の言葉にその場にいた全員がびっくりする。
「お二人のＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベル

がCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ＩＳを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「うっ、ぐっ……！　わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！　不本意ですが！　トーナメント参加は辞退します……」

　凰とオルコットは納得したようだが、一夏はなぜ二人がトーナメントに参加できないのか理解できていないようだった。

「一夏、ＩＳ基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三だよ」

「え、えーと……」

「俺がかなりはじめの方で教えてやっただろうが、基礎の中でも重要なことなんだからちゃんと覚えておけよ」

「『ＩＳは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼動も含まれ、ＩＳのダメージがレベルＣを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼動に悪影響を及ぼすことがある』」

「シャルルの言う通りだ。二人のダメージレベルはＣを超えているって山田先生がさっき言ってただろ？」

「おお、それだ！　思い出した！」

　とりあえず話はまとまったところで、一夏が疑問を口にする。

「しかし、なんだってラウラとバトルすることになったんだ？」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、何と言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「？　ふうん？」

　一夏はわかってないようだが、おそらく一夏のことを侮辱でもされたのだろう。ボーデヴィッヒは一夏のことを嫌っているからな。

「ああ。もしかして一夏のことを――」

「あああっ！　デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですわ！　まったくです！　おほほほほ！」
感づいたシャルルを二人が取り押さえた。二人から口を覆われて、シャルルが苦しそうにもがく。
「こらこら、やめろって。シャルルが困ってるだろうが。それにさっきからケガ人のくせに体動かしすだぞ。ホレ」
一夏が二人の肩を指でつつく。そのまま二人は、凍りついた。
「あ……すまん。そんなに痛いとは思わなかった。悪い」
「い、い、いちかぁ……あんたねぇ……」
「あ、あと、で……おぼえてらっしゃい……」
シャルルは助かったけど、その代わりあとで一夏が大変なことになりそうだ。

第四十七話　情報収集（前書き）

第四十七話です

第四十七話　情報収集

「さてと、俺はシャルルと組むことになったけど、明宏はどうだった？　一応昨日知り合いに声はかけてみたんだろ？」

翌日の火曜。俺たちは一夏たちの部屋で学年別トーナメントについての話し合いをしていた。

「だめだった。全滅だよ」

知り合いといっても篠ノ之とオルコット、凰、あとはのほほんさんくらいだ。オルコットと凰は出場できないから除外、のほほんさんはかなりんとやらと組むらしく断念。篠ノ之は――

「箒はどうなんだ？　なんか昨日俺と組んでくれって言ってきたから空いてるはずだぞ」

「篠ノ之はだめだ。正直言うと、相方がどんなやつでもいいんだが、ボーデヴィッヒと戦うときはあいつの相方を抑えてもらわないとならない。――はっきり言ってしまえば篠ノ之では押さえられないと、俺は思っている」

「確か篠ノ之さんってＩＳ適正がＣだったよね。いくら生身での戦闘が強くてもそれじゃあ抑えられないかも」

シャルルが冷静に判断して意見を言う。さすがは代表候補生、頭がよく切れるな。

「それに篠ノ之が使うと言えばまず打鉄だろう。あれは初心者にも扱いやすい防御型だ。しかも近距離メイン。もしものとき連携が取り難い」

一夏の白式のように機動力がある機体ならまだやりやすいが、防御型の打鉄ではとっさのときの離脱が遅れる。そうなれば素早い連携が取れず、こっちが不利になる。

「できれば専用機持ち。訓練機でもできれば遠距離型のリヴァイヴの方がいい。それにある程度適正が高く、ＩＳの扱いが出来る相手ってことか」

「それだと完璧に篠ノ之さんは当てはまらないね」
少しため息混じりに言う一夏と、苦笑しながら言うシャルル。理解が早くて助かる。
「そうなると、代表候補生であるオルコット、凰、ボーデヴィッヒ、あと四組の専用機持ちが一番有力なんだが、オルコットと凰はトーナメントに参加できない。ボーデヴィッヒと組むのは本末転倒だし、四組の専用機持ちには頼んだけどばっさり断られた。他の女子の中で誰がリヴァイヴを使うのか、誰がどれほどＩＳの扱いに長けているか、まるでわからない。だからもう諦めた。抽選で自分の運を信じるさ」
こうなったらそれぐらいしかいい案が思いつかない。だったらそれに賭けてみようというのが俺の考えだ。
「そうか。そうと決まったら次は試合のことだな」
一夏がそう言って議題を変える。目つきがさきほどよりやや真剣みを帯びているということは、間違いなくボーデヴィッヒのことを考えているな。
「試合といっても、お前たちは専用機持ちのペアだ。敵はボーデヴィッヒぐらいだろう。俺もあいつ以外に負けるつもりはないし」
「それって僕たちにも負けるつもりはないってことかな？　僕たちにとってはボーデヴィッヒさんもそうだけど、明宏だって強敵なのに」
ああ、そうだった。こうやって普通に話していたけど、一夏とシャルルも敵だった。しかも強敵だ。
「身近すぎてとっさに出なかっただけだ。お前たちのコンビだって十分厄介だよ」
「まあ、とりあえず明宏のことはシャルルと二人で話し合うとして、当面の敵はラウラだな。セシリアと鈴があそこまで一方的にやられるなんて、並みの相手じゃない」
「でも僕たちはボーデヴィッヒさんとまともに手合わせしたことないし、情報もあんまりない。どうするの？」

シャルルの言う通り、俺たちにはボーデヴィッヒの情報が欠落している。情報もなしに対策など立てられえるわけがない。
「わかっているのは一夏の事をすごく敵視していることだ。そうなると試合開始と同時に一夏に襲い掛かってくるだろうから。一夏はボーデヴィッヒを引き付け、その間にシャルルがボーデヴィッヒの相方を倒す。それが妥当だろうな」
「でも、それだけじゃあボーデヴィッヒさんに勝てるかわからないね。どうするの？」
シャルルがもっともなことを口にする。試合の展開を決めたぐらいであのボーデヴィッヒには勝てない。かといって対策を立てるほどの情報がない。そんな状態でどうするのかと、シャルルは訊いて来た。
「どうするもこうするも、一つしかないだろ？　ボーデヴィッヒの情報を手に入れて対策を立てる。それだけだ」

「で、なんでアンタたちが三人揃ってあたしの部屋に来たわけ？」
さっきの話し合いから約十分後、俺たちは鳳の部屋にお邪魔している。
昨日あれほど打撲の痛みに苦しんでいたとは思えないほどいつもどおりの様子で鳳が尋ねてきた。
「ただ、お前がオルコットと二人で挑んだというのに、ボッコボコにやられた相手のことについて教えてもらいに来ただけだ」
「アンタ、本当に教えて欲しいと思ってんの？」
あれ？　事実を言っただけなのに睨まれた。
「思ってるさ。あいつに勝てる可能性を高くするために」
「……ふーん、勝てる可能性を高くするためってことは今のままでも勝つ算段はあるってわけ？」
お、何気なく言った言葉によく反応したな。流してくれると思っ

たのに。
「まあな。ただ、算段があっても確率が高いことにこしたことはない」
「じゃあ、もう一つだけ質問。なんでセシリアじゃなくてあたしのところに来たの」
「遠距離型のオルコットよりも近距離で戦ったお前の方がより細かいところにも気がついている。そう思ったのが理由だ」
遠距離型の人間は広い視野で戦闘を見ることができる。対して近距離型の人間は一つのことを詳しく見ることができる。だからこそ凰の方がボーデヴィッヒのことをより詳しく、細かく分析できているだろう。そんな考えだ。
「まあいいわ。アンタにはちょっと借りがあるし、教えてあげる」
「ありがたい」
借り、というのはおそらく凰が転校した初日の夜のことだろう。あれが借りになるとはあんまり思えないのだが、あれ以外に思いつかないからそうだろう。
一夏とシャルルが今の会話が何のことを指しているのかわからず首を傾げているが、気にせずに進める。
「ＡＩＣ。それがなんなのか、わかるわよね？」
「ああ、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。慣性停止能力だな」
「そうよ。あいつは停止結界っていってたけど、極端に言えば、対物理攻撃に特化したドイツの第三世代兵器。対象の慣性を特殊なエネルギー場で止めて、完全に停止させる」
「名前から少しは予想してたけど、とんでもないね。慣性を止めるとなると物理攻撃は一切通らないとほぼ同じだし」
ただ、止められるのはたぶん物理的なものだけだろう。それにエネルギー場を利用してるということは一応突破法はある。
「エネルギー系の攻撃、もしくはバリアー無効化攻撃。この二つだな」

「ん？　どういうことだ？」
　一夏が話しについていけていない。シャルルは俺の言葉を聞いて、そうかと言わんばかりの表情を浮かべていたが。
「エネルギー系の攻撃、俺の《アヴァロン》やオルコットの《ブルー・ティアーズ》、《スターライトｍｋ？》ならＡＩＣの効果を受けないだろうと言うことだ。もう一つのバリアー無効化攻撃――これはお前の零落白夜だ。それなら慣性を停止させるエネルギー場を切り裂くことができる」
「なるほどなぁ」
「これぐらいわかれ。バカが」
「うるせえ。俺はお前みたいに頭よくないんだよ」
「だからこそ勉強しろと言っているんだ」
「してるじゃねえか！」
　俺と一夏で言い争いをはじめる。傍目から見ればケンカだが、これは俺たちのコミュニケーションの一つだ。その証拠に一夏の目が本気になっていない。
「はあ、まったくアンタたちってホント仲いいわよね」
「「どこがだ！」」
　見事に一夏と重なった。それを皮切りに部屋にいた四人揃って笑い出す。
「あははっ。まあ、あたしが教えられるのはこれぐらいね」
「これだけで十分だ。感謝する。あとは俺たちだけで考えるさ」
　ひとしきり笑ったところで凰にお礼を言って部屋をあとにする。
　さてと、情報も集まったし、対策を立てるとするか。

第四十八話　もう一人の自分（前書き）

第四十八話です

第四十八話　もう一人の自分

放課後の教室。静まり返り、物音一つしない教室に俺たちはいた。
窓から夕日を眺める。もうすぐ夜が来る。その直前に最後といわんばかりの赤く燃える太陽。寂しく思える風景だが、俺はこれが好きだった。隣にいる長髪の少女も黙って夕日を見ている。
「あれ？　アンタたち何してんの？」
不意に教室の扉が開き、怪訝そうな顔をしたツインテールの少女が入ってきた。
「夕日が見たくてな。この教室は夕日がよく見える」
「ふーん。夕日、好きなの？」
「ああ。沈む直前に燃える太陽。寂しさや切なさが感じられる、いい景色だ」
「もうすぐ暗い夜が来るけど、その直前に最後の光を残そうとする。綺麗だと思うよ。まあ、わたしは夜明けの方が好きだけど」
俺の言葉に長髪の少女が続く。それを聞いたツインテールの少女は少し驚いた表情になった。
「意外ね。アンタたちって何もかも同じだと思ってたけど、そうじゃないんだ」
「うん、これだけは同じじゃないよ。これがわたしたちの唯一ともいえる相違点」
「ただ、俺も夜明けは好きだし、こいつだって夕暮れも好きだ。どちらがより好きか、それが少しだけ違っていただけの話だ」
「へぇ。なんか珍しいものでも見た気分だわ」
「あとのことは全部一緒だけどね～」
「その通りだ」
「まったくアンタたちってホント仲いいんだから」
ツインテールの少女が呆れたように言う。それでも俺たちは否定しない。

「仲いいよ～。だってもう一人の自分とも言える存在だからね」
「違いない」
「でも、あんたたちほど仲いいやつって見たことないわよ」
「それは皆、自分は一人と思ってるからだろう」
「確かに自分は一人だけど、もう一人の自分といえる存在はどこかにいるもんだよ」
ただ俺たちの場合はそれが一番近くにいただけだ。と俺が締めくくると、ツインテールの少女は確かにね、と頷いた。
「もう一人の自分、か。いいこと聞いたわ。ありがとね。じゃあたし、家の手伝いがあるから」
そう言って小走りで教室をあとにするツインテールの少女。廊下からリズムのいい靴音が聞こえて、すこしずつ聞こえなくなった。
もう一度、窓の方を向いて夕日を見つめる。夕日はちょうど沈みきる直前で、俺たちは二人静かに暗くなっていく外を眺める。

気がつくと、俺はベッドの中にいた。

「……四度目、だな」
三時過ぎの真夜中。周りは無音に包まれている。
不快感のない体から吹き出る汗。思い出せない夢の内容。
すべてが一致する。今までの夢と。

『まったくアンタたちってホント仲いいんだから』

頭から離れない言葉。今までとはまるで違う言葉。しかしやはり頭に響く。
仲がいい。一体誰のことを指している？　夢の内容が思い出せないから、誰かは特定できない。
そこで頭をよぎるのは、俺と同じ色の髪と目をした少女。今回の夢にもその少女が出ていたことが思い出せた。

可能性としては高いだろう。おそらくその少女は俺と何か深い関係があるはずだ。そうでなければ毎回夢に出てくるはずがない。

誰だ？　なぜ思い出せない。

誰だ？　なぜ思い出すことを体が拒む。

誰だ？　なぜ思い出したいのに、思い出したくないと感じる。

誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ。

頭が混乱する。頭から離れない言葉と、少女の存在。その二つが頭の中をぐるぐると回転する。

「お前は誰なんだ。記憶のない俺がなぜお前の存在だけは思い出せるんだ……」

疑問に答えるものはいない。誰に聞かれないその言葉は夜の闇の中に溶けていった。

第四十九話　対戦相手と相方（前書き）

第四十九話です

第四十九話　対戦相手と相方

六月も最終週に入り、ＩＳ学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。その慌ただしさは予想よりも遥かにすごく、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

その後各アリーナの更衣室で着替え。俺たち男子――一人は女子だが――は例によってこのだだっ広い更衣室を三人占め。たぶん、反対側の更衣室では本来の倍の女子生徒を収容して、大変なことになっているだろう。

「しかし、すごいなこれは……」

更衣室のモニターで観客席の様子を見ると、そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェントなどといった顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係はないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

シャルルが説明をする。それでも一年の会場にも二、三年と負けないほどの人が詰め掛けている。

「まあ、今年は一年にも注目が集まってるらしいがな」

「なんでだ？」

「世界で唯一ＩＳを動かせる男子、第三世代ＩＳ、ついでに名目上はＩＳに次ぐ新型パワードスーツのお披露目兼初の公式戦だ。これだけの要因があれば嫌でも各国の注目を引く。特に第三世代を開発したイギリス、中国、フランス、ドイツ、あとは日本あたりが特に注目してるだろうな」

「ああ、確かにな。そうなると……もしかして、シャルルの親父も来てるかもしれないな」

「……そう、だね」

シャルルの表情が暗くなる。一夏はしまったと言う顔になったあと慌ててシャルルを元気付ける。
「だ、大丈夫だって！　俺たちはシャルルの味方だ。絶対に見捨てたりはしない」
「一夏の言う通りだ。何が何でも守ってみせるさ」
「……ありがとう、二人とも。もう大丈夫」
シャルルの様子もいつも通りに近付いた。とりあえず、一安心だな。
しかし、シャルルが元気を取り戻したと思ったら、次は一夏が心ここにあらずといった様子になってしう。
「一夏はボーデヴィッヒさんとの対戦が気になるの？」
「まあ、な」
「感情的にならないでね。彼女は、おそらく一年の中では現時点での最強だと思う」
「ああ、わかってる」
二人の周りに緊張した空気が流れる。試合前からこんなに緊張していたら、試合で実力を出せないだろうから少し空気を和ませてみる。
「おいおい、それじゃあ俺は弱いみたいじゃないか？　俺があいつに劣るとでも思ってるのか？」
「確かに明宏だって強いさ。でも、あいつの強さはお前も見ただろ」
「……ＡＩＣ（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）。シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器」
「慣性停止能力。あれはやっかいだね」
特殊なエネルギー場によって対象の動きを止める。零落白夜ならそのエネルギー場を切り裂けるはずだが、それに触れず一夏の腕を直接止められたら何の意味もない。結局確実な対抗策は見つからなかった。
「物理的な攻撃が防がれるってころは、僕あんまり役に立てないかも」
シャルルが少しくらい声でそんなことを言う。

そういえばシャルルの武装はほとんどが実弾系の物ばかりだ。ボーデヴィッヒとは相性が悪いだろう。
「まあ、やるだけやるしかねえさ」
「……そうだね。そろそろ対戦表が決まるはずだよ」
「一年の部、Ａブロック一回戦第一試合とかだったら運がいいな」
「え？　どうして？」
「待ち時間に色々考えなくても済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」
「ふふっ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、ちょっと考えがマイナスに入ってたかも」
この二人、一見正反対に見えるが、だからこそ馬が合うのかもしれない。ペアを組むことになってこの二人は特訓を重ねて、しかも同室であることも手伝ってか、二人はかなり親しくなった。
「そりゃ、一夏はバカだからな」
「バカって言うな、バカって」
「すまん。まあ、お前らよりも俺が先にあいつと勝負になっても恨むなよ」
「恨まねえよ」
一夏と軽口を飛ばし合っていると、シャルルが思い出したように口を開いた。
「そういえば明宏のペアの相手ももうすぐわかるね」
「ああ、そうだな。できればリヴァイヴに当たってほしい」
「相手本人じゃなくて機体で決めるな」
「しょうがないだろ。打鉄とは連携が取りづらいんだろうから」
「あ、対戦相手が決まったみたい」
シャルルの言葉を聞いて、電子板に視線を向ける。
そこに映された事実を見た瞬間――
「これはまた……凄い偶然もあったもんだな」
一夏は一瞬驚きの表情を見せたが、すぐに真剣な顔になり、
「あはは……誰かの作為を感じるね」

シャルルは苦笑しながら、そんなことを呟き、
「……はぁ」
俺は深い深いため息をついた。

『学年別ペアトーナメント。一年生の部、Aブロック一回戦第一試合。
織斑一夏　シャルル・デュノア　VS　須藤明宏　ラウラ・ボーデヴィッヒ』

第五十話　試合直前（前書き）

第五十話です

第五十話　試合直前

「はぁ……」

試合直前だというのにまったくモチベーションが上がらない。こんなことは今までなかったことだ。オルコットとの決闘のときももう少しマシだったぞ。

まあ、原因はわかりきっている。ボーデヴィッヒとペアになったことだ。あいつと戦うのが目的だったのに、それができない。それどころか味方になってしまうなんて最悪だ。あっちは俺のこと味方だなんて思ってないだろうけど。

「そんなに落ち込むなよ」

「うるせえ。なんで俺があいつとペアなんだよ。俺の一番の目的が達成できないだろうが……。近くにいるのに戦えないとか、どんな罰ゲームだよ。すぐにでも戦える状況で戦えないとか、どんな嫌がらせだよ」

一夏が慰めの言葉をかけてくるが、今の俺には意味はない。それどころか逆に現実を突きつけられて嫌になってくる。

「一番の目的って……他になんか目的あったの？」

「何言ってんだシャルル。お前と一夏を叩き潰すことに決まってんだろ」

「「……」」

あれ？　なんで二人とも黙るんだ？　当たり前のこと言っただけだろ？

「本人を前に『叩き潰す』はどうかと思うぞ」

「じゃあ、ぶちのめす」

「うん、あんまり意味合い的には変わってないよ。明宏」

「なら何て言って欲しいんだよ。二人は」

そう訊いた途端、二人が痛いとこ突かれた、みたいな表情で一瞬固まる。

「ま、まあ、『正々堂々戦おうぜ』とか？」
「そ、そうそう！　『お互いベストを尽くそう』とかね」
「じゃあ、お互いベストを尽くして正々堂々と戦って叩き潰してやる」
「結局叩き潰すかよ！？」
「うるせえ。今俺は少しヤケになってんだ。かなりイラついてんだよ」
「まあ明宏らしくていいんじゃないかな？」
シャルルが少しあせりながら話をまとめてくる。
「じゃあ、俺らしく戦わせてもらうとするか。……じゃあな、二人とも。次会うときは敵同士だな」
「……ああ」
「負けないからね」
そろそろ反対側のピットに行かなければならない時間なので、二人と最後に一言交わして別れる。
さて、俺の相方とご対面か。ああ、面倒くせえ。

数分で反対側のピットに到着。俺の相方はすでに来ていて、目をつぶったまま、壁に背中をつけて微動だにしていない。
「……お前が私のペアの相手だと……？」
「俺を睨むな。文句なら抽選をやったやつに言え」
俺の気配を察知したのか、ボーデヴィッヒは俺に鋭い視線を送りながら一言呟いてきたので、俺も言い返す。本当に面倒くさいやつだな。
「まあいい。私の邪魔だけはするな」
「そっちこそ足手纏いになるなよ」
「ふん」
俺を一瞥してまた目をつぶるボーデヴィッヒ。

くそ。こうなったら乱戦に持ち込んで一夏たちと一緒にこいつも叩き潰してやろうか。そんな物騒な考えが浮かんだが止めたほうがいいだろう。織斑先生に見られたら大変だ。

まあ、ペア戦とは銘打っているが、俺たちの場合はペア戦なんてもんじゃない。実質、俺ＶＳボーデヴィッヒＶＳ一夏＆シャルルのようなもんだ。何このカオス。たぶん他の試合に比べてとても血みどろな試合になりそうだ。試合と言うよりは戦場か。

『まもなく学年別ペアトーナメント。一年生の部、Ａブロック一回戦第一試合を開始します。選手の生徒はアリーナ中央に来てください』

おっと、そろそろ試合開始か。ボーデヴィッヒは一人で勝手に出ていっちゃったし、俺も行くか。クラス対抗戦のときみたいな問題が起きなければいいけどな。

第五十一話　試合開始（前書き）

第五十一話です

第五十一話　試合開始

「一回戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたと言うものだ」
「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」
アリーナの中央。それぞれＩＳを展開している一夏とボーデヴィッヒが言葉を交わしているのを、横目で見ながら目の前にいるシャルルに意識を向ける。
「この前の模擬戦の決着、着けさせてもらうよ」
「決着なんてどうでもいい。俺はただ全員を叩き潰すだけだ」
それだけ言ってそれぞれ口を閉じ、試合開始を待つ。
試合開始まであと五秒、四、三、二、一――開始。
「「叩きのめす」」
一夏とラウラの言葉は奇しくも同じだった。
試合開始直後、一夏の《雪片弐型》とボーデヴィッヒのプラズマ手刀が交錯する。俺はシャルルの弾雨から逃れつつ、展開した《アヴァロン》と《アトランティス》でシャルルに攻撃をする。
シャルルの得意とする技能『高速切替（ラピッド・スイッチ）』。事前呼び出しを必要としない、戦闘と平行して行えるリアルタイムの武装呼び出し。シャルルの器用さと瞬時の判断力があってこそできる芸当だ。
途切れない攻撃というのは避けるのも辛いが、精神的にも辛い。いつ攻撃すればいいのか、どうすれば避け切れるのか、そんな考えが頭をちらつき、精神を磨耗させる。
なら、考えなければいい。相手のことは考えず、ひたすら避け続けて、撃つ。幸い、以前の模擬戦のおかげである程度耐性はついている。あとは――
「ッ……！」
シャルルの攻撃を避け、俺が特定の場所まで来たら急にシャルルの弾雨が弱くなる。そこをついて俺は攻めに転じて、シャルルに攻撃を続ける。

さあ、この状況、どう切り抜ける？　シャルル。

「……おかしいですね」

「何がだ？」

ピットのモニターで試合を見ていた真耶がポツリとつぶやく。その斜め後ろでモニターを見ていた千冬がそのつぶやきを拾って聞き返した。

「須藤くんの動き方ですよ。さっきから織斑くんとボーデヴィッヒさんが戦っている周りを中心に動いています。一体なぜ……？」

真耶の言うとおり、明弘はアリーナの中心で戦っている一夏たちの周囲を旋回しながらシャルルに攻撃している。

明弘とラウラはお互いに協力するつもりはまったくない。乱戦になればペアで訓練していた一夏とシャルルが有利になる。それなのに、明弘は一向に一夏とシャルルを引き離そうとしない。

「おそらくデュノアの動きを封じるのが狙いだろう」

「デュノアくんの動き……ですか？」

「そうだ。織斑の近くにいることでデュノアの攻撃には躊躇が生まれ、攻撃の手が鈍る。デュノアは攻撃するとしてもショットガンのような広範囲に攻撃する武器は使えず、須藤に狙いを定めるために慎重になる」

「はぁぁ、すごいですね。相手の仲のよさを逆手に取った戦略ですか」

「戦闘中に攻撃を躊躇するなど、仲がいいのではなくただ甘いだけだ。須藤なら躊躇わずに攻撃するだろうな」

ただ、デュノアもこのまま黙っているやつではないだろう。そんな千冬の心のつぶやきに当然、誰も答えることはなかった。

「はああ！」

一夏の周りで動き続け、シャルルの攻撃を抑えてから数分。シャルルは両手の銃を収納して、近接ブレード《ブラッド・スライサー》を一瞬で展開、同時に俺へと突撃してくる。

遠距離武器ではなく近接武器なら一夏のことを心配する必要はない。この状況で焦っているはずなのに、数分でそれに気づくとはな。ただ、甘い。

「待ってたぜ」

シャルルの突撃をギリギリまで引き付けて、一気にスラスターと推進翼を総動員させて、真上に回避する。そしてちょうど俺の後ろ、シャルルが突撃する先には――

「一夏！？」

「なっ！？」

シャルルが俺の後ろにいた一夏にそのまま突撃してしまう。一夏も驚きながらなんとか《雪片弐型》でシャルルを止める。そして一夏の動きが止まったところでボーデヴィッヒがプラズマ手刀を二人に振り下ろす。そして――

「すまないな、二人とも。いくらお前たちが仲間だろうと、今は敵同士だ」

ズドンッ！

プラズマ手刀が当たる直前、発射形態？に設定した《アヴァロン》による近距離爆散砲を食らい、一夏とシャルルは地面に叩きつけられた――ボーデヴィッヒとともに。

「俺のこと忘れんなよ。全員が同じところにいて動かないなんて、どうぞ撃ってくださいって言ってるようなもんだろ？」

「今、なんて……？」

ギリギリのところでシールドを展開してダメージを軽減できたらしいシャルルが呆然とした表情で俺を見てくる。

「試合が始まる前に言っただろ？　『俺はただ全員を叩き潰すだけ

だ』と。その対象であるお前たちが一つにかたまっているんだ。狙わないわけないだろう」

そう、俺は一夏とシャルルを叩き潰すと言わず、全員を叩き潰すと言った。その対象は一夏とシャルル、そしてボーデヴィッヒだ。

「ペアの相手だろうが、関係ない。勝つために一番効果的な行動をするまでだ」

これで三人のシールドエネルギーは削れた。あとは思う存分、やりたいままに戦うか。

さあ、楽しい大乱闘（おおはしゃぎ）の始まりだ。

第五十二話　全力で戦う（前書き）

第五十二話です

第五十二話　全力で戦う

「さて、もう一発いくぞ」
それだけ言って突進する俺から三人とも再び飛び、距離をとる。
「なんで味方のラウラまで巻き込んだんだ！」
「形式上は味方だが、協力する意思のないやつを俺は味方とは思わない。だからだ。本物の戦場ではそういう協調性のないやつがいると、他のやつにまで被害が及ぶ」
「だからって……」
「ならお前は戦いのときにチームワークを乱すやつがいたらどうする？　そいつのせいで他の仲間に危険が及んだらどうする？」
集団での戦いでは味方の能力、戦況、それらと同じくらい、いや下手をすればそれ以上に大事になるのは協調性だ。一人の勝手な行動が大きな被害を生む。それを回避するにはそいつを切り離すのが一番手っ取り早い。
「そのときは俺たちが仲間を守ればいいだろう！」
「そうだよ！　僕たちが皆を守る。それで済む話でしょ！」
一夏の言葉にシャルルが続く。二人の目はとてもまっすぐで、心からそう思っていることが感じられる。それでも。
「甘いな。戦場はそんなに甘くない。思うようにいかないことだって多い。それに人は弱い。全てを守れるほど人は、強くない」
人は弱い。全てを守れる力なんて持ち合わせてはいない。だからこそ、本当に守りたいものを探す。そして見つけた本当に守りたいもののために力を尽くす。
「確かに俺は弱いさ。仲間を全員守れるほどの力なんて持ってないかもしれない。……それでも、守りたいもの、大切な仲間のために全力で戦ってやる！」
「僕だって、大切な皆のために全力で戦う！」
「なら見せてみろ。……お前たちの全力を！」

「……あの馬鹿者が」
「どうしたんですか？　織斑先生」
「いや、なんでもない」
千冬のため息が混ざった言葉に真耶が反応して聞き返す。千冬はそれを軽く流して次は真耶にも聞こえないほど小さな声で呟く。
「あの須藤ならと思ったのだが、失敗だったようだ」
明弘ならラウラの独断専行を抑え、チームワークの大切さを気づかせてやれるだろう。そんな考えの下、抽選に少し細工をして明弘とラウラを組ませ、初戦の相手として一夏とシャルルを当てた千冬だが、その明弘が抑えるどころか逆に暴れるのは想定外だった。
あの二人の相性を深く考慮しなかった自分の不甲斐なさに千冬は少し歯を噛み締める。
「ふぁー、すごいですよねぇ。二週間ちょっとの訓練であそこまでの連携が取れるなんて。さすがはあの須藤くんが認めるわけですね」
モニターに映し出される戦闘映像を眺めながら真耶は感心したように呟いた。
「やっぱり織斑くんってすごいです。才能ありますよね」
「ふん。あれはデュノアが合わせているから成り立つんだ。あいつ自体は大して連携の役には立っていない」
「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑くん自身がすごいじゃないですか。魅力のない人間には、誰も力を貸してくれないものですよ」
「まあ……そうかもしれないな」
相変わらず身内には辛口評価しかない千冬も真耶の言葉には反論できず、ぶすっとした感じで告げる。しかし真耶はそれが照れ隠しなんだと最近わかったので別段気にしない。
「それにしても学年別トーナメントのいきなりの形式変更は、やっ

ぱり先月の事件のせいですか？」
　先月の事件――黒い全身装甲ＩＳの襲撃は、一般的には反政府組織の仕業ということになっている。ＩＳ学園を襲撃したというだけでも重大なことなのに、それが無人機だとわかればますます事態は危うい方向へと向かってしまう。今でも各国が敵対国の仕業ではないのかと互いを疑っている。
「詳しくは聞いていないが、おそらくそうだろう。より実践的な戦闘経験を積ませる目的で、ツーマンセルになったのだろうな」
「でも一年生は入学してまだ三ヶ月ですよ？　戦争が起こるわけでもないのに、今の状況で実践的な戦闘訓練は必要ない気がしますが……」
「そこで先月の事件が出てくるのさ。特に今年の新入生には第三世代型平気のテストモデルが多い。そこへ謎の敵対者が現れたら、何を心配すべきだ？」
「――あ！　つまり、自衛のため、ですね」
「そうだ。操縦者はもちろん、第三世代型兵器を積んだＩＳも守らなくてはいけない。しかし教師の数が有限である以上、それらは原則自分で守るしかない。そのための実践的な戦闘経験なのさ」
「ははぁ、なるほどなるほど」
　真耶は疑問氷解とばかりに頷く。そしてモイターを見つめて再び呟いた。
「ボーデヴィッヒさんも十分強いですね。一年で専用気持ちの中でも一番ではないでしょうか」
「ふん……。傍目では強く見えるかもしれんがな」
　千冬は心底つまらなそうな声でそれに答える。
「変わらないな。強さを攻撃力と同一だと思っている。だがそれでは――」
　一夏にすら――いや、一夏には勝てないだろう。

ワアアッ！

「あ！　織斑くん、零落白夜を出しましたね！　一気に勝負をかけるつもりでしょうか」

「さて、そう上手くいくかな」

「またまた、そんな気にしてないような態度をしなくても――」

「山田先生、今度久しぶりに武術組み手をしようか。せっかくだ、十本ほどやろう」

「いっ、いえいえっ！　私はそのっ、ええとっ、生徒たちの訓練機を見ないといけませんからっ！」

慌てて首を振り手を振りと大忙しの真耶に、千冬は低い声でたたみかける。

「私は身内のネタでいじられるのが嫌いだ。そろそろ覚えるように」

「は。はい……。すみません……」

「さて、試合の続きだ。どう転がるか見物だぞ」

第五十三話　現実を見ろ（前書き）

第五十三話です

第五十三話　現実を見ろ

「これで決めるっ！」

一夏が零落白夜を発動させて、突撃をかけてくる。瞬時加速を使った超高速での特攻。エネルギー系のものなら例外なく断ち切るあれを食らえば、一気にシールドエネルギーを削られる。それにあの速度だ。防いだとしても押し切られる。だから俺はその突撃に対して、回避を選んだ。

だが、避けられたのにもかかわらず、一夏の顔に笑みが浮かぶ。まるで、避けられることを望んでいたかのように。

「避けられるのは想定済みだ！　でもな！」

瞬時加速中のため止まらずに俺の脇を通り過ぎていく一夏。その先には――ボーデヴィッヒ！？

ボーデヴィッヒはシャルルを相手にしていたため、背後から突進してくる一夏の姿に動揺を見せる。一夏のやつ、俺が避けるのを見越した上で後ろにいるボーデヴィッヒに攻撃したのか。

しかし、ボーデヴィッヒはシャルルの銃撃を防いでいたＡＩＣをなんとか一夏に発動させて停止させる。

「今のには少し驚いたが、どうということはない。これで終わり――」

「……ああ、なんだ。忘れているのか？　それとも知らないのか？　俺たちは――二人組みなんだぜ？」

「！？」

次の瞬間、零距離まで接近したシャルルが、素早くショットガンの六連射を叩き込む。それをまともに食らい、ボーデヴィッヒの大口径レールカノンは爆散した。

「くっ……！」

さっきの特攻はブラフか。一度目の奇襲で一夏に意識を集中させ、その隙を突いてシャルルが本命である二度目の奇襲をかける。

そして面倒なことに以前俺が立てた仮定は見事命中してしあった。ＡＩＣには致命的な弱点がある。それは『停止させる対象物に意識を集中させていないと効果を維持できない』ことだ。現に、一夏への拘束は解除された。

「よし！　このまま」

開放された一夏が再び《雪片弐型》を強く握り締める。そして、必殺の零落白夜を発動させ――

「なっ！？　くそっ、エネルギー切れかよ！」

零落白夜のエネルギー刃は音とともに小さくしぼみ、そのまま消えていった。序盤で俺が与えたダメージ、零落白夜と瞬時加速の同時使用などで、エネルギーを消耗しすぎたようだ。

「一夏っ！」

シャルルが慌てて一夏のフォローに入ろうとするが、俺がそれを妨げる。

「ここから先は行かせない」

「明弘……！」

「どう息巻いたところで、所詮人は弱いままだ。現に見ろ。大事なもののために全力で戦うと豪語したお前も、結局、味方一人助けることすらできない。そろそろ現実を認めろ」

ハイパーセンサーで後ろの様子を確認する。ちょうどボーデヴィッヒが一夏に止めを刺したようだ。これで後はシャルルだけ。

「……現実を見てないのはそっちだよ」

いきなりシャルルがそんなことを言い始めた。

「なんだと？」

「確かに現実は甘くないよ。人も決して強くはない。全てを守ることなんてできないかもしれない。でも、だからって――」

シャルルはそこまで言うと、大きく息を吸ってから

「だからって、全てを諦めて、何も守ろうとしない明弘の方が――よっぽど現実を見ていない！」

俺をまっすぐ見つめて、そう言った。

第五十四話　合格（前書き）

第五十四話です

第五十四話　合格

明弘の方がよっぽど現実を見ていない。

シャルルのそんな言葉を聞いて、俺は大声で反論する。

「そんなわけあるか！　現実を見ていないのは守れないものを守ろうとするお前たちの方だろ！　守れないものを守ることに何の意味があるっていうんだ！」

「何も守ろうとしない方が意味がないよ！　守りたいものを守る。その行動自体がとても意味のあるものなんだ！」

シャルルも俺に負けないほどの大きな声で答える。シャルルは声を張り上げ、自分の思いをぶつけてくる。

「……じゃあ、どっちが正しいか。勝負といこうじゃないか」

「……いいよ。絶対に負けないんだから」

一瞬の沈黙の後――

「……ごめんね。明弘」

シャルルは何かを小さく呟いたかと思うと、次の瞬間、シャルルの姿が消えた。

「なにっ！？」

次に見えたのはシャルルが、俺の懐深くに入り込んでいる姿だった。始めてみるシャルルの瞬時加速は予想外のことだったので簡単に懐に入られた。そしてその手にもともと装備されていた盾の装甲が弾け飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》。通称――

「『盾殺し（シールド・ピアース）』！？」

俺はとっさに左腕の《イージス》で防御しようとするが、《灰色の鱗殻》の破壊力の前ではダメージを少し軽減させる程度。そのまま、《灰色の鱗殻》の一撃でイージスには亀裂が入り、俺自身もアリーナの端にぶっ飛ばされた。

そして、シャルルは瞬時加速の速度のままボーデヴィッヒに突進

する。一夏を倒したことで勝利を確信していたボーデヴィッヒが気づいたときには時すでに遅し。

「ぐううっ……！」

ボーデヴィッヒの腹部に、《灰色の鱗殻》の一撃が叩き込まれる。ＩＳが絶対防御を発動して防ぐが、エネルギーがごっそりと奪われる。しかも相殺し切れなかった衝撃が体を貫いたらしく、やつの表情は苦悶に歪んだ。

だが、それだけでは終わらない。《灰色の鱗殻》はリボルバー機構。つまり、連射が可能なのだ。続けざまに三発を撃ち込まれ、シュヴァルツェア・レーゲンもＩＳ強制解除の兆候が出てきて、そのまま壁に叩きつけられた。

「これで、あとは明弘だけだね」

シャルルの言葉を聞きながら、なんとか衝撃で痺れる体を起こす。

「……さっきの瞬時加速。隠してたのか……？」

「ううん、違うよ。この戦いで一夏や明弘のを見て覚えたんだ」

おいおい、戦いの中で新しい技術を覚えるって……。それはもう器用とかいうレベルを超えてないか？

「まあいい。ボーデヴィッヒが倒されるのは予想外だったが、俺がお前を一人で倒せばそれで終わりだ」

「おい、ちょっと待てよ。俺だって、まだ戦えるぜ」

ふと声の聞こえたほうを見ると、そこには立っている一夏の姿があった。

「なんだよ。あとで、花でも供えてやろうと思ってたのに生きてたのか」

「俺があんなので死ぬはずないだろ？　つってもさっきまでダメージが抜けなくて動けなかったけどな」

俺の冗談に一夏が笑って返してくる。まったく試合中だってのに、俺たちは何やってんだか。

「それより、さっきまでの台詞。お前の本心じゃないんだろ？」

「……なぜそう思う？」

「自分が仲間と認めた相手には自分の全てをぶつけてきたお前のことだ、守れないから守らないなんて考えるわけないだろう？」
なんてやつだ。てっきり俺の言葉を聞いてキレてると思ったのに、めちゃくちゃ冷静じゃねえか。
「……たいしたやつだよ。お前は」
「どれだけ一緒にすごしてると思ってんだ」
「三ヶ月にも満たないだろ」
「それは言うなって」
試合中にも関わらず、俺たちはいつもの調子でやりとりする。なんか客席の雰囲気がおかしいけど、気にしない。
「お前の言うとおりだ。いい機会だったからお前たちに言っておきたかったんだよ。俺の言葉を真に受けて自分の考えを曲げるようだったら、思いっきりぶっ潰してやるところだった」
「はぁ……。なんとなくそんなことだろうと思ったよ」
シャルルが小さくため息をついてそう言う。
「まあ、お前たちは合格だ。それも百点満点のな」
「それはありがとうよ。ならここからは――」
「そうだね。それじゃあ――」
「いいだろう。さあ――」

「「「正真正銘、真っ向勝負！」」」

三人同時にそう言って、一気に距離をつめる。一夏の《雪片弐型》が、シャルルの《ブラッド・スライサー》が、俺の《デュランダル》が振られる。
――だがその直後、異変が起きた。

第五十五話　世界最強のまがい物（前書き）

第五十五話です

第五十五話　世界最強のまがい物

「あああああっ！！！」

突然、ボーデヴィッヒが絶叫を発する。シャルルの攻撃をまともに受けて、意識すら失ったのではないかと思ったがそうではないのか。その絶叫と同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれた。

「何が起きてる……？」

ボーデヴィッヒの……そのＩＳが変形していた。

いや、変形なんて生易しいものじゃない。装甲をかたどっていた線は全て溶け、どろどろになってボーデヴィッヒを包み込んでいく。

「……何なんだ、一体」

一夏の疑問はもっともだ。

ＩＳは原則として、変形しない。正確に言えば、出来ないの方が正しい。

『初期操縦者適応（スタートアップ・フィッテング）』と『形態移行（フォーム・シフト）』の二つしか、ＩＳはその形状を変えない。パッケージ装備で多少の変化はあっても、基礎の形状が変化することはまずない。あり得ない。

だが、あり得ないことが、実際に目の前で起きている。

全身装甲（フルスキン）のＩＳに似た『何か』。しかしその形状はアレとはまったく違う。

ボーデヴィッヒのそれをそのまま表面化したボディライン。最小限、腕と脚につけられたアーマー。フルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にある赤い光を漏らすラインアイ・センサー。

そして、その手に握られている武器は――

「《雪片》……なのか？」

初代ブリュンヒルデ――現役時代の織斑先生がかつて振るっていた刀。その複製としかいえない物だった。

刹那、黒いＩＳは《雪片弐型》を中段に構えた一夏の懐に飛び込んでくる。居合いのように刀を中腰に引いて構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。

「ぐうっ！」

《雪片弐型》が弾かれた一夏はギリギリの後方退避で、落とすように鋭い二撃目を避けた。

今の緊急回避が最後の力だったのか、白式は光とともに一夏の全身から消えた。

「……がどうした……」

しかし、そんなことはどうでもいいかのように一夏は立ち上がる。

「それがどうしたああっ！」

そのまま黒いＩＳに駆けていく一夏。その拳が黒いＩＳに触れる寸前で一夏を慌ててシャルルが引きとめた。

「ちょっと、一夏！　何をしているの！？」

「離せ！　あいつ、ふざけやがって！　ぶっ飛ばしてやる！」

ほとんど狂っているように叫ぶ一夏。その様子はいつもの一夏とは到底思えない。

黒いＩＳは動かない。おそらく武器や攻撃に反応するプログラムなのだろう。一夏の拳は攻撃とは認識されなかったようだ。

「どけよ、シャルル！　邪魔をするならお前も――」

「っ！　いい加減にしてよ！」

思いっきり頬をひっぱたかれて、やっと我に返った一夏に問う。

「何なんだ、一体。わかるように説明しろ、一夏」

一夏は何とか感情が高ぶるのを抑えて、俺の質問に答えてくれた。

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

織斑先生のデータ、織斑先生だけのもの。まさか――

「まさか、あのＩＳは織斑先生の動きが組み込まれているとでも言いたいのか、一夏」

「ああ、さっき剣技は俺が最初に千冬姉に習った『真剣』の技だ。

間違いない」
「まったく、お前は……いつも織斑先生織斑先生だな」
「それだけじゃねえよ。あんな、わけわからねえ力に振り回されてるラウラも気にいらねえ。ＩＳとラウラ、どっちも一発ぶった叩いてやらねえと気が済まねえ」
呆れたような俺の言葉に一夏はとても真剣に答える。
「力は、強さは、攻撃力じゃない。そういうことだな」
「ああ、そんなものは強いとは言わない。ただの暴力だ。とにかく、俺はあいつをぶん殴る。そのためにはまず正気に戻してからだ」
「理由はわかったけど、今の一夏に何ができるの？　白式のエネルギーも残っていない状況で、どう戦う気？」
「ぐっ……」
シャルルの鋭い指摘に一夏は言葉を詰まらせる。
現に今の白式には一撃はおろか、装甲を展開するエネルギーも残っていないだろう。
『非常事態宣言！　トーナメントの全試合は中止！　状況レベルをＤと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はすぐに避難すること！　繰り返す！』
「聞いての通り、一夏がやらなくても状況は収拾されるの思うよ。だから――」
「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要はない、か？」
「うん」
シャルルの意見は正しい。正論過ぎるほど正論だ。でも、一夏は正論なんかじゃ止まらない。
「違うぜ。全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」
「じゃあ、どうするつもりだ？　エネルギーはどのみち――」
「無いなら他から持ってくればいい。でしょ？　一夏？」

「シャルル……」
俺の言葉を遮るようにシャルルが一夏に話しかける。
「他のところからって、どこから持ってくる気だ。今からピットに戻るのか？」
「ううん。僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」
リヴァイヴからケーブルを出しながら、シャルルが言う。
「ちょっと待てよ。簡単そうに言うが、それってコアの同期を調整する必要があるはずだ。実践でそんなことが――」
「できるかどうか？　その考えは違うよ。やれるかやれないかじゃない、やるんだ。――一夏のためにもね」
「……はぁ。なんかシャルルの言動が一夏に見えてきた」
「そりゃ、一ヶ月も一緒にいたしね」
否定せずに笑いながら、半分肯定の意味を含んだことを言うシャルル。そうは言うが、普通一ヶ月そこらでこんなにはならないと思う。
「まあ、お前がやりたいなら止めはしないさ。お前ならやれると思うし」
「頼む！　やってくれ！」
「けど！」
シャルルに懇願する一夏に対して、珍しく有無を言わせない強い口調で一夏に指を差してシャルルが言う。
「けど、約束して。絶対に負けないって」
「もちろんだ。ここまで啖呵切って飛び出すんだ。負けたら男じゃねえよ」
「じゃあ、負けたら明日から一夏は女子の制服で通ってね」
「うっ……！　い、いいぜ？　なにせ負けないからな！」
「よし、じゃあ俺は一夏が女子の制服で通うほうに賭けよう」
「おい、明宏！？　お前俺が負けると思ってるのか！？」
「冗談だ」

「冗談に聞こえないな」
軽いジョークを混ぜた会話で緊張がいい意味でほぐれる。
「一夏、さっきの言葉、気に入ったぜ。『俺がやりたいからやる』か。なら俺もやりたいからお前のサポートしてやるよ」
「は？」
「お前だけがやりたいことやるんじゃ不公平だ。ならお俺もやりたいことをやる」
お前が言ったことなんだから、文句はないはずだ。と、視線でしっかりと伝えると、一夏はため息を一つついて口を開いた。
「必要ない、って言っても聞かないだろ？」
「当たり前だ」
「じゃあやればいいじゃねえか」
「よし、決まり」
一夏との会話を終え、神王の両手に武器を展開する。右手にはデュランダル。左手にはゲイ・ボルグ。剣と槍を同時に用いる特殊な構え――
「『一剣一槍の構え』。即席の構えだが、やれるだけやってみるか。シャルル、はじめてくれ」
「うん、じゃあ、はじめるよ。……リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギー流出を許可。一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使えるようになるはずだから」
「おう、わかった」
リヴァイヴから伸びたケーブルからエネルギーを送られていくのが神王のハイパーセンサーで確認できる。
「完了。リヴァイヴのエネルギーは残量全部渡したよ」
その言葉の通り、デュノアの体からリヴァイヴが光の粒子となって消えた。
「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね」
「十分さ」
一夏は右手の《雪片弐型》を強く握り締め、一言呟く。

「零落白夜――発動」

一夏の言葉に答えるように《雪片弐型》が刀身を開き、エネルギーの刃が発せられる。しかも、今までのように強大なエネルギーを開放するだけだった零落白夜の刃が細く鋭いものへと結束している。それはまるで日本刀のような姿だった。

「俺が注意を引き付ける。だがお膳立てしてやるのはそこまでだ」

「わかってるさ。最後は俺がけりをつける」

「わかってるならいい。……いくぞ」

一夏の返事も聞かずに、突撃する。それに反応して黒いＩＳは最初と同じく居合いのような構えを取る。

武器が二つになっただけでアレに勝てるとは思えない。アレはまがい物といえど、あの織斑先生のデータ、織斑先生の動きだ。俺ごときが勝てるわけがない。

だからこそ、俺の選んだ選択肢は『倒す』のではなく、『サポート』。倒すのは一夏に任せて俺はそのアシストに集中する。

「ふっ！」

体をひねり遠心力を利用した《ゲイ・ボルグ》の一突きはは相手の居合いによって弾かれた。今のを避けるのではなく弾くというのは相手の技量がかなりのものだということを物語っている。

そのまま相手は上段の構えに移り、そのまま振り下ろす。俺は弾かれた反動で右手の《デュランダル》を前に出し、その鋭い斬激を受け止めるが、あまりの威力に押されてしまう。なんと押し切られるのは免れたが、このままでは押し駆られるのも時間の問題だ。――このままでは。

「……じゃあな。この偽者野郎」

一夏が俺の後ろから飛び出して、横薙ぎに一閃。相手の刀を弾き、そのまま流れるように上から縦真っ直ぐに断ち切った。

紫電が走り、黒いＩＳが真っ二つに割れる。そこから出てきたボーデヴィッヒは普段のあいつからは想像もできないほど弱弱しいで、俺たちを見たような気がした。真っ赤な右目と、眼帯が外れてあら

わになった金の左目と。
「……まぁ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」
力を失って崩れるボーデヴィッヒを抱きかかえながら、一夏が呟く。それに俺も同調するように口を開いた。
「これで……終わりだな」
「ああ……」
少し離れたところからシャルルの声と足音が聞こえてくるのを感じながら、俺は安堵とともに息を深く深く吸った。

第五十五話　世界最強のまがい物（後書き）

今回はかなり長くなりました

うまく切れるところが見当たらりませんでした

それと話の都合上、箒は登場させることができませんでした

箒の台詞は全てシャルか明弘が代わりにやるか、カットということになりました

第五十六話　事後処理（前書き）

第五十六話です

第五十六話　事後処理

『トーナメントは事故により中止。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行う。場所と日時の変更は各自個人端末で確認すること』

個人端末に送られてきた連絡を見終えて、改めて目の前のパスタを食べ始める。

「ふむ。シャルルの予想通りになったな」

「そうだねぇ。あ、一夏、七味取って」

「はいよ」

「ありがと」

「あ、俺にはコショウ」

「ほい」

「サンキュ」

当事者とは思えないほどのんびりと食事を取る俺たち。ついさっきまで事情聴取されていて腹がペコペコだったので、食堂が終わるギリギリのこの時間に食事を取っていた。

そういえば、さっきから周りの女子の雰囲気が変だ。端末に連絡が入る前までは騒がしかったのに、今ではひどく落胆しているようだ。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

数十名が泣きながら走り去っていった。一体何があったというんだ。

「どうしたんだろうね？」

「さあ？」

「女子の考えていることはよくわからないな」

そんな会話を交わしながらふと見ると、女子が去った後に、一人

呆然と立ち尽くす篠ノ之の姿があった。
　一夏がその篠ノ之の側へと移動する。
「そういえば箒。先月の約束だが――」
　一夏が篠ノ之に声をかける。それを俺とシャルルが静かに見守る。
「付き合ってもいいぞ」
　なんだと？　あの一夏が自分から付き合うという言葉を口にするなんて……。シャルルも少しびっくりしたような表情だ。
「な、なに!?」
「だから、付き合ってもいいって……おわっ!?」
　突然、一夏が篠ノ之に締め上げられる。
「ほ、ほ、本当、か？　本当に、本当に、本当なのだな!?」
「お、おう」
「な、なぜだ？　り、理由を聞こうではないか……」
「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合うさ」
「そ、そうか！」
「買い物くらい」
　……やっぱりか。あの一夏が付き合うなんていうから驚いたが、結局一夏は一夏か。
「……だろうと……」
「お、おう？」
「そんなことだろうと思ったわ！」
　そう叫ぶと、篠ノ之は鋭い正拳を一夏の顔面に食らわせた。腰のひねりも加わって、あれは痛い。
「ぐはぁっ！」
「ふん！」
　追い討ちをかけるように、うめく一夏のみぞおちにつま先が刺さる。効果は抜群だ。
「ぐ、ぐ、ぐっ……」
「一夏ってさ、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「わざとだったらどうにでもなるんだが、わざとじゃないんだな、これが」
篠ノ之が去ったあと、俺とシャルルがそんな会話をしているところに顔と腹を押さえながら、一夏が戻ってくる。
「な、なに？　どういう意味だ、それは？」
「さあね」
なぜかシャルルは視線を逸らしてしまった。何なんだ、一体。
「そういえばちょっと聞きたいんだが」
「うん、何？　何でも聞いて」
「俺が答えられる範囲なら、なんでもいいぞ」
「ＩＳで会話ってできるのか？　えーと、プライベート・チャンネルとは違う、なんか二人だけの空間、みたいなところでの会話なんだが」
プライベート・チャンネルとは違う二人だけの空間、か。
「たぶん、相互意識干渉（クロッシング・アクセス）の類だと思うぞ」
「確か、ＩＳ同士の情報交換ネットワークの影響って考えが有力なのだよね？　操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉が起こるって聞いたことがあるよ」
「おお、たぶんそれだ。しかし、波長ねぇ。なかよくわからないな」
「ＩＳはわからないの塊だろうが」
「ＩＳはよくわからない現象や機能がかなりあるよ。作った篠ノ之博士は全機能を公表していない上に現在行方不明だし、前にインタビューか何かで自己進化するように設定した部分があるから、本人も全部を把握するのは無理だって言ってた気がする」
「うわ、束さんらしいな、それ……」
「いや、あの人は把握するのが面倒なだけだ。まじめに調べればわかるはずだが、あの人はそんなことやらないだろうな」
あの人からすれば、ＩＳは所詮自分で作った玩具（おもちゃ）、趣味の産物というレベルだ。そんなものをまじめに調べるような人ではない。
「……一夏、二人だけの空間で会話って、もしかしてボーデヴィッ

ヒさん？」
「あ、ああ、そうだが……」
「ふーん。そう」
そう言いながら、シャルルは食器を下げに行ってしまった。なんだ？　さっき視線を逸らしたときといい、不機嫌じゃないか？　確信はないが、なんか不機嫌になっているような気がする。
「ん？　なんかまた端末に連絡入ったぞ」
さっきポケットに入れたばかりの個人端末から機械的なメロディが流れる。連絡が入った合図だ。
「えっと……ほう。一夏、朗報だぞ」
「ん？　何だ？」
「今日から男子の大浴場使用が解禁だとさ」
「本当か！？　来月になるもんだと思ってたが」
「今日はボイラー点検があって使用禁止の日だったらしいんだが、点検自体は終わってるから今日は男子に使ってもらおうという山田先生の粋な計らいだ」
「おお！　それはラッキーだ！　トーナメントの疲れを湯船で落としたいところだったんだよ」
一夏が滅茶苦茶喜んでる。そりゃそうか、この３ヶ月弱、シャワーしか使えなかったんだからな。風呂好きの一夏には堪えたんだろう。休日に家の風呂に入ったことも何度かあるそうだが、風呂に入ったあとに学園に戻るのであんまり意味がなかったそうだ。
「どうしたの、一夏。うれしそうな顔して」
「おう、シャルル。今日から大浴場が使えるようになったんだってさ」
一夏がすごい嬉しそうな表情で戻ってきたシャルルに答える。
「山田先生が大浴場の前で待ってるらしいから、準備して大浴場に来いって。山田先生が脱衣所の鍵を持ってるらしい」
「そうなんだ。それだったら、早く行こうぜ」
「あ、俺はパスするわ」

今にもダッシュで部屋に戻ろうとする一夏に申し訳ないが、断りの言葉を放つ。
「え？　どうしてだ？」
「今日の試合で《イージス》が壊れてな。それの修理をするから、大浴場を使ってる暇はないんだ」
「《イージス》が壊れるなんて、一体何があったんだよ」
「ただシャルルの《灰色の鱗殻》を食らっただけだ。表面の装甲にひび、あと中のエネルギーパイパスがところどころ故障ってところだ」
「……ごめんね、明弘」
「試合だったんだから謝る必要なんてないさ。まあ、三日ぐらいで終わると思うんだが、模擬戦とかの時にないと不便だからな、とっと直したんだ」
《イージス》がなくても戦えるとは思うが、やはりあった方がいいのは事実だ。対エネルギーの盾、特にオルコットとの試合のときはかなり重宝する。
「そっか。じゃあ、俺たちだけで使わせてもらうぜ」
「おう、ゆっくり使ってこい」
「じゃあ、また明日」
「じゃあな」
一夏とシャルルが食堂から去っていくのを確信したあと、俺も整備室に向かう。その途中で、あのクラスメイトと遭遇した。
「やほ～、すーくん」
「のほほんさん、どうしたんだ？」
そのクラスメイトとは、のほほんさんだった。相も変わらず袖の余った服を着ている。
「ん～。特に理由はないんだけど、暇だったからお散歩～」
「寮の中を散歩って言うのか？　ってどうでもいいか」
「すーくんこそ、何してるの～？　すーくんの部屋はこっちじゃないよ～」

「ちょっと整備室にな。《イージス》の修理をしたいんだ」
「イージスって、あのシールドのこと～？　エネルギーをぎゅんぎゅん吸いとる」
　正確に言うと微妙に違うが、間違ってはいないので少し否定しづらい。
「まあな」
「じゃあ、わたしも行く～。これでも整備科志望なのだよ～」
　なぜだかわからないが胸を張るのほほんさん。そういえば整備科しぼうだったな。
「手伝ってくれるのか？」
「もちろ～ん。お姉ちゃんも呼んでいい～？」
「いや、あまり迷惑かけたくないから遠慮しようかな」
「大丈夫、生徒会役員だから困ってる生徒は放って置けないと思うよ～」
「生徒会の役員なんだ。もしかして、整備科？」
「あい～、三年生の整備科で～す」
　三年でしかも整備科の人か。修理とかは俺よりも慣れてるだろうし、手伝ってくれるなら心強いな。
「じゃあ、迷惑でないならお願いする」
「あい～」
　だぼだぼの服で敬礼みたいなポーズをとる。それを見ていたらつい頭を撫でてしまっていた。
「えへへ～」
　のほほんさんも嫌ではないみただし、一分ほど撫でたあと二人で整備室に向かう。
「……あ」
　と、整備室の前で一つ、思い出してしまった。
　……一夏とシャルル、風呂どうするんだろう？

第五十七話　轟音と爆音のＨＲ（前書き）

第五十七話です

第五十七話　轟音と爆音のＨＲ

翌日。朝のホームルーム前。俺は昨日《イージス》の修理を手伝ってくれたのほほんさんと話をしていた。
「昨日は手伝ってくれてありがとな」
「それほどでも～」
「布仏先輩にもありがとうございましたって伝えておいてくれ」
「それなら昨日も言ってたけどね～」
「それはそうだけど、やっぱり感謝してるんだよ。三日はかかると思ってたのに二人のおかげで昨日の夜だけで修理終わったんだから」
「ほとんどお姉ちゃんがやったんだけどね～」
のほほんさんの言う通り、のほほんさんの姉、布仏虚さんの力が大きかったが、それでものほほんさんも手伝ってくれたのには変わりない。
「のほほんさんだって十分手伝ってくれたさ。今度お礼したんだけど」
「だったら～、何かプレゼントが欲しいな～」
「プレゼントな、了解。今度買ってくる」
「わぁ～い」
うん、やっぱり癒されるな。昨日のアクシデントと修理でたまった疲れが吹き飛ぶようだ。
「あれ～？　そういえばでゅっちは～？」
「でゅっち？　ああ、シャルルのことか。先に行っててと言われたからさっき食堂で別れた」
「ん～？　何か用事かな～？」
「まあ、俺たちが首を突っ込むことじゃないだろ。山田先生来たから席戻るぞ」
「あい～」
山田先生が教室に入ってきたので、のほほんさんと別れ席に着く。

なんだか山田先生の表情が疲れているように見える。
「今日はですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますか、すでに自己紹介は済んでいるといいますか……じゃあ、入ってください」
山田先生の歯切れの悪い説明のあと、一人の女子が入ってきた。
「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」
そう言ってスカート姿のシャルルが礼をする。クラスメイトは皆、呆然としながら頭を下げ返す。
「ええと、デュノアくんはデュノアさんでした。はぁぁ……また寮の部屋割り組み立てなおす作業が始まります……」
ああ、山田先生の憂いはそれが原因か。お疲れ様です。
「え？　デュノア君って女？」
「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だったわけね」
「って、織斑君、須藤君、知らなかったってことはないよね？」
「ちょっと待って！　昨日って確か男子が大浴場をつかったわよね!?」
教室が一瞬で喧騒に包まれる。それどころか教室の外にまで溢れかえる。
「おーい、一つ行っておくが昨日俺は大浴場使ってないぞー。のほほんさんが証人だ」
喧騒の中、俺の言葉を聞き取った女子が一斉に俺を見たあと、のほほんさんを見る。
「あい～。昨日の夜、すーくんは整備室にいたので～、お風呂には入っていませ～ん」
のほほんさんの証言を聞いた直後、女子の視線は一夏に戻る。
「おい明宏！　お前自分だけ助かる気だな!?」
「事実を言っただけだ」
「くそー!!」
一夏の叫びと重なるように教室のドアが蹴破られたかのような勢

いで開かれる。
「一夏ぁっ！！！」
鳳鈴音登場。その怒りはまさに怒髪天を付くが如し。
「死ね！！！」
ＩＳを部分展開、それと同時に《龍咆》がフルパワーで発射される。死んだか。

しかし、その衝撃砲が一夏に届くことはなかった。なぜならシュヴァルツェア・レーゲンをまとったボーデヴィッヒがＡＩＣで相殺したからだ。
そして次の瞬間、一夏とボーデヴィッヒの唇が重なった。いわゆるキスというやつだ。
「！？」
一夏をはじめ、その場にいた全員が驚愕する。もちろん俺も。
「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」
「……嫁？　婿じゃなくて？」
指摘するところはそこなのか。ただ、まあ、気になるところではある。
「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な慣わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」
誰だよ。そんな間違った知識を言ったやつは。絶対日本人じゃないし、日本のマンガやアニメとかを見まくってるやつだな。
「あっ、あっ、あっ、アンタねえええっ！！！」
「待て！　俺は悪くない！　どちらかというと被害者サイドだ！」
「アンタが悪いに決まってんでしょうが！　全部！　絶対！　アンタが悪い！！！」
「どういう理屈だそれは！」
驚愕から立ち直った鳳が再び攻撃し、それを一夏が避ける。一夏はそのまま後ろ側出口から脱出を試みるが――
「ああら、一夏さん？　どこかにおでかけですか？　わたくし、実

はどうしてもお話ししなくてはならないことがありまして。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほほ……」

後ろのほうの席に座っていたオルコットに阻まれた。一夏は諦めて窓側から出ようとするが、今度は真剣を持った篠ノ之に防がれる。っておい、なんで教室に真剣持ってきてんだ。

そのまま一夏、凰、オルコット、篠ノ之の四人は教室内を暴れまわる。

「はあ、これは一体どうすればおさまるのかね？　どう思う？　デュノア」

「うーん、ちょっとわからないなぁ」

そうは言いながら、めちゃくちゃキレてませんか。

「まあ、とりあえず。お前の中で踏ん切りがついたならよかったよ。改めて歓迎するぞ。ようこそＩＳ学園に」

「ふふ、ありがと」

「そしてもう一つ、一夏争奪戦に参加するつもりなら頑張れ。篠ノ之にオルコット、凰、それにさっきに様子ではボーデヴィッヒもか。敵は多いな」

「うん、そうだね。でもそれの覚悟の上だよ」

「オーケー。それくらいの気持ちじゃないと勝ち残れないからな。……で、お前もあの騒ぎ（あそび）に混ざるのか？」

「もちろんそのつもりだよ」

「だ、そうですよ。担任としてどうですか――織斑先生」

俺のちょうど後ろ、死角になるところで壁に背を預けている我らが担任に尋ねる。

「そうだな。ある程度の罰は与えてやる。あとは、そうだな。教室の備品などを壊した度合いによって罰の量も増やしてやろう」

「もし何も壊したりしなかった場合は？」

「グラウンド十周程度で勘弁してやろう」

「だってさ、その程度なら大丈夫だろ。いってらっしゃい。備品は壊さないようにな」

「うん、いってきます」
めちゃくちゃさわやかな笑顔でシャルルは騒ぎに入っていった。
ああ、ＩＳ学園にグラウンドの広さを知らないのか、もしくは一夏にお仕置きできるならその程度軽いと言うことなのか。まあ、どっちでもいいか。
「はぁ。混ざろうかと思ったけど、五十キロはさすがにキツいな…」
「今さっき、デュノアに『その程度』と言ったやつのいう言葉ではないな」
「いくら親しい相手でも他人は他人ですから」
「外道だな」
「冗談ですよ。まあ、鈍感なやつよりは、まだマシじゃないですか」
「どっちもどっちだ」
シャルルが加わり、四人から逃げ惑うはめになった一夏を眺めながら織斑先生と談笑する。っていうか、弟のピンチだっていうのに助けるどころか、それを見ながら談笑するあなたのほうが外道じゃないですか？
「さて、どうしましょうかね。五十キロも走る気はないし、かといってこのまま眺めるのもつまらないし」
「ちなみに騒ぎを治めたやつは私と一緒に奴らをしごく権利をやろう」
「よし。じゃあ俺が止めてきます」
織斑先生の言葉を聞いて、俄然やる気が出てきた。
あの騒ぎに混ざれるし、騒ぎを治めるという大義名分をもった今、多少無茶をしても大丈夫だ。それにあいつらが過酷な罰を受けているのを織斑先生の立場から眺めることができる。いいこと尽くめだな。
「ちょっといってきます」
「とっとと馬鹿者どもを止めて来い」
「了解」

織斑先生の言葉を背に、轟音と爆音渦巻く台風に向かって歩き出した。

第五十八話　初夏の朝（前書き）

第五十八話です

第五十八話　初夏の朝

いろいろあった六月が過ぎ、七月頭。夏の始まりを感じさせる爽やかな暑さで包まれながら、俺は一夏の部屋に向かっていた。

入学してからほとんど毎日一緒に食事を取っているので、今日もいつも通り一夏とともに食堂に向かうために現在一夏に声をかけに行くところだ。

本来ならばとっくに起きている時間だが、何の連絡もないことからしてまだ寝ているのだろう。一夏にしては珍しいことだが、人である以上そういうこともあるだろうと思い、一夏の部屋にわざわざ来た。普通ならそこで一夏に声をかけて一緒に行くことになる。

――そのはずだったのだが。

「……なんか騒がしいぞ、おい」

当の一夏の部屋からは何だかいろいろな物音が聞こえてきた。誰かが暴れているような音、女子の大声、何か硬い金属同士がぶつかり合うような音、一夏らしき男の叫び声。

最初のを除くと、本来一夏の部屋から聞こえてくるはずのない音だ。特に最後の二つ。

「まあ、大方一夏が女子の誰かとトラブルでも起こしたんだろうけどな」

そう考えながら一夏の部屋のドアを開ける。面倒だが適当に騒ぎを治めて、とっとと食堂に行こう。いつものメンバーだったら『織斑先生と俺の懲罰』とでも言えば大人しくなるだろうし。

ちなみに先月末、朝のＨＲの騒ぎを無事治めた俺は約束通り織斑先生とともに騒ぎを起こした五人に罰を与えた。俺があいつらを止める際に机などが多数犠牲になったが、しょうがない。あれは必要な犠牲だった。

「おい、あんまり騒ぐとまた懲罰を――って何してんだお前らは！？」

部屋に入って俺の目に写ったのは、二人の女子が一夏を挟んで奪い合っている様子だった。しかも女子はそれぞれ日本刀とサバイバルナイフを握っている。そして一番異常なのは――女子の片割れ、ドイツの代表候補生でありながらドイツ軍特殊ＩＳ部隊隊長、ラウラ・ボーデヴィッヒが服を着ていなかったことだった。

「お前ら、少しは落ち着けや！！」

そう言いながら俺は神王を部分展開、その手に《ゲイ・ボルグ》を握りしめ、騒ぎを治めるに行った。

その後、騒ぎを治め、急いで食堂で騒ぎの原因となった一夏、篠ノ之、ボーデヴィッヒとともに朝食を取る。途中から、珍しく寝坊したデュノアも加えての騒がしい食事を取っていたら、予鈴が鳴り響いた。確か今日は織斑先生のＨＲだ。

「やべっ！　今の予鈴だぞ！」

予鈴が鳴り終わってから慌てて立ち上がった一夏を置き去りに、俺を含む四人は猛ダッシュで廊下を走った。

「グッバイ、一夏。今まで楽しかったぜ」

「私はまだ死にたくない」

「右に同じく」

「ごめんね、一夏」

さすがは代表候補生と剣道の剣道の大会優勝者。ものすごい速さだ。篠ノ之もボーデヴィッヒも――ってあれ？　デュノアは？

フランス代表候補生であるデュノアがいないことに気付き、一度立ち止まる。もう時間がないというのにどこに行ったんだあいつは。

そんなことを考えていると、後ろから妙な音が聞こえたので振り返る。そこには――リヴァイヴを部分展開したデュノアが一夏を連れて廊下を高速で飛んでいる姿だった。っておい！　轢かれる轢かれる！

「わわっ！　明宏、どけてー！」
「無理だぁ！！！」
そのままデュノアに追いかけられ、自分でも驚くほどの速さで教室に無事たどりついた。うん、人間って限界を超えられるものなんだな。
と、そんな事を考える暇もなく、本鈴がなっていないのにすでに教室に来ていた織斑先生の出席簿アタックを一夏、デュノアとともに食らい、無断でＩＳを展開した一夏とデュノアは放課後の教室掃除を命じられた。一夏は展開していないのだが、あの人にはそんなこと関係ないのだろう。俺は別に遅刻したわけでもＩＳを展開したわけでもないので、罰は免れた。
ともあれ、また今日もＩＳ学園の一日が始まるのだった。

第五十九話　放課後の雑談（前書き）

第五十九話です

第五十九話　放課後の雑談

「そういえばそろそろ期末テストだよな。赤点取らないように勉強もしないとな」
「ＩＳ学園って中間テストはないけど、期末テストはあるんだよね。そこで赤点を取ると長期休業のときに連日補習だっけ？」
「あ、忘れた。一夏、勉強教えてくれ」
放課後、夕暮れ色に包まれ、静まり返った教室。他の生徒はすでに残っていない教室で俺たちは雑談していた。
「お前が俺に……勉強を教えてくれだと？」
「なんだその珍しいものを見たような反応は」
一夏はもともと私立の藍越学園を受験するつもりだったらしいから結構出来るんだろう。そう思って頼んだんだが、一夏は俺の言葉を聞いて、目を見開く。俺がそれにツッコミを入れると、シャルルが口を開く。
「あれ？　明宏って一般科目苦手なの？」
「苦手って言えば苦手だな。ほとんど勉強してないんだよ。ほら、俺中学に行ってないし」
「あ……ごめん……」
デュノアが言ってしまったと言わんばかりにうな垂れる。俺の過去についてちょっと忘れてしまっていたようだ。
「いいって、気にするな。別に悪気があって言ったわけじゃないんだろ？　次から少し気をつけてくれればいいさ」
「……うん」
「よし。で、一夏、勉強教えろ」
「おい、さっきは頼んでる感じだったのに、命令口調になってるぞ」
「おっと、つい本音が」
「お前には教えてやらねえ」
「なら俺ももうお前の訓練、手伝ってやらねえ」

「あ、くそ、ずるいぞ！」
　こんな些細なことでふざけあうのはもういつものことだ。最近ではもうほとんど無意識でやっている。一夏も顔が怒っていないところからすると同じだろう。
「ああもう、教えてやるよ。それでいいんだろ」
「そこまで言うならしょうがない、教えさせてやる」
「てめぇ」
　そこまで言って笑いあう。デュノアも含めた三人の笑い声が教室にこだまする。
「でも明宏に出来ないことがあるなんて思わなかったぞ。ＩＳの扱いもうまいし、運動神経もいいし」
「そうそう。びっくりしたよ」
「お前たちは俺を一体なんだと思ってたんだ。俺だって人間だぞ。苦手なことや嫌いなことだってある」
　おいこら、そこで驚いた顔するな。だから俺はどんなイメージを持たれてたんだよ。
「明宏が苦手なこと……想像もつかないよ」
「落ち着けシャルル。きっと俺たちには想像もできないほどのことなんだ」
「お前も落ち着け。想像できるレベルのもんだよ」
「じゃ、じゃあ何だよ？」
「まずさっきも行った通り勉強だろ。あとは織斑先生の出席簿アタックや懲罰、篠ノ之博士の無茶振りとかが主だな」
　あとは、何だろ？　すぐに思いつかないってことは他にないってことか？
「あれ？　思ったより普通だな」
「だからどんな想像してたんだよ」
「どんなって……普通の人にはできなくて当たり前のこととかかな」
　俺は普通の人のカテゴリに入っていないのか。普通の人じゃないっていうなら織斑先生や博士だろ。

「まあ、そういうことで苦手な勉強をやりたいんだよ」
「確かに苦手なことにチャレンジするのはいいことだからな。そういうことなら喜んで教えるぜ」
「じゃあ頼むわ。ってことで、そろそろ俺は寮に戻るけど、掃除頑張れよ」
「手伝ってくれないのかよ」
「俺が手伝ったら罰にならないだろ。掃除ならお前の得意分野なんだから頑張れ」
ほとんど一人暮らしに近い生活をしていた一夏なら掃除なんてお手の物だろう。俺が手伝う必要はない。それに――
「俺がいない方が喜ぶ奴もいるしな」
「ん？　どういうことだ？」
「いやなんでもない」
デュノアに視線を向けると、顔を赤くして下を向いていた。まんざらでもなさそうだが。
「じゃあ、邪魔者の俺は早々に退散させてもらうぜ」
「なんかよく意味がわからないけど、また明日な」
「おう」
未だに赤くなった顔で下を向いているデュノアはそのままにしておいて教室を出る。そしてそのまま寮の自室に向かって歩く。
「はろ～、すーくん」
寮に入り、俺の自室の近くでとても見覚えのある女子に声をかけられた。
「ハロー、のほほんさん。どうしたんだ、こんな寮の端に」
「えっとね～、すーくんをお誘いに来たの～」
お誘い？　一体何のことだ。
「ほら～、そろそろ臨海学校でしょ？　いろいろ買いたいものがあるんだ～」
ああそうだ。そろそろ臨海学校――校外特別実習期間だったな。
確か三日のうち初日は丸々自由時間なので、女子はいろいろ買いに

行きたいのだろう。俺も水着を買いにいこうかなと思ってたところだ。
「で、買い物の荷物持ちとして俺を連れて行きたいと」
「それもあるけどぉ、この前の約束、忘れてない～？」
「あ、何かプレゼントするってやつか。忘れてるはずないだろ」
「よかった～」
のほほんさんが「えへへ～」と笑う。約束を忘れられなかったことがそんなに嬉しかったのか？
「じゃあ、今度の日曜にでも行くか。大丈夫か？」
「大丈夫だよ～。それと、かんちゃんも誘っていい～？」
かんちゃん？　えっと、確か四組の専用機持ちのあだ名だったな。この前のトーナメントのときに話したことがあるから面識はあるけど……大丈夫なのか？
「俺は別にいいが、あいつが俺と一緒に買い物に言ってくれるとは思えないのだが」
「そこは、わたしが説得してみるよ～」
「ん、わかった。じゃ」
「じゃあ～ねぇ」
のほほんさんが袖のあまり過ぎた手を振って返してくる。何度見ても癒されるな。
とりあえず、週末は空けておかないとな。まあ、俺と出かけたいと思うやつなんてあんまりいないと思うが。

第六十話　平和な買い物（前書き）

第六十話です

第六十話　平和な買い物

週末の日曜。約束通りに俺たちは『レゾナンス』に来ていた。メンバーは俺とのほほんさん、そしてのほほんさんに半ば強引で連れてこられた更識簪の三人だ。

「……来たくなかったのに」

「すまないな、更識」

自分の意思をほとんど無視された状態で連れてこられた更識の愚痴とも言える呟きに一応謝る。

「ううん……須藤は別に悪くない……悪いのは……」

そう言う更識の視線の先にはいつも通りののほほんさん。一体どんなことして連れてきたんだ。

「ま、まあ、今回は少しばかり付き合ってやってくれ。お礼と言っては何だが、『打鉄弐式』の手伝いするからさ」

「……今回は特別……」

「ありがとな。それにしても他の人には打鉄弐式の製作、手伝わせないのになんで俺はいいんだ？」

「須藤は……ＩＳの知識が豊富……とても助かる」

知識と言っても、ＩＳ全般の知識についてで打鉄弐式の武装についてはあんまり役に立ってないと思うんだが。

「それに……」

「ん？」

「須藤は……他の人と違う。……皆、私のこと敬遠するのに……須藤は普通に接してくれる……から」

「人が他人と違うのは当たり前だ。性別や生まれ、育ちはもちろんだし、趣味や性格とかも違う。似ているやつはいるかもしれないがまったく同じやつなんていないんだよ。だから自分と違うからと言って他人を敬遠するのは本来おかしいことだろ」

「そうかもしれないけど……でも皆、私のことを敬遠する」

「俺は絶対にしない。違うところもその人の個性だ。その個性を否定するような真似は絶対にしない」
皆と違うことがダメなことなら、人間全員がダメな存在だろう。特に俺はダメなことだらけだ。そんな俺だからこそ、そんなことは絶対にしない。したくはない。
「だからさ、もっと自分に自信を持て。他人と違うことなんて当たり前なんだから、そんなこと気にする必要なんてない。俺はそう思う」
「……ありがと」
「ねぇ、二人で何話してるの～？」
周りを見回していたのほほんさんが視線を俺たちに戻してくる。うん、のほほんさんだって他人と違うところ沢山あるじゃないか。特に服装のセンスとか、のんびりとした雰囲気とか。
「ん、なんでもない。それよりどこに行く？　俺の用事はあとでもいいから先に二人の用事を済ませてしまおうぜ」
俺の用事なんて、臨海学校に持っていく水着を買うだけだ。やろうと思えば数分で終わる。それなら先に二人の用事を済ませてしまったほうがいいだろう。
「ん～、わたしは水着を買いたいな～」
「のほほんさんも水着か。更識は？」
「……私も」
「よし、ならまず水着を買いに行くか。って、なんで俺と一緒のときに限って水着？」
俺にどうしろと言うのだろうか。はっきり言って水着のことなんてよくわからないぞ。海とかプールに行ったことないし、水着も今日買うのが初めてだ。
「えっとねぇ、すーくんに選んで欲しいので～す」
「何で俺？　更識でもいいんじゃないか？」
「わかってないな～、すーくんってば」
「わかってないって？」

「まあ、そういうことなので～す」
おい、どういうことだ。わかるように説明してくれ。
「まあいいや。とりあえず、水着を買いに行くってことでいいんだな。更識もそれでいいか？」
「う、うん……」
なんだか知らないが、更識の顔が赤くなっているような……。まあ、女子にそんなこと訊くのもなんだし見なかったことにしておいた方がいいか。
「じゃあ、しゅっぱ～つ！」
「おー」
「お、おー……？」
のほほんさんが手を振り上げるのに続いて俺と更識も手を上げて同調する。更識は少し疑問系だったが、その場の空気に押されてしまっていた。
うん、やっぱりこの二人は平和でいいな。唐変木（一夏）絡みの女子のトラブルもなく、のんびりとした空気で癒されるし。
でもなんか嫌な予感がするんだよな。たぶん唐変木（一夏）絡みで。特に何事もなく平和に過ごせればいいんだけどなぁ。

第六十一話　崩れ落ちるのどかな平和（前書き）

第六十一話です

第六十一話　崩れ落ちるのどかな平和

三人でのんびりと会話をしながら、水着コーナーに向かう。のほほんさんはゆったりとした口調、更識の物静かな口調とそれぞれ違うが、どちらも聞いていてなぜか落ち着く。

「で、そのとき焦った一夏が特攻をかけてな」

「ありゃ～」

「そこで特攻は……駄目」

「だよな」

今は一昨日の模擬戦のときに一夏がやらかした失敗談について話していた。のんびりした雰囲気でそんな会話をしているとは他人からすれば少し異様な光景だろう。だが、俺たちは一般人じゃない。三人ともＩＳ学園の生徒、しかもそのうち二人は専用機持ちだ。更識の専用機はまだ完成してないけど。戦いなんて日常茶飯事。

「でも～、専用機ってうらやましいな～。おりむーもすーくんもかんちゃんもみんな専用機持ってるんだもん」

のほほんさんがそんなことを口にする。確かに他の人からすれば、専用機はうらやましいものなんだろうな。

「んー、でもいいことだけじゃないぜ。それなりに規制とかあるし、代表候補生ともなればそれも多くなるんだろう？」

「うん……」

「やっぱりそっかぁ」

のほほんさんが少し残念そうに呟く。なんだか悪いことしたような気分だな。

「と言うかのほほんさんに合う機体ってあんまり想像できないな」

「え～、そうなの？」

「……うん。……想像できない」

更識がばっさりと切る。容赦がない。いっそ清々しいほどだな。

「うぅ、二人とも酷いよ～」

「だって考えてみろ。一年の専用機でのほほんさんに合う機体があるか？」
「一つぐらいはあると思うけどな～」
「白式は攻撃力と機動力に特化した近接戦闘オンリーの機体。甲龍も近接戦闘メインだからかなりの反射神経が必要だ」
「……そう。ブルー・ティアーズもシュヴァルツェア・レーゲンも第三世代兵器にくせがある。慣れるにはかなりの労力が必要」
「自立稼動兵器は確かに扱いづらいぞ。慣性停止能力もかなりの集中力が必要だろうし」
俺と更識で説明する。第三世代ＩＳは特殊武装のくせが強く、扱いが難しい。かといって第二世代ＩＳだと訓練で使っているし。
「そうなるとラファール・リヴァイヴ・カスタム？が一番扱いやすいと思うけど、あれはデュノアだからこそ使いこなせるんだよなぁ。そういえば打鉄弐式はどうだ？　武装も近距離、遠距離どっちも使えるし」
「打鉄弐式は他のＩＳと少し操作方法が違うから難しいと思う。……神王の方こそいいと思うけど」
「あ～、確かに神王はバランスもいいし。いいかも～」
更識の言葉にのほほんさんが続く。ん～、そこまでいいもんか？
「神王はおすすめしないぞ。基本スペックは高いし、バランスもいいけど、特殊な武装ばかりだし他の第三世代と変わらないと思うぞ」
「む～、そう言われればそうだね～……。やっぱり諦める～……」
のほほんさんも俺たちの説明で諦めたようだ。少しかわいそうだが、俺たちにはどうすることもできない。すまない、のほほんさん。
「って、そろそろ水着コーナーに着くはずだな」
「あ、水着買いに来たんだったね～」
「そういえば」
おいおい、忘れるなよ。二人が行きたいって言ったから来たってのに。
「そこの角を曲がればすぐそこ――」

その瞬間、俺の目に映った光景は今のこの平和がぶち壊されるであろうことを気づかせるのには十分すぎる光景で、俺は思わず深いため息をついた。

「……はあ、何やってんだ、あいつらは」

俺の目線の先には、なんだか異様なオーラを身にまとったオルコット、凰、ボーデヴィッヒの三人が曲がり角の陰に隠れながら、何かをじっと監視している光景が広がっていた。

……また何か、面倒なことが起きているんだろうな。

第六十二話　尾行中（前書き）

第六十二話です

第六十二話　尾行中

「のほほんさん、更識。水着はあとにして、他のところに行かないか？」

視線の先にオルコットたちを視認して、関わらない方がいいと判断した俺は二人に別のところに行くことを提案する。

幸い、二人は俺が先導するように前を歩いていたため、俺が陰になり俺の見たものは見えていない。このまま見なかったことにして別の場所に行けば巻き込まれることもないだろう。そう考えての提案だったが、やはりふたりともいきなりの提案に賛同してくれるはずもなかった。

「え～？　どうして～」

「……ここまで来たのに」

「そうだよな～」

俺は観念して体を横に移動させ、二人にオルコットたちが隠れている様子を見せる。それを見て、のほほんさんは面白いものを見つけたと言わんばかりの笑顔になり、更識は一体何なのかわからず怪訝そうな表情になった。

「あれって、せっしーとりんりんだよね～」

「ああ、それにボーデヴィッヒまで加わってるとすれば――」

「おりむー絡みだね～」

「えっと……どういうこと……？」

俺とのほほんさんがやっぱりと言った感じに会話をしていると、事情が飲み込めなかった更識が質問してきた。

「えっと、セシリア・オルコット、凰鈴音、ラウラ・ボーデヴィッヒの三人は知ってるよな？」

「……うん。……イギリスと中国、ドイツの代表候補生」

「そう。あそこに隠れているのがその三人だ。そして、三人とも織斑一夏に好意を持っている」

厳密に言えば、ここにはいない篠ノ之とデュノアも含まれるが、今の説明には必要のない情報なので割愛させてもらう。

頭のいい更識はその説明とさっきの会話で状況が理解できたらしく、そういうことかという表情を見せた。

「……わかった」

「わかってもらえて何よりだ。で、もう一度提案するが、他のところに行かないか？　あれに巻き込まれたら確実に面倒なことになる」

「だめ～」

「駄目……」

きちんと説明したのに一瞬で却下された。なぜだ？

「ここまで来たのに、それはだめ～」

「……時間の無駄」

「い、いや、時間の無駄って……。巻き込まれた方が時間かかると思うんだが」

「それでも……駄目」

「……わかった。じゃあ、行くか」

二人に断固拒否されてしまえば諦めるしかなく、しかたなく進む。ああ、一応失礼にならないように隠れている三人にあいさつをしないと。特に何もなければいいけどな。

「よう、三人とも。何やってるんだ？」

実際、ほとんど予想は付いているがとりあえず訊いてみる。予想が外れていれば面倒ごとに巻き込まれずに済むしな。

「「「っ！？」」」

いきなり後ろから声をかけられてびっくりしたのか、三人が声にならない声を上げる。

「だっ、誰！？　……って明弘？」

「あ、あら、明弘さん。奇遇ですわね」

「私が後ろを取られるとは……。やるな、明弘」

あれ？　いつのまに皆、俺のことを明弘と呼ぶようになったんだ？　まあ、気にしなくてもいいか。

「後ろにいるのは布仏さんと……どなたですの？」
「初対面なのか。日本の代表候補生で四組の専用機持ちの更識簪だ。名前くらいは知ってるだろ」
「うん、会ったことはなかったけど名前ならね」
「なら紹介はこれでいいな。……で、お前たちは何やってたんだ？　どうせ、一夏絡みだろうけど。……そういえば篠ノ之とデュノアがいないな。まさかどっちかが一夏と一緒にいるのか？」
「……相変わらず鋭いわね、アンタ」
「正解ですわ」
「ちなみに嫁と一緒にいるのはシャルロットの方だ」
やっぱりか。たぶん、三人とも一夏とデュノアが一緒に出かけたのをみて慌てて追ってきたんだろう。さっき三人が見てた方向からすると――水着コーナーあたりか。
「そうか。俺たちも水着コーナーに用があるから失礼するぞ」
「俺たちもということはお前たちも水着コーナーに？」
「ああ、二人が行きたいって言うから俺はその付き添いだ」
「じゃあ、あたしたちも行くわよ」
「そうですわね」
「うむ」
「行くのは結構だが、三人だけで行動してくれよ。俺たちは関係ないんだから」
こんなことで時間を浪費するわけにはいかない。面倒ごともごめんだし、すまないがこのあたりで失礼させてもらおう。俺としては一夏とデュノアが付き合うことになっても別にどうでもいいし。
「わ、わかってるわよ」
「ならよし。じゃあな」
三人と別れて水着コーナーに向かう。もし一夏たちと出くわしたら盛大にからかってやろう。のほほんさんたちが水着を選ぶまでの暇つぶしになりそうだし。
っていうか、今更だけど女物の水着コーナーか。居心地悪そうだ

な。

第六十三話　身分の差（前書き）

第六十三話です

第六十三話　身分の差

危惧していた面倒なことにも巻き込まれることなく、無事に水着コーナーに到着。たぶん俺たちが入ったあとにオルコットたちも来るんだろうけど、気にしないでおこう。

水着コーナーは広く、多種多様な水着があるみたいだ。水着に関してはほとんど知識がないからよくわからないが、男物の水着コーナーとは比べ物にならない差だ。これが女尊男卑というものだとつくづく感じさせられる。

「じゃあ、水着選んでくるね～」

「ああ」

のほほんさんと更識が水着を選びに行ってしまう。おいおい、女物の水着コーナーに男の俺を一人放置するなよ。

「とりあえず一夏でも探すか」

暇つぶしも兼ねて一夏を捜索する。結構時間かかるだろうと思ったが、数分であっけなく見つけられた。

「おう、一夏」

「あれ、明弘？　なんでこんなところに？」

見た感じ一夏一人。おそらくデュノアは水着を選んでいるのだろう。

「その言葉そっくりそのままお前に返してやろうか」

「俺はシャルの水着選びに付き合ってるだけだぞ」

シャル？　ああ、デュノアのことか。いつのまにかあだ名までつけたらしいな。

「俺も似たようなもんだ。それよりデュノアと二人っきりで出かけるとは、お暑いやつらだ」

「馬鹿、そんなんじゃねえよ。シャルって女物の水着持ってなかったらしいからさ」

「あ、そうか。そう言われればそうだな」

デュノアは男子として転入してきたから当然、女物の水着なんて持ってないだろう。一夏はそんなところまで気を回してたのか。さすがだな。

「そこのあなたたち」

と、一夏と駄弁っているところにいきなり割り込む声があった。

「なんだ？　何か用か？」

「そこに水着、片付けておいて」

おっと、いきなり見ず知らずの女から命令されたぞ。いくら女尊男卑の世の中だからって、こうして男に命令するのはどうかと思うな。

「断る。知らない女の命令なんて聞いてたまるか」

「人にあれこれやらせるクセがつくと人間バカになるぞ」

俺が断ると一夏がいいことを言う。だが一夏よ、こいつはもう手遅れだ。命令するのが普通だと思ってる雰囲気だし。

「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場がわかってないみたいね」

そう言って女は警備員を呼ぶ。ほう、警備員にいろいろ言って俺たちを逮捕させるつもりか。自分の立場がわかってないのはそっちなのにな。入学当時のオルコットの台詞だが、テレビがないのか。

「すいません。私、この人たちに暴力振るわれたんです」

案の定、でまかせを言う女。一夏が思わず反論しそうになるが、アイコンタクトで制止させる。この約三ヶ月、女子に囲まれて生活してきた俺たちの緊急用の意思疎通方法だ。ＩＳのプライベート・チャンネルを使えば楽なのだが、ＩＳの部分展開は校則違反だから極力避けたい。

「わかりました。そちらの二人、事務室まで来ていただけますか？」

「なぜです？」

「今の話が本当なら警察に連絡する必要がありますから」

「本当なら、ねえ……」

警備員から視線を外し、一夏で合図をする。

『一夏、生徒手帳を持ってるか？』
『あ、ああ』
『じゃあちょっと貸せ』
『なんでだよ？』
『この場を切り抜けるためだ。いいから貸せ』
『わ、わかった』
一夏ががさごそとポケットの中に手を入れて生徒手帳を探す。俺のポケットからすぐに出せるよう準備をする。
「なにをしているのですか？」
「ちょっと今のうちに身分を明かしておこうと思いましてね。後々必要になるかもしれないでしょう？」
「あら？　随分と潔いじゃない」
勝ち誇ったような表情になる女。今からその表情を絶望に染めてやるのかと思うと少しわくわくするな。警備員、お前も巻き添えだ。
「ほい、明弘」
「サンキュー、一夏。はい、これが俺たちの生徒手帳です」
一夏から生徒手帳を受け取り、自分のと一緒に相手に見せる。ただし相手に触らせず、あくまで確認させるだけ。
それを見た瞬間、女と警備員の表情が見る見る青ざめていく。
『ＩＳ学園　一年一組　織斑一夏』
『ＩＳ学園　一年一組　須藤明弘』
「ご覧の通り、俺たちはＩＳ学園の生徒です。さらに言えば、『世界で唯一ＩＳを動かせる男』と『ＩＳに次ぐ次世代パワードスーツの試験操縦者』です」
相手の表情が絶望に染まる。うん、いい顔だ。
「もちろん、俺たちは国際ＩＳ機関に保護されているような身です。ここで俺たちを事務室に連れて行くのはいいですけど、それ相応の覚悟はしておいてください。先ほど『本当なら』と警備員のあなたは言いましたが、裏を返せば『本当でなかったのなら』問題になるでしょうね」

警備員の顔がさらに青くなっていく。失神してもおかしくないほどに。

「もう一つ付け足すのなら、俺たちはイギリス、中国、フランス、ドイツの代表候補生と親しい仲にあります。もしこの事実が彼女達に知られたらその四ヶ国の政府も黙ってないかもしれません」

事実四人ともこの水着コーナーにいるし、今この場で見つかった時点でもこの二人はアウトだ。日本の代表候補生である更識もいるが一夏とは会ったことないし、日本政府の名前はすでに出ているから出さなくていいだろう。

「さて、そちらのあなた。先ほど俺たちに暴力を振るわれたと言いましたが、本当のことでしょうか？　もし嘘ならば今のうちに言えば、なんとかなるかもしれませんよ」

「う、嘘じゃないわよ！　実際に暴力を振るわれたわ！」

お、案外しぶといじゃないか。すぐに折れないやつは好きだが、お前は論外だ。

「ではあとで防犯カメラの記録で確認してください。それならすぐに事実がわかります」

女の顔がしまったと言わんばかりの表情になる。気づくのが遅いんだよ。

「失礼ですが、お二人の身分を教えていただけませんでしょうか？後々必要になるかもしれませんから」

さっき自分たちの身分を明かすときに使った台詞を再度使い、相手に要求する。こっちが教えたんだからそっちも教えろよ。教えないなんて言わないよな？　そう言外に含みながら。

震える手で二人が手渡してきた身分証明書を持っていたメモ帳に一字一句正確に書き写す。これで俺たちの完全勝利だな。

「はい、ありがとうございました。これはこちらから日本政府、及びに国際ＩＳ機関に提出させていただきます。もし先ほどの言葉が嘘であったなら、それ相応の処置が取られるでしょうね」

もし、とは言ったが百パーセント嘘だから確実に何らかの処置が

取られるだろう。警備員には申し訳ないが、これの天命だと思って諦めろ。

「最後に。……ＩＳをまともに動かしたことのない女と一介の警備員風情が俺たちにたてつくなんて百万年早いんだよ。分をわきまえろ」

それだけ言って俺は一夏とともにその場をあとにした。

「よくあそこまで冷静に対処できるな」

「こんな世の中だからな。あれくらい覚えておけ」

「いや、あんなにスムーズには行かないぞ。きっと」

「いざとなったら生徒手帳を見せて、自分が国際ＩＳ機関に保護されていること、ついでに代表候補生と親しいことを伝えれば終わりだ。難しいことじゃない」

おっと、思ったより時間がかかったな。あの女、俺たちの貴重な休日の浪費させるとは、あの場で潰したほうがよかったか。のほほんさんたちも水着を選び終わっているころだろう。もしかしたら俺を探しているかもしれない。

「そろそろ別れた方がいいかもな。時間も時間だし」

「え？　どうせだから一緒に行こうぜ」

「いや、お前はデュノアと二人で買い物しろよ。こっちもこっちの事情があるし」

それにデュノアもその方がいいだろうしな。

「ん、わかった。じゃあな」

「じゃ」

一夏と別れて、また一人で水着コーナーを歩く。はやく二人を見つけないとな。

第六十四話　自分の答え（前書き）

第六十四話です

第六十四話　自分の答え

「あー、すーくんどこ行ってたの～？」
「すまないな。ちょっとうざいやつを二人ほど社会的に抹殺してきた」
のほほんさんたちはすでに水着を選び終わって、俺を探していたようだ。まったくあの女たちが絡んでこなければ二人に迷惑かけなかったものを。本当に腹立つな。
「……どういうこと……？」
「ん、なんでもない。本当にどうでもいいことだったから。二人に迷惑かけるわけにもいかないしな」
「……わかった」
「ありがとう。で、いい水着見つかったか？」
見つかったから俺を探してたんだろうけど、一応訊いておく。いい水着がどんなのかは知らないけど。
「うん、見つけたよ～」
「……見つけた」
そう言いながら手に持った水着を見せてくる二人。更識は落ち着いた感じのワンピースタイプ。のほほんさんは――
「これって水着なのか？」
「そうだよ～」
のほほんさんが持っていたのは、はっきり言っていつものほほんさんが寮の中で着ているきぐるみと同じ様なものだった。確かにきぐるみとは違ってフードは付いていないし、材質的にも水着のようだ。というかこんなのが普通に売ってたのか？
「うん、どっちも似合うと思うぞ。水着に関しての知識がない俺が言っても信用されないかもしれないが」
「……ううん、信じる」
「わたしも～」

少しは疑ってもいいんじゃないか？　まあ、そこまで信用されているのは悪い気はしないが。
「でも念の為試着してみる～？」
「それは勘弁してくれ」
「ん～、しょうがないなぁ」
よかった。ここにいるのだけでも少し辛いのに、それをやられたらかなりきつい。これから他のところも回るのに、ここで精神を削りたくはない。
「よし、じゃあ早く会計を済ませて次のところに行くか」
ポケットから財布を取り出しながら、二人の水着を持って会計に向かおうとしたが、なぜか二人に止められた。
「ん、どうした？」
「それはこっちのせりふだよ～」
「……なんで明弘が……財布を出してるの？」
「なんでって、これ買うんだろ？」
水着買うには金がいるだろう。そして金を出すにはまず財布を出す。極自然な行動だと思うんだが。
「私たちの水着なのに……」
「そうそう！」
「こういうときって男が出すもんじゃないのか？　安心しろって。水着くらいなら買えるだけの金はあるから」
「……もしかして、女の子と買い物するの……初めて？」
「おう。初めてだが、何か問題でもあったか？」
「……なんでもない」
なんだか更識がため息をつきそうな表情になった。隣ののほほんさんは実際にため息ついてるし。一体なんなんだ？
「すーくんっていつもは鋭いのにこういうときはおりむー並みだね～」
「何の話だ？」
「ううん、なんでもな～い」

「？　まあいいか。とりあえず買いに行ってくるぞ」
話についていけないので、さっさと水着を買ってこよう。今回は二人に止められることもなく――というか二人ともついてきてないぞ。あれ？　俺一人で女物の水着を買ってこいと？
まあ、ここまできて買わないわけにもいかないので、会計に水着を出す。はあ、店員になんて思われるか。
「はい、こちらの水着二点ですね」
あれ？　かなり普通の対応だ。白い目で見られかと思ったのに。
……あ、そういえばこの店員。さっき女に絡まれたときにこっち少し見てたな。それに二人と水着を選んでるところもこの位置なら見えただろう。納得だ。
「ありがとうございました」
普通に会計を終え、二人を探す。さっきのところに行ってみても二人の姿はすでになかった。一体どこに行ったんだ。
「ま、とりあえずぶらぶらと歩き回って探してみるか」
もしかしたらすでに水着コーナーから出てしまっているかもしれないが、まずここを探してみよう。ここで見つからなかったらどうしようもないが。
「ラウラはかわいいよ」
なんか近くから知り合いの声が聞こえたぞ。次は一体何をしているんだ、あいつは。
その直後、さきほど知り合いの言葉に出ていたボーデヴィッヒと遭遇した。たぶんさっきの言葉を聞いたのだろう。顔が赤い。
「よう、ボーデヴィッヒ」
「あ、ああ、明弘か。そちらの用は終わったのか？」
「終わったは終わったんだが、二人がどっか行っちまってな。探してとこだ」
「そ、そうか。私は少し水着を見てみようと思ったのだが、どれがいいのかわからなくてな……」
「……」

沈黙。やばい。このペアは非常にやばい。やばいというかやっかいだ。

一人は生粋の軍人。当然水着の知識なんてない。もう一人も一応一般人ではあるが、泳ぎに行ったことなどなく、水着の知識はないに等しい。こんな二人ではまったくもってどうしようもない。

「……すまない。俺も水着の知識はないから手助けできそうもない」

とりあえず謝罪。なんかいたたまれない雰囲気だ。

「い、いや、お前が謝る必要はない。しかし――」

「ん？　どうした？」

「お前はすごいやつだと思っていた。ＩＳに関してもかなりのレベルだし、以前一緒に食事したときに見た弁当はとても上手かった。それ以外のことも何でもこなし、周りに対して気配りもできる。そんなお前でもできないこともあるのだな、とても、人間らしい」

ボーデヴィッヒがいきなりそんなことを言い始める。なんだ？

「戦うために生まれ、戦うために生きてきた。戦いに関してしか能のない私にはとてもまぶしく見える」

「……いや、それはお前のせいじゃないだろ。戦うために生まされたんだから」

以前教えられたボーデヴィッヒの過去。親はなく、戦いのためだけに命を与えられた、試験管ベビー。その事実はとても衝撃的だった。

「だが、戦いに生きてきた私は、負けた。戦いに全てを懸けてきた私が負けたのだ。その相手に私はなぜそんなに強いのかと、尋ねたことがある」

一夏のことだ。おそらくあの事件直後に一夏がボーデヴィッヒと行った相互意識干渉のときだな。

「そいつはこう答えた。『強くなりたいから、強いのさ』と。私には未だにその言葉の真意がわからない」

「……」

「だからお前に尋ねたい。――お前はなぜ強い？」

赤い隻眼が俺をまっすぐに捉えてくる。以前のような冷たさではない、本当にまっすぐな、その目。

「それは――」

俺がその期待に応えられるかはわからない。それでもこいつが答えを望むのなら、俺はその問いに答える。

「自分を探すため、かな」

「自分を探す……？」

「ああ。本当の自分を探すため。そのために強くなる。今のままでは満足できない。もっと、もっと――強くなりたい。強くなりたいから強いっていうのは一夏と同じだな」

「やはり、私には……わからない」

「わからなくてもいいさ。強さは人それぞれ、強さを求める理由も、強くなる過程も、全部人それぞれだ。お前はお前の答えを見つければいい」

「私の、答え……か。感謝する。すまなかったな、引き止めて」

「いや、べつにいいさ。それと――」

立ち去る直前、言い残したことを伝えておこう。

「水着に関しては、親しいやつに訊くといいと思うぞ。お前のことをきちんと理解できてるやつなら、お前に似合う水着を選んでくれるだろうさ」

「あ、ああ……」

ボーデヴィッヒの返事が聞こえるとすぐにその場をあとにする。俺がいても邪魔なだけだし、のほほんさんたちを探さないといけないからな。

「私は私の答えを見つければいい、か……」

明弘がいなくなったあと、ラウラはポツリと呟く。

「それもそうだな。私は私の答えを見つければいい。それだけのこ

とだ」
胸の中の疑問が解消されたわけではない。しかし、無理に解決する必要はないのだと、気づいたからもう気にならない。
「しかし、今はそれよりもやるべきことがある」
そう言って、ラウラはＩＳのプライベート・チャンネルを開く。
『クラリッサ大尉、ラウラ・ボーデヴィッヒだ。一つ相談があるのだが……』
自分の事をかわいいと言っていたあの唐変木のために自分に似合う水着を手に入れてみせる。

第六十五話　ささやかなお礼（前書き）

第六十五話です

第六十五話　ささやかなお礼

「はあ……どこにもいねえぞ。本当にどこ行ったんだ？」
あれから十数分。水着コーナーを探し回ったが、まったく見つからなかった。こんなことなら次に行くところとか、はぐれたときの連絡手段とか決めとくべきだったな。
「しょうがない。他のところに行ってみるか」
とは言ったものの、あの二人――というか女子がどういうところに行くのかわからない。まあ、頑張るしかないか。
そう思って水着コーナーを出る。すると、人ごみの中から見覚えのある二人がこっちに近付いてきた。
「やほ～、すーくん」
「……急にいなくなって、ごめん」
はあ、人が頑張ろうと決めた矢先にそれをぶち壊すなよ。探す手間が省けたのはよかったけどさ。
「どこ行ってたんだよ。探したぞ」
「ごめんね、これ買いに行ってたんだ～」
そういうのほほんさんの左手には、紙製のコップ。飲み物か何かだろう。更識の手にも同じものがある。更識は両手に一つずつだが。
「……はい」
「ん？　ありがとう」
更識から紙コップを一つ渡される。中身は――あ、グレープジュースだ。
「水着買ってくれたお礼だよ～」
「そんな、別に気にすることないのに」
「……駄目。私たちが気にする」
更識がいつもより少し強めの口調で言う。こりゃ何言ってもダメだな。
「じゃあ、ありがたくいただくぞ。……おっ、うまいな」

おそらく果汁百パーセントだろうが、しつこすぎず、甘すぎず、とてもうまい。二人はよかったという表情で自分のジュースを飲む。
「二人のは何のジュースなんだ？」
「いちごジュースだよ～」
「私のは……りんごジュース……」
「そっか。……ん、本当にうまいな。二人も飲むか？」
そう言って二人にグレープジュースを差し出す。――あれ？　なんで意外そうな顔するんだ？
「あ、すまん。俺が口つけたジュースなんて飲みたくないか」
「そ、そんなこと……ない……」
「ううん！　そんなことないよ！」
手を引っ込めようとしたら、二人が強く否定してきた。何なんだよ、一体。
「そ、そうか。じゃあ、はい」
「……じゃ、じゃあ……いただき、ます……」
先に飲んだのは更識。少しためらい気味に一口ほど飲んだあと、微笑む。
「……ありがとう」
「どういたしまして。はい、のほほんさんも」
「うん、いただきま～す」
のほほんさんは極自然にジュースを飲む。その後ストローから口を離して、満面の笑みになった。
「おいしかったよ～。ありがとね～」
「どういたしまして。うまかったなら何より――って、中身がほとんどなくなってるぞ！？」
なぜだ。俺は数口しか飲んでないし、更識も一口ぐらいしか――ああ、のほほんさんか！
「ごめんね～。代わりにわたしのあげる～」
「いや、それは――」
「本音……それは駄目……」

「さ、更識。止めてくれるのか」
「……本音だけずるい。……わ、私も……」
「って更識、お前もか！」
更識なら止めてくれると思ったのに。何が起きてるんだ、今。
「……簪」
「え？」
「簪。……本音のことはあだ名だから……私も名前で……呼んで？」
ちょ、そんな目で見るなよ。断れないだろうが。
「わかったよ。えっと……簪」
「……うん」
うわ、今さっきまでの表情とはうって変わってすごい笑顔だよ。
そこまで喜ばれるようなことか？
「はいは～い、じゃあ、すーくん。どうぞ～」
「……はい」
「あ、ちくしょう。てっきり流れると思ったのに、流れなかっただと」
そんなこんなで俺たちの休日はのんびりと、しかし少し騒がしく過ぎていった。

第六十六話　強さとは（前書き）

第六十六話

第六十六話　強さとは

「はっ！」
「えいっ！」
俺の目の視線の先で、銀髪と藍色髪の少女が交錯する。殴打、手刀、蹴り、回避、防御と流れるような身のこなし。
その動きに合わせて二人の長髪が踊る。本来なら戦いの邪魔になる長髪だが、二人にとってはそんなことはないようだ。逆にその身のこなしと合わせてとても華麗な舞を思わせる。
そんなことを考えていると、一瞬のうちに決着がついた。銀髪の少女の手刀が首に突きつけられる。しかし対する藍髪の少女の蹴りがわき腹に添えられた。――引き分けだな。
「はい、引き分け。ほら二人とも、手と足を引っ込めろ」
動きを止めた二人に声をかけて手と足を引っ込めさせる。二人とも組み手を終え、俺の差し出したタオルで汗を拭く。
「ふぅ、つよいな」
「いやいや、本物には敵わないよ。わたし息切れ切れなのに、そっちは息切れてないじゃん」
「そうだが、私と同い年でここまでできるやつは珍しいぞ。正式に軍に入る気はないか？」
銀髪の少女が訊く。しかし藍髪の少女はその髪と同色の目で相手をしっかりと見据えて言う。
「ううん、遠慮しとくよ。軍なんてわたしの柄じゃないし」
「そうか。ではお前も駄目か。お前たちはいつも一緒だからな」
銀髪の少女が今度は俺に向けて口を開く。その表情は少し残念そうだが、無理なものは無理だ。
「ああ、すまないな。私たちはあくまで仮入隊の身分だ。正式な軍人になるつもりはない。ここにいるのも今日で最後だ」
「そうか。しかたがないな」

ＩＳ部隊、ＩＳでの戦闘を専門とする特殊部隊だ。俺たちはそこに仮入隊している。ＩＳは原則、女にしか扱えないので、男である俺は女装して。こんなことしていいのかはわからないが、上からの指示なのでしょうがない。

「では、最後に一つ訊きたいことがある。答えてくれるか？」

「うん、それぐらいなら喜んで」

「ああ、別に構わない」

「ありがとう。では――お前たちはなぜ強い？　強さとはなんだ？」

銀髪の少女の問いに一瞬言葉が詰まる。だが、次の瞬間にはすんなりと自分の考えを口にしていた。

「わたしたちは強くない。わたしたちが強いとすれば――」

「守るべきものがあるから、だな」

「守るべきもの、か」

「ああ、守りたい誰か――いや、守り合いたい誰かがいれば頑張れる。私たちはそう思っている」

その問いの答えは無数にあるのだろう。人の数だけの答えがあり、完璧な正解なんてないだろう。だからこそ俺たちは俺たちの答えを言う。それが俺たちにとっての正解だと信じているから。

「守りたい、守りあいたい誰かのため、か。そうか」

「でもこれは私たちの答えだ。お前はお前の答えを見つけた方がいい。それがお前の正解だろうから」

「……うむ、そうだな。感謝する。引き止めて悪かったな」

「いや、俺――私たちも最後にいい思い出ができた」

「うん、こっちこそありがとう。じゃあね」

「ではな」

俺たちは手を振ってその場をあとにしようとする。もうここに来ることはないだろう。

「またどこかで会えるといいな」

「会えれば、な」

きっと少女だってわかっているだろう。そんな偶然が起きるはず

がないと。もう会えるわけがないと。

――そして次の瞬間、俺は一人、自室のベッドの中にいた。

「これで五度目……か」

時計の針は二時前を指している。物音一つ聞こえない、静寂に包まれた夜。しかし俺の体からは大量の汗が吹き出ている。

不快感のなさも、思い出せない夢の内容もいままでと全く同じ。そのものは違うが、頭に響いて離れない言葉も――

『お前たちはなぜ強い？』

強い？　そんなわけあるか。俺なんかが強いわけがないだろうが。空白（からっぽ）の俺が強いわけなんて、あるはずがない。

ただ頭から言葉が離れないのはいい。何度も経験したから慣れもする。それよりも気にかかるのは、藍色の髪と目の少女。俺とは正反対のような性格をしているのに、なぜか誰よりも自分に近い存在のように感じさせられる少女。まるで自分と接しているかのような錯覚すら感じさせる。

思い出したい。思い出したいのに、思い出せない。思い出さないといけないはずなのに――

「くそっ。くそっ！」

思い出せそうで思い出せない。体が拒む。それを思い出すのを怖がっているように。何かに恐れているかのように。

「お前は一体誰だ？　親しいやつなのか？　それならなぜ思い出すことを体が怖がるんだ？　一体、お前は……誰なんだよ」

疑問に答える者はいるはずもなく。夜は静かに更けていった。

第六十七話　誰も知らない始まり（前書き）

第六十七話です

第六十七話　誰も知らない始まり

「……見つけた」
とある一室。広い部屋に少し高い声が染み渡る。声の主は少女。
その声はわずかだが喜びを含んでいる。
「見つかったのか？　フェル」
不意にもう一つの声が響き渡る。フェルと呼ばれた少女は声のした方――部屋のドアがある方を向いた。
「ちょうどいいわ、グレル。今呼びに行こうと思ってたところよ」
「何かあると思って来てみて正解だったな。……で、本当に見つかったのか」
笑みを浮かべていたグレルと呼ばれた少女が真剣な顔になる。フェルはそれに対して極めて冷静に答える。
「うん、やっぱり『彼』だったわ」
「お前がそこまで言い切るのなら、それなりの理由があるんだろうな？」
「ええ。これを見て」
フェルはそう言って、目の前のパソコンの画面に映像を二つ同時に出す。その映像は、五月にＩＳ学園で行われたクラス対抗戦、そして六月末の学年別ペアトーナメントの試合映像だった。
「これがどうかしたのか？」
「いいから見て」
フェルの言葉に従い、グレルはそれらの映像を同時に注視する。
映像はどちらも予想外の事態に入り、そのまま先頭は進み――終わった。
「……確かにこれは、決定的だな」
「でしょう？　まさかＩＳ学園にいるとは思わなかったけど、灯台下暗しだったわね」
「で、見つけたのはいいが、どうするんだ？　まさかＩＳ学園に攻

め込む気か？」
「そんなの駄目に決まってるでしょう。確実に邪魔が入る」
「だよなぁ。専用機が十機――いや、一機完成してないらしいから九機か。それに訓練機も含めるとだいたい三十機ってとこだっけ？　そりゃ面倒だ」
グレルがため息をついた。そのまま面倒くさそうな表情のままフェルに尋ねる。
「じゃあどうするんだよ」
「もうすぐＩＳ学園は校外特別実習の時期らしいわ。毎年一年生を対象にした、いわゆる臨海学校というものね」
淡々と、あらかじめ書かれた文章を朗読するかのようにフェルは告げる。グレルはそれを興味深そうに黙って聞き続ける。
「そこが狙い目。その間は一年生はＩＳ学園を離れる。戦力は文字通り半減するわ」
「……ああ！　そういうことか」
「わかったみたいね。特別実習の三日間は一年生の専用機持ち、あとは護衛と生徒が実習で使うのをかねて訓練機が五機、多くて十機ほどのはずだわ。その程度ならいけるはずよ」
「一年の専用機持ちは七人、そのうち一人の機体はまだ完成してないから実質六人か。訓練機と合わせても多くて十六機。なんとかいけるな」
グレルの顔に笑みが浮かぶ。フェルもかすかに笑みを浮かべながら、言葉をつなげる。
「『彼』以外の相手にはアレらを使いましょう。専用機持ちたちには三機、訓練機に四機ぐらい当てれば勝てないまでも時間稼ぎにはなる」
「そしてその間に目的を達成する。いいじゃねえか」
「決まりね。やるのは……そうね、初日は様子を見て、二日目にしましょうか。たぶん二日目に実習が本格的に始まるだろうから訓練機も少なからず使えなくなるはず」

「そこまで予想済みってことか。いいぜ、お前がそこまで自信あるって言うなら俺は大賛成だ」
フェルの表情に変化はない。しかしグレルからすれば今のフェルには自信があることは容易にわかる。それだけの時間は一緒に過ごしてきたのだから。
「なら決定よ。今年は六日からだったはずだから、私たちも六日に出るわ。もし何か起きればそれに乗じて作戦を決行することにしましょう」
「オーケー。その日に備えて俺たちも機体の整備でもするかね」
「そうね、いきましょう」
椅子に座っていたフェルが立ち上がり、グレルとともにドアに向かう。誰もいなくなった部屋に電源が入れられたまま放置されたパソコンの画面には、一人の少年の写真が映っていた。
藍色の髪と目。白を基調にしたＩＳ学園の制服を身につけた少年。
――『須藤明弘』の写真が。

第六十八話　天災の天才（前書き）

第六十八話です

第六十八話　天災の天才

「海っ！　見えたぁっ！」
同じバスに乗っていたクラスメイトの一人が叫んだ。それに続くように他の女子たちも歓声を上げる。
臨海学校初日。海にふさわしいほどの快晴だ。太陽に光が海に反射して輝いている。
「海か。最後に来たのはいつだったけかな」
確か去年アメリカの海に行ったとき以来だ。あれは六月のことだったから一年と一ヶ月ぶりってところだろうな。
「久しぶりなの～？」
「ああ、海に行く理由もなかったしな」
隣の席に座っているのほほんさんの方に向き質問に答える。簪は四組なので別のバスだ。
「それにちゃんと海で遊ぶのは今回が初めてなんだよな」
「そうなんだぁ、あとで一緒にあそぼ～」
「いいぞ。こっちこそいろいろ教えてもらえると助かる」
「わ～い」
のほほんさんが満面の笑みを浮かべる。その弾みにその首につけていたネックレスがゆれた。天使の羽をモチーフにした銀色のネックレスだ。《イージス》の修理を手伝ってくれたお礼としてこの前の買い物のときに買ったものだが、のほほんさんは気に入ったらしく毎日のように身につけてくれている。贈った方からすると嬉しい限りだ。布仏先輩にも同じネックレスを贈ったけど、喜んでくれたかな？
「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」
織斑先生の一言で立っていた何人かの女子がすぐに着席する。相変わらずの指導力だ。
数分後、バスは目的地である旅館に到着。旅館の女将である清洲

景子さんに挨拶したあと、俺たちは旅館の中に入っていった。
「ふぅ、やっぱり一夏と同室か」
「それが普通だろうな」
案の定、俺と一夏は同室になった。俺たちは海に行くためバッグに水着やタオルといった必要なものを入れて更衣室に向かった。

「……なあ、明弘」
「……なんだ、一夏」
更衣室に向かう途中、俺たちは奇妙なもの――真っ白いウサミミを発見してしまった。しかも『引っ張ってください』という張り紙が張ってある。
「これって――あの人だよな」
「ああ、間違いない。このウサミミ、見覚えがある」
間違いないな。天災の天才。世界一の頭脳を持つ、歩くトラブルメーカー。ＩＳの開発者。絶望的な社会不適応者。篠ノ之束さんだ。
「なんかここで抜かないとあとで面倒なことになるだろうし……。抜くぞ？」
「ああ」
一夏がそれを思いっきり引っ張る。博士が埋まっていると覆ったのだが、ウサミミは意外にあっけなく抜けた。そのまま勢い余った一夏は盛大にすっころんだ。
「あ、あれ？」
「どういうことだ……？」
二人して頭に疑問符を浮かべていると、何かが高速で飛んでくるような音が聞こえた。
「一夏っ！　避けろ！」
「え？　……わぁっ！？」
今さっきまで一夏がいたところに謎の飛行物体――巨大なにんじ

んが突き刺さった。このにんじんも見覚えがあるぞ。……まさか、このときのために？

「あっはっは！　引っかかったね、いっくん！」

にんじんが開き、笑い声とともに登場したのは、やはり篠ノ之博士だった。この人は普通に登場することを知らないのか。

博士の格好は、不思議の国のアリスにでてくるアリスのような青と白のワンピース。そして一夏からウサミミを受け取って装着した。一人でアリスとウサギか。テーマは一人不思議の国のアリスあたりか。相変わらず個性的なセンスだ。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。アキくんもおひさ～」

「久しいと言っても二ヶ月ぶりですけどね」

「あははー、そうだったねー。ところで二人とも、箒ちゃんはどこかな？」

きょろきょろと周りを見渡す博士。その頭の上のウサミミもそれに合わせて動く。芸が細かいな。

「俺たちもどこにいるかはわかりません。まあ、大方そのウサミミでわかるんじゃないですか？」

「まあねー。この私が開発した『箒ちゃん探知機』ですぐ見つかるよ。じゃあね、いっくん、アキくん。またあとでね！」

それだけ言うとものすごい速さで走り去っていってしまった。やっぱりあのウサミミがそれだったか。いつものことだけど、変なもの作るなぁ。

「……何だったんだ、一体」

「今は気にしないほうがいいぞ。とっとと着替えに行こうぜ」

「あ、ああ。そうだな」

博士の最後に言った言葉が気になるが、今は気にしないことにしよう。

とりあえず、俺たちは男子用に割り振られた更衣室に向けて再び歩を進めた。

第六十九話　穏やかな静寂（前書き）

第六十九話です

第六十九話　穏やかな静寂

更衣室で水着に着替え、海に向かう。一夏は黒のトランクスタイプの水着、俺は紺色の一夏と同じタイプの水着と白い半袖シャツだ。
「明弘って、体細いよなー」
「俺が一番気にしていることを簡単に突くんじゃねえよ」
「気にしてたのか？　すまん」
「わかればいい。……俺だってちゃんと筋トレしてるんだよ。一応筋力や体力はついてるんだが、見た目はほとんど変化しないんだよな」
シャツを着ているのだって、あんまり体を見られたくないのが大きい。長袖長ズボンなら一番いいんだが、暑いからしょうがなく半袖だ。
「そういうもんなのか？」
「たぶん俺の体質の問題なんだろうけどな」
そんな雑談をしていると海に着いた。すでに大勢の女子が来ていて、あちこちから楽しげな声が聞こえる。
「あ、織斑くんだ！」
「須藤君も一緒だー！」
「う、うそっ！　わ、私の水着変じゃないよね!?　大丈夫だよね!?」
「わ、わ～。体かっこい～。鍛えてるね～」
「須藤君、肌白ーい。女の子みたい」
ん？　確かに一夏に比べると肌白いかもな。金の無駄遣いをしないように長袖しか着なかったし、バイトや買い物意外で外に出なかったからか。記憶を失くす前はどうだったか知らないが。
「あとでビーチバレーしようよ～」
「おー、時間があればいいぜ」
ビーチバレーって確か、砂浜でやるバレーボールだっけ。ボール

もビニール製のボールを使うって聞いたけど、やったことないな。
「さて、と。準備運動も終わったし、そろそろ泳ぎに行くか」
「そうだな。海で泳ぐのは初めてだし、少し楽しみだな」
準備運動を終え、いざ海に向かって歩き出す。が――
「い、ち、か～～～っ！」
いきなり一夏に凰が乗っかってきた。猫みたいに身軽なやつだな。
「お、おい！　いきなり乗っかるなって！」
「いいじゃない、別に」
「じゃ、俺は他のところ行ってるわ。頑張れ～、一夏」
「ちょ、明弘！　俺を見捨てていくのか！？」
「お前のことは、たぶん忘れない……！」
芝居がかった台詞を残して、その場から走り去る。後ろから一夏の声が聞こえるが、聞こえない聞こえない。

そんなこんなで一人になった俺は、ぶらぶらと浜辺を散策する。
何人かの女子に声をかけられたので返すということが何回もあった。他のクラスの女子も多かったが、結構普通に話すことができた。
そのまま散策を続けていると、日陰に座りながら空中投影ディスプレイを凝視している簪を発見した。
「よう、簪」
「あ……明弘……」
俺はそのまま簪の隣に座る。簪もディスプレイから視線を外して、俺を見る。
「海まで来て打鉄弐式の調整か？」
「うん……」
「せっかく水着も買ったんだから、少しくらい泳いだらどうだ？」
「……じゃあ……あと、少しだけ」
会話を終えると、俺は地面に寝て空を見上げ、簪はディスプレイ

に視線を戻す。
　沈黙が流れる。しかし嫌な感じはせず、逆に少し心地いいと感じる沈黙。
　何分、こうしていただろうか。数分と言われればそうかもしれないし、一時間以上と言われても違和感はない。その沈黙は、聞き覚えのあるのんびりとした声にかき消された。
「あ～！　すーくん、やっと見つけた～」
「……本音」
「ん？　……のほほんさん？」
　視線を空から、声のした方に向けると、やはりのほほんさんがこっちに向かってゆっくりと走ってきた。ゆっくり走るって結構すごいな。
「すーくん、探したよ～。かんちゃんと一緒だったなんて」
「探したって、俺を？」
「そうだよ～。一緒にビーチバレーしよー」
「別にいいけど……簪はどうする？　一緒に来るか？」
「……ううん。……ここにいる」
　どうやら打鉄弐式の調整とかを進めたいらしい。手伝いたいところだが、のほほんさんの方にも行かなければいけないし、俺がいても役に立たないだろう。それどころか邪魔になりかねない。
「そっか。じゃあな」
「じゃあね～」
「……うん」
　簪と別れて、のほほんさんとともに砂浜を歩いていく。ビーチバレーか。初めてやるから結構楽しみだな。

第七十話　ビーチバレー（前書き）

第七十話です

第七十話　ビーチバレー

「連れてきたよ～」
のほほんさんに連れられ、着いたところには一夏、デュノア、ボーデヴィッヒ、それによくのほほんさんと一緒にいる谷本癒子と鏡ナギだ。俺とのほほんさんを加えると七人だな。
「って、あれ？　なんで俺呼ばれたんだ？　俺入れたら奇数になるだろ」
「えっとね～、すーくんにはわたしたちのチームに入ってほしいの～」
話を聞くと、チーム分けは一夏、デュノア、ボーデヴィッヒのチームとのほほんさん、谷本、鏡のチームに決まったが、あまりにも戦力に差がありすぎると言うことで俺を連れてきたらしい。とりあえず俺を呼ぶ前にチームの再編成をしたほうが手っ取り早かったんじゃないかという指摘はしないでおこう。俺のビーチバレーやりたかったし。
「ふーん、これがビーチバレーのボールか。軽いし、少し力加えたら割れそうだな」
「すーくん、ビーチバレーは初めて～？」
「まあな。でも大体のルールはバレーボールと同じなんだろ？　だったら大丈夫だ」
谷本からボールを受け取って実際に触りながらのほほんさんと話す。ふむ、軽いし、ある程度の大きさはあるから風の影響を受けやすそうだな。足場も砂だから結構悪いし。足元と風向きには一層の注意を払う必要がありそうだ。これは結構ハードなスポーツじゃないか？
「んじゃ、お遊びルール。タッチは三回まで、スパイク連発禁止、十点先取で一セットね」
「オーケー、じゃサーブは谷本からでいいか？」

「まかせてよ！」
ボールを谷本にパスする。
「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を……見よ！」
いきなりジャンピングサーブ。スピードもあるし、ラインギリギリだ。かなりのコントロールだな。
「まかせてっ！」
デュノアが、それに反応して拾おうとする。そしてそのまま――ボーデヴィッヒと衝突した。……何やってんだ？
「だ、大丈夫か！？」
「いたたた……ラウラ、どうしたの？」
「か、かわ、かわいいと……言われると、私は……。うぅっ」
そして、一夏と目が合うや否や、ボーデヴィッヒは顔を赤くして逃げていった。
「え……。っておい、ラウラ！　どうしたんだよ！？」
「……また一夏が、何か言ったのか？」
「まあね……」
何がなんだかわかっていない一夏をよそに、デュノアとそんな会話をする。まあ、予想通りだったが。
「追いかけた方がいいのか？」
「止めておいたほうがいいと思うよ」
「あとで様子を見に行けばいいだろ。ゲーム再開するぞ」
「お、おう！」
今のは俺たちのポイントなので、もう一度谷本のサーブ。さっきと同じくスピードもコントロールも抜群だったが、今度は一夏に取られ、デュノアがスパイクを打つ。
「ちっ！」
なんとか飛びついてボールを拾おうとするが、砂に足を取られて一瞬間に合わなかった。やっぱりこの足場の不安定さは厄介だな。
「すまん」

「どんまいどんまい！　次がんばろう！」
「よし、次いくぞー！」
サーブ権が一夏に移り、一夏がサーブを打つ。しかもそのサーブは追い風に乗って、かなりのスピードになる。
「よっ、と！」
スピードはあったが、風によってコントロールは甘くなったらしく鏡がうまくレシーブする。ボールはそのまま俺の元に、チャンスボールだ。
「スパイクか！？」
一夏がブロックの体制に入り、デュノアが後ろに下がる。一夏が取れなかったときの保険か。言葉を交わさずにそれをやるとは、やっぱりこの二人はチームワーク抜群だな。だが――
「残念でした」
俺はスパイクを打つフリをしてボールを山なりに打つ。ボールは一夏の上を通り過ぎ、一夏とデュノアの間にゆっくり落ちた。
「よし、これでさっきの失敗は帳消しだ」
「うわー、すごぉい」
「うわー、フェイント」
「お前本当に初心者か？」
のほほんさんとデュノアと一夏が口々にそんなことを言う。
「ま、適当にやっただけだがな」
「明弘らしいな。まあ、まだ一対二。まだまだこれからだ！」
「「「おー！！！」」」
一夏の言葉にデュノアはもちろん、俺たちも手を振り上げる。こういうのはテンションを高くした方が面白いからな。
結局、最後はギリギリのところで一夏チームに負けてしまった。チームとしての総合身体能力も僅差であっちが勝っていたが、チームワークでもあっちが勝っていたのが大きな敗因だろうな。
とりあえず、そんな騒がしくも楽しい自由時間はあっという間に過ぎていってしまった。

第七十一話　豪華な夕食（前書き）

第七十一話です

第七十一話　豪華な夕食

時間は七時半。大宴会場で、俺たちは夕食を取っていた。
「刺身ってあんまり保存が利かないから、あんまり買ったりしないけど、これはうまいな」
「うん、おいしいね～」
「……おいしい」
俺の左右にいるのほほんさんと簪が俺の言葉に頷く。ちなみに全員浴衣着用だ。よくわからないが、『お食事中は浴衣着用』という決まりらしい。
メニューは刺身と小鍋、山菜の和え物が二品、赤だし味噌汁、お新香だ。しかも刺身はカワハギ。最近では高級魚だから食べたことはなかったけど、確かにこれは高級魚だ。
「刺身だけじゃなくて、他のも全部うまいな。さすがＩＳ学園だ」
「ね～」
のほほんさんが笑顔で同意してくれる。うん、やっぱり癒されるなぁ。
「けど、こんなに食いきれないんだよな。うまいけど、腹がいっぱいじゃ食えるものも食えないし」
「すーくんってば小食～」
「しょうがないだろ。体質の問題なんだから」
まあ、博士に拾われるまで一日一食なんていつものことだったからな。それも大きな要因な気もするが、それは置いておこう。
「じゃあ、わたしが食べてあげる～。あーん」
のほほんさんが、俺のほうを向いて口を開けてくる。これはあれか？　食わせろってことか？　まあ、食ってくれるならありがたいが。
「じゃあ、刺身いくぞ。はいあーん」
「あーん」

刺身をのほほんさんの口に放る。のほほんさんは笑顔で、刺身を租借して飲み込んだ。
「えへへ～」
なんでそこで嬉しそうなんだろうか？　確かにカワハギはうまいけどさ。
「……あ、明弘」
「ん？　どうした簪」
「……わ、私……も……」
簪が躊躇いがちにそんなことを言う。なんだ、簪も刺身が食いたいのか？
「ん、まあいいぞ。はいあーん」
「あ、あーん……」
断る理由もなく、簪にも刺身を食べさせる。って、だからなんでそんなに嬉しそうなんだよ。カワハギがそんなにうまかったか。
「あー！　ずるーい！！」
「私も私も！」
いきなり女子が大声を上げる。なんだよ、そんなにお前らは自分の分だけで満足できないのか？
そんなことを思っていると、一夏の方にも女子が群がっているのが見えた。あいつ、また何かやらかしたのか。
「お前らは静かに食事することすらできんのか」
その声に場の全員の空気が凍りつく。
「お、織斑先生……」
「どうにも、体力があり余っているようだな。よかろう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。五十キロもあれば十分だろう」
「いえいえいえ！　とんでもないです！　大人しく食事をします！」
そう言って女子は各自の席に戻っていく。織斑先生はそれを確認してから一夏の方を見た。
「織斑、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「わ、わかりました」
そう言いながら、何で怒られたのかいまいちわかっていない一夏。
さすがは唐変木、これで気づかないとは」
「須藤、お前もだ」
「え？　何で俺もなんですか。俺は何もやってないですよ」
「そう言うなら、さっきそこの二人にやったことは一体なんだ？
説明してみろ」
そこの二人――のほほんさんと簪か。何か変なことしたか？
「料理が食べ切れそうもなかったので、二人に分けてただけです。
料理を残してはもったいないでしょう？」
「……まったく、お前も馬鹿（織斑）と同じか」
「先生、唐変木（一夏）と一緒にしないでください。俺はあんなに鈍感じゃ
ないですよ」
「……どっちもどっちだ、馬鹿者」
いやいや、本当に一夏と一緒にしないでほしい。あんな病的なま
での鈍感さを持つ人間と一緒に扱われるのは、少し屈辱だ。
「まあいい。食事は静かに取れ。他のやつに分けるなら皿を使え。
いいな」
「わかりました」
「わかればいい。それと織斑、あとで少し私の部屋に来い」
「は、はい」
それだけ言うと織斑先生は去っていった。んー、なんで怒られた
んだろう。一夏みたいに問題は起こしてないはずなのにな。
「ま、どうでもいいか。とっとと食事を済ませてしまおう」
考えたってわからないものはわからない。なら考えるだけ無駄と
いうものだ。そんなことよりもこの食事を早く食べてしまおう。

第七十二話　風呂のあとに（前書き）

第七十二話

第七十二話　風呂のあとに

「ふー、いい湯だったなー」
豪華な夕食のあとに露天風呂。それも俺と一夏の貸切だったこともあり、かなり気分がいい。一夏は織斑先生に呼ばれて先生の部屋に行っている。
「……暇だ」
一人きりというのも存外暇だ。話し相手の一夏もいないし、臨海学校だからノートパソコンも持ってきてないし、本当にやることがない。持ってきた本もあらかた読み終わってるし。
「……暇つぶしにどこか行くか」
とは言ったものの、のほほんさんや簪の部屋はわからない。となると――
「織斑先生の部屋しかないか」
一夏もいるだろうし、それしか選択肢はない。どこにも行かないという選択肢もあるにはあるが、は論外だ。暇すぎる。

「というわけで、やってきました『鬼教官の部屋』～。って誰に言ってんだ、俺は」
ところ変わって織斑先生の部屋の前。誰もいないというのに、俺はなぜかそんなことを呟いていた。
まあ、こういうのはノリが大事って博士も言ってたし、いいだろう。その人の言うことだから本当かどうかわからないけど。
とりあえずドアをノックする。すると間を置かずに中から返事が返ってきた。
「誰だ？」
「須藤です」

「須藤か。まあいい、入れ」
「はい、失礼します」
了承を得たので部屋に入る。するとそこには部屋の主の織斑先生と着ているはずの一夏――の代わりに篠ノ之、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィッヒという面々がいた。
「何か用か？」
「いえ、一人でいても暇なんで、一夏を探しに来ました」
「ふむ。一夏ならちょうどさっき風呂に行ったぞ」
「風呂ならさっき俺と一緒に行ったはずですけど」
確かに一夏は風呂好きだが、さっき入ったばかりの風呂にまた入りに行くか？　明日の朝にできればもう一度入りたいと入っていたが。
「あいつにはマッサージをさせたからな、少々汗臭かったから行かせた」
「あ、そうですか」
確かに一夏ならマッサージくらいできそうだな。
「で、篠ノ之たちは何でここにいるんだ？」
「ま、まあ、いろいろあってな……」
「一夏もことでちょっと、な。ちょうどいい。お前も何か飲むか？」
織斑先生が顎で開いているところを指しながら訊いてくる。俺は座り、答えた。
「じゃあ、ビールを」
「駄目だ」
「織斑先生だって飲んでるじゃないですか」
「お前は未成年だろうが。それにビールは私のだ」
「じゃあ、コーラで」
「わかった。……ほら」
織斑先生が冷蔵庫からコーラを出して放ってくる。炭酸を投げるのは勘弁してもらいたいのだが。
「おっと。ありがとうございます。……で、何の話してたんですか

？」

「馬鹿弟のことだ。あれと付き合える女は得だな、という話をしていた」

「まあ、確かにあいつと付き合える女子は得ですね。料理はうまいし、他の家事だってできる。ＩＳの操縦もうまくなってきたし、もともとのセンスもある」

鈍感という欠点がなければおおよそ欠点らしい欠点が見当たらない。まあ、その欠点がこの際致命的なんだが。

「そういうお前はどうなんだ。女なら周りに溢れているだろう」

「俺ですか？　俺は関係ないですよ。そもそも俺を好きなやつなんていませんって」

「そうか？　ここにお前と親しい女が５人も揃っているが」

「いやいや、皆一夏のことが好きなのに何言ってんですか。好きな人がいるやつを狙ったりしませんよ」

「ならこいつらがもし、仮に一夏のことを好きではなくなったらどうする？」

織斑先生、そんなありえないこと訊かないでください。ひょっとして酔ってるのか？　ビールの空き缶が置いてあるけど。

「そんなことありえませんって。万が一あったとしても――俺なんかじゃつりあいませんから」

先生が少しビックリしたように俺のほうを見る。篠ノ之たちも驚いた顔で俺のほうを見ている。何だ？　変なこと言ったか？　気にしないでおこう。

「一夏のように人を惹きつける魅力があるわけでもない。篠ノ之のように剣の才能があるわけでもない。オルコットたちのようにＩＳの適正が高いわけでも、そもそもＩＳの適正があるわけでもない。たまたまあの人と出会って、神王を造ってもらった。あの人に出会わなければ、今頃とっくに死んでいたはずの俺なんかじゃ誰ともつりいませんって」

そこまで言ってコーラを飲み干す。炭酸の刺激が喉を通過してい

く。

「ま、そんなわけで俺は誰とも付き合う気も権利もありません。では、そろそろ俺は失礼しますね」

「……お前はそれでいいのか？」

篠ノ之が、そんなことを呟く。

「何言ってんだ。いいに決まってるだろ」

「だったらなぜ――」

篠ノ之が、俺の方をまっすぐ見ながら尋ねてきた。

「だったらなぜ、そんなに辛そうな顔をしているんだ」

……辛そうな顔？　俺が？　自分の顔なんて見えないからわからないな。

「コーラを一気飲みして苦しくなった。ただそれだけだ」

それだけ告げて部屋をあとにする。ドアを閉めてから顔を触ってみると、目から頬にかけて一本の濡れた線があった。――涙か。なんだ、コーラ一気飲みがそんなに苦しかったのか？

「……まったく、割り切ってたはずなのになぁ。何で今更」

何で今更、涙なんて。

涙なんて、もう涸れたと思ってたが……まだ、残っていたなんてな。

「まあいい。涙が涸れていようが涸れていなかろうが関係ない」

今更、涙なんて関係ない。俺は俺だ。それでいい。

「今日はもう寝るか」

明日は朝から実習だからな。体力を取っておくために早く寝よう。

そう決めた俺は自室に向かって静かな廊下を歩いていった。

第七十三話　臨海学校二日目（前書き）

第七十三話です

第七十三話　臨海学校二日目

校外実習二日目。今日は午前から夜まで丸一日ＩＳの各種装備試験運用とデータ取りを行う。特に専用機持ちは大量の装備が待っているから大変だ。といっても、俺と一夏は試験武装がないので、他の人のサポート、あと専用機持ちの準備ができたら軽く相手をするくらいだ。

「ようやく全員集まったか。――おい、遅刻者」

「は、はいっ」

織斑先生に呼ばれて身をすくませたのは意外にもボーデヴィッヒだった。寝坊したらしく五分遅れてやってきたのだ。

「そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ＩＳのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者会話など、通信に使われています。それ以外にも『非限定情報共有（シェアリング）』をコア同士が各自に行うことで、様々な情報を自己進化の糧として吸収しているということが近年の研究でわかりました。これらは製作者の篠ノ之博士が自己発達の一環として無制限展開を許可したため、現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとのことです」

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われて息を吐くボーデヴィッヒ。よかったといわんばかりの息を吐きようだ。おそらくドイツ教官に織斑先生の恐ろしさを味わったのだろう。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。織斑、須藤は他の者の補助に回れ。以上だ。全員、迅速に行え」

生徒全員が返事をする。さすがに一年生全員が並んでいるのでか

なりの人数だ。ちなみにここはＩＳ試験用のビーチ。四方を切り立った崖に囲まれている、ドームのようなところだ。
「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」
「はい」
「お前には今日から専用――」
「ちーちゃ～～～～ん！！！」
砂埃を上げながら人影が走ってくる。無茶苦茶速い。その人物が――
「……束」
だった。まあ、来るんじゃないかとは思ってたけど、本当に来るとは……。
「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！　さあ、ハグハグしよう！　愛を確かめ――ぶへっ」
飛びかかってきた博士を片手で掴む。それも顔面。加減もないアイアンクローだ。
「うるさいぞ、束」
「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」
それを抜け出すあなたもただ者ではないですよ。そのまま博士は篠ノ之の方を向く。
「やあ！」
「……どうも」
「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」
その瞬間、篠ノ之の拳が博士の脳天に直撃した。うわあ、あれは痛い。
「殴りますよ」
「な、殴ってから言ったぁ……」
そんな姉妹のやり取りを、周りがぽかんとして見ている。織斑姉弟はまた始まったと言ったような表情で眺めている。たぶん俺も同じような顔をしてるんだろう。

「え、えっと、この合宿では関係者以外――」
「んん？　奇妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にはいないよ」
「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」
山田先生轟沈。あの人には基本的に何を言っても無駄だ。好きにさせておくしかない。
「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」
「えー、面倒くさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」
めっちゃ面倒そうにそれだけ言った。
「束さん。もう少しちゃんとした方が……」
「えー、いくらいっくんの頼みでもそれが駄目だよー。面倒だもん」
一夏が博士に言うが、いくら一夏でも博士を他人と関わらせるようなことはできなかったようだ。しょうがないといえばしょうがないか。
「――で、博士。こんなことをするためだけにここまで来たわけではないでしょう？　一体どうしたんですか？」
「アキくんってば、博士じゃなくて束さんでしょ。ラブリー束さんでもいいけど」
「束さんでいいです。で、どうしたんですか？」
「うーん残念。まあ、それより今日はお届けもがあって来たんだー」
「お届けもの？」
「うん！　やっと完成したからね～」
やっと完成？　そういえばさっき篠ノ之が織斑先生に呼ばれてたな。……って――
「……まさか、アレですか？」
「ご名答～！　あと、アキくんにもね」
「それはよかった。ちょうどやることがなくて暇だったんですよ」
「なら早速。――さあ、大空をご覧あれ！」
束さんがびしっ、と大空を指差す。するとその空から何か二つの物体が落ちてくるのが見えた。

第七十四話　新型専用機と追加装備（前書き）

第七十四話です

第七十四話　新型専用機と追加装備

空から落ちてきた大小二つの物体は巨大な金属の箱だった。そのうち大きな方の箱が、次の瞬間正面の壁が倒れて中身が見える。
「じゃじゃーん！　これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」
真紅の装甲の機体――紅椿は、束さんの言葉に答えるように動作アームによって外に出てくる。
「それとこっちが神王の追加装備だよー！」
小さな方の箱が開く。そこから出てきたのは一振りの剣と多数の小さな機械だった。剣の方は両刃で、機械的なそのデザインはＩＳ用の武装ということが一目でわかる。小さな機械の方も、神王と同じ紫色なので追加アーマーのように見える。
「うわ、本当に紅椿もこっちも完成してるよ。……少なくても半年はかかると思ってたのに」
「さすがは束さんだね。さあ！　箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！　私が補佐するからすぐ終わるよん♪」
「……それでは、頼みます」
「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチーな呼び方で――」
「はやく、はじめましょう」
とりつく島もない。篠ノ之は束さんの言葉を無視して行動を促す。
「ん～。まあ、そうだね。じゃあはじめようか。アキくんの方は自分でできるよね？」
「はい」
「じゃあそっちはよろしく～♪」
束さんが紅椿の方に向き、コンソールと六枚の空中投影ディスプレイを使って紅椿の調整を始めたので俺も自分の仕事を始める。

まず、神王を展開。それも自分にまとわせずに目の前に展開する。
そして神王からケーブルを伸ばして剣に取り付ける。
「量子変換開始、っと。――そういえば、束さん」
「何かな～？」
空中投影ディスプレイを見て、調整用の空中投影キーボードを叩きながら束さんに声をかける。束さんは六枚のディスプレイを見ながら六枚のキーボートを高速で叩き続けている。それでこの余裕なのだから恐ろしい。
「ちゃんと食事は取ってますか？」
「取ってるよー」
「インスタント食品や冷凍食品だけでは駄目ですからね」
「わかってるってば」
「ならいいですけど。――っと」

【量子変換完了　近接ブレード《エクスカリバー》】

ディスプレイにそんな言葉が出てきた途端、剣――《エクスカリバー》が量子になって消えた。って、やっぱりか。
「束さん、この名前どうにかなりませんか？」
「無理だね♪」
即答だった。まあ、無理なものはしょうがない。
「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……身内ってだけで」
「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」
ふと群衆の中からそんな声が聞こえた。それに俺と束さんが反応する。
「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？　有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」
「ですよねー。それにずるいずるいって言っても自分が優遇されれば喜ぶ。それこそずるいことだろう」
ピンポイントに指摘を受けた女子が気まずそうに作業に戻ってい

く。まったく、面倒なやつらだ。そんなに平等がいいのか？　平等なんてまやかしにしか過ぎないのに。

　そんなことを考えながら次は多数の追加アーマーを神王の各所に取り付ける。結構な数あるが、取り付け自体はそこまで難しくないのですぐ終わる。

「よし、これであとはフィッティング完了を待つだけか。……束さん、こっちはほとんどおわりましたよー」

「早かったねー。こっちもパーソナライズが終わるのを待つだけっと。あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよー」

「え、あ、はい」

　一夏が展開した白式の装甲に束さんがコードを刺す。そして現れたディスプレイを見ながら束さんが言う。

「ん～……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろ？　見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？　どう思う、アキくん」

「そうですねー。それもあるでしょうけど、他の原因もあると思いますよ。白式は他のＩＳとは違いますし」

「そっか～。確かに神王とも違うしね～」

「神王はＩＳですらないでしょう」

　束さんはそれを聞いて笑いながら、肯定する。わかってるなら言わなくてもいいと思うが。

「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺がＩＳを使えるんですか？」

「ん？　ん～……どうしてだろうね。私のもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？」

　たぶんその分解対象には一夏も含まれているだろう。というか一夏がメインになるかもしれない。

「いい訳ないでしょ……」

「にゃはは、そういうと思ったよん。まあ、わかんないならわかんないでいいけどねー。そもそもＩＳって自己進化するように作った

し、こういうこともあるよ。あっはっはっ」
こういうこともあるのか？　ない気がするんだが。
「ちなみに、後付装備ができないのはなんでですか？」
「そりゃ、私がそう設定したからだよん」
束さんは、結構衝撃的なことを、さも当たり前のように言い放った。

第七十五話　試運転（前書き）

第七十五話です

第七十五話　試運転

「え、えええっ！？　白式って束さんが作ったんですか！？」
一夏が代表して束さんに尋ねる。束さんは表情を崩すことなく答える。
「うん、そーだよ。っていっても欠陥機としてポイされていたのをもらって動くようにいじっただけだけどねー。でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力が使えるでしょ？　超便利、やったぜブイ。でねー、なんかねー、元々そういう機体らしいよ？　日本が開発してたのは」
「馬鹿たれ。機密事項をぺらぺらバラすな」
織斑先生の出席簿アタックが束さんの頭に直撃する。もちろん手加減なし。普通の人には危険なレベルだ。
「いたた。は～、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だね～」
「やかましい」
さらにもう一発叩かれる。ふざけてるように見えるけど、束さんはあれが地だからな。
「明弘、今のって本当の話なのか？」
「束さんが白式を作ったのは事実だな。……っと、フィッティング終わったか。俺がＩＳ学園に来る直前――三月末はまだ完成してなかったし、誰の機体になるのかも知らなかったから、お前の専用機として送られてきたときはかなり驚いたな」
「ああ、そういえば白式を見たとき様子がおかしかったな」
「紅椿も誰も専用機になるか知らなかったが、なるほどな。姉から妹へのプレゼントってとこか」
「あ、あのっ！」
ディスプレイで確認をしながら一夏と話をしていると、一人の女子が束さんに声をかけた。聞き覚えのある声だ。
「篠ノ之博士のご高名はかねがね承っておりますっ。もしよろしけ

れば私のＩＳを見ていただけないでしょうか！？」
　誰かと思ったらオルコットだった。束さんを前に興奮しているのか、目が輝いている。だが――
「はあ？　誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそも今は箒ちゃんとちーちゃんといっくんと数年ぶりの再会なんだよ。アキくんとだって二ヶ月ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。どういう了見で君はしゃしゃり出て来てるのか理解不能だよ。っていうか誰だよ君は」
　突然の冷たい言葉。言葉だけではなく視線や口調もかなり冷たい。はあ、やっぱりか。
「え、あの……」
「うるさいなあ。あっちいきなよ」
「う……」
　オルコットが少し涙目で引き下がる。束さんは、一夏と千冬、篠ノ之、俺ぐらいしか区別がつかないらしい。あとは両親かな、と言っていたが本当にそれ以外の人間にはこんな感じである。
「ふー、へんな金髪だった。外国人は図々しくて嫌いだよ。やっぱ日本人だよね。日本人さいこー。まあ、日本人でもどうでもいいんだけどね。箒ちゃんとちーちゃんといっくんとアキくん以外は」
「あと、おじさんとおばさんもでしょ」
「ん？　んー……まあ、そうだね」
　なんか引っかかる言い方だけど、気にしないほうがいいだろうな。
「こっちはまだ終わらないのですか？」
「んー、もう終わるよー。じゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」
「ええ。それでは試してみます」
「アキくんもフィッティング終わってるよね？　んじゃいってみよー！」
　終わってるなんて一言も言ってないのに……。まあ終わってるけどさ。

神王を再展開。今度は自分の身にまとわせて飛翔する。
「……基本システム異常なし。《エクスカリバー》――展開」
右手に光の粒子が集まり、一瞬強く輝いたと思うと《エクスカリバー》が展開された。よし、ここまでは特に問題なしか。
数回振って感覚を確かめる。――うん、大丈夫だ。しっくりくる。
少し離れたところでは紅椿をまとった篠ノ之が十六連装ミサイルを打ち落としていた。やっぱりかなりの性能だな。
「さて、こっちもさっさと終わらせるか。――《ラグナロク》システムチェック」
【システムチェック――完了　異常なし】
よし、これも異常なしか。本当は実際に試運転をしておきたいが、これは一度使うと面倒だからやめておこう。
「全員、注目！」
不意に地上から織斑先生の声がハイパーセンサー越しに聞こえてきた。何かと思い、先生の方を向く。
「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以後、許可なく室内から出た者は我々で拘束する！　以上だ！」
「「「はっ、はいっ！」」」
全員が慌てて動きはじめる。なんだ？　特殊任務行動って非常事態と考えるのが自然か。それにしたって尋常じゃない。
「専用機持ちは全員集合しろ！　織斑、須藤、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、鳳！――それと、篠ノ之も来い」
「はい！」
篠ノ之が気合の入った返事をする。専用機持ち――まあ、専用機が完成していない簪は含まれていないが――を全員集めるなんて一体何なんだ。

第七十六話　作戦会議（前書き）

第七十六話です

第七十六話　作戦会議

「では、現状を説明する」
旅館の最奥に設けられた大座敷・風花の間も俺たち専用機持ちと教師が集められていた。
「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用ＩＳ『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの報告があった」
軍用ＩＳの暴走、か。面倒なことになるな、これは。しかもよりによって銀の福音とは。
「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」
確かに、いくら学園の教師と言えど、訓練機では軍用ＩＳに対抗できない。となると、俺たちに回ってくるのは必然か。
「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」
「はい」
早速、手を上げたのはオルコットだった。
「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」
「わかった。ただし、これらは二ヶ国の最重要軍事機密だ。けして口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」
「了解しました」
開示されたデータを見ながら代表候補生の面々が相談をはじめる。
「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」
「攻撃と機動の両方に特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペッ

ク上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」
「この特殊武装が曲者って感じがするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」
「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」
オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィッヒの順にそれぞれの意見を口にする。さすがは代表候補生、緊急事態には強いな。一夏と篠ノ之は何がなんだかわかってないようなのに。
「無理だな。福音は現在も超音速飛行を続けている。アプローチは一回が限界だろう」
「福音の格闘性能だったら、そこまで高くはないぞ。もともと射撃型のＩＳだ。格闘性能よりも、射撃性能を上げることを重視していたようだしな」
「……何？」
織斑先生――いや、その場にいた全員の視線が俺に集まる。せっかく教えてやったと言うのになんだ、この反応は。
「以前、アメリカにいたとき、福音とやりあったことが何度かあります。あのときから大きなスペック変更がなければ、格闘性能はそこまで注意する必要なないと思います」
「それは本当か？」
「ここで嘘を言う必要がありますか？　まあ、その代わり攻撃力と機動力はかなりのものです。できれば、短期決戦が望ましいでしょう」
俺の言葉に、全員の視線が俺から一夏に移る。
「え、なんだよ、皆して……？」
「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」
「それしかありませんわね。ただ、問題は――」
「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」
「そうなると高機動パッケージか。だれか送られてきてないか？」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　俺が行くのか！？」
「「「「当然」」」」
当たり前のこと今更聞いてくるなよ。短期決戦となれば一撃必殺の攻撃力をもった機体が必要だ。一撃必殺といえば白式だろう。
「織斑、これは訓練ではない。実践だ。もし覚悟がないなら、無理強いはしない」
織斑先生が一夏に言う。一夏は少し黙って葛藤したのち、口を開いた。
「……やります。俺が、やってみせます」
「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度を出せる機体はどれだ？」
「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」
『パッケージ』――ＩＳの換装装備だ。武器はもちろんのこと、追加アーマーや増設スラスターなどのことも指す。さっきの《エクスカリバー》や《ラグナロク》も分類上はパッケージに入るのだろう。中には専用機専だけの機能特化パッケージ『オークトチュール』というものもあるらしいが、俺には関係ないな。もともと俺の武装全部がそれと同じようなものだし。
「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」
「二十時間です」
「ふむ……。それなら適任――」
「待った待ーった。その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」
一夏の運搬役がオルコットに決定する瞬間、聞き覚えのある底抜けに明るい声がそれを遮った。
「……束さん」

声の発生源は天井。全員が見上げると、部屋のど真ん中の天井から束さんの首が逆さに生えていた。

……何やってんですか、あなた。

第七十七話　展開装甲（前書き）

第七十七話です

第七十七話　展開装甲

「山田先生。室外への強制退去を」
「え！？　は、はいっ。篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」
「とうっ★」
空中で一回転してからの着地。……あなたはどこの新体操の選手ですか。
「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の中にナウ。プリンティング！」
「出て行け」
頭を押さえる織斑先生。山田先生が言われたとおりに束さんを外に出そうとするが、簡単にかわされてしまう。
「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」
「何？」
「紅椿のスペックデータを見てみて！　パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！　紅椿の展開装甲を調整して。ほら！　これでスピードはばっちり！」
展開装甲。聞きなれない単語を耳にして全員が首をひねる。無理もないか。
「展開装甲って言うのは、束さんが製作した第四世代型ＩＳの装備だ」
「第……四！？　それって、どういう――」
「落ち着け、ちゃんと説明してやるから。まず第一世代が『ＩＳの完成』、第二世代が『後付武装による多様化』、第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』を目標にしているのはわかるな？　第四世代って言うのは『パッケージ換装を必要としない万能機』を目標とした机上の空論のものだ。その第四世代の装備が展開装甲。具体的にいえば白式の《雪片弐型》

に使用されている。神王には使われていないがな」
「アキくんの言う通り。白式には試験的に突っ込んだんだけど、うまくいったから紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてありまーす。システム最大稼動時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ★」
一言で言えば、無敵。さすがにやりすぎた感じが拭えない。
全員が押し黙る。ま、今各国が躍起になって開発している第三世代が無意味になったようなものだから無理もない。俺は関係ないけど。
「それにしてもあれだね～。海で暴走っていうと、十年前の白騎士事件を思い出すねー」
白騎士事件。俺はそのときの記憶はないから話しか聞いたことがないが、簡単に言えばＩＳの性能を世界に見せ付けたきっかけになった事件だ。
「話を戻すぞ。……束、紅椿の調整にはどれくらいかかる？」
「織斑先生！　わたくしとブルー・ティアーズなら必ず成功して見せますわ！」
「そのパッケージは量子変換してあるのか？」
「そ、それは……まだですが……」
痛いところを突かれ、勢いを失うオルコット。確かにやりたいところだよな。任務に参加する名誉もあるし、愛しの一夏を運べるチャンスだし。まあ、任務に私情を持ち込むのは厳禁だが。
「ちなみに紅椿の調整時間は七分あれば十分だね★」
「よし。では本作戦では織斑、篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。何かあるものは挙手しろ」
「はい」
全員が静まる中、俺の声が響いた。
「何だ、須藤」
「おりいってお願いがありますー―」
全員の視線が俺に集中する。さっきから何度もあったからさすがにもうなれたけど。

「――俺も作戦に参加させてはもらえないでしょうか？」

第七十八話　作戦決定（前書き）

第七十八話です

第七十八話　作戦決定

「なぜだ？　理由を聞こう」
　他の全員が俺の発言に驚いていると、織斑先生が冷静に尋ねてきた。ちなみに織斑先生以外でビックリしていないのは束さんだけだ。相変わらず笑顔のまま、驚くそぶりすら見せない。
「さっきも言いましたが、俺は福音と何度とやり合ったことがあります。役に立てると思いますが」
「確かにそうだが。移動はどうする？　いくら紅椿でもお前と織斑の二人を運ぶのは難しいだろう」
「そこは何とかします。……束さん、《イカロスの翼》。用意できますか？」
「もっちろん！　こんなこともあろうかと用意してあるよ♪」
　さすが束さん。こんなこともあろうかとって、どんな想定したんだか。まあ、用意してあるのならちょうどいい。
「じゃあ、さっそく――」
　束さんの言葉に合わせるかのように、鉄の箱が部屋の外の庭に降ってきた。朝と同じように箱が開き、中身が見る。
「じゃじゃーん。これが神王の新型スラスター《イカロスの翼》だよ！　元々のスラスターから放出されるエネルギーを主燃料として取り込んで、高い性能を発揮するいわゆるエネルギーウィングってやつだね」
　箱から出てきたそれを目にして、一夏たちが何がなんだかわからないような表情を見せる。
　《イカロスの翼》。既存のスラスターとはまるで違う機構の新型スラスターだ。束さんの説明通り、スラスターに接続することで、そのスラスターの放出したエネルギーを取り込んで稼動する特殊なスラスター。これがあればなんとかなる。
「紅椿には及びませんが、これで超高速機動ができるはずです。こ

れなら問題ないでしょう？」
「……どうしてもいくのか？」
「はい。軍用ＩＳは強力です。一夏と篠ノ之だけに任せておけません」
「……三十分だ。三十分で調整が終わらなければ織斑と篠ノ之だけに行かせる」
「十分ですよ」
「よし。作戦開始は三十分後。各員、ただちに準備にかかれ」
織斑先生の言葉で教師陣はバックアップのための準備を始めた。
さて、俺も調整をはじめるかな。
「んじゃあ早速紅椿をいじろっかな！」
束さんも紅椿の調整を始めるようだ。篠ノ之が展開した紅椿に触れる。
「ふーむ、ぺたぺた。背部と脚部、それに腕部の展開装甲を推進力に回そうかねー。それ以外は支援モードでいいでしょ。うんうん、ではではじめまーす」
束さんがそう言うと、周囲に光の粒子が集まって何かが現れる。前腕部だけのパーツが左右二つずつ、計四つ。見た目もサイズもＩＳのアームアーマーに似ている。
「これって束さんのＩＳですか？」
「違うよー、いっくん。これは私の移動型ラボ。ちなみに『吾輩（名前は）は猫（まだない）である』」
久しぶりに見るな。元々、束さんが外に出ること自体少ないから、あんまり使われてない気がする。束さんが立てた人差し指を振ると、同じように右手型のそれが習う。芸が細かい。
「さーて、はじめるじぇい」
それからは圧巻の一言だった。外見からはわからないＩＳアーマーの接合部をメスのようなもので開き、高速で作業が行われる。一番難しいところを束さんが、それも機械の補助を受けずに生身で行い、他の四箇所を『吾輩は猫である』が担当している。見慣れた俺

ですら息を飲むのに、所見のヤツから見たら、化け物に見えるんじゃないだろうか。

と、俺も神王の調整をしなければならないから、あんまり呆けている時間はない。とっととはじめよう。

神王を目の前に展開。《イカロスの翼》をスラスターに取り付けて、調整を開始する。

「「はーるばるきたぜ、アゴだけ～♪」」

ふと、俺と束さんの言葉が重なる。そういえば、作業中はよくこの歌を歌ってたな。

「束さーん、前から思ってたんですけど、この歌ってなんですか？」

「アキくんってば知らないで歌ってたの？　この歌はねー……」

束さんの言葉が止まる。手は高速で動いたままだけど。

「……なんだっけ？」

「ちょ、束さんだって知らなかったんじゃないですか」

「あはは、まあ気にしない気にしない★」

そんなやり取りをしながらも、俺たちの手は止まらない。まあ、束さんの速さと比べれば俺のなんてかなり遅いほうだけどな。

……そういえば、イカロスの翼ってけっこう縁起の悪い名前だよな。イカロスって確か、父親のダイダロスと一緒に蝋とかで作った翼で空を飛んだけど、高く飛びすぎて太陽の熱をまともに受けて、翼が溶けて海に落ちたんじゃなかったっけ？　無理矢理神話に合わせようとしたのはわかるけど、これはちょっと縁起が悪すぎる。タイタニック並みの縁起の悪さだ。せいぜい、高く飛び過ぎないように注意しよう。

第七十九話　作戦開始――遭遇（前書き）

第七十九話です

第七十九話　作戦開始――遭遇

時刻は十一時半。天気は快晴。絶好の戦闘日和だ。
俺と一夏、篠ノ之は距離をおいて並び、各々の専用機を呼び出す。
「来い、白式」
「行くぞ、紅椿」
「神王、展開」
その瞬間光に包まれ、俺たちは専用機を身にまとう。
作戦の性質上、アタッカーの一夏は運搬役の篠ノ之に移動の全てを任せるため篠ノ之の背中に乗るように形になる。俺は遊撃。二人のサポートを最優先にするが、可能であれば攻撃に参加するというスタンスだ。
ただ、篠ノ之は今日、専用機を手に入れたばかりだし、一夏も篠ノ之よりはマシとはいえ不安は残る。たぶん、補助するので精一杯だな。
『三人とも、聞こえるな？　今回の作戦の要は一撃必殺（ワンアプローチ・ワンダウン）だ。短時間での決着を心がけろ』
「了解。では、これより、須藤、織斑、篠ノ之の三名による作戦を開始します」
『わかった。――では、はじめ！』
作戦、開始だ。
【エネルギーウィング《イカロスの翼》――展開。出力、異常なし】
《イカロスの翼》が展開される。紫色のエネルギーで構築されたそれは、ステンドグラスのような透明さを持っていた。
まず、篠ノ之が目にも留まらぬ速さで一気に飛翔し、俺がそれに続く。
「篠ノ之、俺が先導する。ついてこいよ」
「そっちこそ、もたつくんじゃないぞ」
それだけ会話を交わして篠ノ之の前に出る。

「暫時衛星リンク確立――情報照合完了。目標の現在位置を確認。一気にいくぞ」
「お、おう！」
「まかせろ！」
一気に速度を上げて福音のもとへと向かう。福音との距離が二キロを切ったところで、ハイパーセンサー越しに福音の姿を視認した。その名にふさわしい銀色のＩＳ。頭部から生えた一対の巨大な翼がとても特徴的な機体だった。
「目標、視認。二人ともそろそろ――」
【所属不明のＩＳを確認――ロックされています】
いきなりの警告。その意味を深く認識する前に俺は篠ノ之に向かって叫んでいた。
「篠ノ之！　止まれ！」
刹那、右上空からレーザーが飛んできた。寸でのところで緊急回避をして避ける。
「な、なんだ？」
「……外部からの攻撃を確認。第三勢力と断定。作戦の妨げになる可能性があるため、迎撃に移る。……一夏、篠ノ之、二人は作戦通り福音の方へ行け。俺はあっちを食い止める」
「ちょ、ちょっと待てよ明弘――」
二人の返事を聞かずにレーザーの飛んできた方へ向かう。そのとき通信が入った。
『おい、須藤。何をしている？　目標はそちらではないぞ』
「突然、攻撃を受けました。詳細はわかりませんが、第三勢力、そして作戦の妨げになると断定し迎撃に向かいます」
『何……？　山田先生、確認を』
『は、はいっ！　……確認しました。敵は二機、所属などは不明です』
「ありがとうございます。俺はそちらに向かいますので、先生方は一夏たちのサポートをお願いします」

『わかった。ただし深追いはするな。あくまで足止めを心がけろ』
「了解。以後、戦闘になると思うので通信を切ります」
通信を切断。意識を敵がいるであろう前方に集中させる。
「はぁ……。福音だけでも厄介なのに、面倒だなもう」

「……どういうことでしょうか？」
通信を終えた真耶が疑問を呟く。
「作戦空域は封鎖したはずなのに、どうして……？」
「おそらく、封鎖する前に入り込んだのだろう。所属不明と言うのが気にかかるが、ここは織斑たちの方を最優先させる。ただし、須藤の方もだ」
「はっ、はい！」

「目標視認。……山田先生の言う通り二機か。相手の実力にもよるけど、一夏たちが福音を止めるまでの時間稼ぎを狙った方が賢明か」
ハイパーセンサーで確認した敵性ＩＳは、薄い水色の機体と黒に近い藍色の機体だった。あんな機体、見覚えないが、今はそれを気にしている場合ではない。
「現在、こちらは作戦行動中だ。そちらの行動は作戦の妨害になる。そちらの氏名、所属等をお聞かせ願おうか」
『……』
沈黙。おい、訊いてんだから答えろよ。
『……別に、作戦の邪魔をするつもりはないわ』
藍色のＩＳの操縦者が抑制の効いた声でそんなことを言う。
「しかし、現にそちらの射撃はこちらの作戦を妨害した。それをどう説明するつもりだ」

『私たちはあなたに用があった。ただそれだけ』
「……俺に？」
『そうだよ。ああ、自己紹介がまだだったな。俺はグレル』
『私は、フェル。さっきも言ったようにあなたに用があったの。須藤明弘――ううん、レイベに」
水色のＩＳの操縦者――グレルに続いて、藍色のＩＳの操縦者、フェルが妙な事を言う。俺に用があるのに、レイベとは誰のことだ。
「あいにく、俺にそんな名前の知り合いはいない。人違いではないか」
『……本当に記憶を失くしてるのね』
『そうじゃなけりゃ、今のに反応しないはずがないもんなぁ。演技とも思えないし』
記憶を失くす？　なぜこいつらはそれを知っている。俺が記憶喪失だと言うのは篠ノ之博士とクー、織斑先生、あとは一夏とデュノアしか知らないはずだ。少なくとも俺はその五人以外に教えたことはないし、五人とも好き好んで他人に漏らすとも考えづらい。となると……俺が記憶を失くす前の関係者か？
『まあいいや。記憶があろうとなかろうと関係ない』
『悪いけど、ついてきてもらうわ。――力尽くでもね』
二人の言葉に合わせるかのように、下の海面から巨大な水柱が上がる。数は、一、二、三……七か。
「これは……本当に面倒なことになったな……」

第八十話　絶体絶命（前書き）

第八十話です

第八十話　絶体絶命

「……妙ですね」
モニターで一夏や明弘の様子を見ていた真耶が呟く。
「どうした？」
「それがですね……須藤くんの様子がおかしいんです。敵はまったく動いていないのに、須藤くんは動き回って……しかも、その動きも変なんです」
「なに？」
千冬がモニターに視線を向ける。そこに映し出されている明弘と敵性ＩＳの動きや状態を見ると、真耶の言う通りの状態が映されていた。
所属不明のＩＳ二機はほとんど動いていないのに対して、明弘は大きく動き回っている。それも敵から十メートルほど離れたところをランダムに。様子がおかしいのは明らかだ。
「レーダーの故障でもありませんし……一体どうしたんでしょう」
「確かに妙だな。……須藤、何があった？　現状を説明しろ」
千冬は回線を開き、明弘に通信を入れた。
『それが、ちょっと面倒なことに――ちっ！　すいません！　余裕がないので切りますよ！』
明弘はそれだけ言うと返事を待たずに通信を強制終了させた。しかもそのまま通信拒否まで設定される。
「あの須藤が、あそこまで取り乱すとは……一体何が起きている……？」

「くそ――がっ！！」
左手の《アトランティス》で相手の実弾を弾き、右手で握った《

エクスカリバー》で目の前のＩＳを叩き切る。これで――一機目か。
「驚いたな。まさか一人でここまでやるなんて。さすがレイベだな」
「そうね。まだ未完成とはいえ、一機やられるなんて、予想外よ」
十メートルほど離れたところに浮遊しているグレルとフェルがそんな会話をする。だからレイベって誰だよ。
本来なら、一気に接近できる距離だが、それができない。
俺の周りには薄い灰色のＩＳらしきものが、六機も浮遊している。最初は七機だったが、いまさっき一機倒してやっと六機に減った。
灰色のＩＳ――今までの戦い方からして無人機のようだ――は手に近接ブレード、両肩にそれぞれレーザーカノンと大型実弾銃が装備されている。しかもそれぞれがバラバラに動くのではなく、連携しながら攻撃してくるからタチが悪い。
そして何より面倒なのは神王のセンサーが感知できないことだ。
グレルたちのＩＳは感知できているのだが、無人機もどきたちはまるで感知できない。よくはわからないが、妨害電波か何かだろう。ハイパーセンサーでの視認は可能だが、攻撃に対する警告が出ないのはやりづらい。いつ攻撃が来るのか、視覚でしか判断できないのだから。
それでも七機のＩＳを相手にしてそのうち一機を撃破するなんて自分でもすごいことだと思うが、被害もかなりのものだ。
「シールドエネルギーはあと……３９か。《アヴァロン》や《ゲイ・ボルグ》のエネルギーも切れかけてるし……。絶体絶命だな」
この状態で残りの六機を撃破し、離れたところで観戦している二人を倒す。はっ、どんな無茶振りだ。束さんの無茶振り以上だな。
時を同じくして、風花の間にいた千冬にいやな報告が立て続けに

二つ入っていた。
　一つは、明弘がかなり追い詰められていること。そしてもう一つは、銀の福音と戦闘をしていた一夏が重傷を負い、意識を失ったという報告だった。
　普通なら、誰もが一瞬は動揺してしまう事態だが、千冬は弟が意識不明の重態という事実に少しも動じることなく、淡々と指示を出す。
「織斑たちの方には近くの教師を向かわせろ。須藤の方には――専用機持ちを向かわせる。山田先生、教師に連絡を」
「は、はいっ！」
「織斑先生っ！」
　千冬の指示を聞いて、その後ろに待機していたセシリアが口を開く。鈴音たちも何か言いたげな雰囲気だ。
「わたくしたちが一夏さんの救助に向かいます！」
「駄目だ」
「な、なぜですか！？」
　思わず大きな声を出すセシリア。それに他の三人も追従する。
　千冬は一つため息をつき、改めて口を開く。
「では、お前たちが織斑たちの方に行って何ができる？」
「それは……」
「福音はすでに去ったあとだ。お前たちよりも教師の方が救助は慣れている。お前たちは須藤の方に向かえ」
「で、ですが！」
「須藤を見捨てても行くという覚悟があるのか？」
　千冬の問いに、セシリアが言葉を失う。鈴音たちも言い返す言葉を見つけられず、何も言えないでいる。
「教師たちはすでに織斑たちの方に向かっている。福音がまだ健在な以上、これ以上の人員を割いて封鎖を解くわけには行かない。わかったなら早く行け！」
「「「「わ、わかりました！」」」」

慌てて部屋を飛び出す四人。千冬はそれを見送り、小さく呟く。
「……まったく、これだからガキの相手は疲れる」
「どうかしました？　織斑先生」
「いや、なんでもない。そんなことよりも医療班の準備を」
「はいっ！」

第八十一話　本気

「はぁ……はぁ……くそっ……」

《エクスカリバー》と《アトランティス》を握り直し、相手の出方を待つ。こちらから攻撃に出てしまえば、背後を取られかねない。

その瞬間、無人機もどきたちが離れていく。何かと思って構えると、さっきから後ろに控えていたグレルとフェルが無人機もどきと入れ違いに近づいてきた。

「……何の真似だ？」

「いや、お前の予想外の実力に敬意を評しようと思ってな」

「なに？」

「とりあえず、この子たちの説明をしてあげる。この子たちの正式名称は『Ｅ－０５』、他に名づけるとしたら『トランスペアレント』と言ったところかしら」

トランスペアレント。確か英語だったな。日本語に訳すと……透明。

「その名の通り、特殊な妨害電波であらゆるレーダー類に感知されない、まだ開発途中の機体よ。実稼動データを取る意味もかねて連れてきたけど、安心して。無人機だから誰も乗ってないわ」

あらゆるレーダーに感知されない妨害電波を発する無人機。無人機だというだけでも不可能と言われているのに、そんな機能まで。予想通りだったが、喜べないな。

「三機もあればあなた以外の一年の専用機持ちを十分は足止めできるほどの性能よ。もっとも、さっき見た限りでは専用機持ちが一人増えたみたいだけど」

「でもお前はその二倍以上の数を相手にして善戦、それも一機撃破なんて予想外すぎたぜ」

そういう二人の表情は嘘を言っているように見えない。本気でそう思っているようだ。そこで俺はさっきから気になっていたことを

聞いてみた。
「五月に襲撃してきたのも……お前たちか？」
「いや、俺たちじゃないぜ。ま、あのときの戦闘映像でお前のことを見つけられたから、誰かは知らんが感謝したいぜ」
「そうか……」
もしかしたらと思ったが、違うようだ。まあ、俺が立てた仮説が崩れなかったから良しとしよう。
「話が逸れたけど、これからは私たちがお相手するわ」
そう言ってフェルが両手に銃を展開する。隣のグレルもその手に武器を展開した。あれは――日本刀か。鞘に納まっているそれを腰の辺りに構える。
対する俺も《エクスカリバー》と《アトランティス》を握り締め、相手を注視する。しかし、そこでフェルが攻撃するでもなく口を開いた。
「そのままでいいのかしら？　守護剣――確か今は《デュランダル》だったかしら？　出さなくていいの？」
「なっ！？　なんでそれを！」
「そんなことは今は関係ないわ。待っててあげるから、出すなら出してもいいわよ」
「……後悔してもしらないからな」
そう吐き捨てて、《エクスカリバー》を《アトランティス》と一緒に左手で持つ。そして空いた右手に《デュランダル》を展開。
次の瞬間、《デュランダル》が割れて四本の剣となり、俺の周りに浮遊した。
守護剣《デュランダル》。これが《デュランダル》のもう一つの姿だ。
だが、それだけでは終わらない。
再び空いた右手に《エクスカリバー》を握り直し、意識を左手に

集中させると《アトラアンティス》が光り出す。その光が収まると、そこには新たな銃が握られていた。

《アヴァロン》と《アトランティス》を連結、接続させた銃。実弾、レーザーの両方に対応した特殊銃。名を――《アルカディア》。

右手の《エクスカリバー》、左手の《アルカディア》、周囲を浮遊する《デュランダル》。それに《イカロスの翼》。これが今出せる、最高の手だ。

「待たせたな。これでお前たちを叩き潰す」

二人に《エクスカリバー》を向けて、そう告げる。それに応えるようにグレルが体勢を低くし居合いの構えを取り、フェルが両手の銃のトリガーに指をかける。

「いつでもいいわよ」

「どっからでもかかって来い」

「なら、お言葉に甘えさせてもらうとするかぜ」

一撃でもまともに攻撃を食らったら負け。しかも相手は二人。かなり厳しいが――やるしかない。

第八十二話　実力の差（前書き）

第八十二話です

第八十二話　実力の差

「いっくぜ！」
一瞬の静寂のあと、グレルが猛スピードで突撃してくる。やはり近接格闘型か。
グレルが俺の懐に入り込み、柄を握るその右腕が――消えた……っ！？
「くっ！」
自分の勘を頼りに、後方退避を行う。可能な限り速く退避したはずだが、掠っていたようでシールドエネルギーが削られた。――あと、２７。
グレルの方を見ると、最初の居合いの体勢のままだ。……いや、違う。
「へぇ。今のを目で見てから対応できるのか。やっぱりすごいわ、お前」
「そうかよ」
今の攻撃は居合いで間違いない。ただし――超高速の。
鞘から刀を抜き放って、斬り、鞘に戻す。その一連の動作を目にも留まらぬ、一瞬をゆうに切る速度で行ったようだ。仕組みはわからないが、たぶん間違いない。
「……なぜ、攻撃しなかった？」
「ん、なにが？」
「とぼけるな。今の攻撃、やろうと思えば追撃をかけれたはずだ。それなのにお前はそれをしなかった。なぜだ？」
「んー、なぜと聞かれてもな。避けられると思わなくて、一撃目に集中したからなぁ」
「俺では避けられないと、そう思ってたのか」
「まあ、油断していたのは事実だな。いやー、本当にビックリだわ」
コイツ、馬鹿にしてるのか。そりゃ、避け切れはしなかったけど

さ。

だが、コイツの速さは厄介だ。元々、居合いは高速の抜刀術だが、今のはそれの比ではない。ＩＳの補助があるとしても速すぎる。

「どんどんいくぜぇ！」

その言葉を皮切りにグレルの連激が始まった。居合いを中心とした無駄のない連続攻撃。右手の《エクスカリバー》と周囲の《デュランダル》で防ぎ、流し、時には回避をして対応していく。隙を見計らっては左手の《アルカディア》で攻撃するが、その素早さの前には当たらない。

「はぁぁぁ！！！」

突如、グレルが刀を上段に構えて、一気に振りぬく。いままでの無駄のない攻撃とは違って、明らかに大振りだ。

若干の違和感を感じながらも、グレルの攻撃に合わせて左に回避、そのままがら空きの右わき腹に目掛けて《エクスカリバー》を――

ぞくっ！

全身の鳥肌が立つ。本能にも似た何かが、俺を突き動かす。《エクスカリバー》による攻撃をやめ、その場を離脱する。直後、俺のいた場所を何かが通過した。

「……今のは決まると思ったけど、たいしたものね」

離れたところから銃口をこちらに向けながらフェルが呟く。今のはフェルによる銃撃か。

俺の注意がグレルに向いたところで、フェルの攻撃。あのまま攻撃していた落とされていたところだ。

だが、一歩間違えばフェルの攻撃がグレルに当たっていた。それほどギリギリの攻撃だった。お互いにとても信頼し合っていないとできない連携だな。

「……！」

フェルの右手に握られた銃が火を噴く。その銃口から放たれた鉛弾が三発、俺に向かって飛んでくる。それに対して俺は《アルカディア》の実弾モードの弾丸弾きで防ぐ。

「これで……どうだ」
「記憶を失った状態でその技を使うなんて……驚きね。記憶がなくても体が覚えてるということかしら？」
「……どういうことだ？」
体が覚えている、だと？　どういう意味だ。
だが、フェルは俺の問いかけには答えず、話し続ける。
「記憶を失いながら、その技を使えたことは誇ってもいいわ。私ですらそれをマスターするのに半年以上かかったから」
私ですら？　やけに引っかかる言い方だが……まさか――
「でも、まだまだ。……私のレベルまでは遠く及ばない」
「まさか、お前も弾丸弾きを？」
「そうよ。それは元々、私の技。あなたのはそれをただ真似ただけの、まがい物」
「……信じられないな」
「だったら撃ってきなさい。それで本当かどうかがわかる」
やけに自信満々に言うじゃねえか。ならお望み通り――
「お望み通り撃ってやるよ！」
《アルカディア》による実弾五連射。本当にオリジナルならこれぐらい――
「五発……少なすぎるわね」
その言葉と同時に俺の撃った弾が全て弾かれる。しかもまったく動じてないなんてな。俺でも三発――それもかなり集中しなければ無理だというのに、なんだよ一体。
「さて、これでわかったでしょ。あなたでは私に及ばない。そしてグレルにも敵わない」
「ほら、諦めて俺たちについてこいよ。レイベ」
フェルとその隣に戻ったグレルが言う。
「……」
こいつの言う通りだ。俺の実力ではグレルにもフェルにも勝つことはできない。ましてや二人を相手に勝てる可能性なんて零に等し

い。でも――
「……断る」
「なに？」
「断るって言ってんだよ。誰が知らないやつについていくか。俺の居場所は束さんのところと、ＩＳ学園だ。だから行かない」
そう。俺の居場所は束さんの家とＩＳ学園とだ。他のところになんか誰が行くか。
「俺は俺だ。レイベなんかじゃない。だからお前たちの言うことなんか知るか」
「あっそう。じゃあ――」
「やっぱり力尽くでやるしかないわね」
「はっ、やれるもんならやってみろ」
正直勝てる気はしない。それでも――やらなきゃならないときっていうのはある。今がそのときだ。

第八十三話　悪あがき（前書き）

第八十三話です

第八十三話　悪あがき

「せいっ！」
「くそ――がっ！」
グレルの日本刀と俺の《エクスカリバー》がぶつかり、鈍い金属音を奏でる。
そこに空気を突き破り、飛んでくるフェルの弾丸やレーザーを弾丸弾きで弾いたり、回避したりで対処する。
シールドエネルギーも残り１８。本当にもう後がない状態で、俺は必死に食らいつく。両手の武器だけでなく、周囲の《デュランダル》も操りながらの戦闘。はっきりいって無茶苦茶辛いが、このうちの一つでも欠ければ一瞬でやられる。それを直感で感じているからこそ、限界すれすれの戦いをしなければならなかった。
時間的に考えれば、もう本来の作戦は終了しているはず。だからここで最善の手は『撤退』のはずだった。元々、こいつらとの戦闘は作戦内容に入っていない。《イカロスの翼》の速度ならこの場を離脱することも不可能ではないはず。グレルは距離をとってしまえば何とかなるだろうし、フェルの方もやろうと思えばどうにか離脱するだけの隙を作ることはできるかもしれない。それでも俺が離脱できない理由は――俺たちを取り囲むように浮遊しているトランスペアレントの存在だった。
今でこそ大人しくしているが、俺が離脱する素振りを見せたら一斉に攻撃を仕掛けてくるかもしれない。二人だけが相手なら離脱もできるかもしれないが、そこに六機も加わられてしまった状態で逃げ切ることは――まず不可能だ。
だからこそ、離脱なんて手段に出ることもできずに、ただただ消耗戦を行うしかなくなっていた。
「そろそろ限界なんじゃないか？」
「黙……れ」

グレルの剣戟を防ぎながら、フェルの射撃に対応する。強がっては見たが、言われた通り、限界が近づいてきた。

人間はそう長い間集中し続けることはできない。それが自分の命がかかった戦闘ならなおのこと。もうすぐ俺の集中力は途切れるだろうな。そして、そのときが俺の最期……。

――なら最期にせめて、悪あがきでもしてやるか。

「はぁっ！」

グレルの袈裟きり。それを紙一重で回避――シールドエネルギー残り7――そのまま、瞬時加速を使用。目標は――フェル。

「あっ、くそっ！」

「……っ！？」

意表をついた奇襲。文字通り捨て身の特攻。二人も予想外の行動に驚く。これで――

刹那、重い衝撃が俺を襲った。

「が……はっ……」

衝撃が来たのは二方向。前と後ろ。

すずめの涙ほどしか残っていなかったシールドエネルギーが当然底をつき、神王が強制解除される。そして鋭い痛みが前後から俺を襲う。

は……はは。完璧に意表をついたはずなのに、返り討ちだ。情けない。本当に情けない。

「やべっ、ついやっちまった」

「ギリギリまで追い詰めるだけのつもりだったのに、思わず本気を出してしまったわね」

二人が何か話しているようだ。しかし、俺はそれに反応することもできないまま、落下した。

「やべっ、ついやっちまった」
「ギリギリまで追い詰めるだけのつもりだったのに、思わず本気を出してしまったわね」
グレルの言葉に返しながら、フェルは今回の目的を思い出す。
今回の目的は、『レイベ――須藤明弘との接触』。明弘を倒すことは今回の目的に含まれていない。
明弘と接触し、戦闘でギリギリのところまで追い詰める。倒すのではなく、ギリギリまで追い詰める予定だった。だからこそ、自分たちは思い切り戦うことはしなかった。
いくら明弘の実力だろうと、自分たち二人が本気を出せば簡単に倒すことはできた。元々、自分たちは二人で戦うことを前提としているのだから。
ゆえにある程度手加減をしつつ戦っていたのだが、最後のは予想外だった。勝てないとわかり、自分の限界が近いことを感じた途端、明弘は『勝てないなら、いっそ道連れにする』という考えに切り替えたのだ。
自分の命と引き換えに相手を倒す。そんな考え、並の人間にできるはずがない。

そう、あいつは並の――普通の人間ではない。

それは昔からわかっていたはず。なのに、記憶を失っているという事実のせいですっかり頭から抜けていた。記憶があろうとなかろうと、須藤明弘は、レイベだった。
「このまま、海に落ちたらたぶん死ぬよなー」
「そうね。……しょうがないわ、助けにいきましょうか」
ここは上空約３０００メートル。ここから海に落下すればたぶん

どころか確実に死ぬ。

だが彼に死なれては困る。だから助ける。そのために一気に急降下して、明弘に近づき――

不意に、何かが体を一気に駆け巡った。

第八十四話　歌（前書き）

第八十四話です

第八十四話　歌

――俺は、このまま死ぬのか。
周りの風景がゆっくりと流れていくのを視界の端に入れながら、ふとそんなことを思う。
このまま海に落ちれば俺は……死ぬ。
『死にたくない？』
どこからか声が聞こえてくる。なぜか懐かしく思える、その声。
――そんなの決まっている。死にたくない。こんなところで、死にたくない。
『じゃあ頑張ろうよ』
――頑張るといってもどうしろと言うんだ。
神王のエネルギーはもうない。このまま落ちるしかない、この状況で。
――もっと力があれば……。
『力が欲しいの？』
――ああ、力が欲しい。
『それは……何のための力？』
――何のため、だと？
『そう。キミの欲する力。それは何のための力なの？』
――それは……。
『何にも負けないための力？　何にも屈しないための力？　それとも――失くしてしまった本当の自分を探すため？』
そんなことを問われ、無意識のうちに言葉を紡ぐ。
――……全部。
『え？』
――全部だ。誰にも負けず、何者にも屈しない。そして、自分が自分であるための、自分を見つけるための力。それが欲しい。強欲だと罵られようが、愚かだと馬鹿にされようが、俺は全部を手に入

れる。どんなことをしても。
『……相変わらずだね』
くすくすと笑い声を含んだ声。しかし、不快な気持ちにはならない。逆に心が落ち着く。
――相変わらず？
『ちっとも変わってないね。自分が望むもののためなら、手段を選ばない。どんなに自分が傷つこうが、望むもののためならいとわない』
――……。
『今の答えを聞いて安心したよ。だから――』
――だから？
『キミにこれをあげる。キミが持っていたものと対になるもの。わたしからの贈り物（プレゼント）。キミのまっすぐな答えとわたしたちの感動の再会を祝して、ね』
――感動の再会？
『今は気にする必要はないよ。ただキミは自分の思うように、自分の心を歌えばいいんだから。――ねえ、聴かせてよ。キミだけの旋律を』
――……いいだろう。聞かせてやろうじゃねえか。俺だけの、旋律とやらを。

『無限回奏　第一旋律』

――黄昏と黎明の集う場所で――
――約束の歌をあなたと歌う――

明弘を追うグレルとフェルの耳に届いたのは――一つの歌だった。
「これって歌……か？」

グレルが呟く。怪訝そうなその顔には、信じられないというような驚愕の表情が混ざっていた。

フェルもわずかに驚愕の表情を浮かべていたが、ふと周りに視線を向けて思わず目を見開く。

自分たちとともに急降下していたはずのトランスペアレント――その六機全てが動きを止めていた。

「こんなことが……」

無人機であるトランスペアレントには当然、感情などといったものは存在しない。だというのに、まるで聞き惚れるかのようにその動きを止めていた。

「この歌……まさか――」

――交わるはずのない旋律は――

――あなたと結ぶ旋律は――

――いつか交わした約束の歌――

そのとき、変化が起きた。

眩い紫色の光が明弘を包み込む。

【メロディ確認――認証

セットアップ開始

各部エネルギーバイパス――再構築――完了

ハイパーセンサー――調整――完了

各部アーマー――調整――完了

各種武装――調整――完了

スラスター及び多方向推進翼――出力調整――完了

エネルギーウィング――出力調整――完了

旋律システム――感度良好

旋律能力『＊＊＊＊＊』――異常なし――使用可能
旋律能力『＊＊＊＊＊』――ロック――使用不可
旋律能力『＊＊＊＊＊』――ロック――使用不可

システム――オールグリーン】

第八十五話　新たな姿（前書き）

第八十五話です

第八十五話　新たな姿

突如として紫色の光に包まれた明弘を見ながら、グレルが呟く。
「今のって……まさか、『第一旋律（ファースト・メロディ）』？」
「そんなはずは……。だって、今のははじめて聞く旋律よ？　それが――」
グレルの言葉を否定したフェルの脳裏にいくつかの仮定が浮かび上がる。
旋律システムの初期化、それとも変更？　そんなことはできない。できるはずがない。旋律システムは中核なのだ。常人が手を加えられるようなものではない。それはレイベであろうと例外ではない。できるとすれば――篠ノ之束だけだ。しかし、それをやるメリットがあまりにもない。いくらあの束でも無駄なことはしないだろう。
では、もっと別の何かが要因で旋律システムに変化が起きた？　その可能性が一番高い。しかし何かとは何だ？　中核の旋律システムに影響を及ぼすほどの何かとは。それこそコアそのものに何か起きたとしか考えられない。
だがそれ以上に、さきほどから気にかかっていること。

『黄昏と黎明の集う場所で』

さっきの歌の一節。これがどうしても引っかかる。
黄昏と黎明。置き換えれば日暮れと夜明けだ。その本来交わることのない二つが集う場所――おかしい言葉だが、それ以上に。
「黄昏だけならともかく、黎明まで……」
黄昏は彼の器。彼の象徴だ。だから黄昏のワードが入っているのは自然なこと。
しかし、黎明は違う。黎明は彼の器ではない。それは彼女の――
「黎明は彼女の器のはず。レイベ……それをなぜ――あなたが！」

「はぁ、なぜわたくしたちが……」
「まったくだ。いくら教官の命令とはいえ、私が嫁のところに行けないとはな」
「明弘さんも明弘さんですわ。明弘さんが苦戦なんてしなければこんなことには」
「うむ。たった二機を相手にそこまで追い詰められるとは、情けない」
愚痴をこぼしながら、しかたなしに明弘の下へと向かうセシリアとラウラ。早く明弘を助けて、一夏の元に向かいたいという思いから限界ギリギリの速度で飛行する二人の後ろを飛ぶ鈴音とシャルロットが話す。
「いくらなんでも急ぎすぎじゃないの、この二人……」
「しかたないよ。二人とも早く一夏のところに行きたいんだよ」
「そりゃあたしも同じだけどさ。でも前の二人、状況をちゃんと把握できてないじゃない」
「だよねぇ」
明弘は一年生の中でラウラと一、二を争う実力者だ。
距離を選ばないオールラウンドな戦い方。冷静に状況を分析する柔軟さ。そのとき一番有効な作戦を瞬時に立てる頭のキレ。それらに裏づけされた明弘の強さは自分たちが一番知っている。
そんな明弘が通信をする余裕さえ無くなる相手。そんな相手に、しかも二人はろくに状況確認できない状態で勝てるかどうか。
自分たちの役目はあくまで明弘の救出。だから勝つ必要はないが、今のセシリアとラウラはそこまで頭が回るだろうか。明弘を救出し撤退するよりも、手っ取り早く相手を倒すことを選んでしまうかもしれない。
そんなことを考えていると、不意に何かが聞こえてきた。

『あ……と結……いつか交……た約……歌』

「ねえ、今、何か聞こえなかった？」

「確かに。明弘の声が聞こえたような気がするが」

シャルロットの問いかけにラウラが反応する。それに続くように、鈴音とセシリアが口を開く。

「今のって、歌……よね？」

「おそらく。しかし、なぜこの場で……」

「まったく、劣勢だときいて来てみれば、のんきに歌など――」

ラウラが愚痴をこぼすが、それは最期まで言い終わることはなかった。

前方で何かが光ったのだ。しかもその色は紫。明弘が駆る神王と同じ色の光だ。

「な、なんですの……」

「わからん。が、何かが起きた可能性もある。急ぐぞ」

ラウラの言葉に三人とも頷き、一気に光のした方へ向かう。

そのとき、いきなりレーダーに新たな反応が出てきた。その数は、六。

「新しい反応が……六！？　何なのよ、いきなり」

急なことに思わず鈴音が声を上げる。

「そんなことよりも、見えたぞ。明弘と敵性ＩＳだ」

前を飛んでいたラウラが三人に知らせる。三人がハイパーセンサーで確認し――ハイパーセンサーの先に広がる光景に四人は、思わず絶句した。

まずは敵機の数。最初に聞いていた数は二だったが、視認できるだけで八機。よく見ると、下の海面に撃墜されたと思われる機体が一機見える。

たった一人で九機を相手にしていた。その事実に、驚愕する。

そして何より驚くことは、その九機を相手にした明弘が駆る神王の姿だった。

「まさか……第二次移行、ですの……？」

以前のときよりも無駄のない、滑らかでシャープなデザイン。色も大部分が前より濃い紫色に、細かいところが薄い紫色になっている。

何より以前とはまったく異なる雰囲気をまとった明弘の姿がそこにはあった。

第八十六話　撤収（前書き）

第八十六話です

第八十六話　撤収

「おいおい、これは何の冗談だよ」
グレルがぼやく。その視線の先のレーダーには九つの反応が映し出されていた。
三つはグレルとフェル、そして明弘のものだ。そしてあとの六つは、トランスペアレントのもの。
「まさか、妨害電波の無力化……？」
妨害電波によってレーダーの類に感知されないはずのトランスペアレント。しかし、今はレーダーに感知されている。
「たった一つの歌……？　ただそれだけで……」
ありえない。トランスペアレントはまだ未完成の機体だ。もちろん妨害電波も研究段階で、解除するのにかなりの時間と手間がかかる。それなのに――
「歌だけで妨害電波を無力化するなんて……そんなことが、本当に出来るのか？」
「わからないわ。それより――」
当の明弘は《エクスカリバー》と《アルカディア》を持った両手をだらんと垂らした、完全な無防備。倒そうと思えばいつでも倒せる。二人はトランスペアレントに攻撃、そして捕縛の命令を出す。トランスペアレントは一瞬と惑ったようだが、明弘の方に突撃し――

そのうちの四機が何かに貫かれて、撃墜された。

「なっ！？」
残った二機のうち一機が肩の大型実弾銃を撃つが、明弘は左腕だけを動かして《アルカディア》を二連射。一発目の実弾がトランスペアレントの銃弾を弾き、続く二発目がトランスペアレントに直撃し、消し飛ぶ。

最後の一機も近接ブレードで切りかかるが、《エクスカリバー》で防がれ、《アルカディア》の零距離射撃をまともに食らって爆散した。そのままさっき四機を貫いた《デュランダル》を自分の元に引き戻す。

この間、一分ほどの出来事だった。

「何だよ一体。さっきとはまるで動きが違うじゃねえか」

「それもあるけど、トランスペアレントの動きも妙だったわね。なにか、攻撃するのを躊躇していたみたいだった」

「躊躇？　あいつらは機械だろ？　そんなことするはずないって」

「でも動きが鈍かったのはわかってるでしょ？　それにいくらレイベでも六機を相手にあそこまで一方的なんてほかの説明がつかないもの」

「確かになぁ」

フェルの言う通り、トランスペアレントの動きがどこかおかしかった。

最初に比べて動きも鈍く、特に明弘に攻撃するときは動きが一段と遅かった。まるで明弘を攻撃することを嫌がるように。

当然、機械であるトランスペアレントに感情なんてものはあるはずがない。それでも明弘と敵対することを拒んでいるようだった。

まさか感情（トランスペアレント）を持たない機械に感情を吹き込んだとでもいうのか。

「……で、どうする？　なんか新手が来たみたいだぞ」

グレルがフェルに問いかける。その視線の先のレーダーにはこちらに向かってくる四つの反応があった。

「やるならやるでもいいけど、どうするよ？」

「……ここは退きましょうか。今のレイベには不確定要素が多すぎる。そんな状況で戦闘を行うのは得策ではないわ」

「りょーかい。じゃ、引き上げっか」

「うん」

そのまま二人はわき目も振らず、その場を離脱した。

「……敵性ＩＳが離脱した……。どういうことだ？」
ラウラがレーダーを確認しながら呟く。
「明弘に加えて、僕たち四人を相手にするのは不利だと思ったんじゃないかな」
「たぶんそんなところでしょう。それより明弘さんを」
「うむ」
そのまま四人は残された明弘の方に向かう。
明弘は四人に背を向けたまま微動だにしなかったが、不意に体が傾いたかと思うと、神王が粒子になって消え、そのまま重力に従って落ちていった。
「ああ、もうっ！」
それに素早く反応した鈴音が海面ギリギリのところでなんとか明弘をキャッチする。
「まったく……って、何よこの傷」
鈴音がぼやきながら明弘の状態を確認すると、その体には無数の傷が刻まれていた。
幸い、痕に残るような深い傷はなかったものの、小さな裂傷が体のいたるところに。しかもそこから真っ赤な血が滲んでいる。
「ＩＳの絶対防御ならこんな傷できるはずないのに……」
絶対防御を貫くほどの威力の攻撃ならともかく、こんな浅い傷、絶対防御で防がれるはず。それなのになぜ……。
「どうかしましたの？」
「ううん、なんでもない。それよりまずコイツを連れて帰るわよ。話はその途中で」
「わかった。ラウラ、織斑先生に連絡お願いできる？」
「もちろんだ。では、戻るぞ」
ラウラの言葉に三人とも頷き、明弘を抱えて旅館へと引き返していった。

第八十七話　無限回奏（前書き）

第八十七話です

第八十七話　無限回奏

気がつくと、俺は見知らぬ世界に立っていた。
見渡す限り何の障害物も見当たらないまっさらな大地。耳を済ませてみても何の物音すら聞こえない、完全な無音。それに加えて完全な無風でもある。
それだけでも十分異常な場所だが、最も特異なものが空だ。
なぜ、朝日と夕日がが同時に出ている？

今の俺から見て右手の方にまぶしい朝日が、左手の方に赤い夕日がそれぞれ半分ずつ地平線から顔を出している。
明らかにおかしい。朝日と夕日が同時に出るなんて事は物理的にもありえない。ここは、一体どこだ？
『ここは無限回奏』
いきなり背後から声がした。しかもかなり近い。おそらく、すぐ真後ろ。
振り向いてみると、予想通り、一メートルと離れていないところに少女が一人立っていた。
俺と同じ色の長髪と目。身長は俺よりも低いが、女子の中では高い方だろう。
見覚えがある。この少女は俺が幾度となく見た夢に出てきた少女だ。年や身長は違うが、わかる。夢に出てきた少女だ。
「お前は……誰だ？」
『わたしはキミに最も近く、そして最も遠い存在』
「最も近く……最も遠い？」
『そう。ここにいるのはキミとわたしだけ』
「俺とお前だけ……？」
『そう。ここは、本来、交わることのない黄昏と黎明の交差すると

ころ。キミとわたしだけの世界』
　黄昏と黎明の交叉するところ。交わることのないものが交叉するところ？
『キミも知っているはずだよ――』
――黄昏と黎明の集う場所で――
「なっ！？　その歌は……」
『そう。さっきキミが奏でた歌のワンフレーズ。キミは無意識のうちに歌っていたみたいだけど、あれはこの場所を意味していた』
「なぜその歌を知っている？　お前は一体何者なんだ？　ここは一体何なんだ？」
『ちょ、ちょっと、いきなり沢山訊かないでよ。……順番に答えるよ。なんで歌を知ってるのかは、わたしもその場にいた――というより、あのとき話したでしょ」
「あの時話した？　それって――」
　まさか、あのとき――俺がやられて海に落ちていったとき、聞こえてきた声はこいつだったのか。
『そうよ。じゃ、次に移るね』
　俺の返事を待たずに少女は話を進める。
『わたしが何者か。詳しくは教えられないけど……ネルマ、とだけ名乗っておくよ。ついでにここ――無限回奏はキミの精神の中に出来た世界』
「ネルマ……。俺の精神の中に出来た世界……？」
『だからこそ、ここは物理的な干渉は一切受け付けない。一番わかりやすいのは、キミの右手。何かがないって気づかない？』
　そう言われて初めて気づく。俺の右手、その中指にいつもある待機形態の神王がないことに。展開していないときはいつも右手中指にはめられているはず。外すのは風呂や寝るとき以外ほとんどありえないはずなのに。

『今言ったでしょう。ここは物理的な干渉を受け付けない世界だって。剣、銃……ここではそういうものは存在できないの。もちろんＩＳ――神王も例外じゃない』

「……なるほどな」

ここが精神世界なら神王が存在できないのもある程度納得できる。俺の精神の中にこんな世界があるとは知らなかったが。

『ただ今のキミではいつでも来れるわけではないわ』

「なに？　なんで――」

なんでだよ。そう言い切る前に異変が訪れた。

視界に霧がかかるかのように霞み、体が重く感じる。声を出すことすら難しい。

『あ、そろそろ限界みたいだね。……おやすみ――ってこれから目を覚ますのか。じゃあおはようだね』

ネルマが暢気にそんなことを言う。だが、それに文句を言う余裕もなく、意識が一気に途切れていく。

『またね。――早くわたしを思い出してよ。待ってるから』

そんな言葉に見送られるように――俺は意識を失った。

第八十八話やるべきこと（前書き）

第八十八話です

第八十八話やるべきこと

旅館の一室。風花の間の隣の部屋に四人の専用機持ちは待機していた。時刻はもう四時を指している。

全員が一言も声を出さない。その理由は、一夏が意識不明という信じられない事実が一番大きい。福音との戦闘の末、箒をかばって重症。今は隣の部屋で寝かされている。箒はその一夏の横に座り込んだまま動こうとしない。

部屋の奥にはもう一つ部屋があり、そこには明弘が寝かされている。四人の間に重い空気が流れている理由の一つはその明弘でもあった。

自分たちがもっと早く着いていれば、明弘がここまでやられることはなかったかもしれない。最初に渋らずにすぐに駆けつけられたのに……。そんな思いが頭の中を回り続ける。

そんなとき、部屋の扉が開かれる。開かれたのは――奥の部屋に続く扉。そこから出てきたのは、意識を失っていたはずの明弘だった。

「明弘……気がついたんだね」

シャルロットが笑顔で声をかけるが、その笑顔は少し引きつっていて、無理をして作っていることが窺える。

明弘はそれに答えず、ゆっくりと部屋から出るための扉へと向かう。

「どこへ行くつもりだ」

ラウラが明弘の前に立ち、質問する。明弘は一呼吸おいてから答えた。

「……あいつらの、ところに行く」

「あいつらというのは、お前が戦っていた相手のことか？」

「そうだ。……あいつらには訊きたいことが山ほどある」

「知り合いなのか？」

「違う。だからこそ、訊きたいことがあるんだ。それに、俺はあいつらに完敗した。そのリベンジでもある」

全身に傷を負いながらもグレルたちを追おうとする。いつもの状態で勝てなかった相手に傷だらけの状態で勝てるわけがないと知っていながら、それでも戦おうとするその姿は勇ましいという言葉を通り越して痛々しかった。

「どけ。いやなら力ずくでも――」

「今のお前に、私たち四人を相手にできるのか？」

周りに視線を向けたあと、明弘が舌打ちして、その場に座り込む。ラウラ以外の三人もその周りに集まってきた。

「一体、何があった？」

ラウラがそう問いかけると、明弘は顔をうつむかせたまま、答えた。

あの二人が、自分の事を知っていたこと。自分が完膚なきまでに叩きのめされたこと。そして、あの二人が自分の過去に大きく関係している可能性があることを。

「ちょっとお待ちになって。自分の過去に関係している可能性があるとおっしゃいましたわよね？　それはどういうことですの？」

「その通りの意味だ」

「ご自分の過去のことでしょう？　なら、なぜ可能性がある、と曖昧な言い方をするのか。それが聞きたいのです」

「……そのことはデュノアも知っている。訊くのならデュノアに訊いてくれ」

それだけ言うと、黙り込んでしまった明弘からシャルロット以外の三人はシャルロットに視線を向ける。シャルロットは少しの間黙っていたが、小さな声で明弘に尋ねる。

「……本当に、話して……いいの？」

「……ああ」

短い返事。それを聞いたシャルロットは覚悟を決めて三人に向かって口を開く。

「これは、明弘の一番知られたくない秘密なんだ。これを知っているのは、僕の知る限りは一夏と僕、そして篠ノ之博士だけ。今から話すことは絶対に誰にも言わないで。それが守れるのなら、教える」
「わかりましたわ」
「うん。誰にも言わない」
「約束する」
三人はしっかりとシャルロットの目を見て頷いた。それを見てシャルロットは安心した様子になる。
「ありがとう。じゃあ話すね――」
それからシャルロットは明弘の過去を全て話した。五年前の夏以前の記憶がないこと。それからずっと一人で生きてきたこと。三年前に束に拾われたこと。須藤明弘という名前は束につけられたものだということ。最後に神王のコアのこと。
全てを話したあと、沈黙が続く。それを打ち破ったのは、鈴音だった。
「ふーん、そういうこと。さっきの言葉の意味がやっとわかったわ」
いつも通りの口調で鈴音は続ける。
「言っておくけどね、なんでもっと早く言わなかったのよ。……今の話を聞いてあたしたちがあんたに失望したりすると思ってんの？」
「そう思われていたのなら、正直失望しますわ。わたくしたちがそこまで器の小さい人間に見えますの？」
「確かに、過去のことを話すのは辛いことかもだ。しかし、今の話を聞く限り、お前に非があるようには思えん。何を恥じることがあるというのだ」
三人が続けてそんなことを言う。明弘はその言葉に引かれるように顔を上げる。
「ま、でもありがと。話してくれて嬉しかったわ」
「あいにく、そのお二人はどこかに離脱してしまいましたが、わたくしたちには他にやるべきことがありますわ」
「今まで黙っていた罰として、お前も来い。お前の力が必要だ」

「……俺の、力？」
明弘は話についていけず、思わず聞き返してしまう。
「やるべきこと……ああ、そういうこと。確かに明弘の力が必要かも」
何も言わずに見守っていたシャルロットも三人が考えていることがわかったようだが、明弘にはさっぱりわからず首をかしげる。
「ああ、そういえば、お前は知らないのだったな。お前が戦闘しているとき、嫁と箒が福音と戦闘を行った」
「そのときに一夏は福音の攻撃をモロに受けて意識不明になったのよ。ちょうどあんたが追い込まれていた間にね」
「幸い、命に別状はないそうですが、今も意識を失ったままです」
「それで、どうすればいいのかわからなくて途方に暮れてたんだけど……明弘を見て、ようやく答えが出たよ」
「俺を見て？」
明弘がさらに首をかしげる。それはそうだ。自分は特に何かしたわけでもないのに、いきなりそんなこと言われたのだから。
明弘以外の四人はそれぞれの顔に笑みを浮かべてこう言い切った。
「「「「福音とのリベンジマッチ！」」」」

第八十九話　リベンジのために（前書き）

第八十九話

第八十九話　リベンジのために

四時半。旅館のすぐ近くの海岸に専用機持ちが六人、集まっていた。篠ノ之は一夏のことでかなり落ち込んでいたようだが、凰たちが説得して立ち直った。

「さて、メンバーが集まったのはいいが、具体的にどうする？　さすがに作戦無しで勝てるような相手じゃないぞ」

全員を見回しながら、尋ねる。このメンバーでも闇雲に戦っても福音には勝てない。軍用ＩＳは伊達じゃない。

「作戦については、明弘に一任しようと思うのだが」

「ちょっと待ってくれ、ボーデヴィ――ラウラ。なんで俺？」

「この中で一番全員のことを理解し、最善の作戦を立てられる。その条件から明弘が適任だと判断した」

「そういうこと。言っとくけど拒否権はないわよ。これは罰なんだからね」

凰――鈴音がラウラに続く。罰ってまだ引きずってたのか。

ちなみに、篠ノ之以外の四人には名前で呼べとあのあと言われた。いきなりそんなこと言われても、苗字で呼ぶのに慣れてるからちょっと難しい。

「はぁ……。わかったよ、罰なら謹んで受けるさ」

「罰？　それになんで名前で……？」

篠ノ之がついていけずに疑問符を浮かべているが、すまん。教えてやる余裕がない。今は作戦を考えるので精一杯だ。

「では、わたくしたちのスペックデータをお送りしますわ」

「箒以外は全員、パッケージ換装してあるからしっかり確認してね」

セシリアとシャルロットの言葉のあとに四人のスペックデータが送られてくる。それを確認しながら、作戦を考える。

「強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』と大型ＢＴライフル《スターダスト・シューター》、機能増幅パッケージ『崩山』

、防御パッケージ『ガーデン・カーテン』、砲戦パッケージ『パンツァー・カノニーア』。なるほど。なら……よし、決まったぞ」
「は、早いわね」
「もともとある程度は考えていたからな。パッケージで多少の変更はあったが、誤差の範囲だ」
「ほう。では早速聞かせてもらおうか」
ラウラに言われて、俺は作戦内容を説明する。
「まずはラウラ、お前は一箇所に留まって砲撃を頼む。福音の武装に実弾系のものはないからＡＩＣの真価が発揮できない」
「了解した」
「セシリアは逆に高機動で移動し続けながら狙撃。鈴音は中距離からの《龍咆》による砲撃を中心に格闘戦もできるなら頼む。シャルロットは他のメンバーの防御に回ってくれ。できるなら攻撃に加わって欲しい」
「わかりましたわ」
「わかったわ」
「うん」
「で、篠ノ之は――」
「箒だ」
篠ノ之に遮られた。なんだよ。せっかく順調に進んでたっていうのに。
「他の皆を名前で呼んでいるのだから、私のことも箒でいい」
ああ、そういうことか。
「わかったよ。じゃあ箒は近接格闘に持ち込んでくれ。ただし、くれぐれも無理はするな」
「承知した」
「あと福音についての注意点を言っておく。福音は機動と攻撃に特化した機体だ。それに、箒は知っていると思うが福音の攻撃は広範囲にばら撒くタイプの攻撃。避けるのは難しいから回避よりも防御で対処してくれ。だからシャルロットの役割は重要になる」

高機動ができるセシリアと――箒もか。この二人はなんとか避けられるかも知れんが、鈴音、特にラウラは固定砲台のような状態だ。回避は無理に等しい。それゆえに防御パッケージを持っているシャルロットの存在は重要だ。

「うん、わかった。皆のカバーは任せて」

「頼むぞ」

「ちょっと待て。明弘、お前はどうするのだ？」

ラウラが尋ねてくる。ああ、そういえば俺のことはまだ言ってなかったな。

「もちろん俺も参加する。ただ、この状態で満足に戦えないと思うから。皆への指示を中心に動こうと思う」

「うむ、わかった」

「じゃあ最初の強襲についての具体的な作戦に移るぞ」

こうして作戦会議は着々と進んでいった。

一夏の仇は討ってやる。そして、福音の暴走を止める。――絶対に。

第九十話　リベンジマッチ（前書き）

第九十話です

第九十話　リベンジマッチ

海上２００メートルに静止している銀の福音。膝を抱くようにうずくまっているその福音に、超音速で飛来した砲弾が直撃、大爆発を起こした。

福音から五キロ離れたラウラが『パンツァー・カノニーア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンで連続で砲弾を発射する。その両肩には八十口径レールガン《ブリッツ》が二門ずつ装備されており、砲戦仕様の犠牲になった機動力をカバーするために四枚の物理シールドが左右と正面を守っている。

福音はその砲撃に対して反撃するべく、超高速でラウラに接近する。ほとんどの砲弾を翼から放たれるエネルギー弾によって打ち落としながら一気にラウラに接近する。機動力が落ちたラウラには避け切れそうもない。しかし、そのラウラはにやりと口元を歪めた。

「ふっ。――セシリア！！」

ラウラに伸ばされた腕が突然上空から降りてきた青の機体に弾かれる。強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したブルー・ティアーズのステルスモードでの強襲だ。

六機の《ブルー・ティアーズ》は全て腰部に接続され、スラスターとして用いられている。さらに手にしている全長二メートルを超える大型ＢＴレーザーライフル《スターダスト・シューター》は《ブルー・ティアーズ》分の火力を補っている。

『敵機Ｂを認識。排除行動へと移行する』

「遅いよ」

ブルー・ティアーズを操るセシリアの射撃を避ける福音を、真後ろからの攻撃が襲う。

それは今の突撃の際にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのリヴァイヴ――シャルロットのショットガンによる射撃だった。

しかしそれの一瞬のこと。すぐに福音は三機目の機体に対して《銀の鐘（シルバー・ベル）》による反撃を開始した。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

ラファール・リヴァイヴ専用防御パッケージ『ガーテン・カーテン』はそれぞれ二枚の実体シールドとエネルギーシールドによる強力な防御力で福音の攻撃を防ぐ。その間にもシャルロットは得意の高速切替でアサルトカノンを展開、反撃する。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を――』

「させるかぁっ！！」

次の瞬間、海面が膨れあがり、紅椿をまとった箒とその背中に乗った甲龍を駆る鈴音がその姿を現す。

「離脱する前に叩き落とす！」

福音に突撃する箒から飛び降りた鈴音は、機能増幅パッケージ『崩山』を戦闘状態に移行させる。両肩の《龍咆》が開くのに合わせて、増設された二つの砲口が出現する。計四門の《龍咆》が一斉に火を噴いた。いつもと違い、赤い炎を纏った――熱殻拡散衝撃砲ともいえる代物だ。

それが命中した直後、箒は両手に《雨月》と《空裂》を展開し、福音に突撃する。

福音は両腕でそれに対応しながらなんとか隙を見て離脱しようと試みる。しかし箒の猛攻によってなかなか隙を見出せない。

「箒、今だ！　離脱しろ！」

ラウラの言葉に従い、箒が一気に福音から距離をとる。その瞬間、ラウラの砲弾が、セシリアのレーザーライフルが、シャルロットのアサルトカノンが、鈴音の熱殻拡散衝撃砲が、福音の四方から襲いかかる。

「……一〇〇パーセント充填完了。スラスター……一〇〇パーセントで固定。発射準備完了……発射！」

そして、それに続くかのように高速で飛来した何かが、福音に直

撃した。
「……これでどうだ」
福音から二キロほど離れた位置。そこで《アルカディィア》を構えた明弘が呟く。福音に直撃した何かとは《アルカディィア》によるエネルギーを纏った実弾の雨だった。
明弘はそのまま箒たちのもとに向かう。その周りには守護剣《デュランダル》が浮遊している。
「それにしても……一体何があったんだ?」
明弘が自分を包む神王に視線を向ける。
無駄のない滑らかでシャープなデザイン、大部分は前より濃い紫色に、細部は薄い紫色になっている。以前とは違う神王の姿に明弘は首をかしげる。
「いつのまにこんなになったんだか。見る限り第二形態みたいだけど、前よりもかなりしっくりするし……。そういう意味だと第一次移行っぽいんだよなぁ」
実は明弘、グレルたちにやられた以降の記憶が途切れている。歌を歌ったところは記憶に残っているが、次に記憶が残っているのは無限回奏でネルマと出会った記憶だ。その間の記憶が完全に欠落している。故にいつ神王に変化が起きたのか、わからないのだ。
「って、今はそんなこと考えている場合じゃないか。早く皆と合流しないとな」
明弘は思考を中断し、福音と戦っている仲間たちのもとへと急いだ。

第九十一話　遅れて来た仲間（前書き）

第九十一話です

第九十一話　遅れて来た仲間

『《銀の鐘》最大稼動――開始』

皆のもとに戻った途端、福音が両腕と翼をいっぱいに開く。刹那、全方位に向けてエネルギー弾が発射された。くそっ、回避は無理だな。

俺は《イカロスの翼》のエネルギー翼で前面を包み込み、その攻撃を防ぐ。これって防御にも使えるから便利だよな。スラスターと基本的に別稼動だから移動中でも使えるし。

「とはいえ、やっぱり強力だな。さて、ここからが頑張りどころだな」

今の俺は怪我のせいで満足に戦えない。だからこそ、俺の役割はいわゆる司令塔。戦況を見極め、五人に指示を出し、福音を止める。将棋やチェスを思わせる。

チェスか……束さんと昔やったなぁ。ほとんど勝ったことはなかったけど。そういえば――

「そういえば、お前とも何度かやったことがあったな。ナータ」

五人の専用機持ちを相手に互角の勝負を見せる銀の福音を見据えながら、思いかえす。

「ＩＳでの勝負は俺のボロ負け。チェスではほぼ五分五分。……でも、今日はどっちでも勝たせてもらうぞ」

一年越しの再戦だ。絶対に勝ってみせる。絶対に止めてみせる。

「箒、一度離れろ。シャルロットは箒のサポート。セシリアとラウラは攻撃。鈴音は二人の攻撃をあとに格闘戦に持ち込んでくれ」

俺が出した指示通り、箒がシャルロットのサポートは受けて離脱。その直後、セシリアとラウラが攻撃を加え、それが止んだ瞬間に鈴音が《双天牙月》で斬りかかる。

だが、福音は二人の攻撃を翼で防ぎ、続けて斬りかかってきた鈴音の《双天牙月》を両腕で止める。そして、至近距離から《銀の鐘

≫によるエネルギー弾を鈴音に食らわせる。
対する鈴音も全身にエネルギー弾を食らいながらも、熱殻拡散衝撃砲の弾雨を浴びせ、互いに深いダメージを受ける。
「鈴音！　もういい、離脱しろ！」
俺が叫ぶが、鈴音は退かない。そして、その《双天牙月》はついに福音の片欲を奪った。
「はっ、はっ……！　どうよ――ぐっ！？」
片翼だけになりながら、福音は体制をすぐさま立て直し、鈴音に回し蹴りを叩き込む。脚部スラスターで加速されたその蹴りを先ほどの攻撃でシールドエネルギーを消費していて防ぎきれるわけもなく、鈴音は海に落とされた。
「鈴！　おのれっ！！」
箒が両手の刀で福音に斬りかかる。信じられないことに、福音はそれを両方の手のひらで受け止めた。刀身から放出されるエネルギーで装甲が焼ききられるが、そんなことお構い無しに両腕を開く。
「箒っ！　離脱しろ！　鈴音の二の前になるぞ！」
俺の声が聞こえているのか聞こえていないのか、箒は離脱しようとはせず、福音のエネルギー弾が放たれる瞬間に一回転。かかとの展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃でかかと落としのように残った福音の片翼を切り裂いた。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……！」
「……無茶しやがるな。まったく」
まあいい。これで終わり。あとは鈴音と福音を回収して任務完了だ。
そう思って落ちにいるであろう福音に視線を向けて――
「……なんだ、あれは……？」
福音が青い雷を纏いながらうずくまっていた。
「！？　まずい！　これは――第二形態移行だ！」
ラウラが叫んだ瞬間、福音が無機質なバイザーに覆われた顔をこちらに向ける。そこから感じる明らかな敵意。それに全員が反応し

ようとしたが――遅かった。
『キアアアア……！！』
獣のような咆哮を発した福音は高速でラウラの足を掴み、切断された頭部から生えたエネルギーの翼で包む。そのま零距離でエネルギーの弾雨を受けたラウラは全身をズタズタにされ海に落ちた。
「ラウラ！　よくもっ……！」
シャルロットがショットガンを展開。福音に向けて引き金を引く。だが、その弾丸はエネルギー弾に防がれ、シャルロットの体もエネルギー弾に吹き飛ばされた。
「な、何ですの！？　この性能……軍用ＩＳとはいえ、あまりに異常な――」
再び高機動での射撃を行おうとしたセシリアに瞬時加速で福音が迫る。遠距離型のセシリアはそれらしい反撃も出来ずに落とされてしまった。
「くそっ！」
俺は痛む体に鞭を打って福音へと突撃する。福音もそれに気づいて俺へと突撃。ぶつかり合う直前に福音の翼からエネルギー弾が発射された。
「ちいっ！」
俺はギリギリのところで《イカロスの翼》による防御でなんとか防ぐが、かなり押されてしまう。隙を突いて福音の背後から箒が斬りかかるが、福音は瞬時に反応し俺から箒に意識を向ける。
だが、一瞬遅い。これなら福音が防ぐより前に箒の攻撃が通る。そう確信した瞬間――
「なっ！　エネルギー切れだと！？」
紅椿の動きが鈍り、福音の手が箒の首を絞める。
紅椿の展開装甲はかなり高性能だが、当然欠陥もある。それは、展開装甲の使用にはかなりのシールドエネルギーを消費することだ。
零落白夜と同じく多用は厳禁。
「箒！　くそっ！」

福音の手を離させようとするが、福音の翼から放たれるエネルギー弾によって近付くことが出来ない。
どうする？　四人に引き続き等までやられたらもう終わりだ。
だが、その瞬間、何者かの狙撃を受けて福音が吹き飛ばされた。
「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」
そんな台詞をさらりと恥ずかしげもなくいう、純白のＩＳをまとった黒髪の少年。
「はぁ……何恥ずかしいこと言ってんだよ。一夏！」

第九十二話　違和感（前書き）

第九十二話です

第九十二話　違和感

「悪い、待たせたな」
「遅すぎるんだよ。もっと早く来い」
「おいおい、助けてやったんだからいいじゃねえかよ」
「ま、しょうがないから許してやる。……あとで覚悟しとけよ？」
「ちょ、何する気だよ」
「さあな」
一夏と軽口を交わす。つい数時間前まで一緒にいたのに、酷く懐かしく感じる。
「で、ちょっと時間稼いでくれねえか？」
「は？　来て早々なに言ってんだ、お前は？」
「頼む。数分でいい？」
「……はぁ、しょうがないな。三分だ。それ以上は無理だと思え」
「充分」
それだけ言うと一夏は少し離れたところにいる箒に向かい、俺はさっき一夏に吹っ飛ばされた福音に向かう。
「さてと、少し一対一の真剣勝負といくか」
福音は何も答えず、超高速で突っ込んでくる。
「何度も見てんだ。食らうか――よっ！」
福音の突撃を紙一重で回避、急に回避されたことで驚き、体制がやや崩れた福音に右手の《アルカディア》を撃ち込む。しかし、福音はそれをなんとか翼で防ぐ。体制が崩れてるっていうのに、さすがだな。
福音はそのままいきなり反転し、至近距離からのエネルギー弾の雨。俺は《イカロスの翼》で防ぐがやはり押される。
攻撃、防御、回避、反撃。何度も繰り返される応酬。以前福音とやりあったときとほぼ同じ展開。
だが、何かおかしい。さっきラウラたちを倒したときとは福音の

動きが少し違う。そうでなければ、不意を突かれたとはいえ、三人を瞬く間に落とした第二形態の福音に俺がここまで食らいつけるはずがない。

以前やりあったときの慣れ？　いや、それだけでここまでできるはずない。なら神王の姿が変わったから？　確かに前より馴染むが、それだけではないはずだ。

「ちぃっ！」

福音から距離をとる。が、福音はすぐさま《銀の鐘》からエネルギー弾を発射する。それを《イカロスの翼》で防御した直後、福音が急接近してくる。《イカロスの翼》では反撃は出来ない。

【《アルカディア》――レーザーモード　発射形態？に変更】

「食らえ――っ！」

近距離爆散砲の発射。福音が自分から二メートルほどまで近付いてきたこの状態では俺にもダメージが及ぶだろうが、これしか方法はない。

《アルカディア》の爆発はやはり俺のことも巻き込みながらも、福音にダメージを与える。福音は思わぬ反撃に思わず距離をとる。

「……ふう。さすがにきついな」

「明弘！」

お、一夏も用が終わって加勢してくれるみたいだな。これからが本番だ。

「一夏、用は終わったのか？」

「ああ、終わったぜ。それより……お前、その姿は？」

「お前こそ」

一夏がまとう白式は、以前よりも大型のスラスターと左手に新装備らしきものが備えられている。まさか、第二次移行か？

「ま、細かいことは後回しだ。まずは福音を倒さねえと」

「油断するなよ。あいつは一機で箒以外の四人を倒した。かなり強い」

「了解っと。っていうか、お前が箒って呼ぶのはじめて見たぞ」

「それもあとでな。さてと、再戦と行こうか」
「よし。――行くぜ！！」
一夏が背部に取り付けられた大型スラスターで突撃する。
「早いな。俺も負けらんねえ」
一夏を追うように突撃する。
さあ、ここから本当の勝負どころだ。

第九十三話　任務完了（前書き）

第九十三話です

第九十三話　任務完了

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する。《銀の鐘》最大稼動――開始』

福音の翼から放たれるエネルギー弾。相変わらず広範囲にばら撒かれる攻撃だ。《イカロスの翼》で防御するのも限界があるし……どうする？

「まかせろ！」

一夏がそう言って俺の前に飛び出す。それと同時に白式の左腕が変形し、光の膜が広がる。そしてその光の膜に触れたエネルギー弾が爆発することなく消えていった。

「あのエネルギー弾を防いだ？　……いや、消滅させた？」

「この左腕、《雪羅》のシールドモードはエネルギーを無効化できる。零落白夜のシールドだ」

零落白夜のシールド、だと？　おいおい、それって反則じゃないか？　福音の武装に実弾兵器はない。そんな福音相手なら圧倒的有利になる。

「燃費は悪いけどな」

「そこは相変わらずってか。確かに便利だが、多用はするなよ」

「わかってるって」

「まあ、早いとこ終わらせるか」

一夏が福音に突っ込む。四つに増え、さらに大型化されたスラスターによる超高速の突撃。複雑な動きが出来る福音もさすがに速度の差は覆せない。徐々に追いつかれる。

俺もやるか。体の調子は――大丈夫だな。怪我のせいで動きは鈍るが、やれないことはない。鈍った分は《デュランダル》で補えばいい。――行くか。

「はぁぁぁっ！」

一夏に集中していた福音に背後から斬りかかる。福音はそれに素

早く反応して回避、そのままエネルギー弾を放つ。
《イカロスの翼》で防御するが、やはり押されてしまう。一夏には《雪羅》があるけど、俺はやばいな。防御もあと数回が限界だろう。
「くそっ、シールドエネルギーが減ってきた。このままじゃあ……」
一夏が忌々しそうに呟く。大型スラスターでここまで飛ばしてきて、しかも戦闘では右手の《雪片弐型》と左手の《雪羅》を使ってる。エネルギー消費も今までの比じゃないはずだ。
「一夏っ！」
と、不意に一夏を呼ぶ声が響く。声の主は――箒！？
「一夏！　これを受け取れ！」
箒の、紅椿の手が白式に触れる。その瞬間、白式が光り輝いた。
「エネルギーが――回復！？　箒、これは――」
「今は考えるな！　行け、一夏！」
「お、おう！」
シールドエネルギーを回復させる……。まさか、赤椿の単一使用能力？
「って今は福音を止めることに集中しないとな。……《ラグナロク》発動」
俺の言葉に反応して淡い紫色の光が神王を包む。《イカロスの翼》のエネルギー翼が１．５倍ほどに大きくなる。
「予測稼働時間は……三十四秒か。いくぞ、一夏！」
「おうっ！」
一夏よりさきに突撃。速度もさっきまでの比じゃない。福音が反応する前に懐に入った。
そのまま四本の《デュランダル》を福音の翼に突き刺した。あと二十九秒。
「ぐっ！」
翼を失ってもなお、福音は俺に回し蹴りをする。さっき鈴音を沈めた、脚部スラスターで加速された蹴り。だがー
「食らうかよ！」

福音の蹴りを両手で止める。加速されたとはいえ、蹴りごときでは今の俺にはきかない。――あと二十一秒。

『キアアアアっ！！』

蹴りを止められた福音は両手を合わせて俺に叩き込む。俺はそれをさっき翼を突き刺した《デュランダル》のうち二本で防ぎ、残りの二本で逆に弾き返す。――あと十四秒。

「行けっ！　一夏！」

「うおおおおっ！！」

完全に動きを封じられた福音に一夏が迫る。その右手に握られた《雪片弐型》からエネルギー刃が出現し、その刃が福音に当たる直前に俺は一気に福音から離れる。

直後、《雪片弐型》が福音に突き立てられる。福音も一夏の首を両手で締め付けようとするが、そこで福音は動きを止めた。

福音のシールドエネルギーが尽き、アーマーが消える。浮遊能力を失った操縦者が海に落ちていくが、寸でのところで鈴音が受け止めた。

「これで終わったな」

《ラグナロク》稼働時間――0。こっちも終わったな。

神王のアーマーが光の粒子になって消える。俺も浮遊能力を失い、海に落ちる。一日で二度もこんな落下を経験するなんてなかなかないぞ。

「まったく、お前まで落ちてどうする」

ふと、誰かに受け止められた。……箒か。まわりを見渡すと他の皆の姿も見える。怪我を負っているものの、大丈夫なようだ。

「ありがとな、箒」

「礼を言われることはしていない。それよりも――」

「終わった、な」

一夏が水平線に沈む夕日を見ながら呟く。他の皆もそれを聞いて笑みを浮かべる。

「これにて……任務完了」

第九十四話　待つ（前書き）

第九十四話です

第九十四話　待つ

「作戦完了――と言いたいところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

福音の暴走を止めた俺たちを待っていたのは、織斑先生の説教だった。というか、命令違反って何？　俺は何も聞いてないんだが。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。怪我人もいますし」

「ふん……」

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診察しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。――あ！　男女別ですよ！　わかってますか、織斑くん、須藤くん！」

わかってますよ。誰が好き好んで女子の前で脱ぐんだ。逆もしかり。

山田先生からスポーツドリンクを貰って飲む。そういえば、ナータはどうしたんだろうか。帰るときに見た感じでは怪我はなかったけど。こんど知り合いに訊いておくか。

とりあえず、今は部屋に戻ろう。本物の戦闘を一日で二度やったし、怪我のせいで体中痛いし。ということで、早々に部屋で出る。

「「「「「とっとと出てけ！」」」」」

俺が部屋を出た直後、部屋の中からそんな声が聞こえてくる。どうせ一夏が何かやらかしたんだろうな。

そんなことよりも問題はグレルたちだ。

「俺の過去に関係しているらしいが、なぜ神王のことを……」

守護剣（デュランダル）はＩＳ学園に来てから一度も使ったことはない。大きな理

由はまだ四つ全てを完全に操ることが出来ないから。同じ自立稼動兵器《ブルー・ティアーズ》を扱うセシリアよりもはっきりいって扱いきれていない。ビームやミサイルを撃たせる《ブルー・ティアーズ》よりも扱いは楽なはずなんだが……俺の実力が低いってことだろう。

「それに弾丸弾き……。フェルは自分がオリジナルだと言っていた」

あれは俺が無意識のうちに作り上げた技だ。だからこそ、オリジナルは俺自身だと信じて疑わなかった。

だが、五発の弾丸をいとも簡単に弾いたあの実力を見せられたら、確かにあっちがオリジナルだと思ってしまう。

フェルは俺が弾丸弾きを使えることについて『記憶がなくても体が覚えてるということか』と言っていた。

昔よく歌っていた曲や何度も耳にしていた曲は、何年かあとでもよくうろ覚えで歌えたりすることがある。それと同じようなことだろうか。そうなると、なはり記憶を失くす前の俺はあの二人と親しい間柄だった可能性は高くなる。これは俺の記憶を取り戻す大きなチャンスだ。

ネルマと無限回奏については考えるだけ無駄だろう。情報が少なすぎる。せいぜい、ネルマが記憶を失くす前の俺ととても親しい仲であることと、無限回奏が俺の精神の中にある世界だということぐらいだ。これでは考えようがない。

「とりあえず、もう一回無限回奏に行ってみたいところだが、どうやって行けばいいのかわからないしなぁ」

俺の精神の中の世界といっても自由に行き来できるわけではないようだ。ネルマもそんなこと言ってたし。

「今のところは様子見ってことか」

次いつ行けるかはわからない。もしかしたらもう二度と行けないかもしれない。それでも、待つしかない。

待って、待って、待ち続けて。機会が来るのをじっと待つしかない。いつまでも、いつまでも……。

第九十五話　許さない（前書き）

第九十五話です

第九十五話　許さない

翌朝。朝食とＩＳ及び専用装備の撤収作業を終え、十時を過ぎたあたりで作業も終わり、クラス別にバスに乗り込んだ。昼食は途中のサービスエリアで取るらしい。

「誰か、飲み物持ってないか……？」

隣で突っ伏してながら一夏が呟く。そういえば、昨日は何か色々あったらしいな。俺には関係ないが。

「……ツバでも飲んでいろ」

「知りませんわ」

「あるけどあげない」

順にラウラ、セシリア、シャルロットだ。鈴音は二組なのでいない。一夏は最後の望みをかけて箒に視線を向ける。

「なっ……何を見ているか！」

しかし箒は顔を赤くしていきなりチョップを繰り出してきた。あ、今のは痛いところに入ったな。

「ご愁傷様だな、一夏」

「……うるせぃ……」

これもある意味自業自得だからしょうがない。とはいえ少し可哀想だな。飲み物を恵んでやるか。

「ねえ、織斑一夏くんっているかしら？」

「はい？」

いきなり声をかけられて一夏がきょとんとして声のした方向を向く。

そこにいたのは二十歳ほどの女性。鮮やかな金髪が夏の日差しで輝いている。おしゃれ全開で格好のいいブルーのサマースーツを着ている。

「……ナータ」

「ハロー、明弘。そっちにいるのが織斑一夏くんでいいのかしら？」

「ああ」
俺の返事を聞き、女性は一夏に視線を向ける。
「あ、あの、あなたは……？」
「私はナターシャ・ファイルス。銀の福音の操縦者よ」
「え――」
予想外の言葉に一夏が困惑する。まあ、俺も今見たとき少しびっくりしたけど。
そんなことを考えていると、ナータの唇が一夏の頬に触れた。
「ちゅ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」
「え、あ、う……？」
予想外のことが起こりすぎて一夏の思考が停止する。
「ナータ。いきなりそんなことやるなって。一夏だけじゃなくて皆びっくりしてる」
「まあいいじゃない。それよりあなたも私を助けてくれたんでしょう？　あなたにもやってあげようか？」
「いらん」
「もう、つれないわね。明弘らしいけど」
「……何しに来たんだよ」
「いろいろと、ね。まあ、もういいわ。じゃあ、またね。バーイ」
「じゃあな」
それだけ会話を交わして、ナータは颯爽と去っていった。本当に何しに来たんだか。
「浮気者め」
「一夏ってモテるねえ」
「本当に、行く先々で幸せいっぱいのようですわね」
「はっはっはっ」
おっと、今のを見てしまった四人が近づいてくる。一夏、ピーンチ。
「「「「はいどうぞ！」」」」
投げつけられる五〇〇ミリリットルのペットボトル×４。あれは

痛い。しかも計二リットル。喉が潤うどころの話じゃない。
「ほい、俺からのスポーツドリンクをプレゼントだ。ありがたく受け取れ」
ペットボトル攻撃を受けて悶えている一夏の脇に五〇〇ミリリットルのスポーツドリンクを置いてその場から立ち去る。修羅場はごめんだ。
「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」
「思っていたよりもずっと素敵だったから、つい」
バスを出るとナータが外にいた織斑先生と話していた。暇なので混ざるとするか。
「昨日あれだけ暴れたって言うのに、大丈夫なのか？」
「あら明弘。問題ないわ。――私は、あの子に守られてましたから」
あの子とは、暴走を起こした福音のことだろう。ナータは福音のことをよくそう呼んでいたからな。
「――やはり、そうなのか？
「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いに身を投じた。強引なセカンド・シフト。それにコア・ネットワークの切断……あの子は私のために、自分の世界を捨てた」
そう言うナータの雰囲気はさっきとはまるで違う、鋭い気配をまとっている。
「福音は、ナータを守るために、少しでもナータに危害を及ぼす可能性のあるものを全て敵と見なした。そうなんだろ？」
「そうよ。福音は私のために……」
「昨日、福音とやりあっていたとき、違和感を感じた。俺の以外はセカンド・シフトした福音に一瞬でやられたのに、俺だけはなんとか暗いつけていた。実力とかそういうでどうこう言えるものではなかった」
「……」
「たぶん、福音は俺のことを認識していたんだ。一年前に俺と神王

は福音とよく模擬戦とかをやっていたからな。それで俺にだけ少し攻撃の手が甘かったんだろう」

「……かもしれないわね。……私は許さない。あの子の世界を奪わせた元凶を――必ず追って、報いを受けさせる」

福音はコアこそ無事だっただろうが、暴走事故を起こしたことから凍結処理されるだろう。それは福音にとってもナータにとっても辛いことに違いない。

「何より飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶なことをするなよ。このあとも、査問委員会があるんだろう？　しばらくはおとなしくしていた方がいい」

「それは警告ですか、ブリュンヒルデ」

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それでは、おとなしくしていましょう。……しばらくは、ね」

それだけ言うとナータは帰路につく。その背中を見ながら呟く。

「じゃあな、ナータ」

ナータは背を向けたまま軽く手を上げて、そのまま歩いていった。ちゃんと聞こえたみたいだな。

ナータの姿が見えなくなったのを確認したあと、俺は織斑先生に続いてバスに乗り込んだ。

第九十六話　電話（前書き）

第九十六話です

第九十六話　電話

携帯からコール音が聞こえる。十数回ほどそれが鳴ったあと、コール音の代わりに女性の声が聞こえてきた。
『……Ｈｅｌｌｏ？』
「Ｈｅｌｌｏ．Ｉ'ｍ　Ａｋｉｈｉｒｏ」
『Ｏｈ，Ａｋｉｈｉｒｏ！　ｗｈａｔ' ｓ……どうしたんだ、急に』
「あれ、英語でもよかったんだがな」
『日本語の方がいいだろ？　お前は』
「違いない」
まあ、確かに英語よりは日本語の方が話しやすいから助かるけど。あっちがいいならいいか。
「とりあえず、久しぶりだな、イリス」
『おう、だいたい一年ぶりぐらいか？』
イリス。本名はイーリス・コーリング。アメリカの国家代表、フアング・クエイクの操縦者でナータとよく一緒にいる女性だ。ナータと同時期に知り合った。
「会うのはな。話すのは半年ぶりくらいだ」
『あ、そうそう』
相変わらず大雑把だな。半年前のことなんだから忘れるなよ。
「そういえば、研修の件、どうだ？」
『あれ？　そういえばって、それを聞きたかったんじゃないか？てっきりそれが目的だと思ったんだけど』
「いや、他の用事でな。……で、どうだ？」
『完璧だぜ。一昨日日本に帰ったはずだけど、聞いてないか？』
「いや、全然。まあ、帰ってきたら連絡くらい来るだろ。連絡禁止命令は研修中だけだし」
『それもそうか』
よく考えるともう半年なんだよな。半分はＩＳ学園で過ごしてた

から早く感じる。あいつがどれだけ成長したのか確認したいが、いつ会えるかもわからないな。

「それとナータは大丈夫だったか？」

『ああ、精密検査でも特に異常なかったらしいぜ。本人はお前に会ってきたって自慢してくるくらいだし、心配ねえだろ』

「俺と会ったのって自慢になるか？　まあ、確かに会ったときは大丈夫そうだったけど、無茶してるかもしれなかったからな」

『ま、ここ数日は査問委員会ばっかりで疲れた疲れた言ってるけど。ちょうど近くにいるし、代わるか？』

「ああ、頼む」

『……ハロー、明弘』

数泊の間の後、聞こえてくる声が変わった。先週会ったばかりのナータの声だ。

「調子はどうだ？」

『まったく問題ないわよ。査問委員会はさすがに疲れたけど』

「お疲れ」

『ありがと。それで、今日はどうかしたの？　私の容態を聞くためではないんでしょ？』

「鋭いな。……福音が暴走した日、グレルとフェルとかいう二人組みのＩＳ操縦者に出会った。何者かはわからないが、過去の俺と面識があるらしい。そいつらについて何か知らないか聞きたくてな」

『グレルとフェル？　私は知らないわね。イーリは知ってる？』

ナータの問いかけに対して、イリスの声がかすかに聞こえてくる。知らないと言ったようだ。

『イーリも知らないって、少なくともアメリカ軍にはそんな二人組みいなかったはずよ』

「そうか。まあ、偽名の可能性もあるから当たり前といえば当たり前か」

『その二人のＩＳはどんなのだったの？　もしかしたらわかるかもしれないし』

二人の機体か。ほとんど一方的にやられただけだから、情報なんてまったくといっていいほどないな。

「近距離格闘方の薄い水色の機体と遠距離射撃方の黒に近い藍色の機体だ。一方的にやられたからほとんど情報は掴めなかった」

『二人組みといってもあなたを一方的に倒せる相手？　そうなると、国家代表レベルか代表候補生の中でもかなりの実力の持ち主ね。でも、そんなＩＳなんて聞いたこともないわ』

そりゃそうか。そもそも国に所属している企業や研究所がこんな強硬手段をとるとは考えづらい。バレれば大変なことになるし。

「ん、サンキュ。お礼に今度何か送る。何がいい？」

『私はスシがいい！』

なんかイリスの声が聞こえたぞ。かなり鮮明に聞こえたし、どんだけ大声出したんだ。

「いや、生ものは傷むからやめたほうがいいと思うぞ。食べ物以外で何かないか？」

『んー、すぐには思いつかないわね。明弘に任せるわ』

「了解っと、んじゃそろそろ切るぞ。そっちも訓練とかあるんじゃないか？」

『まあね。じゃあイーリに携帯返すわよ。お礼楽しみにしてるわ、バーイ』

『……もしもし。お礼、期待してるからなー。んじゃ』

それだけ言うと携帯が切れる。そんなに期待されても困るんだがな。何送ろうか。日本製の小物と、あとは二人とも軍人だから安全祈願のお守りでも送っておくか。それ以外は今度買い物行ったときに探してみよう。

「って、そろそろ飯食いに行くか。腹も減ったところだし」

携帯を閉じて、ポケットに入れる。そして俺はそのまま食堂に行くため、部屋を出て行った。

第九十七話　生徒会長（前書き）

第九十七話です

第九十七話　生徒会長

第三アリーナ。その無音のアリーナの中央に俺は立っていた。

――黄昏と黎明の集う場所で――
――約束の歌をあなたと歌う――

俺以外に人の気配はない。無人のアリーナに俺の声が沁みていく。

――交わるはずのない旋律は――
――あなたと結ぶ旋律は――
――いつか交わした約束の歌――

歌の終詩を結ぶ。しかし、アリーナが再び無音に戻ったこと以外、変化らしい変化は現れなかった。

「……駄目か」

グレルたちにやられたとき、無意識のうちに歌った歌。ちょうど自分以外に誰もいなかったから試しに歌ってみたが、特に何も起きなかったか。

ネルマと出会った俺の精神世界らしい世界と同じ『無限回奏』という名前。ネルマがこの歌の歌詞がその精神世界のことを指していたと言っていたことからして、少なくとも何かしらの関連性があるのは明らかだろう。

だから歌ってみれば何か起きるかもしれないと思ったが、そううまくいかないようだ。

「……そろそろ部屋に戻る――」
「そうよ。もう使用時間ギリギリなんだから」
「――っ！？」
いきなり後ろから声をかけられて、慌てて振り返る。そこには水色の髪をした女生徒が立っていた。
距離は約七メートル。いくら考え事をしていたからといって、そこまで近寄られているのに気づかなかったとは……。一応、二年ほど一人で生きてきたから少しは気配を読めるんだがな。
「……誰だ？」
「知らないの？　まあ、一年生ならしょうがないか」
飄々とした態度の崩さず、女生徒は自己紹介をする。
「ＩＳ学園二年生、生徒会長の更識楯無よ。よろしくね」
「生徒会長？」
二年生で生徒会長？　三年生が引退したあとならともかく、この時期から二年生が生徒会長になるのだろうか。学校に通ってない俺でも疑問に思う。
更識楯無と名乗った女生徒は俺の疑問を読み取ったかのように、顔に笑みを浮かべながら答えた。
「ここ、ＩＳ学園の生徒会長は生徒の中で最も強い人間がなるの。だから二年生が会長になっても問題はないわ。もちろん、一年生でもね」
その言葉を信じるとすれば、俺の目の前に立っているのは学園生徒最強ということになる。にわかに信じがたいが、よく見ればただ立っているだけなのに隙が全くない。
「それは理解しました。では、もう一つ質問。更識という苗字からすると、あなたは――」
「そう。一年四組の更識簪の姉よ」
やはり簪の姉か。更識なんて苗字、そうそういるもんじゃないだろうし、もしやと思ったらやっぱりか。
「わかりました。……で、その生徒会長がわざわざこんなところま

でどうしたんですか？」
「それはもちろん、一年生最強の須藤明弘君と戦ってみようかと思ったからよ」
「……俺は最強じゃないんですが」
今の戦績はラウラの方がわずかに勝っている。だから俺は最強ではなく二位だ。まれに一位になるときはあるけど。
「そこは気にしないの。それで、どうする？　やる？　やらない？」
「アリーナの出入り口の前に立ちながら言わないでください。やらないと出さない気満々でしょうが」
「あれ、バレた？」
バレるも何も見ただけでわかりますって。
「はぁ、やりますよ。やればいいんでしょう？」
「よし、じゃあ早速――」
そういうが、会長は動かない。それどころかＩＳを展開することすらなく、じっと立ち尽くしている。
それに対し、俺は展開した《デュランダル》を四つに分け、会長に向けて飛ばした。
「……！」
《デュランダル》が会長の手前一メートルに来た瞬間、会長は一瞬をゆうに切る速度でＩＳを展開。同時に右手に握ったランスで《デュランダル》を全てなぎ払った。
俺はその隙に一気に接近、展開した《エクスカリバー》を両手で握り締め、会長に切りかかる。
――が、その剣戟は引き戻したランスにあっさりと防がれてしまった。
「……さすがだね。会長目指す気ない？」
「謹んでお断りします。会長なんて柄じゃないですし、興味ありませんから」
「うーん、残念」
そんな会話をしながらそれぞれのＩＳを解除し、地面に足をつけ

る。
「今の、本気じゃなかったでしょう？」
「何でそう思うのかな？」
「学園最強がこの程度のはずがない。二度目の攻撃だって防がずに流すか弾くかすればあなたの勝ちだったでしょう」
「それを言うならキミもでしょ？　最初の攻撃、全部ギリギリ私に当たらないような軌道だったし」
「生身の女子に攻撃できるわけないでしょ」
「あはは、優しいんだねー」
まさか、気づかれるとはな。一撃目、《デュランダル》の攻撃は動かなければ当たらない軌道ではあった。それに気づかず、避けるか防ぐかしたら、その隙を突いて攻撃をする。それが作戦だった。
一撃目を弾かれたところまではよかった。しかし、《デュランダル》を弾いたランスの引きが予想以上に速く、結果奔命である二撃目も防がれてしまった。
「まあ、ある程度の実力はあるみたいだね。合格」
「合格？」
「気にしなくていいよ。それよりそろそろアリーナ閉まっちゃうよ」
「……そうですね」
滅茶苦茶気になるが、きっとこの人は口を割らないだろう。なら何を聞いても無駄だ。
「色々勉強になりました。では、失礼します」
「じゃあねー」
この人はきっと国家代表か代表候補生の中でも最強の部類だろう。この学園にはまだまだ化け物がいるんだということを改めて実感させられる。
そんなことを考えながら、笑みを浮かべたまま手を軽く振る会長の背を向け、俺はアリーナをあとにした。

第九十八話　新たな転校生（前書き）

第九十八話です

第九十八話　新たな転校生

色々あった臨海学校の翌週。一夏とともに教室に入ると、女子にいきなり質問された。
「おはよー、織斑君、須藤君。二人は転校生の話聞いた？」
あれ、なんか前もこんなやり取りなかったか？　四月下旬あたりの……鈴音が転校してきたとき。
「また転校生？　こんな時期に？」
「もうすぐ夏休みってときに転校生とはな。どうせまた専用機持ちだろ？」
「そうらしいよ。二組だって」
「何で二組？　専用機持ちのいない三組じゃないのか？」
「それよりも、次はどこの国だよ。イギリスとドイツが来てるから……ヨーロッパからならイタリアあたりか。それともアメリカとか？」
第三次イグニッション・プランの次期主戦力機は選定中で、現在トライアルに参加しているのはイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型。イギリスからはセシリア、ドイツからはラウラが来てるし、イタリアから来た可能性はある。それか、先週の件からアメリカかもしれない。ただ、あの暴走事故からどうしてそうなるのかは知らない。お偉いさんの考えはよくわからん。
「それがわからないんだって。専用機持ちらしいっていうのも、あくまで噂だし」
女子の情報網ですらわからないとは。まあ、シャルロットとラウラが転校してきたときはそれ自体誰も知らなかったが。
「二組と合同実習があれば確認できるが、今日はあいにくないしな」
「放課後になったら鈴に訊けばいいじゃねえか。それよりもうすぐ千冬姉が来るぞ」

「おっと、そうだった。速く席に着かないと」
会話を終え、俺たちが席に着いた直後、織斑先生が教室に入ってきた。一夏が言ってくれなければ危ないところだった。
それにしても、所属不明の転校生。気になるな。

放課後になって早々、鈴音が俺たちの教室にやってきた。
「おー、鈴。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」
「どうせ転校生のことでしょ。大体想像はついてるわよ」
「話が早くて助かる。……で、どんなやつなんだ？」
俺が鈴音に改めて質問する。周りには箒、セシリア、シャルロット、ラウラ、のほほんさんと、たいそうな顔ぶれだ。簪と噂の転校生以外、一年の専用機持ちが全員集合だし。
「外見は小柄ね。細身で身長もあたしと同じか、少し小さいくらい。それに誰とも自分から話かけようとしないのよ」
「誰とも話そうとしない、ねぇ。以前のラウラみたいな感じか？」
「お、おい明弘っ」
ラウラが慌てたように口を開く。ラウラ本人にとってはあの時期は黒歴史のようなものなのかもしれない。そこまで気にすることではないと思うが。
「ううん、どっちかというと内向的みたいな感じ。こっちから話しかければ応えてくるんだけど、自分からは全く話しかけてこないのよ」
「そうか。あと、専用機持ちって――」
クイクイッ。
急に後ろから制服を引っ張られた。誰だ？　話している途中だっていうのに。
しょうがなく後ろを振り返ると、そこには一人の少女が俺の制服を弱弱しく握っていた。

小さい体。細い体つきが身を包んでいるＩＳ学園の制服の上からでもよくわかる。肩にかかるくらいの綺麗な黒髪。それと同色の黒い目が俺のことを見つめている。

「……遥香？」

「はい」

俺の問いかけに対して瞬時に答える少女。その様子を見ていた周りから質問が飛んでくる。

「す、須藤君、知り合い？」

「ああ。ってどうした？　鈴音」

俺――いや、俺と話していた少女か――のことを見て呆然としている鈴音に声をかける。鈴音は驚きながら答えた。

「……そいつよ。二組に来た転校生……」

一瞬の沈黙。その後――

「「「えええええええええぇぇぇ！？」」」

耳をつんざく大声が教室中に響き渡った。

第九十九話　転校生の正体（前書き）

第九十九話です

第九十九話　転校生の正体

「少し静まれ。遥香がびっくりしてるじゃねえか」
急な大声に驚いている遥香をなだめながら、周りに注意する。幸い、すぐに治まってくれたからよかったが。
「で、遥香。お前が転校生だというのは間違いないな」
「はい」
「ならなぜ連絡をしなかった？」
「博士が連絡しておくと言っていたので」
いや、あの人がわざわざそんなことをするとは思えないが。どうせサプライズとか妙なこと考えてたんだろうな。
「明弘、そろそろ俺たちにも詳しい説明をしてほしいんだが」
「ああ、悪い。こいつは遥香。俺の家族だ。この間までアメリカにいたんだが、先日帰ってきたそうだ」
とはいっても実際に血が繋がっているわけではない。二年前、買い物の帰りに拾い、そのまま一緒に暮らすことになった。それだけだ。それだけなのだが、こいつはやたらと俺に懐いている。理由は知らんが。
よく考えると、俺が束さんに拾われたときと状況が似てるなぁ。あの時拾われた俺が人を拾うとは、妙なこともあるもんだ。
「遥香、紹介する。この男子が――」
「知っています。織斑一夏ですよね」
「束さんに聞いたのか？」
「はい。織斑一夏と篠ノ之箒、織斑千冬さんのことは」
やっぱり。この三人しか教えなかったのか。相変わらず、他の人には興味ないのな。
「じゃあ、他のメンバーだな。こっちからセシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒだ。それぞれイギリス、中国、フランス、ドイツの代表候補生で専用機持

ちだ。同じ専用機持ち同士仲良くしてやってくれ」
　俺が紹介すると、紹介された四人に一夏と箒が加わり遥香と挨拶をする。とはいっても、よろしく、こちらこそ、といったやり取りだけだ。まあ、遥香ならしょうがないか。
　一通り挨拶も済んだので、さっそく話を進める。
「遥香。研修はどうだった？」
「はい。特に問題もなく、予定通りに終わりました」
「あの二人はどうだった？」
「ナターシャ・ファイルスとイーリス・コーリングならとてもよくしていただきました」
「そうか。よくがんばったな」
　そう言って遥香の頭をなでてやると、遥香は気持ちよさそうに目を細めた。猫みたいなやつだな。
「なら早速、研修の成果を見せてもらおうか。今からアリーナに行き、模擬戦を行う。手は抜くなよ」
「わかりました」
「よし。……一夏たちもくるか？」
「あ、ああ。観戦させてもらうぜ」
　一夏の言葉に続いて、他の専用機持ち、一般生徒も観戦を希望してきた。まあ、専用機持ちは遥香の実力を見定めるため、他のやつは興味本位だろう。別に邪魔をしないなら構わない。
「じゃあ、行くか」
「はい」
　俺が席を立って歩き出すと、遥香がその斜め後ろにつく。こいつは昔からこうなんだよな。
　そしてその後ろに一夏たち観客一同。そういえば、入学当時は食堂に行くときいつも後ろに大量の女子がついてきてたな。今更ながらもう一度経験するとは思わなかった。
　って、そんなことを考えてる場合じゃないな。以前、遥香と戦ったのが半年ほど前。それから遥香はこの半年はアメリカ軍でナータ

とイリスの指導を受けていたはずだ。もう半年前と同じとは思ってはいけない。気を引き締めないとな。

キャラ紹介　《天宮遥香》（前書き）

遥香とその専用機についての設定です

キャラ紹介　《天宮遥香》

天宮遥香

性別・女

髪・黒色で肩にかかるく亜らいの長さ

目・黒色

趣味・読書

好きなこと・明弘、明弘の好きなこと・もの

嫌いなこと・明弘に危害を加えるもの・こと、明弘が嫌いなもの・こと

身長は鈴よりやや低い。体も細いが、身体能力は普通以上はある。

小食。

二年前、行く当てもなく、腹を空かせていたとき、買い物帰りの明弘に拾われ、一緒に暮らすようになった。

名前は明弘が命名。遥香本人はとても気に入っている。束からは『ハルちゃん』と呼ばれている。

明弘にとてもよく懐いているが、人付き合いは少々苦手。

髪を肩にかかるくらいまで伸ばしているのは明弘の影響で、少しでも明弘と一緒がいいという理由から。

いつでも明弘を中心に考えており、まれに突拍子のないことをしでかす。

家事は得意。明弘がバイトのときはよく食事を作っていたので特に

料理は得意。
ＩＳに関する知識は豊富。知識だけなら明弘を上回る。

神楽
遥香の専用機。機体カラーは神王と同じ紫。待機形態はブレスレット。
距離を選ばず、オールラウンドに戦うことが出来る万能型。
基本装備は下記の神祇、護神のみだが、拡張領域は余っているのでそのときに応じていくつかの武装を量子変換できる。

武装

神祇
遥香の体ほどある大型武装。神楽の主武装で近距離、中距離、遠距離と多種多様な戦いができるが、その分扱いが難しい。
明弘が神祇を使いこなせるのは遥香だけと言い切るほどのものだが、まだ完全に使いこなせてはいない。

護神（まもりがみ）
《デュランダル》や《ブルー・ティアーズ》と四つの同じ自立稼動型のエネルギーシールド。直径一メートルほどの大きさだが、最高出力だと１．５メートルほどまで大きくなる。

キャラ紹介　《天宮遥香》（後書き）

大体こんな感じです

遥香の実力や神楽の詳しい性能は次回の戦闘で

第百話　研修の成果（前書き）

第百話です

第百話　研修の成果

第三アリーナ。そこで俺と遥香はそれぞれＩＳをまとって対峙していた。

遥香のまとうＩＳ『神楽』。俺の神王と同じ紫色をしたその機体は小柄な遥香をすっぽりと包み込んでいる。

その手には武器一《神祇》が握られている。遥香と同じくらいの大きさを誇る《神祇》は中央に円状の穴が空いており、そこに取っ手が取り付けられている。片端には《イカロスの翼》のエネルギーウィングと同じ色のエネルギーブレード。逆の端には大口径のバレルとそれを囲むように小口径のバレルが八つ取り付けられている。

「何だ、あの武器……」

「見たこともない武装だね。あれも篠ノ之博士が作ったのかも」

アリーナの端で一夏たちがそんな会話をしている。だが、今はそっちよりも目の前の遥香だ。半年の研修でどれだけ成長したか、楽しみだ。

「……行くぞ」

「はい」

それを皮切りに俺は右手に《エクスカリバー》を握り、《デュランダル》を展開。守護剣モードにして遥香に向けて飛ばす。だが、それは遥香の周りに出現した四つのシールドに阻まれてしまった。

守護盾《護神》。守護剣《デュランダル》と対になる鉄壁の防御力を誇るエネルギーシールドだ。

遥香はそのまま《神祇》を脇に抱え、実弾を連射する。数は四発。弾けるか……いや、違う。これは――

「……っ！？」

次の瞬間、四発の実弾が弾け、その中から無数の小さな弾丸が姿を現した。

「ちっ！」

弾くのは無理だ。大きく左に迂回してその弾丸を回避する。しかし、そこにすでに回り込んでいたのであろう遥香が突撃してきた。
《神祇》のエネルギーブレードをこちらに向け、一気に振り下ろす。
俺はギリギリのところで多方向推進翼で自分の軌道を無理やりずらし寸でのところで回避を成功させた。
「……弾幕を張って、回避したところを追撃か。ナータとイリスの連携技を真似たな？」
「はい」
ナータが弾幕を張り、そこにイリスが追撃をかける。あの二人が使う連携技の一つだ。本来なら二人で行うものだが、なるほど、確かに遥香なら一人でもやれる。なかなかいいやり方だ。
「だが、なぜ俺が左に避けるとわかった？　あの二人でも弾幕が着弾したあとに突撃をしていたはずだが？」
「最初の攻撃はやや右寄りになるように撃ちました。それを無意識のうちに判別して避けるだろうと仮定した上での行動です」
俺の質問にあっさりと答える。だが、それは自分の射撃が正確に決まり、俺がそれを見て左に避けることが前提の作戦だ。かなり難しいことだというのに、それをさらりと言うなんてな。
「この半年でそこそこの経験は積んだみたいだな。まあ、そうでなければ行かせた意味がないだ」
「ご期待に添えたようで嬉しいです」
「だが、まだまだだ。この程度で満足してるようでは、な」
「はい。わかっています」
「ならいい。この模擬戦でも何かを感じ取れ。そうすれば、お前はもっと強くなる」
「はい」
「……いい返事だ」
《エクスカリバー》を強く握り直す。遥香も《神祇》を握り締め、俺の攻撃に備える。さてと、これからが本番だな。

第百一話　模擬戦終了（前書き）

第百一話です

第百一話　模擬戦終了

「「《イカロスの翼》……展開」」
俺が《イカロスの翼》を展開するのと同時に遥香もまた、《イカロスの翼》を展開した。
「……やはり、お前も」
「はい。博士に取り付けていただきました」
これで機動力はほぼ互角。あとはそれぞれの技量の差だな。
「行くぞ」
「はい」
同時に突撃。そして、同時にそれぞれの得物で攻撃、《エクスカリバー》と《神祇》がぶつかり、火花を散らした。
遥香の動きは元々、俺の動きを真似たものだ。だが、この半年の間に俺はＩＳ学園で、遥香はアメリカ軍で別々に経験を積んだ。その違いがどうなるか。
「……ちっ！」
《神祇》の取っ手の部分が回転し、エネルギーブレードの連続攻撃が俺を襲う。なんとか距離を取るが、やっぱりあれは厄介だな。
近接攻撃、遠距離射撃の両方をすることができる《神祇》。そして鉄壁の防御力を誇る《護神》。どちらも扱いは難しいが、相性はいいし、どちらもかなり強力な武装だ。
《アヴァロン》を展開し、遥香に向けて撃つが、いつのまにか回収していた《護神》で防がれる。もう片方の手に《アトランティス》を展開して撃ち続けるが、四つの《護神》を打ち破ることができない。さすがは鉄壁の守護盾だな。だが――
「俺にばかり集中しては駄目だぞ。後ろががら空きだ」
「――っ！？」
遥香が慌てて後ろを見るがもう遅い。《護神》をこちらの防御に回したことで障害のなくなった《デュランダル》が遥香を後ろから

強襲した。
　しかも後ろに気を向けた隙に一気に接近、同時に《アヴァロン》の発射形態を？に変更。至近距離から《アヴァロン》と《アトランティス》の連射をまともにくらった遥香のシールドエネルギーは瞬く間に減っていき、遥香が何か手を打つ前に０になった。
「目の前にだけ意識を囚われるな。常に回りに注意し、不測の事態に対処できるようにしろ。いいな？」
「はい。今後、注意します」
「だが、全体的に見れば上出来だ。よくがんばったな。この半年、あっちでの経験はお前にとっていいものになったようで何よりだ」
「はい。ありがとうございます」
「ああ。これで模擬戦を終了とする。ご苦労だったな」
「ありがとうございました」
　今の遥香の実力は……だいたい、セシリアと同じくらいか、鈴音より少ししたあたりか。半年前は今の一夏や箒よりも弱かったはずだし、かなりの進歩だな。
　こいつは相手の動きや癖を読み取り、自分の力にすることができる。現にこいつは俺の動きを基に、ナータとイリスの戦い方を取り込み、自分の力にした。おそらく、ここで色々なやつと戦うことでこいつはもっと強くなる。こいつにはそんな潜在能力がある。
　このＩＳ学園でこいつがどこまで化けるか。これは楽しいことになりそうだな。

第百二話　部屋割り（前書き）

第百二話です

第百二話　部屋割り

「すごかったぜ二人とも」
模擬戦を終え、一夏たちがこっちに歩み寄ってくる。
「ありがとうございます。織斑一夏」
無表情で遥香が応える。素っ気無いな。まあ、昔からこんな感じだが。
「まあな。はっきり言えば、こいつはお前や箒よりも強いぞ。お前ももっとがんばれよ」
「おう！　今のを見てもっとやる気になったぜ」
「ならいいんだが。……そういえば、遥香。お前の部屋ってどこなんだ？」
模擬戦を終えたあと、遥香に尋ねる。遥香はそれに間髪入れずに答えてきた。
「わかりません。まだ伝えられていないので」
「まだ？　ああ、急な転校だったから、まだ決まってなかったのか。確か、寮の部屋は全部埋まってるはずだし――」
「天宮さーん！」
不意に聞きなれた声が聞こえた。今のは……山田先生だな。
「天宮さん、ここにいたんですか。探しましたよ……」
山田先生が息を切らしながら言う。その後ろには織斑先生がいる。
「あのですね、天宮さんの部屋割りについてなんですが……。あ、織斑くんと須藤くんも一緒でしたか。ちょうどよかったです」
ちょうどよかったとはいったいどういう意味なのだろうか？
「っていうか、何で織斑先生と山田先生が？　二組の担任が来るもんじゃ……」
「私は一年生寮の寮長だ。何か問題があるか？」
「あー、そうでしたね。それなら納得です」
忘れがちだったけど、確かにそれならおかしいどころか、適任だ

な。
「で、遥香の部屋はどこになったんですか？　寮は満室だったはずですけど」
「だから、お前には織斑の部屋に引っ越してもらう。そして空いた一人部屋を雨宮に割り振る。それが最善だろう」
それを聞いて、かすかに遥香の表情が暗くなった。俺以外にはおそらく気づくことができないであろうほどの些細な変化だが、俺は見逃さない。
「遥香。まさかお前……束さんに何か吹き込まれたな？」
「……」
こくん、と無言で小さく頷く遥香。まさかとは思ったが、当たっていたとは。
「ＩＳ学園に入れば俺と同室になれる……とかか？」
「……はい」
「あの人は……。しょうがない。織斑先生。一人部屋に俺と遥香で住みます。それで駄目でしょうか？」
「駄目に決まっているだろう。男女が同室など、認められん」
瞬時に拒否される。まあそうだろうな。予想の上だ。だが――
「しかし、以前は一夏と箒をそちらの都合で同室にさせましたよね？　それに俺と遥香は家族です。家族が一緒の部屋に住むのに何か問題があるでしょうか？」
「しかしだな……」
「それに転校してきたばかりで不安な少女を一人でいさせるつもりですか？　問題は起こしませんから、お願いします」
「……好きにしろ」
ついに織斑先生は折れ、了承してくれた。遥香の表情がわずかに明るくなった。俺以外は気づいていないけどな。
「ありがとうございます。よかったな、遥香」
「はい」
返事をする声もわずかに弾んでいる。そんなに一人じゃないのが

よかったか。
「よし、じゃあ着替えたら合流して部屋に行くぞ。そのあとに夕食だ」
「はい」
「では、山田先生、織斑先生、失礼します」
「は、はい。さようなら」
「くれぐれも問題だけは起こすなよ。問題を起こした場合は……わかってるな？」
「わかってますよ」
それだけ言ってアリーナをあとにする。遥香は着替えるの早いからな。俺もとっとと着替えてしまわないと。

第百三話　俺たちの部屋（前書き）

第百三話です

第百三話　俺たちの部屋

「さてと。遥香、ここが今日からお前の部屋だ。少し狭いかもしれんが大丈夫だな？」
「はい、問題ありません」
遥香と合流して、現在俺の自室。いや、今日からは俺と遥香の部屋か。一人で住むには広いが、さすがに二人となると少し狭いかもな。
「まずベッドだが、もともと一人部屋だから一つしかない。ベッドはお前が使え」
「ですが、明弘様は――」
「ここでは様をつけるな。っと、今は俺たちだけだからいいか。女子を差し置いてベッドを使うわけにもいかないだろう。それとも俺がその程度で体調を崩すとでも思っているのか？」
「そんなわけありません。ですが、明弘様を差し置いて……」
「別にかまわないさ。いいからベッドはお前が使え。いいな？」
「……はい」
三度目でやっと承諾してくれた。いつもはすぐに承諾してくれるのに、こういうときは何回も言わないとだめなんだよな。
コンコン。
「おーい、明弘ー。いるかー？」
不意に部屋のドアがノックされ、一夏の声が聞こえてくる。なんだろうか？
「なんだ、一夏」
「一緒に飯食いに行こうぜ。遥香の歓迎会も兼ねてさ」
「飯か。いいぜ。遥香もいいな？」
「はい」
俺が尋ねると瞬時に返答が返ってくる。
「じゃあ先に行っててくれ。俺たちもすぐ行くから」

「おう」
一夏はそれだけ応えると食堂の方に歩いていった。歓迎会って言うくらいだからかなりの人数が集まってるかもな。これは、待たせるわけにはいかないな。
「よし、俺たちも行くか」
「食堂ですか？」
「いや、その前に行きたいところがある。行くぞ」
「はい」

ところ変わって簪の部屋の前。ドアをノックすると少し間を置いて簪が出てきた。
「……明弘。どうしたの？」
「一緒に飯食いにいかないか、と思ってな。ちょうどいまから歓迎会やるらしいし」
「……歓迎会？」
「ああ、まだ簪には紹介してなかったな。俺の家族の遥香だ。今日から二組に転校してきた」
「よろしくお願いします」
「……よろしく……」
遥香と簪が挨拶をする。そういえばこの二人って何か似てる気がするな。おとなしい雰囲気とか。
「で、どうだ？　遥香と仲良くなってもらいたいし、一緒に飯食い行かないか？」
「……ごめん。もう食べた後だから」
あ、もう食い終わってたか。それなら仕方がないな。夜に二食食うなんて恐ろしすぎる。
「そうか。すまなかったな、誘ったりして」
「そんなこと……ない。……また誘って」

「了解。じゃあ、すまなかったな。おやすみ」
「では、おやすみなさい」
「……おやすみ」
簪の部屋を後にする。もっと早い段階でわかってればよかったな。一夏も、もっと早く言えよ。まあ、決まったのがついさっきだろうけど。
「明弘様」
「ここでは様をつけるな。で、なんだ？」
「今の方は、どちらさまでしょうか？」
「ああ。更識簪。日本の代表候補生だ。四組だからあんまり接点はないかもしれないけどな」
「もしや、お付き合いなされているのですか？」
「そんな馬鹿な。あいつは俺のことなんか眼中にねえよ。ほら、さっさと行くぞ」
「はい」
そんな会話をしながらちょっと急いで食堂に向かう。ほかの皆を待たせるわけにもいかないからな。
「……鈍感ですね」
途中、遥香が何か言ったようだったが、よく聞こえなかったので、気にしないことにした。

第百四話　歓迎会（前書き）

第百四話です

第百四話　歓迎会

「それでは、これから天宮遥香ちゃん歓迎パーティーをはじめまーす！！」
「「「いえーーー！！！」」」
一組の谷本の宣言に、その場にいたほぼ全員が元気よく返す。というか、なんで二組の遥香の歓迎会なのに、一組のメンバーが多数いるのだろうか。
「明弘様。この方々はなぜこんなに元気なのでしょうか？」
「様はつけるな。まあ、女子の考えはよくわからんが、ただ騒ぎたいだけなんじゃないか？」
女子が騒いでいるのを眺めていた遥香の質問に返しながら、俺もその様子を眺める。
「まあ、これからお前のクラスメイト、それか合同演習のときに一緒になるやつらだ。仲良くしておけよ」
「わかりました」
そんな会話をしていると、一夏たちいつものメンバー六人がこっちに来た。
「おう、楽しんでるか？」
「どう楽しめって言うんだよ。こんな女子が騒ぐためだけみたいな歓迎会で」
「まあな」
一夏からジュースを貰いながら、そんなことを話す。一応社交辞令のようなものか。俺の返事は社交辞令じゃないけど。
「それよりも、主役である天宮がこんな端にいていいのか？」
「遥香は人付きが苦手だからな。勘弁してやってくれ、箒」
「そうなのか？　しかし、クラスメイトとぐらいは仲良くなっておいたほうがいいのではないか？」
「確かになぁ。……よし、遥香。大勢とは言わないから何人かと挨

拶を交わして、できるだけ多くのやつの名前と顔を覚えて来い」
「わかりました。明弘様」
遥香は俺の命令に返事をし、女子たちの方へ歩いていった。それを俺は少し満足そうに見ていたが、何か視線を感じるので振り返る。そこには驚いた表情の一夏たちがいた。
「どうした？」
「い、いや……。明弘様って……」
「ああ、あれは遥香が勝手に呼んでいるだけだ。俺は何度もやめろと言っているんだがな」
俺の命令には大概のことは聞くのに、なぜかこれだけは何度言ってもやめようとはしない。なぜだろうか。
「まあ、気にするな。たぶんあいつのクセみたいなもんだろうし」
「そういうものなの？」
「詳しくは知らないがな。それよりも俺は少し席を外すぞ。外の空気を吸ってくる。遥香が戻ってきたら適当に相手をしててくれ」
それだけ告げて俺はその場を離れていく。女子たちから少し離れているとはいえ、少し静かなところに行きたくなる。

「ふぅ。いい風だな……」
外に出てみると、少し涼しげな風が肌をなでる。冷たすぎず、さっきまでの熱気で火照った体を覚ますのにちょうどいい風だった。
「本当に気持ちいい風だね～」
「やっぱりそう思うか、のほほんさん」
振り返ると、そこには袖の余った制服を着たのほほんさんがのんびりと立っていた。
「あれ～？　気づいてたの～？」
「まあな」
「遥香ちゃんだったっけ？　あの子」

「ああ」
「じゃあ、ハルちゃんだ～」
意外と普通なネーミングだな。俺や一夏のときみたいなあだ名になるかと思ったが。
「ハルちゃんって束さんと同じあだ名だな」
「そうなの～？」
「ああ。別にそれでもいいけどな」
「じゃあ、これにする～」
そんな話から始まり他愛もないことをいくつか話す。そうしていると、いつのまにか体が冷えてきてしまった。夏とはいえ、体を冷やすのはよろしくない。特に女子は。
会話を切り上げ、のほほんさんとともに食堂に戻ると、もう歓迎会は終わりに近づいていたようで、そのまま会は終了した。

歓迎会を終え、俺たちは再び自室に戻ってきた。そして、シャワーも浴びて、もう寝るだけの状態で遥香と少し話す。
「今日はどうだった？」
「明弘様と再会できましたし、何人かの方と知り合いになれました。とてもいい一日でした」
「そうか。じゃあ、もう寝るか。明日も学校はあるからな」
「わかりました」
「おやすみ」
「おやすみなさいませ」
そのまま部屋の電気を消して寝る。俺はベッドがないから適当に毛布をかぶって床で寝ているが。
とりあえず、そんなこんなで遥香の転校初日は慌しくも充実した一日となった。

第百五話　生まれながらの才能（前書き）

第百五話です

第百五話　生まれながらの才能

遥香が転校してきた翌日の放課後、俺と遥香は一夏たちとともにアリーナに来ていた。なんでも遥香と手合わせしてみたいらしい。
「じゃあ、まずはセシリアとやってみるか。実力的にも同じくらいだろうし」
「まあ、それが妥当ね。あたしは今日実習で手合わせしたけど、セシリアと互角ぐらいだったわ」
俺の提案に鈴音が賛同する。他のメンバーも納得してくれたようで、早速遥香とセシリアの模擬戦が開始された。
「セシリアと遥香か。どっちが勝つんだろうな」
「実力的には五分五分。相性としては、遥香の方がやや有利か」
「なんでだ？」
「セシリアのブルー・ティアーズは神楽相手だと不利なんだ。《ブルー・ティアーズ》が《護神》で防がれるからな」
「《護神》って、あのシールドのことか？」
「ああ」
視線の先でセシリアが《ブルー・ティアーズ》で四方向から射撃をするが、案の定、遥香は《護神》を操ってそれを簡単に防ぐ。これでセシリアは主力の《ブルー・ティアーズ》を封じられたも同然だ。
しかも遥香は《イカロスの翼》で機動力も上がっている。これはかなり厳しいぞ。
「それに長期戦になれば、セシリアはもっと不利になる」
「エネルギー切れになるから？」
「シャルロットの考えは正しいが、それ以上の要因がある。遥香は戦う、それか見ることで相手の戦い方やクセとかを見極めてしまうんだよ。下手をすると、相手の動きをコピーしてしまう」
「コピー？」

「言葉通りの意味だ。相手の動きをコピーして再現することが出来る。現にあいつは俺の動きをコピーしている」
「確かに、よく見ると明弘の動きに似ているように見えるが……。本当なのか？」
ラウラが遥香の動きを見ながら言う。まあ、普通こんなのすぐに信じられるわけないが。
「本当だ。シャルロットの『高速切替』と同じような、遥香だからこそできる高等技術――いや、技術なんてレベルじゃない。あれは遥香が生まれながらにしてもっている才能だ。俺はそれを『複写（コピー）』と呼んでいるがな」
「『複写』、か。凄そうだな……」
「まあ、そんなすぐにできるわけでもないけどな。『複写』をするのはそれなりの時間がかかる。が、それでも長期戦は禁物だな」
すぐに『複写』ができないにいても、長期戦になればセシリアが不利になるの変わりない。やるのなら短期決戦だが、《ブルー・ティアーズ》を封じられている状況では難しいか。
セシリアは《スターライトｍｋ？》で応戦するが、やはり主力である《ブルー・ティアーズ》が封じられている状態では手数、火力ともに不足している。昨日俺がやったように遥香の注意を自分に集中させれば、背後からの強襲ができるが、《スターライトｍｋ？》だけではけん制するのがやっとだ。
遥香に距離を詰められ、《インターセプター》を展開する前にエネルギーブレードの斬撃をまともにくらったセシリアは地面に落下し、そのままシールドエネルギーが０になった。
「遥香、シールドエネルギーの残量はどれくらいだ？」
「６２です」
「そうか。《護神》を《ブルー・ティアーズ》に当てていたからとはいえ、もうすこしダメージを軽減できるようにしろ」
「はい」
「……で、セシリアの動きはどうだった？」

「なかなかなものですね。遠距離射撃型としての基本的な能力だけでなく、ある程度の応用もできているようです。あとは、第三世代兵器の精度をあげればより強くなると思います」

思ったことを率直に述べる遥香。だが、その意見は的を射ているので何も言わない。

「お強いのですね、遥香さん」

「ありがとうございます。セシリア・オルコット」

セシリアと遥香が今の模擬戦について話を始める。ほとんど同じ実力の相手だからこそ、気軽にお互いの反省点を言い合えるのだろう。

これがいい刺激になって、遥香が苦手な人付き合いも改善されればいいんだがな。

第百六話　疲れる買い物（前書き）

第百六話です

第百六話　疲れる買い物

「さて、行くか」
「はい」
今日は遥香が転校してきてから初めての休日。というわけで、俺と遥香は買い物のためにレゾナンスに向かっていた。主に俺が寝るための簡易ベッドとか。
「一夏もくればよかったのになぁ。……荷物持ちとして」
「しかたがありません。特訓をするということですので」
「お前の戦いぶりを見てから、あいつやる気上がったしな。それはいいことだ」
一夏だけじゃない。他のメンバー――特に箒とセシリア、鈴音もやる気を出して訓練に励んでいる。シャルロットとラウラもそれに加わって訓練らしい。
「俺たちも買い物が終わったら訓練するか。俺たちももっともっと強くならないといけないしな」
「はい。お願いします」
「じゃあ、とっとと買い物を済ませてしまうか」
「はい」
レゾナンスに到着。とりあえず、簡易ベッドを買って、寮に送っておいてもらおうか。そのあとに細々とした雑貨を買い揃えればいいだろう。

「って、簡易ベッドもいろいろあるもんだな。どれがいいのかさっぱりわからん」
「そうですね。簡易ベッドはどれも同じだと思っていましたが、こうもいろいろあると悩みますね」

多数の簡易ベッドを前に、俺たちは立ち尽くしていた。種類が多すぎて、どれがよくて、どれが悪いのかさっぱりわからん。前もって調べておけばよかったな。

「お客様、簡易ベッドをお探しですか？」

どうしようもなくなっていた俺たちのところに店員がやってきた。ちょうどいい。こういうときは詳しい人に聞いた方がいいだろうな。

「どれがいいのかわからなくて。お勧めとかありますか？」

「はい。どちらの方がお使いになるのでしょうか？」

「俺です」

「それでしたら、こちらのはいかがでしょうか？　男性の方でも余裕もありますし、折りたためばコンパクトになって収納も簡単です」

そう言って実際に折り畳んでみせる。おお、結構小さくなるもんだな。これなら邪魔にならないだろう。

「確かにこれならコンパクトでいいですね。値段も手ごろだし。これにします」

「お買い上げありがとうございます。宅配サービスはご利用なさいますか？」

「お願いします」

「では、こちらにどうぞ」

そのまま流れるように会計を終わらせ、店員が一枚の紙を取り出す。これに住所を書けばいいのか。

「……っと。これでいいですか？」

「はい。えっと、ＩＳ学園の一年生寮――ＩＳ学園！？」

「どうしました？」

「い、いえ、ＩＳ学園の生徒さんでしたか。……あれ？　でもＩＳ学園って女の方しか――」

「俺は例外ですよ。須藤明弘って氏名にも書いたんですが」

「す、須藤明弘さん！？　も、申し訳ございません！」

「いや、謝ることないですよ。俺は別にＩＳを動かせるわけではないですし」

そんなに驚くことか？　俺自身はそうすごい人間じゃないんだがな。一夏のようにＩＳを動かせるわけじゃないんだし。

「は、はい。では今日の夕方か明日にはお届けします。必ずに！」

「い、いや、急がなくてもいいですから。お願いします」

「はい！　お買い上げありがとうございました！」

店員の大きな声に押されるように俺たちは店をあとにした。なんか他の客の視線が集まって居心地悪かったし。遥香なんて終始俺の背後に隠れてたしな。

「ふぅ。最初の店でこんなに疲れるとは思わなかったが、まあいいか。次は、お前の服でも見に行くか」

「はい」

遥香の声も若干疲れているように聞こえる。表情も微妙に硬いし。遥香にはキツかったか。

まあ、今回は水着を買いに来たときみたいに一夏がらみの面倒ごとは起こらないだろうし。これからはもっとのんびりと買い物が出来るだろう。面倒ごとはもうごめんだからな。

第百七話　突然の闖入者（前書き）

第百七話です

第百七話　突然の闖入者

「そういえばまだ朝飯食ってなかったな。遅い朝食――いや、時間的には早い昼食でもとるか」
「はい。それでは、そこのオープンカフェはどうでしょうか？」
「そうだな。行くか」
「はい」
昼食をとるために近くのカフェに入る。結構いい店だな。
「ご注文はお決まりでしょうか？」
「ナポリタンを一つ。遥香は？」
「私もナポリタンで」
「ナポリタンをお二つですね。かしこまりました」
注文を終え、ナポリタンが出来上がるのを待つ。普通なら俺も遥香も一人前なんて食いきれないが、朝飯を抜いてきたから大丈夫だろう。
「――じゃあ、この後は雑貨屋、服屋という順番で行くか。済んだらＩＳ学園に戻って訓練だ」
「はい」
「お待たせいたしました。ナポリタンです」
これからの予定を話し合っていたら、店員がナポリタンを持ってきた。早いな。
「よし、早速食うか。……いただきます」
「いただきます」
会話を中断し、食事に集中する。やっぱり少し多いが、なんとかいけそうだ。
「……」
「……」
無言でナポリタンを食べ続ける。遥香は食事中は全くといっていいほど喋らない。俺が話しかければ応えてくるが、食事中なので俺

も話しかけない。

「ありがうございました」

ナポリタンを食べ終え、会計も終えてカフェをあとにする。量はキツかったが、味はよかったな。これからは外食はここにするか。

「さて、と。腹も膨れたし、次は雑貨屋に行く――」

「おお、楽しそうだな」

「よかったら私たちもご一緒させてもらえないかしら？」

「「っ！？」」

不意にかけられた声に対して、俺と遥香は反射的に振り返って身構える。この声、忘れるはずがない。この声は――

「おいおい、そんなに身構えるなよ。ここでやりあうつもりはないって」

「そうよ。今回は少し話がしたくて来たの」

「何がやりあうつもりはないだ。前は問答無用で襲ってきた奴らが。話ってのもロクなもんじゃないんだろ」

「今回は本当にやりあうつもりはないって。お前次第だけどな」

声の主――グレルとフェルはそう言って不敵に微笑んだ。

第百八話　忠義（前書き）

第百八話です

第百八話　忠義

「お前たちの話なんて誰が聞くか。こっちは聞きたいことだらけだがな」
「あら、何が聞きたいの？」
「俺の過去、それに俺とお前たちの関係だ」
「わたしたちの話を聞いてくれたら、考えてあげる」
こいつら、俺のことを試してるのか、それとも馬鹿にしてるのか。
どうせ話というのも、ロクなもんじゃないんだろう。
「……さっき、『俺次第』とか言ってたが、どういう意味だ」
「そのままの意味だよ。俺たちの言う通りにすれば別に何もしない。ただ――」
「言う通りにしない場合は、お前の大事な仲間が大変なことになるかもな」
「……どういうことだ」
「今、ＩＳ学園にトランスペアレントが向かっている。数は、九機」
「なっ！？」
トランスペアレント。あれの強さはまだ記憶に新しい。三機で俺以外の一年の専用機持ちを足止めすることが出来るらしい実力。そんな代物がよりによって九機も。
一夏たちで三機抑えたとしても、残り六機。専用機持ちは二年に二人、三年に一人いたはずだ。その二年の片方はあの生徒会長。実力はかなりのものだが、それでも六機はキツすぎるだろう。教師たちを含めても難しいはずだ。
「あなたが私たちの話を聞くのなら、トランスペアレントを止めてあげる。でも、もし聞かないのなら二十分後にはＩＳ学園に強襲をかけるわ」

「……」

くそっ、どうする……？　トランスペアレントは初見の相手には面倒な相手。一夏たちだけでは危険だ。ＩＳ学園に戻るか？　しかし、二十分以内につけるかどうか……。それにここでこいつらを放っておいたらおそらくこいつらもＩＳ学園を襲う。どうすれば――

「明弘様。ここは私に任せて、あなたは学園に向かってください」

突然、今まで沈黙を保っていた遥香がそんな提案をしてきた。いきなりのことで一瞬言葉を失ったが、なんとか口を開く。

「駄目だ。こいつらは強い。お前だけじゃ勝てるわけが――」

「しかし、ここで迷うというのが最悪の選択肢です。迷いは判断を誤らせ、決断を鈍らせます」

珍しく遥香が俺の言葉を遮る。だが、遥香の言う通りだ。迷う時間はない。ここは遥香の提案が最善の手か。

「……わかった。ここは任せる。これは命令だ」

「了解しました。お任せください」

「……無事に戻って来い。……これも命令だからな」

「はい」

遥香の表情がわずかに明るくなる。この様子なら大丈夫か。

「頼んだぞ！」

俺は遥香にそれだけ告げて、その場を全速力で駆け出した。

「へぇ、愛しの彼氏のためにそこまでやるかー。さすがだな」

「何を言っているのですか？　そんな無粋な関係ではないですよ」

グレルの茶化すような言葉に、遥香は訂正を入れる。いつもは人付き合いが苦手で少しオドオドとしている彼女とは思えないほど、堂々としたものだった。

「私の明弘様への想いは、愛や恋なんてものよりも、純粋で誠実な、一片の曇りも穢れもない純然たる『忠義』です」

「忠義……。やっぱりね。でも、なぜ須藤明弘に従うのかしら？今の彼は『彼』ではないというのに」

「確かに今の明弘様は『あの方』ではありません。でも、だからなんだというのですか？」

真っ直ぐとグレルたちを見据えて、遥香ははっきりと言い切る。

「今の明弘様は『あの方』ではありませんが、明弘様は『あの方』です。遥香という名前も明弘様にいただいた忠義の名前です。私の主は明弘様と『あの方』の一人だけ。……彼女も入れると二人ですが」

「……あっそ。だが、どうする気だ？　技術者が一人で俺たちを止められるとでも思ってるのか？」

「今の私は技術者ではなく、明弘様の手足です。……確かに、私の実力では勝てないでしょう。しかし、明弘様は私に『任せる』、『頼んだぞ』と言いました。だから私はあなたたちを止める。勝てるかどうかは関係ない。それが明弘様の望みなら」

「……命を懸けてでも私たちを足止めすると。そういうこと？」

「違いますよ。明弘様は『無事に戻って来い』とも言いました。私は無事にあなたたちを足止めし、無事に明弘様の下へと戻ります」

遥香は当たり前のようにそれを口にし、二人を見据える視線を鋭くした。

「さあ、行きたければ私を抜いていきなさい？」

第百九話　緊急事態（前書き）

第百九話

第百九話　緊急事態

「一夏！　一夏、聞こえるか！」
『……ん？　明弘か？』
「そっちに敵が向かっている！　数は九。十五分ほどでそっちに到着するらしい。急いで織斑先生に連絡してくれ！」
『何言ってんだよ。レーダーにそんな反応ないぞ。何かの間違いじゃ――』
「ああ！　もういい！」
通信を切断。やはりレーダーの類には映っていないか。くそ、あのステルス能力、強襲にはもってこいの力だな。
強襲まであと十五分――いや、もう十三分を切っているか。ＩＳ学園は海に囲まれていて、モノレールなどを使わないと渡れない。が、そんなのを悠長に待っていたら間に合わない。
幸い、人通りの少ないところに来たから回りに人影はなし。指定区域以外でのＩＳの使用は校則違反になるが、緊急事態だ。神王を使って飛んでいくしかない。もともと神王はＩＳじゃないし。
走り続けながら神王を展開。同時に《イカロスの翼》も起動させる。
「行くぞ、神王」
俺の言葉に反応するかのように神王のスラスターから一気にエネルギーが放出され、一瞬で高速状態に。さらに《イカロスの翼》の加速も加わって速度も跳ね上がる。
他の皆に言っても誰も信じてはくれないだろう。こうなったら俺一人でなんとかするしかない。この前七機を相手に惨敗したが、それしか方法はない。
「頼む……間に合ってくれ……」

「なんだ？　あいつ……」
「一夏！　訓練中だぞ。何をしている！」
いきなりの明弘からの通信。しかもそれがほぼ一方的に切断され、怪訝そうにしていた一夏に箒の怒号が飛ぶ。
「いや、明弘から通信が来てさ。敵がこっちに向かってるとかなんとか」
「敵？　そんなはずないだろう。現に、レーダーにはそんな反応はない」
「だよなぁ。やっぱりあいつの勘違いか」
「どうかしたのか？」
二人が訓練を中断したのに気づいてラウラが声をかける。他の三人も同様に一夏たちのところへ集まってきた。
「明弘から、敵がこっちに向かってるとかいう通信が入ったんだけど、レーダーにはそんな反応ないんだよ。皆のも反応ないだろ？　だから明弘が勘違いしたんじゃないかって」
「確かに、それらしい反応はありませんわね」
「ねえ、明弘の様子はどうだった？　嘘を言ってるように聞こえた？」
「いや、あいつでもそんな冗談は言わないだろうし、本気で言ってるように聞こえたな。だから勘違いじゃないかって」
一夏の答えを聞いて鈴音は少し考える仕草をしたあと、体をセシリアの方に向けた。
「セシリア、シャルロット、ラウラ。アンタたち、あのときのＩＳ覚えてる？」
「あのとき……先週の福音事件のときのか？」
「？　何の話だ？」
ラウラの言葉にセシリアとシャルロットが「それか」という表情を見せる。しかし話についていけず、箒が問いかける。
「箒さんと一夏さんは知らなくても仕方がありませんわ。ちょうど

お二人が福音と戦っているときの話ですから」
「それなら知らなくて当然か。で、そのＩＳって？」
「あのね、レーダーに反応しないＩＳなんだ。この前は急にレーダーに映るようになったんだけど……」
「もしあのＩＳだったとしたら、まずいな。明弘は他に何か言っていたか？」
「えっと……数が九、十五分くらいで到着するとか……」
一夏がなんとか明弘の報告を思い出す。数分前の出来事だが、それほどまともに聞いていなかったせいで思い出すのに、若干時間がかかる。ラウラはそれを聞いて、血相を変えた。
「十五分だと！？　もう時間がないぞ。急いで教官のところへ報告に行くぞ」
「わかりましたわ」
「わかった」
「うん」
ラウラの言葉にセシリア、鈴音、シャルロットがすぐさま返事をしてアリーナを飛び出す。一夏と箒も何がなんだかわからなかったが、四人のあとを追い、アリーナを走って出て行った。

第百十話　出撃命令――到着（前書き）

第百十話です

第百十話　出撃命令――到着

「教官、今すぐ出撃命令を。このままでは大打撃を受けます！」
「いきなり来て何を言い出すのかと思えば。須藤の言葉だけで出撃命令が出せるか」
「ですが、もし本当なら――」
「お前たちが須藤のことを信頼しているのはわかる。しかしこちらも好き勝手にやれるわけではない。そんな不確定要素の多い情報だけでは命令は出せない」
　ラウラが千冬に食らいつくが、当の千冬はいつもの表情でそれを冷たくあしらうが、それでもラウラは退かない。千冬はラウラを納得させようとレーダーで監視している真耶に声をかける。
「山田先生、レーダーに反応は？」
「今のところありませんね。やはり須藤くんの勘違いではないでしょうか」
「ということだ。レーダーに反応がない以上、出撃命令を出すことはできん」
　わかったら早く退室しろ、という千冬にラウラはまだ食らいつく。さらに後ろにいたセシリア、鈴音、シャルロットも加わった。
「織斑先生もご存知のはずです！　臨海学校のときのことを」
「あのときいきなりレーダーに出た反応。もしあれと同じものならレーダーに移らなくても不思議じゃないです」
「お願いします、織斑先生。あの明弘が取り乱すくらいです。きっと本当に何か来てるはずなんです」
「……わかったから静かにしろ。山田先生、モニターでのチェックを」
「は、はい」
　真耶は千冬の指示を聞いて慌ててモニターの映像を映し出し、チェックを始める。

「もしこれで何もなかったときは、お前たち――」
「おおお、織斑先生！」
「……なんだ？」
「しょ、所属不明のＩＳが三方向からこちらに向かっています！　そ、その数は合計九機です！」
「なんだと？」
「三機ずつ三つに分かれて同時攻撃を仕掛けるみたいです！　ど、ど、ど、どうしましょう」
「落ち着け。現在戦闘可能な専用機持ちと訓練機の数は？」
「専用機持ちは一年生はここにいる六人、二年生が二人、三年生が一人。訓練機は……半数近くを生徒に貸し出しているので六機が限界です」
千冬は思わず舌打ちをする。自分の考えが外れていたからではない。迎撃に出せるＩＳの数が予想以上に少なかったからだ。しかし、すぐに表情を引き締め、指示を出す。
「一方にはここにいる一年生六人、一方には二、三年生の三人、一方には訓練機を五機当てる。訓練機一機は待機。状況に応じて投入する。一般生徒は寮に戻るように。放送を頼む」
「は、はいっ！」
「さて……織斑、篠ノ之、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィッヒ。お前たちは今の指示のとおり一方の迎撃を担当してもらう。復員事件のときとは違い、相手は三機、詳細なスペックデータもない状況だがやれるな？」
「「「「「「はい！」」」」」」
「先ほどの言葉を撤回しよう。……任せたぞ」
千冬からの予想外の言葉に一夏たちは驚くが、急いで迎撃のために走り去っていった。それを見届けた後に千冬は小さく息を吐く。
「まさか本当に敵が来ていたとはな」
「でもなんで須藤くんはそれを知っていたのでしょうか？」
レーダーで感知できない機体の強襲。それをなぜ明弘は知ること

ができたのか。その場に居合わせなかった二人が知れるはずもなく。疑問に思うのも至極当然のことだろう。

「とりあえず、今は敵の迎撃が先だ。それが終わったら須藤本人に聞けばいい。山田先生、状況が変わり次第、至急報告を」

「わ、わかりました！」

「攻撃開始まであと二分。レイベは間に合うのかしら？」

さきほどから一歩も動かず、遥香と対峙していたフェルが呟く。遥香はそれに反応して言い返す。

「レイベ様ではなく明弘様です。何を言っているのですか」

「あら、あれだけご執心だった名前もわからなくなったの？　須藤明弘をレイベと呼ぶのはおかしいのかしら」

「おかしいですね。今の明弘様はレイベ様ではなく明弘様です。たとえ器が同じでも中身が戻っていない限り明弘様はレイベ様ではなく須藤明弘様です」

「おかしいのはそっちじゃねえか？　レイベはレイベで――」

「グレル、待ちなさい。訂正するわ。須藤明弘は間に合うのかしら？」

グレルが突っかかろうとするのを止め、フェルが少し皮肉混じりに言う。遥香はそれに小さくため息をついて再び口を開いた。

「それもおかしいですね。あなたたちはさっきの明弘様の言葉を聞いてなかったのですか？」

「……どういうこと？」

「まだわからないのですか？　やはりあなたたちは明弘様のことを何もわかっていない。明弘様だけじゃない、レイベ様のことも」

「なんだと？」

「さっき明弘様は『ここは任せる』と言いました。それは私にこの場を任せるということだけではなく――」

遥香はそこまで言って小さく、それでも不敵な笑みを浮かべて続けた。

「『ＩＳ学園の方は任せろ』。そういう意味も含んだ言葉なんですよ」

ＩＳ学園に向かうトランスペアレント。三つに分けられた小隊の一つ、ちょうどＩＳ学園の真正面を攻撃する予定の三機が今まさに両肩のレーザーカノンと大型実弾中をＩＳ学園に向けて発射しようとしていた。

それぞれに弾を充填し、発射――

その前に中央のトランスペアレントが背後からの射撃を受けて爆散し、その余波を受けた両端の二機の標準が逸れ、それぞれ上空と下の海に発射された。

「……なんとか、間に合ったか」

右手に《アルカディア》を構え、小さく呟くとすぐさまプライベート・チャンネルを開き、通信をする。

「遥香、もういい。戻って来い。こっちは間に合ったからな」

紫の機体を身にまとった、須藤明弘の姿がそこにはあった。

第百十一話　賭け（前書き）

第百十一話です

第百十一話　賭け

『……はい、了解しました。至急合流します』
明弘からのプライベート・チャンネルの通信に返答し、グレルとフェルに視線を向け直す。
「明弘様がＩＳ学園に到着しました。そちらの言った二十分よりも早く、さらに一機撃墜した模様です」
「まさか……間に合うなんてね。驚いたわ」
「これであなたたちを足止めするという使命は終了。どこへなりとも行って構いませんが、明弘様の邪魔をするなら全力でお相手します」
明弘様に止められなければの話ですが、と言い残してその場を去っていく遥香を見届けながらグレルとフェルは、息を大きく吐く。
「はぁ、やって行ったか」
「二十分近く微動だにもせずに睨まれ続けるのは結構堪えるわね」
グレルはだるそうに肩をもみ、フェルは目を閉じながら再度息を吐く。
「どうする？　俺たちもＩＳ学園に向かうか？」
「一応行ってみましょうか。あくまで様子を見に、ね。トランスペアレントは行動を続行させるわ」
「オーケー。じゃ、早速行くか」
「ええ」
そんな会話をしながら、ゆったりとした足取りで二人はその場をあとにした。

「さてと、残り二機。やっぱり三機ずつに分けて一斉に攻撃するつもりだったか」

しかし、他のところから攻撃されたような気配はない。おそらくここを最初に攻撃して、意識をここに集めてから他二ヶ所から攻撃するつもりだったんだろう。時間差での強襲か。手が込んでるな。

「とはいっても、もう他のところの攻撃も始まるだろうな。ここを終わらせた後じゃどう考えても後手に回るか。さて、どうしようか」

遥香がここに着くにも二十分ぐらいはかかる。それにグレルとフェルがここに来る可能性も考えると、早く何とかしないと。

「明弘っ！」

おっと、一夏たちか。なぜかは知らんが、ちゃんと来てくれたみたいだな。おそらく他の二ヶ所にも誰かを送り込んでいるんだろう。

「遅いぞ。せっかく連絡してやったのに」

「悪かったよ」

「悪いと思ってるなら早く手伝え、っての」

二機のトランスペアレントを相手にしながら一夏と会話をする。でもこれ結構つらい。一機なら視認できるが複数になった途端に戦いづらくなる。この妨害電波をどうにかできればなぁ。

「それにしても、なんなんだよこいつら。レーダーとかに全然反応しないなんてさ」

「妨害電波の仕業らしいが俺にも詳しくは知らん。だが面倒なのには事実だ。どうにかしてそれを何とかできれば……」

だがどうやって？　妨害電波を止める方法なんて知るわけがない。それに方法がわかったところでそう簡単にできるわけが――

『あるよ。簡単に止める方法』

「っ！？　誰だ！」

いきなり頭に響いた声に、反射的に大きな声を出してしまう。

「どうした？　いきなり大声なんて出して」

「……いや、なんでもない」

一夏たちには聞こえていないのか。そうなるとプライベート・チャンネル？　いや、今の声は俺の頭に直接響いてきたような……。

しかも今の声、聞き覚えがある。

……まさか、ネルマか？
『せいか～い。あ、声は出す必要ないよ。心で思えばわたしには通じるから』
『……わかった。それよりも今言った方法って何だ？』
『簡単なことだよ。――無限回奏。あれを歌うだけ。どう？　簡単でしょ』
『……本当だな？』
『キミに嘘はつかないよ。薄々はわかってるでしょ？』
……確かに、こいつは嘘をつくようなやつではない。なぜかは知らないが、そう確信できる。
『しょうがない。これしか方法はないし、やってみるか』
『がんばって。全てのトランスペアレント（子供たち）に聞こえるようにしっかりとね』
それっきりネルマの声が聞こえなくなる。だが十分だ。必要な情報は手に入った。だが、全てのトランスペアレントに聞こえるように、となるとやはり――ＩＳ学園の真上か。
「一夏！　頼みがある！」
「なんだ、よっ！」
初めての相手に少々苦戦しながら、一夏が返事を返してくる。
「少しの間、こいつらの相手をしてくれ！　もしかしたらこいつらをレーダーで感知できるようになるかもしれない！」
「本当かっ！？　頼む！」
「まかせろ！」
妨害電波を止めるにはこれしか可能性はない。そんな小さな可能性に賭けて、この場を一夏たちに任せ、俺は一気にＩＳ学園の上へと向かった。

第百十二話　反撃（前書き）

第百十二話です

第百十二話　反撃

「……ここでいいか」
あの場を一夏たちに任せてから数分、ＩＳ学園のちょうど真上にたどり着いた。あとは無限回奏を歌えば、トランスペアレントの妨害電波を解除することができるはずだ。
実を言えば、俺にはあのときの記憶が鮮明に思い出せない。ちょうど意識を失うあたりだったから当たり前かも知れないが。

――それでも、不思議と不安はなかった。
失敗するはずがない。なぜだかそう思える。
できる。そう確信できる『何か』が俺をただ突き動かす。

『無限回奏　第一旋律』

――黄昏と黎明の集う場所で――
――約束の歌をあなたと歌う――

「ったく、面倒だなー」
「そうッスねー」
一夏たちとは別のところでトランスペアレントと戦っていた二年と三年の専用機持ち、フォルテ・サファイアとダリル・ケイシーが三機のうち二機を相手にしているが大して動じた様子もなく暢気の会話を交わす。少し離れたところで楯無が一機を相手にしている。
「こいつら何なんだよ。反応がないとかめんどくせーな」

「見たことない機体ッスねー。そういえば、さっき誰かが学園の方に向かったみたいッスけど」
「方向からして一年だな。どうせ、怖気づいたか負傷したかだろ」
「確かに面倒な相手ッスけど、そこまで強いとは思えないッスよねー」
「まったくだ。こんなのに苦戦するようじゃまだまだだよなー」
トランスペアレントの攻撃をものともせずに会話を続ける。そんな中、不意にトランスペアレントの動きが止まり、一つの歌が二人の耳に届いてきた。

――交わるはずのない旋律は――

「ん？　何だ今のは？」
「歌みたいッスねー。でもなんでこんなときに」
「俺が知るわけねえだろうが」
そんな会話をする二人から少し離れたところで戦っていた楯無が誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。
「この声……明弘くんの……？」

「くそっ、何なんだよこいつらは!?」
明弘から場を任された一夏たちはトランスペアレントの異常さにやや圧倒されていた。
自分側が六機、相手が二機。広い場所とはいえ、八機の混戦ともなればなりづらくなる。相手の反応がないこと、それに二機の異様なコンビネーションが加わり、やりづらさも格段に上がっている。
「ラウラ！　後ろだ！」

「なっ――くっ！」

後ろからの銃撃をギリギリのところでＡＩＣを使って、ラウラが防ぐ。だが、その隙を突くようにもう一機のレーザーがラウラを襲う。

レーザーがラウラに当たる直前、シャルロットのシールドがレーザーを防ぎ、同時に一夏の《雪片弐型》がそのトランスペアレントをぶっ飛ばした。

「すまない、二人とも」

「どういたしまして。それにしても――」

「こいつら面倒だな。明弘がどうにかしてくれるまでエネルギーの無駄使いもできないから零落白夜も使えねえし……」

一夏がぼやく。しかし、その間もトランスペアレントの攻撃は続き、なんとか二機とも視界に入るように立ち回りながら回避をする。

――あなたと結ぶ旋律は――

――いつか交わした約束の歌――

不意に、トランスペアレントの動きが止まる。それと同時に、とても聞きなれた声が一夏たちの耳へと飛び込んできた。

「この声って――明弘か！」

一夏の表情が一気に明るくなる。他の皆の表情も一様に明るくなるが、その中で一夏と箒以外の四人の表情は少し複雑そうだった。

「この歌……あのときのですわよね」

「ああ、間違いない」

「でも、なんであの歌でこいつらの動きが……？」

「さあ……？」

この歌は紛れもなく、福音事件のときに明弘が歌っていた歌だ。

そのときは微かにしか聞こえなかったが、間違いない。

「どうしたんだ、みん――？」
「一夏っ！　見ろっ！」
一夏が怪訝そうな表情で四人に声をかけようとするが、箒がそれを遮る。一夏が箒の言葉に従ってレーダーを確認すると、そこには今までなかった反応が二つ。それは正しく、トランスペアレントのものだった。
「新しい反応？　……こいつらのか！」
「おそらくな」
「よし！　行くぜ！」
待ってましたといわんばかりに《雪片弐型》から零落白夜を発動させ、トランスペアレントに突撃する。箒がそれに続き、他の四人も我に返って二人のあとに続いた。

第百十三話　不甲斐なさ（前書き）

第百十三話です

第百十三話　不甲斐なさ

「……本当に妨害電波を解除できるなんてな」
半分疑心暗鬼だったが、ネルマのいうことは本当だったようだ。
まあ、最初から本当だとは感じてはいたが。
「とりあえず……行くか」
一夏たちのところは……別にいいか。いくらトランスペアレントとはいえ、妨害電波がなければそこまで苦戦する相手でもないだろう。他の二ヶ所も同じだ。今は他に行くところがある。

「やっぱり、あの歌にはトランスペアレントの妨害電波を封じる力があるようね」
「それはわかったけどさー、トランスペアレントの様子が変だった理由はわかんなかったな」
ＩＳ学園の様子を少し離れた場所からグレルとフェルが会話を交わす。
「妨害電波が封じられた理由がわかっただけでも十分よ。レイベにはトランスペアレント以外の機体を当てるように――」
「へぇ、あいつら以外の機体もあるのか。それはいい情報を聞けたな」
「……あら、よくこの場所がわかったわね」
第三者の声に反応して二人が振り向くと、そこには明弘の姿があった。
「なんとなくだが、お前たちの居場所が察知できた。お前たちにはいろいろと聞きたいことがあるからな。こうしてやってきたわけだ」
「あっそ。でも、俺たちは闘う気なんてねえよ。もう帰るし」
「そんなこと知ったことか。質問に答えておらう」

「質問、ね。……いいわ、一つだけなら答えてあげる。さあ、何を聞きたいの？」
「……一つか」
一つという言葉が、明弘の発言を鈍らせる。だが、ついに決心したように口を開いた。
「お前たちと俺はどんな関係だったのか。それが質問だ」
「かなり親しい関係、とだけ言っておきましょうか」
「……」
明弘は黙ったまま。しかし、グレルとフェルはそれに構わず、言葉を続ける。
「じゃあ、俺たちは帰らせてもらうぜ」
「じゃあね。レイベ」
黙り続ける明弘を置いて、二人はそのままその場を歩いていってしまった。
「……くそ」
誰もいなくなった場所に明弘の声が染み渡る。だが、その声には悔しさが滲み出ていた。
グレルとフェルに質問できるまたとないチャンス。それを少し焦ってしまって最善の質問をすることができなかった自分への不甲斐なさ。そんなものがその声には滲み出ていた。
「くそ……くそっ」
明弘の呟きだけがその場に響き渡り続けた。

第百十四話　事情聴取（前書き）

第百十四話です

第百十四話　事情聴取

「さて、事態も落ち着いたな。須藤、これからお前にいくつか質問がある。嘘偽りなく正直に答えろ」
「はい」
トランスペアレントの強襲も退け、事態もひと段落付いたところで、俺は織斑先生に事情聴取されていた。この場にいるのは俺と織斑先生、あとは遥香と一夏たち、山田先生だ。
まあ、これはある程度予想できてたから別にどうということはないが。
「なぜお前は今回の強襲を事前に知ることができた？」
「ショッピングモールで二人の少女と接触し、そのときに知らされました」
「その二人は何者だ？」
「グレル、フェルと名乗っていましたが、詳しくはわかりません。年齢は俺たちと同じ十六歳前後。福音事件のときにも接触しましたが、所属不明のＩＳに乗っていました」
「あのときのか……。しかも所属不明のＩＳとはな」
「はい。先ほど襲ってきた無人機のことをトランスペアレントと呼んでおり、おそらくその二人が所属する組織が製作、使用していると思われます」
嘘偽りなく質問に答えるが、あの二人が俺の過去に関係している可能性があることは話さない。嘘偽りなく答えろとは言われたが、隠すなとは言われていない。少しこじつけのように聞こえるが、まあいいか。
「なるほど。これで事情聴取は終了だ。ここでの出来事は誰にも他言しないように」
「お、織斑先生。政府や国際ＩＳ機関には言わないんですか……？」
「上に報告するほどのことでもない。それに報告したところで何か

出来るわけでもないだろうしな」
さすがは織斑先生。この短時間でそこまで頭が回るとは。まあ、この件は俺自身が決着をつけないといけないからありがたいことだ。
「もう一度言うが、ここでの出来事は一切他言しないように。解散」
織斑先生のその言葉に俺たちは素直にその場をあとにした。

寮の廊下を遥香と二人きりで歩く。一夏たちとはついさっき分かれた。
「……」
相変わらず俺の斜め後ろを控えめに歩く遥香。こいつには苦労をかけたな。いくら遥香自身の提案だからといってあの二人を任せるのは今考えると少し短絡的な行動だったような気がする。
「……すまなかったな」
特に意識したわけでもなく、そんな言葉が口からこぼれる。
「なにがでしょうか？」
「あの二人を任せたことだ」
「明弘様が心配することはありません。あれは私が提案したことです」
遥香はあっさりと言う。まあ、こいつはいつでもこんなやつだが。
「お礼――ご褒美といってはなんだが、今度の休日にもう一度買い物に行くか。そのときはお前の好きなものかってやるよ」
「私は明弘様に仕えることができればそれでいいのですが、ありがとうございます」
少しだけ遥香の表情が明るくなる。こいつの表情が変わるということは本当に喜んでくれてるみたいだな。嬉しい限りだ。
これは俺も来週が楽しみになったな。

第百十五話　個別訓練（前書き）

第百十五話です

第百十五話　個別訓練

「はい、そこで瞬時加速に切り替え。《護神》を前方にして突破、エネルギーブレードで攻撃だ」
「はい」
俺の視線の先で神楽をまとった遥香が俺の指示通りに動く。少し行動に移るのが遅い気がするが、初めてにしては上出来だろう。
今日はトランスペアレントの強襲を受けた翌日。あんなことがあったとはいえ、少しは体を動かさないと体が鈍るからな。まあ、今日は遥香の訓練が中心だが。
「攻撃したあとだからって止まるな。相手の反撃を想定してすぐに距離をとれ」
「はい」
「距離をとったあとは弾幕を張りつつ、隙を見つけ次第攻撃に移れ」
「はいっ」
俺の指示に逐一返事をしながら、行動に移す。一通りの動きを終わらせたあと、遥香に言って、一旦休憩にする。
「動きもかなりよくなったな。半年前とはまったく違う」
「ありがとうございます」
「他のやつらと模擬戦をしたのもいい経験になったようだな。ところどころにあいつらの動きが見て取れる」
「はい」
一夏の瞬時加速、セシリアの三次元躍動旋回、鈴音の近接戦闘などとあいつらを彷彿とさせる。どれも本物には及ばないが、それらを組み合わせて使ってくるからタチが悪い。
俺の動きもほとんど読まれていると思っていいだろう。それでもまだ俺の方に分があるのは単純に実力の差か。ラウラやシャルロットにも未だに勝ててないしな。
こいつに圧倒的に不足しているのは経験か。アメリカ軍でも訓練

ばかりで模擬戦はあまりやっていなかったようだし、その前は調整ばかりで模擬戦なんて数えるぐらいしかやってない。今が一番成長できる時期だからな。この時期にＩＳ学園に来たのはよかったな。

「どうかしましたか？」

遥香が首をかしげながら俺の顔を覗き込む。おっと、考え込みながら遥香のことを見ていたようだ。まあ、遥香のことについて考えていたから当たり前かもしれないが。

「いや、なんでもない。お前のことについて考えていた」

「私のこと……ですか？」

遥香の顔がわずかに赤くなる。なんだ？　何か変なこと言ったか？

「明弘様が私のことを考えてた……明弘様が私のことを……」

「おーい、遥香？」

なんかブツブツ呟き始めたぞ。たまにあるんだよな、こういうこと。いつも優しいやつが怒らせる一番怖い、と依然一夏が言っていた気がするが、それと同じでしっかりしているやつに限って壊れると一番厄介なんだよな。

こういうときは遥香が元に戻るまで待つしかない。いままでだと早くて三分、遅いときだと十分近くかかったこともあったな。あれは何のときだっけ？　……まあ、いいや。

遥香が元に戻ったらもう少し訓練して今日はもう上がるか。昨日はあんなことがあったからな。少し早めに上がってもいいだろう。今日は少し体を動かすだけの予定だったし。

第百十六話　迷いと葛藤（前書き）

第百十六話です

第百十六話　迷いと葛藤

「……♪」

明弘との訓練のあと、自室のシャワーを浴び、髪を乾かしていた遥香の口からわずかに鼻歌がこぼれる。

明弘以外の人間にはいつもの無表情に見えるが、実際はかなり上機嫌だ。遥香の口から鼻歌が聞こえること事態、滅多にあることではないのだから。

遥香がそこまで上機嫌の理由はさきほどの訓練のときの出来事に他ならない。

「明弘様が私のことを考えてくれた……」

それだけで遥香は上機嫌だった。明弘はただ遥香の実力について考えていただけ。それを知っていてなお、遥香の機嫌は良いままだ。

いつも一緒にいた遥香でさえ、明弘が何を考えているのかを把握するのは難しい。何かを見ていてもたまに他のものを見ているかのような錯覚にすら陥る。そんな明弘が恋愛感情ではないとはいえ、自分のことを考えてくれたという事実が遥香の表情を明るくしていた。

「……でも」

そこで遥香の表情がかすかに暗くなる。

「このままでいいのでしょうか……？」

自分は明弘の手足。明弘をあらゆるものから守る盾であると同時に、明弘の障害となるものを排除する剣。そんな自分が――

そんな自分が明弘に嘘をついていていいのだろうか。

正確に言えば嘘をついているのではなく、言わなければならないかもしれないことを黙っているのだが、置いておこう。

言わなくてもいいことかもしれない。そう自分に言い聞かせて、

今まで誰にも言わず隠し通してきた。今でもそう思っている。
しかし、昨日の事件。グレルとフェルが接触してきたことでその決意が揺らぎ始めているのも事実だ。
あの二人が接触してきた。そして、おそらくこれからも接触してくるだろう。そうなるとやはり話した方がいいのではないか。それとも隠し通したほうがいいのではないか。そんな二つの考えが遥香の頭を巡り続ける。
「どうしたらいいのでしょうか。……レイベ様」
遥香が小さく呟く。
「明弘様に話したほうがいいのでしょうか。あなたは……どちらを望んでいるのでしょうか」
誰も聞いていないのにも関わらず、遥香の呟きは止まらない。静寂の中、遥香は呟く――

「……レイベ様」
かつて、自分の主だった彼の名を。

「……明弘様」
今、自分の主である彼の名を。

遥香のその呟きは、誰にも聞かれるはずもなく、周りの静寂に溶け込んでいった。

第百十七話　相談（前書き）

第百十七話です

第百十七話　相談

遥香の様子がおかしい。
他のやつにはわからないだろうが、確実におかしい。
遥香の様子に違和感を覚えたのは一昨日――トランスペアレントによる学園強襲の日からだ。しかもグレルたちを遥香に任せて一度別れ、ＩＳ学園で合流したときあたりから。
その違和感が強くなったのは昨日、訓練でかいた汗を流すためシャワーを浴びたあとか。遥香にしては長い時間かかったと思ったが、そのシャワーから上がったあとから余計に様子がおかしくなった。
まるで何かを隠しているような。
まあ、隠し事をされること事態はいいんだが、やはり遥香の様子がおかしいのは気にかかる。
「……というわけなんだが、どう思う？」
「どう思うといわれてもなぁ」
「僕たちには今までと同じに見えるけど」
「うん。クラスでも別におかしいところなんて見当たらないわよ」
自分一人で悩んでいてもきりがないと考えた俺は、一夏、シャルロット、鈴音の三人に相談することにした。
こういうので頼りになりそうなシャルロットと、遥香と同じクラスでしかも何だかんだ言って相談に乗ってくれる鈴音、あとたまたま近くにいた一夏の三人に相談してみたんだが――
「使えないなぁ、お前たち」
「うるせい。相談に乗ってやったのに、何だその態度」
「まあ冗談は置いといて。やっぱり他のやつからすればいつもと変わらないか」
「そりゃそうでしょ。まだ一週間しか一緒にいないのにそこまで細かいことに気がつけるはずないって」
「それに遥香はあんまり感情を出さないからね。明弘以外にはわか

らないと思うよ」
　鈴音とシャルロットがもっともなことを言う。
「っていうか、そんなに気になるなら本人に聞けばいいじゃない。アンタの言うことなら遥香だって聞くでしょ」
「できればそういうことはしたくない。あいつの意思を捻じ曲げたくないし、あいつが黙っているのならそれ相応の事情があると思うからな」
「そっかぁ。確かにそうかもしれないね」
「俺としては、あいつには俺に縛られないで生きて欲しいんだよ。俺なんかについてきてもろくなことがない。一昨日のこともあるしな」
　それについてはお前たちにも迷惑かけてしまったしな。と続けると、二人はそんなことないと否定してくれた。本当に良いやつらだ。
「あいつの意思を捻じ曲げたくないから好きにさせているが。何か俺以外のことに興味を持ってくれれば自然と俺から離れるだろうと思ったんだが……まあ、一夏に興味を持つのは困るが」
　俺の言葉に二人がむせる。こいつらはそいつに惚れたからな。こいつらとしてもこれ以上ライバルが増えるのは困るだろう。
　とはいえ、ＩＳ学園にきて一週間、あいつが何かに興味を持った様子はない。相変わらずだ。やっぱりそう上手くいかないか。
「とりあえず、相談したら少し楽になった気がする。ありがとな。今度何かお礼させてくれ」
「別にいいわよ。そんなこと気にしなくて」
「そうだよ」
「二人がそういうなら仕方ないが、何かあったら助けるからな」
「ありがと。じゃあ、あたしたちも遥香のことで何かあったら連絡するわ」
「頼んだ」
　二人に別れを告げてその場をあとにする。後ろから「あれ？　俺は？」という一夏らしき声が聞こえたが、気にしない方がいいだろ

う゛

第百十八話　夏休みの予定（前書き）

第百十八話です

第百十八話　夏休みの予定

「はぁ、どうするか……」
「何がでしょうか？」
「いや、何でもない……」
何気なく呟いた独り言に遥香が反応して聞き返してきたので、ごまかす。遥香が何か隠していることについて考えていたなんて本人に言えるはずがない。
本人に聞けばいいじゃないかと昨日鈴音にも言われたが、やはり遥香の意思を捻じ曲げるのには気が引けるので、聞かない。
「そういえば、もうすぐ夏休みだな」
「はい、多くの方が自分の国に帰国するようです」
ＩＳ学園の夏休みは八月いっぱいだ。他の学校に比べると若干遅めらしいが、学校に通っていなかった俺と遥香には関係ない。
「俺たちは帰国なんて関係ないしな。どうする？　家に帰ってみるか？」
「明弘様が帰るというならお供しますが」
「お前としては帰らなくてもいいと。じゃあ、帰らなくてもいいか。帰ったところで何がすることもないしな」
「はい。しかし、クーが料理を教えてもらいたがってはいないでしょうか」
「そうだなぁ。やっぱり一度は帰っておくか」
「わかりました」
帰るとなると、やっぱり最初のうちに帰っておくか？　確か、やることもなかったはずだし、早めに終わらせておいた方がいいだろう。
「他のメンバーはどうするのかねぇ」
「凰鈴音は帰国する予定はないようです」
「そうか」

シャルロットは帰るわけないだろうし、ラウラは微妙なところだな。でも隊長だから一度は帰国するかもしれないか。セシリアは……貴族の当主だし、やっぱりいろいろと用事もあるんだろうな。となると、帰国するのはセシリアか。ラウラも可能性があるが。

「一夏は一度家に戻るとか言ってたな。ほとんど家に戻ってなかったから掃除したいとかなんとか」

「掃除ですか」

「ああ。あいつは主夫みたいなやつだからな。そういうのには細かく反応するんだよ」

俺たちの家は掃除の必要ないな。クーがいるし。でも束さんの部屋は結構散らかってるかも。帰ったときには一応一通り掃除しておくか。

「あ、家の俺たちの部屋も掃除しておかないといけないか。前帰ったときには掃除する暇がなかったし」

「それなら私がこの前帰宅したときに掃除をしておきました」

「お、そうか。ありがとうな」

「いえ、お役に立てたのなら何よりです」

そう言ってかすかに嬉しそうな表情を見せる遥香。何が嬉しいのかわからないが、本人が嬉しいと思っているのならよしとしよう。

「じゃあ、夏休みの主な予定は家に帰るだけだな。あとは買い物やら訓練やらやって時間をつぶすか」

「はい」

俺たちにとっては初めての夏休み。少し楽しみだが、やることがあまりないのは少しつまらないな。

何か面白いことが起こってくれないかな。面倒なことは起こらなくてもいいが。

第百十九話　夏休み突入（前書き）

第百十九話です

第百十九話　夏休み突入

「明弘ー、今日って予定あるか？」
食堂で朝食を食っているときに一夏からそんな質問をされたのは、夏休みに入って早々のことだった。
「いや、特に予定はないが、どうしたんだ急に？」
「昨日の夜にさ、中学校のときの友達と遊ぶ約束したんだけどさ。どうせなら一緒にどうかと思ったんだよ」
なるほど。今日は一日訓練でもしようと思っていたが、こっちのほうが面白そうだな。
「そういうことか。別にいいぞ。遥香もいいな？」
「はい」
「よし、決まりだな」
「……で、今日は何人集まるんだ？」
俺としては何人でもいいんだが、人見知りの遥香が一緒となるとできれば大所帯は避けたい。多くて六人ぐらいが限界だろう。
「本当は俺と鈴、あと二人を含めた四人の予定だったんだけどさ、鈴ともう一人が予定あるってんでふたりになったんだよ」
「で、俺たちはその穴埋めと」
「違うって。わかって言ってんだろ？」
「ご明察」
そんな他愛のない会話を交わしながら食堂を出る。
「じゃあ、三十分後に正門前集合でいいか？」
「そんなに必要ない。十五分でいい」
おそらく、遥香の準備に時間がかかると思ったのだろうが、そんな心配は無用だ。俺も遥香も五分もあれば準備なんて終わる。あとは移動の時間があれば十分だ。
「わかった。じゃあ十五分後に正門前な」
「了解。遥香、行くぞ」

「はい」
廊下で一夏と別れ、自室に向かう。持っていくのは……財布と携帯ぐらいでいいか。服も適当に見繕って……五分もかからないな。

「おう、待たせたな」
「……早すぎねえか？」
ところ変わって正門前、すでに準備を終わらせて正門に着いていた一夏に声をかけると、一夏は少し驚いたような表情を浮かべた。
「早すぎって？」
「本当に十五分以内に来るとは思わなかったんだよ。何分で準備終わらせたんだよ」
「三分ぐらいだな。後は全部移動に費やした」
「正確に言えば約二分三十秒、移動時間は九分三十秒ほどです」
遥香が律儀に訂正を入れてくる。さすがは遥香だな。
とりあえず、ここにいるのも時間の無駄なので、とっととモノレール乗り場に向かう。
「そういえば、お前たちって着替えとかどうしてんだ？　俺が箒と同室だったときはかなり苦労したんだが」
「どうするもなにも普通だよ。家族なんだから何も遠慮なんて要らないだろ」
「普通って、まさか一緒に着替えてんのか！？」
「そんなことするかバカ。ちゃんと別の部屋で着替えてるよ。お前と箒の場合はお互いに意識しすぎてただけだろ」
「そうなのか？」
「たぶんな」
特に箒の方は好きなやつと同室になったから余計に神経質になったんだろう。そんな言葉をなんとか押しとどめる。俺が言うことでもないしな。

とりあえず今日のところは思う存分楽しむとするか。

第百二十話　学園外の友達（前書き）

第百二十話です

第百二十話　学園外の友達

「着いたぞ、ここが中学のときの友達の家だ」
一夏がそう言ってとある建物の前で立ち止まる。その建物には『五反田食堂』という看板が立てかけられている。普通の民家ではないのか。
「早速呼んでくるか。……おーい、弾。来たぞー」
ノックもせずに扉を開ける一夏。まあ、食堂だからノックはしなくていいとして、中に客がいるかもしれないのにいきなり大声で呼ぶのはいいのか？
「よう、一夏、遅かったな。……ってあれ？　そっちの二人は？」
「前に話しただろ？　ＩＳ学園のもう一人の男子。こっちはこいつの家族だ」
「須藤明弘だ。よろしく頼む。こっちは天宮遥香」
「……よろしくおねがいします」
「おう、よろしくな。俺は五反田弾、弾って呼んでくれ」
「わかった。俺のことも明弘でいい」
弾と挨拶を交わす。遥香も少し緊張気味だが、なんとか挨拶する。まあ、親しみやすそうなやつだからすぐに仲良くなれると思うが。
「えっと、二人は家族らしいけど……兄妹なのか？　それにしては苗字が違うけど。……もしかして従兄妹か？」
「いや、実際の血縁関係はない。戸籍上も他人だが、家族というものはそんなことで決めるものではないだろう？」
「ん、まあ、詳しい事情はわかんねえけど、なんとなくわかった気がするよ」
「わかってくれたようで何よりだ」
確かに後々考えると、苗字を一緒にした方がよかったかもしれない。でも、須藤明弘は束さんに貰った名前だし、天宮遥香という名前も遥香本人が気に入っているので変えるのは忍びない。なので、

これからもこのままで通そう。
「じゃあ、今日はこの四人で遊ぶってことでいいんだよな？　一夏」
「ああ、そのつもりだけど大丈夫だよな？」
「もちろんいいぜ。こんなかわいい子が一緒なら大歓迎だ」
「……遥香に変なことしたら殺す」
「わ、わかったよ。じょ、冗談だって」
「ならいいがな」
少し殺気を含めながら弾を軽く睨みつける。効果は抜群のようで遥香に何かする気はなくなったようだ。
遥香はその様子を眺めながら、かすかに笑顔になる。何がうれしいのはさっぱりわからないが、初対面の相手を前に遥香がそこまで緊張していないことに少し安心する。
「まあ、こうしてんのも時間の無駄だし、さっさと遊びに行こうぜ」
「そ、そうだな！　早く行こうぜ！」
一夏の言葉に弾が慌てて追従する。よほど気を紛らわしたいのだろうか。そこまで強い殺気を当てたつもりはなかったんだがな。まあ、釘を刺しておけたからよしとしよう。
俺と遥香にとっては初めての夏休みでの、しかも初めて学園外の友達との外出だ。思う存分楽しまないと損だ。

第百二十一話　ゲームセンター（前書き）

第百二十一話です

第百二十一話　ゲームセンター

五反田食堂をあとにし、現在ゲームセンター。俺たちはその中でエアホッケーをしていた。

総当たり戦計六試合のうち、五試合が終わり、ちょうど最後の六試合目。その終盤だ。

対戦相手は遥香対弾。得点は遥香の方が圧倒的に勝っており、ほとんど一方的といっていいほどの試合展開だ。……っと、そんなことを考えていたら終わった。

「くっそぉぉ！！」

弾が悔しげに叫ぶ。試合結果はわかったとは思うが、遥香の圧勝。弾はエアホッケーが苦手なのだろうか。

総合結果は、俺が３勝０敗、一夏が２勝１敗、遥香が１勝２敗、弾が０勝３敗。遥香と一夏の試合は本当に接戦で、少しでも一夏がミスをしたら遥香が勝っていたほどだ。それに引き換え弾は――

「お前、弱いな」

「うるせえ！　一夏には無理だけど、明弘たちだったらもしかしたら……。とか思ってたのに惨敗じゃねえか！」

「お前、そんなこと考えてたのか？　俺も遥香も一応ＩＳの戦闘とかこなしてるからな。これくらいならどうってことないんだよ」

俺は一人で生きてきた経験からある程度の反射神経は持ってる。遥香の方はすごい反射神経を持っているわけではないが、行動に無駄がない。常に一番効率的な動きができるため、こういう類のゲームは強い。

「まあ、エアホッケーはここまでにして他のゲームしようぜ。今度は弾が得意なのにしていいから」

「じゃあ……あれやろうぜ！」

そう言って弾が指差したのはシューティングゲーム。次々と出てくるゾンビを撃ち倒していくゲームだ。

「まず俺と一夏がやるぜ。今度こそいいところ見せてやる」
ノリノリな弾。いいところを見せるって誰にだよ。それに見せたとしてもさっきの格好悪いのを見たあとだと、そこまで挽回できるとは思えないが。
そんなノリノリの弾に巻き込まれた一夏が弾の隣に立ち、銃を構える。うーん、一夏が銃を構えているというのは少し妙な感じだな。セシリアやシャルロット、ラウラあたりならものすごく似合うのかもしれないが。
そんな考察をしているとゲームが始まり、ゾンビがうじゃうじゃと出てくる。それを一夏と弾が撃ち倒していく。
「ほぅ」
よく見ると、二人のやり方には微妙な違いがあることに気が付いた。一夏が目に付いた敵から撃っていくのに対して、弾は一体ずつ確実に撃ち倒していく。確かに得意というだけはあってやり慣れているな。

「ふぅ、こんなもんか。どうよ、俺の実力は」
「さすがだな。それに引き換え一夏はやっぱり射撃が苦手みたいだな」
「うるせぃ」
段は笑顔だが、その弾に負けたのが不服なのだろうか、一夏が少しふて腐れた表情を浮かべる。俺と遥香はそんな二人から銃を受け取り、それぞれ構える。
ゲームがスタートし、ゾンビが沸いてくる。それを俺たちは的確に撃ち倒していく。
特に話し合ったわけではないが、うまいコンビネーションでゾンビを打ち続ける。まあ、遥香が俺に合わせてくれているのが大きいが。

それしても、敵が一方向からしか出てこないというのは結構楽だな。その一点だけに集中すれば簡単に倒しやすくなる。
そんなことを考えながら打ち続けていると、いつの間にかゲームが終了していた。結構あっけなかったな。
「こんなものなのか、案外楽だな」
「そうですね。ＩＳでの戦闘に比べるといささか簡単のようでした」
銃を指定のところに戻す。そして後ろを振り向くと、一夏と弾が少し驚いた表情を浮かべていた。
「……すげえな、二人とも」
「そうでもないだろ。ＩＳ戦闘で経験があるから慣れているだけだ」
まあ、遥香の《神祇》は少々特殊だから慣れというわけでもないだろうが、遥香なら問題なかっただろう。順応性が高いからな、こいつは。
「そんなことよりも次行こうぜ、次。時間は限られてるからな」
「そうだな。よし、次行くか」
俺がそう促すと、一夏が返事をして次のゲームを探すために歩いていってしまう。一夏はもうこういうことにはある程度の抗体ができているのだろう。弾もそんな一夏につられるように慌てて次のゲームを探しに行った。
「さてと、俺たちも行くか」
「はい」
俺と遥香はそんな二人の背中を追うようにそれぞれの歩を進めた。

第百二十二話　気のせい（前書き）

第百二十二話です

第百二十二話　気のせい

「いやー、今日は遊びつくしたなー」
時刻は夕方。ほぼ一日遊びまくって、上機嫌な弾が鼻歌交じりで俺たちの前を歩く。
シューティングゲームのあと、格闘ゲーム、リズムゲーム、レースゲームと午前中は散々ゲームをやり続けた。昼飯は近くのファーストフードで済ませ、午後は適当にぶらついた。
「予想以上に金使っちまったな」
「お前、遥香の分まで金出してたもんな」
「俺がやりたくてやったんだから別に構わないんだが、やっぱり金はあるに越したことないからな。この夏休みの間、どっかでバイトするか」
まあ、夏休みは家に帰るぐらいしか用事がなかったし、いい暇つぶしになるかもしれないな。できれば行き慣れているレゾナンスの中がいいが、明日にでも探してみるか。この前遥香と行ったオープンカフェとかでもいいな。
「でもそうなると、その間遥香をどうするかだよな。今まで俺がいない間は家事をしてくれてたんだが……」
「その間は俺たちが相手しようか？　訓練も一緒にした方が効率がいいかもしれないし」
一夏がそんな提案をしてくる。確かに、それが一番いいかもしれない。そんなことを考えていると、俺の隣、やや斜め後ろを歩いていた遥香が口を開いた。
「私も一緒にアルバイトをします。その方が収入もいいでしょうし」
遥香が淡々と述べる。だが、それはある程度予想済みだ。
「お前は今までバイトなんてしたことないだろう」
「だからこそ、です。何事も経験だと、博士も言っていました」
「……束さん……」

束さん、なんてこと言ってくれたんだ。あなたがそんなこと言っても何の説得力もないですって。家からなかなか出ようとしない人が、何事も経験、だと？　遥香もそう簡単に信じるなよ。

「……まあいいか。明日にでもバイトを探してみるとしよう」

「はい」

「ということで一夏、俺たち明日出かけるからよろしく」

「了解」

今後のことについて三人で駄弁っていると、前を歩いていた弾がそれに気づいたようで、こちらに戻ってくる。

「何の話してんだ？」

「明弘と遥香がこの夏休みの間、どっかでバイトするって話」

「バイトかぁ。じゃあ、俺の食堂で働かないか？　大歓迎だぜ」

「断る。遥香を危険な場所にやれるか」

「俺の食堂、危険な場所扱い！？」

「お前の食堂というか、お前自身だな。お前がいなければ考えてもいいが」

「ひでぇっ！」

「冗談だ」

半泣きになる弾に、少し笑いながら告げる。それを聞いて一瞬弾はきょとんとした表情になったが、次の瞬間にはまた半泣きになる。

「だましたのか！？」

「冗談というのはそういうものだろう」

「弾、あきらめろ。こいつはこういうやつだ。面白いことが大好きなんだよ」

「なんかこう、人をおちょくるのって楽しいんだよなー」

「……な？」

げんなりとした一夏の言葉に、弾もげんなりとしながら「そうだな」と頷く。なんだ、失礼なやつらだな。

反対側の遥香の表情にはほとんど変化が見られない。心なしか笑顔のように見えなくもないが、夕日のせいでよくわからない。

なんとなく体を夕日のほうに向けてみた。沈む寸前に最後の光を残そうと真っ赤に燃える夕日。もうすぐ暗い夜が来ることを自覚させられる。寂しさと切なさが感じられる綺麗な景色。

……それに、何か懐かしい感じがする。この場所に、ではない。真っ赤に燃える夕日を見ていると、とても懐かしい気分になる。

ふと、三人の方に向き直ると、一夏の様子が少し変なのに気がついた。

「どうした？　一夏」

「……あ、ああ、なんでもない。ただ……なんか、前にも見たことがあったような気がして」

前にも見た？　確かに、一夏と出かけることは何度もあったが、夕日を眺めるのは今回が初めてのはずだ。

「お前の前で夕日を眺めるのはこれが初めてだ。気のせいだろ」

「いや、そんな最近のことじゃなくて……もっと、昔に」

「そんなわけないだろって。そんなの、ただの気のせいか、思い違いだ」

「……そう、だな。悪い、変なこと言っちまって」

「別に構わないさ。それよりも早く帰るぞ」

「おう」

止めていた足を再び動かし、歩き始める。だんだんと夕日が沈み、周りが暗くなり始める。

ＩＳ学園についたのは、夕日が完全に落ち切り、辺りが闇に包まれたころだった。

第百二十三話　敵じゃない（前書き）

第百二十三話です

第百二十三話　敵じゃない

目を開けると、そこは何もない更地だった。
見渡す限り何もなく、だた遠くに地平線が見えるだけ。
しかし、それに対して空には朝日と夕日が左右から半分ずつ顔をのぞかせ、何もない大地を明るく照らしている。
こんな異様な場所、一つしか心当たりはない。
『無限回奏』。一度しか来たことはないが、忘れるわけがない。
「さて、俺にはここに自由に行き来することができなかったはずだが。……理由を聞かせてもらおうか」
『あれ、気づいてたんだ』
振り返ると、案の定そこには俺と同じ色の髪と目を持った少女――ネルマが立っていた。
「そんなことよりも理由を聞かせてもらいたいのだが」
『理由ねぇ……。わたしにもよくわからないから説明のしようがないんだけど、ここはキミの精神――それも深層心理にできた世界だからね。眠った状態だと来やすくなるんじゃないかとは思うよ」
「なるほどな……」
ここを夢なんかと同じような世界だと考えるのと、眠っている状態なら『無限回奏』に来やすくなるというのは一理ある。夢と違って妙にはっきりとしているが。
「それにしても、やっぱりゲームうまいんだね。すごいすごい」
「……なぜそれを知っている？」
「キミの感覚とわたしの感覚はつながってるからねー。キミが見たものはわたしにも見えるし、キミが聞いたものならわたしにも聞こえるよ」
「つまり感覚が共有できるということか？」
「大体当たってるけど、微妙に違うよ。わたしが感じたことがキミに伝わることはないし、こうしてキミがここにいるときは切断され

ているからね」
「……そうか」
どういう仕組みかはわからないが、おおむね把握できた。すなわち、今まで俺の感じてきたことはほぼ全てこいつに伝わっていると思って間違いないか。
そうなると、一つ聞きたいことが出てくる。
「じゃあ、俺が記憶を失くす以前のことも知っているんだな？」
「……ん、んー？　まあ、一応知っているといえば知っているね」
あいまいな返事。だが、今こいつは確かに俺の過去を『知っている』と言った。
これで、俺の過去がはっきりするかもしれない。そんな思いを抱きつつ、ネルマに言う。
「じゃあ俺の過去について教えてくれ。なんでもいい。俺の過去に関係することを教えてほしいんだ」「え？　……じゃあ、一つだけ。『グレルとフェルはキミの敵じゃない』」
「……なに？」
グレルとフェルが敵じゃないだと？　信じられるか。あいつらは俺を無理矢理連れて行こうとしたんだぞ。そんなやつらが敵じゃないなんて誰が信じられるか。
「まあ確かに、今までのを見る限りとても敵じゃないなんて思えないかもしれない。でもこれは嘘じゃない。あの二人は敵じゃないよ」
そういうネルマの表情はいたって真剣で嘘をついているようには見えない。本当にあの二人が敵ではない。そう、目が告げている。
「一応、心に留めておこう。だが、敵かどうかを決めるのは俺だ」
「うん、それでもいいよ。それにしても……」
そこまで言って、一つため息をつき、憂鬱気な表情でネルマが呟く。
「彼女たちがいるなんて思わなかったなぁ。一夏や『彼女』も」
「彼女たち？　……って、それより、一夏を知っているのか？　それに『彼女』って誰だ？」

「ちょ、ちょっと、前も言ったけど一気にたくさん質問しないでよ。彼女たちのことならいずれ思い出すよ。一夏のことを知っているのかって聞かれれば、知っているよ。まあ、そこまで詳しくは知らないけど」

「じゃあ、『彼女』というのは？」

「キミの味方だよ。わたしから言えるのはそれだけ」

何か含んだ物言いだったが、まあいい。どうせこれ以上何があっても言うことはないだろう。根拠はないが確信できる。

と、そこで霧がかかるように視界が霞み始める。これが目を覚ます前兆なのかもしれない。だが、前回よりもだいぶ楽だ。

体は重いが、前ほどではなく、一応声も出せるようだ。

「今日はここまでみたいだね。おやすみ、そしておはよう。……またね」

最後の言葉からすると、またここに来ることになるのかもしれないな。そんなことを考える余裕があることに自分でも少し驚いたが、次の瞬間には視界が一気に暗転し、そのまま俺の意識は闇に落ちていった。

第百二十四話　バイト先決定（前書き）

第百二十四話です

第百二十四話　バイト先決定

「ふぅ、思ったよりすんなりバイト先決まったな」
「そうですね。まさか最初の店で即採用とは思いませんでした」
一夏たちと遊びに行った翌日、俺たちは予定通りバイト先を探した。
まず、以前行ったオープンカフェに頼んでみたら、驚くことに即採用。そのまま簡単に仕事内容を説明してもらい、今さっきオープンカフェをあとにしたところだ。
「バイト先決めるのって……こんなに簡単だったか？」
いままでの経験からすると、少なくとも三つか四つは回ってみて、やっと採用という感じだったので、今回の早さには少し驚きを隠せない。
「私はこれが初めてなのでよくわかりませんが、早いほうではないかと思います」
「まあ、多分お前がいたからなんだろうな。店長なんてお前のこと見た瞬間に採用って断言したし」
「私ではなく、明弘様を見た瞬間だったと思いますが」
「そんなことあるはずないだろ。俺みたいな平凡な人間見て即採用するはずない」
あれは確実に遥香を見て決断したはずだ。
実際、遥香ははっきり言って可愛い。俺みたいな平凡な人間についてくるのが不思議なくらいだ。……なんで俺なんかについてくるのだろうか？
「しかも暇なときに来てくれればいいとは。どんだけ待遇がいいんだ」
女性が優遇される社会とはいえ、普通では考えられないほどの待遇の良さだ。ついでに俺も暇なときに来てくれればいいって。バイト代は来た日に日給でくれるらしいし。まあ、遥香を逃がしたくは

ないって言うのはわからなくもないが。随分とすばらしいな。
「どうする？　明日からいつでもいいらしいが、やっぱり定期的に行った方がいいだろうし」
「そうですね。週に一回か二回の頻度くらいが妥当でしょうか？」
「じゃあ、学校があるときはそんくらいで、夏休みの間はもう少し増やすか」
「わかりました」
週に一回か二回となると、土曜と……あとは日曜が空いてるときにでも行くか。夏休み中は週に三、四回ぐらいでいいだろう。
「ただ、初めのうちはゆっくりやるぞ。人付き合いが苦手なお前に無理させられないからな」
「はい。ありがとうございます。ですが……」
「様子を見て、慣れてきたら増やせばいい。別に急ぐことはない。俺たちのペースでやっていけばいいさ」
「……そうですね」
これは遥香の苦手を解消する特訓でもある。ゆっくりと確実に慣れさせていけばいい。慌ててもいいことなんて何もない。
「とりあえず、今日は適当に過ごして明日からバイトに臨むとするか。昨日は一日中歩きっぱなしだったし、今日はのんびりとすごしたい」
以前、遥香と出かけたときはグレルとフェルに遭遇して、のんびりとできなかったしな。そんなことを内心思っていると、不意に昨日の夢のことを思い出した。
『グレルとフェルは敵じゃない』とネルマは言っていた。嘘を言っているようではなかったが、それでもやはり信じきれるわけではない。今まであいつらと関わってきて何一ついいことなんてなかったからしょうがないといえば、しょうがないだろうと自分に言い聞かせておく。
「……大丈夫です」
いきなり遥香が呟いた。

「大丈夫です。何があっても私は明弘様についていきます。私は明弘様の剣であり盾でもあるんですから」

まるで俺の心を読んだかのような言葉。だが、不思議といやな感じはせず、逆に嬉しいとさえ思う。

「そうだな。俺にはお前がいる。ただ、自分を犠牲にしてまで俺を助けようとはするなよ。俺もお前も無事でいる。それが一番だ」

「……はいっ」

俺が頭を撫でながら言うと、遥香は微かに笑顔を浮かべて返事をしてくれた。

そう、誰も欠けることがない。それが一番いい結果だ。

第百二十五話　バイト開始

「お待たせしました。トマトソーススパゲッティとカルボナーラです」

男女のカップルのテーブルに両手のトマトソーススパゲッティとカルボナーラを置き、一度礼をしてカウンターに戻る。いままでのバイトとほぼ同じ手順だからスムーズに進む。

「須藤君、次は五番テーブルにこの三つお願い。そのあとは六番テーブルのオーダーね」

「わかりました」

「……九番テーブル、エスプレッソ二つと本日のランチ二つ……です」

ちょうど遥香もオーダーを取って帰ってきたようで、厨房に注文を伝える。少したどたどしいが、まあ大丈夫だな。

「がんばってるな、遥香」

「……はい、少し緊張しますが、支障はないと思います」

「ならいいが、無理はするなよ？　きついと思ったらすぐに休め」

「はい、わかりました」

遥香の返事を聞いて、注文の品を持って五番テーブルに向かう。料理は三つあるが、今までバイトで三つ運ぶことなんていつものことだったからどうということはない。

「お待たせしました。ペペロンチーノとアラビアータ、カルボナーラです」

五番テーブルは三人の若い女性客だった。ここは雰囲気いいし、若い客がよく来るようだ。俺にはあまり関係ないことだが、店の客の傾向を知っておくに越したことはない。

えっと、確か女性客だけのときは……普通よりも笑顔を多めに、だったはず。昔のバイト先で先輩に教わった接客テクニックの一つだ。そういえば、その先輩は「日常生活でも使える」とか言ってい

たな。使う気なんてさらさらないが。
　とりあえず、そのテクニック通り笑顔を浮かべながら料理をテーブルに置いていく。作り笑顔なんて日常では使わないが、こういうときは存分に使う。使えるものは全て使うのは基本だ。
「ご注文は以上でよろしかったでしょうか。……では、ごゆっくり」
　作り笑いを浮かべながら礼をとり、すぐに隣の六番テーブルのオーダーを取りに行く。こっちも若い女性客二人、しかも俺と同じくらいの年齢だな。というか、見覚えのある顔だな。
「お待たせしました。ご注文をお伺いします」
「あれ～？　すーくんだ～」
「……明弘？」
「……のほほんさん？　それに簪？」
　妙に見覚えのある二人だと思ったら、のほほんさんと簪だった。まさか二人がこの店に来ているとはな。この店の雰囲気からして来てもおかしくはないが。
「二人がこの店に来てるとは思わなかったぞ。とりあえず――ご注文をお伺いします」
「すーくんが私たちに敬語使ってる～」
「変……」
「……今はバイト中なんだ。変とか言わないでくれ」
「……ごめん」
「謝る必要はないさ。で、ご注文は？」
　仕事中に知り合いに会うと、対応が難しいと昔のバイト先で何度か耳にしたが、本当だったんだな。これは、かなり対応に困る。
「すーくんのお勧めは～？」
「自分のお勧めはナポリタンですね。他には今日のランチなどもございます」
「じゃあ～、ナポリタンにする～」
「……私も」
「ナポリタンがお二つですね。ご注文は以上でよろしいでしょうか

？」
「いいよ～」
「かしこまりました。では、少々お待ちください」
礼をしてカウンターに戻る。ふぅ、本当に対応が難しいな。
「六番テーブル、ナポリタン二つです」
「はいよー」
厨房から了承の返事が聞こえる。それと同時に、返事をした先輩が手馴れたようにスパゲッティをゆで始める。
「須藤君、次は二番テーブルのオーダーお願い」
「わかりました」
すぐさま次の指示がよこされ、その指示通り二番テーブルに向かう。
ちなみに、のほほんさんたちにお勧めを聞かれたのを皮切りに、女性客に俺のお勧めを聞かれることが一気に増えた。
ついでに、今日一番売れたのはナポリタンだったそうだ。

「二人ともありがとうー！！　今日は一段とお客様が多かったから助かったわ」
バイト後、店長になぜかお礼を言われた。
「いえ、働かせていただいているんですから、気にしないでください」
「でも、本当に助かったからバイト代少し多めにしておいたわ。本当にありがとうね」
「こちらこそありがとうございます」
「……ありがとうございます」
店長から二人分のバイト代を受け取り、俺たちは店をあとにした。
「ラッキーだな。バイト代多めにもらえるなんて」
「はい、そうですね」

そんなことを話しながら学園へと向かっていると、後ろから不意に声をかけられた」
「すーくん、お疲れさま～」
「……お疲れ」
「のほほんさんと簪か。二人とも待ってたのか？」
「うん、そうだよ～。一緒に帰ろ？」
どうやら俺たちのバイトが終わるのを待っていたようだ。何のためなのかはよくわからないが。
「まあいいか。どうせ、行き先は一緒だしな。一緒に行くか」
「……うん」
「やった～！」
なぜそこで喜ぶのだろうか？　よくわからないが、喜んでもらえたならいいか。
俺たちは四人でＩＳ学園への帰路に着いた。

第百二十六話　割引券（前書き）

第百二十六話です

第百二十六話　割引券

「さて、と。そろそろ行くか」
「はい」
遥香はじめてのバイトから数日後。俺たちは二度目のバイトのために早朝の訓練を切り上げ、支度をする。
バイトがあるとはいえ、訓練の時間を減らすわけには行かない。なので、バイトに行く日は早朝から訓練するようにした。俺は別に睡眠時間が多少減ろうと関係ないが、遥香は大丈夫なのか少し心配だ。本人が大丈夫と言ってるから今のところは何も言わないが、何かあったときはすぐに何か手段を打つつもりだ。
着替えて学園を出る。そのままモノレールに乗り、レゾナンス――その中にあるバイト先のオープンカフェを目指す。
「どうもー」
「……こんにちは」
「あ、明弘君と遥香ちゃん。来てくれたのね」
挨拶をしながら店に入ると、すぐさま店長からの返事が返ってきた。今はちょうど客もいなかったらしく、他の先輩たちも俺たちに挨拶をする。
「二人とも、ちょうどいいところに来てくれたわね。昨日、知り合いからある喫茶店の割引券を貰ったんだけど、いる？」
「喫茶店、ですか？」
「そうよ。ちょっと変わってる喫茶店だけど、味は保障するわ」
「よろしければ是非いただきたいですが、他の先輩方は？」
「皆はいいって。だから遠慮しないで」
店長が笑顔で割引券を差し出してくる。断るのもなんなので、ここはありがたくいただいておこう。
「ありがたくいただきます。遥香、今日の帰りにでも行ってみるか」
「はい、わかりました」

「じゃあ、今日のシフトはランチタイムが終わるまででいいわよ。そのあとは夕方までそこまで混まないし」
「わかりました。ならそれまでは精一杯頑張ります」
「そこまで気張らなくてもいいわよ。普通通りでいいから」
店長、そんなんでいいんですか。普通、きっちりと働いてもらうとか言うもんだと思うが……まあ、店長がそう言うなら普通通りにさせていただこう。

「じゃ、お疲れ様でした。お先に」
「……お先に失礼、します……」
「はい、お疲れ様ー」
ランチタイムを終え、店長に挨拶をして店を出る。前回よりも時間が短かったからか、前よりも大分楽だ。昼過ぎだから流石に腹が減っているが、これから喫茶店に行くから別に問題ないか。
「っと、ここのはずだな。名前は……うん、ここで合ってる」
店長から貰ったチケットを改めて確認すると、店名が大きく書いてある。店先にも同じく大きく店名が。ここで間違いないな。
「にしても……店長の言う通り、少し風変わりみたいだな」
「そのようですね。他の喫茶店と比べるといささか奇妙に見えます」
「まあ、チケットもらっちまったし、店長も味は保障するって言ってたからな。大丈夫だろ」
ここまで来て、いまさら退くわけにはいかない。チケットももったいない。俺はこういうのを無駄遣いするのが大嫌いだ。
「入るぞ」
「はい」
若干緊張しながら、店に入る。喫茶店に入るだけでここまで緊張するのはこれが始めてだ。別に経験しなくてよかったんだがな。
「@クルーズへようこそ！」

店に入ると、いきなり店員に出迎えられた。まあ、そこは別におかしくないんだが、店員の服装がおかしい。

目の前の女性はいわゆるメイド服を着ている。他の女性店員も同じくメイド服だ。ちらほらと男性店員も見かけるが、そちらは執事服を着ている。どうやらここはメイド&執事喫茶とかいうやつらしい。

……店長、変わってるってこういうことだったんですか。

第百二十七話　第二のバイト（前書き）

第百二十七話です

第百二十七話　第二のバイト

「えっと、この割引券貰ってきたんですけど……」
「あ、はい。お預かりします。……このチケット……ちょっと、誰か店長を呼んできて！」
女性店員に店長から貰った割引券を渡すと、店員はいきなり慌てた様子でそんなことを他の店員に向かって叫んだ。それを向けられたのは数少ない男性店員で、こんなところにも女尊男卑の風潮が出ているんだと、暢気に考えていると、スーツを着た二十代後半くらいの女性をさっきの男性店員が連れてきた。おそらくあの女性が@クルーズの店長なのだろう。
「どうしたの？」
「店長、これ……」
そう言って店長に割引券を渡す店員。店長は割引券を一目見て、目を見開いた。
「……これを持ってきたのは？」
「こちらのお二人です」
店員の言葉で俺たちに視線が注がれる。が、それの数秒のこと。店長はすぐさま俺たちに歩み寄ると、いきなりとんでもないことを口にした。
「ねえ、あなたたち、ここで働かない？」

「あなたたちが働いてるオープンカフェの店長は私の知り合いなのよ。それで、ちょっと前にこの割引券をあげたんだけど、そのときに『この前、すごい子たちが入ったから紹介するわね』って言ってたの」
いきなり店長の口から衝撃的な言葉が飛び出てから数分後、俺と

遥香は事務所らしき場所で椅子に座り、@クルーズの店長の話を聞いていた。
「すごい子たち、ですか？」
「そう。『この割引券をその子たちにあげるから、そのときはよろしく』って」
「まさか、その子たちって――」
「たぶん、いえ十中八九あなたたちね」
どうやら俺たちは店長に嵌められたようだ。まあ、別に俺たちに不利益は今のところないからいいか。割引券は本物らしいし。
「事情はわかりました。それで、ここで働かないかというのは？」
「そのままの意味よ。あなたたちにはここで働いてもらいたいの。あなたたちみたいな逸材、見逃すつもりはないわ」
やっぱりか。遥香ならそうなってもおかしくはないだろう。俺はたぶん、おまけのようなものだろうな。
「もうすぐ本社から視察の人が来るのよ。そうじゃなくても、あなたたちにはぜひここで働いて欲しいの」
「でも俺たちはすでにバイトしてますし、二つ掛け持ちできるほどの余裕はありません」
「それはわかってるわ。あっちのバイトは普通どおりにやって、ここにはたまに来てくれればいいわ。今度の視察のときは来て欲しいけど」
なんかこの前のときと同じような待遇だな。レゾナンスの中にある飲食店の店長は皆こうなのか。まあ、絶対違うだろうけど。
「どうする、遥香？」
「……私は、どちらでも構いません」
ほとんど予想通りの返答。他のやつからすれば自分の意見を持っていないかのように見えるかもしれないが、そうではない。今の返答が遥香の意見であり、俺の意見に従うという遥香の意思だ。ここまで信頼されるのは悪い気はしないが、少し責任を感じるな。
「来れる日は少ないと思いますが、それでもいいんですか？」

「もちろん！」
即答だった。てっきり言葉のあやとか言うのかと思ったら、本気だったようだ。
「わかりました。では、これからよろしくお願いします」
「ありがとう！　じゃあ、早速この制服に着替えて！　そのまま仕事の内容を教えるから」
そういう店長の両手には執事服とメイド服が一着ずつ。いつの間に用意したのだろうか。制服に着替えて仕事説明というのもなかなか奇妙だが、まあ、これからの仕事のために一度着てみるのもいいか。
それにしても呼び方が店長だと被るな。……よし。しょうがないから、心の中ではこの店長のことを店長?と呼ぶことにしよう。なんかロボットみたいな名前だが俺の心の中で呼ぶだけだし、大丈夫だろう。他にいい名前が思いつかないし。

第百二十八話　嫌な予感（前書き）

第百二十八話です

第百二十八話　嫌な予感

「今日はこのぐらいにしておくか。明日は視察があるらしいし」
@クルーズで働くことになって数日。あれから二つの店で一度ずつバイトをし、今日は一日訓練の日にした。
とはいえ、明日は@クルーズで視察があるらしいので、それに支障がない程度に抑えておいた。
「視察は昼過ぎに来るらしいが、午前中のうちに行っておくか。いろいろと準備とかもあるかもしれないし」
「そうですね。では、朝食をとったらすぐに向かいますか？」
「そうするか」
「お、明弘、今日も訓練か？」
着替えを終え、自室に戻る途中で一夏と鉢合わせした。なんか最近はよくバイトに行ってたから、少し懐かしい気がするな。
「今さっき終わったところだ。お前の方はどうしたんだ？」
「ん、さっき鈴からウォーターワールドのチケット買ったんだけどさ。期限が明日までらしいんだよ」
「ウォーターワールドって先月できたところか。チケット手に入れるのもかなり苦労するってこの前聞いたな。それを手に入れてるなんて、すごいな鈴音」
「よく知ってるな。お前はそういうのに興味ないと思ってたけど」
「バイト先の先輩から聞いたんだよ。それでなんとなく覚えてただけだ」
「そういうことか。それより、お前バイト決まったんだな。どこだよ」
「教えたら絶対来るだろ、お前。教えるわけあるか」
バイト中に知り合いと遭遇するのがいかに辛いかはこの前身をもって思い知らされたからな。絶対に教えてやるわけには行かない。
「ちぇ、せっかく行こうと思ってたのにな」

「やっぱりか。教えなくて正解だったな」
軽口をかわしながら廊下を歩く。
「で、お前たちは明日も訓練か？」
「いや、俺たちは明日バイトなんだよ。帰ってきて時間があったら訓練するつもりだけどな」
「じゃあ、そのときは俺も誘ってくれよ。久しぶりに模擬戦しようぜ」
「別にいいぞ。久しぶりに叩き潰してやる。遥香も、もうお前に遅れをとることはないだろうし」
「……マジで？」
「マジだ」
遥香も一夏と幾度となく模擬戦を行った。そのときに感じた一夏のイメージを俺との訓練のときに遥香は幾度となく想像し、一夏への対策を自分の手で作り上げた。もう一夏に遥香を倒すことはできないだろう。
「じゃ、俺はこっちだから。また明日な」
「おう、また明日」
「さようなら、織斑一夏」
手を軽く上げながら別れの挨拶してくる一夏に俺と遥香がそれぞれ返す。そのまま一夏が去って行くのを眺めたあと、呟く。
「鈴音と一緒ということは、たぶん@クルーズには来ないだろうな。そうでなくてもあいつなら来ないだろうけど」
「私は織斑一夏について詳しく知りませんが、そうなのですか？」
「ああ、細かいところに気が回るくせに、女心についてとなるととたんに鈍くなる。そんなやつだ。それにあいつが外食をとるなんて滅多にないからな。大丈夫だろう」
「そうですか」
「とりあえず、明日は何事もなく済むことを祈るとするか。なんか少し嫌な予感がするし」
嫌な予感ほど当たるものだからな。神とか仏とかあんまり信じな

いが、こういうときは素直に祈っておこう。
　そういえば、神とかを信じない俺が神王と名づけられた機体を使うとは。少々皮肉な話だ。

第百二十九話　視察の日の大ピンチ（前書き）

第百二十九話です

第百二十九話　視察の日の大ピンチ

「どうもー」
「……こんにちは」
今までの三回と同じ、もはや定型句と化してきた挨拶をしながら店に入る。……なにやら店内が少し騒がしいが、どうしたんだろうか。
「あ、二人とも！　よかった、来てくれたのね」
「どうしたんですか？　慌ててるようですけど」
「それがねぇ、今日に限って二人も辞めちゃったのよ。駆け落ちらしいんだけどね、はは……」
「二人も、ですか？　それはちょっとやばいですね……」
今日は本店から視察が来る日。よりによってその大事な日に限って二人も辞めるなんてな。昨日の嫌な予感はこれだったのか。それにしては、胸騒ぎがあまり収まらないのだが。
「で、どうするんですか？　今日シフトの人は全員呼んであるんですよね。他のシフトの人を呼ぶんですか？」
「それはちょっと難しいわね。さっきまで何人かに連絡したけど、来れる人は誰もいなかったわ」
「じゃあ、オープンカフェの方から二人連れてくるとか？」
「できれば、それはやめておきたいわ。あまり迷惑はかけたくないし」
「そうですか。そうなると……臨時バイトとして誰か連れてくるぐらいですかね」
「やっぱりそうよねぇ。……よし、今からレゾナンスを探しまくって良さそうな子を見つけてくるわ！」
そんなことを言って、今にも店を飛び出そうとする店長？。確かにそれぐらいしか方法はない。……だが、こんな非常時に最高責任者が外れるのは店全体の士気にも関わりかねない。人数が足りない

上に店長？までここを離れては、他の店員の不安を煽る可能性がある。

「店長、そんなことしても代理が簡単に見つかるとは思えないんですが。そんな賭けのようなことで店長がここを離れるのは――」

「大丈夫！　明弘君と遥香ちゃんがいれば！　あとは頼んだわ！」

「ちょ、店長……あー、行っちまった」

それだけ言って、俺たちの返事も待たずに店を飛び出していってしまった。ってか、俺たちがいれば大丈夫って何が大丈夫なんだよ。

「……俺たちにどうしろって言うんだ、一体」

「どうしましょうか？　私たちが店長の代わりができるでしょうか？」

「おーい、明弘ー。ちょっと助けてくれー」

「遥香ちゃーん、こっちの手伝いお願い」

「あ、はーい」

「……今行きます」

これからどうすればいいのか少し考え込んでいたら、同時にヘルプが来た。俺と遥香、別々の指名だ。何やればいいかわからなかったからちょうどいいな。

「とりあえず、どうするかはそれぞれ終わったら話し合うか」

「わかりました。では」

「おう、がんばってこい」

「はい」

それだけ話し、それぞれ呼ばれた場所へと向かい始める。店長がいない間は、なんとかここにいる店員でなんとかしないいけないからな、俺たちも最大限努力しよう。

第百三十話　臨時バイトはクラスメイト（前書き）

第百三十話です

第百三十話　臨時バイトはクラスメイト

「さて、もうすぐ昼過ぎなんだが、どうしようか？」
そろそろランチタイムに入ろうかという時間帯。当然、店は開店され、皆仕事に就いている。が、店長？だけが未だに戻ってこない。
視察のときに、最高責任者がいないなんて減点対象以外の何でもない。
「たっだいまー！！」
おっ、この声は……なんとか帰ってこれたようだ。しかも、この声の調子からすると臨時のバイトが見つかったようだな。一応、形だけ聞いておく。
「店長、どうでしたか？」
「ふっふ～ん♪　完璧よ」
得意げに胸を張る店長？。その後ろに臨時のバイトらしき二人の少女が立っていた。
金髪と銀髪の二人組み。……なんか、とても見覚えのある組み合わせだなぁ。
「この二人が臨時バイトのシャルロット・デュノアちゃんと、ラウラ・ボーデヴィッヒちゃんよ！」
「よろしくお願いします。……って、明弘？」
「なに？　明弘だと？」
「……よう」
その二人は紛れもなく、クラスメイトのシャルロットとラウラだった。
「なるほど。そういうことだったのか」
「うん。まさか明弘と遥香がいるとは思わなかったけどね」

どうやら、案の定バイトをやってくれるやつが見つからなくて困り果てていた店長？にシャルロットが親切にも声をかけて、そのままずるずると……という事情らしい。確かにシャルロットならありえることだな。

「まあ、とりあえず俺や他の人を見て、それを真似てくれればいい。遥香は三分で完璧に覚えたからな」

ちなみに俺は七分ぐらいだ。執事なんてやったことがないから少し時間がかかったな。遥香の才能がうらやましい。

「うむ、了解した」

「それよりさ。明弘」

ラウラの返事のあと、シャルロットが少し戸惑いながら聞いてきた。

「なんでラウラはメイド服なのに、僕は執事服なの？」

「店長から事情は聞いたんだろ？　男女が一人ずつ減ったから、バランスをとるためだ」

「……それだけのために？」

「それだけだが、雇用に偏りがあるようでは視察の印象も悪くなるかもしれない。一ヶ月ちょっとぶりのシャルル復活と思って我慢してくれ」

「うぅ……」

やっぱり恋する女子としては想い人がいないとしても、女として見られたいものなのだろうか。よくわからないが、そうなのかもしれない。

「どうしたというのだ、シャルロット。とても似合っているではないか」

「……ラウラ、それ嬉しいけど嬉しくないよ……」

「？　何を言っている？」

金髪と銀髪の美少女（片方男装中）の話が噛み合っていない会話。だが、ラウラもこれが素で言っているのだからタチが悪い。俺は別にかまわないが。

どんどんとシャルロットのモチベーションが下がっていく。こんな状態で店に出すわけにもいかない。フォロー入れておくか。
「シャルロット、俺の話を聞け」
「……何かな？」
シャルロットにだけ聞こえるように小声でささやく。
「これは試練だ。一夏には男好きの可能性がないわけではない。そんな一夏の前でさりげなくアピールできればお前へのイメージがグッと上がるかもしれない」
「！」
「それにもしも一夏が男好きでないとしても、他のやつとは違うところを見せれば印象に残る可能性はある。だからこれは試練でもあるが、チャンスでもある」
「僕がんばるよ！」
おぉ、一気にモチベーションが急上昇した。若干、シャルロットの中で一夏がゲイである疑惑が出てきたかもしれないが。これは必要な犠牲だ。俺は何も悪くない。
「ラウラ、こういうところで女らしさを磨ければ、一夏をゲットできるかもしれないぞ」
「う、うむ。そうだな。がんばるとしよう」
同時にラウラのモチベーションも上げておく。これで準備は万全だ。
あとは、何事もなくバイトが終われば最高だな。

第百三十一話　歓声と拍手（前書き）

第百三十一話です

第百三十一話　歓声と拍手

二人のやる気も上がったところで、言い忘れていたことを伝えておく。
「男性客はメイドが、女性客は執事が主に対応することになっている。まあ、シャルロットは少々変則的だが、だいたいはそういう形になるからよろしく」
「うん、わかったよ」
「承知した」
「じゃあ、最初のうちは他の店員の動きをよく見てやり方を学んでくれ。今日は忙しい日だからいちいち教えることができない。行くぞ、遥香」
「はい」
もうランチタイムに入って少し経つ。この時間帯は混むからさっさと仕事に戻らなくてはいけないので、俺と遥香は手早くそれぞれの仕事を再開する。
「お待たせいたしました。紅茶とエスプレッソです」
女性客二人の前にそれぞれ注文の品を静かにおく。そのあと、@クルーズのサービスについて尋ねておく。
「お客様、ミルクと砂糖はお入れになりますか？　必要であればこちらで入れさせていただきますが」
「お、お願いします。ミルクと砂糖たっぷりで」
「わ、わたしもっ」
「かしこまりました。では失礼します」
注文どおり、紅茶とエスプレッソにミルクと砂糖をたっぷり入れる。ミルクも砂糖も入れない俺にとっては少し理解しがたいことだが、好みは人それぞれなので気にしないようにしている。
「どうぞ」
「ど、どうも」

「あ、ありがとうございます」
「それでは、こゆっくりと」
静かに一礼をしてその場を去る。なるべく音を立てないというのは少し難しいが。ＩＳとの戦闘に比べたらどうということはない。
と、そこで見逃せないものが視界に入ってきた。
男性客二人の対応していた遥香だが、様子がおかしい。
「キミ、かわいいねぇ。名前教えてくんない？」
「バイト終わったら一緒にドライブ行かない？　いいところ知ってんだ」
どうやらその男性客二人が執拗に絡んできているようだ。店員として露骨な拒否でもして店に迷惑をかけるかもしれない、とか思っているのか、遥香はキッチリと断りきれていない。いや、あれは断っているが男性客が諦めずに絡んできているのか。
こんなところ、視察の人に見られたら悪印象だ。周りの客も迷惑そうにしているし、それ以上に遥香を困らせている二人にふつふつと怒りが湧いてくる。
かわいい妹がいる兄ってこんな感じなのかとか考えるよりもまず先に、自然と体がそっちに向かっていく。まずは、あの二人を始末――いや、どうにかするか。
「お客様、大変申し訳ありませんが、当店でのそのような行為は控えていただけますでしょうか？」
「あ、なんだ？　てめぇ」
「野郎は引っ込んでろ」
思ったとおりの反応。読みやすいなこいつら。
「遥香、お前は早く仕事に戻れ」
「ですが……」
「大丈夫だ。すぐに終わらせる」
「……はい、わかりました」
俺の言葉に従い、遥香はこの場を離れてカウンターの方へと向かう。遥香にこんなところ見せたくないからな。

「あの子を助けるナイト気取りか？　それとも彼氏ぃ？　調子乗んじゃねえぞ」
「ナイトでも彼氏でもございません」
ナイトっていうのは一夏のようなやつを指すんだよ。俺みたいな人間にはふさわしくない。
「俺たちは『お客様』だぞ。邪魔するな」
「申し訳ございません。……てめえらみたいなやつは客じゃねえんだよ。とっとと出て行きやがれ」
二人にだけ聞こえるような声で、殺気を込めながら言う。すると、一瞬はひるんだが、驚くことに片方が正気に戻っていきなり握った拳を振り上げてきた。一般人で殺気に耐えるとは、俺のまだまだということか。
とりあえず、片手でパンチを止め、もう片方の手で軽く、延びきった相手の肘を殴る。本来曲がらない方向に力を加えられて男が肘を抱えてうずくまる。
「そちらから手を出してきたんだ。文句はねえよな？　これ以上やるっていうなら構わねえが、どうなってもしらねえぞ。やらねえならとっとと出て行きな」
さっきよりももう少し殺気を強くしながら告げる。別にギャグじゃないからな。
殺気と、一瞬でやられた実力にびびったのか、二人は逃げるように店を出て行った。当然、その前に代金は払わせたけどな。
そこで、改めて周りを見渡すと静まり返っている。……しまった。やりすぎたか。
「お騒がせして申し訳ございませんでした。こちらは気になさらずに、ごゆっくりとおくつろぎくださいませ」
場の静けさを何とかしようと、平静と保ちながら礼とともに告げる。これでも少しは気休めになるかもしれない。
だが、そんな俺の考えに反し、次の瞬間、歓声と拍手が店内に響き渡った。

……どうなってんだ、一体？

第百三十二話　立てこもり（前書き）

第百三十二話です

第百三十二話　立てこもり

「……これは、どういうことだ？」
遥香に絡んできた男共を追い返したら、なぜか店内に歓声と拍手が響き渡った。わけがわからない。
「すごいわねー。あの強そうな二人を簡単に追い返すなんて」
「しかも、美形。さっきの子の彼氏かしら？」
「でもさっき、彼氏じゃないって言ってたわよ」
「じゃあお兄さんかしら。絡まれてる妹さんを助けるお兄さん。カッコイイわ」
なんだか、いろんなところからそんな会話が聞こえてくる。俺と遥香が兄妹ではないことをできれば訂正したいところだが、そんなことをやっていては時間がかかる。仕方がないので、何も言わずにとっとカウンターの方へと戻ることにした。
「……明弘様」
「どうした遥香？　どこか怪我でもしたのか？」
カウンターに戻るなり遥香が少し申し訳なさそうに声をかけてきた。どこか怪我でもしているのなら今からでもあいつらを追いかけて報いを受けさせてやろうか。
「迷惑をおかけしてすいませんでした」
「迷惑？　なんのことだ？」
「今さっきのことです。私のせいでご迷惑をおかけして――」
「今のは俺が勝手にやったことだ。気にすることはない」
「ですが――」
「気にするな。いいからとっとと仕事に戻るぞ」
「……はい」
最後には折れた遥香が俺の指示通り、仕事に戻る。俺も仕事に戻ろうとしたら、背後から声をかけられた。
「さすがだね、明弘」

「うむ、見事な手並みだった」
「お前らも見てたのか。シャルロット、ラウラ」
「見てない人なんていないよ」
「だろうな。あれだけの騒ぎだし」
逆にあの騒ぎに反応しないほうがおかしいか。って、それよりも。
「お前たち、そろそろ出れそうか？」
「僕は大丈夫。ラウラも大丈夫だよね」
「問題ない。すぐに出撃できるぞ」
「出撃は少し違うが、まあいい。なら早く仕事に向かってくれ。この時間が一番混むんだ」
「わかった」
「承知した」
返事をするなり、指示を貰うためにすばやく店長？の方へ向かう二人。代表候補生の二人がいれば人安心だな。
いきなり登場した美少女二人（一人男装）に店内の客が一気にざわめく。今まで何度か見かけた常連らしき人たちもいきなりの美形の登場に驚きを隠せていない。
そんな店内を騒然とさせた二人のおかげで、一気に注文が殺到する。いつもよりも五割り増しの注文を店長の支持のもと、シャルロットとラウラ、遥香を中心にどんどんとさばいていく。

それからどれくらい経っただろうか。店の興奮も落ち着き始めたところで、面倒な事態は発生した。

「全員、動くんじゃねえ！！」
そんな大声とともに四人の男たちが店内に雪崩れ込んできた。
ジャンパーにジーパン、覆面を被り、手には銃。ショルダーバックからは紙幣が何枚もこぼれている。銀行強盗だな。昨日の嫌な予感はこれのことだったのか。面倒だな。
この@クルーズはレゾナンスのすぐ近くにあり、銀行なんかも近

くにある。おそらくそこで銀行強盗をしてここに立てこもろうとした、というところだろう。

外からパトカーのサイレンが聞こえる。警察は到着したようだが、いかんせん人質がいる状況では不用意に突入することができない。となると――

「お客様、@クルーズにようこそおこしくださいました」

「ん？　なんだてめぇ？」

強盗犯がいきなりのことで驚いている。ついでに周りの客も驚いている。まあ、当たり前か。

警察が当てにならない以上、俺たちが何とかするしかない。幸い、ここには代表候補生が二人、しかも片方は現役の軍人だ。これなら何とかなる。そうなると俺のやるべきことは、こいつらの注意を引き付け、隙を作ることだ。

「ただの執事でございます。ご注文のほうはお決まりでしょうか。当店お勧めは苺のタルト、ショートケーキ、モンブランなどです。ドリンクはコーヒーと紅茶をさまざまな種類ご用意いたしております。ケーキセットですと、ケーキとドリンク、それにデザートがついてとてもお得になっております」

この異常事態の中で一人普通に接客をする人間。異常の中では正常な人間の方が異常とされる。強盗犯の注意も俺に集中した。狙い通り。

「俺たちは強盗犯だぞ。なにしてんだ」

「誰であろうと、お客様はお客様です。そしてお客様が気持ちよく過ごせるようにするのが執事とメイドの役目でございます」

あくまで冷静に、それでいて相手に主導権を渡さないようにこっちのペースに乗せる。

「もうなんでもいいからよ。とっととどっか行けや」

「かしこまりました。では、日替わりケーキセットを四つでよろしいでしょうか？」

「ああそれでいいよ。とっととどっか行け」

「では、少々お待ち下さい」
「あ、メイドさんに持ってこさせろよ」
リーダー格の男とは別の男がそんなことを俺に伝える。はっきりいって何を考えているのか意味不明だが、これはラッキーだな。
「おい、何言ってがんだ。お前」
「まあまあ兄貴、いいじゃないッスか。俺、メイド喫茶ってはじめてなもんで」
「……けっ、まあいいか」
そんな会話が後ろから聞こえる。馬鹿なやつらだ。
「明弘！　なんであんなことしたのさ！」
カウンターに戻ると、いきなりシャルロットに小声で怒られた。器用だな、シャルロット。
「あいつらの注意を俺に引き付けるためだ。その隙を突いてシャルロットとラウラであいつらを取り押さえてくれ」
「そんなの失敗したら明弘が危ないでしょ」
「だがこのままではここにいる全員が危険なままだ。少しでも早く取り押さえる必要がある」
「でも――」
「明弘様」
シャルロットの声を遮って遥香が口を開く。
「私も手伝います。明弘様だけを危険な目にはあわせたくありません」
「俺はお前を危険な目にあわせたくない。できることならここで待機してもらいたいが……やるんだな？」
「はい」
俺の質問に遥香はしっかりと頷きながら答える。確かに二人で四人を取り押さえるよりも三人の方がいいといえばいい。代表候補生には負けるが、遥香も十分戦力になる。
「だが、危険だと思ったらすぐに逃げろ。絶対に怪我はするな」
「了解しました」

「シャルロットとラウラもだ。俺がどうなろうと、構わずあいつらを取り押さえろ」
「わかった」
「……わかったよ」
ラウラは迷わず、シャルロットは渋々といった様子で頷く。俺のことなんか心配しなくてもいいのにな。
「ここで二人に何かあったら一夏に申し訳ないからな。……じゃあ、そろそろ始めるとするか」
「はい」
「うん」
「うむ」
俺がどうなろうが、こいつらに怪我はさせない。あの四人を取り押さえてしまえば、それで終わりだ。

第百三十三話　制圧（前書き）

第百三十三話です

第百三十三話　制圧

三人とだいたいの作戦を立て、いよいよ出撃だ。
「お待たせいたしました。日替わりケーキセットです」
まず、俺とラウラが注文の品を持って接近する。もちろん、強盗犯の注意は俺に向き、次の瞬間にはその隣のラウラに釘付けになる。チャンスだ。
俺の合図と同時、いやそれよりも一瞬早くラウラが動く。その手に持っていたトレーをひっくり返し、上に乗っていた水の氷の指弾のように飛ばし、四人のトリガーにかかっていた指を直撃する。すごすぎるだろ。
「痛っ！　てめぇ、何を――」
リーダー格の男が声を発すると同時にリーダーを含めた三人がラウラに、残った一人が俺に銃を放ってくる。
ラウラは避けれるが、俺は訓練なんて一切受けたことのない一般人。銃弾なんて避けられるわけがない。が、大丈夫だ。問題ない。
「……させません」
俺に銃口を向けた男の横、誰のいなかったはずのそこに、いつのまにか小柄な少女――遥香の姿。銃が発射される直前に、遥香の手によって銃口が俺からわずかに逸れ、俺に当たることなく通過していく。
遥香は以前、ラウラとの訓練でラウラの気配の消し方を『複写（コピー）』したことがある。まあ、本物には遠く及ばないが、そのときラウラ自身にも上出来だと賞賛を受けた。一般人の死角に突くなんて造作もない。
「ナイスだ、遥香」
突然現れた遥香に男の意識が集中した隙を突き、いっきに背後に回る。その際に銃を持つ手を背中に無理矢理回させ、銃口を男の背中に向ける。これで銃は使えない。

「もしここで発砲すれば、自分自身に風穴が開く。おとなしく投降するならよし。抵抗するつもりならこのまま腕を一本なくすことになる」

背中に回した腕をさらにきつくする。本来曲がらない方向に力を加えられて、男の顔に苦悶の表情が浮かぶ。関節技は俺の唯一の格闘技術なんでね。そう簡単に解かせない。

案外あっさりと男は諦めたようで全身から力が抜ける。まったく銀行強盗できるならもう少し根性を見せろよ。まあそうした場合は隻腕になるが。

力の抜けた男の手から銃を奪い、首に手刀を当てて失神させる。本来なら動けないようにロープか何かで縛っておきたいが、ないのでしょうがない。

「目標4、制圧完了。そっちはどうだ?」

他の三人の相手をしているだろうラウラと作戦ではラウラのサポートに回るはずだったシャルロットの方に視線を向ける。

「全制圧、完了」

「こっちも終わったよ」

視線な先ではすでにシャルロットとラウラによって取り押さえられた強盗犯三人の姿。俺たちが一人相手にしてる隣で、三人を相手にして俺たちとほぼ同時に制圧を完了させるなんて、強すぎるだろ。これが一般人と代表候補生の格の違いか。

「……私たち、助かったの?」

一般客からそんな呟きが聞こえる。それが引き金になったように店の中がざわめきはじめる。確かにこんな光景、信じられないかもな。

これで一件落着、そう思ったときラウラによって取り押さえられていたリーダー格の男がいきなり大声をあげる。

「捕まってムショで暮らすぐらいなら、いっそ全部吹き飛ばしてやらぁ!!」

そういう男のジャンバーの中にはプラスチック爆弾。この店なん

て簡単に吹き飛ばせるであろうほどの大きさだ。
くそっ、こんな隠し玉を用意してたなんて想定外だ。どうすれば――
「諦めがが悪いな」
リーダー格の男に一番近いラウラが動じることなく、呟く。次の瞬間、――
「「チェック・メイト」」
ラウラとシャルロットが強盗犯から奪った銃を発砲。その銃弾は爆弾の起爆装置と信管、導線だけを的確に撃ち抜いた。どんな神業だ。
最後の切り札さえも抑えられたリーダーががっくりとうなだれる。二人はそれを傍目で確認すると、俺と遥香の方に近づいてきた。
「ごめん、明弘。僕たち一応代表候補生だから、こういうのに関わってたのが知られるといろいろと困るんだ。だからこのあとのことは頼んでいいかな？」
「あ、ああ。どうだな。わかった。じゃあ、ここから俺たちが何とかするから二人は裏口から出てくれ。警察はこっちに集まってきてるし、今なら誰にも気づかれずに出れるはずだ」
「うん。あと……着替えてからでもいいかな」
「……早くしろよ。ばれたら大変だ。着替えなら最初に使ったところに行け。そこにあるはずだ」
「うん、ありがとう」
「恩に着る」
「こっちこそ助かった。礼を言う」
「ふふっ、じゃあね」
とても今まで事件が起こっていたとは思えないような微笑を残しシャルロットが去り、ラウラも続く。
これで、本当に一件落着だな。事情聴取とか面倒だが、別にいいか。

第百三十四話　バイト代（前書き）

第百三十四話です

第百三十四話　バイト代

「くそ……今日は滅茶苦茶疲れたな。特に事情聴取とかが」
「そうですね」
強盗犯による面倒な事件も終わり、警察の事情聴取も終わらせ、やっとＩＳ学園に戻ってきた俺たちは寮の廊下を歩きながらそんなことを呟く。
「シャルロットとラウラの分のバイト代も渡されたし、渡しに行かねえとな」
「はい」
二人の分のバイト代が入った封筒をポケットから取り出し、二人の部屋に向かう。店長？いわく、あんなことがあり、しかも二人は警察が来る前に姿を消していたため、バイト代を渡せなかったそうだ。
「この部屋だな――って、何か甘いにおいがするな」
「はい。それにお二人のものではない声もかすかに聞こえます」
「この声は……一夏か。なんだか知らんが、邪魔しちゃ悪いし、明日にでもするか」
シャルロットとラウラにすれば至福のときだろう。それを俺たちが邪魔するなんて無粋にもほどがある。別に明日でもいいだろう。
「あ、そういえば家にいつ帰ろうか」
俺たちの部屋に戻る途中、前から予定していた唯一のことを思い出し、呟く。
「そうですね、明日はお二人にバイト代を渡さなければいけませんし、いつがいいでしょうか」
「確か一夏が今度家に帰るとか言ってたな。あいつの家にも行って見たいし、やっぱり早めに行っておくか」
それにちょっとやりたいこともあるしな。そう付け足す俺にその言葉の意味を理解している遥香がそうですね、と応える。

「じゃあ、明日の朝にバイト代を渡して、昼には出るか。そうすれば明後日には着くだろ」
「わかりました。では、今日のうちに用意を済ませておきます」
「とはいっても、ほとんど必要ないけどな」
だいたいのものは家にあるし、わざわざ持っていく必要もないだろう。帰りには荷物が増えているかもしれないし。
前回はほとんどいられなかったし、今回は泊まっていこうか。そうなると織斑先生に外泊許可を――って夏休み中はいらないのか。
あっちに着いたらまず束さんにあれを頼んで、あとはクーに料理を教えて、一応送ってもらう前にあれの調整とかもできるかぎりやっておくか。ここ半年は遥香がいなかったからあんまりはかどらなかったが、遥香がいれば百人力だ。俺よりの機械の扱いとかうまいし。
俺が拾う前は機械関係のことでもしていたのだろうか。気になるといえば気になるが、こいつは過去のことを触れられるのがあんまり好きじゃないみたいだから聞かないことにしてる。俺もそうだし。
ともあれ、久しぶりの我が家だ。思う存分くつろいでくるとしよう。

第百三十五話　帰省（前書き）

第百三十五話です

第百三十五話　帰省

「ただいま」
「ただいま帰りました」
相変わらず薄暗い室内。そのなかで明るく光るディスプレイに囲まれる女性に歩み寄りながら、俺と遥香はそれぞれ挨拶をする。
女性――束さんは、自分を取り囲むディスプレイから視線を外して俺たちを見ると満面の笑みを見せる。
「やあ二人とも！　おかえり～♪」
「おかえりなさい、明弘、遥香」
束さんの言葉に、その後ろあたりに控えていたクーが続く。空の皿が隣に置いてあるな。どうやら夕食をとった直後のようだ。時間も時間だから当然だが。
「二人とも一ヶ月ちょっとぶりだね～」
「はい、ちょうど夏休みなんで帰省するのもいいかな、と思いまして」
「そうなんだー。晩ご飯は食べたの？」
「時間も時間なんで適当に食べてきました。そっちも食べてたみたいなんでちょうどいいですね」
束さんたちが食べていないならまだしも、俺と遥香、二人分だけ作るというのもなんだかもったいない。俺も遥香も小食だし。そういえば、なんで遥香は小食なんだろうか？　俺は何日も食えない日々を何年か続けてきたら自然とそうなったけど。
クーに料理を教えるのは明日の朝か昼にしよう。メニューはあとで冷蔵庫の中身を見て決めるとしよう。足りない場合は買ってくればいいし。
「今回は泊まっていきます。やりたいことがあるんで」
「やりたいこと？　くーちゃんに料理教えるの？」
「まあそれもありますが、『あれ』らの調整をしたいんです」

俺の言葉を聞いて、束さんが一瞬驚いたような表情になったが、すぐにいつもの笑顔に戻って口を開いた。
「でも前は、『今のところは使わない』って言ってなかったっけ？」
「事情が変わりまして」
「神王の拡張領域はほとんど残ってないよ？　この前《イカロスの翼》付けちゃったし」
「大丈夫ですよ。その辺は考えてあります」
俺の答えに束さんは特に言及せず、「そっかー」と明るい声で言う。俺の意図に気づいたのかどうかはわからない。相変わらずわからない人だ。
「私も手伝おっか～？」
「いえ、束さんにやってもらったら俺のやることがなくなりますから。遥香もいますし大丈夫ですよ」
実際遥香がいても俺のやることがかなり減ってしまうのだが、束さんよりはマシだ。俺の勝手な事情だが、あれらの調整は俺自身でやりたい。遥香にはあくまでサポートに専念してもらう予定だ。
「うん、確かにハルちゃんがいれば大丈夫だね」
「束さま、これから食器の片づけがあるので失礼します」
「ん、クー、手伝おうか？」
「いえ、量も少ないですし一人で大丈夫です」
そう言うと皿を持って部屋を出て行ってしまった。そっけないように見えるが、あれがクーなので別に気にしない。
そういえば前々から思っていたが、遥香とクーって似てるよな。いつでも敬語だし、背が低い。それに遥香は俺に、クーは束さんに従ってるし。料理の腕は……遥香の方が格段に上だが。
「っと、それよりも調整を始めてしまうか。遥香、行くぞ」
「はい」
「がんばってね～♪」
とても明るい束さんの声に押されるように俺たちはその部屋を出て行った。

第百三十六話　織斑家、全員集合（前書き）

第百三十六話です

第百三十六話　織斑家、全員集合

いきなりだが、セシリアとシャルロットは固まっていた。

二人とも一夏が今日家に帰っていることを知り、織斑家を訪問した。そのあと一夏と一緒にケーキを食べて、二階にある一夏の部屋に案内してもらい、今に至る。

一夏には椅子が一つしかないからベッドにでも座っててくれ、と言われたが二人はそのベッドを目にして動けずにいた。

もちろん好意を寄せている相手のベッドというのもあるが、もう一つ理由がある。

それは、一夏のベッドの掛け布団が不自然にも膨らんでいることだった。

明らかに人が一人入っているであろうその膨らみに、二人は視線を外すことができない。

「……ねえ、セシリア」

「……なんですの？」

ベッドから視線を外さず、二人は会話を交わす。

「……あれ、おかしいよね？」

「……そうですわね」

「「……」」

痛いほどの沈黙。二人はある一つのことを想像――もとい妄想し、暗い笑みを浮かべる。二人から殺気のようなものを感じるが、気のせいではないだろう。

そのとき、ベッドの膨らみが動いた。二人とも一瞬驚くが、気を引き締めて一歩一歩ベッドに向かって歩み寄っていく。

「……誰だよ、一体。人がせっかく気持ちよく寝てるって言うのに」

「「……え？」」

掛け布団の中から聞こえた眠たげな声と、現れた姿に二人とも驚きのあまり再び固まってしまった。

「なんか、殺気みたいなものを感じたが……。ん？　セシリアにシャルロット、お前たちこんなところで何してんだ？」

「それはこっちの台詞なんだけど、一体何をしてるのかな？」

「誰かと思ったら、あなたでしたの。紛らわしいことはしないでいただけませんか？」

シャルロットは少し呆れた表情で、セシリアはため息をつきながらベッドから出てきた男――明弘に質問する。

「見ての通り一夏のベッドで仮眠を取っていただけだが。……ひょっとして、一夏のベッドに女が寝てるとか思ったのか？」

「う、ううん！　そんなことないよ！」

「そ、そうですわ！　わたくしがそんなやましいことを想像するはすがないでしょう！？」

その反応自体が思いっきり『はい』と肯定しているのだが、明弘はそれを口には出さず、まあどうでもいいが、と応える。

そのとき、いきなりドアが開かれる。扉の向こうには鈴音の姿があり、その後ろには箒とラウラの姿もある。

「……アンタたち、一体何してんのよ」

「仮眠だ」

「え、えっとね……」

「これはなんといいますか……」

鈴音の質問に明弘は即答するが、セシリアとシャルロットはまだ明弘の登場、そしてその明弘の言葉による動揺から回復し切れておらずまともな返答ができていない。

そんな二人を尻目にのそのそとベッドから上半身を起き上がらせる明弘。最初の眠たげな表情から一転、いつもの表情に戻った明弘は目の前の美少女五人を眺める。

一夏の部屋に自分と女子が五人。本来ならありえない状況を目の前にして明弘は平然と呟く。

「ああ、お前たち一夏に会いに来たのか。ご苦労なことだ」
じゃ、俺は引き続き仮眠を取るから一夏といちゃつくなら下で静かにやれよ。その言葉に五人そろって顔を赤らめるのを確認して、よし、と少し満足げな表情を浮かべると再びベッドに潜ろうとする。
だがその直後、一階から上がってきた一夏と視線が合ってしまった。一夏は一瞬固まるがなんとか声を振り絞って明弘に質問する。
「お前、何してんだ？」
「見てわからないのか？　仮眠だ」
沈黙。女子五人はさっきの明弘の言葉でそれぞれ自分の世界に行ってしまい、一夏と明弘の方に意識を向ける余裕なんてあるはずもなかった。
五人が現実の世界に戻り、明弘がベッドから出てきて全員で一階に降りたのはそれから十数分後のことだった。

第百三十七話　主夫二人（前書き）

第百三十七話です

第百三十七話　主夫二人

「……で、どうして皆そろって連絡してくれなかったんだ？」
「俺は昨日連絡しておいただろうが」
「『明日お前の家行くから』って、なんで決定事項だったんだよ。普通、最初は行っても良いかって聞くもんじゃないか？」
「別にいいだろ。何も問題なかったんだから」
一夏と明弘は会話を交わしながら、それぞれせわしなく動き回る。場所は織斑家のキッチン。ちょうど昼前ということもあり、二人は昼食の準備をしていた。
誰も来るとは思っていなかった一夏は自分の昼と夜の食事のための食材、明弘は自分と一夏の二人の二食分の食材しか用意していなかったため。二人のを合わせても六人分の食材しかない。しかもそれぞれ食材がばらばらだが、二人は手馴れた手つきで準備を進める。
「じゃ、肉は全部一口大に切って一緒に炒めるか。味付けは……タレを使えばいいな」
「野菜の方はサラダに使って、残ったのは野菜炒めにするぞ。味付けはどうする？」
「肉の方はタレだから、そっちはあっさりと塩とかでいいんじゃないか？」
「ん、了解」
明弘が用意した豚肉と自分が用意した鶏肉を一口大に切る一夏とそれぞれ用意した豊富な野菜を切る明弘。二人とも言葉を交わすことなく、自然と肉担当が一夏、野菜担当が明弘という役割分担を行っていた。
「一夏、このトマトとキュウリ、どこで買った？　かなり新鮮だな」
「ああ、それは八百屋で買ったんだよ。他のはスーパーで買ったんだけど、その二つは八百屋の方が鮮度も良さそうだったからな。値段もスーパーよりも三円安かったんだぜ」

「今度その八百屋教えてくれ。そういえば、俺も鶏肉の方を買ってくればよかったな。豚肉の方が百グラムで4．5円分安かったからつい豚肉買っちまった」
「いや、でも全部鶏肉よりは豚もあった方がいいかもしれないぞ。あ、ちょっと下味付けるから塩と胡椒取ってくれ」
「おう」
キッチンから聞こえてくるそんな会話を聞き、待機している女子五人のうち、何人かが苦笑いをする。
「なんなのよ、あいつら。細かすぎるでしょ」
「百グラムあたりの値段を計算する明弘もすごいけど、二つのお店の値段をしっかり覚えてる一夏もすごいね」
「まるで、本物の主婦だな」
比較的こういうことに接点があった鈴音、シャルロット、箒が口々に呟く。その言葉には驚愕が滲み出ていて、いかに三人が一夏たちの会話に驚いているかが伺える。
大抵のことを召使にやらせていたセシリアと生粋の軍人であるラウラの二人は一夏たちの会話の内容がよくわからず疑問符を浮かべていたが、三人の驚きようからすごいことなのだろうと一応納得する。
「というかなんでお前はスパゲッティを持ってきてんだよ」
「いろいろあって美味いスパゲッティの作り方を覚えてな。ちょうどいいと思って」
「へぇ、あとでちょっと教えてくれよ。今度千冬姉に振舞ってみたい」
「別にいいが、その代わりさっき言ってた八百屋教えろ」
「おう。情報交換だな」
そんな暢気な会話をしながらも二人は片時も止まることはなく、常に動き回っている。決して広くはないキッチンだが、ぶつかる様子などまったく見せない。それどころか、自分の作業をしながらも相手の手伝いすらしている。無駄に凄いコンビネーションだ。

二人で七人分の料理を作るには早すぎるほどのペースで昼食がどんどん作られていった。

第百三十八話　昼食とその後（前書き）

第百三十八話です

第百三十八話　昼食とその後

「できたぞー」
　一夏と明弘が完成した昼食を持ってくる。メニューはトマトソーススパゲッティ、豚肉と鶏肉の炒め物、野菜炒め、サラダだ。
「少し量が少ないが、勘弁してくれ。材料がこれしかなくてな」
「これだけあれば十分だろう」
　一夏の言葉にラウラが答える。他の四人もラウラの意見に同意するように頷く。
「そう言ってもらえると助かる。じゃ、早速食うか。いただきます」
　一夏の音頭で七人は食事を始めた。料理は全て大皿に盛られていて、それぞれが食べる分だけ自分の小皿に取っていく。
「おいしいな。これは……豚肉と鶏肉か？」
「ああ、俺が買ってきた鶏肉と明弘が買ってきた豚肉を一緒に炒めたんだ」
「本当においしいですわね。即席で作ったとは思えませんわ」
「そのときにある食材でどうにか料理を作るのには俺の一夏も慣れてるんだよ。昔は家計も少しきつかったし、特売のときに買い溜めしておいてって感じだったな。もちろん、新鮮な食材を使った方がいいんだけど、束さんとか全く気にしなかったし」
　そんな会話を交わしながら、食事を進める。そこで、今までなぜかサラダをじっと見ていた鈴音が急に口を開いた。
「ねえ、一つ聞きたいんだけど」
「ん、なんだ？」
「このサラダ作ったのどっちよ？　キュウリが凄いことになってるんだけど」
「俺だが、何か問題あったか？」
「問題ってほどのことじゃないんだけど」
　そう言って鈴音が箸でキュウリを持ち上げて明弘に見せる。

「何よこの薄さ。一ミリぐらいしかないじゃないの。どうやればこんな薄くできるのよ」
「俺の中ではそれが標準で最高の薄さだ。ＩＳの訓練よりは簡単で慣れればそれくらいはできるようになる」
まあ、一ヶ月くらい延々とキュウリの薄切りをしつづければできるようになるだろ、とあっさりとんでもないことを言う明弘に鈴音だけでなく他の女子四人も唖然とする。さきほど一足先に教えられていた一夏はただただ苦笑いを浮かべる。
「遥香の方がもっとすごいぞ。あいつなら一ミリ以下の薄さで切れる」
「なんだよ、その無駄な高スペックは。というか、遥香はどうしたんだ？　いつも一緒にいるのに」
「ちょっと用事があってな。今日は来れない。それより皆ボケっとしてないで早く食え。肉とかスパゲッティが冷めるだろうが」
明弘の言葉でようやく一夏たちが食事を再開する。しかし、食事を促した張本人である明弘は相変わらずゆっくりと、少しずつ料理を口に運んでいく。
明弘が食事を促した理由。料理が冷めてしまうというのもあるが、もう一つ、できる限り自分が食べる量を少なくさせるためであったことは明弘以外だれも知ることはなかった。

「ふぅ、暑いな」
食後の緑茶を飲みながら一夏が呟く。料理を作っているときや食べているときはさほど気にならなかったが、何もしていないと無性に気になる。
「あ、そう言えば」
何か思い出したように、視線を鈴音に向ける。鈴音はくつろいでいたところにいきなり意中の相手の視線を向けられて、思わずびっ

くりしてしまった。
「な、何よ？」
「鈴、覚えてるか？　あの双子のこと」
「双子？」
「あいつらだよ。小五のときのクラスメイトだった」
「……あー、思い出したわ」
「何の話をしているのだ？　二人とも」
一夏と鈴音の会話に箒が割ってはいる。明弘を始めとする他の四人も何の話なのか興味津々の様子だ。
「今言ったとおり、小五のときのクラスメイトの話だよ。箒も知ってるはずだぞ。小四の一月に転校してきたやつだし」
「一月？　……ああ、思い出したぞ。しかし、あの二人がどうかしたのか？」
「ちょ、ちょっと！　僕たちには話の流れがさっぱりわからないんだけど」
「私たちを無視して話を進めるな」
「そうですわ！　説明していただけませんこと」
先導していた箒も話に加わってしまい、残された女子三人は慌てて説明を要求する。明弘も少しは興味があるようだが、特に何も言わずに視線を一夏たちに向けるだけ。しかし、その視線が説明を欲していることをしっかりと伝えている。
「わかった。わかったから大人しくしてくれ。えっと、あれは俺たちが小四のとき――」
突然迫られた一夏も少し慌てながら三人を静め、少し懐かしむように話を始めた。

第百三十九話　思い出話（前書き）

第百三十九話です

第百三十九話　思い出話

「箒が転向する前、一月だったな。クラスに転校生が二人来たんだよ。その二人は兄妹だったんだけど瓜二つで、転校してきた時期が普通じゃなかったこともあって、結構噂になったんだ」

一夏が緑茶を飲みながら懐かしそうに語る。箒もそうだったな、と懐かしむ表情になる。その双子と面識のある鈴音だったが、この話を聞くのは初めてだったようで他の四人と同じく興味深々に聞いている。

「クラスが同じってこともあって、少しずつ話すようになってな。一ヶ月もしないうちに仲良くなったんだ。そのあと小四の終わりに箒が転校しちまったんだが、小五のときも同じクラスでな。箒と入れ違いに転校してきた鈴とも親しくなったってわけだ」

「なるほどな。それで箒と鈴音が知っていたってことか。で、そのあとは？」

「それがなぁ、鈴とも仲良くなって少し経った、八月の終わり辺りだな。夏休み明けからいきなり学校に来なくなったんだよ。何日か経って急に転校届けが来て、そのまま一度も会ってない」

「小五のとき……五年前の夏ってことか。俺の記憶が残っているのと一致するな」

明弘の表情が神妙になる。突然いなくなった双子、自分の記憶の始まり、どちらも時期が一致する。とても偶然とは思えない。

もしかしたら、その双子というのは自分のことなのかもしれない。自分の過去の手がかりになる可能性を見出し、明弘の表情が微かに明るくなる。

だが、そんな明弘の考えをばっさりと否定する言葉が一夏の口から飛び出た。

「言っておくが、その二人とお前は関係がないと思うぞ。その二人の髪の毛は真っ赤だったし、目も真っ黒だった」

兄の方はお前に少し似てる気はするけどな、と付け足すが、明弘は自分の過去に関する手がかりを得れたと思っていたため少し落胆し、あまり聞いていなかった。

「懐かしいな。兄の方とは一度だけだが剣道で手合わせしたが、あれには衝撃を受けた」

「え？　そんなことあったのか？」

箒の言葉に一夏が初耳だと、尋ねる。箒はそう言えば、と続けた。

「ああ、ちょうどお前がいなかったときだったな。何気なく家のことを話したら、一度やらせてほしいと言われてな。その日の放課後に家の道場で手合わせしたのだ」

「へえ。でも、お前が衝撃を受けたなんて驚きだな。強かったのか？」

「いや、剣道という範疇で言えばそこまで強いとはいえない。ただ――」

そこまで言って、一度間をおいたあと、箒は続ける。

「あれは実践向けの戦い方だ。私はそう思う」

「実践向け？」

「まずあいつは防具を着けなかった。身を軽くするためと言っていたが、防御のときはしないで防がずに避けることを中心にしていた。真剣での斬り合いならば刃こぼれを防ぐために回避を選ぶのはおかしくない。それにあいつの攻撃は、面や胴に混じって、首筋、心臓などの急所を無意識のうちにだろうが狙っていた」

箒は思い出しながら淡々と呟く。その表情は懐かしそうだが、とても真剣な表情だった。

剣道を習っていた一夏も箒の言った異常さに驚く。代表候補生であり、少なからず生身での戦闘に関わってきた四人は確かに実践向きだ、と呟く。その中で剣道についての知識もほとんどなく、生身での戦闘もほとんど行ったことのない明弘だけはその異常さがわからずほとんど表情に変化が見られない。

「へぇ、あたしには全くそうは見えなかったけど。クラスメイトと

普通に話してたし、ごく普通の人としか思えなかったわ」
　箒と鈴音の印象は結構相違しているが、そのことを疑問に思う前に他の女子三人が口を開いた。
「そういえば、わたくしも幼少時代に双子の友人がいましたわ。そのお二人も兄妹でした」
「僕も小さいころ、そんな友達がいたよ」
「私もだ。私の場合は姉妹だったが」
　口々に言う三人。皆それに興味を持ち、詳しい話を聞いてくる。
それに応えて、三人はそれぞれの思い出を語りだした。

第百四十話　三人の話（前書き）

第百四十話です

第百四十話　三人の話

「わたくしが五歳くらいのころですわ。知り合ったお二人がいまして、よく一緒に遊んだりしていました。そのお二人はわたくしより一つ上の六歳とおっしゃってましたわ」

最初にセシリアが話し出す。一夏たち六人はそれを静かに聞いている。

「しかし、会って二ヶ月ほど経ったとき、行かなければならないところがあるとおっしゃって、別れましたの。それ以降は全く連絡も取れていませんわ」

「へぇ、そいつらも貴族だったのか？」

「いいえ、普通の一般市民だったそうです。貴族の子として育ったわたくしにいろいろなことを教えてくださいましたわ」

懐かしい友人を思い出し、セシリアが微笑む。そのセシリアの話が終わると、続いてシャルロットが口を開いた。

「次は僕の番だね。えっと、僕の場合は七歳のときに会ったんだ。僕と同い年の日本人で、フランスには観光できたって言ってた。それから二ヶ月とちょっとぐらい毎日のように遊んでたんだけど、国に帰っちゃって会えなくなったんだ。その影響で日本にちょっと興味を持ったんだ」

「シャルがやけに日本の文化に順応できるのは、それも関係してるのか？」

「たぶんそうかもね。でも僕自身、日本文化が気に入っているのも大きいと思うよ」

「その双子はどんなやつだったんだ？」

「室内で静かに過ごすのが好きな兄と外で遊ぶのが大好きな妹の正反対な双子だったよ。でも、なんだかとても似てる二人だったなぁ」

「あたしの知ってる二人と似てるわね。年も一緒だし」

「うーん、でも髪と目の色がどっちも薄い青色だし、地方の方から

来てるって行ってたからたぶん違うと思うよ。まあ、引っ越ししたなら話は別だけど」
「そうなんだ。じゃあ別人ね、きっと」
シャルロットの話が終わる。それと同時に最後のラウラが待ってましたといわんばかりに話し始める。
「私が九歳のとき、ドイツ軍に仮入隊という形で姉妹が入ってきたんだ。年は私の二つ上。ドイツのＩＳ企業から試験機のデータ取りのためということでＩＳ専門の部隊に入隊することになったんだ。まだ第一世代型ＩＳが実用化され、第二世代型の研究が始まったばかりという時期でな。軍にあったＩＳは第一世代だけだったのだが、その二人が所持していた試験機はスペックだけで言えばおそらく初期第二世代を上回り、軍のＩＳでは相手にもならなかった」
「それは凄い性能だな。もしかしてシュヴァルツェア・レーゲンを作ったのも？」
「わからない。そもそもその二人がいた企業の名前などは当時の上層部しか知らず、私たちにはドイツのＩＳ企業ということしか伝えられていなかったんだ」
「でも、今のお前はドイツ最強のＩＳ部隊隊長だろ？　記録とかを少し調べればわかりそうなもんだけどな」
「私も一度調べたことがあった。が、その二人と試験機についてのデータだけが記録になかったんだ。記録にない以上、他に手がなかった」
「軍のデータに記録されていないなんて……偶然とは思えないが、ないものはしょうがないか」
「だが、試験機のスペック以上にあの二人の実力もたいしたものだった。あの二人ならＩＳ学園に入学しているかもしれない。それほどの実力だ」
「ラウラよりも二つ上となると、今の三年生か。そんな双子の三年生がいるなんて聞いたことないな。皆は知ってるか？」
明弘が尋ねるが、皆一様に首を横に振るだけだった。双子の専用

機持ちなんて珍しい生徒がいれば間違いなく他の生徒の耳に入る。しかし自分たちの耳に入っていないということは、おそらくＩＳ学園にはいないのだろう。

「まあ、そう簡単に見つかるとは思っていなかったから、別に構わないがな」

そこまで気にしていないとラウラが言う。その雰囲気からも本当に気にしていないことが容易に伺えた。

そんなこんなで三人の話の話しが全て終わり、次は鈴音が持ってきていた数々のカードゲームとボードゲームでの遊びが始まった。

第百四十一話　連絡（前書き）

第百四十一話です

第百四十一話　連絡

「なんだ、賑やかだと思ったらお前たちか」
七人が遊びに熱中していると、予想外の人物――織斑千冬が帰ってきた。一夏は千冬が帰ってきたとわかったとたん、千冬のもとに行き、千冬の肩にかかっているバックを受け取って片付ける。
「千冬姉、昼飯は食べた？」
「今何時だと思っている。とっくに食べた」
「あ、そっか」
「それよりも須藤、こっちにこい。一夏、お前は戻っててていいぞ」
「わかった」
「え、あ、はい」
唐突に名前を呼ばれた明弘は驚きながらも、千冬の言葉には逆らえず急いで千冬のもとへ向かう。一夏も千冬の言葉に従ってもどる。
「この前、お前宛に荷物が届いた。それ自体は別段おかしいことではないが、差出人があいつということで教員の間で少々騒ぎになっている」
千冬が明弘にしか聞こえないほどの声で明弘に告げる。明弘はそれを聞いても、特に表情を崩すことなくそれに答える。
「はい、それの受け取りを遥香に頼んでおきましたから知ってますよ。で、それを俺に伝えたのはなぜですか？　俺に教員の騒ぎを止めろと？」
「そうではない。ただ、その中身について聞いておこうと思ってな」
「ただの私物です」
千冬の問いかけに明弘は一言だけ答える。数秒、二人の間に沈黙が流れたが、これ以上話さないだろうと判断した千冬は、そうか、と呟いた。
「荷物は学園の個別倉庫に搬入しておいた。ロックを解除するためのパスワードは天宮が設定したからあとで聞いておくように」

「わかりました」
「話は以上だ。戻っていいぞ」
その千冬の言葉に、明弘は失礼します、と会釈したあと一夏たちのところに戻っていった。
明弘が元の席に戻るなり、一夏が質問してくる。
「何の話だったんだ？」
「俺宛に荷物が届いたって連絡だよ。大したことじゃない」
「ふーん、そうか」
明弘の答えに満足した一夏はそれ以上明弘に質問することはなかった。
「一夏、私は仕事ですぐに出る。あとは好きにしろ。ただし女子は泊まるなよ」
「ん、わかった」
千冬は一夏の返事を聞いて満足したように家を出て行った。そのとき明弘が零した、俺は泊まってもいいのか？　という呟きは誰にも聞かれることはなかった。
その後、昼食のお礼ということで女子五人が夕食を作ろうとしたが、冷蔵庫にほとんど何もないということで七人は夕食の材料の買出しに行った。そして、女子五人の料理は皆でおいしくいただいたそうだ。

第百四十一話　連絡（後書き）

これで夏休み編は終了です

ここまで長くする予定はなかったのですが、結果二十話以上とかなり長くなってしまいました

次回からは原作五巻の内容に入ります

第百四十二話　争奪戦勃発（前書き）

第百四十二話です

第百四十二話　争奪戦勃発

夏休みが終わって九月になって全校集会。内容は今月半ばに行われる文化祭についてらしい。

「それでは、生徒会長から説明していただきます」

そんな生徒会役員の一人、というか布仏先輩の声だ。そういえば生徒会役員だってのほほんさんが言ってな。

そういえば生徒会長ってあの人なんだっけ。あのあとすぐに遥香が転校してきたり、グレルたちに襲われたりといろいろあったから忘れてた。

「やあみんな。おはよう」

会長が壇上で挨拶をする。はじめて会ったときも思ったけど、簪と会長って姉妹には見えないよな。性格とか反対だし。

「さてさて、今年はいろいろ立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったわね。私は更式楯無。ＩＳ学園の生徒会長よ。以後、よろしく」

始めてみる生徒会長の姿に、一年生の多くが見惚れてしまったようで、あちこちから熱っぽいため息が零れる。よく見ると結構きれいな人だし、当たり前かもしれない。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを設けるわ。その名も『各部対抗織斑一夏＆須藤明弘争奪戦』！」

その会長の言葉の直後、ホールが揺れた。女生徒の叫び声で。いや比喩表現じゃなくて、本当に。人の声ってこんなに力があるもんなのかと鼓膜が割れないように耳を押さえながらしみじみ思った。

会長の話によれば、例年は部活動ごとで催し物を出し、それの投票を行って、上位の部活の部費を増やす。という仕組みだったそうだが、今回はそれではつまらないだろうということで部費の増強の代わりに、一位の部活に俺と一夏を強制入部させるということにしたらしい。俺も一夏もそんな話は聞いてなかったので十中八九、生

徒会で勝手に決められたんだろう。
とりあえず、やるにしても俺を巻き込まないでいただきたかった。皆は一夏狙いだろ？　俺なんかいても意味ないって。それに放課後は訓練やバイトで忙しいんだ。
だが、そんな俺の心の中での呟きは誰にも聞かれるはずがなく、俺と一夏争奪戦ははじまってしまった。

「はぁ……。はじめての文化祭だから少し楽しみにしてたのに、一気にやる気がなくなったぞ。おい」
「大丈夫ですか？　明弘様」
その日の夜。寮の自室に戻った俺の愚痴とも言える呟きに、遥香がかすかに心配そうな表情で尋ねてくる。こうして心配してくれるのは遥香ぐらいだ。優しさが身に沁みる。
「こんなにやる気がでないのは、六月末の学年別タッグトーナメントのとき以来だ。しかもなんだ？　一組の出し物が執事&メイド喫茶だと？　なんでだよ。なんでそんなピンポイントで俺のバイト先の仕事と同じ内容なんだよ。知り合いに見られるのって結構しんどいんだぞ。それが執事姿だったら尚更だ」
「明弘様がこんな状態になるなんて……」
なんか遥香が驚いているようだが、今の俺にはそれに反応できるほどの余裕はない。なんとか、普通に生活できるまで回復しなければ。
そのあと数分を要し、なんとか普通の状態まで持ち直した。ようやく遥香と対話できるようになった俺は、ふと気になったことを質問してみた。
「そういえば、二組は何やるんだ？」
「一年二組は中華喫茶をするそうです。クラス代表の鳳鈴音が中国出身ということが大きな理由のようです」

「中華喫茶となると……飲茶とか出すのか？」
「はい」
なるほど。鈴音ならやりかねない。あいつの家って中華料理屋だったって一夏が言ってたからその辺は大丈夫だろう。時間があったら行ってみるか。
「こっちはまだ執事&メイド喫茶をするってことしか決めてないな。メニューとかは……今度@クルーズに行ったときにでも、いくつかレシピを教えてもらって、それを少しアレンジしたりして出すか。ちょうどシャルロットとラウラが明日メイド服と執事服を借りれるか聞いてくるって言ってたし、俺たちも明日行くか」
「はい。わかりました」
俺の言葉に遥香が間髪入れずに答える。明日は特に予定もなかったし、ついでにバイトもしていくか。

第百四十三話　学園祭準備（前書き）

第百四十三話です

第百四十三話　学園祭準備

「……なるほど、そういうことですか。ありがとうございます」
「どういたしましてー」
翌日、@クルーズ。俺は文化祭のために、厨房担当の先輩にいくつかのメニューの作り方やコツを教えてもらっていた。そのほとんどはデザート・スイーツ系のメニューだ。主食・おかず系はもうストックがあるから、甘味の方に力を注ぐことにした。
「でも須藤君すごいね。一度教えただけで覚えちゃうなんて」
「料理は昔からよく作ってましたから」
「だからか。それよりも、遥香ちゃんは？　来るときはいつも一緒なのに」
「いえ、遥香は遥香で文化祭に向けてクラスの話し合いが急遽入ったんで俺一人できました。それで、一つ相談したいことがあるんですけど」
「ああ、文化祭用にアレンジするんだよね。文化祭で出すとなると……やっぱり、作り方を簡単にして、コストも減らせるような工夫が必要だね」
先輩の言うとおり、@クルーズのような店で本格的に出すためのものは文化祭で出すには少し向かない。生徒が作るには難易度が高いし、コストも高い。少し味や見た目が落ちても、簡単で安く作れるようなものにしないといけない。
「あとは、一日だけでも保存が利くようにしたいですね。開店前に作っておいて、注文が入ったらすぐに出せるように」
「なるほどね。なら、まずこれはここをここを省略して、材料はこれを省いて――」
それから小一時間、俺と先輩は文化祭用のメニュー作りに奮闘した。
そこまで時間がかかったわけでもないのに意外と疲れる作業だっ

た。これが一からメニューを作るのだったら半端ではなく疲れたのだろう。俺は改めて、先人たちの偉大さを感じたのだった。

「さて、と。大体決まったから、あとは厨房担当の女子と試しに作ってみて、調整していくとしよう」

@クルーズから寮の自室に戻った俺はこれからどうするかを自分で確認するために呟く。それに反応したのは、やはり遥香だった。

「お疲れ様です。今日いけなかった分、次はできるかぎりお手伝いします」

「助かる。だが、クラスの方を疎かにするなよ。余裕があるときだけでいい」

「余裕なんてがんばって作ります」

あっさり言ってのける遥香。是が非でも手伝いたいらしいな。無茶しなければいいが。

「まあ、まだ担当すら決まってないからな。できれば料理が得意なメンバーが集まるといいんだが」

夏休みに専用機持ちの料理は少しいただいたからわかるが、それ以外の生徒の実力がわからない。専用機持ちのなかでは、箒とシャルロットがかなりの腕、ラウラは美味しいが少々奇抜だ。セシリアは……うん、一夏の言ってることがよくわかった。あれはきつい。

ただ、全員あの容姿だ。ほぼ確実にホール担当になるだろう。セシリアが厨房担当にならないのは幸いだが、箒とシャルロットの力が借りれないのは惜しい。

「とりあえず、担当が決まって、試しに作ってみるときに手伝ってくれ。ただ、あくまで手伝いだ。一組の店で出すものだから一組の人間が作れないと意味がない」

「はい。わかりました」

「一応、これが試作のレシピだから目を通してくれ。ほとんど@ク

ルーズで見覚えがあるのばかりだからわかるだろ？」
「はい」
「@クルーズのやつを簡易化したのがそのレシピだ。デザート・スイーツ系はそれをメインに行く。主食とかの方は俺たちがよく作るやつの中から簡単で、ある程度見栄えのするやつを見繕う。何かそのレシピで駄目な部分とかあるか？」
「……いえ、ぱっと見た段階ではこれといったものはありません。やはり作ってみないことにはわかりませんね」
ものすごいスピードでレシピを一通り見終えた遥香が言う。遥香はこういうことで嘘をつかないから信用できる。というかこいつが嘘をついたところなんて見たことがない。
「じゃあ、それでやってみるか」
「わかりました」
文化祭は少し憂鬱だが、料理を作るのは結構好きだから楽しみだな。
だが、今までＩＳ学園の行事で何事もなかったためしはない。クラス対抗戦、学年別タッグトーナメント、臨海学校、どれも何かしらの異常事態が発生している。
今回も起きるとはあまり思いたくないが、文化祭という一般人もやってくる行事となると、警備も少し甘くなり、その隙を突いて敵が襲ってくる可能性も出てくる。それに、一般人が大勢いると、何かあったとき混乱が起きかねない。
学園の方で何もしていないなんてことはないと思うが、俺たち自信でも準備だけはしておくか。

第百四十四話　文化祭開始（前書き）

第百四十四話です

第百四十四話　文化祭開始

いよいよ学園祭当日。メニューの下ごしらえをしたあと、更衣室で昨日@クルーズから借りていた執事服に着替える。隣で着替えている一夏は初めての執事服に少々戸惑っているようだが、俺にとってはもう着慣れているものだ。さっさと手早く着替えてしまう。

「着替えるの早いなー。着たことあるのか？」

「まあな。それよりも早く最終確認するぞ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

慌てて一夏が着替えを終わらせる。何箇所か乱れているところもあったので、それを指摘して直させたあと、最終確認に移る。

とはいったものの、はっきり言ってやることなんてメニューの中で保存が利くものを完成させることだけ。あとは他のやつらとシフトとかの確認をするぐらいだ。

案の定というか予想通りというか、専用機持ちのメンバーは全員ホール担当になった。あと若干名がホール担当、残りは厨房担当と雑務担当だ。

「そういえば、ゲームって何があるんだっけ？」

「ジャンケン、神経衰弱、ダーツの三つだ。苦手なのってあるか？」

「ないけど、得意なのもないな。特にジャンケンなんてほとんど運だし」

一年一組の執事＆メイド喫茶――店名『ご奉仕喫茶』は通常メニューに加えて大きく二つの目玉メニューがある。

一つは特定のメニューを頼んだときにできるゲームだ。ゲームはホール担当の中から客が選んだやつが客と対戦し、客が勝てば対戦した相手とツーショットを撮ることができる、という完全に一夏を客寄せに利用したものだ。このために女子の一人が結構本格的なダーツゲームを用意してくるなど、女子の力の入れようが簡単に伺える。ただ一つ問題点を挙げるとすれば、ジャンケンとダーツはとも

かく、神経衰弱は時間がかかりすぎるであろうことか。
もう一つは『ご褒美セット』というものだ。メイドと執事の二つがあり、客が選んだメイドまたは執事に冷やしたポッキーを食べさせられるという、なんともわけのわからないものだ。金を払って相手に食べさせるとは何のためのセットなのだろうか。しかも客は食べさせるだけで食べさせてもらうことはできないらしい。自分で食べるのは構わないらしいが、本当にわけがわからない。
とりあえずこれが目玉メニューということだが、これがなぜ目玉なのか俺と一夏はずっと疑問に思っている。ゲームが麻雀とか将棋とかだったら俺としては面白いと思うが。
「ういっす。着替えてきたぞー」
一夏の言葉とともに教室の入る。昨日のうちに飾り付けをした教室、そしてその教室を忙しく駆け回る制服姿の生徒とメイド服姿の生徒が視界に飛び込んできた。
「あ～、おりむーとすーくんの執事服姿だ～！」
他の皆があわただしく動き回っている中、相変わらずゆっくりと動いていたのほほんさんが俺たちを見つけて声を上げる。それを聞きつけた女子が次の瞬間、一気に群がってきた。
「わー、二人ともかっこいい！」
「写真撮らせて！」
「あ、私も！」
口々に騒ぎ立てる女子。中にはすでにケータイで写真を撮りはじめるやつもいる。写真を撮るのはいいが、撮っていいか聞いておいて答えを待たずに撮り始めるなよ。ってか俺の写真なんてなんでほしがるんだ？
「ああもう。まず静まれ！　写真ならあとでいくらでも撮っていいから今は準備を終わらせるぞ。準備ができずに開店できませんでした、なんて織斑先生の鉄拳制裁がお見舞いされるぞ」
そんな少し脅しを混ぜた俺の言葉に、女子たちも静まり、準備に戻る。写真についてはあとで一夏を生贄にすればなんとかなるだろ

う。開店時間ももうすぐだし、俺たちも準備に参加するか。

開店する十分前にはなんとか準備も終わり、ついに文化祭開始の時間になった。外部からの一般客は今から学園に入るから、少しの間は学校内――生徒の客が来るだろう。

そんなことを考えていたら早速はじめての客が来た。やはり学園の生徒だ。ＩＳ学園の制服を着ている。

なんか知らないが、女性客に対してはできるかぎり俺か一夏が接客することになっている。まあ、@クルーズと同じなので俺としては別に構わないが、早速俺が接客しないとな。確か女性客に対しては……あ、そうだ。

「いらっしゃいませ、お嬢様。ご奉仕喫茶へようこそ」

第百四十五話　ご褒美セット（前書き）

第百四十五話です

第百四十五話　ご褒美セット

はじめのうちは生徒の客しか来なかったが、それも束の間。外部からの客もどんどん来て、一気に忙しくなる。クラスメイトの話によると、教室の外に長蛇の列ができて、そっちに何人か行ってるらしい。道理で予想以上に忙しいはずだ。

「いらっしゃいませ、お嬢様。ご奉仕喫茶へようこそ」

会計を済ませた客と入れ違いに入ってきた新たな客を席に案内する。

本来なら一般人は原則学園に入れない。これはこの学園祭のときでも例外ではないが、学園採用に生徒には一人一枚チケットが配られており、そのチケットを持っている人間なら一般人でも学園に入ることができる。俺は誰にも渡す相手がいない。最初は束さんに渡そうとも思ったが、あの人が来たら面倒なことになりかねないし、第一渡せなかった。家と学園じゃ距離が離れすぎてる。

それよりも気になるのが、目玉メニュー――俺はそうは思えないが――であるゲームとご褒美セットの注文が予想以上に多いことだ。

一夏はともかく俺にゲームを挑んでくるやつも結構いる。まあ、神経衰弱とダーツはまあまあ得意だし、ジャンケンも今のところ負けていないから無敗だが、なぜ俺に挑んでくる？　俺とのツーショットなんて欲しがるやつがいるとは思わなかった。

ご褒美セットも『執事にご褒美セット』の注文がやけに多い。『メイドにご褒美セット』も頼まれることはあるが、どちらも金払って相手に食べさせるという意味不明なものなのだ。正直こんなの頼むやつ、わけがわからないと思ったが、意外とわけわからないやつが多かったようだ。

「お待たせしました。『執事にご褒美セット』です。……て遥香？」

見たことある客だと思ったらその客は遥香だった。なんかチャイナドレス着ているから気がつかなかった。そういえば二組は中華喫

茶だったな。チャイナドレスを着ていてもおかしくないな。
セットといってもアイスハーブティーと冷やしたポッキーだけなのだが、一応そういう名前なのでセットということにしておく。
「休憩時間になったので来てみました」
「そうか。そっちはどうだ？」
「まあまあ、といったところです。明弘様、ついでに織斑一夏と専用機持ちが多数がいて、評判もいい一組には負けますが、その隣で中華喫茶という意外性のある店をやっている二組の方にも客は集まっています」
「なるほどな」
そんな話をしながら遥香と対面の席に座る。本当なら仕事中の私語は厳禁だが、今は文化祭。そこまで気にすることもないだろう。
「それでこのセットはどういうものなのでしょうか？　注文したときは執事から説明があると言われましたが」
「このポッキーを執事に食べさせられるってメニューだ。これの存在理由がわからないがな。まあ、いやなら自分で食べてもいいらしいぞ。そのときは俺は仕事に戻るけど」
「執事に食べさせられる、ですか。逆は駄目なのですか？」
「執事から客に食べさせるのはサービス外らしい。別に遥香になら食べさせてもいいと思うんだがな」
実は、一組と二組の女子は遥香に結構甘い。「この小柄で可愛らしい姿と、須藤君がいないときの少しおどおどしている様子がいい」というのは二組の女子の言葉だが、それには俺も同意だ。俺がいないときの様子はわからないが。ゆえに一組と二組の中では結構マスコット的な存在、らしい。たまにお菓子とかもらってくるし、今もテーブルのすみにお菓子が数個置かれている。遥香にあげる用に女子の何人かが常備しているそうだ。
「わ、私なら……いいのですか？」
少し顔を赤らめながら遥香が尋ねてくる。顔が赤い理由はわからないが。

「いいんじゃないか？　皆も許してくれるだろ」
「み、皆さんも！？」
なんでそこで驚くのだろうか。顔もさっきより赤くなってるし、どうしたんだ？
近くを通ったクラスメイトに確認してみるとすぐさま許しが出たので、赤い顔の遥香とポッキーの食べさせ合いが始まった。なんか周りが騒がしかったり、誰かが倒れたような音がしたが気にしないでおこう。

第百四十六話　中華喫茶（前書き）

第百四十六話です

第百四十六話　中華喫茶

「それでは明弘様、休憩時間が終わりますので失礼します」
「ああ、あとでそっちの店行くからな」
遥香とのポッキーの食べさせ合いが終わり、遥香が会計を済ませて店をあとにした。
食べさえ合いの間、いきなり倒れだしたクラスメイトが出たり、厨房担当のやつらが話を聞きつけて仕事そっちのけで出てきたりといろいろあったが、今はある程度落ち着いている。
ご褒美セットのせいでポッキー食いすぎて、ちょっと嫌になってたけど遥香に食わせられたのは苦にならなかったな。前も思ったけど、可愛い妹がいるのってこんな感じなのだろうか？　家族だし、同い年だから妹って感じがするが、遥香本人は珍しくそれを否定してくるんだよな。なぜだろうか。
やる気も出たので仕事をがんばっていると、休憩時間が来た。仕事の集中しすぎていたから気がつかなかったが、時計を見ると結構の時間働いていたようだ。お昼休みも兼ねて少し長めの休憩時間をもらったので、早速二組の中華喫茶に向かう。後で行くって約束したしな。

一年二組の中華喫茶はかなり本格的で、本当の店のような出来栄えだった。まあ、一組もテーブルとか椅子とか、あとティーセットとかも女子がこだわり抜いた物を使用しているので結構本格的だが。
「いらっしゃいませ、明弘様」
「おう遥香か。ちょうどよかったな」
接客に来たのはラッキーにも遥香だった。別に他のやつが嫌というわけではないが、やはり一番親しい遥香の方がいい。

「明弘様が来るのを感じたので、クラスメイトに他の客を任せてきました」

訂正、ラッキーじゃなかった。というか、俺が来るのを感じたって……。この店も結構繁盛してるようで客も多い。その中で俺が来たのに気づくとは、なぜだ？

「席はこちらになります。ご注文はどういたしましょう」

「うーん、飲茶と胡麻団子を一つずつ頼む。少し腹を満たしておきたい」

「かしこまりました」

遥香が厨房らしき方へ歩いていく。ちゃんと仕事ができているようなので少し安心しながら待っていると、遥香が飲茶と胡麻団子を二つずつお盆に乗せて持ってきた。……あれ？　二つ？

「飲茶と胡麻団子です」

そう言って飲茶と胡麻団子をテーブルに置く遥香。何度見てもどちらも二つずつ。おかしい。遥香が注文ミスするはずがない。

「遥香、俺は一つずつ頼んだはずだが」

「問題ありません。もう一つは私の分です」

「遥香の？」

「はい。それとクラスメイトの方にお願いして休憩時間をいただきました。よろしければこのあとご一緒させていただけませんか？」

なるほど。遥香も休憩時間をもらい、これを食べたら俺と一緒に文化祭を回りたいと。確かにそれならなぜ二つだったのかはわかる。遥香が無理やり休憩時間をもらうなんてちょっと驚きだが。

「わかった。じゃあ、これを食べたら一緒に行くか」

「ありがとうございます」

微かに遥香の表情が明るくなる。たぶん始めての文化祭を一人で回るのが不安だったのだろう。それに今日は生徒と教員以外の人間も多く来ている。人付き合いの苦手な遥香には厳しいはずだ。

と、それよりも時間を無駄にしないためにも、とっとと食ってしまっていろいろなところを回れるようにしなくては。俺も遥香も初

めての文化祭だ。いい思い出をたくさん作りたい。

第百四十七話　休憩時間（前書き）

第百四十七話です

第百四十七話　休憩時間

「さてと、どこに行こうか？」
中華喫茶で飲茶と胡麻団子をいただいたあと、遥香とこれからどうするかを考えていた。一応パンフレットは持っているが、特にめぼしいものもない。
「そうですね……。やや非効率的ではありますが、適当に歩き回ってみるしかないと思います」
「やっぱりそれしかないか。じゃあ適当に――」
「……明弘？」
「ん？」
不意に後ろから声をかけられ、少し驚いてしまう。遥香に集中していたせいで周りへの注意が疎かになっていたようだ。いくら油断していたとはいえ、周りへの注意を疎かにしてしまうなんてな。
「って、簪？」
誰かと思って振り返ると、そこに立っていたのは簪だった。よく考えればさっきの声は簪のだったな。
執事服の俺やチャイナドレスの遥香とは違い、普通の制服姿だ。四組も店をやっていたはずだが、おそらく裏方だったのだろう。
「明弘たちも……休憩……？」
「ああ。『も』ってことは、簪もか？」
「……うん」
「そうか。……そうだ、ちょうどいい。もしよければ俺たちと一緒に行かないか？　俺たちはこういうのに慣れてなくてな」
「……明弘たちと……一緒に？」
いや、でもいきなりこんなこと言われても迷惑か？　簪にも予定とかあるかもしれないし、一緒に行く人がいるかもしれない。
「すまん。いきなりこんなこと言われても迷惑だよな。やっぱり俺たち二人で――」

「行く」
「……え？」
「一緒に……行く。別に、迷惑じゃ……ない」
何だかわからないが、一緒に行ってくれる……のか？　確かに俺たちとしては助かるが、簪の方は俺たちと一緒にいても何の特にもならない。無理してるんじゃないだろうか。
「嫌なら嫌って言ってくれてもいいんだぞ？」
「嫌じゃない。……一緒に、行く」
「わかった。じゃあ一緒に回るか。遥香もいいか？」
「……はい」
「どうした？　具合でも悪いのか？」
「……いいえ、何でもありません。ご心配なく」
遥香にしては返事までの時間がかなり長かったが、本人が何でもないと言っているのでこれ以上追求はしないでおく。まあ、顔色とかも悪そうではないし、具合が悪いということではないのだろう。
「何かあったときはすぐに言えよ」
「はい。わかりました」
「よし、じゃあ行くか。ここにいても時間の無駄だ」
「はい」
「うん」
俺の言葉に二人が返事をする。それを聞いて、俺たちは文化祭を回るために歩き出した。
「……明弘様の鈍感」
何か遥香が呟いたような気がしたが、周りの音のせいでよく聞こえなかったから空耳だったのかもしれない。
まあ、言いたいことがあるのならはっきり言ってくるだろう。それよりも文化祭を思いっきり楽しまないとな。

第百四十八話　呼び出し（前書き）

第百四十八話です

第百四十八話　呼び出し

「結構いろんなとこ回れたなぁ。簪、ありがとな」
「……どういたしまして」
あれから三人でいろんなところを回ることができた。こんなに回れたのは簪のおかげだ。
なんか、美術部の爆弾解体ゲームをはじめ、少々度肝を抜かれたものもあったが、それもそれで楽しかったからよしとしよう。爆弾の解体を遥香が簡単に終わらせたのには驚いたが。
俺に拾われる前の経歴などは一切不明だが、機械をいじるときの手際のよさからおそらくどこかの研究機関とかに所属していたんじゃないかと俺は考えている。だが、そうなるとなぜ遥香は俺に拾われたのだろうか？　あいつの腕前はあの束さんですら評価するほどのものだ。どこの研究機関においても手放したくないはず。あいつはそれだけの逸材だ。
だが、俺に拾われるとき、あいつは昔の俺のような状態だった。おかしい。なぜあいつは俺と同じ状況に陥っていたのか。それがわからない。
研究機関が手放したのではないとすると……あいつが自分の意思か、なにかいられない理由ができたのか。その二つぐらいしか考えられない。
……いや、考えるのはやめよう。どんな答えにいたったとしてもそれは俺の仮定でしかない。それをあいつに押し付けることなんてできないし、あいつも嫌がるだろう。言わないのは何か理由があってのことだろうし、それを無理矢理聞く気にはならない。
「そろそろ休憩時間も終わりだな。俺はクラスに戻るけど、二人はどうする？」
考えていたことを放棄するために別の話題を二人に振る。といっても俺の心の中でのことだし、二人に話を振る必要はなかったのだ

が。
「私もクラスに戻ろうと思います。もともと臨時の休憩でしたから」
「……私も、戻る」
「そうか。じゃあ、ここで解散――」
とそのとき。校内放送が鳴る。
『一年一組須藤明弘君。一年二組天宮遥香さん。生徒会室に来てください』
会長の声だ。呼び出し。しかも俺と遥香？　なんだろうか？
「俺たち、呼び出されるようなことしたか？」
「いいえ。私の記憶ではそのようなことはありませんでした」
「だよなぁ。じゃあなんだ？」
「わかりませんが、行けばわかると思います。呼び出された以上行く必要もありますし」
「だな。じゃあ簪、俺たち生徒会室に行ってくる」
「……あ、うん……。じゃあ……」
心なしか簪の表情が暗い。……ああ、たぶん会長絡みだろうな。
簪は会長にコンプレックスを抱いてるようだし。

「うーん、俺はいいとしても遥香まで呼び出される理由がわからんな」
「明弘様は生徒会長と知り合いなのですか？」
「いや、お前が転校してくるちょっと前に会ったぐらいだ。不可抗力で少しだけ手合わせしたんだが、それが原因か？」
まあ手合わせといえるほどのものでもなかった気がするが、それは置いておこう。そういえばあのとき合格とか言ってたな。それか？　でもあのときは気にしなくていいとか言ってたしな。
となると本当に何だろうか。俺はともかく遥香は会長とほとんど接点がない。だというのに呼び出されている。俺と遥香が一緒とい

うことはなにかあるんだろうが……まあ、遥香の言うとおり、言ってみればわかるか。

第百四十九話　シンデレラ（前書き）

第百四十九話です

第百四十九話　シンデレラ

「「シンデレラ？」」

生徒会室で会長の説明を受けた俺たちは同時に呟いた。

「そう。観客参加型演劇が生徒会の出し物なのよ。それでその演劇の内容がシンデレラ。二人にはそれの手伝いをしてもらいたいの」

観客参加型……いまいちよくわからないが、演劇というのは結構普通なのではないだろうか。会長がこの人だからもっと突拍子もないことをするもんだと思ってたから少し驚きだ。

「まあ、いいですけど何をすればいいんですか？　俺たち演劇なんてやったことないんでいまいちわからないんですけど」

「二人には演劇に出演してもらうわ」

「いや、まずシンデレラ自体ほとんど何も知らないんですけど。いいんですか？」

「大丈夫よ。基本的にアナウンスで指示を出すから、そのとおりに進めてくれればいいから。台詞はアドリブでね。これが衣装だから着替えてきて。会場は第四アリーナの特設舞台だから、第四アリーナの更衣室で着替えるといいわ」

有無を言わせずに衣装が入っているらしい袋を手渡してくる。本当に大丈夫なのか少し不安だが、まあなるようになるだろう。

「あれ、明弘？」

第四アリーナ更衣室。会長に言われたとおりそこにいくと、見知った顔が着替えていた。

「ん、なんだ一夏か。どうしたんだ、こんなところで」

「楯無さんに頼まれてな。そっちは？」

「同じだ。シンデレラに出演してくれって。俺、シンデレラなんて

名前ぐらいしか知らないんだが」
　不思議の国のアリスは束さんにすすめられて一度だけ見たことあるが、シンデレラは見たことない。束さんの好みには合わなかったのだろうか。
　それから少し話しながら袋に入っていた衣装に着替えていく。この衣装は……なんだろうか。冠とかあるし、王子様かなにかか？
そういえば何の役をするのか聞いてなかったな。
「俺たちって何の役なんだ？　というか何の役があるんだ？」
「俺は王子様役だって楯無さんに言われたぞ。衣装も似てるし、お前も王子様じゃねえか？」
「マジか。王子様役って俺には似合わないだろ。ってか、シンデレラって王子様二人出てきたのか？」
「いや、王子一人とシンデレラ一人、あとは継母とその娘二人、魔法使いぐらいだったはずだけど」
「そうなのか」
　そんな会話をしながら舞台袖に移動していく。ちょうど舞台袖についたときにアナウンスが聞こえてきた。
「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」
　アナウンスが始まったら舞台に出てくるようにという指示を受けていた一夏に続くように舞台――その中の舞踏会エリアに出て行く。
「否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らを呼ぶにふさわしい称号……それが『灰被り姫（シンデレラ）』！」
　なるほど。シンデレラってこんな話だったのか。確かにこれは束さんの好みには合わないだろうな。
「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。王子たちの冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！」
　これって戦争ものの話なのか。というかこの冠に軍事機密って。もっと厳重に保管しておけよ。

なんだがよくわからないが、生徒会主催の演劇『シンデレラ』がはじまった。

第百五十話　王冠の秘密（前書き）

第百五十話です

第百五十話　王冠の秘密

「もらったぁ！！」

アナウンスの直後、いきなり叫びながらドレスを着た鈴音が現れる。その手には飛刀、中国の手裏剣を持っている。狙いは俺の隣の一夏か。

なんだかわからんが、とりあえず一夏と距離をとる。これなら鈴音に狙われる心配はないはずだ。

そこで回りを少し確認していると、物陰にスナイパーライフルを構えたセシリアの姿が。なんだ？　鈴音の飛刀といい、武器使用していいのか？

「って、そんなこと考えてる場合じゃない。状況を整理しないと」

舞台袖に急いで隠れ、状況を整理する。

まず、会長に頼まれてシンデレラの演劇に参加することになった。そしてその劇で鈴音とセシリアが武器を持っている。どちらも狙いは一夏。おそらく箒、シャルロット、ラウラも同じく一夏のことを狙っているのだろう。

……うん、さっぱりわからん。わかるのはシンデレラ役のやつらは王子役の『何か』を狙っていることぐらいだ。そうでなければ好きなやつに武器を持って襲い掛かるはずがない。そして、そこまでするということは、あいつらにとって『何か』がとても重要なものということ。

「『何か』、か……。それさえわかれば対策の立てようもあるかもしれんが……」

ん？　そういえば、さっきアナウンスで何か言ってたような……。

『王子たちの冠に隠された隣国の軍事機密を狙い』。そうだ、これだ。本当に軍事機密なんて書かれてるはずはないだろうけど、狙われているのは頭に乗っている王冠で間違いないだろう。

それがわかれば十分だ。王冠が何の意味を持つのか。これを手にしたら何があるのか。そんなことは考える必要はない。それは主催者本人に直接聞けばいい。

「さっきまでのアナウンスは会長の声だった。となると、今も放送室にいる可能性が高いな」

なら迷うことはない。放送室に言って会長から事情を説明してもらおう。

「で、ここまでやってきたんだ？　ご苦労様」

「そんなことはいいです。それよりも説明していただけませんか？　この王冠の秘密を」

放送室。俺と会長にしかいないそこで、俺たちは対面しあっていた。

あの鈴音やセシリアがあそこまで本気になる理由。よっぽどのことがあると考えていいだろう。それを知るために俺はわざわざここまで来た。

しばらく沈黙が続く。しかし、それもつかの間、会長は神妙な顔で重々しく口を開いた。

「あの王冠には……」

「王冠には？」

「王冠を取った人には一夏君、明弘君と同室になれる権利が与えられるのよ」

「……はい？」

一夏と俺と同室？　神妙な雰囲気をぶち壊すような答えに、思わず気の抜けた声を出してしまった。

「だから、一夏君の王冠を取ったら一夏君と、明弘君の王冠を取っ

たら明弘君と、それぞれ同室になれる権利が与えられるの」
「……初耳なんですが」
「そりゃそうよ。言ってないから」
「学園が許すと思うんですか？」
「生徒会長権限で可能にするわ」
なんてことだ。俺はこんなくだらないことのためにわざわざここまで来たのか。思わず涙が出そうになる。
とそこで一つの疑問が浮かんできた。
「俺は遥香とすでに同室になっているんですけど、俺が誰かに王冠を取られたときはどうなるんですか？」
「その場合は遥香ちゃんは別室に移動ね」
「なるほど。……なら俺が遥香に王冠を渡せば、俺には何のデメリットもない。ということですね」
これなら完璧だ。失うものなんて何もない。われながら完璧な作戦だ。
「でもそう簡単にはいかないわよ？　王冠が頭から離れれば、自動的に電流が流れる仕組みだから。さっき一夏君もとろうと思ったみたいだけどね」
んるほど、一筋縄ではいかないようだ。自動的にということは、おそらく王冠にセンサーの類が組み込まれているのだろう。それを無効化、除去するにしても頭の上の王冠じゃ手探りでしか作業ができない。まあ特に問題はないだろうけど。
「わかりました。それだけ聞ければ十分です。では失礼します」
それだけ告げて放送室から出る。これ以上長居しても意味はない。
俺ではセンサーをどうにかすることはできない。それはわかった。だがそれなら、遥香に解除してもらい、そのまま遥香に王冠を渡してしまえばいい。あいつなら数分もかからず解除してくれることだろう。
この作戦の唯一の問題は遥香と合流できるかどうかだが、それは問題ない。なぜなら――

「明弘様、いかがいたしましょうか」
すでに放送室の外にいるからだ。たぶん、俺がここに来る途中に見つけて追ってきたんだろう。誰にも気づかれないようにしてたはずなのだが、まあ遥香ならいいか。
「この王冠をとったときのことは説明されてるな？」
「はい」
「そしてこの王冠にはセンサーと電流を流す装置があることも今さっき聞いたな？」
「はい」
「よし。じゃあ早速その二つを解除してくれ」
「わかりました」
しゃがみこむ俺の言葉に、二つ返事で答えて解除を始める遥香。予想通り、数分もいないうちに二つとも解除され、王冠は遥香の手に渡った。
「ふぅ。これで一見落――」
俺の言葉をさえぎるように少し離れた場所から大きな音が聞こえる。何か重いものが地面に落ちたような音、ちょうど四月に一夏が白式をまとって地面に墜落したときの音に似ている。その直後に地面がかすかに揺れる。間違いない。
「どこだ？」
「ここ第四アリーナの中でないことは確かですね。外に出て確認しますか」
「ああ、急ぐぞ。何か胸騒ぎがする」

「……あれか」
第四アリーナから出てきた俺たちの目に入ってきたのは、少し離れたところからかすかに上がる土煙。やはり何かが落ちてきたようだ。

「間違いありません。おそらく第三アリーナ。確か今は無人だったはずです」
「なら誰も怪我なしてないな。行くぞ」
「はい」
それぞれ神王と神楽を展開し、俺たちは急いで煙の上がるところへと向かっていった。

第百五十一話　ＶＳグレル＆フェル（前書き）

第百五十一話です

第百五十一話　ＶＳグレル&フェル

第三アリーナに到着する。すでに砂煙は収まっていたが、アリーナの中心に二つの影があった。

薄い水色と黒に近い藍色。見覚えのあるその二つの影に、俺は自分の胸騒ぎが当たっていたことを確信する。

「来たな」

「……やっぱりお前たちか」

二つの影――グレルとフェルがこちらを向く。

「来たか、ということは、俺たちが来るのを狙っていたわけか」

「当たり。本当はピンポイントでお前を狙おうと思ったんだけどさ。今日って一般人もたくさんいるみたいじゃん？」

「だから無人だったここにわざと落ちたの。ここがいちばんあなたに近い場所だったから」

なるほど、さっきの墜落はわざとか。こいつらが墜落するなんて思わなかったが、俺たちをおびき出すためだったらある程度納得できる。

「まあ今日はそんな話をしに来たんじゃないんだけどな」

「どうせ俺を倒しに来たんだろ？　今日はお前たちが相手か」

「そうね。ちょうど二人ずつだから、タッグマッチで勝負しましょうか」

タッグマッチ。俺と遥香ＶＳグレルとフェルか。一人で二人を相手にするよりはマシだが、勝てる保証もないぞ。タッグマッチは個々の実力だけでなく二人のコンビネーションが重要になってくる。

「……遥香。行けるか？」

「問題ありません」

「よし。じゃあ……行くぞ」

同時に瞬時加速を使って突撃をかける。狙いはグレルとフェルの間。二人は突撃を回避するため左右に分かれる。狙い通りだ。

あいつらのコンビネーションは脅威だ。だがそれはそれぞれ近距離と遠距離で役割を分担しているから。分断してしまえばその役割分断が仇となりクセの強さが浮き彫りになる。そうなれば脅威は半減、いやそれ以下だ。

グレルは俺が、フェルは遥香がそれぞれ相手をする。こうすれば相手のコンビネーションを無効化し、擬似的な一対一の勝負ができる。

「くそ、面倒なことしてくれるじゃねえか」

「知るか」

一定以上の距離をとって右手に展開した《アルカディア》で攻撃する。グレルはおそらく近距離専門。そうでなくても遠距離攻撃は苦手なはずだ。先入観を持つのは危険なので、一応何かあったときのための準備もしておく。

遥香の方は大丈夫だろうか。グレルに警戒しながら遥香の方を確認してみるが、こちらはやや遥香が押されている。フェルの攻撃を《護神》を使って防いではいるが、攻勢に転じることができないままでいる。あれじゃあ消耗戦になりかねない。

だが、こっちもすぐに片付けることはできないだろうな。俺のほうが一方的に攻撃しているとはいえ、グレルの機動力でほとんど回避されている。決定だが打てない。だからといって、不用意に近距離戦に持ち込むのは危険だ。

どっちにしてもすぐに片付ける可能性は低い。早く遥香の加勢に向かうためにはすぐに片付ける必要があるのに……。

……いや、ある。一つだけ、すぐにグレルを片付ける方法が。

だが、あれは実践で使ったことがないし、練習でも成功した確率は五分五分。もし失敗したら畳み掛けられるだろう。それでもこれ以外に手はない……やるしかないか。

「行くか。……三段階瞬時加速（トリプル・イグニッション・ブースト）」

第百五十二話　三段階瞬時加速（前書き）

第百五十二話です

第百五十二話　三段階瞬時加速

周りの景色が霞む。それと同時に俺は、今まで以上の速度でグレルに突撃をかけた。
「がっ！？」
グレルは反応して避けようとするが、遅い。そのまま俺が左手に展開した《エクスカリバー》による斬撃をモロに受ける。そして俺はそのまま地面に衝突する。やっぱり止まれないな。
瞬時加速ですら比にならない速度。おそらく一夏の白式・雪羅による二段階瞬時加速とほぼ同じ速度だろう。
三段階瞬時加速とは背部スラスターによる瞬時加速に加え、そのときに排出される高エネルギーを《イカロスの翼》の燃料として速度を上乗せする。そしてそれを六枚の多方向推進翼で制御する、瞬時加速の改良系だ。
三種類のスラスターを持つ神王だからこそできる技術。その反面、かなりの集中力が必要だし、速すぎるせいで急停止ができないなどといった欠点もある。それでも成功すれば不意打ちにはもってこいだ。
やっぱり、もっと練習が必要だな。と少々暢気なことを考えながら起き上がり、振り返ってグレルの様子を確認する。さっきの手ごたえからして相当のダメージを与えられたはずだ。
「いっ……てぇ！」
グレルのＩＳは右肩がほぼ破壊され、露出したそこからは血が流れている。絶対防御を貫通したようだ。ＩＳの方もシールドエネルギーはかなり消耗しただろうし、グレルの方も怪我を負っている。これならすぐに片付きそうだな。
「勝負あり、だな」
「まだ……だ」
「無理だな。そんな状態で俺に勝てるとでも思ってるのか？」

「……ああ」

強情。そんな言葉が浮かんできた。勝負はほぼ決まったといってもいいのに、まだ戦おうとする。もしかして、この状況をひっくり返せる秘策でもあるのか。……いや、それはないだろう。そんなのがあるのならもっと早く使っているはず。やはり、俺の勝ちだな。

無理な加速のせいで体が痛むが、大丈夫だ。戦えないことはない。すぐに遥香の援護に――

「ふっ」

「？」

注意を遥香に向けた一瞬の隙にグレルが一気に距離をとった。なぜ不利になる遠距離を選んだ？　接近して攻撃していればダメージを与えることくらいできたかもしれないのに。

「これで勝てないなんてな。しょうがねえ。形態以降（シフト）するか」

何を言っている？　形態以降なんて、そんな簡単にできるはずが――

「……なんだ？」

そこで、俺の耳に聞こえてきたのは一つの歌だった。

第百五十三話　第二ラウンド開始（前書き）

第百五十三話です

第百五十三話　第二ラウンド開始

――太陽の眩しさに包まれて――
――眠れる力が目を覚ます――

「……これは……歌？」
明弘たちから少し離れたところでフェルと戦っていた遥香が呟くと同時に、無意識に動きを止めてしまう。戦いのおいてそれは絶好の隙になりかねないが、遥香と同じようにフェルも攻撃を止めていたため、それは杞憂に終わる。
遥香が後ろを振り返り、歌の元を目線で探す。それは簡単に見つかった。
そして、後ろを向いてしまったがゆえに遥香は今まで自分と戦っていたフェルの異変を察知することができなかった。
フェルが歌を聞いて、目を見開く。歌の主を探すまでもない。そんなことをしなくても、その歌がなんなのか、フェルには手に取るようにわかる。
「グレル……。それを使うなんて……本気なのね」
フェルのそんな呟きはアリーナに響く歌にかき消され、誰の耳にも届くことはなかった。

――その力は我が身を滾らせ――
――暗き闇を眩しく照らし――
――冷たき闇を包み込む――

歌の主は……グレル。目をつぶり、両腕は降ろされ、完全な無防

備でただ歌い続けている。
とどめをさす絶好のチャンスだ。このまま攻撃すればすぐに決着はつくだろう。そんな思考を、ある一つの言葉が頭の中から叩き出した。
「……『無限回奏』？」
そんなことあるはずがない。第一、歌詞が違う。というか『無限回奏』と共通点が見当たらない。だからあれは『無限回奏』であるはずがないんだ。
しかし、本能が告げてくる。あれは『無限回奏』とよく似ているものだと。そして、あれはヤバイと。本能が告げる。
俺は無意識のうちに《アルカディア》をグレルに向けていた。
そのまま引き金を引き、銃口から実弾とエネルギー弾が発射される。それはまっすぐとグレルに向かっていく。

終わった。そう確信した瞬間――その確信はあっさりと打ち破られた。

直撃するはずの《アルカディア》の攻撃は、グレルの体を――そのまま通り抜けていったのだ。
「さて、と、こっから第二ラウンド開始だ。さっきみたいにはもういかねえぞ」
さっきまでのが嘘のように、悠然とした姿でグレルはそう言った。

第百五十四話　援軍　撤退（前書き）

第百五十四話です

第百五十四話　援軍　撤退

グレルの攻撃に備えて、《エクスカリバー》と《アルカディア》を構える。これならあいつが動いた瞬間に対処できる。

そんな俺の考えをぶち壊すように、グレルはゆっくりと俺に向かって歩き……消え――

「がっ！？」

瞬間、強い衝撃が俺を襲い、俺はそのまま後方に吹っ飛ばされた。吹っ飛ばされながら、俺の視界に入ってきたのは今の今まで俺がいた場所にたたずむグレル。……今のは……。

「なんて、速さだよ……。くそ……」

「あ、もしかして気づいたのか？　これを初見で見破られるなんてなー」

自分の手の内がばれたというのにまったく動じないグレル。ばれても負けるわけがない。そんな余裕がうかがえる。

「ハイパーセンサーですら感知しきれないほどのスピード、だな。さっき俺の攻撃が通過したように見えたのも、当たる直前だけ体を移動させて通り抜けたように見せかけた。……違うか？」

「いいや、だいたい当たってるぜ。でも仕掛けがわかったくらいでどうするんだ？　頭でわかっていても体が反応しないだろ？」

「……なんとかしてやるさ」

そう、仕組みがわかっても体が反応しなければ意味がない。そのぶん、さっきの速度はだいたいおれの三段階瞬時加速とほぼ同レベル。逃げ切れるとは思えないが、やるしかない。

それから一方的な勝負が始まった。何とか紙一重のところで回避、防御していくが、そも気休め程度にしかならない。

速さだけじゃなくて、パワーとかも上がってるのだろうか。さっきまでと比べると、一発一発の攻撃が危険だ。

グレルがゆっくりと武器を振り上げ、一気に振り下ろす。ゆっく

り見えるのに体が動かない。……くそ、ここで終わりかよ……。
しかし、その攻撃が俺を襲う直前、高速で飛来した『何か』がグレルを直撃し、思わずグレルが距離をとる。……今のは――
「なに簡単にやられてんのよ、アンタ」
俺は思わずその『何か』が飛来してきた方向に顔を向ける。俺が視線を向けた先には、甲龍をまとった鈴音と、紅椿をまとう箒。そしてラファール・リヴァイヴ・カスタム?をまとうシャルロットが立っていた。
「なさけないぞ。男ならそんな簡単に倒れるな」
「……うる、せぃ」
「なんだお前ら？　邪魔するならお前らもまとめて――」
「待ちなさい。グレル」
いきなり乱入してきた鈴音たちに向かって話そうとするグレルを、いつの間にか近くに来ていたフェルがさえぎる。……遥香は、やられたのか。
「ここで戦うのは止めておきましょう。あなただって、その肩の傷じゃあ満足に戦えないでしょ？」
「それはそうだけどさ」
「……」
「……ああもう！　わかったよ！　退けばいいんだろ退けば！」
フェルの無言の訴えにグレルが折れ、叫ぶ。そして二人は俺たちを一瞥すると、そのまま空の彼方へと飛んでいった。
それを見届けた瞬間、張り詰めていたものが切れて俺はそのまま地面に倒れていってしまう。しかし、それは誰かが俺を支えてくれたおかげでなんとか地面とぶつかることは回避した、神王も解除され完全な生身になった俺の体を支えてくれてるのは――
「……遥香」
「はい。明弘様」
俺の体を支えてくれているのは、遥香。今までフェルと戦っていたせいでボロボロのはずなのに、それでもしっかりと俺のことを支

えてくれている。そのことに俺は安心してしまう。
「はる……か……」
遥香にお礼を言おうとするが、意識はどんどん遠のいていく。そのまま俺の意識は、闇に包まれた。

第百五十五話　部屋の主（前書き）

第百五十五話です

第百五十五話　部屋の主

「あー。やっぱり痛いわ、これ」
「自業自得よ。レイベ相手に油断するなんて」
「ま、確かに不意を突かれたのは俺のせいだな。いくらレイベが射撃しかやってこなかったからって油断するのはダメだなー」
フェルと右肩を押さえたグレルがそんな会話をしながらとある施設内を歩いていく。
グレルの怪我はすでにある程度の止血はされているが、痛みが消えるわけではない。それに止血も完全ではなく、ただ血管を圧迫して出血を抑えただけだ。できるだけ早くちゃんとした処置を取る必要がある。
「二人ともおかえりなさい。さあ入って。怪我の手当てをするから」
二人がある部屋の前に立った直後、部屋のドアが開き、部屋の主が姿を現す。連絡も入れていないのに、あらかじめ知っていたかのように現れた部屋の主に二人は別段驚くことはない。
「ん、頼むわ」
「じゃあそこに座って」
「それにしても、よくグレルが怪我しているのがわかったわね」
「血の匂いがしたからね。聞こえた足音は貴女たちのものだったし、戦闘で怪我をしたって考えるのが普通じゃない」
「それがわかる時点で普通じゃないのだけど、まあいいわ」
「はじめるよ。動かないでね」
部屋の主の手にはいつの間にか救急箱が握られていた。そこから包帯などを取り出しながら話す。
「レイベと戦ったんだよね？」
「ああ、不意を突かれてばっさりとやられた」
「なるほど。彼は今も強いんだね」
「強いわ。まだ記憶を失くす前には及ばないけど、それは『彼女』

がいないから仕方ないでしょう」
「『彼』あっての『彼女』、『彼女』あっての『彼』だからね。仕方ないかもしれないけど……『彼女』と記憶を失ったレイベか。自分もそろそろ会いたくなってきたよ」
「それは止めておいた方がいいんじゃない？　私たちの仲間なんて言ったら怪しまれるのがおちよ」
「言わなければいいだけじゃない。ＩＳ学園に転校生として行くのも面白そうだね」
クスクスと楽しそうに笑う部屋の主に、グレルとフェルは一度ため息をついて話を続ける。
「何度も聞いたけどさー。お前って男なのか？　女なのか？」
「さあ？　そんなことどうでもいいじゃない」
はぐらかす部屋の主。長い付き合いであるグレルたちですら部屋の主の性別は知らない。
中性的な声。男にしては少し高く聞こえるが、女としては少し低い部類だ。姿も中性的で区別がつかない。
以前何度かグレルたちが尋ねたことがあったが、今のようにはぐらかされる。性別――それと年齢もか――それが部屋の主の最大の謎である。
「はい、終わったよ。安静にしていればすぐによくなるとは思うけど、動かすと治りが遅くなるから気をつけてね」
「サンキュー」
話をしているといつの間にか処置が終了していたようだ。血だらけだったグレルの右肩には、今は真っ白い包帯が巻かれている。
「ありがとう。そういえば――」
「彼ならいつもどおりだよ。研究室に籠もるか、ふらっとどこかに行ってしまうか。その繰り返し。今は研究室に籠もってるから放っておいたら？」
「そう。じゃあ私たちはこれで失礼するけど、あなたは？」
「自分も気の向くままに、かな」

それで会話が終わる。そのままグレルたちは軽く挨拶をして部屋を後にする。

第百五十六話　いやな感触（前書き）

第百五十六話です

第百五十六話　いやな感触

「ん……」
「お目覚めですか？　明弘様」
目が覚めると、すぐさま近くにいたらしい誰かが声をかけてきた。
これは――遥香か。
「ああ、今目が覚めた。ここが……保健室か」
「はい」
「俺は確か――」
確か、グレルと戦ってそのあと……。
「グレルたちが退いたあと、すぐに気を失ったようでしたのでここへお運びしました」
「そうか……っ」
戦闘の記憶が鮮明に蘇ってくる。その中で手に残る変な感触に一瞬背筋が冷える。この変な感触は、グレルの右肩を切り裂いた感触。はじめて人間の生身を斬った嫌な感触が俺の手に残っている。
グレルの様子からしておそらく死んではいないはずだが、それでもいいことだとは思えない。たとえ自分の命を守るためとはいえ、もしかしたら人を一人殺していたかもしれないんだ。それを考えるだけで背筋が凍る。
「どうかしましたか？」
「……いや、なんでもない。それよりあのあと何かあったか？」
「私たちの方は何もありませんでしたが、織斑一夏の方でいろいろあったそうです」
「説明を頼む」
「はい。ちょうど私たちが戦闘していたとき、織斑一夏も敵に襲われたそうです。生徒会長の手助けもあり、敵は撃退。逃走した敵をセシリア・オルコットとラウラ・ボーデヴィッヒが追跡しましたが、途中で敵の仲間らしきものの攻撃を受けて目標を取り逃がしたとの

ことです」
「なるほど。その敵っていうのは？」
「生徒会長の話では敵は自分をオータム。『亡国企業（ファントム・タスク）』の一員と名乗っていたそうです。グレルたちと関係があるかどうかは不明。使用ＩＳはアラクネでしたが、敵が逃げる際にコア以外を自爆させたそうです」
　アラクネ。アメリカの第二世代型ＩＳで背中に八つの装甲脚に独立したＰＩＣを備えた、蜘蛛を模した気持ち悪い容姿をしている機体だ。性能はともかく、なんであんな機体を作ったのかはわからないが、アメリカにいたときに何度か手合わせしたことがある。
「アラクネってことはアメリカ軍が関係してるのか……。いや、それともアメリカ軍から強奪したのか……？」
「おそらく後者でしょう」
「だろうな。ナータたちがこんなことするとは思えないし。まあ、あとでナータたちに電話で聞いてみるか」
　アメリカ軍がＩＳ学園と敵対する理由がない。七月の福音事件のときは、福音の暴走を止めてやったからな。感謝されるならともかく、敵対される覚えはない。
「ん、状況は整理できた。とりあえずグレルたちも亡国企業も気にしてもしかたないな。動向が掴めない以上、いつ襲われても大丈夫なように準備しておくしかできない」
「はい。それに亡国企業の方は織斑一夏が標的のようですし、警戒する必要もないでしょう」
　遥香が身も蓋もないことを言う。確かにそのとおりだが、友達を見捨てるようなことはあまりしたくないな。まあ、遥香にとっては友達じゃないのかもしれないが。

第百五十七話　生徒会就任（前書き）

第百五十七話です

第百五十七話　生徒会就任

「皆さん、昨日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、投票結果の発表をはじめます」

いろいろあった学園祭の翌日。俺はグレルとの戦闘で疲れ果てた体に鞭打って、体育館で俺と一夏の今後を大きく左右するであろう結果発表を聞いていた。

「一位は、生徒会主催の観客参加型劇『シンデレラ』！」

「「「……え？」」」

会長の言葉で、つい数秒前まで妙な熱気に包まれていた体育館が静まり返る。だかそれも束の間、我に返った女子一同からブーイングが起きた。

「卑怯！　ずるい！　いかさま！」

「なんで生徒会なのよ！　おかしいわよ！」

「私たちだってがんばったのに！」

「劇の参加条件は『生徒会に投票すること』よ。でも、私たちは別に参加を強要したわけではないのだから、立派に民意といえるわね」

女子の苦情に会長がさらりと言い返す。というか、そんな条件だったのか。頭回るな。

だが、そんなので女子のブーイングは収まらないう。これは会長も予想の範囲内のはずだ。だとすれば、会長がとる行動は――

「はい、落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏くんと須藤明弘くんは、適宜各部活動に派遣します。男子なので大会は無理ですが、マネージャーや庶務をやらせてあげてください。それらの申請書は、生徒会に提出するようにお願いします」

やっぱりそうか。全ての部活に派遣される可能性を与えて女子たちの不満をなくし、かつ生徒会に反抗しないようにする。生徒会に反抗すればその分一夏が派遣される可能性を減らすことになるからな。

だが、さっきの演劇の参加条件といい、最初からこうなるように仕組まれていた感じが拭えない。あの会長ならそれぐらいのことやりかねないし……でも、それならこんな回りくどいことはせずに最初から俺たちを生徒会に入れればよかったんじゃないだろうか？

まあ、女子を納得させる理由がほしかったのかもしれないが。

とりあえず、こうして俺と一夏は生徒会に所属することになった。

「織斑一夏くん、須藤明弘くん。生徒会副会長着任おめでとう！」

「おめでと～」

「おめでとう。これからよろしく」

会長、のほほんさん、布仏先輩の言葉に続いて、盛大にクラッカーの音が生徒会室に鳴り響く。やっぱり仕組んでたんだろうな。

「こちらこそよろしくおねがいします」

社交辞令として、俺も一応応えておく。

「で、早速質問があるんですが」

「はい、何かな。新人君」

「これは最初から仕組まれていたということでいいんでしょうか？」

「まあ、そう考えてもらっていいわね。学園長からどこかの部活に入れるように言われてたんだけど、一つの部活に入れると他の部活から文句が出るでしょ」

「やっぱり」

学園長から言われていたというのは予想外だったが、他のことについては予想通りだ。特に聞く必要もなかったかも知れんが、気になったことは聞いておくに限る。

「じゃあ、二人の就任を祝してケーキ焼いたから食べましょうか」

その後、就任パーティーとしていただいた会長のケーキはとてもうまかった。

パーティーのときに聞いた余談だが、一夏のクラス代表就任パー

ティーのときに来ていた新聞部副部長の黛先輩に、俺の神王を束さんが製作したという情報を流したのは会長だったそうだ。

第百五十八話　仇（前書き）

第百五十八話です

第百五十八話　仇

携帯のコール音。それが数回か繰り返されたあと、相手が電話に出る。やけに早いな。

『おう明弘、どうした？』

携帯からイリスの声が聞こえてくる。まあ、イリスにかけたから当たり前だが。

俺がわざわざイリスに電話してるのは、先日の奇襲者――亡国企業についての情報を聞くためだ。相手がアメリカの第二世代型を使っていたということは、アメリカ軍と何か関係があるかもしれない。イリスやナータがいる以上、そんなことないと思うが念のため。

最初はナータにかけたんだが、生憎つながらなかった。

「ちょっと聞きたいことがあってな。時間大丈夫か？」

『いいぜ。こっちからも連絡しておきたいことあったからちょうどいい』

「連絡しておきたいこと？」

イリスから俺に連絡？　そんなのはじめてだ。まさか、この前贈ったお礼が気に入らなかったのか。いやでも声からしてそんな感じではないだろうし……。

『まあそれは置いといて、まずそっちから話してくれ。こっちは少し話が長くなるかもしれないから』

「わかった。……織斑一夏は知ってるな？　実は先日、亡国企業のオータムと名乗るやつが一夏のことを襲撃してきた。なんとか撃退したらしいが、そいつはアラクネを使っていたらしい。お前たちがいるから大丈夫だとは思うが、一応聞いておこうと思ってな」

亡国企業。その単語に一瞬反応したようだが、押し黙る。なにかいいづらいことがあるのかもしれないが、数秒後、イリスはゆっくりと話し出した。

「……ああ、その件ならこっちにも連絡が来てたから知ってる。ア

ラクネなら以前、正体不明の組織に奪われた。アメリカ軍の名前に泥を塗ることだから公表はしなかったけど、まさかそんなことになるなんてな……」

「アメリカ軍から強奪？　そんなこと簡単にできるのか？」

「そんなはずないだろ。警備も厳重だった。それでも盗まれたんだ。あいつらはただの組織じゃねえ。かなり強い」

「やっぱりな。じゃあ、俺の方はこれで終わりだ。そっちの連絡ってのは？」

「ああ。昨日、アメリカ軍のある基地が襲撃された。襲撃者の使用ＩＳは『サイレント・ゼフィルス』。知ってるか？」

「一応な」

サイレント・ゼフィルス。イギリスの第三世代型ＩＳでブルー・ティアーズの後継機だったはず。じゃあ、襲撃者ってのはイギリスの……いや、それはないな。いくらなんでも単純すぎる。

「襲撃者の狙いはその言動からして、基地に封印してあった銀の福音。たぶん、その襲撃者は――亡国企業だ」

「……やっぱりそうか」

「襲撃者の連絡を受けて俺も急いでその場に向かった。それまでの時間稼ぎは……ちょうど手の空いていたナタルが」

ちなみに、ナタルとはイリスがナータのことを呼ぶときに使うあだ名だ。ただ、ナータは福音を凍結処分されて丸腰なんじゃ――

「あいつ、生身で《銀の鐘》の腕部装備砲（ハンドカノン）を使いやがった」

「ちょっと待てよ。腕部装備砲を生身で？」

腕部装備砲――正式名称《銀の鐘》試作壱号機・腕部装備砲バージョン。単純な出力だけなら福音に実装備された《銀の鐘》を上回るあれを、ナータは生身で撃ったのか？

腕部装備砲は、出力は高いがエネルギーの消耗が激しい、反動が大きすぎるなどの理由で実装備されることがなかった装備だ。ＩＳの補助がある状態ですら、反動が大きいとされたあれを生身で撃つなんて、体に負担がかかりすぎる。

「それだけ福音を守りたかったんだろうよ。自分のＩＳじゃなくなっても、体を張って守ろうとする。あいつらしいや。でも、そのあと壁に叩きつけられて、腕と脚がそれぞれ骨折、ひび割れは五ヶ所以上だ。今は集中治療室で治療を受けてる」

「そうか……」

「ナタルがやられたあと俺が到着して捕まえようとしたけど、寸でのところで逃げられちまった。ナタルが体を張って時間稼ぎしてくれたっていうのに、情けない話だぜ」

「いや、福音は守れたんだろ？　それにナータもイリスも死ななかった。それならいいじゃねえか。次捕まえればいい話だ。それに――」

そこで言葉を切る。これは確証のない、ただの俺の予想に過ぎない。言っていいのだろうか。そんな考えが頭をよぎる。だが、俺はそれを振り切って言葉を続けた。

「亡国企業のの次の狙いはおそらく――ＩＳ学園だ」

それを裏付ける決定的な証拠はない。だが、なんとなくわかる。こういうときの俺の勘は意外と当たるからな。

「確かに、その可能性は十分ありうるな。本当なら加勢に行きたいところだけど、こっちもいろいろごたついててな」

「いいさ。自分の身は自分で守る、それぐらいできないと」

「……本当にすまねえ。じゃあ、そろそろ予定があるから、切るぞ？」

「ああ。ありがとな」

電話が切れる。俺は携帯をしまいながら考える。

ナータとイリス。得意分野に違いはあるが、実力はほとんど同じだ。ナータと一夏抜きの六人で戦って圧倒され、一夏も混ざってギリギリ暴走と止めれた俺たちと、おそらくナータをかばいながらだったとはいえ、イリスが仕留められなかったサイレンと・ゼフィルス。遥香を入れてもたぶん、実力の差はあるだろう。そんな相手が襲ってきて勝てるのだろうか。

会長がいれば勝てるだろう。そんな楽観的な考えはしない。今言ったのだって、簪を除いた一年全員がいるという前提での話だ。非常時に全員が集まれるとは言い切れない。

最悪、自分一人で戦う可能性だって捨てきれない。俺一人でそんな相手を倒すことなんてはっきり言って無理だろう。でも、それでもやらないといけない。

ナータの仇をとるためにも、やらないといけない。たとえ、自分よりよほど強い相手だろうと、勝たないといけない。

ふと、どこかから、「死んでないわよっ！」というナータの声が聞こえたような気がした。

第百五十九話　誕生日プレゼント（前書き）

第百五十九話です

第百五十九話　誕生日プレゼント

「電話は終わりましたか？」
「ああ、さっき終わった」
決意を固めていたところに、ちょうど風呂から上がってきた遥香が近寄ってくる。
「やっぱり、亡国企業のアラクネはアメリカ軍から強奪したやつみたいだ。ついでに昨日、福音が封印されているアメリカ軍が亡国企業と思われるやつに襲撃された。襲撃者の使用ＩＳはサイレント・ゼフィルス。狙いは福音だったそうだ。イリスが追っ払ったが、ナータが重症だそうだ」
「そうですか。イーリス・コーリングですら捕らえきれないということは相当の実力ですね」
「だろうな。ただ、学園祭の一軒も含めると、次の目標はおそらくＩＳ学園（ここ）だ。準備はしておいたほうがいいだろう」
確か今月の二十七日にはＩＳの高速バトルレース『キャノンボール・ファスト』があったな。学園祭のときも、外部から人が大勢来るときを狙ったようだし、今回もある可能性はある。
学園の方でも警戒はしているはずだが、それでも学園祭のときは侵入を許してしまっている。やはり警戒しておくに越したことはないだろう。
あ、そういえば――
「そういえばキャノンボール・ファストの日は一夏の誕生日だったな。夜に誕生日パーティーするらしいし、何かプレゼント用意しておかないと」
「そうでしたね。では、週末にでも買いに行きましょうか？」
「そうだな。でもその前にバイトしてそのための軍資金を得ないとな」
「では、どちらに行きましょうか？」

どちら、というのはオープンカフェと@クルーズのことだな。
「最近はよく@クルーズに行ってたし、オープンカフェの方にしよう。まあ、人手が足りてるようだった@クルーズに行けばいい」
「わかりました」
とりあえず、週末の予定は大体立った。で、一番の問題は――
「一夏の誕生日プレゼント、何にするかな」
友達に誕生日プレゼントをあげるなんて初めてだ。たぶん、相手が喜びそうなものを買えばいいんだろうけど、一夏の喜びそうなものってなんだろうか。
一夏に趣味があるならそれ関係のものにするが……一夏の趣味なんて聞いたことがない。家事やマッサージが得意なのは知っているが、趣味ではないだろう。第一、家事やマッサージに関するプレゼントなんて思いつかない。
「一応喜んでもらいたいよな。プレゼントするからには、というか金を出すからには喜んでもらわないと金をかけた意味がない」
「無難なのは食べ物だと思いますが、パーティーをするという話だったので、あまりいいとは言えませんね」
「それに食べ物だと消化されて終わりだしな。どっちかというと、形に残るような物の方がいいと思うんだよ」
あいつアクセサリーなんてつけてないし、そっちは却下。そうなると置物とかか？　でもどんな置物にすればいいんだろうか。
「うーん、全然わからん。誕生日プレゼントなんてはじめてやるし、勝手がわからないな」
「どうしましょうか？」
「……そうだ。女子たちに何を贈るのか聞いてみよう。誰かと被ることもなくなるし、参考にもなる」
「なるほど。まず情報収集ということですね」
「そうだ」
今日はもう遅い。となると、明日の放課後とかだな。でも一夏が近くにいる可能性もあるし……一番いいのは、寮の部屋に行って聞

く方法か。
「じゃあ、明日は訓練を早めに切り上げて、女子たちの部屋に行くか」
「はい。わかりました」
話し合いを終え、俺たちは電気を消したあと、それぞれのベット――俺は簡易ベット――に潜り込む。
「おやすみ。遥香」
「おやすみなさい。明弘様」
それだけ言葉を交わし、俺たちは眠りに落ちていった。

第百六十話　参考（前書き）

第百六十話です

第百六十話　参考

週末。予定通りオープンカフェでバイトをしながら一夏の誕生日プレゼントについて、考えを巡らせる。

イリスに電話した翌日。予定通り訓練を早めに切り上げ、どんな誕生日プレゼントを贈るのか女子に聞いてみた。その結果わかったこと――

「全然、参考にならねえ」

それだけだった。

箒は着物。セシリアはティーセット。鈴音は手作りラーメン。シャルロットは腕時計。ラウラは自分が実践で使っていたナイフ。普通どういうのをあげるのかわからないが、結構個性的な気がする。

セシリアとシャルロットのはまだ普通だろう。セシリアの場合だと高級ブランドのとかだろうけど、まあいい。箒と鈴音も……まあ少し変わってるな、ぐらいだろう。ラウラのはかなり個性的だ。あいつも俺と同じくはじめて誕生日プレゼントを贈るんだろうからしょうがないかもしれないが。

とりあえず、どれも参考にしづらいのは確かだった。

「一番マシなのはシャルロットのだろうけど、腕時計は二つ要らないしなぁ」

そういえば、この週末にシャルロットは一夏と腕時計を探しに出かけるとか言ってたな。ただ、それに鈴音も同行することになったそうで、一夏と出かけるというのにシャルロットの表情は冴えていなかった。

まあ、五人とプレゼントが重なる心配は無くなったからよしとするか。そう前向きに考え、仕事をさばいていく。

話は変わるが、ここの店長の呼び方が店長からマスターに変わった。この前、@クルーズの店長と被るからあっちの店長を店長？と心の中で呼んでいることを話したら、マスターと呼びなさいと言わ

れた。それからこっちの店長をマスター、@クルーズの店長を店長と呼ぶようになった。結構気に入ってたのにな、店長？。

まあ、気に入ってはいたがそこまで思い入れもなかったため、最近ではもう新たな呼び方に慣れつつある。どうでもいい話だったな。

「須藤くん。次は六番テーブルに蟹クリームスパゲッティ三つお願い。食後にはデザートで梨のタルトね」

「わかりました」

厨房の先輩から蟹クリームスパゲッティを三皿受け取り、そのまま六番テーブルに向かう。三つぐらいなら何度も運んでいるからどうということはない。

「お待たせいたしました。蟹クリームスパゲッティです」

六番テーブルに着き、蟹クリームスパゲッティをテーブルに置こうとする。だが、そこで聞き慣れた声がそれを遮る。

「あれ？　明弘？」

「ん？　ああ、一夏か」

改めて六番テーブルを見ると、客は一夏とシャルロット、あと赤毛の女子だった。なんだろう。前ののほほんさんと簪のときといい、ここは俺の知り合い御用達の店なのか。

「お前、ここで何してんだ？」

「見ての通りバイトだ。そっちこそ女子二人も連れてどうしたんだ？」

まあ、シャルロットと腕時計を探しにきたのは知っているが、聞いておく。鈴音の代わりに見知らぬ赤毛の女子がいるのも気になるし。

なんだかこの女子の髪、弾と同じ色に見えるな。兄妹か？

「シャルと腕時計を見に来たんだけど、途中で蘭に会ってな。一緒に腕時計見てもらったんだよ」

「蘭？」

「ああ、お前は知らなかったな。弾の妹の五反田蘭だよ。蘭、こっちは須藤明弘。俺のクラスメイトだ。ニュースとかで見たことある

か？」
「あっ、はい」
なるほど、やはり兄妹か。一応挨拶しておかないとな。
「須藤明弘だ。一応ＩＳ学園の生徒だが、ＩＳは使えないからそこらへんは勘違いしないようにな」
「はっ、はじめまして、五反田蘭です。えっと、ＩＳに次ぐ新型パワードスーツのデータ収集、でしたよね？」
「そんなところだ。だからＩＳについてはあまり聞かないほうがいいぞ」
「何言ってんだよ。学年二位の実力のくせに」
「実力だけだったらシャルロットの方が上だと思うぞ。ただ機体の性質的に俺が有利なだけだ」
「どうだか」
一夏と軽口を叩き合う。シャルロットには見慣れた光景でとくに気にしていない。逆に笑顔だ。蘭の方はいまいちついていけてないようだ。この辺で切り上げるか。
「で、いい腕時計は見つかったのか？」
「ああ、二人がいいのを選んでくれた。お前は腕時計持ってるか？」
「いや持ってないし、必要とも思わん。携帯があれば十分だ」
「俺、それをシャルに言ったら怒られたぞ。『格好いい男子になりたいなら必須』だって」
「格好いい男子に腕時計は必須だよ。明弘も買ったらどう？」
「俺は別に格好よくならなくてもいい。一夏と違ってなっても誰も喜ばないし、無駄なだけだ。とりあえず、俺はもう仕事に戻るぞ。デザートはあとで持ってくる」
「おう」
意外と長い時間話し込んでいたようだ。そろそろ戻らないと、店に迷惑がかかる。そう判断して、その場から離れる。
さてと、俺はどうするかな。誕生日プレゼント。

第百六十一話　秘密（前書き）

第百六十一話です

第百六十一話　秘密

「じゃ、お疲れ様でしたー」
「失礼します」
バイトを終え、特に行く当てもなくレゾナンスの中を歩き回る。
適当に歩き回ってたら、良さそうな物とか見つかると思ったんだがな。
「さて、こうなると本格的にやばいぞ」
「そうですね」
携帯の時計を見ると、バイトから上がって約一時間。その間、ずっとレゾナンス内を歩き回ったが、これといってよさそうなものは見つからなかった。もう手詰まりなんだが。将棋で言えば、詰みかその一歩手前なんだが。
「何かお困りのようだね」
不意に後ろから声がかけられる。今まで考え事に集中していたから気が付かなかったが、振り向くとそこには誰かが立っていた。
「ああ、警戒しなくていいよ。さっきから何か悩んでいるようだったから声をかけただけ。余計なお世話だったらすぐに立ち去るよ」
「……いや、余計なお世話じゃない。確かに俺たちは困ってたからな。誰かに力を貸してもらえるなら嬉しい限りだ」
声をかけてきたのは中世的な顔立ちの人物だった。背は遥香と同じ――いや少し高いくらいか。紺色の長袖の服と黒の長いズボンをはいている。顔や体からは性別がわからず、声も中性的で男か女か区別が付かない。
不思議なやつだが、怪しいやつには見えない。それ以上に今の俺たちには、誰かの手助けが必要なのは確かだ。ここは頼っておいて損はないだろう。
「俺は須藤明弘。こっちは天宮遥香。お前は？」
「自分のことはスァリって呼んで。よろしく明弘、遥香」

人物――スァリが微笑みながら言う。苗字ではなく名前、しかも呼び捨てだが特に気にしない。

それよりも、一人称は自分か。ますます男か女か区別が付かなくなってきた。スァリって名前も聞き慣れないし。外国人だろうか。

まあとりあえず、「よろしく」と応えておく。遥香も少し警戒した様子だが、一応返事をした。

「それで、二人は何を悩んでいたの？」

「今度友達の誕生日でプレゼントを渡そうと思うんだが、いまいち良いのが思いつかないんだ」

「なるほどね。その友達って男の子？　それとも女の子？」

「男だ」

「じゃあアクセサリーとかじゃない方がいいかもね。確かあっちにプレゼントに向いている雑貨を売っている店があったはずだよ。男向けのもあるからそこで探してみない？」

「任せる」

俺とスァリだけで話が進んでいく。遥香はまだ警戒しているのか、無言でスァリのことを凝視している。そこまで警戒する必要はないと思うんだがな。

「じゃあ行こうか」

「ああ。それよりスァリ、失礼な質問かもしれないが、お前は男なのか？　女なのか？」

性別に尋ねる。失礼なことなのかもしれないが、気になったので聞いてみる。

それにスァリは別段気を悪くした風でもなく、「ああ、そのことか」とあっさり答えた。

「知り合いにもよく言われるよ。でもこれだけは秘密。誰にも教えたことがないことだからね」

秘密か。まあ、会って数分の相手に教える必要もないかもしれないが、誰にも教えたことがないというのは少し驚きだな。何か理由でもあるのだろうか。

「そうか。すまないな。こんなこと聞いて」
「別に構わないよ。さ、それより早く行こうか」
スァリに先導されるように、俺たちはスァリの言う雑貨屋に向けて歩き出した。

第百六十二話　隠れた名店（前書き）

第百六十二話です

第百六十二話　隠れた名店

「へぇ、こんな店あったのか」
スァリに連れられてやって来たのは、静かな雰囲気の店。客は結構いるが、男と女が半々ぐらい。女だらけだと気が引けるが、これなら気軽に入れそうだ。
「結構良さそうな店だな」
「そうでしょ。値段も手ごろで、いいのが多いんだ。隠れた名店ってところかな」
スァリの言葉を聴きながら店に入る。そして、近くにあった商品を見てみる。今回のプレゼントには会わないが、結構良さそうな物だ。値段も安い。確かに隠れた名店かもしれない。
「よし、じゃあ早速探してみるか」
「そうだね。さ、遥香も行こう」
「……はい」
三人であれこれと良さそうなものを探し始める。アクセサリーは合わないだろうということで、小物を中心に探してみるが、良さそうなのばかりで逆に決めきれない。
「これなんてどうでしょう？」
「うーん、あいつには合わないかもなぁ。これはどうだ？」
「男の子には似合わないと思うよ。もうちょっと控えめな色の方がいいんじゃないかな」
「そうか？　まあ、確かにちょっと明るいかもしれないな」
「控えめな……これはどうでしょうか？」
そう言って遥香が手に取ったのは、白を基調としたストラップ。元々控えめな遥香が控えめに選んだので、かなりシンプルで控えめなやつだが、悪くないかもしれない。
「いいんじゃないか？　じゃあ遥香のはそれでいいかな」
「私のですか？」

「それはお前が選んだやつだろ。だったらお前がプレゼントした方がいい。俺のもすぐに決まるだろうからさ」
「わかりました」
とりあえず、遥香の分は決まったな。あとは俺だけだが、どうしようか。いくらなんでもストラップを二つ贈るのもなぁ。他のコーナー見てみるか。
と、隣のコーナーを見てみると、そこはどうやら財布のコーナーだったようだ。いろんな色、種類の財布が所狭しと並んでいる。
「ん？」
そこで目に入ったのは、黒地に白い模様の入った財布。これならいいかもしれない。手にとって確認してみる。ポケットも何個かあって機能的だ。値段は……安いな。プレゼントにはちょうどいい。
「俺はこれにするか。値段も手ごろだし」
「財布か。いいかもね」
「よし、じゃあ会計してくる。スァリは店の外で待っててくれ」
「うん、わかった」
「すぐ終わらせてくる。行くぞ、遥香」
「はい」
スァリと一旦別れ、俺たちはレジのほうに向かった。

「待たせたな」
会計を終え、俺たちは店の音で待機しているスァリの元へ向かう。スァリは俺が声をかける前から俺たちが来ることに気づいていたようで、振り返る。
「ううん、大丈夫だよ。それよりもプレゼント、決まってよかったね」
「ああ、これもスァリのおかげだ。で、これはそのお礼。受け取ってくれ」

そう言って、小さな包みを手渡す。スァリは少し驚いたような表情を見せる。
「自分は特に何もやってないよ」
「いや、この店を見つけられたのはスァリのおかげだ。受け取ってくれ」
「いいの？」
「もちろん。見ず知らずの俺たちの手助けをしてくれたんだ。これくらい当然だろう」
「うん。じゃあ、ありがたく受け取っておくね」
スァリはそのまま包みをしまう。ここで開けないのだろうか。
「ここで開けないのか？」
「帰ってゆっくり明けたいからね。明弘がここで開けて欲しいって言うなら開けるけど」
「いや、お前の好きにしてくれ。気に入らなかったら捨てても構わない」
「そんなことしないよ。じゃあ、自分はそろそろ行くね」
「ああ、また会えるといいな」
「きっと会えるよ。じゃあね」
「じゃあな」
「さようなら」
そんな飾り気のない挨拶を交わして、俺たちはスァリと別れた。人ごみに消えていくスァリを見届けながら、何気なく呟く。
「……不思議なやつだったな」
「そうですね」
知らないことばかりのやつだったけど、なんだかそこらへんのやつよりよっぽど信用できた。たぶん、あれはありのままの姿なのだろう。変に繕っているやつより信頼できるやつだ。
白、いや透明か。色に例えるならあいつはそんなやつだった。何者にも染まらないありのままの色。
そうだ。透明といえば、グレルたちが使っていた無人機・トラン

スペアレントも透明って意味だな。あっちはありのままというか、
見えない色って感じだったが。

第百六十三話　貸し出しキャンペーン（前書き）

第百六十三話です

第百六十三話　貸し出しキャンペーン

週末が終わり、月曜日の今日は『生徒会執行部・織斑一夏&須藤明弘貸し出しキャンペーン』が開始された。今週は、俺が料理部、一夏がテニス部だ。

貸し出しは各部活一週間ずつ。昨日部活の部長たちが集まって、生徒会監督のもと抽選を行ったそうだ。俺も一夏も昨日は出かけていたからその結果を直接見たわけではないが、会長から毎週月曜日にその週はどこの部活に行けばいいのか連絡が来るようになっている。なので来週はどこの部活に行けばいいのか俺と一夏にもわからない。

「料理部って、何やるんだ？　料理作ってそれで終わりか？」

「まあ、だいたいそうだよ。あとは部員同士で食べあって意見を交換し合うってところかな」

料理部所属のシャルロットから簡単な説明を受ける。料理の腕を高めあうって言うのが、この部活のモットーらしい。

今日のメニューはオムライス。俺がよく作るメニューの一つだ。確かにポピュラーな料理だが、意外と難しい。卵が敗れないように焼くのは俺も苦労したもんだ。

しかも破れないように焼くには、ちょっとしたコツはあってもほとんど慣れが必要になってくる。何度も何度も試して、それでようやく上手く焼けるようになる。料理というのはだいたいそういうものだ。

シャルロットから説明を受けている間も、他の部員はオムライスを作っていく。そろそろ俺もやらないとな。

「じゃ、俺も作ってみるよ」

「うん、わかった。頑張ってね」

「頑張るほどのことでもないけどな」

俺にとって料理は日常茶飯事のことなので、頑張ってやるという

よりも習慣のようなものだ。特にオムライスなんてよく作ってるから、今更どうこう頑張るほどのことでもない。

まず卵を溶いて、熱したフライパンで火を通す。適度に火が通ったところでそれを丸めていく。卵でチキンライスを包むのもあるが、俺はどっちかというとプレーンオムレツをチキンライスに乗っけて、食べるときに開くやつの方が好きだ。

「さて、と。これで完成」

チキンライスの上にオムレツを乗せて完成だ。

といっても、自分で食べることはなく、他の部員に食べてもらって意見を聞いてみよう。そうだな、さっき説明してくれたシャルロットに食べてもらおう。

「いただきます」

シャルロットがオムレツを開いてオムライスを口に運ぶ。特に失敗してはいないはずだが、料理は食べてみないとわからないからな。

「……うん、とても美味しいよ」

「味が薄いとか何かあるか？」

「特にないかな」

「あー！　デュノアさんずるーい！」

「私も須藤君のオムライス食べたい！」

他の部員がオムライスを食べていたシャルロットに気づき、騒ぎ始める。なんだ？　俺のオムライス食っても何にもならないと思うが。

「俺のオムライスなんてそこまで上手いもんじゃないぞ？」

「そんなことないよ。とっても美味しいよ」

おいシャルロット、何でそんなこと言うんだよ。そんなこと言ったら皆食べてみたくなるだろ。そこまで美味しいもんじゃないから、皆がっかりするだろうが。

「須藤君、私にも作って！」

「私も！」

「ああ、もう！　わかったから静まれ！」

このあと、俺は部員全員の分のオムライスを作る羽目になった。
料理の腕を高めあうのがモットーなのに、料理を作らせるなよ。まあ料理を作るのは好きだからいいけどさ。

第百六十四話　高速機動（前書き）

第百六十四話です

第百六十四話　高速機動

今日からキャノンボール・ファストに向けて、高速機動の授業がスタートされた。ついさっき、一夏とセシリアがここ第六アリーナで実演をした。あとは専用機持ちはそれぞれの専用機の調整などを、一般生徒は訓練機での演習を行う。訓練機部門はクラス対抗戦で景品としてデザート無料券が出るらしい。女子はそのせいでかなりやる気になっている。

ちなみに専用機持ちはそれぞれ準備の仕方が少々違う。

機体の出力を調整するのが一夏と箒。二人の機体は束さんお手製のものだからパッケージがないからな。まあ、白式は元々機動力は高いし、第二次形態移行で大型スラスター四基になった。紅椿は展開装甲を使うだけで簡単に高速機動になるから問題ない。

高速機動パッケージを使用するのがセシリアと鈴音。ブルー・ティアーズの分は臨海学校のときにすでに来てるし、甲龍の分も日曜日の朝に届いたらしいから大丈夫か。

増設スラスターを使用するのがシャルロットとラウラ。ラファール・リヴァイヴは元々スラスターの増設はしやすいらしいし、シュヴァルツェア・レーゲンの方は本国にある姉妹機の増設スラスターを使うことになるらしい。

俺と遥香は……一応機体出力調整組に入るのだろうか。《イカロスの翼》で高速機動はばっちりだし、少し高速機動用に出力を調整するくらいだ。そのあとは実演してみて再調整ってところか。

「さて、どうするかな」

神王の出力調整をしながら呟く。出力を上げるにしても、背部スラスターの出力を上げるか、多方向推進翼の出力を上げるか悩みどころだ。前者なら速度の向上を図れるし、後者なら安定性を増すことが出来る。

「遥香、どうしたらいいと思う？」

「そうですね……。私は推進翼の出力を上げることを推薦します。速度でしたら《イカロスの翼》で十分でしょうし、明弘様には秘策があるでしょう？」
「なるほどな」
秘策というのはこの前使った三段階瞬時加速のことだろう。確かにあれがあれば安心だろう。あれを確実に成功させるためには、やっぱり推進翼の出力を上げるほうが妥当か。
「よしじゃあ推進翼の出力を上げて……。これでよし。試しにアリーナでやってみるか」
「私も行きます」
そして遥香とともにコースに向かう。そこで、ちょうど俺たちと同じく実践演習をしようとしているセシリアと鈴音に出くわした。
「二人も実演か？」
「ええ。わたくしたちのはすでに量子変換されていますから」
「で、ちょうどいいから勝負しようってことになったのよ。アンタたちもやる？」
「面白そうだし、やろう」
「では、私も参加します」
四人並んでスタートラインに立つ。
「ルールはどうする？」
「本番と同じよ。妨害あり」
「了解」
ちょうど近くにいた山田先生にスタートの合図をお願いして、それぞれ構える。
最初は少し長めの直線があり、そのあとに第一コーナーがある。ここはスタートダッシュを決めておくか。
「ではいきますよ！　よーい、スタート！」
合図とともに一気に瞬時加速。三段階瞬時加速は本番までとっておくことにしよう。切り札は最後まで隠しておくものだ。

勝負の結果としては、途中からセシリアと鈴音がお互いに妨害しあってくれたので、俺と遥香はその隙を突いてゴール。一位から順に俺、遥香、最後にセシリアと鈴音が同着だった。

本番でもつぶしあってくれればいいが、勝負のあとにそれぞれ今回の失敗をふまえて、改善したみたいだから難しいだろうな。

第百六十五話　キャノンボール・ファスト（前書き）

第百六十五話です

第百六十五話　キャノンボール・ファスト

キャノンボール・ファスト当日。会場は満員御礼で歓声が聞こえてくる。

学園祭のときと同じく、一生徒につき一人の一般人を招待することが出来る。俺と遥香はそんな相手がいないから誰にも渡してないけど。

確か最初は二年の訓練機のレース、次が俺たち一年専用機持ちのレースだったな。今は二年訓練機の部がはじまるところだ。

「皆やる気十分だなー」

「そうだね。いいレースになるかもしれない」

俺の独り言に誰かが答える。遥香は最終調整をやっているからいないはずだし……。誰だ？

振り返ってみると、そこには中性的な顔立ちの知り合いが立っていた。

「……スァリ？」

「やあ、明弘」

「どうしてこんなところに？」

この会場に入れるのはお偉いさんか、生徒に招待されたやつだけだ。スァリはどっちに入るのだろうか。

「自分の知り合いがいてね。その雄姿を見学しに来たんだ」

「なるほど。その知り合いって誰だ？　俺も知ってるかもしれないし」

どうやら後者だったようだ。なんとなくスァリを招待したやつが気になり尋ねてみる。

「秘密だよ。まあ、いずれ知ることになるから大丈夫だよ」

「そうか。じゃあその日が来ることを願うとするよ」

「早く来るといいね。もしかしたらすごく身近な人かもしれないし」

「そうだな」

「えっと、明弘は次のレースだよね？　頑張ってね」
「ああ。って、そろそろ言って準備しないと。終わったあとにまた話せたら話そうぜ」
「うん、楽しみにしてるよ」
会話を終え、スァリと別れてピットに向かう。神王の最終調整をする必要があるし、知り合い(スァリ)が見てるとあっては恥ずかしい結果は出せない。最初から狙ってはいたが、一位を狙うか。

「おかえりなさいませ。明弘様」
「ああ。さっきスァリに会ってきたよ。知り合いがいるらしくて、そいつの雄姿を見に来たんだと」
「……そう、ですか」
なんだろうか。スァリの話になると、遥香の雰囲気が少し暗くなるような気がする。日曜の夜に話をしたときもそうだったし。
スァリのどこが気に入らないのだろうか？　確かに不思議なやつではあるけど、いいやつだし、それほど警戒する必要はないと思うが。
「とりあえず、次のレースは精一杯頑張らないとな。元々頑張るつもりではいたけど」
「そうですね」
「じゃあ、俺はこれから神王の最終調整するから、またあとでな」
「はい。では失礼します」
そう言って遥香が去っていく。たぶん静かなところで集中するんだろう。
集中するってことは、あいつもかなり本気らしいな。あいつは他のやつらの高速機動の操縦技術を『複写』したみたいだし、かなり厄介な相手になるだろう。
しかもあいつの《神祇》の小型の銃弾に分裂させることができる

散弾は妨害に適しているし、《護神》の防御は強敵だ。心してかからないとな。

第百六十六話　青の襲撃者（前書き）

第百六十六話です

第百六十六話　青の襲撃者

『これより、一年生専用機持ちのレースを開始します』

アナウンスが会場に響き渡る。いよいよ本番か。

超満員の観客が注目する中、シグナルランプが点灯する。

三……二……一……スタート。

一気に俺たち専用機持ち八人が超高速でスタートする。その中でまず先頭に出たのはセシリアと鈴音。そのあとにラウラ、シャルロット、一夏と箒の順で飛ばしていく。大体予想通りの展開だな。

遥香は……箒の斜め後ろあたりか。俺と同じ事を考えているのか。

序盤は後方で様子を見て、他のやつらが潰し合うのを待つ。後半になったら一気に抜き去って、あとは妨害をしつつ一位を目指す。

それが当初の作戦だったが、変更して序盤から攻めていくか……。

「っ！？」

一気に速度を上げようとした途端、俺の目の前で小規模の爆発が連続して起こる。なんとか横にかわしたが今のは……遥香か。

遥香の《神祇》の実弾の一つ、小ボム弾。着弾すると小型をボムをばら撒き、相手の動きを止める弾だ。このレースにはもってこいの弾だな。

俺が三段階瞬時加速を使うのを予想しての妨害。さすが遥香だ。

だが、ここで負けるわけにはいかない。

三段階瞬時加速はまず無理だ。やろうとすれば遥香の妨害にあう。となればやれるのは――

「先行くぞ、一夏」

「なっ、明弘！」

溜めの少ない通常の瞬時加速を使い、一夏と遥香を抜く。箒の斜め前まで来たが、ここまでくれば一気に飛ばせるはず。

「行かせるか！」

「ちっ、邪魔だ！」

箒が俺の妨害のために斬りかかってくる。それをなんとか展開した《エクスカリバー》で弾きつつ、三段階瞬時加速の準備を始める。

だが、これを成功させるにはかなりの集中力が必要だ。箒の攻撃を受けているこの状態では失敗する確率のほうが高い。

結局、三段階瞬時加速を使えないまま二週目に突入した。やばいな。前方の四人との距離が少しずつ開いてきてる。そろそろやらないとやばいな。

箒の攻撃を無理矢理弾き返して、箒の体勢がやや崩れたところで一気に三段階瞬時加速を発動させる。無理矢理弾き返したから俺の体勢も万全ではないが、箒の攻撃を受けている状態よりマシだ。幸いにここからは直線が続く。一気に勝負をかける。

三段階瞬時加速を発動。箒たちを置いて一気に前方四人に距離を詰める。しかし、俺がちょうど前方四人と一夏たち後方三人の中間あたりに来たとき、不意にトップだったラウラとシャルロットが上空から飛来したレーザーが撃ち抜く。

キャノンボール・ファストでは妨害が認められているが、それは相手に危害が及ばない程度という制限がされている。だが、今のレーザーはそんな生易しいものじゃない。

しかも、上空からというのもおかしい。出場者は原則、コースを滑空するような感じでレースをする。上空から攻撃が来るというのは特殊な武装でない限りありえない。

多方向推進翼で無理矢理機体を静止させる。ちょうど撃たれた二人の脇で静止し、上空を見上げた俺が見たのは青いＩＳ――

「……サイレント・ゼフィルス……っ！」

以前、ナータがやられ、イリスが取り逃した青い襲撃者が、そこにいた。

第百六十七話　偏向射撃（前書き）

第百六十七話です

第百六十七話　偏向射撃

「サイレント・ゼフィルス！」
一気に襲撃者――サイレント・ゼフィルスに突撃する。《デュランダル》も展開し、攻撃を仕掛けるが、ことごとく相手のシールドビットに阻まれる。
「貴様……誰だ？」
「須藤明弘、ＩＳ学園の一年生だ。サイレント・ゼフィルス、ナータの仇を取らせてもらうぞ」
「……ナータ？」
「ナターシャ・ファイルス。アメリカ国家代表で銀の福音の登録操縦者だ」
「ああ、あのときのか。生身で私の前に立ちふさがるとは、馬鹿なやつだ」
馬鹿？　ナータが？　我が子のように大事に思っていた福音を守るために、死ぬことを半分覚悟して立ち向かったナータが……よりによって、馬鹿だと？
「……ふざけるな。お前にナータの何がわかる……。命を懸けて大事な福音を守ろうとしたナータの何がわかる！」
俺の中で黒い感情が渦巻いているのがわかる。目の前のやつを倒せ。目の前のやつを殺せと自分の中の黒い感情が囁いてくる。俺はそれに逆らわず、サイレント・ゼフィルスに向かっていった。
サイレント・ゼフィルスに突撃。右手に《エクスカリバー》を、左手に《アルカディア》を握りしめ、瞬時加速で相手に詰め寄る。
サイレント・ゼフィルスはそれを回避し、俺に向かってライフルを撃つ。その射撃を完全に回避した俺だが、次に瞬間、回避したはずのレーザーが俺の背中に直撃した。
「がっ！？
偏向射撃（フレキシブル）。ＢＴエネルギー高稼働時に飲み使える技術で、レーザ

ーを自在にコントロールすることができる技術だ。だが――
「……それがどうした？」
だが、今の俺には関係ない。
「それがどうした！」
レーザーが操られようが知ったことか。ようは避けずに防げばそれですむ話。
左腕に《イージス》を展開する。これで防いでしまえば関係ない。
「はぁぁぁっ！」
再び突撃して、《エクスカリバー》による攻撃。それを相手はひらりとかわし、俺に向かって射撃を浴びせてくる。それを《イージス》で防御、吸収しながら再度突撃をかける。
三回ほどそれが繰り返されたとき、不意に俺の脇からレーザーが飛んできた。そのレーザーは真っ直ぐサイレント・ゼフィルスに向かうが、シールドビットに阻まれる。
「明弘さん！　あれの相手はわたくしが！」
「セシリアか。あれの相手は俺がやる。邪魔をするな」
「そうはいきませんわ！　あれは元々イギリスのもの。わたくしがけりをつけなければいけませんの」
「だが俺もあいつには借りがある。それを晴らす」
「ああ、もう！　そんなことで言い合ってないでさっさと片付けるわよ！　あたしがサポートに回ってあげるから二人でやりなさいよ」
セシリアと言い合っていると、セシリアのサポートに来たらしい鈴音に怒鳴られる。仕方無しに俺とセシリアは協力してサイレント・ゼフィルスに向かっていく。
しかし、俺とセシリアはペアで闘ったことなんて全くない。鈴音のサポートがあるといっても、そんな状態で戦うのははっきり言って不利だろう。
だが、負けるわけにはいかない。セシリアはイギリス代表候補生としての義務、俺は知り合いが大怪我させられた借りがある。相手が強かろうが、負けるわけにはいかない。

第百六十八話　どうすればいい（前書き）

第百六十八話です

第百六十八話　どうすればいい

セシリアと即席のコンビを組み、サイレント・ゼフィルスと対峙する。

セシリアはその手の大型ライフルでサイレント・ゼフィルスに攻撃をかけるがサイレント・ゼフィルスはシールドビットで完全に防ぎきってしまう。ブルー・ティアーズの高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』では、《ブルー・ティアーズ》は全て推進翼に回されているため、攻撃できるのは大型ライフル一つと火力、手数ともにいつもよりも不足している。

「明弘さん！」

「わかってる！」

相手のシールドビットが全て防御に回されたタイミングで一気に距離を詰め、《エクスカリバー》を振り下ろす。

だが、サイレント・ゼフィルスはいとも簡単に避け、逆にライフルで攻撃を加えてくる。

あのライフル、《アルカディア》と同じように実弾とレーザーの両方を扱えるみたいだな。出力は《アルカディア》の方が上のようだが、少々厄介だ。

「……この程度か」

「なんだと？」

「この程度……。所詮はあいつの仲間か」

あいつ、ナータのことだな。こいつは……どこまで俺のことを怒らせたいんだ。

「……ぶっ殺してやる」

俺の中の黒い感情が大きくなっていく。

俺の実力が足らないのは仕方ない。だが、ナータが弱いというのは気に入らない。

サイレント・ゼフィルスに突撃。相手は迎撃するためにライフル

を連射するが、そんなことはどうでもいい。
相手の射撃を《イージス》で防御する。半分ほどは防げたが、もう半分は防ぎきれず俺の体に当たる。だが、そんなこと関係ない。
あいつをぶっ殺す。それだけが俺の頭の中を支配していた。
「はぁぁぁぁっ！」
《エクスカリバー》の刀身から光が溢れ出す。エネルギーを放出することで攻撃力を増加させる、《エクスカリバー》の能力だ。
エネルギーを最大放出すれば、計算では絶対防御すら貫けるはずだが、最大放出は神王自体にダメージが及ぶ危険があるし、高速機動用に出力調整をしている今の状態では不可能だ。だから今は今の状態で出来る最高の出力で攻撃を加える。
文字通り捨て身の突撃。相手もこんなことをするとは思っていなかったようで、一瞬隙が出来る。これなら――
だが、その攻撃は途中で中断されてしまった。
体中を駆け巡る嫌な感じ。これは……学園祭のときにグレルの体を斬った、あの感触。
はじめて人間の生身を切ったあの感触。あれを今俺はもう一度再現しようとしている。
またあの感触を味わうのか？　……だが、目の前のこいつはナータの仇だ。
だが、ここでこいつを斬って何になる。こいつを斬ったからといってナータの傷がいえるわけでもないだろう？　……だが、ナータが受けた苦しみをこいつにも味わわせなければ。
そうやって負の連鎖をつなげていくのか？　……だったら、このままこいつを生かしておいていいっていうのか。
目の前の敵を殺すなという自分と、殺せという自分。二つの相反する思いにはさまれ、俺はなすすべなく動きを止めてしまう。
……俺は……一体どうすればいいんだ？

第百六十九話　お疲れ様（前書き）

第百六十九話です

第百六十九話　お疲れ様

……体が動かない。まるで自分の体じゃないみたいに、言うことを聞かない。

「……死ね」

相手がこっちに銃口を向けてくる。回避しなければ。そう思っていてもやはり体は動いてくれない。

次の瞬間、重い衝撃が俺を襲う。零距離での攻撃、しかも直撃だ。絶対防御を貫いて衝撃が俺を突き刺す。

「がっ……」

地面に激突する。さらにサイレント・ゼフィルスがダメ押しとばかりに、銃弾とレーザーの豪雨を浴びせてくる。回避しなければならないのに、やはり体が動かない。

意識が遠のく。体の感覚がなくなっていく。

「明弘様っ！」

遥香の声が聞こえる。だがそれに応えるだけの力はもう残っていない。だんだんと遥香の声もかすれていく。

そして、俺はなすすべなく、意識を手放す。

『お疲れ様。あとはわたしがやるから、キミは休んでてね』

意識を手放す瞬間、そんな声が聞こえたような気がした。

「明弘様！　明弘様！」

地面に叩きつけられた明弘のもとに遥香が駆けつき、何度も明弘の名を叫ぶ。

普段の彼女からは想像もできない姿。だが、それが今の明弘の状

態の酷さを物語っていた。
全身傷だらけで、血も至るところから流れ体を赤く染めている。安らかな眠りに就いたかのように閉じられたその目は、もう二度と開かないのではないかという恐怖を遥香に与える。
「明弘様……明、弘……様……」
遥香の体から力が抜け、抱きつくかのように明弘の上に覆いかぶさる。
自身に血が付くことをいとわずに明弘を力の抜けた腕で抱きしめ、涙を流す。
「……？」
不意に肩に感じた何かに、遥香は顔を上げ、自身の肩を見る。
そこに置かれているのは人の手。……そしてその手は紛れもなく明弘の手だった。
「……明弘様？」
気を失っていた明弘が遥香の体と一緒に上体を上げる。遥香は力の抜けた腕でなんとか体を離し、ゆっくりと明弘の顔を見上げる。
それに応えるかのように明弘が微笑む。普段の彼の笑みとは違う。明るさと温かさ、柔らかさに満ち溢れたその微笑み。
そのまま明弘は優しく遥香の体を離し、安定する体勢に座らせる。そして、遥香の頭をふわりと撫で、何も言わずブルー・ティアーズとの戦闘に入り、アリーナから市街地に飛び出していったサイレント・ゼフィルスを追うようにアリーナを出て行った。
「……明弘様、なのですか？」
一人残された遥香が呟く。その呟きは誰に向けたものでもなく、もしかしたら自分に向けたものだったのかもしれない。
いつもの明弘なら、「大丈夫だ」くらいの言葉はかけてくるだろう。自分のために涙を流していた遥香が相手なら尚のこと。しかし、今の明弘は一言も喋ることなく、飛び出していった。
いつもの明弘なら、あんなに優しく遥香を座らせることはしなかっただろう。いくら気配りが出来るとはいっても自分が大怪我を負

っている状態でそこまで他人のことを考えられない。しかし、今の明弘はそれどころか心配をかけないために頭まで撫でていった。

そしてそれ以上に、さっきの微笑み。いつもの明弘なら絶対にやるはずのない微笑みだった。

明弘のはずなのに、明弘ではないかのような不自然さ。明弘であって明弘ではない奇妙さを感じ、遥香はただただ、座り込んでいるしかなかった。

第百七十話　虚ろな目（前書き）

第百七十話です

第百七十話　虚ろな目

（くっ、やはり強い！）

市街地でサイレント・ゼフィルスと戦っているセシリアは相手の実力の高さに思わず歯をかみ締める。

大出力ライフルをサイレント・ゼフィルスに向けるが、射撃とシールドビットの妨害を受け、また距離が開いてしまう。しかも相手の偏向射撃による変幻自在の攻撃がさらにセシリアを苦しめる。

一方的。あまりにも一方的な展開。しかし、援軍が来るにもまだ時間がかかる。

シャルロットとラウラは最初の射撃で機体にダメージを負い、戦闘には参加できない。一夏と鈴音は箒にシールドエネルギーを補給してもらっているし、明弘はさっき相手の攻撃をまともに食らって戦うことなんてできるはずがない。遥香はその明弘に付き添っている。

少なくとも一夏たちが来るまでの間は自分一人で何とかするしかない。

サイレント・ゼフィルスの射撃をセシリアはギリギリのところで回避する。しかし、その隙を突いてサイレント・ゼフィルスはセシリアの背後を取った。すでにその手のライフルはセシリアに向けられている。無理矢理の回避で体制が崩れているセシリアには避けきれない。

「……終わりだ。……死ね――っ！？」

トリガーが引かれる直前、背後から飛来した何かによってサイレント・ゼフィルスが弾き飛ばされる。ライフルから発射されたレーザーはセシリアとは全く別方向の、上空に飛んでいった。

「……」

サイレント・ゼフィルスを弾き飛ばした何か――《デュランダル

≫を自分のもとに引き寄せた明弘が、そこにはいた。

明弘は体中血まみれなのを全く気にせず、悠然とサイレント・ゼフィルスと対峙する。

「明弘さん！　大丈夫ですの！？」

「……」

明弘は答えない。ただその目は真っ直ぐとサイレント・ゼフィルスを見据えている。しかし、その目には憎しみも何の感情も宿ってはいない虚ろな目。もしかしたらサイレント・ゼフィルスの方を向いていながらも、本当はその目には映っていないのかもしれない。

サイレント・ゼフィルスの操縦者――エムは血まみれになりながらもここにきた異様な雰囲気をまとう明弘を見て、信じられないものを見たように呟く。

「……貴様……なぜ来た？」

「……」

エムの言葉にも答えず、明弘はその周りに浮遊する≪デュランダル≫を再びエムに――向けずにそのまま量子に変えて収納した。

「……？」

明弘の不可解な行動にエムだけでなくセシリアも首をかしげる。しかし、明弘はそんなことどうでもいいかのように無視し、悠然とたたずみながら虚ろな目をエムに向ける。

「……」

≪デュランダル≫も収納し、両手に何も持たない無手。相手と戦うための武器も身を守るための盾も何も持たない状態で、明弘はためらうことなくエムに向かって突撃した。

第百七十一話　墜落（前書き）

第百七十一話です

第百七十一話　墜落

「……っ？」

明弘の奇妙な行動にエムは少し驚きながらも対処する。

明弘の突撃を回避し、ライフルの銃口を明弘に向ける。しかし、銃口を向けた先には明弘の姿はすでにない。エムが視線を上に向けると、真上に明弘が現れる。

「っ！」

明弘がエムの横腹に蹴りを入れる。ライフルを構えていたせいで防御の姿勢をとれず、エムはそのまま蹴りをまともに食らってしまう。

しかし、エムもすぐに体勢を立て直し、明弘に向かってライフルを連射する。一発一発が絶妙なコントロールで飛んでくるその弾雨を、明弘はすばやい動きでかわし続ける。

「なんですの……」

その様子を見ていたセシリアが思わず声を漏らす。自分ではまるで歯が立たなかった相手と互角に渡り合っているのもあるが、明弘と自分の実力の差は知っている。確かに、血まみれの状態で戦っているのは驚きだが、それ以上にセシリアが感じたことがある。

動きが違うのだ。普段の明弘との動きとはまるで違う、普段の明弘と今の明弘は別人なのではないかと思うほど、今の明弘の動きはいつもと違うのだ。

もともと明弘の戦い方はさまざまな武装を状況に応じて使い分け、どんな状況、距離でも戦うことのできるオールマイティな戦い方だ。

それに対して、今の明弘は武装という武装を使わず、無手の状態で戦っている。明弘が無手で戦うところをセシリアは見たことがないので断言できないが、今まで明弘が見せてきた動きのどれとも違う。しかし、それでもエムと互角に渡り合っている。

学園祭が終わってからというもの、明弘は誰とも模擬戦をしてい

ない。その間、隠れて特訓をしていた可能性もあるが、この短期間でここまで戦闘スタイルが変わるとは考えにくい。それにさっきエムと戦ったときは今までと同じスタイルだった。それなのに何故……。

「一体何があったんですの……明弘さん……」

そんなセシリアの呟きを聞くものは誰もおらず、明弘とエムの戦闘は続く。

エムによる豪雨とも呼べるレーザーと弾丸の雨。しかしそれに明弘は臆することなく正面から突っ込み、全てを紙一重でかわしていく。

「……貴様……」

弾幕を避けきり、再びエムに蹴りを食らわせようとする明弘。しかし、同じ手を二度も食うものかとエムはそれを回避する。

それを見越していたように明弘は一気に追撃をかける。エムもなんとかその追撃を裁き続けるが、少しずつ、少しずつ押されていく。

何十にも及ぶ連続攻撃の末、ついにエムの体制が崩れる。そこにとどめの踵落としを食らわせようと明弘が大きく足を振り上げ――その直後、糸の切れた人形のように微動だにしなくなった。

「……？」

エムが怪訝そうな表情を浮かべる。明弘はそのまま力を失ったのか、地面に向かって一直線に落ちていく。

「明弘さん！」

セシリアが落下する明弘を捕まえようと、一気に明弘に向かって飛ぶ。しかしそれはサイレント・ゼフィルスの体当たりによって妨げられた。

「……お前も終わりだ」

「くっ――！？」

零距離からの射撃を寸でのところでセシリアは回避する。明弘はそのまま落下していき、誰もいない空き地らしきところに墜落した。

ひとまず住宅に被害が及ばなかったことに安堵しながら、セシリ

アはすぐに気を引き締めてエムに向かって飛び出した。

第百七十二話　キミの代わり（前書き）

第百七十二話です

第百七十二話　キミの代わり

「ん……？」

目が覚めると、俺はベットの上にいた。

真っ白いベッド。俺が使っている簡易ベッドとは違う、しっかりとしたベッドだ。大きさもセミダブル……いやダブルくらいか。二人ぐらいなら簡単に入れそうだ。

「？」

ふと、温もりを感じる。俺のものではない、他の誰かの温もり。

掛け布団をはがすと、そこには一人の少女がすやすやと眠っていた。俺と同じ藍色の髪。間違いない。ネルマだ。

『……ん？　……ああ、起きたの？』

ちょうどネルマが目を覚まし、やや寝ぼけた目で俺を見る。ネルマがいるということは、ここは無限回奏で間違いないだろう。でも今まではこんなベッドなかったが……まあ、ネルマに訊いてみればいいか。というか――

「なぜ俺とお前は一緒のベッドに寝ているんだ？」

『んー、キミは意識を失ってたからそこに寝せて、わたしもちょっとやることあったから一緒に寝ようかなって』

「いや、だからって一緒に寝るのはおかしいだろ。というかやることがあるのなら寝てないでやれよ」

ちょっと状況がつかめない俺に対して、ネルマはマイペースに背伸びをして目を完全に覚まさせる。

『まあいいでしょ。それにやることをやるには寝る必要があったの。キミの体動かすのって結構疲れるんだよ？』

「……ちょっと待て。今なんて言った？　俺の体動かすってどういう意味だよ」

『そのままの意味だよ。キミが気を失ったから代わりにわたしが君の体を少し動かさせてもらったの』

「俺の体に何しやがった。妙なことしてねえだろうな」
自分の体を他人に動かされるのはいい気がしない。というかそんな話信じられるか。まあ、俺の中にネルマがいるってことも信じられないことなんだが。
『わたしはただ怪我をして、全身血まみれのキミを保健室に連れて行こうとしただけだよ。戦闘の真っ最中じゃ医療班もかけつけられないでしょ？』
「確かにそうだが……」
『それに七月のときも、気を失った君の代わりにわたしが戦ってあげたんだよ？　別にあの時もなんともなかったでしょ？』
「……あの時もか」
いきなりの新事実にちょっと驚いてしまう。まあ確かにあの時も特に変なところはなかったし、今回も大丈夫……だろう。
『でも、いざ起きてみると状況が状況でね。セシリアはサイレント・ゼフィルスと一人で戦ってるみたいだったし、シャルロットとラウラは戦闘不能。一夏と鈴音は箒にシールドエネルギーの補給してもらってて、あの子は君がやられたってので泣いちゃってるんだもん。だからしょうがなくセシリアの援軍に向かったってわけ』
「……あの子？」
『遥香だよ。君の体に抱きついて泣いちゃってたんだから』
あの遥香が泣くなんてはじめて聞いたぞ。笑うことも少ないが、泣いたところなんて俺だって見たことがない。俺がやられたのがそんなに悲しかったのか？
『で、セシリアの援軍に向かってサイレント・ゼフィルスと戦ったんだけど』
「おい、怪我人の体で何やってんだ。全身血まみれじゃなかったのか？」
『大丈夫だよ。神王がだいたいの傷をある程度は塞いでくれたし、そこまで全力で動かしたわけじゃないから。ま、わたしが動かせるのはせいぜい二十分が限界。相手に止めを刺す直前に時間切れにな

っちゃった』
「止めを刺す直前だと？」
　全力を出さずにあのサイレント・ゼフィルスを追い詰めた？　なんだこいつは。俺以上の実力、もしかしたら国家代表レベルの実力だ。
『ただ相手と相性がよかっただけだけどね。射撃の精度は高かったけど、その分軌道が読みやすいし。そんなことよりもキミはすごいよね。よくあれだけの数の武装を使い分けられるよ。あたしなんて全部素手だったから』
「素手？　素手であいつとやりあったのか？」
　素手といえばイリスだが、そのイリスはサイレント・ゼフィルスを取り逃した。こいつはもしかしてイリス以上の強さかもしれない。まあ、イリスのときは状況が状況だったらしいけど。
『うん、そうだよ。武器使うのってなんか慣れなくてさ。全部素手』
「お前の方が十分すごいだろうが。それにたった七つだけだ。シャルロットの方がよっぽど多い」
『あはは、そうだね。……と、そろそろ目覚ました方がいいと思うよ。たぶんもう治療済んでると思うから』
「わかるのか？」
『ある程度はね。長い間ここにいれば大体の時間の流れくらいわかるようになるよ』
「……お前は、いつからここにいるんだ？」
『それは秘密。いずれわかるときが来るからそれまで内緒』
　いずれわかるときが来る。そういえばスァリが同じようなこと言ってたな。たぶん俺経由で聞いていて真似したのかもしれない。
『じゃあ、おやすみ。そしておはよう』
「ああ」
　ネルマの言葉に送られるように、俺の意識は闇の中に落ちていった。

第百七十三話　あなたは誰ですか？（前書き）

第百七十三話です

第百七十三話　あなたは誰ですか？

「あ、起きた？」
無限回奏から戻ってきた俺の耳にまずはじめに聞こえてきたのは、飄々とした会長の声だった。
「全身血まみれの状態で戦ったらしいじゃない。無茶しちゃダメよ」
「……はい。以後気をつけます」
「明弘様、体は大丈夫ですか？」
会長の横にいた遥香が尋ねてくる。その目の周りにはかすかに泣いた跡があり、ネルマがいっていたことが本当なのだと実感する。
「ああ、大丈夫だ。心配かけたな」
「いえ、明弘様がご無事ならよかったです」
嬉しいことを言ってくれる遥香の頭をなでながら、気になったことを会長に訊いてみる。
「あのあと、どうなったんですか？」
「サイレント・ゼフィルスにはまんまと逃げられたわ。こっちの被害はセシリアちゃんが右腕を怪我したけど、それ以外は特に目立つものはないわね」
「そうですか。セシリアの怪我は大丈夫ですか？」
「二の腕を刃物で貫通されたけど、ＩＳが止血してくれたし、一週間の活性化再生治療で治るはずよ。それよりも自分の心配をしなさい。ＩＳが止血してくれたとはいえ、全身傷だらけ血まみれの状態で戦ったんだから」
「俺は大丈夫ですよ。傷はもう塞がってますし、ちょっと痛みますけど日常生活には支障ありません」
これなら訓練も明後日には再開できるかな。もっと特訓して強くならないと、ナータの仇は討てそうもない。
「わかったわ。じゃあ一夏くんの誕生会は五時から一夏くんの家でやるから遅れないようにね」

そういって会長が出て行く。あの言い方だと、会長も誕生日パーティーに来るようだな。確かに会長ならこういうことには参加したがるだろう。

「……明弘様」

遥香が声をかけてくる。必要のないことで声をかけてくるようなやつではないから、何か用があるのだろう。

「なんだ？」

「一つ。失礼を承知でお尋ねしたいことがあります」

「言ってみろ」

「はい。では失礼して――」

遥香は一度ゆっくりと深呼吸をして、俺の目をしっかり見ながら口を開く。

「あなたは、誰ですか？」

「……なに？」

「あなたは、一体誰なのですか？　それが私のお尋ねしたいことです」

「俺は俺、須藤明弘だ。それ以外に何がある」

いつも単刀直入に言う遥香らしくない、曖昧な物言い。それに違和感を覚えながらも、はっきりと答える。

もしかしたら、こいつネルマの存在に気がついているのか。そんな疑念が頭をよぎるが、それはないだろう。仮にネルマが俺の体を動かしているところを見ても、いつもと違う、くらいにしか感じないはずだ。俺の中にもう一つの人格――のようなものがいるとは夢にも思わないはず。

「そうですか。では、もう一つ……過去の記憶が戻ったとき、あなたは一体どうしますか？」

「……記憶が……戻ったとき？」

「はい。記憶が戻ったとき、あなたはどうするおつもりですか。Ｉ

S学園に留まるか、それとも昔の居場所へと帰るか」
「……それは……」
そう、遥香の言うとおりだ。記憶が戻ったとき、俺はどうするのだろうか？
今までは記憶を取り戻すことだけを考えていて、その先のことは考えていなかった。
俺――須藤明弘の居場所はこのＩＳ学園であり、束さんの家だ。だが、須藤明弘ではない俺にもきっと居場所はあった。記憶が戻ったとき、俺はどっちを選べばいいんだ。
ここは、あまりにも心地がよずぎる。束さん、遥香、一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、のほほんさん、簪、会長、他の多くの知り合い。ここはいいやつばかりだ。そりゃあ束さんの無茶振りや織斑先生の制裁もあるが、ここは心地がいい。
それだけなら断然、ここに残ることを選ぶだろう。……でも、もし昔の居場所でも俺を必要としてくれる人がいるのだとしたら……。おれは、どうしたらいいんだ。
「……申し訳ございません。話がいきなりすぎました。しかし、心に留めておいて欲しかったのです」
「……」
「明弘様の選択に口を出すつもりはありません。私は、いつまでも明弘様のお側にいるだけです。ですが、いまのことで私を嫌いになったなら――」
「いや、お前を嫌いになることはない」
遥香の言葉を遮って俺は言う。
「お前のおかげで目が覚めた。目先のことだけではなく、その先のことも考えないといけなかったんだな。それを教えてくれたお前を嫌いになんかなるはずがない」
「……明弘様」
「でも、記憶が戻ったとき、俺はきっと迷う。きっとすぐには決断できない。それでも、お前は俺のそばにいてくれるか？」

「もちろんです。私の居場所は明弘様です。いつまでもお側にいます」
「……ありがとう」
遥香を抱きしめる。こんな俺についてきてくれた。そして、これからもついてきてくれると言ってくれた遥香を抱きしめないわけにはいかなかった。
数分ほど、そうしていただろうか。俺は遥香から離れ、いつもどおりの口調で話す。
もう大丈夫だ。俺は俺でいられる。こいつのおかげで俺は俺のままでいられる。
「じゃあ、一夏の誕生日パーティーの準備をするか。せっかくプレゼントも用意したしな」
「はい」
ベッドから降りて、遥香と一緒に俺は部屋をあとにした。

第百七十四話　思い出（前書き）

第百七十四話です

第百七十四話　思い出

「明弘っ！」
保健室を出て、少し廊下を歩いていると一夏と出くわした。その隣には右腕に包帯を巻いたセシリアがいる。
「体のほうは大丈夫なのか！？　セシリアの話じゃ血だらけだって……」
「問題ない。それよりもセシリアの方が気になった。刃物で二の腕を貫通されたって聞いたからな」
「私の方も大事には至りませんでしたわ。一週間は安静にしなければいけませんが。……それよりも明弘さん、一つお尋ねしたいことがあるのですが」
真剣な顔でそんなことを言うセシリア。……たぶん、ネルマが俺をの体を動かしてたときのことだよな。
「市街地でのあなたの様子が少しおかしかったのですが、どうしたんですの？」
やっぱり。でも、「俺の中にいるネルマってやつが動かしてた」なんて言っても絶対信じてもらえないよな。それどころか痛いやつに思われる可能性だって高い。なんか適当に言い訳をしておくか。
「サイレント・ゼフィルスに対抗するために、少し違う戦法をとってみたんだが、やっぱりいきなりいつもと違うことをやるのは難しいな」
「そう、なんですの……」
セシリアが渋々といった感じで納得する。少し無理があったか。でも俺がすぐに考えついたのはこれだけだし、言ってしまったものはしょうがない。
「で、二人はどうしたんだ？　他のやつらは？」
「他の皆ならたぶん、準備してると思うぜ。俺たちは市街地での戦闘について取調べを受けてて、今さっき終わったんだよ」

「市街地戦闘の取調べ？　まさか、俺も該当……してないはずないか」
「お前は気を失ってたから、後日だってさ。かなり長いから覚悟しておけよ」
　くそ、俺が望んだことじゃないのに。そんな愚痴を言えるはずもなく、取調べを受けなければいけない。代わりにネルマにさせようか？　……いや、それは無理か。長くて二十分しか動かせないって言ってたし。
「俺たちは準備が終わったら他の皆と一緒に行くつもりだけど、お前たちはどうする？」
「俺たちも一緒に行くよ。といっても俺たちもまだ準備してないけど。何分後ぐらいだ？」
「だいたい二、三十分ぐらいかな。準備終わったら部屋に呼びにいくから」
「わかった。じゃ、あとでな」
「おう」
　二、三十分か。まあそれだけあれば十分だな。ゆっくり準備するとするか。

「っと、これで準備完了。……まだ十五分も経ってないのか」
　一夏が来るまで、あとだいたい十分前後ってとこか。ゆっくり準備したつもりだったが、早く終わったな。
　と、そこで部屋のドアがノックされる。一夏か？　言ってた時間よりも少し早いが。
「結構早かったな……って、簪？」
「……明弘」
　一夏だと思ってドアを開けたら、予想外の人物だったので驚いてしまう。

「どうしたんだ、簪？」
「……体。……怪我したって、聞いたから」
「ん、ああそのことか。大丈夫だよ」
「……そう、それならよかった」
安心したような表情になる簪。心配かけてしまったようだな。
「心配かけてすまないな」
「ううん。……無事でよかった」
嬉しいことを言ってくれる。遥香にも同じことを言われたが、やはり人に自分の無事を喜ばれると、自分はここにいていいんだと思える。
だが、それと同時に考えてしまう。記憶を戻ったとき、俺はここにいることを選ぶのだろうかと。
簪とは……他の皆よりも一緒にいる時間は短かったかもしれないが、俺にとっては大切な人の一人だ。
最初に六月の学年別ペアトーナメントの相方を頼んで、専用機が完成していないから無理とばっさり断られたとき。それから会うたびにできるだけ話すようにして、六月の末には専用機――打鉄弐式の製作を手伝えるほどには親しくなったこと。臨海学校のために一緒に買い物に行ったこと。バイト先で遭遇したこと。一緒に学園祭を回ったこと。
いろんなことがあった。そして、それは全て俺にとって大事な思い出。そんな思い出を作ってくれた簪を見捨てるようなことを俺はしてしまうのか。
……いや、今は考えないでおこう。記憶が戻ったときに考えればいい。今は、この生活を思いっきり楽しむことにしよう。
「……じゃあ、私はこれで……」
「ああ、またな」
「……うん、また」
簪が部屋に戻っていく。……あ、一夏の誕生日パーティーに誘えばよかったか？　いやでもあいつ一夏と面識なかったはずだな。知

らないやつの誕生日パーティーに誘われても迷惑か。
と、そんなことを考えていたら一夏たちが廊下を歩いてくる。他の皆は揃ってるみたいだな。
よし、じゃあはじめての誕生日パーティーを楽しみに行くとするか。

第百七十五話　誕生日パーティー（前書き）

第百七十五話です

第百七十五話　誕生日パーティー

現在午後五時。場所は織斑家。メンバーは一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、五反田蘭、弾、一夏の友達らしい御手洗数馬。さらに生徒会メンバーの会長、布仏先輩、のほほんさん。と、なぜか新聞部エースの黛先輩。最後に俺と遥香の計十五人だ。一軒家のリビングに入るにははっきり言って窮屈極まりない。

というわけで、俺と遥香はリビングから出たところの廊下でのんびりしていた。

「賑やかなところもいいけど、やっぱり静かなところもいいな。落ち着くし」

「そうですね。少々あそこは騒がしすぎます」

「ま、俺たちはここで楽しむか。さっき食べ物や飲み物取ってきたから適当に食って――」

「ったく、いないと思ったらやっぱりこんなところにいたのか」

そんなことを言いながら、リビングに続くドアから位一夏が出てくる。

「おう一夏。ちょうどいいからプレゼントやる。ありがたく受け取りやがれ」

「ありがたく受け取ってやるよ。……財布か」

「ああ、機能的みたいだからそれにした。ほら遥香も出せ」

「はい。織斑一夏、どうぞ」

いつもどおりに軽く渡した俺に対して、遥香はちゃんと渡す。まあ遥香にとってはこれがいつもどおりだろうけど。

「おう、ありがとな。……ストラップか。携帯にでもつけるかな。どっちも結構高そうだけど、いいのか？」

「いや安かったから別にいいぞ。偶然知り合ったやつに教えてもらった店が安くていいのばかりでな。結構悩んだけど」

「へぇ、そんな店あったのか。行ってみたいけど、俺こういうのあ

んまり買わないしな」
「まあ気が向いたら言ってくれよ。そろそろパーティーに戻ったらどうだ？　主役がこんなところにいてはダメだろ」
「じゃあ、お前たちも来いよ」
「もう少し静かになったら考えてやるよ」
軽口を叩き合ったあと、一夏がリビングに戻っていく。再び静かになった廊下で俺と遥香は俺が持ってきた食べ物や飲み物をゆっくりと食べ進めていく。
リビングの方からは相変わらず騒がしい声が聞こえてくる。と、そんなことを考えていたらリビングのドアが開き、のほほんさんが顔を出した。
「あ～、すーくんとハルちゃん、ここにいた～」
「どうしたんだのほほんさん。俺たちに何か用か？」
「リビングにいないからぁ、どこに行ったのかと思ったの～。それに聞きたいこともあったし～」
「聞きたいこと？」
「すーくん、怪我したって聞いたけど、大丈夫～？」
ああ、そのことか。聞きたいことなんていったから何かと思ったら。
「問題ないよ。心配してくれてありがとな」
「えへへ～」
のほほんさんの頭を撫でる。なぜか頭を撫でられると嬉しそうにするんだよな。よくわからんが、まあ喜んでもらえるならいいか。
「簪も心配してくれたし、たまに怪我するのも悪くないかもな」
まあほとんど冗談だが。誰も好き好んで怪我をするやつはいないだろう。
ってのほほんさん？　なんで少し悲しそうな顔するんだよ。遥香も。
「そんなこと言っちゃダメだよ～。私たちにとってはいやなことなんだから」

「そうです。自分を大切にしてください」
二人からの集中砲火。まあ、不用意な発言をした俺が悪いけど。
「すまん。冗談だ。俺だって自分から怪我しにいこうなんて考えないよ」
「それならいいけどぉ。……かんちゃんに先越されちゃったのか～」
「ん？　何がだ？」
先越されたって何がだろうか？　俺のことを心配してくれた順番なら別に後も先も関係ないと思うけど。
「明弘様、それは女子の問題です」
「んーじゃあ、口出ししないでおくか」
そんなこんなで適当に話していると、リビングから一夏が出てきた。
「ん、どうした一夏？」
「飲み物の買出しに行ってくる」
「主役がそんな雑用やるなよな。俺缶コーヒーな」
「やるなっていうなら頼むなよ。ま、とっとと行ってくるわ」
「がんばれー」
一夏が家を出て行く。まったく今日の主役に買出しをさせるなんてな。一夏のことだからたぶん自分でやるって言い出したんだろうけど、それでも誰か手伝ってやるとかしろよ。
自分のことを棚にあげつつ、そんなことを考える。別に俺が手伝う、もしくは代わりにやってもよかったがせっかくの女子が一夏と二人っきりになれるチャンスを潰すわけにもいかない。さて、誰か行こうとするやつはいないのか。
「む、明弘か。どうしたこんなところで」
そう思った矢先、リビングから出てきたのはラウラ。んー、こういう気配りができるのは気配り上手なシャルロットか、あとは意外と気配りのできる鈴音あたりだと思ったが。ラウラのことからたぶん手伝うことは考えていないだろうが、まあいい。
「少し静かなところにいたくてな。お前の方は一夏か」

「う、うむ。嫁と二人きりになれるチャンスだからな」
「がんばれよ～」
「うむ」
ラウラが勢いよく玄関を出て行った。他に追いかけるやつは……いないか。箒、セシリア、鈴音あたりは二人きりになるのを阻止しようとするかと思ったが……つまらんな。

第百七十六話　目的不明の襲撃（前書き）

第百七十六話です

第百七十六話　目的不明の襲撃

「……遅いな。確か自販機ならすぐ近くにあったはずだが」
一夏が買出しに出てだいたい三十分ぐらい経ったが、一夏とラウラはまだ戻ってきていない。のほほんさんは数分前にパーティーに戻っていった。
ラウラが追いかけていったから少し遅くなっても別に二人で話してるんだろう、程度で済むが今回のはあまりに遅すぎる。
「……何かあったのか。いやでもラウラがいるしな……」
よっぽどのことでもない限り、ラウラがいればすぐに収拾されるはず。となると、何も起きておらず、ただ二人でぶらぶらしているだけなのか。――それとも、ラウラでも収拾できない何かが起きたのか。
と、そこで玄関のドアが開き、一夏とラウラが揃って帰ってきた。
……大きな問題はなかったようだが、一応聞いておくか。
「おかえり。遅かったな、何かあったのか？」
「あ、ああ。実はな、サイレント・ゼフィルスの操縦者に襲われた」
「へぇ……それで？」
「ちょ、心配くらいしてくれねえのかよ」
「お前が無傷でここにいるってころは、そこまで大事ではなかったんだろ？　なら心配するだけ無駄だ」
そんなことを言いながら、その襲撃について考える。
一夏の家は、まあ一夏がニュースになった時点で世界中のやつが知っている。ニュースを見ていなくても、調べようと思えばすぐに調べられるはずだ。一夏が外に出てきたのが偶然とはいえ、待ち伏せしていれば襲撃することはたやすい。もともと、パーティーが終わったら俺たちは学園の寮に戻る予定だったし。
だからそれに関しては、別に考える必要はない。それよりも、あのサイレント・ゼフィルスを相手になぜ二人は無傷なのかというこ

とだ。
「よくあれを相手に無地だったな」
「なんだか、逃げるときにしかＩＳを使わなかったんだよ。不意を突かれて銃で撃たれたけど、ラウラのＡＩＣで助けてもらった。そのあとはすぐに逃げられちまった」
「……ＩＳを使わなかった？　妙だな」
サイレント・ゼフィルスを使えば二人を相手にすることだって、可能だったはずだ。しかしそれをせずに、すぐ逃走。まるで意味がわからない。銃を使った以上、一応一夏を殺しに来たんだろうが、だったらなぜすぐに逃走を……。
「……考えても埒が明かないな。情報が少なすぎる。この件は明日皆に話して考えよう。今日のところはこの件について他言無用だ。せっかくのパーティーに水を差すわけにはいかないだろ」
「俺もそのつもりだよ。このことは明日まで誰にも言わない。じゃあ、俺たちはリビングに戻るけど、二人は？」
「そうだな。最初よりは少し静かになってきたようだし、俺たちも行くかな。遥香、いいか？」
「はい」
「よし、じゃあちゃんと全員揃ってのパーティーだな」
「あんまり騒がしいようだったら、すぐに廊下に退避するからな」
「わかってるよ。じゃあ、行こうぜ」
一夏がリビングへのドアを開ける。すると中から「おかえりー」、「遅いぞ」などといった声が飛んでくる。
「遅くなって悪かったなー。頼まれてた飲み物買ってきた」
そういって一人ずつ飲み物を渡していく一夏。たぶん、買ったあとに襲われたのだろう。すぐ近くの自販機で買ってきたホットコーヒーのはずが、冷め切ってしまっている。まあ、味は変わらんから気にしないが。
飲み物でそれぞれのどを潤し、第二ラウンド開始といわんばかりに再び騒がしくなるリビング。……廊下にいればよかったかな。

ともあれ、一夏の誕生日パーティーは辺りが真っ暗になるまで続いた。

第百七十七話　大切な人からの贈り物（前書き）

第百七十七話です

第百七十七話　大切な人からの贈り物

「少しずつ治ってきたみたいだね。でもまだ安静にしていないと駄目だよ」
「ああ、わかってるって」
部屋の主の言葉に右肩を診てもらっていたグレルは応える。
場所は以前、グレルが右肩の処置をしてもらった部屋。グレルは右肩の治り具合を部屋の主に診てもらいに来ていた。その隣には付き添いでフェルの姿も見える。
「あー、でも思いっきり体が動かせないのはキツいな。あとどれくらいで治りそうだ？」
「それは貴女次第だね。はい、いいよ」
包帯を巻きなおして、部屋の主が救急箱をしまう。
そこで、不意に部屋のドアが開かれる。そこから現れたのは、濁った灰色のローブで全身を覆った男。室内だというのに全身を隠し、無言で部屋の中で入ってくる。
「やあ、ルーザー。研究所から直接来たのかな？」
「……ああ。研究も少し飽きたからな。息抜きだ」
部屋の主の言葉に低い声で返し、ルーザーと呼ばれた男は部屋のソファーにドカッと腰をおろす。それに三人は特に何も言わず、いつものことだと流す。
「確か、この前研究所に入ったのが一週間前だよね。あれからずっと？」
「他にやることも無いんでな。あと三日はいけたが、興が冷めた」
「ふふ、さすがだね」
「だが研究所から出てきたら出てきたで、幹部の連中は研究の成果はどうだっただの、報告書を提出しろだの。耳障りこの上ない」
そんなルーザーの言葉に部屋の主は少し苦笑をこぼしながら、酒瓶を三本ほどルーザーの前におく。ルーザーは何も言わずに栓を開

け、そのまま直に酒を飲みはじめた。
　まるで運動した後のスポーツ選手のように、ごくごくと酒を呷っていくルーザーを見て、フェルは少し呆れながら忠告する。
「いつものことだけど、一気飲みは体に悪いわよ？」
「フェル、それは誰に誰に言っている？　この程度で酔うわけないだろう。そんなことより……お前、ブレスレットなぞいつから着けているんだ？　お前はそういう類のものは着けないやつだと思っていたが」
「え？　ああ、これのこと？」
　ルーザーの言葉に部屋の主が自分の両腕を見る。その手首には同じデザインのブレスレットが対になるかのように着けられていた。
　透明なガラスの真ん中にそれぞれ漆黒と純白の石がはめ込まれているそのブレスレットを大切そうに見つめた後に、微笑みながら答える。
「大切な人からの贈り物だよ。ガラスも強化ガラスみたいだし、そう簡単には壊れないはずだよ。自分にとってのお守りみたいな物だね」
「いいよなぁ。俺たちは絶対そんなのもらえないってのに、お前だけずるいぞ」
「事が終われば貴女も買ってもらえると思うよ。フェルもね」
「そうだといいわね。それならできるだけ早く終わらせたいのだけれど、グレルがこれじゃあ……」
　フェルがグレルの右肩に視線を向ける。ルーザーも一瞬、グレルの右肩を見るがすぐに興味をなくしたように視線を戻して酒を呷る。そんな様子を眺めながら部屋の主は視線を微かに上に向け、口を開いた。
「あのときいた七人のメンバーのうち三人が不在で、今は四人。その中でも、まとも戦闘ができるのはグレルとフェルの二人。グレルが怪我で戦えないとなると、やはりここで動くのは得策ではないね」
「あなたたちが手伝ってくれるというのなら、話は別なのだけれど」

フェルの愚痴とも取れるそんな言葉に部屋の主とルーザーはそれぞれ口を開く。
「自分は戦闘向けではないからね。サポートならできるけど、直接戦闘をやるのは少し遠慮したいな」
「俺も同じだ。誰が好き好んでＩＳ操縦者のガキ共なんぞと戦わなければならんのだ」
「はぁぁ……わかったわよ。じゃあグレルの怪我が完治するまでは待機ということにしましょう。グレルの怪我が治り次第、次の行動に移るわ」
「ふん。では、それまでは好きにさせてもらうぞ」
フェルの決定にルーザーは一度鼻を鳴らすと、そのまま部屋を出て行った。先ほどまでルーザーが飲んでいた酒瓶の中身は見事に無くなっており、空になった酒瓶だけがそこに放置されている。
「あいつ、また研究か？」
「それともどこかにふらっと行ってしまうか。もしそうだったら、連絡の取りようがないじゃない……」
「いや、彼はトレーニングルームに行くはずだよ。レイベのことを話したら、『そんなあいつと一度手合わせしてみるのも一興かも知れん』って言ってたから」
部屋の主が、ルーザーの残していった酒瓶を片付けながら言う。
「そう。じゃあ私も行こうかしら。彼とだったら、いい訓練になるだろうし」
「それなら自分も参加させてもらうよ」
「えー、マジで？　俺だけ除け者じゃねーかよ」
「そんなに拗ねないで。見学だけでも暇つぶしにはなると思うよ」
「……はー、しょうがねえ。他にやることもないし、見学に行くぜ」
そんな会話をしながら、三人も部屋を後にしていった。

第百七十八話　実力行使（前書き）

第百七十八話です

第百七十八話　実力行使

一夏の誕生日パーティーの翌日、月曜日の夜。
「ふぅぅ、疲れたぁ」
「あいつら、元気あるよな」
「……そうですね」
一夏の部屋で一夏と俺、遥香がベッドに横たわりながらそんな言葉を漏らす。
夕食のとき、皆に一夏が襲われたことを話した後、なぜだか一夏の部屋でトランプ大会が行われた。夕食が終わってから今さっきまでやってたから……だいたい二時間くらいか。
まったく、今日は実習もあって疲れているはずなのに、よくあそこまで騒げるよな。しかも昨日いろいろあったばかりなのに。
「……とりあえず、サイレント・ゼフィルスについては保留。まあ、情報が少なすぎるし予想はしてたけどな。一応、あいつらもより一層警戒してくれるだろ」
「ああ」
一夏から返事が返ってくるが、なんだか少し上の空だ。さっきまでは普通だったのに、サイレント・ゼフィルスの話が出た途端、様子が変わったみたいだが……。
「……一夏。お前、何か隠してないか？」
「……何がだよ」
変な間を置いて一夏が答える。その間が俺の予想が当たっていたことを物語っているが、本人はわかってないな。
まあ、隠し事が悪いとは思わないから別にかまわないが、それでももしものとき、それが命取りになる場合だってある。相談しろなんていうつもりはない。心の中でけじめをつけてもらえればそれでいい。
「ないならいい。少し上の空だったみたいだからな」

「……トランプ大会で疲れただけだよ」
「そうか」
会話が終わって数分後、おもむろに一夏が立ち上がる。
「俺はシャワー浴びるけど、お前たちはどうする？　俺のあとに入るか？」
「いや、俺たちもそろそろ帰る」
「わかっ――」
「じゃじゃーん。楯無おねーさん参上～」
「お帰りください」
いきなり部屋のドアが開かれ、やたらテンションの高い会長が入ってきた。まあ、あの人はいつもあんなだが。それと同時に一夏が急いでドアを閉める。
「ナイスだ、一夏」
と、俺が一夏を称えようとしたところでドアが切り裂かれる。その向こうに見える会長の手には蛇腹剣《ラスティー・ネイル》。……実力行使か。
「おねえさんをないがしろにしちゃ駄目だぞ★」
「……なんなんですか、もう」
一夏が呟く。俺も同感だ。こんなに疲れている状態で、この人の相手をやるのはしんどい。こんなテンションの高い人じゃなくて、のほほんさんや簪の方が――
「一夏くんに頼みがあってね。その……」
「俺にですか？」
のほほんさんの雰囲気に癒されるのもいいし、簪とゆっくり静かに過ごすのもいい。会長が相手だと、面白いこともあるが疲れるし、ゆっくり静かにできない。
「妹をお願いします！」
「はいっ！？」
会長がいきなり手を合わせて一夏を拝む。
妹。会長の妹といえば簪だ。……まさか簪に何かあったのか？

第百七十九話　会長の頼み（前書き）

第百七十九話です

第百七十九話　会長の頼み

「妹さん、ですか」
「そう。名前は更識簪。これが写真ね」
会長が携帯を取り出して、写真を見せる。そこに写っていたのは紛れもなく簪。いつ撮ったのだろうか。
「あのね、……私が言ったって絶対言わないで欲しいんだけど……。ちょっとネガティブというか……暗いのよ」
言いにくそうにしながらもばっさりと言った。
でも、そんなに暗いか？　暗いというよりは、物静かだと思うが会長からすれば暗い方なのだろう。
「でも実力はあるのよ。だから日本の代表候補生で、しかも専用機持ちなんだけど……専用機がないのよねぇ」
「は？　……それは専用機持ちとは言わないのでは……」
「ちょっと専用機がまだ完成していないだけなのよ。一夏くんのせいよ？」
「え！？」
いきなり名前が出されて一夏が驚く。
「更式簪の専用機の開発元は倉持技研、つまり白式の開発元と同じところです」
「遥香のいうとおり。白式の開発に人員を割きすぎて、まだ未完成ってわけだ」
「なるほど……。ってなんでお前たちが知ってるんだ？」
「簪とは面識があるからな。それで少し。だからこそ行事のときや臨海学校のときにも専用機持ちが呼ばれたときとかいなかったんだ」
「そういうことだったのか。それで、妹を頼むってどういうことですか？」
「昨日のキャノンボール・ファストでの襲撃事件を踏まえて、各専用機持ちのレベルアップを図るために今度全学年合同のタッグマッ

チを行うことになったの」
　全学年合同のタッグマッチ。初耳だが、昨日の件を踏まえてということはおそらく急遽決まったことなのだろう。
　確か専用機持ちは三年生に一人、二年生に二人、一年生は九人の計十二人だ。ちょうど偶数だし、タッグマッチというのはいい知れない。専用機持ち同士の連携の練習にもなるし。俺は……やっぱり遥香と組むかな。
　遥香の方に視線を向けると、ちょうど俺の方に視線を向けていた遥香の視線とぶつかる。それだけで伝わってくる。あっちも同じことと考えていたみたいだな。
「はぁ、そうなんですか」
「お願い！　そこで簪ちゃんと組んであげて！」
「ちょ、ちょっと楯無さん、そんなに頼み込まなくても……でも何で俺なんですか？　妹さんと知り合いの明弘の方がいいと思うんですけど」
「俺は遥香と組むから駄目だ。それにあいつの専用機が完成していないのは、お前のせいなんだから少しぐらい何かしろ」
「お願い！」
　会長が頭を下げる。一夏はそれにあわてながらも返事をした。
「わ、わかりましたから！　じゃあ……その、簪さん？　に、俺の方から誘えばいいんですか？」
「うん。極力私の名前は出さないでね」
「え？　どうしてです？」
「えっと、それは……。あの子……私に対して引け目があるって言うか……その……」
「もしかして、妹さんと仲良くない……とか？」
「う……」
　言葉に詰まる会長。やっぱり仲は良くないようだな。……そういえば――
「そういえば、簪が会長の話をしたところなんて見たことないな」

「うっ」
「そうですね。それどころか、更識楯無会長の名前を出したことすらなかったはずです」
「ううっ……」
「学園祭で呼び出されたとき、暗い顔してたな」
「うう～っ」
ん？　なんだろうか。会長が落ち込んでいるようだが、何かあったのか？
そういえば、束さんと箒も仲が悪いよな。姉妹というのは、総じて仲の悪いものなのだろうか？

第百八十話　タッグマッチに向けて（前書き）

第百八十話です

第百八十話　タッグマッチに向けて

「ふぅ、疲れたな」

放課後の訓練を終え、かいた汗をタオルでふき取る。そして流した汗の分、スポーツドリンクを一気に飲み干した。

今日の朝のＳＨＲで、昨日会長が言っていた全学年合同のタッグマッチの説明がされた。説明がされた途端、箒たち五人が一夏の方を見たのは気のせいではない。確実に狙ってやがるな。

まあ、そんなわけで今日からの訓練はタッグマッチに向けた、遥香との連携を中心にした。もともと遥香とは、模擬戦をすることはあってもタッグを組んでというのはあまりやっていなかった。

今回のタッグマッチに限らず、俺と遥香は一緒にいることが多い。非常時には一緒に戦うことも多いから今後のためにも。しっかり訓練しておかないと。

特にグレルとフェル。あの二人とはこれからも戦うことになると思う。あの二人のコンビネーションに対抗するには、こっちも連携を強化しておくに越したことはない。

「自分たちの方は訓練するとして、あとは対戦を相手だな」

一夏が簪と組むとなれば、勘だがセシリアと鈴音、シャルロットとラウラが組むだろう。わからないのは箒と会長、面識のない三年と二年の専用機持ちだ。

箒も会長以外の二人とは面識はないはずだし、組むとしたら会長だろうが、二年生コンビということで会長と二年生の専用機持ちが組む可能性もある。しかも、もし一夏が簪と組むことが出来なかったら組み合わせは大きく狂うだろうし……。対戦相手のタッグがわかればいろいろと対策の練りようがあるのにな。

「……明弘」

更衣室でＩＳスーツから制服に着替えて出ると、ちょうど簪と会った。いや、出口のすぐ傍にいたから俺が来るのを待ってたのか？

そうだとしたら悪いことしたかな。
「どうしたんだ？」
「……今度のタッグマッチ、私と……組んで」
くそ、一夏のやつ、駄目だったのか。まあ簪は一夏に対していい感情を持ってないから想定内といえば想定内だ。こうなったときのために、俺は遥香と早めに組んでおいたんだ。
「すまない。俺は遥香と組むことになってるから。組む相手がいないのか？」
「う、うん……」
「でも、一夏がお前のこと誘ったんじゃないのか？」
「そう、だけど……。何で知ってるの？」
あ、しくじった。なんとか誤魔化しておくか。
「一夏に聞いたんだよ。お前のこと誘ったけど断られたって」
「……そう。でも私……」
やっぱり一夏と組むのは抵抗があるのか。しょうがない。不自然にならない程度にサポートしてやるか。
「まあ、一夏はそこまで悪いやつじゃないぞ？　確かに白式の開発で打鉄弐式は完成しなかったけど、それだって一夏に非があるわけじゃないだろ」
「……そうだけど……」
「まあ決めるのは簪だから俺がとやかく言う権利はないかもしれないが、そこまで一夏のことを敵視する必要はないと思う。大丈夫だ。何かあったら力になるから」
「……うん」
「じゃあ、俺は行くぞ。タッグマッチでお前と、完成した打鉄弐式と戦えるのを楽しみにしてる」
その場から立ち去る。一応、一夏の印象も少しはマシになっただろう。
これからは、しばらく簪とあまり接触しないほうがいいかもしれない。一夏が簪と組めるように少しでも二人の時間を作ってやろう。

余計なお世話かもしれないが。
打鉄弐式の開発の手伝いも、これっきりにしよう。これからは一夏に任せる。そのほうが自然だ。
このタッグマッチをきっかけに、少しでも簪と一夏が仲良くなればいいなと、俺はそう思う。
……なんか、仲良くなりすぎるのではないかという予感もしなくもないが。

第百八十一話　スペックの差（前書き）

第百八十一話です

第百八十一話　スペックの差

タッグマッチに向けての訓練を始めて一週間の放課後、第一整備室。俺と遥香は先週の連携訓練での結果を踏まえて、機体の出力調整をするために来ていた。

簪が打鉄弐式の開発に使っていた整備室は第二。簪と出くわさないようにあえて別の第一整備室にやってきた。

「神王も神楽もバランスのとれた機体だから連携はとりやすいはずなんだがな……」

だが、実際にやってみるとうまくいかない。遥香と相性が悪いわけではないだろうし、やっぱり機体の出力が問題か。

「神王の出力に神楽が追いついていないのだと思います。データを見比べて見ますか？」

「ああ、頼む」

遥香の提案で機体の出力を見比べてみる。そういえば、神楽の――というか他の機体のデータと比較したことなかったな。神王が完成したのは遥香がアメリカに行った後だから当たり前だけど。とはいってもどっちも束さんが製作したんだし、そこまで差は――

「……結構差があるな」

「そうですね」

神楽のデータと見比べてみると、意外なことに結構出力などに差があることがわかった。しかもそのほとんどが神王の出力が高い。

……なぜだ。

「以前、他の専用機のデータを取りましたが、ご覧になりますか？」

「ああ」

いつのまにそんなことをしていたのかはわからないが、ちょうどいいので確認してみる。

次々と現れるディスプレイ。そこに映るデータ。白式、紅椿、ブルー・ティアーズ、甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？、

シュヴァルツェア・レーゲン、開発途中の打鉄弐式、それに銀の福音、ファング・クエイクのデータまである。あいにく会長の専用機や面識のない専用機持ちの気体のデータはないが、しょうがないだろう。

そのデータたちと比較してみても、神王の出力はトップレベルだった。もちろん軍用ＩＳの福音やファング・クエイク、特化型の白式、第四世代型の紅椿に劣るところもあるが、それでも他の第三世代型やリヴァイヴは上回っている。

「これは……神王ってこんなにハイスペックだったのか？」

仮に臨海学校のときの形態移行を第二形態移行だとしても、ここまでスペックが高くなるものなのだろうか。

……いや、それだったら白式も俺と同じくらいの総スペックになるはず。だとしたらなぜ……。

「原因は製作者の束さんか、それとも神王自体か」

前者の可能性はあまり高くはない。もしそうだったら同じく束さんが作った白式や神楽も神王と同じようになるはずだ。しかしそうでないとすると、やはり可能性があるのは神王そのものということになる。

だが、何だ？　神王をここまでハイスペックにする原因とは。

「……まさか、擬似コアか？」

神王のコアは普通のＩＳのコアとは少し違う――俺は便宜上、擬似コアと呼んでいるけど。それが神王を『ＩＳのようなもの』と俺が呼ぶ理由なのだが、もしかしてその擬似コアが原因なのだろうか。

……いや、考えないでおこう。もしそうだったら、俺にできることなんて何もない。せいぜいコアの精密検査をしてみるぐらいだろうが、他のＩＳのコアと違う以上、どこが原因なのかわかるわけがない。

「まあ、スペックは高いに越したことはないし。今までも特に問題はなかったから大丈夫だろ」

束さんが害を与えるようなものをよこすはずないだろうし。この

件についてはそこまで深く考える必要はないだろう。
俺が模擬戦で勝てるのは、もしかしたらこのスペックの高さがあるからなのかもしれない。もし、俺が普通のＩＳを使えていたら、勝率はかなり低かったかもな。
そんなあるはずのない仮定のことを考えながら、俺は遥香とタッグマッチに向けての出力調整を始めていった。

第百八十二話　対策（前書き）

第百八十二話です

第百八十二話　対策

出力調整を終え、訓練はなしにして部屋に帰ってきた俺の耳に入ってきたのは一つの朗報だった。
「本当に簪と組むことに成功したんだな？　一夏」
『ああ、なんだかわからないけど放課後にＯＫしてくれたよ』
部屋に戻って早々、一夏から電話で簪と組むことができたという報告を受けた。一週間かかったが、それでも十分だ。
「で、そのあとは第二整備室で打鉄弐式の開発でもやったのか？」
『よくわかったな』
「打鉄弐式の開発にはもっぱらそこを使っていたからな」
やっぱり第一整備室を使ってよかった。第二を使っていたら簪たちと鉢合わせになるところだったな。
『それにしても打鉄弐式が予想以上に完成してて驚いたぜ。機体自体はほとんど完成してたみたいだし』
「俺が数ヶ月間手伝ってたからな。まあ、まだ武装が完成してなかったはずだし、実稼動もほとんどしていないから完成とは言わないが」
『そこはタッグマッチまでに完成させるさ。当日楽しみにしてろよ』
「わかってるさ。こっちもタッグマッチに備えて色々――」
と、そこで部屋のドアがノックされる。誰か来たようだ。遥香は……今シャワー浴びてるし、俺が出るしかない。
「誰か来たみたいだからこれで切るぞ」
『わかった。じゃあな』
「じゃ」
電話を切って、携帯をポケットに入れる。と、またノックされた。
何だよ一体。
「誰だ？」
「あたしよ。ちょっと頼みがあるんだけど」

「鈴音か。頼みって何だ？」
「タッグマッチに向けて甲龍のスペックを調整したいんだけど、神王のスラスターと《イカロスの翼》のスペックデータを借りたいのよ。放課後に借りようと思ってアリーナ探し回ったのに、アンタどこにもいないんだもん」
神王のスラスターと《イカロスの翼》のデータ？　機動力を上げるためだろうか。確かに神王のスラスターは細かい制御を多方向推進翼に任せてるから出力は高くできているが、それでも白式の方がよっぽど上だ。さっき比較したとき確認したし。
「別に構わないが、白式のデータの方がいいんじゃないか？　あっちの方が出力高いだろうし」
「いやよ」
「断言かよ。……まさか、一夏を倒すためか？」
「うっ、するどいわね」
「一夏と一緒にするな（鈍感）。ちょっと待ってろ」
一夏と組めなかったことを相当根に持ってるなこいつ。まあ、こいつからすれば見知らぬ女子――いや、臨海学校前に一度会ってるからよく知らない女子か――が一夏と組んだってことでいい気はしないだろう。それで一夏に頼むのは癪だと。
まあ、別に構わないのでコンソールを呼び出してスラスターと《イカロスの翼》のスペックデータを探してコピー、鈴音に送る。
「送ったぞ。多方向推進翼のデータもいるか？」
「甲龍に推進翼はないからいいわ。ありがとね」
「どういたしまして。それより、一夏を倒すってのはお前だけじゃなくて他のやつらもか？」
「たぶんね。セシリアも整備科の先輩たちと機動力向上について話し合ってたし、ラウラも一夏のことすんごく敵視してるし、シャルロットなんかたまにものすごく怖い笑み浮かべてるもん」
「なるほどな。箒は？」
「箒はあの会長と組むことになったみたいよ。優勝狙いでしょうね。

最近は一夏にも勝ってるみたいだし、油断ならないわね」
　箒と会長が組むのか。予想はしていたが、面倒だな。
　会長の実力は一度軽く手合わせした程度だが、国家代表だ。おそらく俺と遥香の実力以上。そうなると、連携で何とか実力の差を埋めなければならない。連携の障害になりかねない箒は早めに何とかする必要があるな。
「お前は誰と組むんだ？」
「セシリアよ。シャルロットとラウラもペアらしいわね」
　よしこっちの予想は大正解だな。どっちのペアも油断できるような相手ではないが、さっきの話を聞いた限り対策は練れる。
「じゃ、あたしは部屋に戻るわね。データ、ありがたく使わせてもらうわ」
「おう」
　鈴音が返ったのを見届け、部屋に入る。するとちょうどシャワーを終えた遥香と会う。
「誰か来たようでしたが、どなたでしたか？」
「鈴音だ。一夏対策に俺のスラスターと《イカロスの翼》のスペックデータを借りにきたんだと。それで、いい情報を手に入れた」
「いい情報、ですか？」
「ああ。簪と一夏以外の一年の専用機持ちは全員、一夏を潰すために機動力を向上させようとしているらしい。お前ならこれだけでわかるだろ」
「はい。機動力を向上させたということは、その機動力を殺すことができれば有利に立てる。ということですね」
「そのとおりだ」
　すまないな鈴音。利用したようで悪いが、そっちもスラスターと《イカロスの翼》のデータを俺から借りてるし、別に問題はないだろう。お前から得た情報、ありがたくかつようさせてもらう。

第百八十三話　二対二（前書き）

第百八十三話です

第百八十三話　二対二

タッグマッチを数日後に控えた放課後。第三アリーナで俺と遥香はセシリアと鈴音の二人と対峙していた。

理由はいたって簡単、タッグマッチに備えてのペアでの模擬戦だ。セシリアと鈴音は準高機動に仕上げた機体の最終チェック。俺たちもタッグマッチ用に仕上げた機体の確認を兼ねている。

「じゃ、早速はじめるとするか」

「こちらはいつでもいいですわよ」

「わかった。じゃあ……はじめ！」

俺の合図と同時に一気に全員が動き出す。あっちの基本方針は……鈴音を前衛にセシリアを後衛に配置か。予想通りだ。

「行くぞ、遥香」

「はい」

様子見であろう相手の威嚇射撃をかわしながら、一気に距離を詰める。鈴音にとっては得意な距離になるが、セシリアにとってはやや難しい距離になる。

「そう簡単にやらせないわよ！」

そんな鈴音の言葉に反応するかのように、甲龍の《龍砲》が発射され俺たちの行く手を遮る。その間にセシリアは距離をとる。……セシリアにとっても戦いやすい距離になったか。

やっぱりそう簡単にはやらせてはもらえないか。近距離格闘型の鈴音と遠距離射撃型のセシリア。もともと機体の性質上はいい組み合わせだが、それ以上に厄介そうだな。

「明弘様」

「ああ、わかってる」

《エクスカリバー》を展開して、鈴音に肉薄する。鈴音も《双天牙月》で対応してくるが、そこで俺は《エクスカリバー》と《双天牙月》がぶつかり合っているところを支点に体を上に移動させる。そ

してその影から遥香が《神祇》による射撃。
いきなり俺が移動したことで体制がやや崩れた鈴音は慌てて回避しようとするが、ほんの一瞬だけ動きが鈍る。ハイパーセンサーで遥香と自分の延長線上にセシリアがいることに気づいたようだ。しかもセシリアからは鈴音が妨げになって遥香の攻撃が見えない。
もしここで回避すれば、無防備なセシリアに当たる。そんな一瞬の戸惑いを俺と遥香が見逃すはずがなく、遥香の射撃が被弾した直後、《エクスカリバー》の柄で殴り飛ばす。
「がら空きだぜ、セシリア」
「くっ、《ブルー・ティアーズ》！」
セシリアが迎撃のために《ブルー・ティアーズ》を射出する。だが、それも計算のうちだ。
《ブルー・ティアーズ》が俺に銃口を向けてレーザーを発射――する直前に、その目の前をそれぞれ《護神》が塞ぎ。俺への攻撃を遮断する。
さっきの射撃のときに、遥香はあらかじめ《護神》を展開していた。そして、それを遥香は何の指示もなく、俺への防御に回す。タッグマッチに向けて訓練していたのはお前たちだけじゃない。
「もらった！」
「くっ！」
懐に入ってしまえば圧倒的有利になる。そのまま俺は《エクスカリバー》をセシリアに向かって振り下ろし――そこで、体の動きが止まってしまった。
「また……か……」
嫌な感触が俺の手に蘇る。学園祭のときにグレルを斬った、あの感触が。
嫌な汗が流れ出る。自分の手が血に染まったかのような感覚に陥る。気持ち悪い。
誰かの肩を斬るだけで、ここまでなるのかと思ってしまうぐらいに、頭が痛くなる。

サイレント・ゼフィルスとの戦い以外でも、訓練のときとかで何度もこの感触が襲ってくることはあった。でも、そのときはまだ些細なもので何とか耐えられた。なのに……なんで今は……。

「？」

いつまでも衝撃が襲っていないことを不思議に思ったセシリアが目を開けて俺を見る。

「明弘さん？」

だが、俺は何も口にすることはできず、そのまま地面へと落下していった。

第百八十四話　トラウマ（前書き）

第百八十四話です

第百八十四話　トラウマ

「……はぁ、面倒なことになったわね」
そんなことを呟きながら、楯無が保健室から出てくる。その楯無の視線の先には、遥香とセシリア、鈴音、そして楯無と一緒にいた箒の姿があった。
「まったく、箒ちゃんと訓練しようと思って来てみたら、いきなりこれだもん」
「……更識楯無会長。……明弘様は……？」
不安そうな表情の遥香が楯無に駆け寄りながら尋ねる。
「身体的にはいたって健康よ。精神的にもほとんど問題ないわ。……ほとんど、ね」
意味ありげな楯無の言葉に、遥香の不安な表情がより深くなっていく。
「楯無さん、それは一体どういうことですか？」
「んー、簡単に言えばトラウマみたいなものかしらね。セシリアちゃんの話だと、明弘くんはセシリアちゃんに攻撃する直前に動かなくなったのよね？」
「はい。そうですが」
「そして、キャノンボール・ファストでのサイレント・ゼフィルスとの戦いのときも、同じように攻撃の直前に様子がおかしくなった。そうね？」
「はい」
楯無の質問にセシリアは怪訝そうにしながらも答えていく。他の面々もなぜ楯無がそんな質問をするのかわからずに、怪訝そうな顔になる。
「学園祭のときのことは遥香ちゃんから説明は受けているわ。それで、保健室の先生と出した結論がそれよ」
「えっと、どういうことですの？」

「詳しく説明すると、明弘くんは学園祭のときに襲撃してきた相手の右肩を斬ったらしいわ。そのときの記憶が頭にこびりついて、同じように相手に斬りかかるときにそのときの記憶がフラッシュバックしてしまうんでしょうね」

「記憶のフラッシュバック……。それであのとき動きが止まったのね。でも、それだけのことでそこまでのトラウマになる？」

「どんなことが深い傷になるかは、人それぞれだから一概にそれだけとは言えないわね。明弘くんがそこまでトラウマに感じるってことは過去に何かあった可能性もあるけど」

明弘の過去。その言葉を聞いて、四人の表情はかすかに暗くなる。楯無は知らないが、四人は明弘の過去を知っている。明弘の一人で生きてきた辛い過去なら、何かあっても不思議ではないだろうと納得してしまう。

「しかし、学園祭のあとも何度か模擬戦はしましたが、そのような様子はありませんでしたが」

箒が疑問を口にする。他の三人も納得したような表情から「そういえば」といった表情に変わる。

楯無はその質問を予想していたかのように答えていく。

「たぶん明弘くんのことだから、ある程度は無理矢理抑えてたんでしょうね。それで溜まった分がサイレント・ゼフィルスとの戦闘、そしてさっきの模擬戦で爆発したんだと思うわ。まあ、タッグマッチ本番前でわかったのは不幸中の幸いかしら」

確かに、全校生徒が見ている状態であんなことが起きたら大変だっただろう。そう考えれば今、このことがわかったのはまだよかったのかもしれない。

「今回のことは、ここにいる五人だけの秘密にしてちょうだい。特に、一夏くんと簪ちゃんには絶対に言わないで。これは明弘くんの頼みでもあるわ」

楯無の頼みに四人が頷く。明弘自身の頼みというであれば、誰にも言えない。試合前というこのときに、余計な心配を一夏たちにか

けるわけにもいかない。
そのあと、遥香以外の四人は、一言も言葉を交わさずにその場を去っていった。
「……」
一人取り残された遥香は少しの間、動かなかったが、決意を固めたように保健室のドアを開けた。

第百八十五話　感謝（前書き）

第百八十五話です

第百八十五話　感謝

「明弘様」
「……遥香か」
保健室のベッドで横になっていると、ドアが開き遥香が保健室に入ってくる。
その雰囲気からわかる。会長から事情を聞いたのだと。
「更識楯無会長から事情を聞きました」
「そうか。……他には？」
他に事情を説明されたやつは誰だ。そんな質問に遥香は間を置かずに答えた。
「篠ノ之箒とセシリア・オルコット、鳳鈴音の三名です。他の者には口外しないようにと更識楯無会長から厳命されました」
「……本当なら誰にも知られたくはなかったが、しかたないか」
「明弘様は、ご自分でお気づきだったのですか？」
「兆候らしいものはあった。ここまで重症だとは思わなかったけどな」
グレルの肩を斬ったことがここまで重度のトラウマになっていたとは俺自身、思いもしなかった。
相手を攻撃できなくなるトラウマ。遠距離射撃などの間接的な攻撃は大丈夫のようだが、それでもこのトラウマは俺にとって大きな枷になる。いつか治るかもしれないが、少なくとも今度のタッグマッチまでには間に合わないだろう。
「織斑一夏と更識簪には言わないのですか？」
「ああ、簪は今度のタッグマッチが初の公式戦だ。余計な心配はかけられない。そのパートナーである一夏にも教えるわけにはいかない」
どのみち、言ったところで心配をかけるだけで解決するわけでもない。このタッグマッチが終わったあとでも、決して教えることは

ないだろう。
「このことは誰にも言わないでくれよ」
「わかっています。ですが、他の生徒にもアリーナで明弘様が倒れたところを目撃されています。それについてはどういたしましょうか」
「アリーナで俺が気を失ったのを見た生徒たちには、会長の方から貧血で倒れたということにしてもらうことになった。何か聞かれたらそう話しをあわせてくれ」
「わかりました。今回のタッグマッチには、参加するのですよね？」
「もちろんだ。不参加で変に思われる可能性もあるからな。それに――」
簪との勝負から逃げるわけにはいかないからな。
「そうだと思っていました。では、タッグマッチに向けて連携の変更などをしましょうか。できるだけ明弘様が前に出なくて済むように」
「すまないな。迷惑かけて」
「問題ありません。私は明弘様についていくと決めていますので」
「……ありがとう」
キャノンボール・ファストのあとのときといい、最近は遥香に感謝してばっかりだな。今までもたくさんたくさん助けてもらったのに、また助けてもらって……俺って本当に駄目なやつだな。
「礼には及びません。私の方こそあなたには、何度も助けられていますので」
そう言って微かに笑みを浮かべる遥香の頭を思わず撫でる。そうすると、遥香も気持ち良さそうな表情になるのでもっと頭を撫で続ける。
ありがとう。直接言えばまた謙遜されるので心の中で、もう一度遥香に礼を言った。

第百八十六話　タッグマッチ当日（前書き）

第百八十六話です

第百八十六話　タッグマッチ当日

タッグマッチ当日。今さっき開会式が終わり、トーナメントの組み合わせが発表されたところだ。

一回戦第一試合は一夏・簪ＶＳ箒・会長。第二試合はセシリア・鈴音ＶＳシャルロット・ラウラ。俺と遥香はシードで第一試合の勝者と、三年と二年の専用機持ちのペアは第二試合の勝者と対戦することになる。

「……たぶん、会長が手回ししてくれたんだろうな」

「おそらくそうでしょうね」

会長が俺のトラウマを考慮して、できるだけ試合数を少なくしてくれたのだろう。しかも次の試合が一夏たちなら簪と戦うことができるし、会長たちなら速攻で勝負を決めるつもりなのだろう。どちらにしても、特に問題はない。

会長は一夏たちを倒して、俺たちもすぐに倒すつもりだろうけどな。一夏たちと俺たちをどっちも速攻で倒すことで、俺たちが負けた原因を『俺の様子がおかしかった』ことから『会長と俺たちでは実力の差がありすぎた』ことにする。そうすれば俺のトラウマがばれる可能性は格段に下がる。

「全て会長の予定通りに。確かにそれがおれにとってもベストな選択肢かもしれないな」

「はい。このタッグマッチが終われば、何かしらの対策を立てる時間は確保できます。……しかし、明弘様はそうなさるつもりはないのでしょう？」

「ああ、もちろんだ。俺にとって都合のいい選択肢だとしても、その結果は会長の手によるもの。それじゃあ俺が会長に甘えてるだけだ。だから――俺のことは俺自身の手でなんとかする。そのためには、会長を倒す」

もし会長たちを一夏たちが負かしたのならそれもいい。簪との決

着をつけられる。
「わかりました。では、手は抜かず、全力で戦闘にあたる。ということでよろしいでしょうか」
「ああ。もし一夏たちが勝ったら――」
「私が織斑一夏の相手をし、明弘様は更識簪と戦う。ということですね」
「理解が早くて助かる。まあ、可能性は低いけどな」
何せ相手はあの会長は国家代表だ。代表候補生とは比べ物にならない。それに箒の方も、最近では一夏に勝つようになってきたからな。一夏と箒の実力がほぼ互角とすると、やはり会長と簪の実力の差が問題になる。
完成形の打鉄弐式のスペックは俺にもわからないし、一夏との連携で実力の差はある程度カバーできるかもしれないが、それでもやはり操縦者の技量は無視できない。
肩書きだけなら国家代表と代表候補生。実力の差は歴然としている。しかし、代表候補生の中にも国家代表と渡り合えるやつはいるだろう。簪が実際に戦闘をしているところを見たことがないからなんとも言えないが、もし簪の実力が会長とほぼ互角なら勝機はあるかもしれない。
「万が一の可能性として頭に入れてはおくか」
そろそろ第一試合が始まる。次の対戦相手が決まる重要な試合だ。会長たちが勝つ可能性が高いとはいえ、その会長たちのタッグにつけいる隙がないか探すためにはこの試合、見逃すわけにはいかない。
「じゃあ、試合を観戦しに行くか。特に会長の動きはよく見ておかないと――」
とそこで、巨大な爆発音らしき音が聞こえ、それと同時に強い揺れが俺たちを襲った。地震ではないな。揺れは一瞬だったし、何よりさっきの音は何か重いものが天井を突き破ってきたかのような音だった。しかも、一つではない少なくとも三つ四つはあった。
『非常事態警報発令』

近くにあったディスプレイが一斉にそんな言葉を映し出す。やはりただごとではないな。

「……まさか、襲撃者か？」

さっきの音のうち、一つはすぐそばで聞こえた。もしさっきのが襲撃者の仕業だとしたら、すぐそばに襲撃者がいる可能性が高い。

「行くぞ、遥香」

「はい」

短く言葉を交わし、俺たちはすぐさま音のしたほうに向かっていった。

第百八十七話　発展機（前書き）

第百八十七話です

第百八十七話　発展機

音がした部屋についた俺たちが見たのは、全身装甲のＩＳだった。
五月のクラス対抗戦のときに襲撃してきた無人機と同じ――いや、その発展機だな。
以前のとは違い、女性的なシルエット。右腕の肘から先は巨大ブレードになっており、格闘性能が向上されているようだ。それに対して左腕は以前と同じく巨大で、四つの砲口が備え付けられている。
と、そこで襲撃者は侵入してきたときに開けたであろう天井の穴から外に出て行ってしまった。俺たちの存在に気づいていないわけがない。……誘っているのか。
「襲撃者を確認。追跡しますか？」
「もちろんだ。あの機体は高出力のビームを発射する機体のはずだ。注意しろよ」
「わかりましたが、なぜそれを？」
「五月にこれとよく似た無人機が襲撃してきた。たぶん、こいつはその発展機だ」
「そういうことですか。わかりました。注意します」
俺たちも天井の穴から外に出る。すると、少し離れたところに襲撃者が停止しており、俺たちが来たのを確認すると第五アリーナの方に飛んでいった。
「やっぱり俺たちを誘ってるみたいだな。行くぞ」
「はい」

第五アリーナに到着。しかし、襲撃者は攻撃するそぶりを見せず微動だにもしない。
「さて、面倒なことをしてくれましたね。……束さん」

襲撃者に向かって話しかける。相手は何も答えないが、それは想定内だ。おそらくこいつも無人機。答えないのは当たり前だろう。

「明弘様、それは一体どういうことでしょうか？」

『五月に襲撃してきた無人機。それには国際ＩＳ機関に登録されている４６７個のコア、そのどれでもないものが使用されていた。それがすなわち、登録されているコアとは別の新しく製作されたコアということだ。そして、コアを製作できるのは束さんだけ。ならこの襲撃は束さんの仕業と考えるのが普通だろう』

遥香の質問に対して、相手に聞こえないようにプライベート・チャネルで俺の推測を話す。無人機は相変わらず微動だにもしないが、別にかまわない。

『それに、そのあと家に帰ったとき、俺が「色々あって学校が臨時急行になったから帰ってきた」と言った。それに束さんは「それは大変だったね。怪我はしなかった？」と返した。だが、俺は戦闘があり、俺がそれに加わっていたとは一言も言っていない。それなのに束さんは怪我しなかったと聞いてきた。あたかも戦闘があったことを知っていたかのように、な。それでほとんど確信した』

まあ、それがなくても登録されていないコアというだけで、普通は気付くものかもしれない。でも、それに気づいているのは俺と織斑先生くらいだろう。

その理由は、おそらく先入観。束さんのことを知らないやつは、ＩＳの開発者である束さんがＩＳ学園にそんなことをするはずがない。という常識の中で考えてしまう。普通ならそれでもいいかもしれないが、束さんを常識で計るのは愚の骨頂だ。束さんならどんな小さな理由でこんなことをしてもおかしくない。

そして、束さんのことをよく知る人間の中で、一夏と箒はコアのことは知らないし、遥香はそのときアメリカにいてその襲撃事件を知らなかった。コアのことを知っていて、束さんのことをよく知っているのは俺と織斑先生だけだ。

「前回の襲撃の狙いはわかりませんでした。しかし今回は少し推測

できます。今回の狙いは……箒と紅椿の生長を確認するため、といったところでしょう？」

まったく反応を示さない襲撃者。もし束さんじゃないとしても、目的はおそらくＩＳ学園を潰すか、専用機持ちの実力の把握といったところだろう。さっきの爆音からして専用機持ちのペア一組に一機ずつ当てられているだろう。

「まあ、あのときも借りを返すにはちょうどいい。行くぞ、遥香」

「はい」

俺と遥香はそれぞれ自分の武器を展開し、すぐにでも戦闘を行えるようにする。襲撃者も、それに反応したように一気に突撃してきた。

さてと、このアリーナには誰もいないようだし、いっちょ派手に戦わせてもらうとするか。

第百八十八話　俺の力（前書き）

第百八十八話です

第百八十八話　俺の力

「ちっ、さすが発展機ってところか」

俺の《アルカディア》と遥香の《神祇》による多重攻撃を襲撃者は恐るべき速度で防ぎ、回避していく。

あの周りに浮遊している球体。俺の多方向推進翼と似ているが、推進翼とは違い可変シールドユニットみたいなものみたいだな。

ユニットから生み出される強固なエネルギーシールドと無人機だからこそできる複雑な動き。五月のやつとは比べ物にならないほどに強い。

「遥香、俺が《アルカディア》を充填している間、あいつの相手をしてくれ。一気に片をつける」

「わかりました」

俺の指示に了承し、遥香が一気に襲撃者と距離をつめる。その隙に俺は少し距離をとり、《アルカディア》の充填を始める。

《アヴァロン》と《アトランティス》を連結させた《アルカディア》は、充填することによって強力な攻撃を放つことができる。クラス対抗戦でアリーナのドアをぶち開けるときや、銀の福音とのリベンジマッチのときに使用したが、時間がかかるし、攻撃のときの威力で後ろに吹き飛ばされるのを防ぐためにスラスターで後方から支えなければならないという欠点もあるが、俺の中では最高レベルの攻撃だ。

「《アルカディア》――充填開始」

充填している間、俺はその場を動くことができない。ゆえに敵の攻撃が届かないときか、誰かに敵の相手をしてもらっていないと使えない。いつものとおり、遥香に足止めを頼んでいるがあいつが相手では長くは持たないだろう。早く充填を終わらせなければ。

「《アルカディア》――二十パーセント充填完了……っ」

襲撃者が俺のほうを向く。くそっ、充填中は俺は無防備。敵の攻

撃を回避することも防御することもできない。充填を止めれば対処できるが、それだともう一度最初から充填することになる。そうなれば戦闘は長引いてしまう。

「明弘様！」

「遥香！？」

襲撃者の砲口が俺を捉え、高密度ビームが発射されたと同時に遥香が俺の目の前に割り込んできて《護神》を四つ全て展開する。

「《護神》……出力最大……！」

遥香の言葉に反応して《護神》が直径１．５メートルほどまで大きくなる。

しかし、敵のビームは最大出力の《護神》四つを貫通し、俺の前にいた遥香に直撃した。

「遥香っ！」

《護神》のおかげで威力は抑えられたとはいえ、正面からまともに食らった遥香はそのまま地面に落下していく。

「遥香ぁぁぁっ！！」

《アルカディア》の充填を中止して投げ出し、遥香の元に向かう。神楽はまだ展開されているが、地面に落ちる前になんとか受け止めなければ――！

「がっ！」

しかし完全な無防備になったところを襲撃者は見逃さず、その右腕のブレードで俺を斬り、吹き飛ばした。

アリーナの壁に叩きつけられ、重い衝撃が俺を襲う。そのまま地面に倒れた俺が見たのは、俺と同じく地面に倒れて動かない遥香と、その遥香にゆっくりと近づいていく襲撃者の姿。

「く……そっ！」

俺は何もできないのか。あいつは束さんの仕業だろうが、もしこれが本当の敵だったら遥香は殺される。

俺は大切な人、一人すら救えないのか。それじゃあ今まで俺が努力して身に着けてきた力には、一体何の意味があったんだ。

「くそ……俺にもっと力があったら……！」

しかし、そんなのはただの空想。もしもなんて夢物語でしかない。

所詮、俺の力はこんなものなんだ――。

『あるよ。彼女を助ける力が』

頭の中に、懐かしい声が聞こえた。

第百八十九話　開花させる鍵（前書き）

第百八十九話です

第百八十九話　開花させる鍵

『あるよ。彼女を助ける力が』

頭の中に懐かしい声が響く。数回しか聞いたことがないが、それでも懐かしく感じるその声。

『……ネルマだな？』

『そうだよー。大変みたいだね』

『何のようだ？』

『もう、そんなに素っ気無くしなくてもいいでしょ。せっかくわたしが、キミの望みを叶えてあげようと思ったのに』

『なんだと？』

俺の望みを叶える。今ネルマはそう言った。

俺の望み。それは、遥香を助けることだ。もしネルマが言っていることが本当なら遥香を助けられるということか。

『力が欲しいんでしょ？　遥香を助ける力が』

『ああ、遥香を助ける力が欲しい。そのためなら何だってやってやる』

『……いい返事だね。いいよ。といっても、わたしが力をあげるわけじゃないんだけど』

『馬鹿にしてるのか？』

力が欲しいかと尋ねておきながら、力をあげるわけではないだと？　ふざけているのか？　今は遥香を助けなければならない。無駄な話に付き合っている場合ではないというのに。

『ちょ、ちょっと落ち着いて。私が力をあげるわけじゃないけど、遥香を助けるための力はあるから』

『……どういうことだ？』

『力はキミの中にある。それを引き出せれば、彼女を助けることができる』

ネルマが真面目そうな声で告げる。顔が見えてないから本当に真

面目なのかどうかはわからないが。
『俺の中の……力？』
『そう。キミはまだ神王を理解できていない。だからその力を最大限発揮できない』
『俺が神王を理解できていないだと？　そんなはずあるか。神王は俺の専用機だ。理解できていないはずが――』
『普通に武器を出して戦う。それは神王の本当の姿じゃないよ。それだけだったらただのインフィニット・ストラトスでしかない』
『……ただのインフィニット・ストラトス……？』
ネルマの言っている意味がわからない。その言い方では、まるで神王がただのＩＳではないと言っているようなものだ。
『黎明は始まりの象徴。黄昏は終わりの象徴。その黎明と黄昏が融和した神王は始まりと終わり、そしてもう一つの力を持つ。それを開花させる鍵は……無限回奏』
『無限回奏……。あの歌が、神王の力を開花させる鍵？』
『そうだよ。今までキミが歌っていたのは第一旋律。無限回奏にはまだ続きがある』
第一旋律……無限回奏には続きがある……。確かに、あの無限回奏は歌としては短すぎるとは少し思っていたが、続きがあったとはな。
しかも神王は始まりと終わり、そしてもう一つの力を持っていると、ネルマは言った。黎明と黄昏が融和したというのは意味がわからないが――
『今はわからなくていいよ。いつかわかるから』
『……俺の心を読んだのか』
『キミのことならなんでもわかるよ。キミが今の話でどこに疑問を持っているかぐらいは簡単にね』
『ぞっとしないな』
『ふふっ……あはは』
ネルマが小さく笑う。馬鹿にしているように聞こえるが、たぶん

そうではないのだろう。ただ俺の言葉を面白いと思っただけみたいだ。

『……っと、笑ってる場合じゃなかったね。さあ、遥香を助けよう。無限回奏の続きを奏でれば、絶対助けられるから』

俺の背中を押すようなネルマの言葉。『助けよう』という言葉が、自分一人じゃないと感じられてとても心強い。

あとは俺次第。無限回奏を奏でられるかどうか。遥香を助けられるかどうか。それらは俺にかかっている。

第百九十話　応えてくれ（前書き）

第百九十話です

第百九十話　応えてくれ

襲撃者が遥香に近づいていく。ほとんど時間は残されていない。
でも、焦るな。焦って失敗したら元も子もない。
……心に浮かべろ。無限回奏。その続きを。
『無限回奏　第二旋律』
――黎明は始まりの旋律を願い――
神王からかすかに紫色の光が零れだしてくる。
それに反応したように遥香のすぐ近くまで来ていた襲撃者の動きが――止まった。
そのまま襲撃者はハイパーセンサーが接続された頭部を俺に向ける。
無機質なセンサーレンズが俺を捉える。何の感情も映さないセンサーレンズがまっすぐに俺を見る。
――黄昏は終わりの旋律を想い――
遥香へと向かっていた襲撃者が目標を俺に変更して近づいてくる。
このまま攻撃されたら死ぬだろうな。そんな考えが頭をよぎるが、怖いとは思わない。
恐怖よりも遥香を助けたいという感情の方が大きいから、恐怖は感じない。

神王の力を開花させる鍵。それがこの無限回奏だとネルマは言った。無限回奏の続きを奏でることができれば、神王の力を引き出すことができると。

――そして約束の歌の夢を見る――

――果て無き願いと想いを抱いて――

俺は力が欲しい。遥香を助ける力が、俺も大切なものを守る力が。どんな相手からも大切なものを守る力が欲しい。だから――

――だから……応えてくれ、神王。

――今、始まりと終わりが一つとなる――

紫色の光が一気に強くなり、俺を包み込む。思わず目をつぶりそうになる強い光の中で、俺は目を開いたまま思わず呟いた。

「……そういう……ことか」

光を通して頭に流れ込んでくる『何か』。その『何か』が何であるのかを理解したとき、俺は神王のことを理解した。

わかる。これが神王の力。これなら遥香を助けることができる。

「行くぞ。神王」

第百九十一話　半永久の盾（前書き）

第百九十一話です

第百九十一話　半永久の盾

襲撃者が高エネルギービームを発射してくる。あれを防ぐというのはかなり難しい。だが、距離が開いている以上避けるのはたやすい。そのままビームを回避し、一気に接近する。

襲撃者は全身のスラスターで複雑に動きながら距離をとり、ビームを乱射して俺が近づくのを防ぐ。

ビームを避けることは容易い。だが、そのビームのいくつかが倒れている遥香に降り注ぐ。今の遥香には避けるどころか防御する力すらない。

そのビームが届く前に、遥香のもとに駆けつけるが、遥香をつれて回避するには時間が足りない。ゆえに《護神》すら貫いたビームを真正面から防御するしかない。

「――ただ一つの祈りを灯せ――」

歌ともいえない、ひどく短い言葉。その言葉に反応するように、俺の右手から光がかすかに零れだす。その右手を前に突き出すと、《イージス》が展開される。いつもは俺の腕に装備される《イージス》だが、今回は俺の目の前に展開された。しかも《イージス》の周りには《イージス》から発せられた紫色の光が輝いている。

ビームが直撃する。あまりに大きすぎるエネルギーに耐えられないはずの《イージス》は傷一つつかずにそのビームを受け止める。

そしてビームが当たった瞬間に《イージス》の周りの光が一斉に強くなり、それもシールドのようにビームを防いでいく。

《イージス》がビームのエネルギーを吸収し、そのエネルギーを一切のタイムラグもなくエネルギーシールドとして放出。これにより、エネルギー系の攻撃に対しては半永久的な防御をすることができる――名付けるとすれば、イージスの本来の読み方から《アイギス》。

ビームが一瞬止む。その隙を突いて遥香をアリーナの観客席のところまで連れて行く。

「……明弘……様？」
「起きたか」
運んでいる途中、気を失っていた遥香が目を覚ます。気を失われているままでは面相だから助かった。
両手で抱き上げているせいで真下から俺を見上げるように視線を送ってくる遥香に俺は指示を出す。
「お前は観客席に隠れていろ。あいつは俺が相手をする」
「ですが……明弘様だけでは……」
「大丈夫だ。お前はただ俺が勝つことを信じていればいい」
「……」
「それとも俺が負けるとでも思っているのか？」
「いいえ、そうではありません。わかりました。明弘様の邪魔にはなりたくありません」
「それでいい」
物分りのいいやつで助かった。今の自分では足手まといになるだけだということをすぐに理解してくれたようだ。
こんな会話をしている今も襲撃者からのビーム攻撃は続いている。しかし、それらは全て《アイギス》によって完全に防がれる。
腕に装備する《イージス》のときと違い、《アイギス》は両手がふさがっている状態でも使える。これは便利だな。
「……ん？」
一瞬、観客席の端に誰かいたような気がして、そちらに視線を向ける。しかし、視線を向けた先にはただ暗い空間に観客席があるだけだった。
「どうかしましたか？」
「いや、なんでもない」
どうせ見間違いだろう。そう結論付け、観客席に遥香をおろす。
「じゃあ、行ってくる」
「はい。絶対に勝つと信じています」
「ああ。もちろんだ」

それだけ言葉を交わして、襲撃者に向かっていく。
絶対に勝つ。遥香が信じていてくれるから。
「――無限の旋律。……好い歌だな」
アリーナの地面と壁をビームの雨が撃つ音に紛れて、聞き覚えのない低い声がかすかに聞こえた気がした。

第百九十二話　ガラクタ（前書き）

第百九十二話です

第百九十二話　ガラクタ

襲撃者のビームの嵐。それを《アイギス》で防ぎながら接近していく。あいつの一番の武器である高エネルギービームを完全に対処できるのはやはり大きい。

あとはあの機動力を何とかできれば勝てる。そしてその方法はすでに考えてある。

……束さん、勝たせてもらいますよ

心の中でそう呟き、勝つための最後のピースを起動させる。

「これで終わりだ。……《ラグナロク》発動」

その瞬間、淡い紫色の光が神王の全身から発せられ、背中の《イカロスの翼》のエネルギー翼が1．5倍ほどの大きさになる。

神王の最終兵器《ラグナロク》。シールドエネルギーを全身に纏わせることで、神王の能力を無理矢理引き出すシステムだ。

しかし、発動している間はシールドエネルギーがものすごい勢いで消費され、一度発動したらシールドエネルギーが0になるまで停止できないという致命的な欠点があるため、滅多なことで使うことはない奥の手だ。

「稼働時間は六十七秒。……いくぞ」

襲撃者の砲口が俺を捉える。だが――遅い。

その砲口からビームが発射される。しかし、そのときにはすでに俺は襲撃者の懐に潜り込んでいた。

チャージなしの瞬時加速、そしてその加速を利用しての体当たり。完全に腕を伸ばし、射撃体制だった襲撃者には反応できず、体当たりをまともに受けた。俺はそこに追撃をかける。

襲撃者もすぐに体制を立て直し、右腕の巨大ブレードを構える。そのまま突撃していく俺にブレードを振り下ろす。

「……ふっ」

そのブレードを真剣白羽取りの要領で両側から両手で受け止める。

いくら巨大ブレードとはいえ、《ラグナロク》発動状態の俺にその程度の攻撃は効かない。

襲撃者は右腕が受け止められた状態から左腕の砲口を俺に向ける。こんな零距離であのビームを発射したら自分にも被害が出るのはわかりきっているはず。それでもやるというのだろう。

砲口の前に《アイギス》を潜り込ませるにも、この至近距離では《アイギス》が入り込む隙間がない。

そこで俺は襲撃者の足を薙ぎ払い、数歩後ろに下がる。襲撃者は体制を崩すが全身のスラスターの動員してすぐさま体制を戻そうとする。だが――

「これで終わりだ」

襲撃者が体勢を立て直す瞬間、《アルカディア》を展開。そのまま砲口を襲撃者に向けて、引き金を引く。

ギリギリのところで襲撃者は可変シールドユニットを展開して防御しようとするが、間に合うわけがない。普段なら相当の充填時間のかかる《アルカディア》のフルパワー攻撃を《ラグナロク》発動状態でのみ、充填なしで放つことができる。もう反則気味な能力だが、ほんの数十秒しか発動できないという代償を考えれば相応の力だろう。

《アルカディア》から放たれた攻撃が襲撃者を直撃する。次の瞬間には、襲撃者の姿はボロボロになり、もう戦える状態ではなくなっていた。

それでも最後の力を振り絞るかのように左腕の砲口を俺に向けようとするが、途中で力尽きた。

「《ラグナロク》稼働時間０秒。結構ギリギリだったな」

そんな俺の言葉に襲撃者は答えない。もう戦うどころか動くこともできないガラクタだ。

「……お疲れ様でした。明弘様」

振り返ると、そこには遥香の姿。動くのも辛いだろうに、それを言うためにここまで来たのか。

かすかに遥香の顔に現れる安堵の表情。俺が勝つことを信じてくれた彼女に向かって、返事をした。

「ああ。お前もな、遥香」

第百九十三話　保健室　医療室（前書き）

第百九十三話です

第百九十三話　保健室　医療室

「大丈夫か？　遥香」
「はい。大丈夫です。数日安静にしていればすぐによくなると先生も言ってました」
「そうか」
太陽が沈み始めた夕方の保健室。そこに置いてあるベッドに横になっている遥香と話す。
襲撃者との戦闘のあと、怪我をした保健室に連れてきて治療してもらったが、幸い大事にならなかったらしく安心した。
さっき保健室の先生から聞いたが、他の専用機持ちたちのところにも同じ襲撃者が襲ってきたらしい。それぞれ殲滅されたらしいが、皆少なからず怪我をしてしまったそうだ。特に会長はひどい怪我を負ってしまったらしい。今は保健室ではなく、医療室にいるということだったのであとでお見舞いに行こう。
「じゃあ、治るまで安静にしてろよ。俺は会長のお見舞いに行ってくる」
「わかりました」
それだけ言葉を交わして医療室に向かう。しかし、あの会長が怪我をするほどの相手によく俺が勝てたな。まあ、《アイギス》があったからだけど。
「《アイギス》、か。あれが神王の力……」
エネルギー系攻撃に対してほぼ最強といえる防衛力を発揮する盾。大切な人を守るという俺の望みから生み出された『守るための力』。
「でも、それだけじゃない気がするんだよなぁ……」
《アイギス》以外にも神王にはまだ力が秘められている気がする。
そして、その力を発動させるための鍵は――おそらく、俺の言葉。
「――ただ一つの祈りを灯せ――」
《アイギス》を発動させたとき、この言葉を半ば無意識のうちに呟

いた。そしてそれによって《アイギス》が発動した。ということは、他の力を発動させるためには何か別の『言葉』が必要になるのかもしれない。

まあ、これは俺の推測に過ぎないから何とも言えない。今度、適当に言葉を言ってみて検証してみよう。

「って、結構元気そうですね。会長」

「そうでもないわよー。体動かすと痛いもの」

医療室に入って最初の会話がこれだった。

「で、明弘くんはこんな何もないところに何の用かしら？　まさか愛しのお姉さんを心配してきてくれたのかな～？」

「まあそんなところですね」

そう返してベッドの脇まで歩いていく。会長は意地悪そうな笑顔から一転、つまらなそうに口を尖らせた。

「もう、ツッコミを入れてくれないんじゃつまらないじゃないの」

「ツッコミって、どこにですか」

「『愛しのお姉さん』のところとか」

「何ですか。好きじゃないですよ、とでもツッコめばよかったんですか」

「うー、それもそれで嫌ね」

会長が少し眉間にしわを寄せる。いくら冗談とはいえ、好きじゃないと言われるのは堪えるようだ。

「じゃあこの件はこれで終わりということで。……で、怪我してるって言うのに上機嫌みたいですけど、何かあったんですか？」

「んー、それは……まあ。簪ちゃんと久しぶりに話せたっていうか、わだかまりが解けたっていうか……。そんな感じね」

「それはよかったですね。一夏と組んだ影響じゃないですか？」

「そうかもしれないわね。でも、不思議なのよ。なんであのとき一

夏くんに頼んだんだろうって」
夕日が差してくる窓の外を眺めながら、本当に不思議そうな口調で会長が呟く。
確かにそうだ。簪の相方を頼むのだったら、別に一夏でなければいけないわけではなかった。馴染みやすいという意味では同じ女子に頼んだ方がいいだろうし、簪がいいイメージを持っていなかった一夏に頼む必要はどこにもない。
それでも会長は一夏に頼んだ。この様子では会長自身も特に意識せずに。
「妙な確信はあったのよね。彼に任せておけば大丈夫って」
「まあ、一夏だからじゃないですか？」
「そうなのかなぁ」
会長は夕日に視線を向けたまま答える。俺も同じく夕日に視線を向けて、その沈む様子を眺める。
「夕日って少し悲しいわ。一日が終わっちゃうんだもの」
「俺は好きですよ。寂しさと切なさが感じられて、綺麗ですから」
「そうなんだ……」
それきり医療室は静寂に包まれる。俺も会長もそれ以上何も言わずに窓の向こうを眺める。
やがて夕日が完全に地平線の向こうに沈んでいった。

第百九十四話　大きな決意（前書き）

第百九十四話です

第百九十四話　大きな決意

「何か変な気分だよな」
翌朝、起きてみて呟く。
一人だけの自室。数ヶ月前まではそれが普通だったのに、今はなぜか少し寂しく感じる。
「遥香がいないから、なんだろうな」
遥香が転校してきてからは、ここは俺と遥香の二人でいつも使っていた。
俺が先に起きたときは遥香を起こし、遥香が先に起きたときは遥香に起こされる。それがここ数ヶ月の日常だった。
遥香がアメリカに行ったときは、束さんとかがいたからここまで寂しいとは感じなかったが、あのときも一人だったらきっとこんな感じだったのだろう。
「っと、これじゃあまるで俺が遥香に依存してるみたいだな」
まあ、あながち間違ってはいないかもしれない。色々な面で俺は遥香に頼っている。遥香という支えがあるから俺はこんな風に生きていけているとも言えるだろう。
「今日は昨日の取調べがあるんだっけ。それ終わったら、空いてるアリーナで《アイギス》の検証でもしてみるか」
できれば誰もいないところがいいな。昨日のことがあるからアリーナを使おうと思う生徒も少ないだろうし、もしかしたら貸切のところもあるかもしれないが……というか、昨日のでアリーナ使えないってことはないよな？
別に誰かがいても駄目というわけではないが、《アイギス》発動のためにあのフレーズを言っておいて、何も起きなかったら妙なことを口走ってるやつだと思われるかもしれない。そんな危険性をなくすためにも、やっぱり誰もいないところの方がいい。
まあ、取調べのときに先生にアリーナが使えるかどうか聞いてみ

ればいいか。たぶん、担当の先生は織斑先生か山田先生あたりだろうし。

「確か、生徒指導室だったっけか」

キャノンボール・ファストのときの取調べもそこだったし今回もそこだろう。途中で誰か先生に会ったら訊いてみればいいし。

前回の取調べもかなり長かったから今回も長いのだろう。担当の先生、山田先生あたりだったらいいなぁ。でも、今回の襲撃者が五月の襲撃者の発展機って分かってるだろうし、もしかしたら織斑先生かもしれない。あの人、五月のときにコアのこととか話したし。

と、そんなことを考えていたら廊下の曲がり角で走ってきた誰かとぶつかった。とっさに相手が倒れないように支える。

「大丈夫か？　……って、簪？」

相手から体を離し、相手が怪我していないか確認すると、ぶつかってきた相手は意外なことに簪だった。

「あ、明弘……」

あの簪が廊下を走るなんて意外だな。どんな小さなことでも無駄なことはしないやつなのに。

そういえば、簪の顔が心なし――いや確実に赤い。一体どうしたのだろうか？

「……明弘……」

「ん、なんだ？」

「……ごめんなさい……！」

いきなり謝られた。何だろうか。ぶつかってしまったことに対してだろうか。それなら注意してなかった俺も悪いんだが。

「私……私……」

簪らしくもなく、何度も同じ言葉を繰り返しながら、簪は最後にはっきりと告げた。

私、一夏のことが大好きになってしまった。

そう、顔を真っ赤にしながら、まるで悪いことをしたときのように告げる簪。それに対して、俺はその事実を知って思ったことをそのまま返した。

「そうか。薄々そうなるんじゃないかとは思っていたけど、本当になるとはなぁ。一つ忠告しておくと、あいつの競争率はかなり高いぞ。頑張れ」

簪も惚れたとなると、俺と遥香以外の一年の専用機持ちは全員一夏に惚れたことになるな。まったく、恐ろしいやつだ。一夏。

「……え？」

簪の口から意外そうな声が零れる。ん？　俺なんか変なこと言ったか？

「何とも……思わないの？」

「何ともって何だよ？　まあ、あんなに一夏を敵視してたお前が一夏に惚れるのは周りから見れば意外なことかも知れんが、お前の趣味を知っている俺からすればそこまで意外なことでもないな」

簪の趣味。それはいわゆるヒーローもののアニメなどを見ることだ。それを知っていれば簪が一夏に惚れてもそこまでおかしいとは思わない。

「一夏はヒーローみたいなやつだからな。まあ、お前の好きな完全無欠のヒーローとは程遠いが、あいつほどヒーローらしいやつはなかなかいないだろう。俺みたいなやつといるよりは、よっぽどいい」

ヒーローものの作品はあまり見たことがないが、それでも俺とヒーローが似ていないことぐらいは普通にわかる。一夏の方がよっぽどヒーローらしい。

「お前が何で俺に謝ったのかはわからんが、自身を持て。自分が好きになったのは、ヒーローみたいな人なんだ、って胸を張っていればいい」

周りに誰もいなくて助かった。いくら簪を元気付けるためとはいえ、他のやつがいる前でこんな恥ずかしいことを言うのは気が引ける。

「これからは一夏がお前を守ってくれる。俺は……そうだな。陰からお前のことを守ってやるよ。格好いいところはあいつに譲ってやる」

「明弘……」

「じゃあ、俺は行くぞ。一夏を手に入れられるように頑張れよ」

それだけ言って、少し早足でその場を後にする。あんな恥ずかしいことを言っておきながら、あの場に留まるのは恥ずかしすぎる。とっとと離れたところに言ってしまおう。

まあ、陰から守ってやるってのは本気だけどな。何があっても簪のことを守ってみせる。その気持ちだけは嘘じゃない。

「はぁ、もっと強くならないとな……」

遥香と簪。二人を守れるだけの力を付ける必要がある。俺のような弱い人間が、あの二人という大きな存在を守れるだけの力を持てるかどうかはわからないが、絶対に守ってみせる。

「と、その前にまずは取調べだな」

大きな決意を胸に抱いて、俺は生徒指導室に向かっていった。

第百九十四話　大きな決意（後書き）

7巻の内容が終わってしまいました

……これからどうしよう

第百九十五話　気分がいい（前書き）

第百九十五話です

第百九十五話　気分がいい

ノックもなく部屋のドアが開けられる。ドアの向こうからは濁った灰色のローブを纏った男――ルーザーが挨拶もなしに部屋に入ってきた。

それに対して、部屋の椅子に座っていた部屋の主は特に気にする風でもなく、彼に話しかける。

「やあ、ルーザー。そろそろ来るころだと思ってたよ。研究室にもいなかったけど、どこに行ってたの？」

「ＩＳ学園だ」

素っ気無く答えたルーザーはそのまま部屋のソファーに腰を下ろす。それと同時に部屋の主はどこからともなく酒瓶を二本取り出すと、ソファーの前のテーブルに置きながら言った。

「ＩＳ学園、ね。それで、結果はどうだったのかな？」

なぜＩＳ学園に行ったのかは聞かない。レイベを見に行ったことくらい、わざわざ聞く必要もないことだからだ。

まあ、目の前の男に聞いたところできっと「気まぐれだ」としか答えないだろうけど。

そんなことを内心で呟きつつ、部屋の主はルーザーの答えを待つ。

「確かに記憶は失くしているようだったな。戦い方も、昔と比べれば相違点がいくつかあった。だが――」

「だが？」

「好い歌を聴かせてもらった。黎明でも黄昏でもない、始まりも終わりも超えた無限の旋律。好い歌だった」

「歌って……グレルたちが七月に聞いたっていうものかな？」

「そんなことは知らん。そういえば、あの二人はどうした？」

ルーザーは部屋の主の問いかけを一蹴する。そのあと酒を飲みつつ、周りを見渡しながら尋ねる。

「会議。自分と貴方も一応出席できるけど、どうする？」

「会議……あの馬鹿な幹部共と一緒にいるのはいつもなら遠慮したいが、今日は気分がいい。心底くだらない内容でなかったら行ってもいいだろう」
「自分もどういう内容かは聞かされていないから、何とも言えないけど、それじゃあすぐに行こうか。そろそろ始まってる時間だろうし」
そう言いながらルーザーが飲み干した酒瓶を片付ける部屋の主。
それを眺めつつ、ルーザーは気になったことを尋ねた。
「お前は俺にそれを伝えるためだけに残っていたというのか？」
「貴方がもうすぐ来る予感がしたからね。それなら残って伝えた方がいいと思って」
「ふん。さすがの勘だな。俺の行動を予感できるとは」
「偶にだけだよ。さあ、それよりも行こうか。グレルとフェルもあんまり乗り気じゃなかったみたいだから、退屈させてると悪いし」
「お偉い幹部共が集まる会議で退屈とはな。幹部共が聞けば心底嫌そうな顔をするだろうな」
「いつも会議を放り出している貴方だけには言われたくないね」
そんな軽口を交わしながら、部屋を出る二人。そのまま二人は同じ速度で廊下を歩いていく。
その歩きに合わせて、部屋の主の両腕に着けられていた一対のブレスレットが小さな音を立てる。
「そのブレスレット、いつも着けているな。大切な人に貰ったと言っていたが、心底気に入っているようだな――スァリ」
「もちろん気に入っているよ。記憶を失くしているとはいえ、折角レイベがくれた贈り物だもの」
ルーザーの言葉に部屋の主――スァリが微笑みながら返す。
ルーザーはそんなスァリの様子を見て、ふん、と一度鼻を鳴らすと無言になり廊下を進んでいく。
体格的には大人と子供ほどの差がある二人だが、なぜかどちらも普通に歩いていながら速度に差が出ない。それはルーザーが遅いの

か、いやおそらくスァリが速いからだろう。
と、ふいに二人が立ち止まる。二人の前には重厚な作りのドアがあり、明らかに他の部屋のドアとは別物であることを感じさせる。
「さて、今回はどんなくだらない話を持ち込んでいるのやら」
「どうだろうね」
それだけ言葉を交わし、二人はドアを開け中へと入っていった。

第百九十六話　会議（前書き）

第百九十六話です

第百九十六話　会議

会議室のドアが開かれる。会議室にいたグレルたちをはじめ、その場の全員が開け放たれたドアに視線を向ける。
「あれ？　まだ会議は始まってなかったようだね。これならもう少しのんびりしてもよかったかな」
「確かにそうだな。酒ももう一本ぐらい飲んで来ればよかったか」
全員の視線が向けられながらも、ドアを開いた本人たち――スァリとルーザーはのんきにそんなことを言う。
そのまま二人は部屋の中央に置かれた正十二角形の大きなテーブルのそれぞれ空いている席につく。
十二ある席にはそれぞれ一から十二までの数字が刻まれており、六から十一までの六席には様々な年齢の男たちが座っており、グレルとフェルはそれぞれ三、四と刻まれた席に着席している。そこにスァリが五、ルーザーが十二の席に加わり、男たちの対面の六席のうち四席が埋まった。残っているのは一と二が刻まれている席だけだ。
「遅かったじぇねえか、スァリ。ルーザーもこんなとこに来るなんて珍しいな」
「まだ会議が始まっていないようだけど、どうかしたのかな？」
「いつも出席しているあなたが来るのも待っていたのよ。ルーザーが来るとは思わなかったけど」
「今日は気分がいいからな。暇つぶしがてら来てやった」
グレルたちがそんな会話をしていると、六番の席に座っている男がわざとらしく咳をしてその会話を遮る。
「さて、二人も来たところで会議を始める」
そんな男の宣言のあと、ルーザーが椅子に背中を預けながら口を開く。
「会議といっても、今回の用件は何だ？　くだらないことだったら、

俺は今すぐにでも出て行くが」
「くだらないことではないはずだ。特にお前たちにとってはな」
それに続くように七番席の男が対面の一番席に視線を向けながら言う。
「第一席……レイベの件について――っ!?」
と、その瞬間、部屋の空気が変わった。静かな部屋に殺気が満ち溢れる。
「その名前をあなたたちが使う資格はないわよ」
「次にその名前を口にしたら……殺すぞ」
殺気の元はグレルとフェル。その二人の言葉に男たちは背筋を凍らせる。
「ふふっ、二人とも殺気立っちゃって。まあ、その意見には自分も同感だけどね」
殺気に包まれた部屋の中で、平然と微笑むスァリ。そのスァリと殺気を放っているグレルとフェル、額に冷や汗を流している男たちを順番に見渡したあとに、ルーザーは面白そうに笑い出した。
「暇つぶしに来てみたが、面白いものが見れたな。……で、あいつの件というのは何だ?」
「あ、ああ。彼について、どれくらい作戦は進んでいるのか。その確認のために集まってもらったわけだ。進行状況次第では、作戦の変更を議論する必要もあるのでね」
男の『彼』という呼び方に多少なりとも怒りを静めたグレルたちは殺気を消す。男たちが内心で安堵のため息をつく。
「レイベのことなら、以前から言っていたとおりよ。相手はあのレイベ。しかもＩＳ学園も相手となれば、時間がかかるのは当然。それにあなたたちは承知したでしょう」
「確かにそうだが、あれから何か進展はあったのか？　七月の接触で須藤明弘が彼だということが確認されたが、それ以外ほとんどめぼしい情報が入っていないではないか」
「ＩＳ学園から情報を手に入れるのは容易ではないことくらい、あ

なたたちにもわかっているでしょう。まあ、わかっている情報の中では、レイベの懐刀が彼の近くにいるということぐらいいね」

「懐刀……彼女か。レイベが行方不明になった直後に失踪したが、また彼の元に付くとは。……まあ、そういうことならこの件は今までどおり、第三席、第四席、第五席、第十二席の四名に行ってもらうことにする。では、今回の会議は終了だ」

その宣言を聞き、男たちは早々に部屋の出て行く。数分も経たないうちに、部屋にはグレル、フェル、スァリ、ルーザーの四人だけが残されていた。

「さて、と。面倒な会議も終わったし、これからどうする？」

「四人で作戦会議をしましょう。といっても、ほとんど確認のようなものだけど。場所は……」

「自分の部屋でよければ提供するよ。グレルの包帯も巻き直したいし、ルーザーもそれでいいでしょう？」

「ああ。お前の部屋なら酒も飲めるしな」

そう口々に言い、四人は部屋のあとにした。

第百九十七話　秘密の会議（前書き）

第百九十七話です

第百九十七話　秘密の会議

「レイベのことだけど、少し急いだ方がいいかもしれないわね。さっきの会議だと、他の幹部たちは作戦の進行が遅いことを少し不審に思っているみたい」

「そうだね。今回はごまかせたけど、長くは持たないだろうし」

スァリの部屋で椅子に座りながらフェルが言い、それにグレルの包帯を取り替えながらスァリが続く。

「でもよぉ。そうは言ってもそんな簡単にできないだろ？　レイベを取り返すだけならともかくさ」

二人の言葉にグレルが反論する。スァリに巻いてもらった包帯がしっかり巻かれているか確認するために軽く右肩を動かしながら空いている椅子に座って頬杖をついた。

明弘をこちら側に連れ戻す。それが会議で出された作戦なのだが、四人の間での計画、その真の目的ではない。

もし明弘を連れ戻すだけなら、ここまでの時間をかける必要もない。グレルの怪我が治りつつある今ならすぐにでも明弘を力尽くで連れてくることだって不可能ではない。

グレルとフェル。無人機たち。それにスァリとルーザーも加われば、簡単にとはいかないだろうが、明弘を連れてくることはできる。

いや、今でなくても、今まで何度もやることはできた。臨海学校での接触のとき、遥香がＩＳ学園に転校してきたばかりのとき、学園祭のとき、少なくとも三回は機会があった。

それでもやらなかったのは、四人の真の目的のため。

四人の真の目的。それは、明弘の――レイベの記憶を取り戻すこと。

明弘を連れてきたところで、自分たちに反抗してくるのは目に見

えている。おとなしくさせる方法もないわけではないが、そんな面倒なことをするつもりは四人にはない。

記憶を戻すことができれば、そんな面倒なことをする必要もなくなるし、力尽くで連れてこなくてもいい。

記憶が戻れば自分たちが何もしなくても彼はこちらに戻ってくる。それだけの確信が四人にはある。

「確かにな。あいつの記憶が戻るかどうかはあいつ次第だ。俺たちにはせいぜい記憶が戻るのを促す程度しかできん」

「まあ、そうなのだけれど、私たちの名前にも反応しなかったのよ？　記憶が戻るのを促すにしたって、どうすればいいのか」

「こんなとき『彼女』が居てくれればね」

スァリの言葉にグレルとフェルがため息をつく。

「はぁぁ、結局、俺たちは『あいつ』には及ばないってことだよなぁ」

「まあ、『彼女』に勝てないのは仕方がないかもしれないけど、やっぱり悔しいわね」

「一番悔しいのは、もう二度と『あいつ』を超えられないってことだけどな」

つい数十分前に殺気を放ち、大の男たちをびびらせていた姿からは想像も出来ないほど沈みきった雰囲気。それを見て、ルーザーは少し面白そうに笑いながら酒を飲み、スァリは二人を慰めに入る。

「まあまあ、今はそれよりもどうやってレイベの記憶を戻すか、だよ。『彼女』のことはレイベが戻ってきてからでもいいでしょ？」

「……そうだな。つっても、もうどうしようもなくねえか？　俺たちにできるのはせいぜい何度もレイベと接触して記憶が戻ることを祈るくらいだろ」

「グレルの言う通りよ。やっぱり有力な方法がない限り、質より量で当たるしかないわ。こういう博打みたいなことはあまり好きではないのだけれど」

スァリの言葉に少しは気持ちを持ち直した二人だが、それでも口

調は少し暗い。スァリは「しょうがないな」といった様子で次の言葉を言う。

「まあ、今日は確認の意味での会議だったし、今日のところは嫌なことは忘れて楽しくいこう。この前、ちょうど良いお酒が手に入ったんだ。せっかくだし、四人で飲もうよ」

そういうスァリの腕の中にはいつの間にか大きな酒瓶が抱きしめられれいた。それを見てグレルとフェルは気の抜けたようなため息を一つついて、言う。

「もうこうなったら飲むしかねえな。面倒なことはアルコールで吹っ飛ばすか」

「私も。久しぶりに酔うまで飲ませてもらおうかしら」

「ふむ、スァリが良いと言うほどの酒か。それは楽しみだ」

「おだてても何も出ないよ」

そんな会話をしながら、ルーザーがいつも使っているテーブルに集まっていく四人。ルーザー以外は未成年にしか見えないが、そんなことを咎める者は誰もおらず、テーブルに沢山の酒瓶と四つのグラスが用意される。

テーブルを囲んで、四人の静かな飲み会はひっそりと始まっていった。

第百九十八話　医療室での一コマ（前書き）

第百九十八話です

第百九十八話　医療室での一コマ

ＩＳ学園医療室。そこに乾いた音が鳴り響く。
「王手」
「またですか。えっと、どうするかな……って、これ王手じゃなくて詰みじゃないですか」
「あはは。またお姉さんの勝ちね～」
乾いた音が止み、楽しげな声が代わりに聞こえてくる。その声の主は須藤明弘と更識楯無だった。
「三戦三敗。将棋には結構自信あったんですけど、強いですね」
「お姉さんに勝とうなんて十年早いわよ。とは言いたいところけど、明弘君だって十分強いわよ。ただ少し守りに入りすぎてる傾向はあるわね」
「それは俺の性格の問題でもあるんで、簡単には直せませんね。頭ではわかっているつもりなんですけど、やっぱり無意識のうちに」
「守りに入って長期戦に持ち込むのもいいけど、攻めに回す駒が少なすぎると、消耗戦で負けるわよ。今のだったら、この銀は――」
二人は間に置かれた将棋の盤を見ながらあれこれ話し合う。会話の内容でわかるように今の今まで二人は楯無の趣味である将棋をやっていたのである。
結果は楯無が三勝で無敗だ。将棋には多少の自信があった明弘だが、楯無には及ばず一勝も出来ずにいた。
「明弘君は将棋結構強いけど、他に何か趣味はあるの？」
「趣味ですか？　読書と……将棋の延長でチェスなんかもやりますね。アメリカにいたときは知り合いと何度もやっていました」
「アメリカねえ。その知り合いって、銀の福音の――」
「はい。福音の操縦者、ナターシャ・ファイルスです。勝率は五分五分。チェスは将棋と違って駒が減っていくので結構やりやすかったんですけど」

「確かに将棋は取った駒も使えるから、チェス以上に複雑なのよね～。そういえば、遥香ちゃんのお見舞いには行かなくていいの？さっきからずっと私と将棋打ってるけど」
「今日は検診なんです。怪我もほとんど完治したんで、あとは今日の検診で異常がなければ退院という話でした」
「そうなんだ。まあ学校の保健室だから退院って言うのは少し変な気がしないでもないけど」
普通の学校の保健室では、泊まることはないのでこういうとき、うまい表現が見つからないのは仕方がないことだろう。
とりあえずそこには触れずに二人は会話を進めていく。
「会長、さっきから気になってたんですけど、そこにある編み物セットはなんですか？」
明弘の視線の先、楯無が使っているベッドの枕の隣に置いてある編み物セットを一瞥して楯無は少し困ったような表情になる。
「一夏君が差し入れでくれたんだけど……私、編み物苦手なのよねー……」
「へぇ、会長にも苦手なものってあったんですね」
明弘が少し驚いたような表情になる。それに対して楯無はため息を一つついた。
「キミは私をなんだと思ってるのよ。私だって人間だもの、苦手なものくらいはあるわ。でも私が編み物苦手なのってほとんどの人知らないはずなのよねー。知ってるとすれば、虚ちゃんと簪ちゃん、あとは本音くらいかしら」
「大方、簪かのほほんさんから聞いたんでしょうね。いい機会ですし、編み物できるようにやってみたらどうですか？」
「私も最初はそう思ったのよ。でも、やってみるとやっぱり出来なくて。明弘君って編み物できる？」
「少しなら。昔はマフラーとか手袋とか……一度だけセーター作ったこともありました」
セーターを作れる時点で少し出来るのレベルを超えている気がす

るが、明弘の中ではきっと少しなのだろう。そうなると、上手く出来るがどれほどのレベルになるのかは想像できないが。

「俺でよければ、編み物教えましょうか？　冬までにマフラーでも作って一夏を驚かせるのも面白いでしょうし」

「是非お願いするわ。苦手だとわかっていて寄越しただろう一夏君への意趣返しも兼ねてね」

「じゃあ、早速やってみましょうか。遥香の検診が終わるのもまだ時間がかかるでしょうし、今日はとりあえず初歩的なところだけ」

「できるだけわかりやすくお願いね」

楯無から編み物セットを受け取った明弘は、とりあえず楯無がやって絡まった毛糸を解いていこうと、毛糸をよく見る。すると、予想以上に毛糸が絡まっているのに気づき、明弘は思わず深いため息をついた。

ちなみに、明弘の編み物教室がスタートしたのは一時間後のことだった。

第百九十八話　医療室での一コマ（後書き）

さて、本格的に書くことが無くなりました

８巻が出るまでどうやって凌ごうか……

とりあえず、番外編のような小話を入れていこうか……

誰か、良い案がありましたら教えてください

第百九十九話　あの人のもとへ（前書き）

第百九十九話です

第百九十九話　あの人のもとへ

ちょうど明弘と楯無が将棋を打っているとき、ＩＳ学園保健室では明弘の言っていたとおり、遥香の検診が行われていた。

といっても、外傷の法はほぼ完治しているため、内科検診のようなものばかりで遥香本人は特にやることがなく暇を持て余していた。

「はい、そのまま動かないでね」

「わかりました」

保健室の先生の指示に従い、私はそのまま動きを止める。

検診中は特にやることがなくはっきり言ってしまえば暇だが、これで異常がなければ明弘様のところに戻れるので早く終わるように先生の指示をしっかりとこなしていく。

（……明弘様）

今頃何をしているだろうか。昨日までは毎日お見舞いに来てくれていたが、今日は検診ということでまだ会っていない。

と、そこで不意に明弘様と始めてであったときのことを思い出す。

思えば、天宮遥香の全てはあの日から始まったのだ。

今から二年前。行く当てもなくあの人を探してさまよっていたある日、数日間何も食べていなかったのがたたり、私は薄暗い路地裏で倒れてしまった。

一日中何も食べないことはよくあったが、それでも数日続けて何も食べないというのはさすがに体が堪えたようでもう一歩も動けなくなったあのとき――

「大丈夫か？」
死さえ覚悟した私の目の前に、いきなりパンが現れた。
そのパンから視線をかろうじて上げると、そこには一人の男性が立っていた。
「あ……ぁ……」
肩まで伸びた藍色の髪と、同色の瞳。その人を見た瞬間、何も言えなくなってしまった。
その髪、その目。間違いない。この人は――
「……どうした？　食うのか？　食わないのか？」
目の前の人の怪訝そうな声でやっと我に返り、自分が空腹だったことを思い出した。
「食べ……ます」
「ああ」
パンを受け取り、夢中でかぶりつく。胃にものが溜まっていくのを感じ、改めて目の前の人に視線を戻す。そして、やはりそこにいるのは藍色の髪と目を持つ男の人だった。
「あの……あなたは……？」
「俺か？　俺は須藤明弘。お前は？」
「私……私は……」
男の人の須藤明弘という名前を聞き、思わず名乗るのを躊躇ってしまう。
この人は間違いなく、あの人だ。でもあの人の名前とは違う。それにあの人が私を見て何も言わないはずがない。
――記憶喪失。ふとその言葉が頭に浮かんだ。そんなことがあるとは思えないが、それしか考えられない。そうなると、やはりこの人は記憶喪失になっているのかもしれない。
「私の名前は……ありません……」
数秒間悩んだ末、出した答えがこれだった。この人が本名を出さないのなら私も出すべきではないだろうと、そう考えた結果だった。
「そうか。こんなところで倒れていたってことは、行くところがな

いんだろ？　もしよかったら俺のところに来るか？　裕福とはいえないが、お前も食っていかせるくらいならできるはずだ」

そう言って、手をさし伸ばしてくる男性。見ず知らずの人間に対する提案とは思えないが、それでも――

「まあ、余計なお世話だったら手を引っ叩いてくれても構わない。決めるのはお前だ。

それでも、その手を私は迷うことなく握りしめた。

その提案を拒む理由は何もなかったから。

「――はい。以上はないみたいだからもう動いてもいいわよ」

「ありがとうございました」

気がつくと、検診は終わっていた。特に以上はないということだったので、保健室をあとにし急いで廊下を駆けていく。

どこにいるかもわからない。それでもあの人ももとへ。

一番大切なあの人ももとへ、一秒でも早く行きたかったから。

第二百話　自分自身の評価（前書き）

第二百話です

第二百話　自分自身の評価

「で、こうするですよ」
「なるほどね。なんとなくだけどわかった気がするわ」
一時間ほど時間をかけて絡まった毛糸をほどき、会長に編み物のコツを教える。苦手といっても、おそらく手順がわからないだけだろうから、ちょっとしたコツさえ教えれば会長ならすぐにできるようになるはずだ。
「いやー、明弘君のおかげで少しはわかったわ」
「別にたいした事はしてませんよ。理解できたのは会長の力です。この調子なら、冬までにマフラーくらいはできるんじゃないですか？」
「んー、今は何もすることがないからできるけど、学園に戻ったらいろいろやることもあるし、そこまで出来ないと思うわよ？　会長って結構忙しいんだから」
「忙しいんだったら、タッグマッチで賭けなんてやらなければよかったじゃないですか。まあ、俺も一枚噛ませてもらいましたけど」
そう、実はこの前のタッグマッチでは、そのペアが優勝するかという賭けが行われていた。しかも、事前に根回しをして教師も丸め込ませて。
タッグマッチ前は一夏がほとんど生徒会に来なかったため、俺、会長、のほほんさん、布仏先輩の四人で決定されちゃったけど。
「確か、オッズは会長と箒がダントツで一位だったんですよね。あとは二年と三年のペアが二位」
「フォルテ・サファイアとダリル・ケイシーね。明弘君たちは四位だったわよね？」
「シャルロットとラウラのペアがいましたしね。単純な学年での順位もラウラが一位、シャルロットが三位。対して俺はラウラと僅差で二位、遥香が鈴音と二人で四位ですから」

一位&三位と二位&四位。学年での順位だけで考えれば、シャルロットとラウラの方に軍配が上がるのも当然だ。

「ま、あんなこともあったし、この賭けもほとんど無効になるでしょうけどね。……って、話が逸れたわ。とりあえず、生徒会の仕事もあるから冬までに完成はいかないと思うわよ」

「でも、一夏にあげたら喜ぶと思いますよ？　会長が編み物苦手なことを知っているのなら尚更」

「なんでいつの間に一夏君にあげることになってるのよ」

「え？　違うんですか？　まあ、簪や布仏先輩、のほほんさん、黛先輩と会長なら渡す相手はたくさんいるでしょうけど」

生徒から絶大な人気を誇る会長なら渡す相手なんて数え切れないほどいるだろう。しかし、その中でも一人選ぶとした一夏だろう。会長も意趣返ししたいって言ってたし。

「今のに明弘君の名前が入ってなかったんだけど、もしかして私の編んだマフラーなんていらないってことかしら？」

会長が少し不満そうに聞いてくる。たぶん、自分の手作りのものをいらないと思われるのが嫌なんだろう。

「そんなことないですよ。ただ、もらったらいろんな人から反感を買うだろうし、俺には過ぎたものですからね」

「過ぎたもの、ねぇ……。私のことを大きく評価してくれるのは嬉しいけど、自分の事過小評価してない？」

「過小評価なんてしてません。ちっぽけで、弱くて、本当なら生きている意味もないはずの人間。それが俺の自分自身に対する正当な評価です」

「……ちっぽけで弱い、か。人の価値観にとやかく言える資格はないけど、もう少し自分に自信を持ったほうがいいわよ。そんなんじゃ、誰かに告白されちゃったときとか、いろいろ大変よ？」

なぜこの話から誰かに告白されたときの話に飛ぶのだろうか。会長って、結構恋愛事が好きなのだろうか。

「俺に告白なんて、そんなことありえないので大変も何もありませ

ん。告白するなら皆、一夏に告白するでしょ」
「なんでそうネガティブ思考なのかなぁ。……じゃあ、もし私がここで明弘君に告白したら、どうする？」
いきなりの問いかけに、一瞬思考が停止する。数秒後、動き始めた頭で今の問いかけを整理する。
えっと、もしここで会長が俺に告白してきたらどうするか、だな。そんなことあるはずないが、今の問いかけはあくまで仮定の話。会長も「もし」って言ってたし。で、そのときどうするか。ってそんなの決まってる……。
「断りますね。会長以外の誰だとしても」
「……それは、相手が好きじゃないから？　それとも自分なんかじゃつりあわないと思ってるから？」
「もちろん後者です。もし仮に好きな相手だとしても、それなら余計に俺なんかじゃつりあいません」
「……あのねぇ、つりあうつりあわないの問題じゃないわよ。告白してくるってことは、相手もキミのことが好きなのよ？　だったら、つりあわないなんて考えないで素直に自分の気持ちを――」
会長の言葉を遮るように医療室のドアは開かれる。会長へのお見舞いだろうか。さっき将棋を指してるときも布仏先輩が来たし。
そう思ってドアに視線を向けると、そこに立っていたのは、綺麗な黒髪と黒瞳の小柄な少女――遥香が入ってきていた。
「お、検診は終わったのか。その様子だと以上はなかったみたいだな」
「はい。特に以上はないということでした」
「そうか。終わってすぐに来たのか？」
「はい。明弘様がどこにいるのかわかりませんでしたので、明弘様のいそうなところを探し回って来ました」
「ああ、そういえばここにいるって言ってなかったな。すまなかった」
「いえ、私も尋ねておかなかったのが悪いので」

たぶん、ここは候補の中では最後の方だっただろうからいろいろなところを探し回ったのだろう。もしかしたら全部のアリーナを回ってきたのかもしれない。

「部屋に戻ってシャワーでも浴びておけ。ここ数日はろくに入ってないんだろう？　俺もすぐに戻る」

「わかりました。では先に自室へ戻っております。更識楯無会長、失礼しました」

会長に会釈をしたあと、小走りで医療室を出て行く遥香。あの様子だと、たぶんあいつもシャワーに入りたかったんだろうな。

「じゃあ俺も失礼しますね。話の続きはまた後日ということで」

会長の返事も待たずにそのまま医療室をあとにする。そしてまっすぐに遥香が向かっているだろう自室に俺も向かった。

「……馬鹿」

医療室を出るときに、そんな呟きが聞こえた気がした。

第二百話　自分自身の評価（後書き）

記念すべき第二百話でした

８巻が出るまでは、番外編として細々とした小話を入れていきたいと思います

第二百一話　罪滅ぼし（前書き）

第二百一話です

第二百一話　罪滅ぼし

自室に戻り、遥香がシャワーを浴びている間、読書をして時間をつぶす。そろそろ全部の本を読み終わるし、今度新しい本でも買っておかないとな。

明日までは遥香も安静にしていた方がいいだろうし、明日にでも買いに行くか。ちょうど休日だし。

と、そこでシャワーを終えた遥香が出てくる。ここ数日分の汗と疲れを流してきたのだろう。さっきよりも明るい雰囲気だ。

「退院って言っても、すぐに訓練できるわけではないんだろ？」

「そのことについては特に何も言われていませんので、自分で決めろということなのだと思います」

「自分のことは自分で決めろってか。あながち間違ってはいないが、病み上がりの人間にはちゃんとそのあたりは言っとけよ。まあ、今日と明日は訓練はしないでおこう」

「わかりました。では、明日は何をしましょうか」

「俺はちょっと本を買いにいくつもりだけど、お前はどうする？そんなに時間はかからないと思うが」

ただレゾナンスに行って本買って戻ってくるだけだし、ほとんど時間もかからないだろう。あ、でも本選ぶのに結構時間かかるときもあるからな。

だいたい一回で買うのが普通は五冊前後、多いときは十冊になるときもある。最初は日常生活に差し障りない程度の記憶しか残っていなかった俺が、少しでもいろいろなことを知ろうと思って読み始めたのがきっかけだったが、今では勉強とほとんど関係のない小説なんかも読むようになった。自室にある本棚もスペースがなくなってきた。明日、本棚も買っておくか。

「私がいても邪魔でしょうから学園で待機しています。明弘様が帰ってくるまでは、装備の調整などをしていれば時間の無駄にもなら

ないでしょうし」
「わかった。じゃあ、整備の方はよろしく頼む。俺もやるから帰ってきたら直接そっちに行く」
「わかりました」
「今日の夕食はどうする？　食堂で食うか？　なんなら俺がここまで持ってくるけど」
「私も同行させていただきます。今日は朝から検診で何も何も口にしていないので」
　今は大体午後五時くらいだな。何も口にしていないということは昨日の夜から何も食べていないということだ。腹も減っているだろう。
「じゃあ、今から何か適当につまめるもんでも用意してくるか？　腹が空っぽの状態でちゃんとした飯食うのもキツいだろ？」
「いえ、明弘様がわざわざ作られなくても、私が自分で用意します」
「駄目だ。お前が怪我したのは、俺をかばったからだろ。だったらお前の怪我の原因は俺にある。少しくらい罪滅ぼしさせてくれ」
「明弘様をかばったのは私自身の意思です。明弘様が気にする必要は――」
「気にするさ。これで気にしなかったら、俺は自分を許せなくなる。お前は俺を自分の過ちを悔やめない人間にするつもりか？」
　少し無理矢理な理論だが、こう言えば遥香はきっと折れてくれるだろう。
「……では、お願いします。ですが、簡単なものにしてください。手の込んだものだと、食べるのに躊躇してしまいます」
「わかってる。夕食もあるしな。何かリクエストあるか？」
「特には。簡単なものであれば何でも大丈夫です」
「オーケー。じゃ、作ってくるな」
　そう言って、部屋を出る。この時間なら料理部が活動しているだろう。シャルロットに頼めば、少しくらい使わせてくれるかもしれない。

実際、こんなことで罪滅ぼしになるとは思わないが、それでも何もしないよりマシだ。そう思い、俺は家庭科室に向かっていった。

第二百二話　お世話になった（前書き）

第二百二話です

第二百二話　お世話になった

「さて、何を作るかな」
廊下を歩きながら、何を作ればいいのかを考える。
病人にはやっぱりお粥か？　いやお粥は結構腹持ちがいいから駄目か。そもそも病人じゃないし。
とりあえず、ご飯を使ったものは止めて……そうだな。サラダでも作るか。簡単だし。ドレッシングは自分で作るが。
「すーくん、どうしたの～？」
「ん？　ああ、のほほんさんか。遥香が今日何も食べてないらしいから、今から適当につまめるものでも作りに行くんだよ」
考え事をしていたら、廊下でのほほんさんと出くわした。相変わらず袖があり余っている制服を着ている。もうのほほんさんのトレードマークの一つだな。
「そうなの～？　じゃあ、私も行く～」
「じゃあってなんだよ、じゃあって。一緒に来ても面白いことなんてないぞ？」
「大丈夫大丈夫。何か私にも作って欲しいな～、なんて思ってないからね～」
「思ってるだろ。まあ、少しくらいなら作ってもいいけど、何がいい？」
「おまかせしま～す」
のほほんさんと共に廊下を進む。おまかせとなると、何にするかな。遥香と同じサラダにでもするか。あんまり時間をかけると、夕食の時間になってしまうし。のほほんさんもまだ夕食は食ってないだろうから、そこまでちゃんとしたものを作られても困るだろう。
「遥香にはサラダを作るつもりだったらから、同じサラダでいいか？　夕食だってまだなんだろ？」
「あい、まだで～す。だからサラダだとちょうどいいよ～」

「決まりだな」
作るものも決まったし、キッチンでささっと作ってしまおう。あんまり遥香を待たせるのもあれだしな。

ＩＳ学園のキッチン。料理部が普段使用しているそこに行ってみると、いつもどおり料理部が活動していた。その中でもクラスメイトであるシャルロットがいち早く気づいて近付いてきた。
「あれ？　どうしたの明弘……と、布仏さん？　料理部の貸し出しはこの前終わったし……僕に何か用？」
「はろ～、でゅっち～」
でゅっち～って、シャルロットのことそんな風に呼んでたのか。
「ちょっとキッチンを使いたくて来たんだ。今、大丈夫か？」
「あ、うん。部長に聞いてみるね」
そう言って部長の元へ向かっていくシャルロット。そして部長と二、三言話したあとにすぐに戻ってきた。
「明弘だったら自由に使ってくれてもいいって。食材も好きなだけ使っても構わないってさ」
「えらく気前がいいな」
「明弘には貸し出し期間にいろいろお世話になったって言ってたからね」
「そこまで大したことした覚えはないんだが、まあいいか。じゃあ、お言葉に甘えて使わせてもらうぞ」
「うん。材料は何を使うのかな？　よかったらとって来るけど」
「いや、自分で取りにいく。迷惑はかけられないし」
それに自分で選んだ方がいいしな。同じ日に採った同じ食材でも鮮度って違うこともあるし。一つ一つが微妙に違うからやっぱり自分で選んだほうがいい。
「わかった。じゃあ、食料庫に案内するよ」

「すまないな。のほほんさん、少し待っててくれ」
「あい～」
緩い敬礼をゆっくりとするのほほんさん。やっぱり和むなぁ。っと、和んでる場合じゃなかった。
「じゃ、頼む」
「うん、こっちだよ」
シャルロットが先導し、それについていく。つか、食料庫があるのって、すごいことだよな。他の学校に行ったことがないから比較は出来ないけど、食料庫がある学校なんてなかなかないんじゃないあdろうか。さすがＩＳ学園だ。

第二百三話　予定変更（前書き）

第二百三話です

第二百三話　予定変更

「レタスとトマト、キュウリ。あとはドレッシングには……そうだな、ゴマ、青ジソ、生姜……。酢とかしょうゆ、サラダ油はキッチンの方にあるんだよな？」

「うん。調味料をわざわざ取りに来るのは効率が悪いからね」

「じゃあ、これで全部だな。すまないな、わざわざつき合わせて」

「別にこれくらい構わないよ」

サラダとドレッシングの材料を選び、食料庫を出る。キッチンに戻り、空いているところを借りて、材料を置く。

包丁とまな板はある。サラダを盛る皿も、フォークも二つある。ドレッシングを作るための小皿もある。

「よし、作るか」

レタスを適当な大きさにちぎって皿に盛り、その上に一口大に切ったトマトと薄切りのキュウリを乗せていく。

次に酢としょうゆ、サラダ油を入れた小皿に、ゴマ、刻んだ青ジソと生姜を入れて混ぜる。これをさっき作ったサラダにかければ即席サラダの完成だ。

「のほほんさん、出来たぞー」

「わ～い」

俺の言葉を聞いてゆっくりと走ってくるのほほんさん。ゆっくり走るというのはちょっと妙な表現だが、実際その通りだから仕方がない。のほほんさんらしい動きだ。

「まあ、即席で作ったものだからあんまり期待するなよ」

「あい～、いただきま～す！」

ゆっくりとフォークでサラダを口に運んでいくのほほんさん。ほとんどいつもの手順と一緒だけど、材料や手順も少し省略してるからな。どうだろうか。

「どうだ？」

「ん～、とぉ～ってもおいしいよ。それに～、このドレッシングって手作りでしょ？」
「よく気づいたな。やっぱり市販のより美味くなかったか」
「そうじゃないよ～。ただ、すーくんなら手作りだろうな～、って思っただけ～」
俺なら手作りって、どんな理論だよ。まあ、実際間違ってないからすごいな。ただのほほんとしているだけじゃないのか。
「いま、失礼なこと考えてたでしょ～」
「いや、そんなことないぞ。しっかり考えてるんだな、と感心してたところだ」
「しょうがないな～。だまされておいてあげる～♪」
そう言ってサラダを食べていくのほほんさん。意外と勘がいいな。思ってたことを指摘されてかなり驚いたぞ。
能ある鷹は爪を隠すってことわざもあるし、もしかしたらのほほんさんも実はすごい才能の持ち主なのかもしれない。姉の布仏先輩も整備科では三年の主席らしいし。
そんなことを考えていると、のほほんさんがサラダを食べ終える。元々、あっさり食べられるから別におかしくはないが。
「ごちそうさまでした～」
「お粗末さまでした。じゃあ、皿洗って戻るか」
「あい～」
のほほんさんから皿を受け取り、手早く洗っていく。包丁とかはさっき洗っておいたけど、遥香のサラダの皿はどうすればいいんだろうか。シャルロットに聞いてみるか。
「シャルロット。皿はどうすればいい？　食い終わったらすぐに持ってきた方がいいか？」
「んー、それでもいいけど、洗って明日まで返してくれればいいと思うよ。部長には僕から言っておくから」
「すまないな。じゃあ、できたら今日中に返す」
「うん、また何かあったら来てね」

「ああ。そのときはよろしく頼む」
会話を終え、のほほんさんと共にキッチンをあとにする。そのまま、二人で廊下を歩いていく。
「すーくん、明日って何か用事ある～？」
「本を何冊か買ってくるつもりだけど。何かあるのか？　生徒会の仕事とか」
「ううん、そうじゃないけど～、もしよかったら私もついていきたいな～と思って」
ついていきたい？　俺の買い物に？　自分で言うのもなんだが、俺の買い物ってそこまで面白いものじゃないぞ。
「別に構わないけど、本買いに行くだけだからつまらないと思うぞ？　それでもいいのか？」
「だいじょ～ぶ」
即答するのほほんさん。何を根拠にここまで自信満々なのだろうか。まあ、大丈夫って言ってるなら大丈夫か。嘘をついてることもないだろうし。
「じゃあ、明日の朝に迎えにいくから準備しておいてくれ。時間は……そうだな。九時くらいに行くと思うから」
「あいあいさ～。おっとっと、私の部屋こっちだ～」
「んじゃ、また明日な」
「うん、また明日～」
袖の余った手を振るのほほんさん。それに軽く手を振って応えてから、俺は自室に向かって歩いていった。

「というわけで、明日はのほほんさんと一緒に行くことになった」
「わかりました。存分に楽しんできてください」
明日の予定の変更を伝えたときの遥香の返事はいつもと同じく簡素なものだった。

「存分に楽しむって、デートじゃあるまいし。ただ本買いに行くだけだぞ？　どこに楽しむ要素があるんだよ」
「異性が二人きりで出かけるのをデートと呼ぶのではないでしょうか」
「いや、デートって言うのはお互いに好意を寄せている男女が二人で出かけることだろ。そうじゃなかったら、ただの友達同士でででかけたのもデートになる。だから今回のはデートではない」
そんなことを話しながら、遥香はサラダを食べ進めていく。そして、食べ始めて五分も過ぎないうちに皿は空っぽになった。
「じゃ、三十分後くらいに飯食いに行くか。それくらいの時間があれば消化するだろ」
「はい。わかりました」
「じゃあ、皿返してくるな。明日でもいいって言われたけど、明日は朝から出かけるし」
「はい」
再び部屋を出る。そして、さっき行ったばかりのキッチンへもう一度向かっていった。
明日はでかけるし、やれることは今日のうちにやってしまおう。
決してデートではなく、ただの買い物だけどな。

第二百四話　のんびりと（前書き）

第二百四話です

第二百四話　のんびりと

翌日、午前九時。俺は昨日約束したとおり、のほほんさんと一緒にレゾナンスに向かっていた。といってもほとんどモノレールに乗っていれば着くからそこまで歩くこともないんだが。

「ふぇ～、今までも見たことはあったけど、やっぱりすーくんの私服姿ってかっこい～」

モノレールで対面の席に座っていたのほほんさんが俺を見ながらそんなことを言う。

「そうか？　特売とかで安売りしてたやつなんだが」

「確かに～、服自体はそうでもないかもしれないけど～、すーくんだからかっこいいので～す」

「いまいちわからんが、褒めてくれてるみたいだからいいか。それにしても、そろそろ新しい服も買っておくかなぁ」

大体の場合は安くなってるときしか買わなかったしな。前に買ったのが確か去年だったから、新しいのを買うのもいいかもしれない。

といっても、俺が服を選ぶ基準なんて値段と色ぐらいしかないしな。安くて黒っぽい色、それでいて出来るだけシンプルなもの。俺の私服なんてほとんどそんなのばかりだ。

「よかったら～、私が選んであげよっか～？」

「のほほんさんが？　じゃあ、頼む。俺、服のことなんてよく知らないし」

「ふっふ～ん、私に任せなさ～い♪」

そう言うのほほんさんの服装はいつもの通り、袖の有り余っている服。パジャマとして使っているやつみたいなフードは付いていないし、色も結構普通だが、それでも十分特殊な服だ。そして首には臨海学校のときにプレゼントした天使の羽のネックレスが着けてある。

……あれ？　なんだが少し不安になってきた。

「じゃあ～本屋行ってから服見よっか？」
「いや、先に服屋に行こう。本持ちながら服見るのも大変だろうし、副のほうが軽いだろ？」
「あ、そっか。じゃあ最初は服屋にレッツ・ゴ～♪」
そう言って腕を上にゆっくり振り上げるのほほんさんの動きに合わせるように、モノレールが停車しドアが開く。駅前に着いたみたいだな。
「で、どこの店に行く？　服屋って言ってもレゾナンスじゃ何個もあるぞ」
「じゃあさ～、私のおすすめのお店に行こうよ～」
「……大丈夫なのか？」
一応のほほんさんに聞いてみる。普通なら一任するところだが、相手がのほほんさんなだけに少し不安だ。何か突拍子もない店に案内されそうな気がする。
「大丈夫大丈夫♪　ＩＳ学園生徒会書記にまっかせな～い」
「いや、ちょっと不安なんだが。生徒会書記って言っても、ほとんど仕事してないし」
「私がやると仕事が増えるからね～。今まではお嬢様とお姉ちゃんの二人だけでやってたけど、すーくんとおりむーが入ったからね～。私としてはとっても安心なので～す」
「安心するなよ。のほほんさんだって生徒会役員なんだから、少しくらい仕事はしないと」
「もともと私はお嬢様の推薦で入っただけだからね～」
「それでも、だ。俺と一夏なんて推薦どころか半強制的に入れさせられたんだぞ。少しずつでもいいから、やってみような」
そう言ってのほほんさんの頭をなでる。なんだか知らんがのほほんさんは頭を撫でられるのが好きなようだ。簪もだが。
「えへへ～、がんばってみま～す」
「よし、約束だからな」
「あい～」

敬礼をするのほほんさん。それを確認したあと、もともとの目的のためにのほほんさんを促す。
「じゃあ、のほほんさんお勧めの服屋に行くか。ちょっと不安だけど」
「う～、不安ってひどいよ～？」
「何で疑問系なんだ。いいから行くぞ。その店で買うかどうかは見てから決めるから」
「あい～。じゃあ、行こ～」
のほほんさんがゆっくりとした足取りで先導し、それに俺はついていく。
帰ったら遥香の所に行かなければならないが、少しくらいゆっくりしてもいいだろう。遥香も存分に楽しんできてくださいって言ってたし。
こういうのんびりとしたのを思いっきり味わうのも、たまにはいいな。

第二百五話　昼前の買い物（前書き）

第二百五話です

第二百五話　昼前の買い物

「ここで～す！」
そう言って立ち止まったのほほんさんの視線の先には、意外と普通そうな店があった。外から見る限り変な感じでもなさそうだし、客もまあまあいる。
「驚きだな。もっと妙な店に連れて行かれると思ってた」
「買うのはすーくんの服だからね～。こういうところの方がいいでしょ？」
「ああ、助かる。早速見てみるか」
「あい～」
店の中に入ってみると、いろいろな種類の服が所狭しと並べられている。このご時勢だからやっぱり女物のコーナーが半分以上を占めているが、男物もよさそうな物が多い。
「それで、どういうのが欲しいの～？」
「特にこれといった物はないな。まあ、強いて言えばこれから寒くなるから冬物とかだな」
「冬物か～。じゃあ探索開始～♪」
冬物の服を探し始めるのほほんさん。俺もはぐれないように気をつけながらそれらしい服を探す。
「これなんてどうかな～？」
そう言うのほほんさんの手には黄色のセーター。かなり暖かそうだな。
「いいと思うけど、やっぱり色は暗めのほうがいいな」
「え～、そうかな～？」
「俺にこの色は似合わないって。あ、すいません。このセーターの黒か紺色ってありますか？」
近くの男性店員に尋ねてみる。「ただいま確認いたします」と言って下がってから数分後、店員が黒色のセーターを持って戻ってき

た。
「お待たせいたしました。黒色でしたらありましたのでどうぞ」
「ありがとうございます」
一度礼をしてから去っていく店員。俺はそれに軽くお辞儀をして返したあと、店員が持ってきたセーターを確認し、試着室で試着してみる。
色は店員の言ったとおり黒。柄もない全くの無地だ。保温性は高いようだが、意外と生地は薄い。技術の進歩だろう。
「どうだ？」
試着室のカーテンを開けてのほほんさんに見せてみる。どうだっていっても無地のセーターだから特に言うところもないと思うが、一応。
「うん、似合ってるよ～。無地ってところがすーくんっぽい～」
「俺っぽいってなんだよ。……まあ、似合ってるならこれにするかな。値段も手ごろだし」
カーテンを閉め、元の服に着替えて試着室を出る。このセーターは買うことにしよう。
「じゃあ、次行ってもよ～♪」
なぜか元気なのほほんさんと共に、このあと俺は何着か新しい服を選んでいった。

「ふぅ～、意外と収穫あったね～」
「そうだな。ほとんどはのほほんさんが選んだやつだけど」
約一時間後。服屋をあとにしながら、俺は片手に持った服が詰まった袋を軽く持ち上げる。一、二着くらいで十分だろうと思ってたけど、意外と買ったなぁ。一度にこんなたくさんの服買ったのははじめてだ。
「こんだけあれば当分は買わなくて済むな。じゃ、次は本屋行くか」

「あい～」
服屋で時間を使ったが、いよいよ本命の本屋だ。今回は何冊ぐらいいいのがあるのか楽しみだ。
のほほんさんと少し話しながら歩いていると本屋に到着。とりあえず、入り口付近の小説コーナーに足を踏み入れる。
今読んでる小説の最新刊は……出てないか。じゃあ、なんか面白そうな新刊は……お、これなんかおもしろそうだな。
「すーくんって、小説が好きなの～？」
「まあ、小説も好きだな。他にもＩＳ関連の本とか」
「へぇ～、漫画とか読まないの～？」
「ほとんど読まないな。俺は文章を読むのが好きだから」
漫画というのは、文章と言うよりは絵の方が中心だからな。活字を読むのが好きな俺にとっては少々手を出しづらい部類だ。
まあ、活字を延々と読み続けるのも疲れるから、たまに絵や表、グラフとかが出てきてくれる分には大歓迎だが。
「新刊はこんなところか。あとは、ＩＳ関連の本でよさそうな物があれば～っと」
小説コーナーから離れ、ＩＳ関連のコーナーに行く。そこで面白そうな本を二、三冊手に取り、そのままレジへと向かっていった。
「ふぇ～、いっぱい買うんだね～」
「読書が趣味だからな。本はたくさんあっても困らない」
会計を済ませ、本屋をあとにする。今回はいい収穫だったな。今から読むのが楽しみになってきた。
「っと、もう昼か。どうする？　昼飯食べてから帰るか？」
「そうだね～。じゃあ、すーくんがバイトしてるあの店に行こうよ～」
「了解」
自分のバイト先に客として行くのも妙な気分だが、あの店なら安心できる。もうすぐランチタイムだから、混む前に早く席を取ってしまおう。

右手に本の袋、左手に服の袋を持ち、俺はのほほんさんと一緒に小走りで店に向かって言った。

第二百六話　普通の客として（前書き）

第二百六話です

第二百六話　普通の客として

「いらっしゃいませ、って須藤君じゃない。バイト？」
店に入って早々、先輩が対応に来た。しかも結構親しい先輩だ。
「いえ、今日は普通の客として。ちょうど買い物に来たんで」
「なるほどねぇ。じゃあ、そっちが彼女？」
先輩が面白いものを見たかのようにのほほんさんに視線を向ける。
のほほんさんはいつものとおりのんびりとした笑顔で先輩の視線に応える。
「学校の友達ですよ。デートなんて一言も言ってませんって」
「ふ～ん、友達ねぇ。ま、いいか。とりあえず席案内するよ」
会話を切り上げ、席に案内してもらう。ぎりぎりランチタイム前に着いたからある程度は空いてるけど、少し経ったら途端に客が来るんだよな。
「のほほんさんは何にする？　俺はナポリタンにするけど」
「私も～」
メニューを開く前に決まってしまった。まあ、俺はここのメニューほとんど覚えてるし、のほほんさんも何度かここに来てるから今更だが。
店員を呼んで早速注文する。注文を取りにきた店員もさっきとは違うが見知った先輩だったので、二、三言話したあと、厨房の方に消えていった。
「いやー、やっぱり落ち着くな。ここは」
「そうだね～」
バイトで何度も足を運んでいるし、もともと雰囲気のいい店なので居心地がいい。対面に座っているのほほんさんもいつにもましてくつろいでいるようだ。
「お待たせいたしました。ナポリタンです」
と、店員がナポリタンを持ってくる。この店って注文してから来

るのが早いんだよな。
「いただきます」
「いただきま～す♪」
ナポリタンを食べる。何度も食べて慣れ親しんだ味。しかもこの店のナポリタンは他のところよりも美味いからお気に入りだ。
いったん会話を中断して、ナポリタンを食べることに専念する。朝もあまり食べないようにしてたからなんとかナポリタンを食べきることができた。そろそろ一食分くらい普通に食べられるようになれるといいんだけどな。
「って、のほほんさん食べるの早いな」
「えへへ～、ここのナポリタンはおいしいからね～」
俺がナポリタンを食べ終えたときには、すでにのほほんさんのナポリタンは無くなっており、のほほんさんはゆったりとお冷を飲んでいた。のほほんさんより遅いのか、俺は。と少し落ち込みながら俺もお冷を飲んで一休みする。
「で、これからどうする？　学園に戻るか？　周りも騒がしくなってきたし」
ランチタイムを向かえ、空席だった席も全て客が座っている。その人数に比例するようにさっきまでは静かだった店内も少しだけ騒がしくなってきた。
「そうだね～。いきたいところも特に無いし、帰ってゆっくりしよ～」
「決まりだな」
席を立ち、会計を済ます。次バイトできたら先輩たちにいろいろ言われる気がするが、やましいことはないから別に大丈夫だろう。
「おいしかったね～」
「何度食べても飽きないよな。まあ、毎日だったらわからないけど」
「ナポリタン以外も頼んだらいけるかもね～」
「味的には問題ないかもしれないけど、毎日スパゲッティっていうのもキツいと思うぞ？」

「う～ん、言われてみるとそうかも～」
いや、言われなくても気づいてくれ。のほほんさんらしいと言えばのほほんさんらしいけどさ。
そのあとも他愛の無いことを話しながら俺たちはＩＳ学園に帰っていった。

第二百七話　ばれてしまった秘密（前書き）

第二百七話です

第二百七話　ばれてしまった秘密

学園に着き、俺はのほほんさんに挨拶したあと遥香がいるはずの個別倉庫に向かう。予想以上に遅くなってしまったからな。さっさと行かないと。

「……って、いつまでついて来る気だよ」

「いつまででしょ～？」

振り返るとそこにはさっき別れたはずののほほんさん。

「質問を変えよう。何でついて来るんだ？」

「すーくんが何か隠し事をしているからで～す♪」

「俺は何も隠してなんかいない」

「嘘～。だって、いつものすーくんなら「いつまでついて来る気だ」～なんて言わないもん。私に見られたくないことでもあるんでしょ～？」

当然のように言うのほほんさん。いつもはのほほんとしているのに、たまに鋭いんだよな。

……はぁ。

「……負けたよ。ついて来てもいいが、他言無用だ。守れるか？」

「もっちろん♪　すーくんがそこまで言うんだったら、絶対誰にも言わな～い」

「わかった。じゃあ行くぞ」

「あい～」

「おかえりなさいませ、明弘様……と、布仏本音？」

個別倉庫のドアを開け、中に入るとすぐさま遥香が奥から出てきた。が、予想外の来客に驚いているようだ。

「やほ～、ハルちゃん」

「すまない遥香。バレた」
遥香に謝罪する。今回のは完全に俺のミスだ。早く向かおうとするあまりに、のほほんさんに感づかれてしまった。
「いえ、私は別に構いませんが……。大丈夫なのですか？」
「一応、誰にも言わないって約束したから大丈夫……だと思う。まあ、見つかったら見つかったで何とかするさ」
そう遥香に返して奥に進んでいく。遥香とのほほんさんも俺に続いて来る。
広い個別倉庫。その奥に広がる光景に、のほほんさんが感嘆の声を上げる。
「ふぇ～、すっご～い。これって全部二人で作ったの？」
「基礎は俺が作った。とはいっても、まだ未完成だけどな」
「すごいね～。でも、何で秘密にする必要なんてあるの～？」
「ここまで見られたからには説明するしかないか。詳しい話は追ってするが、簡単に言ってしまえば恥ずかしいのと、あとは……大切なやつらに生きてて欲しいから、だな」
俺と遥香だけの秘密。束さんにすら話していない、二人だけの秘密だ。いつかはばれるかもしれないとは思っていたが、よりによってのほほんさんとはな。
「まあ、立ってるのもなんだから、そこら辺に座るか」
俺の言葉で全員が床に座り込む。普通なら椅子でも出すのだが、こんな場所ではそれすらもない。
「じゃ、話すとするか。といっても、そんなに複雑な話じゃない。簡単な話だ――」

第二百八話　何かの始まり（前書き）

第二百八話です

第二百八話　何かの始まり

「ふぁぁっ、よく寝た」
翌日、ベッドから起きながらそんなことを呟く。
昨日はのほほんさんと買い物に行ったり、のほほんさんに秘密がばれたりといろいろあったからな。……どっちものほほんさん絡みだ。
まあ、のほほんさんも黙っててくれるらしいし、なんだか知らんが手伝いもしてくれるということだったので、俺としては結果オーライだな。のほほんさんって、雰囲気はのほほんとしてるけど、機械いじりとかの才能はあるからな。
「……ん？」
ふとそこで、部屋の机に何かが置かれているのに気付いた。
近寄って確認すると、箱だ。だいたい二十センチぐらいの大きさ。こんなの昨日はなかったはずだが。
「おはようございます。明弘様」
「ああ、おはよう、遥香。これ何だ？」
俺より先に起きて、顔を洗ってきたであろう遥香に尋ねてみる。もしかしたら遥香のものかもしれないし。
「私にもわかりません。私が起きたときにはすでにそこに置いてありました。明弘様のものかと思い、触らないでおきましたが」
「いや、俺のでもないけど……」
箱をよく見てみると、箱に張ってあるシールにはこう書かれていた。
『親愛なる二人へ　Sより』
「……滅茶苦茶怪しいんだが」
「怪しいですね。どうやってここに置いたのかも不明ですし」
箱を手にとって耳を当ててみる。……特に音はしないな。時限爆弾か何かだと思ったが、思い違いか。

「どうしますか？」
「一番無難なのは先生に持っていくことだが、確認してみるか。親愛なるっていってるから危ない物じゃないかもしれないし」
「わかりました。では私が――」
「いや、俺が開ける。少し離れてろ」
箱の包装を破り、開ける。その中には、一枚の紙が入っていた。
『お久しぶり♪　突然だけど、この前面白いゲームを思いついたから二人に参加してもらいたいんだ。ゲーム開始は明日。ルールとかはもう一枚の紙の方に書いてあるから確認してね☆　Tより』
書いてあるのは、これだけだった。箱に目を移すと、そこには十個のペンダントのような物が。その奥にはルールが書かれているであろうもう一枚の紙があった。
「S・T……篠ノ之束（Shinonobane）か」
どうしてイニシャルがバラバラだったのかはわからないが、そのおかげで差出人が誰なのかすぐわかった。このイニシャルでこんな妙なことをするのはあの人しかいない。
「どうかしましたか？」
距離をとっていた遥香が怪訝そうな表情で近付いてくる。その遥香に一枚目の紙を見せると、数秒と経たずに結論を出した。
「博士ですね」
「やっぱりそう思うか。まあ、イニシャルがなくてもあの人くらいだもんな。こんなことするの」
お久しぶりって、この前の襲撃は博士の仕業だったはずだが……まあ、深くは考えないようにしよう。束さんだし。
「……なんだが、大変なことになる予感しかしないな」
「……そうですね」
窓から見える天気は、俺たちの心情とは裏腹に雲一つない快晴だった。

第二百九話　忙しい朝（前書き）

第二百九話です

第二百九話　忙しい朝

『【ルール】
1．参加者は一緒に送っておいたペンダントをつけること。
2．ゲームは屋敷で行う。その屋敷の場所は裏を見てね。
3．ゲーム開始は十二時。制限時間は六時間。
4．制限時間内にペンダントが壊れた人は失格。
5．屋敷内でのＩＳの使用は不可。

参加者は自由だけど、いっくん、箒ちゃん、ちーちゃんには絶対にペンダントを渡しておいてね。アキくんとハルちゃんも絶対参加だよ♪』

「やっぱり束さんだ」
ルールが掲載されたもう一枚の紙を見て、俺はそう呟く。
いっくん、箒ちゃん、ちーちゃん。そんな名前を使うのは世界にただ一人、束さんだけだ。
これじゃあイニシャルにした意味ないと思うが、おそらくノリでやったのだろう。束さんだし。
「まあ、あの人ならここに置けたのもわかる……気がするしな」
「はい。博士ならやってもおかしくはないでしょう。それよりも……どういたしますか？」
「どうするも何も、絶対参加って書かれている以上、参加するしかないだろ。面倒くさいけど」
そう。いくら面倒くさいといっても、主催者はあの束さん。俺の命の恩人だ。参加しないわけにはいかないだろう。遥香だって、いろいろ束さんには世話になってるし。
「一夏と箒に電話で呼び出して説明しよう。織斑先生には、俺が直接行って話してくる」

「わかりました。あともう一つ、気になっていたのですが……」
「なんだ？」
「ゲーム開始は明日、と書かれていましたが、もしこれが昨日の夜に置かれていたら、明日というのは今日のことなのではないでしょうか？」
「……確かに」
遥香の言う通りだ。これが今日になってから置かれていたのなら、ゲームをやるのは明日だが、昨日の夜に置かれていたのなら、ゲームをやるのは今日ということになる。
可能性としては今日になってからだが、昨日のうちに置かれていた可能性もなくはない。これは少し急がないとな。
と、そこでルールの書かれていた紙の一番下に、面白いことが書いてあることに気付いた。
「これは、使えるな」
そう呟き、一夏の携帯に電話をかける。まだ朝だが、あいつのことだからきっと起きているだろう。
『……もしもし？』
数回のコールのあと、一夏が電話に出る。やっぱり起きてたか。
「もしもし、一夏。俺だ」
『おう明弘。こんな朝早くにどうしたんだ？』
「ちょっと話がある。三十分後に俺の部屋に来てくれ。いつもの五人も連れてな」
『ちょ、どういうことだ？　さっぱり話しについていけないんだが』
「世界で一番わからない人絡みの話だ。詳しくは俺の部屋で話す」
『……束さんか。わかった。三十分後だな？』
「頼んだぞ」
電話を切る。これで三十分後には一夏たちがくるはずだ。それにしても、世界で一番わからない人で通じるんだなぁ。
「じゃあ、俺は織斑先生に事情を説明してくる。三十分後には一夏たちが来るから、もし俺が遅くなるようだったら対応しててくれ」

「わかりました」
遥香の返事を聞いて、箱の中からペンダントと二枚の紙を掴んで部屋を出る。織斑先生なら職員室にいるだろう。
職員室に行くまでの間に、束さんに連絡とってみるかな。

第二百十話　アドバイス（前書き）

第二百十話です

第二百十話　アドバイス

「……なるほどな。確かにこういうのをやるのはあいつぐらいだろう」

「ここに来る前に本人に電話しましたが、やはり束さんが仕組んだことだそうです。説明に書いてある明日というのも、今日のことだと言っていました」

職員室。予想通りすでに仕事を始めていた織斑先生に紙を渡して説明すると、これまた予想通りの返答が返ってきた。

「まったく、なぜあいつはこんなくだらないことを計画するんだ？」

「束さんだからじゃないでしょうか。あ、それでこれが織斑先生のペンダントです。渡しておかないと、後々面倒になる気がするんで」

ポケットからペンダントを取り出し、織斑先生に渡す。すると織斑先生は一度受け取った次の瞬間、俺に返してきた。

「それはお前に渡しておく。もし、そのゲームの参加者が多いようなら、それも使え」

「それっていいんですか？」

「この紙に書かれているのは、『私に渡せ』ということだけだ。私が参加しなければならないとは書いていない。それに一度私の手に渡った時点でそれの所有権は私が持った。その私が誰かに譲渡する権利はあるはずだろう」

確かに、織斑先生の言う通りだ。紙には特に織斑先生たちが参加しなければならないということは記載されていない。

「なるほど。言われてみればそうですね。でも、俺と遥香は強制参加って書かれてるんで、その手は使えないんですよね」

「いや、ルールをよく読めば、他にも穴は見つかるかもしれんぞ。ルールに記載されていない限り、どんなことをしてもルール違反にはならない。もちろん、倫理的、社会的に不適切な行為は駄目だがな」

「肝に銘じておきます。では、織斑先生のペンダントは他の参加者に譲渡ということでいいんですね」
「ああ、もし束が何か言ってきたときは私に教えろ。私がなんとかする」
「わかりました。では失礼します」
そう告げて、職員室を出ようとすると、織斑先生が思い出したように俺に言った。
「それと、今回の参加者の名前を私の端末に送っておけ。そいつらの外出許可は発行しておいてやる」
「いいんですか？」
「あれに機嫌を損ねられると面倒だからな。ただし、終わったらすぐに帰って来い」
「了解しました」
行っていいぞ、という織斑先生の言葉に失礼しました、と応えて職員室をあとにする。
ルールの穴を見つけろ、か。確かにちょっとした裏技だな、これは。少し卑怯くさい気もするが、あの織斑先生のアドバイスだし、心に留めておこう。
腕時計を見ると、さっき電話してからもう三十分が経過しようとしている。おそらく一夏たちももう部屋に来ていることだろう。
「俺と遥香、一夏、箒。この四人を除くと、自主参加は多くて六人か。いつものメンバーで四人は埋まるだろうから、あと二人分空いてるな」
実際、いつものメンバーが全員暇で参加するという可能性は高くないが、それでもあの四人ならきっと参加するだろう。
なんたって、このゲームの賞品は、あいつらにとって素晴らしいものだろうからな。

第二百十一話　全員参加（前書き）

第二百十一話です

第二百十一話　全員参加

「さて、と。わざわざ皆に集まってもらった理由を話し……たいんだが、その前になんでのほほんさんと簪がいるんだ？」

職員室から戻ると、すでに俺が呼んだメンバーは勢揃いしていた。……呼んでいないメンバーが二名ほど混じっているが。

「簪とは箒たちを呼びに逝ってる途中で会ったんだよ。それで今日は特に用事はなくて暇だって言うから、一緒に来たってわけだ。のほほんさんの方は俺たちが来たときにはもういたけど」

「えへへ～、私も暇だったから来ちゃいました～♪」

「なるほどな。まあ、二人増えても構わないか。人数的にもちょうどピッタリだし」

あと二人、参加者の枠が余っていたから逆にちょうどいいかもしれない。あ、でも簪はともかくのほほんさんは参加するだろうか？

「ちょうどいいって、どういうことだよ？」

「それは今から説明する。とりあえず、この紙を見てくれ――」

そう言って、ポケットから紙を二枚取り出し、全員に見せる。そしてだいたいの説明をすると、一夏と箒がそれぞれため息をついた。

「束さんなら、こんなことぐらいやってもおかしくないな」

「同感だ」

「ん～っと、どういうことなのかな～？」

「篠ノ之束って……もしかしてＩＳの……」

一夏と箒は勝手に納得をするが、他の面々は余りよく理解できていないようだ。特に、臨海学校のときに束さんを直接見たことがある四人はまだしも、のほほんさんと簪は全く理解できていない。

「簪の想像通りだ。ＩＳの開発者である篠ノ之束さん、その人からの手紙だよ。さっき本人に電話して聞いてみたから間違いない」

「そうなのですか？」

「ああ、さっき職員室に行く途中にな」

遥香の言葉に答えながら考える。
まったく、あの人は何でこんなタイミングでこんなことを計画したのだろうか。この前の襲撃事件だって、束さんの仕業だろうに、このタイミングで。
「まあ、話の概要はその紙に記されている通りだ。それで、その紙に書かれているとおりに一夏と箒以外の皆には、参加するかどうかを聞きたくて集まってもらった」
「んー、僕は別にいいけど。皆は？」
まず最初にそう言ったのはシャルロット。そしてそれにラウラが続く。
「確かに、あの篠ノ之博士主催というのは興味深いが、こんなのに参加している時間があるのならＩＳの訓練をするべきだ」
「まっ、ラウラの意見はもっともだけど、セシリアはどうすんの？」
「そうですわね。わたくし、今日はショッピングに行こうと思っていまして」
「……私も、打鉄弐式を使いこなせなきゃ……」
「私は～、暇だし、参加しよっかな～」
口々にそんなことを言い始めるメンバー。今の会話を聞く限りじゃ、参加しそうなのはのほほんさんと、あとはシャルロットだけだ。
まあ、大体は予想していたけどな。
と、ここで俺は隠していた切り札を出してみる。
「ちなみに、このゲームを切り抜けたやつは『なんでも一つだけ願いを叶えてくれる』らしいぞ」
「「「「「参加！！！」」」」」
効果はてきめんだ。もともと乗り気だったのほほんさん以外の五人が一斉に参加を表明した。今の今まで『こんなの』呼ばわりしていたラウラですら。
この切り札を切れば、皆参加してくれるだろうな。程度には思っていたが、まさかここまですごいとは。
「じゃあ全員参加ってことでいいな？　今からペンダントを配るぞ

ー」

「ちょっとお待ちになって。ここにいる全員が参加をするのでしたら、参加者は十一人になって、一人多いのでは？」

セシリアがもっともな疑問を口にする。

「大丈夫だ。今職員室で織斑先生に説明してきたんだが、織斑先生は辞退。それによって一人分の枠が余り、ちょうどいい」

そう言いながら全員にペンダントを配っていく。このゲームの参加権であり、何人かにとっては自分の願いを叶えるための魔法のアイテムだ。

それにしても、このペンダント。三センチほどのガラスに紐が取り付けられているだけの質素なつくりだ。まあ、紐を通すところは金属だし、もしかしたら何か仕込まれてるかもしれないが。

「このガラスが割れたらお終いってことか。このペンダントは首につけるんだよな？」

「たぶんな。まあ、ルールには特に何もかかれてないからポケットとかに隠す手もあるけど。とりあえず、ゲーム開始は今日の十二時だ。三十分後に正門前に集合な」

そんな俺の言葉にそれぞれ返事をして八人は準備をするために部屋を出て行った。

「さて、と。俺たちも準備をするか」

「そうですね」

「なんか役に立ちそうなものあったっけかなぁ……」

そんなことを呟き、俺たちもそれぞれ準備に取り掛かった。

第二百十二話　ゲーム開始（前書き）

第二百十二話です

第二百十二話　ゲーム開始

三十分後。準備を整えてから全員で紙の裏に書かれていた地図の場所に向かう。

モノレールに乗ること数十分、そこから更に十数分ほど歩くと山の麓にたどり着く。目的の場所はもうすぐだな。

「確か、ここって――」

「ん、何かあるのか？　一夏」

なにやら一夏が呟いたのが気になり、聞いてみる。何がいわくつきの場所なのだろうか。

「いや、数年前にここら一帯で事故が起きたんだよ。なんでもここにあった施設で火災事故が起きたとかで……まあ、その施設はもっと山の方だったらしいけどな」

「こんな駅からも離れた不便なところに施設？　何でこんなところに」

「俺も知らない。一時期しか話題にならなかったしな」

「ふーん。まあいいか。それよりもあれか？」

更地の少し先に、ポツンと佇む屋敷らしきものが見えた。他にそれらしいものも見当たらないし、多分あれで間違いないだろう。

すぐ傍まで歩いていき、屋敷をよく見てみる。でかいな。

「これがゲームの会場なのか？」

「多分な。……鍵が開いてる。中に入るか？」

俺の問いに全員が頷くのを確認してから扉を開く。中に入ってみると、無駄に豪華そうだ。

飾りなどがついているわけではないが、無駄に広い。玄関から前、右、左と三方向に分かれている廊下も、前方に見える階段も幅が広い。四メートルはあるそうだな。

「まあまあの広さですわね」

セシリアがそんなことを言う。まあ、貴族のセシリアにとっては

普通のレベルなのだろう。
「……っと、見取り図みたいなのがあるぞ」
階段のすぐ脇の壁にそれらしいものが貼ってあるのを一夏が見つけ、近寄っていく。俺たちも一夏に続いてそれに近づき、見てみる。
「……三階建てみたいだな。各階に部屋が六つか」
「きっちりと方角に合わせてあるようですね。今入ってきた玄関がちょうど南に当たるようです」
その見取り図によると、この屋敷は三階建て。デジタル数字の８を横にしたような形の廊下があり、そして北東、北西、南東、南西、東、西にそれぞれ部屋が一つずつあるようだ。
「部屋の数は計十八か。外から見ても思ったが、やっぱり広いな。まあ、この見取り図が嘘の可能性もなくはないけど」
「そうだな。まだ十二時までは時間があるし、一通り探索して……いや、もう十一時五十分になるから止めておいたほうがいいかもな」
一夏が腕時計を見ながら言う。十分じゃあ、探索どころじゃない。
「では、十二時まではここで待機していたほうがいいだろうな」
「箒の言うとおりだな。っていうか、お前が手に持っているのってなんだ？」
「真剣、『緋宵』だ。あの人の考えたゲームでは何があるかわからないのでな」
そう言いながら箒はその手に持っていた物の布を取っていく。そこにあったのは、紛れもなく真剣。こいつ、姉のこと警戒しすぎだろ。まあ、あの人だから仕方がないかも知れんが。
「私も、いざというときのためにサバイバルナイフを携帯してきた」
「ラウラもかよ。仮にも高校生が銃刀法を違反してるぞ。学園内はともかく、外に持ってきちゃだめだろ」
一夏の言うとおりだ。ＩＳ学園はどこの国にも属さない国だから日本の銃刀法は適応されないかもしれないが、その外ではもちろん日本の法が適応される。なので学園内はともかく、外ではそういうのは持っていてはいけないのだが……まあ、いいか。こいつらはそ

れよりももっと危険な平気を持ってるしな。
と、そこまで考えたとき――巨大なアラーム音のようなものが屋敷に響き渡った。
「な、なんだ？」
「落ち着け一夏、今何時だ？」
「今？　今は……十二時ジャストだ」
ということは、今の音はゲーム開始の音だな。
さて、何が飛び出してくるのやら。

第二百十三話　化け物（前書き）

第二百十三話です

第二百十三話　化け物

ゲーム開始を告げるアラームが鳴り響き、全員が身構える。
階段の上、三方に伸びた廊下、それらに注意を向けていた俺たちは予想外の方向――玄関から聞こえた音に慌てて体を向ける。
開かれたドアから入ってきたのは、四本の足と獅子、山羊、龍の三つの頭を持った高さ二メートル弱ほどの奇怪な存在。
「……キマイラ……？」
思わず俺の口から零れた俺の呟きとほぼ同時に箒とラウラが迷うことなくそのキマイラに突撃していった。
その手にはそれぞれ日本刀とサバイバルナイフ。あいつら、あのキマイラを倒すつもりか。
「ふっ！」
「はっ！」
日本刀とサバイバルナイフが三つある頭のうち二つに直撃する。二人の全力攻撃にキマイラの動きが一瞬止まる。――しかし、次の瞬間、二人はキマイラの首に吹き飛ばされた。
二人とも難なく着地に成功するが、それに安心しているほど俺たちには余裕なんてあるはずもなかった。
「うわぁぁぁぁぁ！！！」
いきなり現れた恐ろしい存在に、俺たちは逃げるため、それぞれ思い思いの方向に走り出した。
俺も階段を駆け上り、少しでもキマイラから距離をとろうとする。三階につき、廊下を突っ走って適当な部屋に飛び込む。
バクバクいう心臓を押さえながら、気配を殺してキマイラが近くにいるかどうか音で確認する。すると、一つの足音が聞こえてきた。少しずつ大きくなってくる。近づいてきてるようだ。
「いけるか……？」
もしキマイラがこの部屋に入ってきたときのためにすぐ動ける体

勢を作っておく。そして、ドアが思いっきり開け放たれた。
「……一夏？」
「あ、明弘？　ぶ、無事だったのか？」
どうやら足音は一夏のものだったらしい。耳を澄ませてみるが、他に足音らしきものは聞こえない。逃げ切ったのか。
「ふぅ……。どうやら大丈夫みたいだな。それにしても、なんなんだよ、あの化け物は」
大分冷静にはなっているが、まだ動揺が収まっていない一夏の言葉。その一夏を落ち着かせるために、俺は言った。
「おおおお落ち着け。れれれれ冷静になるんだ。ここ、こういうときに冷静さを失ったやつが、ししし死んでいくんだぞ」
「まずお前が落ち着け」
一夏から鋭いツッコミが返ってきた。
「まあ、冗談はともかく、あれが今回の敵らしいな」
「冗談かよ。……なんなんだよ、あいつ。箒とラウラの攻撃がまるで効いてねえ」
「たぶん、束さんが作ったロボットだろうな。モデルはおそらく伝説上の生物『キマイラ』だ」
「マジかよ。あんなのどうすればいいんだって。次に見つかったらマジでやばいぞ」
「確かにな。人数が多ければ逃げ切れる確立は上がるが、二人だけじゃあ確立は二分の一。……仲間を集めるのが一番か」
「集めるってどうやって？」
一夏が尋ねてくる。しかし、その質問は意味のないものだ。
「地道に歩き回って探すしかない。キマイラに見つかる可能性もあるが、何もしないよりはマシだろう？」

第二百十四話　消失（前書き）

第二百十四話です

第二百十四話　消失

「さて……どうしようかね」
「あのキマイラに見つからないように仲間を集める、か。慎重に一部屋一部屋探していくしかないな」
隠れていた部屋から静かに出ながら、会話を交わす。
今いた部屋は三階の南東の部屋だ。テーブルとソファーしかない簡素な部屋だった。あの部屋じゃあキマイラから逃げられない。
今思えば、この廊下の広さもあのキマイラのためだったのだろう。まさか、あんなやつが出てくるとは思ってなかったから、考えつくはずがないが。
「でもさ、普通に考えてこのゲーム無理じゃないか？」
「確かにな。いくら三階建てで広い屋敷といっても、あんなキマイラが野放しにされてるんじゃ、逃げ切れるはずがない」
廊下の角の隠れ、向こうにキマイラがいないことを確認してから慎重に進む。とりあえず、東の部屋を見てみよう。
「……誰もいないな」
「ああ。隠れられそうなところもないし、この部屋は逃げ場所には使えない」
そういって、部屋のドアを閉める。その後、他の四つの部屋も確認したが、他のメンバーもキマイラも見当たらなかった。
「化け物がいないのはいいけど、他の皆はどこに行ったんだ？　まさかもうやられたりして……」
「それはないだろう。のほほんさんはともかく、他の七人がそう簡単にやられるとは思えない。たぶん、下の階にいるんだろう」
「いや、あの七人でもあの化け物相手は無理だろ」
「箒とラウラの攻撃も聞いてなかったしなぁ」
あんなのどうやって攻略すればいいって言うんだろうか？　メンバーの中で生身ではおそらく最高の攻撃力持っているだろう二人の

攻撃でも一瞬動きを止めるのが精一杯だった。俺たちではどうしようもないじゃないか。
「とりあえず、下に行ってみよう」
「ああ、そうだな」
慎重に、音を立てないように下の階へ下りていく。あのキマイラに音を感知するセンサーがあるのかどうかはわからないが、可能性がある以上、音を立てないに越したことはない。
「……あ、一夏、明弘っ。無事だったんだね」
「シャルロット！　……と、のほほんさん？」
階段を下りると、ちょうど階段を上ろうとしていたシャルロットとのほほんさんに遭遇した。二人とも無事なようだ。……のほほんさんは何か半分泣いてるけど。
「のほほんさん、どうしたんだ？」
「さっきのアレが怖かったみたい。二階の部屋まではなんとか行けたけど、そのあとは腰が抜けちゃって動けなかったんだって」
「すーくーん！　怖かったよ～！」
「大丈夫だ。安心しろ」
泣いているのほほんさんを宥める。そして、ある程度泣き止んだところでシャルロットが口を開いた。
「二階の部屋は全部見たけど、布仏さん以外には誰もいなかったよ」
「キマイラはいたか？」
「キマイラ？　ああ、アレのこと。それもいなかったよ。そっちは？」
「三階にも俺と明弘以外は誰もいなかった。キマイラもな」
二階にも三階にもここにいる四人以外誰もいない。キマイラもだ。そうなると――
「あとの六人とキマイラは一階にいるってことか？」
「たぶんね。でも、もう誰かやられてるかも……」
「どうする？　危険覚悟で一階に下りるか？　それとも、ここか三階で待機してるか？」

俺としては後者を選ぶ。メンバーの半分近くが集まっている以上、危険を冒してまで動き回るべきではない。それに、多すぎれば逆に動きが鈍くなって逃げ切れない可能性だって出てくる。

「あら？　一夏さん？」

と、そこで一階から誰かが上がってきたようだ。誰かというか……まあ、はっきり言ってセシリアだ。

「明弘さんにシャルロットさん、布仏さんも……。よかったですわ。ご無事だったのですね」

「セシリアもな。無事で何よりだ。……他の皆は？」

お互いの無事を喜び合ったあと、一夏がセシリアに質問する。

そう、さっきの考えが間違っていなければ、セシリアが一人なはずないのだ。ここにいない五人も一階にいるはすなのだから。

「他の方は一階にはわたくし以外、誰もいませんでしたわ。一応、全部の部屋は見て回りましたもの」

「本当か？　キマイラも？」

「キマイラ？　あの三つの頭を持ったアレでしたら、いませんでしたわ。だから言ったでしょう。わたくし以外誰もいませんでしたと」

「おいおい、待ってくれよ。二回にも三階にも俺たち以外誰もいなかったんだぜ？　おかしいじゃねえか」

「……俺たちと入れ違いになったか、それとも……あいつらの身に何かあったとしか考えられないな」

もし入り違いになったとしても、五人全員が入り違いになったとは考えづらい。入り違いになるとしたら、俺たちとほぼ同じ速度で、俺たちと同じ方向に動かなければならないはず。

となると、後者の方が有力になってくる。なにせ、このゲームの主催者はあの束さん。何をしでかしてもおかしくはない。

「だが、キマイラもいないというのはラッキーだ。油断はできないが、今のうちにもう一度五人全員で屋敷を探索したほうがいいな」

「わたくしも賛成ですわ。再確認するに越したことはありませんから」

「僕も。もし、本当にキマイラがいないとしたら、精神的にも余裕ができるし」
「じゃあ、賛成多数で決まりだな。一夏とのほほんさんもいいか？」
「ああ」
「ぐすっ……あい～……」
「大丈夫だって」
まだかすかに泣いているのほほんさんを宥めつつ、俺たちは五人で行動を開始した。

第二百十五話　状況整理（前書き）

第二百十五話です

第二百十五話　状況整理

「……マジでいねえぞ。……他の五人も、キマイラも」
一階から順番に丁寧に探してみたが、本当に他の五人とキマイラの姿は完全に消失していた。もちろん、入り違いにならないように探すときは二手に分かれて。それでも、五人とキマイラを見つけることはできなかった。
ついでに、玄関には鍵がかかっていて、とてもじゃないが外に出ることはできない。それに、屋敷中のどこを探しても、窓が一つも見当たらなかった。完全に閉じ込められたということらしい。
「やっぱり、五人の身に何かあったみたいだな」
とりあえず、二階西の部屋で状況を整理する。
「でも、何かって……何？」
「そこまではわからん。これは俺の想像だが、この屋敷は束さんが作ったものだと思う」
「束さんが作った？」
「ああ。確か、ここって数年前に事故が起きたんだよな？」
「そうだけど、それがどうしたんだ？」
「その事故が起きたのって、何年前か覚えてるか？」
俺の質問に、一夏は数秒考えたのち、口を開く。
「五年前のはずだぜ。昔のことだから言い切れないけど」
「なるほどな。じゃあ、この屋敷は五年前よりもあとに建てられた可能性が高くなる」
「そうだな。ここら一帯で事故が起きたのなら、この屋敷も巻き込まれているだろうし」
「更に言えば、この屋敷は数日前、長くても一週間ぐらい前に建てられた可能性がある。この屋敷の外見は、傷どころか汚れすらもついていなかったからな」
「あ、それは僕も思ったよ。この屋敷、汚れとかまったくないな、

って」
「わたくしもですわ。数日前に建てられたとは、考え付きもしませんでしたが」
シャルロットとセシリアも俺と同じことを考えていたようだ。さすが代表候補生。細かいところに目が行くな。
「そして、こんなところに屋敷を建てようなんて、普通の人間は思わないはず。思うとすれば、金持ちが別荘として建てたか、普通じゃない人間が建てたかのどちらかだ。セシリア、お前は別荘を建てるとき、こんなところに建てようなんて思うか」
「いいえ。建てるとすれば、もっと自然に囲まれたところか、海の近くにしますわ」
「そう。セシリアの言うとおり、別荘を建てるのなら山の中か、海の近くにするはずだ。こんな場所に建てようとは思わない。ということは――」
「ということは～、普通じゃない人がたてたってことだ～」
のほほんさんが俺が続けようとした言葉を言う。自分は台詞をとられたが、まあいいか。
「そうなると、自然と束さんが建てた可能性が高くなる。束さんが建てたのなら、この屋敷にトラップがあってもおかしくない」
「確かに、あの束さんだからなぁ」
「じゃあ～、あのキマイラはどこにいったの～？　あれもわなにかかっちゃったとか～？」
「それはないだろうな。あのキマイラも多分、束さんが作ったロボットだ。それが自ら罠に嵌まるとは思えない。よくわからないが、あのキマイラはずっと屋敷内をうろついているのではなく、時間経過か何かでたびたび出現するんだろう。そうでなければ、六時間も逃げ切れるはずがない」
無茶苦茶なことをする束さんだが、そこまで無理なゲームはしないだろう。特に、妹である箒とかを参加させたこのゲームでは。
「じゃあ、キマイラが出てくるまで、下手に動き回らないほうがい

いかもね。無駄な体力は消費せずに体力を温存して――」
「待てシャルロット。もう一つ、皆に話がある」
シャルロットの意見を遮って言った俺の一言に、全員の視線が俺に集中する。
「なんだよ、明弘。もう一つの話って」
「そう慌てんな。まだ確証はないが……このゲームを制限時間内にクリアできる可能性だ」

第二百十六話　ルールの穴（前書き）

第二百十六話です

第二百十六話　ルールの穴

「何だよ、明弘。その可能性って」
「それを今から説明してやる。……まず、このゲームのルールは覚えているか？」
俺の問いかけにのほほんさんを除く三人が頷く。のほほんさんだけは、必死に思い出そうとしてるみたいだな。そこまで覚えづらいルールでもないだろうに。
仕方がないのでポケットからルールの書かれた紙を取り出し、皆に見えるところにおく。
『1．参加者は一緒に送っておいたペンダントをつけること。
2．ゲームは屋敷で行う。その屋敷の場所は裏を見てね。
3．ゲーム開始は十二時。制限時間は六時間。
4．制限時間内にペンダントが壊れた人は失格。
5．屋敷内でのＩＳの使用は不可。』
「この五つだ。一見、何てことないルールだが、実は穴があるんだよ」
「穴？」
四人が首をかしげる。まあ、いきなりこんなこと言っても、すぐにわかるわけないか。
「詳しく言えば、2と5のルールでの穴だな。よく考えてみろ。『このゲームは屋敷で行い、屋敷内でのＩＳの使用は不可』。このルールの穴を、よく考えろ」
四人がそれぞれ考えに入る。俺は、もしキマイラが出てきたときのために周りを警戒しておく。
そして数十秒の沈黙のあと、一夏がポツリと呟いた。
「……屋敷の外なら、ＩＳが使える。……ってことか？」
「ご名答。一夏の言うとおりだ。屋敷の外に出てしまえば、ＩＳを使ってもかまわない。あのキマイラは強いが、ＩＳなら倒せるはず

だ」
「ちょっとお待ちになって。確かに屋敷の外ならＩＳを使えるでしょうけど、２のルールには『ゲームは屋敷で行う』と書いてあります。屋敷から出ればこちらのルールに反することになりますわよ」
「屋敷から出てはいけないとは書いていない。単に屋敷で行うと書かれているだけだ。屋敷の周りならグレーゾーン――ルール違反とは言えない」
セシリアの意見に対して、前もって考えていた返しを言う。そう、このゲームは屋敷で行うのであって、屋敷から出てはいけないと明記されているわけではない。
まさか織斑先生に教わったことをこんなに早く使うことになるとは思わなかった。先生には感謝だ。
「それに、もし束さんが駄目だと思っているなら、たぶんこっちに何らかの手段で接触してくると思うぞ。この屋敷のいたるところに隠しカメラと盗聴器があるだろうから」
「え！？　マジかよ？」
「あくまで想像だが、可能性は高いと思うぞ。自分で考えたゲームだ。あの人が見てるのは普通のことだろ」
少なくとも、各部屋に一台ずつはカメラと盗聴器は置かれているはずだ。あの人のことだから、下手すれば何台もセットしている可能性もあるが。
「とりあえず、最初の話が当たっていたら、この屋敷から脱出する方法があるはずだ。キマイラと遭遇する危険もあるが、そんなのはこの屋敷のどこにいたってアレが出てくる危険はある。それなら少しでも屋敷から出る方法を探したほうがいいと、俺は提案する」
まあ、そんなのゴメンだって言うのならそれでもいいがな。と続けると、まず最初にのほほんさんが名乗りを上げた。
「私も、すーくんの意見にさんせ～い。こんなところ早く出たいもん」
そして、そんなのほほんさんの言葉に触発されるように、一夏た

ちも口を開いた。
「別にいいぜ。こんなところに長居するよりは少しでも前に進んだ方がいいだろうしな」
「わたくしもですわ。あんなのが出てくる屋敷なんて、早くお別れしたいですし」
「僕も賛成。こそこそ隠れているより、積極的に行った方が確かにいいかもしれない」
そんな皆の言葉を聴いて、俺は思わず口元を歪ませる。
まさか、全員が賛成するとはな。少なくとも一人くらいは反対すると思ったが、四人ともあのキマイラがよほど嫌だったのか。
……いや、それだけじゃないな。皆、やる気に満ちている。キマイラから逃れるためだけじゃなく、このゲームをクリアするためのやる気に。
「じゃあ、決まりだ。屋敷のいたるところを探索して、手がかりを見つけるぞ」
相手はあの天才科学者、束さん。普通にやったら間違いなく負けるだろう。
でも、俺たちは五人だ。もしかしたら束さんに勝てるかもしれない。
天才に、凡人の底力を見せてやる。

第二百十七話　姉が楽しみ　妹が歩く（前書き）

第二百十七話です

第二百十七話　姉が楽しみ　妹が歩く

「さすがアキくん。一時間もしないうちによく気づいたねー♪」
何十――もしかしたら百を超えるかもしれない数のモニターを眺めながら、束が呟く。
明弘の予想通り、束はモニターで全てを見ていた。――ゲームが開始される前から。
「アキくんかハルちゃんなら気づくだろうと思ってたけど、最初はアキくんか」
あのルールに隠されていた穴。それに束自身も気づいていたのだ。いや、気づいていたのではなく、束はわざと穴のあるルールを考え出した。
このゲームはただ単に屋敷の中を逃げ回るというのではなく、いかにルールの穴を突いていくかというゲームなのだ。そしてそのために用意された穴のあるルール。
いうならば、完全な不完全性。それに気づき、行動に移せるか。それがこのゲームの本質。
「それにしても、最初で誰も脱落しなかったのは予想外だったなぁ。十人もいたから一人くらいはやられると思ってたのに」
予想外といいながら、束は大して気にした風でもなくモニターを満遍なく眺めていく。そして、下のほうにあるモニターたちに視線を集中させた。
「まあ、半分は早速トラップに引っかかってくれたからいいけどね♪　しかも、上にはいっくんとアキくん。下には箒ちゃんとハルちゃん。綺麗なくらいわかれてくれたねー。ちーちゃんは参加してくれなかったみたいだけど、これなら十分楽しめそうだよ☆」

「……一体、ここは……どこだ？」

暗い闇の中に、箒の声が響き渡る。かれこれ三回は言った言葉だが、箒にとってこの疑問が今一番の問題だった。

「あの化け物から逃れるために、適当な部屋に入った途端、落とし穴に落ちて……そうなると、やはりここはあの屋敷の地下ということか？」

そう、屋敷から姿を消した箒――それに、鈴音、ラウラ、遥香、簪の五人は、明弘たちと同じくキマイラから逃れるために適当な部屋に入った。唯一明弘たちと違かったのは、箒たちの入った部屋には落とし穴が仕掛けられていたということだけ。

その落とし穴はちょうど部屋のドアのところに仕掛けられていて、部屋に入った瞬間、足場をなくしてそのまま落ちていくという。キマイラに追いかけられて注意力が落ちていた状態では、非常に回避の難しいトラップだった。

しかも、その落とし穴はゲーム開始から十分だけ作動するため、そのあとに明弘たちが探索するために部屋に入っても、作動することはなかった。

「幸い、落ちたところにはクッションがあったから助かったが……あの人は、毎回突拍子もないことを……」

箒は、この仕掛けが束の仕業だということを一瞬で見抜いていた。というよりも、それしか考えられなかったといった方が正しいだろうか。まあ、どちらにせよ、事実が変わることはないが。

「どこかに、上に戻る手段があるはずだ。……まだ、私のペンダントは壊れていない。まだ、失格にはなっていないはずだ」

そう自分に言い聞かせて歩を進めていく箒。その目は、まだ諦めてはいない。

何がそこまで彼女を突き動かしているのだろうか？　それはもちろん、このゲームの賞品に他ならない。

このゲームの賞品は『何でも願いを叶えてくれる』。箒の願いはもちろん、一夏と付き合うことだ。他人の力で一夏と付き合うとい

うのに、最初は箒も戸惑っていた。しかし、この過酷なゲームを乗り越えれば、一夏も自分のことをすごいと言ってくれるだろう。そしてそのまま……と、まあ、それくらい想像、もとい妄想しても年頃の少女なら許されるだろう。

実際は、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪も同じようなことを考えていたのだが……まあ、それは置いておこう。

「絶対にクリアしてみせる……！」

そんな決意を胸に、箒は力強く歩を進めて行った。

第二百十八話　願い事（前書き）

第二百十八話です

第二百十八話　願い事

「そういえばさぁ、皆は何でこのゲームに参加したんだ？」
何か屋敷を脱出する手がかりがないかと、部屋を捜索していると、一夏がいきなりそんなことを訊いてきた。
「だって、俺と箒、明弘、遥香は強制参加だったけど、他の皆は違かっただろ？　それに、最初は乗り気じゃなかったみたいなのに」
「わたしは～、おもしろそうだったから～♪」
「のほほんさんはそうだろうと思った。最初から乗り気だったしな」
のほほんさんは即答するが、セシリアとシャルロットが顔を赤くして俯いてしまう。
「やっぱり、このゲームの賞品が目当てなのか？　明弘が賞品の話を出した途端、参加するって言ってたし」
「え、えっと……それは……」
「まあ、そうなの……ですけれど……」
こいつらは多分、一夏と付き合いたいとか、そういう願いを叶えてもらいたいのだろう。だいたい予想はついてたけどな。
「それは人それぞれだろ。一夏こそ、何か願いはないのか？」
二人が赤面して固まってしまったので、話題を少し変える。といっても、賞品の話には変わりないが。
「俺は……そうだな。強くなりたい、とか？」
「強く、ねぇ。普通の願い事だな」
「うっせ」
「まあ、普通は普通でいいんじゃないか？　のほほんさんは？」
「私はねぇ、甘いものい～っぱい食べたいな～」
自分で言ったことを想像してみたのか、すごく幸せそうな顔になるのほほんさん。見ていてすごく癒される。
今度、お菓子をたくさん作ってあげようかな。と、そんなことを考えていると、一夏が俺に話しかけてきた。

「お前はどうなんだよ。願いことなんてなさそうな気がするけど」
「馬鹿言え。俺にだって願い事くらいあるさ」
「じゃあ、なんだよ？」
そう訊かれて思わず回答に窮してしまう。……俺の願い事か。
強くなりたい。……これじゃあ、一夏と一緒だ。何より、願いを叶えてくれるのがあの束さんでは、人体改造とかされそうで怖い。
これは却下だな。
となると、なんだろうな。いまいち思いつかない。
……願い事と考えず、何か欲しいものと考えてみるか。えっと、俺が欲しいもの欲しいもの――
「そうだ。本棚が欲しい」
「本棚？」
一夏が怪訝そうな口調で聞き返してくる。なんだ、俺がせっかく考えたというのにその反応は。
「ちょうど部屋にある本棚がいっぱいになってきたんだよ。昨日出かけたときに買ってくるの忘れてさ」
「すーくんらしいね～」
「……俺たち三人の中で一番どうでもいい願いじゃないか？」
いつの間にか現実に戻ってきていたのほほんさんと一夏がそれぞれそんなことを言う。
「まあ、俺たちは賞品目当てで参加したわけじゃないから、そこまで考える必要はないかもしれないな。いざとなったら、誰かに譲渡するって言うのもありだろうし」
「それっていいのか？」
「一度自分のものになったのなら、その所有権は自分が持つ。それならば、誰かにそれを譲渡する権利も自分が持つはずだ。……織斑先生の言葉だ」
「ああ、なるほど。確かに、そうだな」
「え～、どういうこと～？」
のほほんさんが頭に疑問符を浮かべて訊いてくる。……まさか、

今のがわからなかったとはな。
「ある物が自分の物になったのなら、その物に関する権利は全て自分に与えられる。だからその物を誰かにあげることも自分の自由。ってことだ」
「ん～、大体はわかった気がする～」
「大体でも何となくでもわかったのならいいぞ。暗記するように覚えて忘れないようにするのが一番大事だ」
「あい～」
なんかもう俺たち三人で話が進んでいくな。セシリアとシャルロットはまだ固まったままだし。……キマイラが出てきたらどうするのだろうか。
とりあえず、一夏にキマイラが出てきたとき、対処できるように二人をまかせ、俺たちは再び部屋の探索をするのだった。

第二百十九話　地下の二組（前書き）

第二百十九話

第二百十九話　地下の二組

「お、何かあるみたいだぞ」
二階南西の部屋で一夏が部屋の隅にある棚の裏を覗き込みながら言った。
「マジか？　何だよ」
「暗いからよくわからないけど、壁に何かあるみたいだぞ」
「棚動かしてみるか？」
「おう」
一夏と二人で棚を動かしていくと、棚で隠れていたところの壁に何やら小さな扉のようなものがついていた。
金属でできたその扉には、小さなダイヤルが四つあり、その脇に開けるための取っ手が付いていた。
「金庫……みたいだね」
「そうだね～」
「何か屋敷を脱出するのに必要なものが入っているとは思いますが……」
いつの間にか近くに来ていた三人がそれぞれそんなことを言う。
「肝心のパスワードがわからない以上、開けることは難しいな」
「四ケタだから一万通りか。デタラメにやってもまず当たらないだろうな」
たとえ百回やったとしても、確率的に当たる可能性は一パーセント。とはいっても、一万通りも試していたら日が暮れてしまう。それでは俺たちが屋敷を脱出する意味がなくなる。
「他の部屋で、何か手がかりを探すしかないな」
「だな。とりあえず、二階で残ってる部屋は西とここ以外の四部屋か。そこを探してみようぜ」
「そうするか。一応メモしておくな」
ポケットからメモ帳を取り出して、二階南西・金庫、とメモを取

っておく。これでもし忘れても大丈夫だな。

「まったく、どこまで続いているのだ……」

暗い通路の中を歩き続けていた箒がぼやく。身体的な疲労はないようだが、出口があるかわからない道を歩き続けるというのは精神的に辛いものがある。

通路はいくつにも枝分けれしていて、迷路のような構造になっているようだ。実際、箒自身も何度も二手に分かれているところを通ってきた。

もしかして、出られないのだろうか。そんな疑念が箒の頭をよぎる。

しかし、そこはさすが武士の心を持った人間というべきか、精神的疲労に負けずただひたすらに歩いていく箒。

……カツンッ……。

不意に離れたところから、誰かの足音のようなものが聞こえた。聞こえた方向は——おそらく、前方。

「……っ！」

自分以外に誰かいるかもしれない。そんな希望を抱いて、箒は駆け出した。

「誰かいるのかっ！？」

そう言いながら走る箒。そして、二股に分かれた通路の左側から誰かが現れた。

暗くてよくわからないが、小柄な体型。そして肩の辺りまで伸びた黒い髪が、かすかに揺れる。

「……遥香……か？」

「……篠ノ之箒ですか？　……あなたもここに落ちていたのですね」

箒の小さな呟きに、少女——遥香がいつもの冷静な声で返答した。

――それとちょうど同じころ。
「あれ？　ラウラ？　それに更識も」
「……誰かと思えばお前たちか。二人もここに落ちていたのだな」
「……」
地下の別な場所で、鈴音とラウラ、そして簪も合流していた。

第二百二十話　パスワード（前書き）

第二百二十話です

第二百二十話　パスワード

「……」

「……」

箒と遥香が、暗い通路を歩いていく。お互いに一言もしゃべらず、ただひたすらに歩を進めていく。

「……遥香？」

「……なんでもしょうか。経路についてでしたら、手がかりが何もありませんので、勘ですが」

「そ、そうか……」

遥香の淡白な返答に、箒はそれ以上何も言えなくなる。遥香はそんな箒に目もくれず、ただ今までと同じように通路を進み続ける。

少し進んでいくと、通路の先にドアがあるのが暗い闇の中でかすかに見えた。そのドアに箒はかすかにその顔にここから出られるかもしれないという喜びを浮かべて、遥香はまったく表情を変えずに近づいていく。

「このドアは……」

「よくわかりませんが、何かあると思ってよさそうですね。パスワードが必要なようですが」

遥香の言うとおり、ドアのノブの上に０から９までのボタンと何も書かれていない少し大きめのエンターボタン、小さなモニターのようなものが備え付けられていた。

遥香が試しに０のボタンを何度か数字を入力してみると、数字は三ケタまでしかモニターに表示されず、エンターを押すと、モニターにＮＧの文字が浮かび上がった。

「三ケタのパスワードみたいですね。二ケタや一ケタの場合も含めると全部で１１１０通り、今一通り試したので残り１１０９通りですね。少し時間はかかりますが、なんとかなるでしょう」

「本当か？」

遥香の言葉に箒は少し嬉しそうに反応する。
「ここで嘘をつく必要があるのですか。1通り入力するのに一秒かかるとしても、かかる時間は１１０９秒。二十分もかかりません」
さも当然のように言う遥香。しかし、それは1通りを入力するのに一秒かかった場合のことであり、普通の人間ならばもっと時間はかかる。
それでも、遥香はそれができる。できて当然という口調で、入力を開始した。
遥香の右手の指だけがせわしなく動き、ボタンを恐るべき速さで押していく。しかし、遥香の表情はいつもと変わらず、平静としていた。
モニターに数字が出たと思えば、ＮＧの文字が現れ、また新たな数字が出てくる。その切り替わる間隔は確かに一秒を切っており、さきほどの遥香の言葉が嘘ではないということが証明されている。
「……速い」
「静かにしていてください。入力した数字を忘れてしまいます。私はそこまで記憶力はよくありませんので」
箒が漏らした呟きに遥香は冷淡に返す。そう言っている間も、右手の指は動き続けている。
一体、何通りの数字を入力したのだろうか。作業を開始して、十分ほどで、驚くことにモニターにはＯＫの文字が浮かび上がり、ガチャッという鍵の開いたような音が通路に響いた。
「開いたようですね。予想していた時間の半分ほどで済んだようで何よりです」
「す、すごいな。これは頼もしい」
あまりのすごさに少しだけ興奮したように箒が言う。しかし、それに対する遥香の反応は厳しいものだった。
「そうですか。一つ言っておきますが、本来ならば、あなたと行動を共にする理由はありません。ただ、明弘様がここにいればきっと一緒に行動するというだろうと、そう思ったまでです」

「そ、そうか……」
「私は明弘様以外の人と、そこまで関わるつもりはありません。あなたたちは明弘様と親しいので特別に関わっていますが。……早く行きますよ」
「わ、わかった」
開いたドアの向こうに進んでいく遥香を、箒は慌てて追いかけていった。

第二百二十一話　拭えない違和感（前書き）

第二百二十一話です

第二百二十一話　拭えない違和感

「さて、二回は何もなかったな。南西の部屋以外は」
「だな。物の裏とかも探したけど、何もなかったな～」
二階の部屋を全て探索し終えた俺たちは、最後に探索した北西の部屋でそんな話をしていた。
「まあ、そう簡単に手がかりも見つからないってことだろうね」
「何となく予想はしてたけどなー。どうする？　他の階に行くか？」
「もちろんだ。ただ、どっちに行く？　一階か？　三階か？」
「三階でいいんじゃないか？　どっちがいいかなんてわからないし」
「確かにな」
どっちがいいかわからない以上、どっちを先に探索しても変わらないだろう。
「そういえば、皆は一階の見取り図を見て、どう思った？」
「何だよ明弘、いきなり」
「いや、ちょっと違和感を感じたんだよ。何かはわからないけど」
一階の階段のところにあった見取り図。屋敷を探索して、あの見取り図の内容が間違っていないことは確認できたが、それでも何か違和感を拭えない。
といっても、特に妙なことは書かれていなかったし……。この違和感は何なんだろうか。
「俺は特に何も感じなかったぞ」
「わたくしもです」
「僕も」
「私も～」
「そうか？　じゃあ、俺の勘違いかもな」
全員に否定されてしまっては、俺のほうが勘違いしている可能性が高いだろう。見取り図を見たのは屋敷を探索する前だったし、あの見取り図が嘘かもしれないと疑っていたからかもしれない。

「……そろそろ三階に行くか。そのあとに一階を探索し――」
そう言いながら俺が一番ドアに近かったのでドアを開けて、外に出ようとする。。すると、その向こうの六つの目と視線がぶつかった。
といっても、消えた五人のうちの誰かではない。まるで、野生の動物のような凶暴性を秘めたその目は――キマイラ。
「っ！？」
反射的にドアを閉める。まあ、その行為自体は別に問題はなかったかもしれないが……何をトチ狂ったのか、俺は自分が廊下に出た状態でドアを閉めてしまっていた。必然的に、俺はドアを背にキマイラと対面するような形になってしまう。
……俺、何してるんだろうか。
「おーい明弘。どうしたんだ？」
ドアの向こうから一夏の声が聞こえる。そして、次の瞬間にはドアが開けられる。
「馬鹿！　開けるんじゃ――」
俺の叫びもむなしく、ドアは完全に開けられてしまった。ドアは部屋側からすると引き戸なので、俺がドアの前にいようが関係ない。
「っ！？　キマイラ！？」
「くそがっ！！」
一瞬一夏たちに向けられそうになったキマイラの注意を逸らすべく、俺は頭のうちの一つに蹴りを入れる。すると案の定、一度は一夏たちに向けられそうになった視線が俺に戻ってくる。
ついでにもう一回蹴りを食らわせて一気に廊下を駆ける。……来るか……？
注意を向けていた俺が急に走り出したことで、キマイラは俺を追いかけてきた。機械でできてるだろうから、反応するかわからなかったけど、うまくいった。
「一夏っ！　三階に行け！」
「お、おい！　明弘！」

一夏の叫びに答える暇もなく、追いかけてきたキマイラの前足が俺を襲う。なんとか跳んで回避したが、食らったらと思うと怖い。

だが、追撃が来る前に体勢を整えて廊下を全速力で走る。できるだけ一夏たちから離れるように。

犠牲になるとしても、それは一人で十分だろう？

第二百二十二話　囮（前書き）

第二百二十二話です

第二百二十二話　囮

一夏たちを助けるために一人、キマイラを引き付ける囮役を引き受けた俺は一夏たちから少しでも離れるため、一階を爆走していた。

「……そ、そろそろ……疲れて……きたんだが……」

かれこれ、十分ぐらいは全力疾走している。もちろん、それだけでキマイラから逃げているわけではなく、たまに隠れながら逃げていたが、それでも疲れるものは疲れる。

十分間の全力疾走に加えて、後ろからは三つの頭を持った化け物が追いかけてくるのだ。身体的にも精神的にもキツいものがある。

近くの部屋に飛び込む。なんだか無我夢中で走ってるせいで、どこの部屋かもわからないぞ。

「はぁ……はぁ……」

最初は、部屋に入ってしまえば大丈夫だと思っていた。獣の足ではドアを開けることができないだろうと。

しかし、それは間違いだった。実際に、何度も部屋に入って難を逃れようとしたが、全て失敗している。理屈はわからんが、あのキマイラは部屋のドアを開けることができるらしい。開けている姿を直接見たわけではないが、何度も部屋のドアは開けられてるし。……ほら、今みたいに。

ドアが開き、その向こうからキマイラがゆっくりと入ってくる。今までは何とか切り抜けてこれたが、そろそろ体力の限界だ。逃げ切れないだろう。

「くそっ……！」

ジリジリと歩み寄ってくるキマイラから視線を外さずに、俺もゆっくりと後退していく。たぶん、一瞬でも視線を外したら……やられる。

そして、ついに部屋の端にある本棚のところまで追い詰められてしまった。もうこれ以上後ろには下がれない。

「グルル……」
キマイラがそんな声を出す。本物のライオンみたいな鳴き声だ。
束さん、どこまでリアリティを追及したんですか。
「ここまでか……」
キマイラから視線を外さずに呟く。この場には俺とキマイラしかいないが、たぶん束さんはカメラとかで見ているだろう。
両の手のひらに本の感触を感じる。もう本も読めなくなるのかもなぁ、なんて演技でもないことを考えていると――体重がかかった右手で本を奥に押し込んでしまった。
「？」
すると、何かが動くような音がして本棚の隣の壁の一部が動き、人一人通れそうな穴が現れた。
その穴に反射的に視線を向けてしまった瞬間、キマイラが襲い掛かってきた。俺は一か八か、現れた穴に飛び込む。
キマイラも俺の追いかけて穴に入ろうとするが、体が大きくて入ることができない。せいぜい頭が一つ入ったくらいだ。
「……ナイスだ。俺」
キマイラはなお入ってこようとするが、やはり穴の大きさに対して体が大きすぎて入れない。体の大きさが仇になったな。
「ざまあみろ」
今まで追い掛け回されたぶんの仕返しにそう言い放ち、キマイラの頭をはたいてやる。
キマイラは数分間、入ってこようとしたが、無理だとわかるとあきらめて部屋を出て行った。機械だからすぐに入れないってわかるはずだが……リアリティを追求したからだろう。
キマイラが出て行くころには俺も幾分は体力も戻っていて、軽く走ることくらいならできるくらいには戻っていた。
「この穴……どこかにつながっているのか？」
キマイラが廊下にいる可能性がある以上、この穴の先を探索してみたほうがいいだろう。もしかしたら外につながっているかもしれ

ないし。
そう思った俺は一人、暗い穴の奥に歩いていった。

第二百二十三話　敵か味方か（前書き）

第二百二十三話です

第二百二十三話　敵か味方か

「にしても暗いな……。懐中電灯でも持って来ればよかった」
薄暗い通路を進みながら、思わずぼやく。
とはいえ、何も見えないというほど暗いというわけでもなく、一応数メートル先までは何とか見えるが、それでも見えにくいことは見えにくい。
「そういえば、一夏たち大丈夫だろうか」
十分は時間を稼いだから大丈夫だとは思うが、それでもちょっと心配だ。まあ、俺も絶対に安全というわけでもないが。
キマイラの脅威はなくなったが、他に何も来ないという保障はない。何せ、相手はあの束さん。何をしでかしてくるか、まったく掴めない。
とはいえ、この隠し通路を見つけられたのは僥倖だったかもしれない。二階の金庫以外に何も手がかりが見つからなかったことから考えれば、これは大きな進展……だろう。
「まさか……この通路自体がトラップだった……とかはないよな……？」
そんな疑問に答える人間は誰もいない。俺以外に誰もいないから当たり前だが。
まあ、もしトラップだったらそのときだ。今更引き返せないだろう。何か、後ろから本棚が動いたような音が聞こえたような気がしたが、気のせいのはずだ。だって、あの穴が閉まったら俺外に出られないぞ。
「あれ？　やっぱりトラップだったんじゃね？」
急にものすごく不安になってきた。俺、生きて外に出られるのだろうか……。
……カ……ツンッ……。
「？」

今、かすかにだけど遠くから足音みたいなのが聞こえてきたような……。空耳かもしれないが……もし本当だったら……。どうしようか。

可能性は二つ。一つは消息不明だった五人のうちの誰か、もしくは五人全員。もう一つは、キマイラのような、いわゆる敵キャラ。

前者ならかなり喜ばしいことだ。一夏たちと別れて、ずっと一人でキマイラに追われていた俺にとって、仲間の存在はかなり心強い。ただ、後者だった場合、かなりまずいことになる。こんな視界の悪い暗闇の中じゃあ、逃げるものも逃げられない。

もう一度、確認の意味もこめて耳を澄ませてみる。

……カ、ツンッ……カツンッ……。

「空耳じゃないな。……それに、人一人の足音でもない」

人間一人の足音にしては、リズムがちょっと変だ。少なくとも二人以上、足音の数からしても多くて四人くらいだと思うが……。

こうなると、後者だった場合の危険が一気に高くなる。俺一人に対して敵が複数襲ってくる。しかもこの暗闇の中。これは真面目に腹括ったほうがいいかもな。

「まあ、腹括るも何も、逃げることなんてできないけど」

そうなれば、もう敵だろうが味方だろうが関係ない。

カツンッ……！

試しに、わざと少し大きめに足音を鳴らせて相手の反応を見る。すると、聞こえていた足音が止まる。が、数秒後にはまた足音が聞こえてきた。

敵だったら、迷わずに襲ってくるだろうし、もしかしたら味方かもな。そうポジティブに考え、俺は覚悟を決めて足音の聞こえるほうに進んでいった。

第二百二十四話　新たなメンバー（前書き）

第二百二十四話です

第二百二十四話　新たなメンバー

「簪に鈴音、ラウラまで……。お前ら、今までどこにいたんだよ」
足音の主は、簪、鈴音、ラウラの三人。ある程度は予想していたけど、この組み合わせは予想外だった。
「最初に逃げたとき、落とし穴に落ちたのよ。落ちたときは皆バラバラだったけどね」
「落とし穴？　じゃあ、この屋敷には地下があったのか？」
「……うん。どれくらいの広さかはわからなかったけど」
地下か……確かに、あってもおかしくはないだろうな。周りは更地しかなかったし。
そして、消息不明だった三人が地下に落とされていたということは、あとの二人――遥香と箒も地下に入る可能性が高い。一緒にいるかどうかは知らないが。
「地下は迷路のようになっていて、しかもここ以上に暗かったから苦労したぞ。それで、他の皆はどうした？」
「一夏とのほほんさん、セシリア、シャルロットとはさっきまで一緒にいた。今は多分三階に行ってると思うぞ。遥香と箒は消息不明。お前たちもさっきまでは消息不明扱いだったけどな」
「ふむ、では箒たちも地下にいるのかも知れんな」
「で、アンタはなんでこんなところにいるわけ？　一夏たちとさっきまで一緒だったってどういうことよ」
「そのまんまの意味だ。さっきまでは一緒にいたが、キマイラ――あの化け物に見つかってな。俺が囮になって逃げてたら、ここに行き着いたってわけだ」
「じゃあ、アンタが来た道を辿れば、屋敷に戻れるってわけ？」
「たぶんな。戻ってみるか」
「当然」
俺の言葉に鈴音がすばやく反応する。簪とラウラも無言で頷いた

のが薄暗い中でも確認できたので、俺たちは俺が来た道を逆走していく。

俺が通ってきた通路は一本道だから迷うこともなく、すぐにそれらしいところにたどり着いた。……ああ、やっぱり閉まってたのか。空耳だと思ったのになぁ。

「ちょっと、行き止まりじゃない。どういうことよ？」

「俺が通ったあとに閉まったみたいだ。それらしい音もさっき聞こえたし。……ほら、木でできてる」

試しに行き止まりの壁をなでてみると、そこだけ木の触感だ。他の壁は鉄製だからよくわかる。たぶん、これが本棚の背なのだろう。

「なるほどな。……明弘、ちょっとどけ」

「何するんだよ？」

「この壁を壊す。これがあればやれる」

そういうラウラの手にはサバイバルナイフ。ああ、そういえば持ってきてたんだったな。こいつ。

「いいけど、本は傷つけないようにしろよ？」

「お前の前で本に傷はつけんさ。鈴、ちょっと手伝ってくれ」

「しょうがないわねぇ」

ラウラが鈴音と共に壁を破壊し始める。向こう側にある本を傷つけないため慎重にやっているが、すぐに破壊できるだろう。

「……明弘」

「簪、詳しくは大変だったな。どこか怪我とかしてないか？」

「……ううん、平気。……本音は……？」

「あの化け物がちょっと怖かったみたいだけど、それ以外はなんともないはずだ。途中で別れたから断言はできないけど」

「……そう」

少し安心した表情になる簪。自分だって大変だったろうに、のほほんさんのことを心配するなんてな。……まあ、あののほほんさんだから、心配にもなるか。

「あと、一夏も元気だったぞ。よかったな」

「……もう……」
暗い中でもかすかに簪の顔が赤くなったのがわかる。図星を突かれて恥ずかしいってところか。
そんな風に会話をしていると、前方から光が見えてきた。二人が壁をぶっ壊したのだろう。
「明弘、簪、行くわよ」
「……わかった」
「おう。って、いつの間に名前で呼ばれるようになったんだよ」
「さっき……」
地下で何かあったのか。何があったのかは知らんが、まあ、仲が良くなるのはいいことだからな。これもいい結果だと考えておこう。
とりあえず、三階に行ってみるか。もしかしたら一夏たちと合流できるかもしれないし。

第二百二十五話　異変（前書き）

第二百二十五話

第二百二十五話　異変

「……よし、大丈夫だな。行くぞ」
三階に行く途中、幾度となくキマイラがいないかどうかを確認しながら進んでいく。実は、十分ほどアレに追い掛け回されたせいで若干トラウマになりつつあるんだよな。
……それにしても、消えてるときのキマイラってどこにいるんだろうな。どこかに秘密の出入り口でもあるのだろうか。
「……やけに静かだな」
三階に上がって早々、ラウラがそんなことを呟く。
「たぶん、キマイラに見つからないように静かにしてるんだよ。さ、早く一夏たちを探すぞ」
「そうね。グズグズしてるとあの化け物が来るかもしれないし」
「……わかった」
ゆっくりしている暇はない。とっとと一夏たちと合流してしまわなければ。
「といっても入れ違いになる可能性があるからな。二手に分かれるか？」
「そうだな。組み合わせは……私と鈴、明弘と簪でどうだ？」
「いいんじゃないか？　どうせ数分間だけだし、そこまで深く考える必要もないだろ。簪と鈴音もいいか？」
「別にいいわよ」
「……うん」
二人の了承ももらえたので、そのペアで行くことになった。まあ、戦力的には偏りは出るけど、チームワーク的にはこの組み合わせが妥当か。
「じゃあ、あたしたちは西側の部屋を探してくるわよ」
そう言って、鈴音たちはさっさと歩いていってしまった。あいつらは北西部屋から南西部屋を順番に見るだろう。

「じゃ、俺たちは東側の部屋を見ていくか。最初はあいつらとは逆に南東からでいいか？」
「うん……」
鈴音たちとは逆の方に進んで行き、南東の部屋から順番に調べ始める。
しかし、北東部屋を除いた二つの部屋で一夏たちを発見することはできなかった。
そして今、俺と簪は北東部屋の前にいる。
「ここが最後の部屋か……。ここにいなかったら鈴音たちが見つけてることを祈るしかないな」
「……いるといいけど……」
「特に一夏、だろ」
「……明弘の意地悪」
「悪かったよ」
そんなことを話しながらドアを開ける。すると、そこは今までの部屋と少し違っていた。
床に点々としている赤い何か。そして……それと同じ赤に染まった、誰かが部屋の隅に倒れていた。

第二百二十六話　フェイク（前書き）

第二百二十六話です

第二百二十六話　フェイク

「……もしかして……血、なのか？」

あまりの光景に思わず息を呑む。俺の隣にいる簪は、あまりの驚きに何も言えず目を見開いているだけだ。

最初に一夏たちと探索したときは、こんなことにはなっていなかった。となると、これは俺が一夏たちと別れたあとに何かが起こったとしか考えられない。

それとも束さんのイタズラか？　……いや、その線は薄いだろう。いくらあの人でも、こんな心臓に悪いドッキリはしないはずだ。

「簪はここで待っててくれ。俺が見てくる」

少なくともこの部屋で何かが起きたのは間違いないだろう。となれば、そんな部屋に簪を入れるわけには行かない。

「……駄目。……私も行く」

しかし、簪は俺の意見に反対し、自分も行くという意志を見せる。引き下がるつもりは……ないみたいだな。

「……しかたないな。ただし、何かあったらすぐに逃げて、鈴音たちと合流しろ。それが駄目なら、何が何でも俺一人で行く」

「……わかった」

渋々といった様子で簪が了承する。少し強引だが、簪を危険な目に会わせないためだ。

一夏がこの場にいない以上、簪は俺が守らなければならない。これは俺が自分で決めたことだ。

「行くぞ。十分注意しろよ」

「……わかってる」

部屋に足を踏み入れ、倒れている赤に染まった誰かに近寄っていく。何が起きても大丈夫なように慎重に。

少しずつ近づいていくにつれ、誰だかわからなかった。そいつが、誰なのかわかってきた。

金髪の髪を後ろで束ねた少女――シャルロットだった。
「シャルロット？　……大丈夫か？」
肩に手を置いて少しだけ揺さぶってみる。出血をしているときに強く揺さぶってしまえば、出血がひどくなる可能性がある。
幸い、今出血していることはないようだが、服を真っ赤にしてしまうほどの量だ。傷だって深い可能性が高い。
「シャルロット。……シャルロット」
「……ん……？　……明弘？」
「気がついたか」
一分ほど呼びかけを続けると、シャルロットが目を覚ました。何とか大丈夫みたいだな。
「明弘……それに更識さんも」
「いったい何があったんだ。って、それよりも怪我は大丈夫か？」
「怪我？　……別にどこも痛くはないけど？」
「……何？」
そういうことだ？　これだけの出血なら、かなり深い傷を負っているはずなのに……。もしかして、これはシャルロットのものじゃなくて、他の誰かの……？
「……明弘」
「どうした？　簪」
俺の斜め後ろに控えていた簪が声をかけてくる。いったい、なんだろうか。
「……これ……血じゃない」
「……え？」
「たぶん……ケチャップ……」
簪の言葉を聴いて、試しに床についていた赤い液体を少しだけ指でとってなめてみる。
「……本当だ。確かに、ケチャップだな。……でも普通、ケチャップってこんなにサラサラしてるか？」
「水か何かを少し混ぜれば……できると思う」

「なるほどな。じゃあ、これはフェイク――俺たちを驚かせるための偽物ってことか」
「……うん」
おそらく束さんだろうな。この味、いつも使っていたケチャップとほとんど同じ味だし、家にあったのを使ったのだろう。
食べ物――実際は調味料だが――を粗末にするのはちょっといただけないが、まあ、あの人はクーの料理とは言いにくい料理を食べているからな。少しくらいは多めに見てもいいか。
「あ、あの、えっと……どういうこと？」
そんなことを考えている俺の脇では、展開の速さについていけていないシャルロットの困った姿があった。

第二百二十七話　第一の失格者（前書き）

第二百二十七話です

第二百二十七話　第一の失格者

「おっと、すまない。で、何があったんだ？」
すっかりケチャップの方に気をとられていたせいで忘れかけていたシャルロットに改めて事情を聞く。
「えっと……あのあと、僕たちは明弘を追いかけようとしたんだけど、もし行っても意味ないって一夏の意見で四人で三階に逃げてきたんだ」
一夏の意見はもっともだな。もし俺を追いかけてきていたら、犠牲が増えるだけだっただろう。俺も一人だったからこそ、逃げられたのだろうし。
「それで十分くらい休憩してから、三階を探索していたんだけど……この部屋を探索しているときにいきなりキマイラが現れたんだ」
「いきなり現れた？　ドアから入ってきたんじゃないか？」
「ううん、それはないよ。いざというときのために一人がドアを見張っているようにしてたから。だからドアから入ってきたはずはないんだ。なのに……気がついたら部屋の中にキマイラがいたんだ。それで三人が逃げるまで注意を引こうとして……」
「なるほどな。……すまなかった。俺がもっと時間を稼いでいたらこんなことにはならなかったはずなのに」
「明弘のせいじゃないよ。僕たちが無事に三階に来れたのは明弘のおかげだから」
そういって微笑むシャルロット。こいつのことだから、本当にそう思っているのだろう。
だが、その表情で俺の罪悪感はいっそう強くなる。俺は偶然逃げれたのに、代わりにシャルロットがやられてしまった。
「……すまないな」
「だからいいってば。それよりも……この赤いのってケチャップなんだよね？」

「ああ。たぶん、キマイラに仕込まれていたんだろうな。こういうときに、血に見立てて俺たちを驚かせようってことだろう。あの人ならやりかねないことだ」
「そっか。……この服、一番のお気に入りってわけじゃないけど、結構気に入ってたのになぁ」
「すぐに洗えば落ちるかもしれないけど……無理だろうな。確実に跡が残る。今度お詫びに新しい服を買うから、許してやってくれ」
「ううん、別にいいよ。何が起きるかわからないのにこの服を着てきた僕も悪いんだから」
……本当にいいやつだな。普通なら、怒ってもおかしくないだろうに。
シャルロットはこういっているが、今度ちゃんとお詫びはしておこう。なんというか、他のやつらも同じような目にあわないことを祈るだけだ。俺の負担が大変なことになる。
「それよりも……僕のペンダントは壊れちゃったし、僕は失格みたいだね」
真っ赤に染まった服の胸元を見ながらシャルロットが呟く。そこにあったペンダントはすでに壊れていた。となると、ルール通りシャルロットは失格ということになるのだろう。
「たぶん、そういうことになるんだろうな。なんなら俺のペンダントやるか？」
「それは駄目だよ。少し悔しいけどね」
「賞品のことか。お前のことだから、一夏と付き合いたいとか、そんなところなんだろ？」
「あはは、やっぱり明弘にはばれちゃってたんだね」
「一夏と一緒にするな。それに、俺、遥香、一夏、のほほんさん以外はたぶんお前と同じだろうからな。そうだろ、簪」
「……う……うん……」
簪が顔を赤くしながら頷く。
「まあ、誰かの力に頼らなくても、自分の力で頑張ろうって思うこ

とにするよ。それよりも、失格になった場合ってどうすればいいんだろう？」
「わからん。とりあえず束さんの指示もないし、好きにすればいいんじゃないか？　ペンダントのことを考えなくてもいいから、動きやすいだろ」
「そうだね。じゃあ、明弘たちと一緒に行こうかな。一人よりもずっと心強いし」
「ＯＫ。それならさっさと行くか。鈴音たちと合流しなくちゃいけないからな」
「え？　じゃあ、更識さんだけじゃなくて鈴音も見つかったの？」
「ラウラもな。さ、早く行くぞ」
シャルロットを立たせて部屋のドアに向かう。たぶん鈴音たちはもう探索終わってるだろうし、速く合流しなくてはな。

第二百二十八話　単独行動（前書き）

第二百二十八話です

第二百二十八話　単独行動

「ふむふむ。いっくんは誰だか知らないけど、二人と行動。アキくんはさっきの脱落者も含めて五人で行動。箒ちゃんとハルちゃんはまだ地下と」

相変わらずモニターを眺めながら、束が面白そうに呟く。

「まあ、箒ちゃんとハルちゃんは他に落ちた三人よりも抜け出しにくいところに落ちたからしょうがないか～。それにしても、ゲーム開始一時間四十分で一人しか脱落しないなんて、もう少し難易度あげたほうがいいかな？」

自分以外に誰もいないというのに束は一人で呟き、手元にあるキーボードでカタカタと何かを入力し始めた。

「キマイラの出現率をちょっとだけ上げて～っと♪　あんまり手を加えるのも面白くないし、これくらいでいいかな」

上機嫌な様子の束。勝手にキマイラの出現率を上げられた明弘たちからすればたまったものではないが、束からすればこれはゲームの難易度を少し上げただけ。特に気にするほどのことでもないのだ。

「ん～？　そろそろ箒ちゃんたちが地下から抜け出せそうだな～。何個かロックはかけてたはずだけど、やっぱりハルちゃんには効かないか」

モニターに映った箒と遥香の姿を見て、束は面白そうな表情になる。

「ハルちゃんからすれば、箒ちゃんを手助けするっていうよりは、早くアキくんのところに行きたいっていう方が大きいんだろうけどね」

束はそう言うと何かを思い出すように、懐かしそうな表情になった。

「ハルちゃんは一途だね～。――昔から♪」

「っ……眩しい……。地上に出られたのか？」
「おそらくそうでしょう。一階のいづれの部屋だと思います」
地下から抜け出した箒と遥香がそれぞれの言葉を口にする。
二人の後ろには破壊された本棚。ちょうど二人が出てきた穴の足元に転がっていたものだ。
「この壊された本棚が気になるが……どうせ、あの化け物あたりが壊したのだろうな」
「かもしれませんね。それにしては、本棚に入っていたらしい本には傷一つありませんが」
二人が視線を向ける本棚。実は、明弘がキマイラから逃れ、ラウラと鈴音が破壊した本棚なのだが、そんなことを二人は知る由もない。
「では、私はこれで失礼します。早く明弘様のもとに向かいたいので」
「え？　お、おい！　ちょっと待て！」
「……なんでしょうか？」
さっさと部屋を出て行こうとする遥香を箒は慌てて止める。それに遥香は、ドアノブに手をかけたまま上体だけ振り返った。
「なぜ一人で行動しようとするのだ。あのような化け物がいる以上、複数人の方が――」
「誰かと一緒だからといって、あのキマイラに勝てるはずがありません。それはあなたがよく知っていることではないですか？」
「そ、そうだが……しかし――」
「私はただ一秒でも早く明弘様の元に戻りたいだけです。そのためには一人のほうが動きやすく、効率がいいのです。あなただって、早く織斑一夏と合流したいのでしょう。なら単独で行動したほうが楽です」

「だからって――」
「私がどうしようと、あなたには関係のないことです。これ以上、言い合っていても無駄でしょうから私は失礼します」
箒が押し留めようとするのを振り切り、遥香はドアを開ける。すると、ちょうど廊下側にいた人間と鉢合わせになった。
「遥香、それに箒も！　無事だったんだな！」
それは、二人のうち一人にとっては一番大事な人であり、もう一人にとっては、はっきりいってどうでもいいとさえ思ってしまう人間。
「一夏っ！」
その人に向かって、箒がとても嬉しそうな表情で駆け寄っていった。

第二百二十九話　一昨日のこと（前書き）

第二百二十九話です

第二百二十九話　一昨日のこと

「二人とも無事でよかったぜ」
「一夏も無事で何よりだ。それに、セシリアと布仏も」
一夏と箒がそれぞれお互いの安否を喜び合う。そのあとに、一夏の後ろにいたセシリアたちもそれぞれ口を開いた。
「心配しましたわよ、箒さん、遥香さん」
「そうそう～」
セシリアと本音も加わり、わいわいとし始める四人。それを横目で一瞬だけ眺めたあと、遥香は無言でそのまま部屋を出て行こうとする。
「ちょ、ちょっと待てよ遥香！」
「……篠ノ之箒といいあなたといい、一体何ですか？」
さきほど箒に止められたときと同じように一夏にも止められ、遥香が億劫そうに振り返る。
表情はいつもとほとんど変わりないが、その実、かなり頭にきているのだ。明弘のもとに早く向かいたいのに、連続で――それも同じように引き止められ、遥香は内心イライラしていた。
しかし、それを表情に出そうとはしない。それは一夏たちを気遣っているのではなく、単純に感情を表情に出すのが面倒なのだ。明弘が相手ならばかすかに表情を変えることはするが、それ以外の人間に対しては表情を変えるのすら面倒に感じてしまう。
とことん明弘とそれ以外の人間への対応が違う遥香である。
「一人でどこに行くつもりだよ。一人じゃ危険だぞ」
「二人以上でも危険には変わりないでしょう。もうこのやり取りは二度目なのではっきり言って面倒です。これ以上は篠ノ之箒に聞いてください」
一夏の言葉を一蹴し、そのまま部屋を出て行く遥香。あまりの展開の速さに、箒以外の三人は思わず呆然としてしまった。

「あはは～、ハルちゃんはや～い♪」
……訂正。一夏とセシリアは思わず呆然としてしまった。

「……まったく面倒な人たちですね……」
一夏たちと別れ、一人廊下を進みながら遥香は呟く。その表情はさっきと変わらなかったが、それはまだ遥香がイラついているという意味でもあった。
「私がどうしようと私の自由でしょうに……」
そう言いながら階段を上っていく。明弘が今どこにいるかはわからないが、それでも彼女は明弘を探す。
実際なら一階から探したほうが効率的かもしれないが、どこに明弘がいるかわからない以上、どこから探しても同じ。それなら一夏たちと出くわさないように二階と三階を先に探していこう。それが遥香の考えだった。
「こうしていると、一昨日のことを思い出しますね……」
一昨日。遥香が退院できるかどうかの検診をやり、そのあとに医療室で明弘と合流した日のことだ。
あの日、遥香は検診が終わってから、明弘がいそうなところを探し回った。それこそ、自室や一夏の部屋など思いつくところを探し回った。挙句の果てには、どこかで訓練でもしているかと思い、各アリーナを全て探し回ったほどだ。
ちなみに、ＩＳ学園のアリーナは非常時の被害を極力減らすため、それぞれ少し離れたところに作られている。……少なくとも今年はすでに二度も襲撃を受けた――一度目のときは自分は居合わせていないが――ので、非常時のことを考えているよりもまず非常時にならないように注意することが先なのではないか、というのは遥香の正直な思いだ。
「あの時は医療室で更識楯無会長と二人きりでしたからね……」

医療室で楯無と二人きりでいるのに遭遇したとき、胸にかすかな違和感を感じた。それが決して好きな男性が他の女性と二人きりでいるというのに嫉妬しているとは思っていない。自分にとって、明弘は仕えるべき相手、主人といっても差し支えない。だがそれでも……やはりいい気分ではない。

「まったく、すでに四人に好意を寄せられているというのに……まあ、しょうがないかもしれませんが」

そんなことを言っているうちに二階の部屋を全て探し終える。そして、すぐに三階へ上がるために階段に向かう。

少しでも――一秒でも早く大切な人に会うために、遥香は立ち止まることなく、階段を上っていった。

第二百三十話　対応の差（前書き）

第二百三十話です

第二百三十話　対応の差

「シャルロットも加わって、これで五人か。……なんかもう、かなりすれ違ってるよな」
「あはは、そうだね……」
三階の部屋で零した俺の呟きにシャルロットが苦笑しながら頷く。
一夏、のほほんさん、セシリア、シャルロットと別れたと思ったら鈴音、ラウラ、簪と出くわした。きれいなすれ違いだな。……まあ、シャルロットとはすぐに合流できたけど。
それに、一夏たちと別れたからこそ鈴音たちと合流できたのだから、一概に駄目とは言えないが……タイミングが悪いにもほどがある。
「まあ、シャルロットの話だと、一夏たちは逃げれたみたいだから大丈夫だろう。……シャルロットが気を失ったあとはどうだか知らないけど」
「ということは、箒と遥香以外の全員は無事だということだな。問題はその二人だ」
「箒は刀持ってたし、運動神経もいいから大丈夫だとは思うけど……遥香がちょっと心配だね」
シャルロットが心配そうに言う。ラウラもそれに頷き、簪も少し心配そうな表情になるが、俺と鈴音は違った。
「遥香も大丈夫でしょ。あれでも結構運動神経はいいわよ」
「代表候補生とかと比較しなければ、それなりの運動神経はあるしな」
「え？　そうなの？」
「特殊な訓練を積んでるお前たち代表候補生と同じとはいかないけど、運動神経はいいほうだぞ。小柄で身軽だから、動きも速い」
「あ、そっか。あたしはクラスが一緒で体育の授業のときに見てるから知ってるけど、他の皆は知らないんだ」

鈴音が納得したような顔になる。なるほどな。確かに鈴音以外はクラスが別だから知らなくても当然か。

「ま、そういうわけで二人も大丈夫だと思うぞ。まず俺たちは一夏たちを探すことに集中すべきだ――っ！？」

俺の言葉に応えるように部屋のドアがゆっくり開いた。俺はドアにまだ触っていないし、他の皆も触っていない。となると、必然的に外から誰かが開けたことになる。

キマイラか？　もしそうだとしたら面倒だな。出鼻を挫いた方が懸命――

「……明弘様？」

しかし、そんな俺の心情とは裏腹に、ドアの向こうから入ってきたのは、とても馴染みのある人間だった。

「遥香！？」

「はい」

部屋に入ってきたのは、今回の参加メンバーの中で一番俺と馴染みの深い少女、遥香だった。

「よかった。無事だったのか」

「はい。明弘様もご無事で何よりです」

とりあえず、お互いに無事を喜び合う。遥香の表情もかすかに明るくなっているようだし、俺の無事が嬉しかったようだ。そこまで喜ばれると、逆にこっちも嬉しくなるな。

「遥香！　無事だったのね」

「鳳鈴音、更識簪、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ……。あなたたちも生きていたのですね」

喜んでいる鈴音たちに対して、遥香の反応は俺への反応とまるで違う素っ気無いものだった。……対応が違いすぎるだろう。

「し、心配したんだよ。どこにいったのかわからなかったから」

「そうですか」

「本当に心配したんだからな。まあ、お前なら大丈夫だとは思っていたが」

「ありがとうございます。わたしも明弘様なら大丈夫とは思っていましたが、やはり心配でした」
「他のやつらは一緒ではないのか？」
「私の知ったことではありません」
「で、遥香。他の連中は？」
「織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、布仏本音でしたら一階にいました」
……相変わらず、俺と俺以外への対応がまったく違うやつだな。
まあ、こうやってちゃんと答えているってことは、一応かすかにでも……本当にかすかかもしれないが、友達というか級友としては認識いているのだろう。
「なるほど。じゃあ、さっそく一階に向かうか。一夏たちと早く合流してしまわないと」
「……もしかして、連れてきたほうがよかったのでしょうか？」
遥香が不安そうな表情で俺に尋ねてくる。もし俺が一夏たちを連れてくるのを望んでいたら。そんなことを考えているのかもしれない。
「大丈夫。お前のことだから、一秒でも速く俺のところに来ようとしたんだろう？　仕方ないことだ」
「……ありがとうございます」
頭をなでてやると、かすかに嬉しそうな表情でお礼を言ってくる。もし今俺が言ったように思っていてくれたのなら、こっちがお礼を言うべきなのにな。
っと、こうしてる間にも一夏たちは移動しているかもしれない。急いで一階に向かわないとな。

第二百三十一話　全員集合（前書き）

第二百三十一話です

第二百三十一話　全員集合

「……また、入れ違いとかにならなければいいけどなぁ」
「入れ違い、ですか？」
「ああ。さっきも綺麗に入れ違ったからな」
遥香とそんな会話をしながら、急いで俺たちは階段を下りる。早くしないと、一夏たちがどこかにいってしまうかもしれない。
と、二階に下りてきたとき、ちょうど階段を上がろうとしていた一夏たちと遭遇できた。
「明弘っ！」
「一夏、無事でよかったぞ」
ひとまず、お互いの無事を喜びながら無意識のうちに片手でハイタッチを交わす。
他の皆も、それぞれ仲間たちの無事を喜びあう。ゲーム開始からだいたい二時間ちょっと。ようやく、全員がそろうことができた。

とりあえず状況確認と情報の共有を行うことにした俺たちは近くの部屋に入り、それぞれの持っている情報を皆に話した。
「……なるほどな。情報を整理すると、この屋敷には地下があり、そこに遥香たちは落とされたため、最初のうちは行方がわからなかった。で、その地下で遥香と箒、鈴音とラウラと簪はそれぞれ合流して上に戻ってきたと」
「で、キマイラに襲われて俺、セシリア、シャルロット、のほほんさんと別れた明弘が鈴たちと合流。ちょうどそのころ突然現れたキマイラから俺たちは逃げたが、シャルロットはやられて、三階に上がってきた明弘たちと合流」
「少し遅れて地下から脱出した遥香と箒は一夏たちと合流したが、

遥香は一夏たちと別れ一人三階に、それで俺たちと合流。最後に階段を下りてきた俺たちと上ってこようとしていた一夏たちがさっき合流して、今に至ると」

俺と一夏が皆から聞いた情報をまとめる。うん、この二時間の間にいろいろ起きたんだな。ここまで慌しいとは。

まあともあれ、全員が合流できたから結果オーライってことにしておくか。

「それにしても、シャルが一番最初に失格なんてな。俺はのほほんさんあたりが真っ先にやられると思ってたぜ」

「あ、それは同感。シャルロットは終盤まで残ってそうなイメージがあった」

一夏の呟きには俺も同感だ。それにしても、二時間で脱落者が一人って……このままいけば何人かクリアできるんじゃないか？　って、それよりも。

「まず、シャルロットの姿を見てわかるとおり、このゲームの立案者――束さんは、いろいろと厄介なことをしてくれている。とりあえず、面倒ごとに巻き込んでしまってすまない」

「それをいうなら、私もだ。皆、私の姉が迷惑をかけてすまない」

俺が束さんのことについて謝ると、箒も同じように皆に謝った。家族だからって、そこまで責任を感じる必要はないと思うが、まあ、箒はこういう性格だから仕方がないかもしれない。

「いや、箒は何も悪くないだろう。こんなゲームを皆に話したのは俺だ。ゲームの立案者があの人だって時点で警戒しておくべきだった。責任は俺にある」

「いやいや、それも違うだろ。あの時はまだこんなことになるとは思わなかったんだし、しょうがないって。一番の元凶は……」

「束さん、か」

「ああ」

一夏が頷く。他の皆も、それに続くように次々と頷いていく。俺のことをゆるしてくれたのは嬉しいけど……束さんの扱いが酷いこ

とになっているな。
　とはいえ、ここまでのことをしたのだから仕方がないだろう。皆、あのキマイラに追い回されて、シャルロットなんてお気に入りの服をケチャップまみれにされたんだ。しょうがないことかもしれない。
「じゃあ、とりあえず束さんに一泡吹かせることを目標にやってみるか。あの人に一泡吹かせることができるのかはわからないけど」
「そうですね。では、このあと具体的にどのように動きましょうか」
「それを今から考えるんだ。制限時間はあと四時間をきってる。ちんたらしている暇はないぞ」

第二百三十二話　チーム編成（前書き）

第二百三十二話です

第二百三十二話　チーム編成

「まず、メンバーを二つに分けよう。大人数でいてもキマイラに襲われたとき、逆に枷になる可能性がある」
「それは一理あるな。だが、どうやって分ける？」
俺の提案にラウラが質問してくる。俺の意見に反対してこないということは、ラウラも同じようなことを提案するつもりだったのだろう。
「まずは、戦力が均等になるように。これが最重要だ。あとは、メンバー同士で連携をうまく取れるやつらを同じチームに入れる。それでどうだ？」
「うむ、合理的だ。では、私と箒はそれぞれ別のチームに分かれた方がいいな」
そう。このメンバーの中で、生身での戦闘が強いというのなら、ラウラと箒だ。二人にはそれぞれ自分の武器もあるし、分けた方がいい。
「じゃああとは連携の取れるメンバーだな。幼馴染だし、俺は箒の方に入ったほうがいいのか？」
そんな一夏の一言で箒の表情は明るくなり、ラウラががっくりとうな垂れる。と、そこに勢いよく意見を言い出したのは鈴音だった。
「じゃ、じゃあ、あたしも幼馴染だから一夏と一緒に――」
「あっ、ずるいよ。鈴」
「そうですわ！」
「……ずるい」
鈴音の意見に対してシャルロット、セシリア、簪と矢継ぎ早に反対の声が上がる。一夏があんなことを言った時点でもう予測できていた事態に、俺は思わずため息をついた。
もう少しは違った展開にならないのだろうか。そりゃあ、相手があの鈍感（一夏）だからしょうがないのかもしれないが、もう少し進歩を見

せようや。
「はい、全員静まれ。幼馴染だからって連携が取りやすいってわけじゃないんだからその意見は却下。……とりあえず、シャルロットにはラウラのチームに入ってもらいたい。ラウラ、シャルロット、構わないか？」
「別に構わんぞ」
「僕？　僕も別に構わないけど」
「お前はラウラと同室で仲がいい。いざというときに連携も取れるだろう」
「うん、わかった」
「了解した」
とりあえず、三人は決まったな。あとは――
「そ、それなら、私も一夏と同室だったぞ！　シャルロットとラウラが一緒なら私と一夏も……」
「ずるいよ箒！　僕だって一夏と同室だったんだから」
「ああもう！　同室だったからって連携が取れるわけでもねえだろうが！　シャルロットとラウラは同室で、しかも特に仲がいいから一緒にしただけだ！」
俺の言葉で一応静かになる。ったく、一夏と一緒になりたいのはわかるが、少しは抑えられないのか。
「あはは～、すーくんがんばれ～」
のほほんさんが励ましてくれる。ああ、がんばるよ。
「あと、俺と一夏は別のチーム。そして俺と遥香は一緒のチーム。これに異論はあるか？」
「私はいいと思います。異論は特にありません」
「俺も別にいいけどさ。お前と遥香が一緒なのはわかるけど、俺とお前が別の理由は？」
「男手は分散させたほうがいい。それだけだ」
本当はもう一つ、俺と遥香が一夏と一緒のチームになったら他のやつらが一夏と一緒になる可能性が低くなる。そうなったら不満が

少なからず出るだろう。そうなる前に手を打ったという理由のほうが大きいが。

「異論は無いようだからこれも決まりだな。あとは特にないし、適当に割り振っていくか。不満が出ないように、俺がメモ帳に書いたあみだクジで決めてもいいか？」

「いいんじゃないか？　他も皆もいいか？」

全員から了承の言葉をもらい、ざざっとあみだクジを作ってメンバーを決めていく。

そうして決まったチーム編成がこれだ。

Ａチーム…一夏・箒・セシリア・鈴音・簪

Ｂチーム…俺・遥香・シャルロット・ラウラ・のほほんさん

「うん。まあ、悪くないんじゃないか？　で、二つに分かれてどうするんだよ」

「もちろん、それぞれ屋敷を探索するんだよ。Ａチームは一階を、Ｂチームは三階を中心に探索して、指定時間でもう一度集まるってわけだ。今は……だいたい二時半すぎってところだから、三時半を目安に集まるってことでいいんじゃないか？」

「わかった。じゃあ三時半にここ、二階南東部屋に集合にしよう。皆、それでいいか？」

俺と一夏以外の八人からそれぞれ了承の返事が返ってくる。チーム編成には少し時間がかかったが、それ以外はすんなり決まっていくな。

「何か見つかったらどんなに些細なことでも報告するようにしてくれ。場所も忘れずにな。じゃあ、探索を始めるか」

「おう。じゃあ、あとでな」

「ああ。またあとで」

一夏たちＡチームが部屋を出て行った。さて、俺たちもとっとと始めるとするか。

第二百三十三話　消失と出現の仮定（前書き）

第二百三十三話です

第二百三十三話　消失と出現の仮定

「まずはこの部屋からやるか」
三階に上がってきた俺たちがまず探索に入ったのは、シャルロットがキマイラにやられた北東の部屋。
部屋はやはり赤い跡が残っている。まあ、逆に綺麗になっていた方が驚きだが。
「でも明弘。ここは僕がやられる直前に一夏たちと探索したよ？そのときは何も見つからなかったし……」
「じゃあ、シャルロットはこの部屋がただの、普通の部屋だと思っているのか？」
「うん。だって何も手がかりが――」
「では、なんでこの部屋にキマイラはいきなり現れたんだ？」
シャルロットの言葉をさえぎって、シャルロット――いや、俺以外の全員に質問する。
唐突過ぎる俺の問いに、四人が一斉に考え込む。だが数秒後、遥香が思いついたように口を開く。
「この部屋が普通の部屋ではないから、ということでしょうか？」
「確証は無いが、それで間違いないだろう。おそらく、あのキマイラは時間か何かを基準にして、出現と消失を繰り替えす。だから、屋敷を探し回ってもキマイラが見つからないときがあったんだ。そして、この部屋はキマイラが出現するときのポイントになっている可能性が高い」
「確かに～、それが正しいんだったらキマイラが見つからなかった理由はわかるけど……あんなのがそんな何度も消えたり出てきたりするのっておかしくない～？」
「そんなことはないぞ、のほほんさん。ＩＳに利用されている量子変換を応用すればできないこともない。事実、相当精密に設計されているＩＳやその武装を量子に変換し、それを操縦者の意思で瞬時

に展開できるんだ。それに、あの束さんのことだから、あれくらいの質量の機械でも楽々量子変換して見せてもおかしくない」

束さんが量子変換して持ち歩いている移動型ラボ『吾輩は猫である』だって、性能で言えばあのキマイラを普通に超えるだろう。

あれには束さんをサポートするためのものがそれはもうたくさん組み込まれているからな。それに対してキマイラの方は、走る、攻撃する、というのを中心に本当に必要最低限のものしか組み込まれていないはず、センサーだって熱感知のついていない普通のものだろうし、知能も本物の動物レベルだ。いくらあんなでかいといっても、『吾輩は猫である』よりは量子変換するのは容易いはず。

「ちなみにシャルロット、お前たちはこの部屋を隅々まで探索し終わったあとに襲われたのか？」

「ううん。途中だったけど」

「じゃあ、まだ見つけていないものがある可能性もある。それに、シャルロットがキマイラに襲われて気を失ってから、俺と簪がこの部屋に足を踏み入れるまでの間に空白の時間がある。そこで何か起きてもおかしくはない」

「なるほどな。それならこの部屋を探索してみる価値はあるかもしれん。さっそく探索にとりかかるとしよう」

「ああ。その前に、キマイラが出てきても大丈夫なように、誰か一人は警戒に当たった方がいいと思う」

「はいは～い！　それだったら私がやるよ～」

のほほんさんが元気よくゆっくりと手を上げて立候補する。……少し心配な気もするが、大丈夫――だろう。

「わかった。じゃあのほほんさんは探索に参加しないで、キマイラが出てこないか警戒しててくれ。のほほんさん以外の俺たちは探索を開始するぞ」

「はい」

「わかった」

「了解した」

さて、何か手がかりが見つかるといいけどな。

第二百三十四話　壁に隠されたもの（前書き）

第二百三十四話です

第二百三十四話　壁に隠されたもの

「といいましても、具体的にどこを探せばよろしいのでしょうか？」
探索を開始した直後、遥香が尋ねてくる。ああ、こいつは地下にいて探索なんてやってなかったから、わからなくてもしょうがないか。
「物陰――棚とかのうしろとか、下の隙間とかだな。あと本棚の本も特定の本を押すと、仕掛けが作動する場合もあるみたいだ。現にそれで俺はキマイラから逃げれたし」
もしあのとき本棚の仕掛けが作動していなかったら――たぶん、この部屋でやられたシャルロットと同じ目にあっていただろう。
幸い、あれに襲われても怪我などはしないみたいだが、服をケチャップまみれにされるのは嫌だ。休日の出かける日にしか私服なんて着ないが、それでも嫌なものは嫌だ。
「壁にも何か仕掛けられている可能性はあるな。念のため調べておくか」
そう思い、壁に何かおかしなところはないか手で触りながらチェックしていく。壁の一部がへこんでいたり、逆に膨らんでいたら何かある可能性はある。
物陰などの探索を遥香、シャルロット、ラウラにまかせ、黙々と壁を調査していく。壁に手の平を滑らせていき、何か違和感がないか慎重に、かつすばやく進めていく。
すると、壁のとあるところで何か違和感を感じた。……ほんのわずかにだが、長方形の形に膨らんでいる。何か壁に隠されているみたいだな。
「ラウラ、サバイバルナイフを貸してくれ」
「ん？　別に構わんが、何に使うのだ？」
「ちょっとな」
サバイバルナイフをラウラから貸してもらい、刃を出す。かなり

切れ味はよさそうだな。ちょっと力を入れれば指くらいなら簡単に斬れるかも知れん。

そのナイフの刃を壁に当て、わずかに膨らんでいる箇所、その周りの壁紙を切っていく。おお、さすがラウラのナイフだ。めちゃくちゃ簡単に切れていくぞ。

そして円形に切れ込みを入れたらそこの壁紙をゆっくりと剥がしていく。もし壁に隠されているのが紙の類だったら破けてしまうかもしれない。

「……っと、これは……金属板？」

壁紙の向こうから出てきたのは、薄い金属板だった。縦１５センチ、横４０センチほどの金属板だ。

「何も書かれてないな。手がかりになるかと思ったが、違うのか？」

……いや、そんなはずはないだろう。この屋敷を束さんが建てたのなら、壁に隠されていたこの金属板にも何か意味があるはず。

「何かありましたか？」

「ん、まあな。壁の中からこれが出てきたんだが、何も書かれてなくてな」

「これは金属板ですね。こんなものが壁に隠されていたということは、何か意味があるとは思いますが……」

「そうだよな。でも、その意味ってのがわからないんだよな」

これは俺たちだけで話しても無駄だろう。せっかく他の三人もいるんだし、ここは相談するのが最善の手か。

「シャルロット、ラウラ、のほほんさん。ちょっと来てくれ」

「どうしたの、明弘？」

「何か見つかったのか？」

「さっきから壁に何かしてたみたいだけど～」

俺が呼ぶと三人はすぐさま集まってくれた。なので俺もすぐさま手に持った金属板を見せて、説明を開始した。

第二百三十五話　唯一の安全圏（前書き）

第二百三十五話です

第二百三十五話　唯一の安全圏

「今、壁の中からこれが出てきた。見る限り普通の金属板なんだが、何も書かれていなくてな。皆の知恵を借りようと思った」

手に持っていた金属板を五人で作られた輪の中央に出す。それに視線を落としながら、遥香以外の三人はそれぞれ意見を口にする。

「何も書かれていないとなると……これ自体にはあまり意味はないのかも知れんな」

「そうだね。どこかの隙間にはめると何か起きる仕掛けがあるのかも」

「でも～、これを入れる隙間なんて簡単に見つからないよ～？」

なるほど。ラウラとシャルロットの意見はもっともだな。だがのほほんさんの言うとおり、この金属板をはめる場所を見つけるのはかなり大変だ。特徴的な形をしているものならはめる場所も特徴的な形になるが、金属板では。

「まあ、あとで一夏たちに見せて話し合えばいいんじゃないかな。わからないことを考え込んでるよりも、探索を進めたほうがいいだろうし」

「そうだな。考えてるよりも行動した方がいい。この部屋はあらかた探し終えたから、次の部屋に行くとするぞ」

シャルロットの言葉でラウラが立ち上がり、次の部屋に行くぞと促してくる。確かに、時間も限られているし、行動したほうがいいか。

「わかった。じゃあ次は隣の東の部屋に行ってみるか。もしかしたらキマイラの秘密がわかるかもと思ったが、そう簡単にいかないか」

「そうですね。キマイラのことがわかればだいぶ楽になるのですが」

俺のそんな呟きに遥香が答える。

「ま、わからなかったことは置いておくか。さっさと次の部屋に行こうぜ」

「はい。わかりました」

「とりあえず次はこの部屋だな」

明弘たちが東の部屋に向かったころ、ちょうど一夏たちは二つ目の部屋に到着していた。

一夏たちがいるのは一階の西部屋。その部屋にはソファーが二つとテーブルが一つ、そして破壊された本棚があった。

「南西の部屋には何もなかったし、ここには何かあるといいけどな」

「そうだな。それにしても……あの壊れた本棚は何なのだ？」

箒の視線の先には破壊された本棚。箒と遥香が地下から出てきたときの脱出口だった場所だ。

「私と遥香が出てきたときにはすでに壊されていたが、いったい誰がやったのだ」

「あ、それやったの、あたしとラウラよ」

さらりと箒の横にいた鈴音が答える。あまりに唐突な返答に箒はおろか、一夏とセシリアも一瞬驚いてしまう。

「あたしとラウラと簪も、地下から出てくるときにあそこから出てきたの。そこでちょうどあの本棚が邪魔してたからぶっ壊したってワケ」

「なるほどな。じゃあ、本が丁寧に置かれてるのは明弘か」

「そう。さっき説明したとおりそのときは明弘もいたの。さすがにあいつの目の前で本に傷つけるわけにもいかないでしょ？」

「ああ、確かに。あいつ本好きだからなぁ」

一夏と箒、セシリアがそれぞれ納得する。全員、多かれ少なかれ明弘の本好きは知っている。ゆえに一夏たちの間では、明弘の前で本を乱暴に扱わないこと、というのが暗黙のルールの一つになっていた。

「明弘の話だと、あの中まではキマイラも入ってこれないそうだか

ら、あそこが唯一の安全圏か」
「……そういうこと」
「ということは、それが近くにあるこの部屋は、屋敷の中で一番安全な部屋ということだな。油断はできないが、安心はできる」
「そうだな。じゃあ、とっとと探索を進めちまおうぜ」
一夏の言葉をきっかけに、一夏たちは部屋の探索を開始したのだった。

第二百三十六話　再度集合（前書き）

第二百三十六話です

第二百三十六話　再度集合

三時半。事前に話し合ったとおり、二階南東部屋で一夏たちと再度集合した俺たちは、今回の探索での収穫を教えあっていた。
「まず、俺たちの方で見つけたのはこの金属板だ。部屋の壁に隠されていたんだが、何にも書かれてないんだ」
金属板を一夏たちに見せながら説明する。本当になんともない金属板だよな。
「本当だ。何も書いてないな。何に使うんだ？」
「それがわからないから困ってんだろうが」
「どこかに挿し込むんじゃないの？」
「そうかもしれんが、それだと挿し込む場所を探すのが大変すぎるから違う気がするんだよな」
「なら、これそのものに何か意味があるとしか考えられんな」
「そうですが、何も書かれていないのでは、何の意味があるのかもわかりませんわ」
一夏たちから出された意見もほとんど俺たちのチームで出された意見ばかりだ。やはりこの金属板は特に意味がないのだろうか。
そんな考えがふと頭をよぎる。だが、わざわざ壁に隠されていたのだからやっぱり何か意味だ……でも束さんだからなぁ。特に意味がない可能性もなくはない。
「簪はどう思う？」
唯一、意見を出さずに黙っていた簪に意見を訊いてみる。
「……その金属板に……何かすればいいのかも」
「何かって？」
「……それは……わからない、けど……その金属板、何か違和感がある……気がする」
「……マジで？」
金属板を手にとってよく見てみる。確かにちょっと変な気もする

けど……気のせいにも思える。
　でも、簪が言うからには本当に違うのだろう。本人も『気がする』って言ってるからどうだかわからないけど。
「……気のせいかもしれないけど」
「まあ、簪の言うとおりかもしれないな。何をすればいいのかっていうのは、後々考えていくか」
　金属に何かするとしたら……化学反応とかか？　といっても、化学反応を起こせそうなものなんてないしな。屋敷のどこかにあるのだろうか。
「あと他の部屋で鍵を一つ見つけた。どこか鍵がかかっているところとかなかったか？」
「鍵のかかってるところ？　特になかったけど、どうやって見つけたんだ？」
「棚の引き出しの裏に貼り付けられてあった。まあ、鍵がかかってるところがあったら使えばいいか」
　とりあえず、こっちが見つけたのはこの二つだけだ。一夏たちの方は何を見つけたのだろうか。もう何度も探索したからそこまでなかったかもしれないが。
「こっちはこれで終わりだ。次はそっちの番だぞ」
「おう。えっと俺たちが見つけたのは――これだな」
　そういって、一夏はポケットから自分たちが見つけたものを取り出し始めた。

第二百三十七話　遥香の発想（前書き）

第二百三十七話です

第二百三十七話　遥香の発想

「それは……マッチ？」
「当たり。部屋の机の影に貼り付けてあった」
一夏が取り出したのはマッチ。なんてことはない、普通のマッチだ。
「マッチってことは、何かを燃やすのに使うってので間違いないと思うが……そういえば、どこかの部屋に暖炉ってなかったか？」
「三回の南西部屋にありました。しかし薪などはありませんでしたので、火もつけられないかと」
「その部屋だったっけ。でも燃やすものがないとなると……この屋敷を燃やせばいいのか？」
「いやいや、ちょっとそれはないだろ。そんなことしたら俺たちも焼け死ぬぞ」
「冗談だ」
でも今のところ、それしか考え付かないんだよな。薪がどこかに隠されているとも思えないし。
「……薪以外だと、屋敷の中にある本とかなら燃やせなくもない、か」
「確かにそれならいけるかもしれんが……明弘、お前としてはどうだ？」
箒がそんなことを尋ねてくる。他の八人も同様に俺に視線を集めている。
「もちろん、俺としては反対だ。本を燃やすなんて」
俺の答えは決まっている。いくら脱出に必要かもしれないといっても、本を燃やせるはずがない。屋敷の本棚にはいくつか呼んでみたい本とかもあったし。
それに、火をつけることが脱出に必要だという保証もない。もし仮に本を燃やして脱出にまったく関係なかったら、キレるだろうな。

「まあ、明弘ならそういうだろうな。お前が本を粗末に扱うはずがないし」
「当然だ」
無意味に胸を張ってみる。本当に無意味だが。
「胸を張るな、胸を。じゃあ、これもわからないってことで――」
「織斑一夏。そのマッチを少し貸していただいてもいいですか」
一夏がマッチをしまおうとすると、遥香がいきなりそんなことを言い出した。
「ん、別にいいけど、何に使うんだ？」
「明弘様。さきほどの金属板とメモ帳をお借りできないでしょうか？」
一夏の言葉を無視しながらマッチを受け取り、次は俺に向かってそんなことを言う。
「金属板とメモ帳？　……ほらよ」
ポケットから言われた二つを取り出して遥香に渡す。いったい何をするつもりなのだろうか。
「何をする気だ？」
「一つ思いついたことがあります。……メモ帳、失礼します」
そういってメモ帳から紙を何枚か丁寧に破り、それを一枚ずつ軽く丸めていく。
そしてそれを床に置いた金属板の上に乗せ、マッチに火をつけてその上に落とした。
「……メモ帳は火を燃やすための材料か」
「明弘様もメモ帳をこのようなことに使ってしまい、申し訳ございません」
「別に構わない。それよりも、どういうつもりだ？」
メモ帳が使われたのは別にどうでもいい。どうせ二つで百円だったから買った安物だ。それよりも気になるのは、遥香が何を使用しているのかだ。
「先ほど、更識簪が金属板に何かすればいいかもしれないと言って

いましたね。それでもしかしたらと思いまして」
「何か……火……まさか、酸化か？」
金属と火とくれば、それにたどり着く。融解とかもあるが、マッチこどきの熱では融点に届くことはないだろう。
「可能性の話ですが。しかし、酸化することによって何かが浮かび上がってくる可能性も否定できません」
酸化か。化学反応の可能性はあるとは思っていたが、まさか酸化とはな。……こいつ、俺と一緒で中学校とか行ってないはずなのに、よく覚えてたな。俺は化学の本に書いてあったので覚えてたけど。
だが仮に酸化の存在を知っていたとしても、すぐに思いつくか、普通。やっぱりこいつはすごい。
……なんでこんなすごいやつが俺なんかについてくるのだろうか？
「なるほどな。それがうまくいけば――」
遥香の発想のすごさに感心していると、火に包まれていた金属板に――異変が起こった。

第二百三十八話　科学の力（前書き）

第二百三十八話です

第二百三十八話　科学の力

火で熱せられていた金属板が、ゆっくりと――その形を変えていく。

融けている……のではない。形を変えているのだ。まるで元の姿に戻ろうとしているかのように、ゆっくり、それでいて止まることなくその形を変えていく。

しばらくして金属板も動かなくなり、その後、メモ帳を燃やし尽くした火は穏やかに消えていった。

その場に残されたのは、燃え尽きた灰と姿を変えた金属板。それを見て、俺は一つの結論にたどりついた。

「……形状記憶合金か」

形状記憶合金。一定の温度以下で変形させても、その温度以上に加熱すると元の形状に戻る性質を持つ金属だ。

しかし、形状記憶合金ってこんな簡単に元に戻るのか？

「確か、そこまで高温でなくとも形状回復をするものもあったはずです。私の記憶では、５０℃から６０℃前後で形状回復をするものがあったと思います」

「そんなものもあったっけか。もしその合金だったら、マッチの火でも十分に足りるはずだな。さっき簪が言っていた違和感っていうのは、たぶんこの形だった合金を無理矢理板状に伸ばしたからってところか。……って、皆どうした？」

俺と遥香がそんな会話をしていると、一夏たちが妙なものを見る目で俺たちを見ていた。一体何なんだろうか。

「さっぱり話しについていけなんだが。まず、形状記憶合金って何だよ」

「一定の温度以下で変形させても、その温度以上に加熱すると元に形状に戻る性質を持つ金属のことだ」

さっき心の中でも言ったのだから、二度も同じ説明をさせないで

いただきたい。
「何でそんなもの知ってるんだよ……。中学校でも教えられなかったぞ」
「化学の本で読んだ。なかなか興味深かったぞ」
「……ああ、だいたいそんなとこだろうと思ったよ。じゃあ、遥香も？」
「俺の持ってる本はだいたい遥香も読んでるからな。特に、機械システム関係とか、科学関係の本とかそういうのはよく読んでる」
その分野においては俺以上に知識があったりするんだよな。まあ、俺よりも知識があるからって別に悔しいとか思わないが、単純にすごいとは思う。
遥香の読みである酸化ではなかったが、これはこれで結果オーライか。
「それよりも問題は、これだ。元の形に戻ったみたいだけど」
そう言いながら変形した金属板――だったもの――を、灰を払って持ち上げる。まだ冷め切っておらず、ちょっと熱いが、問題ない。我慢できる範囲だ。
形的にはクッキーとかの型、それが意味不明な模様ともつかないものを描いているような感じだ。だいぶ奇怪な形になったが、捻じ曲がったりしていないところを見るとやはりどこかにはめるのが正解だろうな。
「持ち運ぶのには少々不便になりましたが、形状記憶合金なら曲がってしまっても熱すれば元に戻るので大丈夫だとは思います」
「そうだな。曲がってしまったときのために、マッチはこれと一緒にしておくか。一夏、マッチは俺が持っていってもいいか？」
「あ、ああ、別にいいぜ」
一夏の了承も得たので金属板と一緒にマッチもポケットにしまう。
さてと、これで今ここでやれることはもうないな。
「じゃ、もう一度探索しに行くか。チームはさっきと一緒、ただし俺のチームが一階を、一夏のチームが三階を探索する。それでいい

か？」

全員に視線を向けながら聞く。まっさきに頷いたのはやはり遥香。こいつは俺の言うことを疑いもせずに従うからな。……大丈夫なのだろうか、ちょっと心配だ。

次に頷いたのはのほほんさん。こっちもこっちであんまり考えずに決めるからな。まあ、当然か。

他の皆も一様に頷いてくれた。シャルロットとラウラは一夏と一緒になれないのが悔しいのか、半ば渋々、といった様子だったが。

ともあれ、次の集合を四時半と決め、俺たちはもう一度屋敷を探索しに出撃していった。

第二百三十九話　本棚の仕掛け（前書き）

第二百三十九話です

第二百三十九話　本棚の仕掛け

一階に下りてきた俺たちは早速、部屋を探索し始めた。といっても、最初に探索した南東の部屋ははずれだったけど。

「やっぱり、何度も探索してるからそれらしい発見はないか」

「ですが、金属板や鍵のこともありますので、何かあるとは思いますが……」

「束さんだからな。特に意味はないのかもしれない」

俺たちが見つけた鍵も、形状記憶合金の金属板も、特に脱出のために必要なものではないのかもしれない。

「ま、やれることをやるしかできないからな。もし脱出できないとしても、そのときはキマイラの対策を練ればいい」

「そうですね」

次は東部屋だ。ここには何かあるだろうか。

とりあえず、部屋にあった本棚の本を押してみたが、特に何も起こらない。西部屋ではこれで隠し通路が出てきたからもしかしたら、と思ったが、そう簡単にはいくはずもない。

次に遥香と二人で壁を調べてみる。それでも、特に何も見つからない。

「やっぱり、簡単には見つからないか。他のところはシャルロットたちが探してくれてるし、俺は本棚を徹底的に調べるとするかな」

特に調べるところもないので、本棚を集中的に調べることにする。西部屋と同じ仕掛けではないが、何かあるかもしれない。

まず、本棚の本を丁寧に出していく。何か本に隠れているかもしれないからな。

と、本を全て取り出してみるが、これといって何も見つからない。まあ、こんな簡単に見つかるところにあるわけないか。

「……ん？」

そこで違和感を感じた。西部屋にあった本棚と、何かが違う――

気がする。
ただ単に、あっちのに移動する仕掛けがあったからかもしれないが、普通の本棚とも何かが違うような……。
「材質……は木だよな。大きさ……も、俺より少し大きいくらいだからちょっと普通の本棚よりも大きいけど、西部屋の本棚とほぼ同じ大きさ。じゃあ、何が……ああ、なるほど」
何がおかしいのか、今わかった。この本棚、下の部分がちょっとおかしいのだ。
普通の木の本棚だったら、一番下の本を置く板は同時に、床に接する板でもある。しかし、この本棚ではその二つが別々なのだ。
一番下の本を置く板と、床に接する部分の板は二十センチほど離れており、その間をふさぐためにもう一枚別の板でその空間をふさいでいる。
普通なら、こんなことをする必要はない。木が無駄に必要になるし、本を入れるスペースが小さくなるか、高さが高くなる。それに作るときの手間も考えれば、こんなことはしない。
ということは、そうなってでもこうする必要があった。ということになる。
「このスペースに何かあると見て、間違いないか」
手の感覚で、何かないか探ってみる。この中に何かあるとすれば、上部にふたか何かが――
「……見つけた」
かすかに感じた段差。木を一度切ってもう一度はめ直したようだな。塗装されているからわかりづらかったが、視覚以外にも見つける方法はある。
段差につめを引っ掛けてふたになっている木をはずす、するとその中にはボタンらしきものがあった。
「ビンゴ」
迷わずボタンを押す。これで何か起きるはずだ。
そんな俺の考えを裏切らず、本棚はゆっくりと横に移動し始めた。

第二百四十話　もう一つの隠し通路（前書き）

第二百四十話です

第二百四十話　もう一つの隠し通路

本棚が移動し、その後ろから小さな通路が姿を現した。
西部屋のものとは違い、こちらはなんとか人一人が通れるくらいの広さ。体を横にして壁に体をつけながらなら、なんとかすれ違うこともできるかもしれない。
「何か音がしたけど、どうしたの？　……って、通路？」
本棚が動いたときの音に気づいてこっちに来たシャルロットが、通路を見て目を見開く。
その後ろには同じく音に気づいた遥香、ラウラ、のほほんさん。皆、少なからず通路を見て驚いているようだ。
「本棚に仕掛けがあった。どうやら隠し通路みたいだが、どこにつながっているかはしらん」
おそらくは、地下だろう。外から見た屋敷の様子からして、六つの部屋以外に別の部屋があるとは思えない。となれば、必然的にこの通路が通じているのは地下。
遥香たちが落ちたところと同じところだろうか。それとも、まったく別のところだろうか。
同じ地下とはいえ、遥香たちが落ちたところと同じとは限らない。二つの通路が複雑に入り組んでいる可能性だってある。
「シャルロット、ラウラ、のほほんさん。三人は三階に行って一夏たちにこのことを報告してきてくれ。……遥香」
「はい。わかりました」
名前を呼ばれただけで遥香は俺の意思を読んでくれたのか了解の返事をあげる。しかし、それに対して他の三人は遥香の様にはいかなかった。
「ちょっと待ってよ。僕たち三人だけって、明弘たちは？」
「この通路の先を調べる。それだけだ」
「それなら～、おりむーたちを呼んで全員で行った方がいいんじゃ

ない～？」
「この通路は見ての通り狭い。大人数で行くのは互いに足を引っ張るだけだ。少人数で行った方がいい」
それに、どこにつながっているか見当もつかない以上、危険なことがある可能性もある。もし何かあって全員が脱落、なんてことにならないように、ここでは少人数で行くべきだろう。
その場合、こういう狭いところなら小柄な遥香が適任。そして、その遥香と一緒に行くなら、当然俺だろう。
「確かに合理的ではあるけど、皆の意見を聞いてからの方が――」
「いやシャルロット。ここは明弘の言うとおりにした方がいいだろう」
シャルロットが更に反論しようとしたとき、それをラウラが遮った。さすが軍人というところか。客観的に物事を判断できている。
ここで皆の意見を聞いてから動くのは不適切。どう話し合ったとしても、少人数の方がいいのは変わることのないし、狭い通路では小柄な遥香が、そしてその相方は俺が適任というのも揺ぎ無い事実だ。それなら、少しでも早く調べに行った方が最善手。
「もし何かあっても、俺たちなら大丈夫だ。あの束さんでも、命に関わるようなことはないだろうし、脱落したとしても俺たちには特に賞品が欲しいわけじゃない。そうだろう、遥香」
「はい。私は明弘様の傍にいられれば、何も欲しいものなどありません」
俺の問いかけに即答する遥香。こいつのことだからそうだろうとは思っていたが、いくらなんでも無欲すぎる気はするな。
という俺も別に欲しいものなんてない。本棚だって、今度自分で買ってくればいいだけだしな。
「というわけだ。探索メンバーとしては、これほど適任なやつはいないと思うが」
「……わかったよ。どうせ、明弘のことだから止めても行くんでしょ」

「もちろん」
「じゃあ、僕にはどうすることもできないよ。明弘の言うとおり、一夏たちに報告してくる」
「ああ。頼んだ」
シャルロットもついに折れ、俺たちが行くことを了承してくれた。
あとは、のほほんさんだけだが……。
「すーくん。ぜ～ったい、帰ってきてね。約束だよ？」
「……わかった」
のほほんさんも俺たちが行くことを認めてくれたようだ。のほほんさんの言葉に、折れは素直に頷く。
何が待っているかは知らないが、のほほんさんにこう言われた以上、絶対帰ってこなくちゃな。
「じゃあ、行って来る。遥香」
「はい」
俺はそれだけ言って通路に向かって歩いていく。遥香も俺の呼びかけに応じて、俺の後ろをついてきた。
薄暗い通路。何が待ち受けているかもわからないその道に、俺たちは足を踏み入れた。

第二百四十一話　チーム微調整（前書き）

第二百四十一話です

第二百四十一話　チーム微調整

「うわ、一回経験してるけど、やっぱり暗いな」
「私が落ちた地下はこれよりもう少し暗かったです。じきに目も慣れてくると思いますので、あまり心配する必要はないかと」
「そうだな。じゃあ、目が慣れるまでゆっくり進んでいくか」
「はい」
通路を少し進んでみると、さっきまでいた部屋からの光もほとんど届かなくなり、視界が一気に狭くなる。
この狭い通路、しかも狭くなってしまった視界では、何かあったとき対処しきれない。ここは、遥香の助言を聞いて、ゆっくり行った方がいいだろう。
「……っと、階段か」
不意に、踏み出した足が本来着くところを素通りし、その少し下で地面に足が着く。階段ということは、やっぱり地下につながってると考えて良さそうだ。
ゆっくりと、踏み外すことのないように、慎重に階段を下りていく。二十段ほど降りたところで、階段は終わり、また平坦な道が続いている。
広さはさっきと比べてかなり広い。三人くらいなら並んで歩けそうだ。今は俺と遥香の二人だけだから並んで歩くことができる。
「ここからが本番みたいだな。目も大分慣れてきたし、一気に行くか」
「わかりました」
俺の斜め後ろに立っていた遥香に、視線で横に来るように促して、俺たちは通路を進んでいった。
……あ、そういえば、金属板と鍵、持ってきてしまった。地下の方で使うのならいいけど、大丈夫だろうか。

「一階西部屋の隠し通路に明弘と遥香だけで探索しに行った!?」
ちょうどそのころ、シャルロットたちから報告を受けていた一夏たちは、その内容に思わず大声を出してしまっていた。
「お、大声を出さないでよ、一夏。キマイラに見つかったらどうするの」
「す、すまん。でも、なんで俺たちに報告する前に……」
「その隠し通路の幅は狭かった。ということは少人数での探索が妥当、その探索にはあの二人が適任。そうこちらで判断した。お前たちに報告したあとでも、その結果は変わらんだろう」
淡々と説明するラウラの言葉に、一夏たちは納得せざるをえなくなってしまう。ラウラの言っていることは全て正論で、反論するところがない。
「確かにそのとおりだが……あの二人だけでは危険ではないのか？狭い通路ならキマイラが出ることはないだろうが、他に何が出てくるかわからないのでは……」
「それを言うならここにいる全員でも同じことだ」
そういう箒をラウラが一言で黙らせる。箒も心の片隅では思っていたのだ。明弘たち以外だったとしても、同じことだと。それでも、口に出さないわけにはいかなかった。
それが、箒なりの心配なのだと全員がわかっているからこそ、ラウラはそれをわざわざ否定するようなことを言い、それに誰も何も言わなかった。
「明弘たちのことは、考えても仕方がないだろう。そんなことをしているのであれば、明弘たちが戻ってきたときのためにこちらはこちらで探索を続ける。そうだろう」
「……そうだな。じゃあ、俺のチームからそっちに一人やって、四人ずつで探索するか。えっと……」
「……私が行く」

一夏が誰をシャルロットたちの方に移すか考えていると、簪が手を上げて立候補した。
「わかった。じゃあ、簪をシャルたちのチームに移して探索を続けよう」
「……うん」
簪だって、思い人である一夏と離れるのはできれば避けたいところだろう。しかし、今はそんなことを言っている場合ではない。
明弘たちは、何が待っているかもわからない場所に自分から向かっていった。それなのに自分がそんなことを言っては、明弘たちに申し訳が立たない。そんな思いが簪の中にあった。
明弘が知れば、「そんな気にすることじゃない」と言うだろうし、遥香にいたっては興味すら示さないだろうが、これは簪自身の問題。
明弘たちがどう思おうが、関係ない。
「じゃあ、俺たちは三階の探索を続けるから、シャルたちは一階の方を頼んだぜ」
「うん、まかせて。皆、行こう」
「うむ」
「……うん」
「あい～」
シャルロットの言葉に従い、ラウラ、本音、簪はシャルロットとともに部屋を出て行った。

第二百四十二話　心強いアイテム（前書き）

第二百四十二話です

第二百四十二話　心強いアイテム

「……広いな」
「はい。私が落ちたところは通路だけでしたが、広さは結構ありました」
「そうか。っと、これは……」
はじめに入った一番近くの部屋にはなにやらパソコンらしきものが置いてあった。よくわからないが、たぶん脱出に使えるだろう。
「遥香、頼む」
「わかりました」
俺の指示を受けて遥香がパソコンをいじり始める。俺よりも機械の扱いは上手いからな。
遥香が電源をいれ、手元にあったキーボートを高速で打ち込む。束さんには及ばないが、かなりの速さ。俺よりも若干速いくらいだろう。
「……」
目まぐるしく変化していくモニターを目だけで確認しながら、遥香はキーボートをたたき続ける。
「どうだ」
「そうですね。屋敷と――この地下の間取りが見つかりました。どうしますか？」
「それを開いてくれ。メモを取る」
「わかりました」
遥香がキーボードを使い、マップをモニターに映し出す。屋敷のほうの間取りが間違っていないから、おそらく地下の間取りも間違ってはいないだろう。まあ、参考程度に留めておくのが賢明か。
見る限り、この地下はそこまで多くの部屋はないようだ。部屋の数は……五つか。隠し部屋とかもある可能性はあるが、今のところわかっているのはこの部屋も含めて五部屋だ。

「……よし書いたぞ。あとは何かあるか？」
「あとはあまり有益なものはありませんね。いくつかパスワードがかかっているものはありますが」
「パスワードか。それじゃあ仕方がない。どこかに手がかりがあるかも知れないから探すとするか」
「わかりました。では電源は一度切っておきますか？」
「そうした方が良いだろう。少し面倒だが、手がかりが見つかり次第、ここに戻ってくることにする」
「わかりました」
遥香がパソコンの電源を落とす。するとその直後に、カランッと硬いものが床に落ちたような音が聞こえた。
「今の音は……」
「パソコンの後ろのようですね。今確認します」
そう言って遥香がかがんでパソコンが鎮座していた机の後ろを見る。その数十秒後、遥香は何か持って机の下から出てきた。
その手には懐中電灯が五つと、質素なナイフが二本。どうやらさっきの音はこのナイフの落ちた音みたいだな。
「これが机の後ろにありました。どうしますか？」
「どうするも何も、持っていくに決まってるだろ。この暗い中、懐中電灯は心強いアイテム。ナイフにしても、何かに必要になるかもしれない」
金属板のときのように、ナイフを使うことがないとも言い切れない。ここは持っていて損はないだろう。
「ナイフはそれぞれ一本ずつ。懐中電灯は二本ずつだ。残りの懐中電灯はここに置いておく」
「わかりました。ではどうぞ」
遥香から懐中電灯とナイフを受け取る。コンパクトなものだから持ち運びにも便利だな。
理屈はわからないが、おそらくパソコンの電源を落とすとナイフが床に落ちる仕掛けでもしていたのかもしれない。束さんならそれ

くらいのことは普通にするだろう。
「じゃ、改めて行くか」
「はい」
心強いアイテムを二つも入手し、俺たちは再び地下の探索に乗り出していった。

第二百四十三話　謎のスイッチ（前書き）

第二百四十三話です

第二百四十三話　謎のスイッチ

「ナイフがあるってことは、やっぱり壁に何か隠されてたりするのかもな」
「そうですね。しかし、もし仮にラウラ・ボーデヴィッヒがサバイバルナイフを持っていなかったら、どうしたのでしょうか？」
確かにそうだ。このナイフがあったのは地下。そしてその地下に来るために金属板が必要で、その金属板はナイフがなければ取り出せなかった。もしラウラがサバイバルナイフを持っていなかったら。そして、箒も日本刀を持っていなかったとしたら……。
「そうだなぁ。たぶん、屋敷の方にも隠してあると思うぞ。二階の部屋に金庫があるって言っただろ？　あそこに隠されてたりさ」
「なるほど。それはありえますね」
「ま、ナイフは手に入ったんだし、気にする必要はないだろ。あっちにはラウラもいるし」
「そうですね」
「まずは地下を調べつくすことからだ。何があるかわからないし、一夏たちの心配をしているほど、俺たちも余裕があるわけじゃない」
「わかりました」
とりあえず会話をいったん終え、次の部屋に入る。
さっきの部屋もだったが、電気はついていない。手に持った懐中電灯だけが頼りだ。
「本棚ばかりだな。図書室っぽい感じか」
「そのようですね。やはり、ここにも仕掛けがあるのでしょうか」
一階の西部屋、東部屋と本棚に仕掛けがあったからな。そう思うのは普通だろう。だが、ざっとみるだけでここの本棚は十以上ある。一つ一つ調べるのは骨が折れるな。
「一応見れる範囲だけ探して、本棚を調べるのは後回しにするか。他にも部屋は三つあるし」

「わかりました。では、調査に取り掛かります」
律儀にそう言ってから部屋の中を探索し始める遥香。真面目というか何というか。まあ、いいやつには変わりないけどな。
っと、遥香にだけさせるのも悪いな。俺も早く探索に取り掛からないと。
というわけで、遥香が調べているところとは別の場所を調べ始める。机においてある本の下とか、机の下とか、そういうところを重点的に。
幸い、この部屋は壁が全て本棚で覆われているから壁に何か隠されていないか調べる必要はない。なので部屋に置いてあるものを調べていく。
「何かないかな～っと――あった」
部屋の隅にあった本をどかすと、そこには小さな赤いボタンのようなものが。おそらく懐中電灯がなければ見落としていただろうものだ。
「ボタン……何かのスイッチでしょうか？」
俺の言葉を聞いてよってきた遥香が意見を言う。
「そうだろうな。押してみるか？」
「ためしに押してみるのはいいかと思います」
「ＯＫ。じゃあ――」
ボタンを押す。耳をすませてみるが、何も音はしない。部屋のものも特に変化は見られない。
「……ダミーか？」
「それとも、別の場所で何かが起きた。ということでしょうか」
「……まあ、考えても仕方ないか。探索を再開するぞ」
「わかりました。では、私は引き続きあちらの方を調べてきます」
そう言ってスタスタとさっき探していた方へ戻っていく遥香。相変わらず、切り替えの速いやつだ。
「って感心してないで、俺もやらないとな」
一度気を引き締めて、俺も探索を再開していった。

第二百四十四話　スイッチの正体（前書き）

第二百四十四話です

第二百四十四話　スイッチの正体

明弘たちがスイッチを押したそのころ、一夏、箒、セシリア、鈴音の四人は三階の探索を終えていた。
「ふぅ。特に何もなかったな」
「そうですわね」
「やはり明弘たちが行った地下の方に何かあるのではないか？」
箒がそんな意見を言う。それは、ここにいる全員だけでなくシャルロットたち――一階を探索しているメンバーも思っていることだ。
全員が思っているからこそ、皆口に出していわなかったが、箒はあえてそれを口にした。どうしても、一度は提案しておかなければいけない。その結果が決まっているとはいえ、全員の共通の認識と改めるためにも、それは必要なことだった。
「でも、もう少し調べようぜ。もし何か見落としてることがあったら明弘たちに悪いし」
「そうね。と言っても、やっぱり何も見つからないし」
「まあ、シャルたちと合流しようぜ。もうすぐ集合時間だから――」
そう言いながらドアを開け、廊下に出る一夏たち。そして、下へと降りるために階段へ向かった一夏たちが目にしたのは――今まで存在していなかった、上へと続く階段だった。
一階から二階、そして三階をつなげる階段とまったく同じそれは、しかし違和感しか感じ取れないものだった。
「こ、これって……階段、だよな？」
「う、うむ。どうやら四階に続いているようだが……」
「でも四回なんて地図にかいてなかったわよね？」
「それを言うのなら隠し通路も地図にはかかれていませんでしたわ。ということは――」
「隠し通路ならぬ、隠しフロアってところか。よくもまあ、あの人もここまでやるな」

いきなり現れた新たな階段に、四人とも少なからず動揺してしまう。

明弘が図書室のような部屋で押したボタン。あれがこの階段を出現させる仕掛けのスイッチだったとは、ここにいる一夏たちはもちろん、当の明弘と遥香も知る由はなかった。

一夏たちからしてみれば、何もしていないのに急に現れた階段。そんなものに目がいかないはずもなく、呆然としながらその階段を眺めていると、階段の上――四階からアレが下りてきた。

短い毛で覆われた体表。たくましい四本の脚。そして、特徴的な三つの頭、六つの目が一夏たちをにらみつける。

すでに何度も遭遇し、襲われ、ここにはいないが仲間の一人がやられた相手――キマイラがゆっくりと階段を下りてきた。

「グルルッ……」

獣そっくりの声をあげながら、キマイラはゆっくりと、一夏たちから視線を外さず階段を下りてくる。

「「「「……」」」」

全員が押し黙る。しかし次の瞬間、四人は、

「「「「うわぁぁぁっ！！！」」」」

絶叫しながら下へと続く階段を駆け下りていった。

第二百四十五話　第二の失格者（前書き）

第二百四十五話です

第二百四十五話　第二の失格者

「ちょっ、ヤバイヤバイ！！」
「アレのことすっかり忘れてたぁ！！」
「って、おい！　セシリアがいないぞ！？」
全速力で逃走していたところで、箒が気づいたように声を上げる。
その言葉に、一夏と鈴音が走りながら周りを見ると、確かにセシリアの姿が見当たらない。
「ホントだ！！」
「やべえ、置いてきちまったか！？」
あわてて立ち止まり、後ろを向く一夏。しかし、その視線の先からキマイラが廊下の角を曲がって追いかけてきた。
そのキマイラの口元には、さっきまではなかった赤い何か。それを見た瞬間、三人は全てを悟り、再び全速力で駆け出す。
セシリアはキマイラにやられてしまったのだと。
「セシリアすまねえ！　でも、無理だぁ！！」
「落ち着きなさいよ！　あの赤いのはケチャップだって明弘が言ってたじゃない！」
「ケチャップだったからといって、安心できるものかぁ！」
一度二階の廊下を一周するように走り、キマイラを撒こうとしたがキマイラはその強靭な四肢で追いかけてくる。しかたなく、三人は一階に駆け下り廊下を爆走する。
「確か、一階に安全なところがあったはずだけど……どこだっけ！？」
「西部屋だ！　そこで明弘はキマイラから逃れたと言っていた！」
「じゃあ、西部屋に急ぐわよ！　って来たぁ！」
キマイラが階段を一気に駆け下りてくる。そのどこまでも獲物を追いかけてくる姿に三人は慄き、西部屋に向かって駆け出す。
そして西部屋に到着すると、そのドアを急いで開け放ち、中へ入

る。すると、その中には見知った顔があった。
「い、一夏っ!?　どうしたの!?」
「シャル！　ラウラに簪、のほほんさんも。急いでそこの通路に入るんだ！　キマイラが追ってきた！」
「え!?　ちょっと……セシリアは!?」
「たぶんキマイラにやられた。それよりも早く通路に！」
「わ、わかった！」
一夏の指示に従い、慌てて通路に飛び込むシャルロットたち。そのあとに一夏たち三人も通路に飛びこむ。
それと同時に、キマイラが部屋へと入ってきた。他の部屋を探してきたのか、来るのが少し遅かったが、一夏たちにはラッキーなことだった。
キマイラが通路の中にいる一夏たちを捉え、ゆっくりと近づいてくる。そしてできる限り通路に体をねじ込むと、一夏たちを捕らえようと片方の前足を伸ばしてきた。
「っ!?」
キマイラの前足、その爪が一番最後に通路に入った箒の数センチ手前まで伸びてくる。ギリギリのところで届かないようだが、何かの拍子に少しでも近づいてしまえば、たちまちあの爪の餌食になることだろう。
キマイラは、数分間何とか届かないか腕を伸ばし続けていたが、諦めたのか悔しそうに一度吼えてから部屋の外へと出て行った。

第二百四十六話　秘密兵器（前書き）

第二百四十六話です

第二百四十六話　秘密兵器

「……はぁぁっ。なんとか助かったな」
キマイラが部屋を出て行くのを見届け、一夏が安心したように言う。
廊下にまだキマイラがいる可能性もあるが、この通路の中にいればキマイラにやられることもないのでほっと一息を入れる。
一夏と同じくキマイラに追い掛け回された箒と鈴音も安堵のため息をついた。
「それで、いったいどうしたと言うのだ。セシリアはやられたと言っていたが、詳しく説明しろ」
ラウラにそう言われ、一夏たちは三階での出来事を説明した。
いつの間にか四階へ続く階段が現れたこと。その上からキマイラが下りてきたので逃げたが、セシリアの姿がなくなっていて、おそらくキマイラにやられてしまっただろうということ。そしてキマイラから逃れるためにこの部屋にやってきたこと。
「……ふむ、なるほど。それではセシリアはやられているかもしれんな」
「すまん。俺がもっとちゃんとしてたら……」
「いや、お前が気にすることはないだろう。あいつも代表候補生だ。自分の危機は自分で何とかしなくてはいけない」
罪悪感を感じて謝る一夏。それをラウラがぶっきらぼうながらも慰める。
「まずはセシリアを探すのが先決だろうな。といっても、廊下にはまだキマイラがいるかもしれん」
「キマイラがいなくなるまでここで待機しているのがいいのかもしれないけど、アレがいつになったらいなくなるのかわからないし……」
「それに、できるだけ早くセシリアを探しに行った方がいいかもし

れないな。時間がたてば、どこに行ったかわからなくなってしまう」
　ラウラ、シャルロット、箒がそれぞれ意見を言う。
　セシリアを早く探しにいきたいが、キマイラに見つかってしまえばそれどころではなくなる。とはいえ、長時間ここにいればセシリアは一人で移動し、行方が掴めなくなってしまうかもしれない。
　キマイラがいなくなり、セシリアが一人で移動してしまわないまでの時間。それを見極めなくてはいけない。
「……今までのチームで同時にセシリアを探しに行くぞ。どちらかがキマイラに見つかったら、ここにきてキマイラの注意を引く。その間にもう一つのチームがセシリアを探し出す。これでどうだ？」
「……それしかないだろうな。じゃあ、セシリアがどっかいかないうちに早く動くか」

「ふっふ～ん♪　ようやく二人目が脱落したね～。そういえば、脱落した二人ってどっちも金髪なんだよね。面白い偶然だ☆」
　セシリア捜索の話し合いをしている一夏たちを、モニター越しに見ている束が面白そうに言う。
「それにしても、あの通路が安全なところだって気づかれちゃったな～。これじゃあ、キマイラを出してもあんまり楽しくないなぁ」
　一夏たちがキマイラに追われ、必死に逃げていく姿を見れなくなったことに、束は残念そうな表情になる。
　しかし、次の瞬間にはいつものニコニコとした笑顔に戻ってこう言った。
「ま、そうなることも予想してたけどね～。こんなこともあろうかと、秘密兵器を用意していました～！　さっすが私♪」
　自分以外誰もいないところでそんなことを言う束。もしこれを明弘が見ていたら、きっと深いため息をついて頭を抑えていただろう。
　だが、そんなことは考えもせず、束は近くに置いておいたリモコ

ンのようなものを手に取った。
「さて、さっそく秘密兵器を使おっか。えいっ☆」
リモコンについていたボタンの一つを、束はためらいもなく――
それどころかこれから起こるであろう事を期待したような表情で、
そのボタンを押した。

第二百四十七話　大群（前書き）

第二百四十七話です

第二百四十七話　大群

「……？」

セシリアを捜索するために通路を出ようとしたところで、ラウラが不意に何かを感じ、振り向いた。

振り向いた先、通路の奥は真っ暗で特に何かあるようには見えない。

「どうしたの、ラウラ？」

「……何かいる」

その言葉を聞き、全員に緊張が走る。キマイラに何度も追い掛け回され、その恐怖を植えつけられた一夏たちにとってラウラのいう『何か』というのにも、警戒をしてしまう。

「……キマイラか？」

「いや、もっと小さい……。しかし、数は多いぞ」

ラウラの言葉の直後、それらはゆっくりと現れた。

通路の外から差し込む光を生々しく反射する黒い鱗に覆われた体表。二メートルはあるだろう長い体。その体でゆっくりと床を這いながらそれらは現れる。

それらが何かわかるにつれ、全員――特に女子――の顔がどんどん青ざめていく。

それら――黒い蛇の大群をしっかりと視認した瞬間、一夏たちは廊下へと続くドアに向かって駆け出した。

「ちょ、蛇！？」

「デカすぎるんじゃないの！？」

「でも、蛇って十メートル近い種類もいるって聞いたけど――」

「それを言うなぁ！！」

そんなことを言いながら、ドアの外へ飛び出す七人。蛇の大群は逃げ出した獲物を追うために、その長い体を這わせて移動する。

少なくとも見る者全員が良い印象を持つはずのない、もしかする

と嫌悪感を抱く人間のほうが多いかもしれない蛇。その蛇が、しかも初めて見るような巨大なものが追いかけてくると言うのは、キマイラのときとは違うが、精神的につらいものがある。
「これはキマイラのときとはまた違う恐怖だなっ！！」
「そんなこと言ってないで早く前行きなさいよ！」
「わー！　もう来たよ～！」
もう半分泣いている本音を含めた七人は、キマイラがまだいる可能性があることなんてすっかり忘れ、廊下を爆走した。

「……ん？」
「どうしました？　明弘様」
「いや、何か一夏たちの叫び声が聞こえたような気がしてな」
「そうですか？　私は何も聞こえませんでしたが」
「そうか？　んー……じゃあ、気のせいだな。あいつらだってキマイラに何度も追いかけまわされてるし、今更キマイラに遭遇しても叫ばないだろう」
「そうですね。キマイラ以外の何かという可能性もありますが」
「もしそうだとしても、キマイラ以上にやばいのなんてそうそうないだろ。そんなことよりも、探索だ探索」
「はい。わかりました」

第二百四十八話　入れ違い（前書き）

第二百四十八話です

第二百四十八話　入れ違い

蛇の大群から逃げるために廊下を爆走する一夏。無我夢中で走り続けた後、蛇が追いかけてこないか確認するために後ろを振り返る。

「……あれ？　皆は？」

振り返った先に蛇の姿はなかったが、同じく箒たちの姿もなかった。

どうやら蛇から逃げるときにはぐれてしまったのだろう。それに思い至った一夏は思わずため息をついた。

「はぁ、これじゃあキマイラのときと同じだな」

一夏の言うとおり、この状況はゲーム開始直後、キマイラに襲われたときと酷似している。違うところといえば、追ってくる相手がキマイラではなく黒蛇の大群だということと、追われているメンバーに明弘と遥香が含まれていないことぐらいだ。

その明弘と遥香は黒蛇が現れたことを知らない。もし何も知らない二人が蛇に襲われたら……。そんな考えが頭をよぎる。

「明弘たちに知らせないと……」

やることを決め、明弘たちがいるであろう地下に向かう一夏。しかし、その一夏の視線の端に床を這う長い影を捉えた。

「……屋敷を徘徊してるのか……？」

蛇に見つからないよう、廊下の影に隠れながら呟く。キマイラのときとは違い、相手が複数である以上、一匹に意識を向けすぎると不意打ちを食らう。

ここには自分以外誰もいないのだ。頼りになる仲間は誰一人としていない。よって、ここは自分一人で切り抜けるしかない。

「……屋敷を回るのにパターンとかがあればいいんだけど、そんなのを見極めてる時間はないし……。やっぱり見つからないように行くしかないか」

ここで時間を浪費してしまえば、その間に明弘たちが危険になる

可能性は高くなる。ゆえに一夏は一気に明弘たちのところへ行くことを選択した。

それが正しいのか間違っているのかは一夏自身にもわからない。ここにはそれが正しいかどうか判断してくれる相手がいないのだから。

いや、例え誰かいたとしても、一夏の選択が絶対正しい、絶対間違っていると判断することはできない。この選択が正しいかどうかは、一夏が無事に明弘たちのところにたどり着けるかどうか、その結果によって変わるのだから。

「……よし」

廊下を這っていた蛇が遠くに言ったことを確認し、一夏はすばやく、それでいて音を立てないように明弘たちがいるであろう地下に向かっていった。

――ちょうどのそのころ。

「結局、めぼしい手がかりは見つからなかったな」

「そうですね。あとは、あのボタンを押したことで何が起きたのか確認することだけです」

「じゃあ、さっそく屋敷を見て回るか。もしかしたら誰かと合流できるかもしれないし」

地下の探索を終えた明弘たちは、図書室のような部屋で押したスイッチで何が起きたのか確認するため、地下を出て屋敷の探索に入っていた。

……ちょうど、地下に向かっている一夏と入れ違うように。

第二百四十九話　張り詰めた空気（前書き）

第二百四十九話です

第二百四十九話　張り詰めた空気

「とりあえず、一階から順番に回っていくか」
「わかりました。……しかし、何か様子がおかしいような気がします。用心しておいた方がよろしいかと」
「わかってる」
物音一つしない廊下。一夏たちが上の階にいるのなら静かなのはおかしいことではないが、それにしても地下に入るときよりも屋敷の雰囲気が硬いような気がする。
……一夏たちに何かあったと考えて間違いないだろうが、屋敷全体の空気が張り詰めているのはなんだ？
「……行くぞ」
「はい」
張り詰めている空気の原因はわからないが、ここで立ち止まっているわけにもいかない。まず動くことからだ。
誰かと上手く合流できれば、事情を聞くことができるかもしれない。そのためにも、動くしかない。
そう思い、廊下を進んでいると、廊下の角の陰に、何かの気配を感じた。遥香も同じく何かの気配を感じて立ち止まる。
一夏たちの誰か――ではないな。気配の大きさが小さすぎる。キマイラのものでもないし……なんだ？
「……どうしますか？」
俺の耳にギリギリ届くくらいの声量で遥香が問いかけてくる。あくまで俺の指示に従うつもりなのだろう。
「……一気に廊下の角を曲がるぞ。その後一気に相手を制圧する」
「わかりました」
遥香から了承の声を聞き、数秒間の沈黙の後一気に駆け出す。後ろは振り返らないが、遥香も俺の後ろについてきているに違いない。
そのまま廊下の角を曲がる。すると、そこには床を這う二匹の黒

い蛇がいた。四つの目が俺のことをしっかりと捉える。
「っ！？」
予想外の相手に思わず怯みそうになる。が、ここで怯んでは後ろの遥香にも迷惑がかかる。ここは一気に制圧してしまわなければ。
「遥香っ」
「はい」
俺に向かって飛び掛ってくる蛇たちをしゃがんで回避。目標を一瞬見失った蛇を遥香がその手に持ったナイフの柄で殴打。壁に叩きつけられたところで、遥香がナイフの刃を突き立てる。
それと同時に、もう一匹がしゃがんだ俺に向かって牙を？く。その開かれた口に俺はナイフを投げ込み、倒す。
「……ふう。まさかこんなやつがいるなんてな。ビックリした」
「そうですね。しかし、これで屋敷の空気がおかしい理由もわかりました」
「ああ。たぶん、こいつらが屋敷中にいるんだろうな。キマイラと同じで、束さんに作られたロボットだ」
ナイフによって切り裂かれた蛇の中に見えるのは小さな機械とケーブル。本物の蛇ではなく、やっぱり束さんの作ったロボットか。
はぁ……まったく、このゲームにどれだけ力を入れいるのだろうか。あの人は。

第二百五十話　あの日（前書き）

第二百五十話です

第二百五十話　あの日

「これで五匹目。何匹いるんだよ、一体」
「わかりませんが、おそらく数十匹はいると思われます」
俺のぼやきに遥香が律儀に返答してくる。やっぱり十匹とかで終わるはずないか。
「ナイフ持っててよかったな。なかったら最初の時点でやられてたかも」
「そのときは私が明弘様をお守りします。何があっても」
「それはありがたいが、自分を犠牲にしようとは思うなよ？　誰も欠けることなく、全員無事に。だからな」
「わかっています。それが明弘様のご意向なのですから」
……はぁ。敵わないな、こいつには。俺が考えていることをいち早く汲み取ってくれるし、それを実行することに戸惑いがない。自分の意思なんて二の次で、俺のことを最優先に考えてくれる。
なんで俺のことをここまで慕ってくれるのかよくわからないが、その原因になったのは、もしかしたら俺と遥香が始めてあったあの日なのかもしれない。

あの日。買い物の帰り、近道である路地裏を歩いていたときに見つけた倒れていた少女。
その姿を見たとき、俺にはかつての自分に見えた。束さんに拾われたときの俺と。
あのときは俺が束さんに命を救われた。だからこそ、今度は俺が。そんな思いもあって、俺がその少女にパンを差し出していた。
それから一緒に住むことになり、名前がないという少女に色々と不便だろうということでつけた名前が――遥香。
束さんが開発していたインフィニット・ストラトス。その名が冠するインフィニット（永遠）から同じような意味の言葉を考えてつけた名前

だ。――その名前を短縮し、束さんがハルちゃんというあだ名をつけた。そのときになって、自分が明弘のアキ、遥香がハルでちょうど季節の秋と冬だな、なんて思ったのは俺だけの秘密だ。

まあ、俺を遥香が慕うようになったのはそれぐらいしか思いつかない。俺としてはただパンを一つあげて、名前をつけたに過ぎないが、遥香にとっては命を救われ、自分の存在を証明する名前をつけてもらったということになるのかもしれない。それでも、ここまで慕ってくれるのはちょっと異常な気もするんだよなぁ。

「？　どうかしましたか？」

そんな考え事をしていると、遥香が怪訝そうに俺を見ていた。どうやら無意識のうちに遥香の方を見ていたらしい。

「気分が優れませんか？　それでしたら、どこかで休憩を――」

「いや、いい。ちょっと思い出に浸っていただけだ」

遥香の言葉を遮って俺は言う。

「そうですか。わかりました。ですが、気分が優れない場合はすぐに仰ってください」

俺の言葉にかすかに安心したような表情になる遥香。

「わかってる。さ、とっとと行くぞ」

「わかりました」

俺が少し補足を速くして歩くと、すぐさま遥香も同じ速度でついてくる。こうしてすぐついてきてくれると、なんだか安心する。自分が一人じゃないことを感じれる。たぶん遥香は無意識にやってるんだろうけど。

やっぱり遥香には敵わないな。そう再認識して、俺は遥香とともにまた廊下を進み始めた。

第二百五十一話　外れている想像（前書き）

第二百五十一話です

第二百五十一話　外れている想像

「ったく、明弘たちはどこ行ったんだよ……」
つい先ほどまで明弘たちがいた地下から出てきた一夏がぼやく。
蛇たちのことを知らせに地価にやってきた一夏だっただが、彼がやってくる数分前に明弘たちは地下を離れており、完全な入れ違いになっていた。
「まさか、もうあの蛇にやられたんじゃ――」
そんな考えが頭をよぎるが、そんなはずないと頭を振ってその考えを否定する。
あの明弘たちがそんな簡単にやられるはずない。きっと地下を調べ終えて、俺たちに報告するためここを離れただけなんだと。
だが、そうなると逆に危険かもしれない。あの二人は蛇の存在を知らず、キマイラのことしか警戒していないはずだ。そんなところに、丸腰の状態で足元からいきなり襲われたら――。
一夏の中で、そんな嫌な想像が展開される。しかし、実際は明弘たちは丸腰ではなくナイフを持っているし、蛇の存在にも気がついている。やられるどころか、すでに五匹も倒しているのだから一夏の想像はことごとく外れている。
だがそれを一夏が知ることはない。ゆえに一夏の中には、明弘たちは一番危険にさらされている仲間という認識が植えつけられている。
「……とりあえず、誰かと合流しないとな。俺だってはっきり言って丸腰だし」
明弘たちのことを言えたものではない。一夏自身も何も武器になりそうなものは所持しておらず、自分も丸腰なのだ。
せめて武器を持っている箒かラウラと合流できれば何とかなるだろうが、その二人がどこにいるかもわからない。そのため、一夏には誰かが来るまでここで待機するか、誰かと合流するために屋敷を

歩き回るかのどちらかの選択肢しかない。
「行くしか、ないよなぁ」
数秒の沈黙の後、一夏は後者を選択した。ここにいても誰かが来る保証はないし、何より自分で何もしないというのが一夏には我慢できなかった。
自分にできることがあるのなら、できる限りそれをする。それが一夏の考えだった。
それに、うまくいけば明弘たちと合流して蛇のことを伝えることができるかもしれない。明弘たちがやられる前に少しでも早く明弘たちにこのことを伝えたい。そういう理由もあった。
「とりあえず、一階を順番に探索していくか……」
さっきここを出発した明弘と同じようなことを言いながら、一夏は部屋のドアを開ける。すると、ちょうど部屋に入ろうとしていた少女と鉢合わせになった。
水色の内側にはねたセミロングの髪。驚いたように見開かれた綺麗な赤の双眸にメガネと酷似した携帯用ディスプレイをかけた少女。
「……簪？」
「……い、一夏……？」
つい数日前のタッグマッチで一夏とタッグを組んだ日本の代表候補生、更識簪がそこに立っていた。

第二百五十二話　忍び寄る影（前書き）

第二百五十二話です

第二百五十二話　忍び寄る影

「簪、なんでここに？」

予想外の再開を果たした一夏と簪。その一夏は簪に気になったことを聞いてみる。

「……明弘に……教えないとって、思ったから……」

「簪もか。でも、残念ながらここに明弘はいないぞ。たぶんどこかにいったんだと思う」

自分と同じことを簪も思っていたことに少し驚きつつ、申し訳ないように簪に明弘がいないことを伝える。

「だから俺たちも屋敷を回ろうぜ。明弘たちだけじゃなくて、他の皆とも合流できるかもしれないし」

「……うん。わかった。……じゃあ急がないと……」

「そうだな。早く皆と合流したいしな」

話がまとまり、二人は早速仲間を探すために部屋を出た。もちろん、蛇やキマイラがいないかどうか確認しながら慎重に。

そのまま足音を立てないように廊下を進んでいくと、廊下の角で二匹の蛇の死体が転がっているのが見えた。

いや、死体というのは語弊があるだろう。蛇たちは本物ではなく、精巧に作られた機械なのだから。

「これって、あの蛇だよな」

「……間違いないと思う。何か鋭いもの――刃物か何かで突き刺されたみたい……」

「刃物っていうと、箒かラウラだな。あいつらのどっちかが、ここでこいつらをやったってことか」

「……たぶん」

「でも、血とかがないのは変だよな？　少なくても蛇からは血が出てるはずなのに……って、もしかして――」

一夏が蛇の切り口をよく見てみる。すると、切り口の奥に小さな

機械とたくさんのコードがあるのが見えた。
　切り口付近の機械は切られ、コードも切断されている。もう動くことはないだろう。
「やっぱり、これ機械だ。大方、束さんが作ったんだな」
「……束さんって……あの篠ノ之束博士？」
「ああ。あの人ならこれくらいのものは簡単に作れるはずだ。何せＩＳを作った人だからな」
　ＩＳに比べれば、この蛇なんてそこまでたいしたものでもない。それが束の視点ならば尚更だ。こんなのを作るのなんて一日もかからないだろう。
　でもキマイラといいこの蛇といい、なんで妙なものばかり作るのだろうか。そんなことを考えている一夏の後ろから――ゆっくりと、そして静かに這いよる蛇の姿があった。
　考え事をしている一夏はもちろん、蛇の中を見ている簪も後ろから迫ってくる蛇には気づかない。
　蛇はゆっくりと二人に近づいていき、飛び掛ればすぐに相手をやれる距離まで接近する。そして、そのままその長い体をばねのようにして二人に襲い掛かり――

――次の瞬間、その後ろから飛んできたナイフに突き刺され床に縫い付けられた。

　ナイフが床に突き刺さる音を聞き、ビックリした一夏と簪が後ろを振り向く。
「どんなときでも油断せず、周りに注意しろ。命が大事ならばな」
　そこには、銀色の長髪をなびかせた眼帯の少女――ラウラ・ボーデヴィッヒが立っていた。

第二百五十三話　噛み合わない（前書き）

第二百五十三話です

第二百五十三話　噛み合わない

「ら、ラウラ……。助かったぜ」
「……ありがとう」
「れっ礼には及ばん。だが、これを機に周りに注意することだな」
二人のお礼に顔を少し背けながら応えるラウラの姿は、さっきまでの凛々しい姿とは打って変わり、少し照れた年相応の少女になっていた。
それに気がついた二人だが、特に何も言わずただそれを微笑みながら眺めていた。
「それにしても、二人が無事で何よりだ。他の皆はわからないが」
「ラウラも無事でよかったぜ」
「あのあと、一階の部屋まで一時退避してな。それから一人で探索していたところで、お前たちを見つけたのだ」
「そっか。ありがとうな。ラウラがいなかったら、今頃俺たちやられてたぜ」
「だから礼には及ばんと言っているっ。まったく……」
そう言って顔を赤くするラウラ。一夏たちとすればいい物を見れたという感じだが、これ以上やっていたらラウラが機嫌を損ねかねない。ということで二人は話を変えることにした。
「それよりも、他の皆は知らないか？　明弘や遥香とか」
「いや、誰も見てはいないぞ。そういえば、明弘と遥香は蛇の存在を知らないのか。早くこのことを伝える必要があるな」
「ああ。そう思って地下に行ってみたんだけど、二人ともどっか行ったみたいでいなかった。簪も俺と同じで明弘たちに伝えようとして再会したんだ」
「そうか。明弘たちのことだから簡単にやられることはないと思うが、それでも不意を突かれれば万が一ということもありえる。急いで二人を探すぞ」

「おう」
「……わかった」
「まずは一階を捜索してそのあとに二階、三階と順番に上がっていくぞ。それでいなかったら少々危険だが四階に行く」
ラウラの言葉に一夏と簪はそれぞれ頷き、三人は揃って明弘たちを探しに歩き出した。

それと同時刻――
「一階には誰もいなかったな。やっぱり上の階か」
「そうかもしれません」
「とっとと誰かと合流したいな。じゃ行くか」
「はい」
明弘と遥香は二階へと続く階段を上っていった。ちょうど一夏たちと入れ違うように。
どこまでも行動が噛み合わない明弘たちと一夏たちだった。

第二百五十四話　状況説明（前書き）

第二百五十四話です

第二百五十四話　状況説明

「ん……？」
「あ、セシリア、気づいた？」
三階の南東部屋。そこに置かれているソファーに寝かされていたセシリアが起きる。そして、その隣に腰を下ろしていた鈴音がセシリアの顔を覗き込んだ。
「……鈴音……さん？」
「そうよ。廊下の真ん中で倒れてたけど大丈夫？」
「……大丈夫ですわ。キマイラには襲われましたけど、特に怪我したところもないようですし」
体を起こし、自分の体が大丈夫か確認しながらセシリアが言う。しかし、それを聞いて鈴音は申し訳なさそうな表情になる。
「ゴメンね。あのときあたしたちがちゃんとしてれば……」
「そんなことはありませんわ。あのとき逃げ遅れたのはわたくし自身の責任ですから。だから気にしないでください」
「……うん。セシリアがそういうならわかったわ」
渋々ながらも鈴音は納得する。セシリア本人がそう言うなら、鈴音も引き下がるしかないのだ。これ以上引き下がってしまえば、セシリアの意思を捻じ曲げることになってしまいかねない。
とりあえず、話が一段落し、セシリアが気になっていたことを鈴音に尋ねる。
「そういえば、他の皆さんはどうしたのですか？」
「あー、あのあといろいろあってね。それは今から説明するけど、シャルロットは今、周りを見てきてるわ。それ以外はわからないけど」
「そうですか。一夏さんたちは心配ですが、まず何があったのか教えてください。状況がわからない以上、何もできませんわ」
「ん、わかったわ。えっとまずは――」

そこまで鈴音が言ったとき、部屋のドアが開く。二人がそちらを向くと、そこには今さっき話に出ていたシャルロットの姿があった。
「あ、セシリア。気がついたんだね。心配したんだよ」
「ええ。ご心配をおかけしてすいませんでした」
「ううん。セシリアが無事ならそれで十分だよ。それより、何か話してたみたいだったけど、お邪魔だったかな？」
「そんなことないわ。セシリアに、何があったのか説明するところだったのよ。ちょうどいいからシャルロットも一緒に説明してくれない？」
「いいよ。でも、最初は鈴からの方がいいかな。鈴たちが来るまでのことは僕は知らないから」
「了解。じゃあ気を取り直して説明売るわね――」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8659r/

IS〈インフィニット・ストラトス〉　Another IS　―もう一つのＩＳ―

2011年11月30日22時47分発行